

---

CROSS WORLD クロスワールド 第二幕

崎浜秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CROSS WORLD      クロスワールド      第二幕

### 【Nコード】

N8799A

### 【作者名】

崎浜秀

### 【あらすじ】

四大陸からなる世界『クロスワールド』の第二幕。獣人のフォンと人間のティルは、時見の姫であるミアファを探し北の大陸グラスターへ仲間と共に。魔獣人達の目的、仲間の過去、獣人の本当の意味。全ての歯車がかみ合い、今運命の歯車が回り始める。

## 第1回 空色の髪と瞳の少女

広く静かな寝室で一人の少女が目を覚ました。大きなベッドから体を起こし、ゆっくり両足を床に着く。朝日が窓から射し込み、明かりの灯っていない寝室を明るく照らす。

ベッドの淵に座り、俯く少女の透き通る様な空色の髪が、窓から射し込む朝日に照らされ、美しく輝きを放つ。何故、ここに居るのかと、考える少女だが、頭が全く働かない。ただ、長い間、夢の中を彷徨っていたと事しか思い出せない。

不意に顔を上げた少女は、部屋の中を見回す。見た事も無い綺麗な壺や、見た事もない美しい絵。部屋中、高価なものが沢山飾つてある。そして、少女の寝ていたベッドも、高価なものだと少女は気付き立ち上がる。

少々小柄な少女が立ち上がると、空色の髪は腰の位置まで届く。全てを見透かす様な澄んだ空色の瞳が、長く伸びた前髪の間隙から窺えた。こじんまりとした胸をホツとなでおろした少女は、ふと視線を感じ部屋を見回す。すると、部屋の隅の方に一人の男が立っていた。まだ、若く二十歳位の男。背丈は少女よりも幾分高く、180いくか、いかないか微妙なところだ。

隅の方は暗くてよく見えないが、そのグリーンに輝く瞳の色だけは分かった。そして、その瞳がジツとコツチを見つめている事も。恐怖に足が震える少女は、恐る恐る声を掛け様としたが声が出ず、逆に声を掛けられた。

「め、めめ目が覚めましたか。ず、ずずずずと、め、めめ目を覚まさなかつたんで、し、ししし心配していたのですが、よ、よよよ、よかつたです」

男の凜々しい声が震え、何を言っているのか理解するのに、少女

は二十秒位掛かった。何で男の方が怯えているのか分からず、少女は微かに首を傾げる。沈黙が続く、男も恐る恐る隅から出てきて少女に近づく。

やはり、男は少女より背丈が高く、男前な顔付きだ。だが、何処か落ち着きが無くグリーンの瞳が微かに泳いでいた。朝日に当てられ輝くオレンジブラウンの髪は窓から入る微量の風にも靡き、男が静かに少女の方に目を落とした。

「あの、ここは一体？」

「えっ！ わっ、えっ！」

少女の突然の声に、驚き後退する男は少女から距離をとる。何だか複雑そうな表情を見せる少女は、長くなつた前髪を右手で掻き揚げ静かにため息を漏らす。半ば呆れた様子の少女だが、こんな人が悪い人な訳無いと少しホッとした。そのお陰で、何と無く心が落ち着く少女は、部屋をもう一度見直し、今度は笑みを浮かべながら問う。

「ここは一体、何処なんですか？ それに、私どうしてここに？」

男を空色の瞳で真っ直ぐに見据える少女に、やはり少し怯えた様にグリーンの瞳を泳がせながら答える。

「こ、ここは、北の大陸グラストーです。あ、ああなたは、この国の南の浜辺で倒れていたの、発見した旅の一座の者達が、ここへ運んでくれたので」

「そ、そうですか……」

未だに怯えている男に、笑みも次第に引き攣つた笑みに変わっていた。一体、自分が何をやったのだらうと、考え込む少女はふと自

己紹介をしていないのに気付く。やっぱり、相手に自己紹介をしないのは、失礼だと思いまた明るく微笑みながら男の方を見る。その瞬間、男の体がビクツとして、男が顔を逸らした。何だか、イラツとしたが少女は怒りを堪えた。

「私、ミーファ＝クロストです。色々とお世話になったみたいで。それで、あなたのお名前は？」

少し丁寧な口調でミーファはそう訊く。空色の髪の間隙から見える透き通る様なミーファの瞳に、真っ直ぐ見つめられ男は混乱し頭が真っ白になる。急にあたふたと始めた男は、耳まで真っ赤にして「あ、ああああっ」と、妙な声を上げその場に倒れてしまった。

倒れて動かない男に歩み寄るミーファは、隣に屈みこみ体を揺すつてみた。だが、反応はない。困った表情を見せるミーファは、次に頬を叩いてみせる。それでも、反応はない。

「一体、私が何したって言うのよ……。それに、ここはグラスタアの何処よ。フォンもテイルも何してるのよ」

そんな不満を漏らしていると、男が目を覚ましミーファと目が合う。ニッコリとミーファが微笑むが、男は表情を引き攣らせ、

「ギャツ！」

と、小さく悲鳴に近い声を上げその場を離れる。人の顔を診て悲鳴を上げるなんて、失礼だとミーファは思い頬を膨らまし男を睨む。壁に背中を合わせながら、息を荒げる男は微かに引き攣った笑みをミーファに向け、掠れた声で言う。

「あ、あ、あの。わ、私は女のひ、人と接するのが、に、にに苦手

でして。し、しっし失礼な態度をとって、申し訳ないです」  
「い、いえ。そうならそれで、先にいってもらえたらよかったですけど」

事情を知り表情を和らげるミーファは男に優しく笑みを向けた。  
ゆっくりと深呼吸を繰り返して心を静める男は、ミーファの方に背を向け振るえた声で言う。

「お、お願いがあるんですが」  
「お願い？ 何ですか？」

何と無く不安が頭を過ぎるミーファは、表情を強張らせながら一歩後退し答える。また、深呼吸を何度かする男は、ようやく落ち着いていたのか口を開く。

「あの……。大変、失礼なお願いなのですが、わ、私にその、あの……あんまり目を向けないで頂きたいのですが」

そんなお願いに、右肩を落すミーファは、苦笑いを浮かべ「ハハハッ」と、微かに笑い声を上げ「わかりました」と小さな声で言い目を逸らした。男は恐る恐るそれを確認するために振り返り、ミーファがコツチを見ていないのに、ホッと胸をなでおろし笑みを浮かべる。

ようやく、落ち着きを取り戻した男は、凜々しい声でミーファに言う。

「私は、フレイスト。フレイストレガイアです。色々、失礼な事ばかりしてしまいました。何せ、幼い頃からずっとお城の道場で、稽古に励んでいたゆえ、この歳まで女の人を見た事が無く、あなた様には無礼の数々を。本当申し訳ない」

先程とは全く違い物凄く強い口調のフレイストは、背を向けるミーファに何度も頭を下げている。もちろん、背を向けるミーファにはそんな事をしているなどと思うわけも無く、明るく笑いながら答える。

「そ、そうなんだ。それで、ここはグラスターのどこら辺なんですか？」

「ここは、グラスターの中心部にある大都市レイストビルです。ここは、そのレイストビルの最深部にあるグラスター城です。だから、安心してください」

「ハア……。グラスターの大都市レイストビル……。エッ！ じゃあ、グラスター城なの！」

急にミーファがフレイストの方を振り返る。それと同時に、フレイストは顔を背けその場を離れ、ミーファと距離をとる。その素早い動きに感心している暇も無く、ミーファは早口で喋る。

「ねえ！ フレイスト。あなた、グラスター城にいるって事は、この城の兵士でしょ？ 私、あなたに頼みたい事があるの！」

「え、ええ。い、いい一応、そうですね。な、なな何ですか？」

先程と打って変わって弱気な口調のフレイスト。だが、そんな事お構いなしにミーファは言葉を続ける。

「会いたいのよ！ この王様に！」

「こ、この王様に？ ま、ままた、どうしてですか？」

少し疑っている様な目を見せるフレイストに、真剣な眼差しを向けるミーファ。空色の澄んだ瞳に、真っ直ぐに目を見つめられるフ

レイストは、すぐさま頭の中が真っ白になり混乱する。大体、こうなるんじゃないかと思っていたミーファは、ため息を漏らし呆れた様に言う。

「あのね。その性格どうにかならないの？ まともに話しも出来ないわ」

「す、すす、すいばぜん！ す、すぐ他の人を！」

「あっ！ ちよ、ちよっと！」

ミーファの言葉など聞かず、レイストは部屋を足早に出て行くとする。扉を開けようとしたその瞬間、扉が開かれ一人の兵士が入ってくる。そして、レイストと目が合い驚きの声を上げた。

「ふ、レイスト様！ ど、どうして王子がこんな所に！」

「エッ！ レイストが王子！」

ミーファは驚きの声を上げると同時に、兵士が叫ぶ。

「娘！ 無礼だぞ！ 王子に向って！」

「よいのじゃ。下がってよいぞ」

兵士の後ろから威厳のある声が響き、兵士は「ですが」と、不満そうに言う。だが、すぐに「わかりました」と答えその場をさる。と、同時に部屋に一人の老人が入ってきた。随分と年老いた老人は、白い髭に白髪の手を掻きながらレイストの頭を撫でた。



## 第1回 空色の髪と瞳の少女（後書き）

『CROSS WORLD クロスワールド 第二幕』連載  
開始です。本当、作者の都合で急にきつちゃったんですが、これで  
よかったんだろうかって、考えちゃいます。

ただ、第二幕としてやるからにやっぱり、今まで登場したキャラ  
クターの事を詳しく知りたいとか思うんじゃないでしょうか？ そ  
れで、勝手な思いつきですが、次回から後書きで登場人物を紹介し  
たいと思います。

読者の皆さん。『CROSS WORLD クロスワールド』  
をこれからも、よろしく願います。

## 第2回 森の中の三つの影

森の中を彷徨う三つの影。

森の中は静かで、鳥の囀りと生い茂る草を踏みつける音だけが響いている。風は時折吹いては、木々の葉を擦り合わせ、ザワザワザワッと囁く様に声を上げる。足元には伸び切った草と、地中から突起した太い木の根が足場を悪くしていた。木々の葉の隙間から微かに射し込む日の光が、薄暗い森の中を照らしている。

茶色のコートに身を包み、額から汗を滲ませる少年。鋭い切れ目で、真つ直ぐ広げた地図を見据え、口からゆっくりと息を吐き汗を拭う。

そんな切れ目の少年の背後には、腰まで伸ばした金髪の髪の少女が居た。黒のワンピースに身を包み、落ち着いた様子の表情を見せている。ふつくらとした胸元に、首筋から汗が流れた。それを、ハンカチで拭い静かに息を吐く。流石に、足場の悪さとこの暑さで少し疲れが見えるが、それでも少女は表情を変えていない。

最後尾にはフードを頭に被り、厚手のコートを着た少年が「ぜえ、ぜえ」と息を荒げながら歩いていた。ただでさえ、暑い中厚手のコートを着るこの少年は、大量の汗を額から流している。背中に背負う自分の背丈程の鞆で、分からないが背中には既に汗でビショビショだった。フードの隙間から覗く茶色の髪の先からも、点々と汗がたれ苦しそうな表情を浮かべている。

「てい、ティル……。本当に、ここであってるのか？」

「ソツ？ 何か言ったかフォン」

苦しそうな表情を浮かべる茶髪の少年フォンの方に、綺麗な黒髪を靡かせながら切れ目の少年ティルが体を向ける。前髪が目隠すほどまで伸びているティルは、それを左手で掻き揚げフォンを真つ

直ぐに見据える。

「ルナ。疲れてないか？」

ふと金髪の少女ルナを気遣うティルは優しく声を掛けたが、ルナは表情を変えず答えた。

「私は平気です」

「そうか。あんまり無理はするな」

「はい」

そんな会話をしてルナとティルは最後尾のフォンの方に顔を向けた。息を荒げながら、ようやく二人に追いついたフォンは、鞆を木の根の上に置き座り込む。ため息を吐くティルは、呆れた口調で言う。

「お前な。暑いならコート脱げばいいだろ？」

「で、でも、虫が頭の上に落ちたら、どうするんだよ」

「何もそこまで警戒すること無いだろ？」

「お、お前、虫の怖さを知らないからそんな事がいえるんだぞ！」

鼻息を荒げながらフォンがそう言う。呆れたような目でフォンを見つめるティルは、首を左右に振りルナの方に目をやる。表情は相変わらずだが、少し顔色が悪い。きつと、疲れが溜っているのだろう。ティルはそう判断し、ここで一時休憩を取る事にした。

足元の草を天翔姫で刈りとり、何とか座れるようにしたティルは、ルナに休むように促した。ルナもその好意に答える様に一度頭を下げ腰を下ろした。

「なあ、ティル」

「何だ？」

「本当にこの道で確かなのか？」

不満そうにフォンがそう言う。少々考え込むティルは、地図を開き現在地を確かめる。

「ああ。一応、あつてると思うが、俺にも詳しく分からん」

「ティルって、意外に無責任だな」

「黙れ。だったら、お前が地図見て先導しろ」

「オイラが、地図見て方角わかってたら、すぐそうしてるさ」

能天気な声でフォンはそう言い笑う。呆れたように右手を額に添えるティルは、ため息を吐き地図をしまった。静かに座り込んでいるルナの方に、視線を向けるティルは、低い声で優しく言う。

「大丈夫か？ 顔色が優れないぞ」

「大丈夫です。少し休めば」

そこまで言っただけで急にルナが倒れた。

「ルナ！」

「オイ！ どうした！」

フォンとティルは驚きの声を上げルナの傍による。やはり顔色は優れず、少々頬が赤い。息遣いも荒く、少し苦しそうだ。ルナの体を抱えるティルは、ルナの額に右手を当て熱がある事に気付く。

「ルナの奴、熱があるぞ！」

「熱！ 大変だ！ す、すぐ病院に！」

「こんな森の中に病院があるわけ無いだろ」

「そ、それじゃあ、町に急ごう！」

「町って、この近くに町なんて」

「あーっ！ そんな事言ってる場合じゃないだろ！ とりあえずこの森を突っ切れればいいんだよ！」

「お前、よく考えろ！ この鬱蒼と生い茂る木々の中をどう突っ切るって言うんだ！」

「こつすりゃいいだろ！」

フォンは立ち上がり一本の木の前に立ちはだかり、勢いよく左足を踏み込む。右拳が大きく振りかぶられ、上半身を限界まで捻る。全身のバネを圧縮したフォンは、それを一気に解き放ち上半身が力強く右拳を押し出す。右拳は木に当たる直前で止められ、突風が森中を駆け巡り、木々が倒れる音が何処からとも無く聞こえる。あまりの風の強さに目を閉じるティルは、目を開いて唾然とした。

フォンの前に聳える木の後ろに生えた木々は、それぞれ左右に大きく倒れ、根っこが地中から顔を出し、真っ直ぐな道が出来ていた。そのお陰で、日の光が森の中を照らし、穏やかな風が吹き抜けて来ている。苦笑するティルは、呆れたように言葉を発した。

「お前、意外と大胆な事するんだな」

「それより、急ぐぞ！ 早く医者に見せるんだ！」

「医者に見せるって、この道であってるかわからんぞ」

「つべこべ言わず、行くぞ！」

全員分の荷物を担ぎフォンはティルを急かす。この道で大丈夫なのかと、心配を過ぎらせながらティルはルナを抱え走った。地面から突き出した根っこの間を走るティルは、フォンの力の恐ろしさを初めて知った。

ようやく、森を抜けた。全力で走り一時間で。流石に、フォンもティルも息が切れ、肩で息をしていた。目の前には、茶色の道が一

本伸び、その周りには草原が広がっていた。

そして、その一本道の先の方に白煙が青い空に向かって伸びているのが見えた。おそらく、そこに町か、村のどちらかがあると二人は確信した。

「白煙が立ち上るって事は村か？」

「多分、そうだと思うが」

「何だよ。何か気になることでもあるのか？」

「別に、また、あそこまで走るのかと思うと、気が遠退きそうだな」

半笑いを浮かべるティルに対し、フォンが怒りの声を上げる。

「お前、ルナがどうなってもいいって言うのか！」

「俺は、そんな事言っていないだろ！ 大体、俺はお前みたいに体力があるわけじゃないんだぞ！」

「あーっ！ もういいだろ！ こんなところでもめてる場合じゃない！」

「俺も、お前の意見に同感だ。無駄な体力使わないで、とっととあの白煙のところに行こう」

「そうだな」

落ち着きを取り戻し、二人は草原を二つに分ける茶色の一本道を駆けた。

## 第2回 森の中の三つの影（後書き）

前回、言った様今回から登場人物の紹介をしていきたいと思っています。その記念すべき第一回は、獣人のフォンです。それでは、行ってみましょう！

名前：フォン

種族：獣人

年齢：16歳（一応）

身長：167cm

体重：55kg

性格：明るく優しいが、計画性が無い

好きなモノ：肉・お風呂・笑う事

嫌いなモノ：寒い場所・長話・争い事・虫

作者コメント：

この物語の主人公です。困った人を見捨てる事が出来ないかなりのお人よしで、争いは好みません。でも、仲間を傷つける奴や人々を苦しめる奴は許せず、止む終えず戦いをする事が続いています。

自分の好きなキャラクターの一人として、多分一番活躍してんじゃないかと思っています。

以上、第一回キャラクター紹介を終わります。

最後の作者コメントは要らない気がしますね。次回は、もう一人の主人公ティルの紹介をしたいと思います。

### 第3回 合流

草原を二つに裂く茶色の一本道の先にある小さな村。

木の柵が村の周りを囲い、綺麗な家が建ち並ぶ。疎らに並ぶ木々は風で揺れ、複数の葉を舞い上がらせた。畑や井戸、花壇などが沢山あり、木の陰に隠れた所に小さな病院も見え隠れしている。

その病院のベッドには、呼吸の荒いルナが寝かされていた。静まり返った廊下は、小ぢんまりとしていて少し薄暗い。その廊下を落ち着かない様子で歩き回るフォンは、ギシギシと床を軋ませながら同じところを行ったり来たりしていた。窓からは子供達が無邪気に遊びまわる声が微かに聞こえる。

落ち着かない様子のフォンに対し、イスに腰を下ろし落ち着いた様子を見せるティルは、腕組みをしたまま目を閉じていた。まるで寝ている様にも見えるティルだが、その右足は苛立っているのか、小刻みに動いていた。やはり、ルナの事が心配なのだ。

「うっつ。大丈夫かな？ 何かあったらどうしよう……」

「落ち着け。俺達が慌ててどうにか成る訳じゃない」

「まあ、そうだけどさ。うっつ。心配だよ……」

フォンはそう言いました廊下を行ったり来たりする。そんなフォンを見て、「全く」と小さく呟いたティルだが、右足は更に大きく動いていた。かなり心配らしい。そんな二人に看護婦が笑顔で優しく声を掛けた。

「あの、心配なさらなくても、彼女はただの疲労から来る発熱ですよ。それに、彼女はこの部屋じゃなくて、隣の部屋ですよ」

「へッ！」



看護婦の言葉に二人は目を丸くする。そんな二人の顔を見て、看護婦は口を押さえてクスクス笑いながら去っていく。恥かしそうに赤面するティルに対し、大笑いするフォンは明るい声で言う。

「何だ。隣の部屋だったのか。ハハハハッ」

「お前な！ 何で部屋間違えてんだ！」

「なぐに、人には間違いはあるものだろ？」

「ふざけるな！」

ティルが大きな声で叫ぶ。その声は廊下中を響き渡り、先ほどの看護婦が廊下の先から大声で怒鳴る。

「静かにしてください！ ここは病院ですよ！」

「君も、静かにね」

怒鳴った看護婦も、病室から出てきた白衣を着た若い医者にそういわれ、「あつ、すいません」と、申し訳なさそうに謝っていた。

その隙にフォンとティルはルナの眠る病室へと進入していた。

「いや〜っ。危うく、怒られる所だったな」

「全くだ。全て、お前の責任だな」

「何で、オイラのせいなんだ！」

「五月蠅いぞ。ルナはゆっくり寝かせてやるっ」

フォンの言葉を完全にシャットアウトし、ティルは病室を後にする。ムスツとした表情のフォンは、ベッドで静かに眠るルナの顔を一度見てから、ティルの後を追う様に病室から出た。と、同時に先ほどの看護婦と鉢合わせになり、こっ酷くお叱りを受けた。もちろん、この時ティルは既に病院の外に出ていた為、フォンはティルの分もきつちり叱られたのだった。

その頃、ティルは村の中を歩き回っていた。こんな小さな村に宿がある訳も無く、ブラブラと歩きほづけるティルは、ふとある事を思い出しガツクリと肩を落とし暗い雰囲気を漂わせる。ゆっくりと、木陰に腰を下ろしたため息を吐きばやく。

「診察料どうしたのか……。今の持ち金だと、絶対に足りないだろうし……」

この先の事を考えると、更に不安になるティルは、複雑そうな表情を浮かべた。やはり、あの大会の賞金がもらえなかったのが原因だと思うが、それ以上にフォンがよく食うため、食費だけでも結構金が掛かる。そう思うと、フォンと旅したのは失敗だと感じるティルだった。

「この先考えると、どっかでお金を稼がないといけないな。それに、フォンの食費を削らないと」

腕組みをし眉間にシワを寄せながら考え込むティルは、ふと何処かで聞き覚えのある声にティルは立ち上がり村の入り口の方に目をやる。だが、入り口の方は家に隠れてよく見えない。その為、ティルは少し丘になっている場所に移動し、入り口の方を窺う。

そこには、少し長めの黒髪の男と小柄で金髪の少年と短髪で金髪の少年よりも更に小柄な幼顔の男の子が居た。何処と無く見た感じのある三人組は、なにやらもめているようで、少し長めの黒髪の男が怒鳴っている様に見えた。

「あれって、もしかすると……」

小さな声でそんな事を呟き、半ば呆れた表情を浮かべながらティルはため息を吐いた。それは、あのもめているのが、多分知り合いであると思っただからだ。『あいつ等、何をやってるんだ』と心の中で呟き、重い足取りで入り口の方に向った。

入り口では、少し長めの黒髪の男が三人の中で一番小柄な妙な民族衣装に身をつつんだ男の子と口論を繰り広げていた。その間に挟まれる金髪の少年は戸惑いを隠せず、両者に「まあまあ」と言い聞かせていた。

少し長めの黒髪の男は、右目に眼帯をしているがその左目はするどく威圧感がある。それに負けじと民族衣装に身を包んだ男の子は、睨み返しているがその瞳は少し怯えていた。金髪の少年はそれに気付き、眼帯をした男に言う。

「ほら、ワノールさん。大人気ないですよ。ウインス君が怯えてるじゃないですか！」

「お、怯えてなんかない！ 誰が、こんなオツサンに！」

「カイン。どいてる。少しばかり、痛い目に遭わんとコイツは分からん様だ！」

「な、何言ってるんですか！ ほら、ウインス君、謝って！」

金髪の少年カインは、すぐさまウインスの方に笑顔を向けそう言うが、民族衣装に身を包んだウインスは、プイツとそっぽを向き訊く耳を持たない。もちろん、そんな態度のウインスに眼帯をした男ワノールは目の色を替え、遂に腰にぶら下げた剣の柄を握った。すると、ウインスも腰の刀の柄を握る。その手は微かに震え、目は泳ぐ。

その時、ドタドタと足音が響きフォンの声が遠くの方から徐々に大きくなってくる。

「かーいーん！ ういーんす！ 久し振り〜！」

明るい声のフォンがカインとウインズに抱きつく。呆気に取られるワノールは、抱きつくフォンを睨みながら剣の柄から手を放す。カインとウインズはそのまま、後ろに倒れフォンの体に押しつぶされた。

「お、重いよ！ フォン！」

「ど、どいてくれ〜」

フォンの体に押しつぶされながら、カインとウインズは叫んだ。笑いながら立ち上がるフォンは、頭を右手でかきながら「ごめんごめん」と、言った。そんなフォンの背後から刺々しい声が聞こえる。

「お前がなぜ、俺達より先にこの村に着いたんだ？」

「なっ！ ワノール！ い、居たのか！」

振り返ったフォンは、鋭い眼光で睨むワノールに、表情を引き攣らせながら一歩後ずさる。カインは苦笑いを浮かべながら、「まあまあ」と言っつてワノールを宥めると、笑顔でフォンに問う。

「テイルとルナはどうしたの？」

「俺なら、ここにいます」

ワノールの背後から低いテイルの声が響いた。落ち着いた様子で半ば呆れている感じの窺えるテイルは、ゆっくりとした足取りで近付いてくると、迷惑そうな表情を見せる。テイルの顔を見るなり、フォンは不満そうな表情を見せ、口を開こうとしたが、その前にワノールが口を開いた。

「どうして、俺達より早い」

「一応、この国の出身だ。近道くらい知ってるさ」

「待て！ 何が近道じゃ！」

「何？ 何かあったの？」

急に叫んだフォンに、カインが驚いた様に訊く。迷惑そうにフォンの方を睨むワノールは、カインの方に軽く耳打ちをする。するとカインは「わかりました」と、笑顔で言いフォンの方に体を向けた。一方、ワノールはテイルと一緒にその場を離れていく。そんな事とは知らず、フォンはカインに向って不満を漏らした。

「テイルの奴、変な森の中で道に迷うし、大変だったんだぞ！」

「へへっ。それで、ルナはどうしたの？」

「それがさ、ルナは疲労から来る発熱で倒れてさ、今病院にいるんだ。その病院でもさ」

そこまで言った時、ウインスが声を掛けた。

「不満を漏らしている所、悪いと思うけど、カイン行っちゃったぞ」

「はうっ！ カインまで、オイラを無視するのかよ！」

「俺でよければ聞くよ。俺も、不満を聞いて欲しいし」

フォンの右肩を軽く叩き、ウインスはそう言った。その後、二人は互いの不満を漏らしながら病院へと向った。

### 第3回 合流（後書き）

やってきました！ 第二回 キャラクター紹介！ 今回はもう一人の主人公 テイルの紹介です！ では、早速行ってみよう！

名前 ; テイルⅡウオース

種族 ; 人間

年齢 ; 17歳

身長 ; 176cm

体重 ; 62kg

性格 ; 冷静で結構人に冷たい

好きなモノ ; 妹・フカフカのベッド・晴れの日

嫌いなモノ ; 雨の日・硬いベッド・獣人・馬鹿・幽霊

作者コメント :

フォンとは正反対の性格の主人公です。冷静でいつも落ち着いている彼ですが、妹が絡むと無茶苦茶キレます。かなりの妹想いなんです。

昔は一匹狼だった彼も、フォンと出会い仲間の大切さを知り、今では結構フォンの事を信頼しています。なぜ、獣人を嫌うのかは後々彼の過去から分かってくると思います。

これからも、フォンと一緒に活躍してくれると思います。

以上、第二回キャラクター紹介を終わります！

今回は、ヒロイン？の『ミーファ』を紹介するぞ！ 最近、全く出番が無いから、皆忘れてないかな？

## 第4回 平和な村

この小さな村を見渡す事の出来る丘の上に立つティルとワノール。穏やかに流れる風に、二人の黒髪が大きく揺れる。木々も揺れ擦れ合い、ザワメキあう。曾音に混ざり、時折村の子供達の声も聞こえ、本当にこの村が豊なのだと感じられる。

少し大きな岩に腰を下ろすティルは、笑みを浮かべ静かに目を閉じる。すると、蘇ってくる。昔、住んでいた村の美しい光景が。エリスと一緒に色々な所を探検した。こんな風に高い丘に登って村を見下ろした事も、草笛を吹いたり村に向かって叫んだり、いろんな事を思い出す。

「何をしてるんだ」

目を閉じているティルの横に立つ、ワノールが不思議そうに問う。結構、刺々しい口調のワノールに、静かに息を吐きティルが目を開く。腕を組んだままティルの事を左目でしっかりと見据えるワノールは、鼻から静かに息を吐いた。まるで、ティルを馬鹿にする様に落ち着き払うティルは、微かに笑う。訝しげにティルの事を見るワノールは、眉間にシワを寄せた。そんなワノールの顔をチラッと見たティルは、また微かに笑い答えた。

「そんな複雑そうな表情するなよ」

「別に。お前がそんな風に笑うとはあんまり思っても無かったからな」

「俺だつて人だ。面白かったら笑うし、嬉しい時は喜ぶし、悲しい時は泣くさ」

「まあ、普通はそうだな。それで、何か話があるんじゃないのか？」

ワノールのその言葉に、俯くティル。表情はいつに無く真剣で、その目は少し深刻そうだった。そんなティルを、ワノールは鼻で笑い馬鹿にする様に訊く。

「お前が何を考えているか、俺には分からんが、どうせ下らん事だろっ？」

「確かに、くだらない事かもな」

いつもと、反応が違う。いつもなら、もっと噛み付いてくるのに。やはり、何か迷いがあるのか、それとも。何と無く嫌な予感のするワノールは、静かに腰を下ろしティルの話しを聞く事にした。

一方、村の小さな病院の前にあるベンチに座り話をするフォンとウインスの姿があった。肩を落とし落ち込んだ様子の二人は、目の前の広場で遊ぶ子供達を真っ直ぐに見据えている。無邪気に笑う子供達を見ていると、この村がどれだけ平和なのかって言うのがよく分かる。この村と言うより、この国がどれだけ平和なのかと、よく分かる。

ポーツと空を見上げたフォンは、オレンジ色に染まりつつある空に心奪われ、急に小さな声で、「空が綺麗だ」と、呟いた。何だか、自分の暮らしていた村で見た空と違い、優しく包み込んでくれるような空に、フォンは笑みを浮かべた。

ウインスも、感じた事のない穏やかな風を体を感じる。ソワソワっと生い茂る草の間を抜ける風は、静かにフォンとウインスの間も抜けてゆく。短髪のウインスの髪が微かに靡き、結構伸びたフォンの髪は、大きく風になびかされる。

「この風はとっても優しい。アルバー大陸にはない風だ」



そう呟いたウインスの方に、フォンが顔を向け笑いながら言う。

「そうだな。オイラ、この風好きだ」

「俺もだ。何だかさ、優しく包み込まれるって感じがするんだ」

「そうなんだよ。何か、心が休まるんだよな」

「全ての町がこんな感じだと良いのにな」

さっきまでの怒りが何処かへ行ってしまい、二人は穏やかな気持ちで笑い合った。

ルナの病室では一人深刻そうな表情のカインがいた。ベッドでも心地よさそうに眠るルナは、普段の表情とは違い、何だか楽しそうに笑みを浮かべているように見える。本当はこんな風に楽しく旅がしたいのだろう。皆と笑いあいながら楽しく。それでも、表情を表に出さないというのは、それだけの理由があると言う事なのだ。

暗い病室のドアが開かれ、廊下の光が部屋の中に射し込む。金髪のカインの髪がその光に照らされ軽く輝く。部屋に入った看護婦は、そんなカインの姿に少し驚いた。

「な、何してるんですか！ 電気も点けないで」

「あつ、看護婦さん。すいません。寝てるの起こしちゃ悪いと思っただんで」

「どちらかと言えば、コッチの方が怖いですよ」

看護婦は半笑いしながら電気をつける。綺麗な黒髪の看護婦は、その髪を風に靡かせながら窓際に向って足を進める。そして、開かれた窓を静かに閉め、カーテンを閉じた。心配そうなカインの表情が窓ガラスに映り、看護婦が含み笑いをする。

「何が可笑しいんですか？」

「フフフツ……。あなたも、この娘の事が心配なのね。でも、そんなに深刻な表情しなくても、彼女はただの発熱よ。ゆっくり休めば明日にはよくなるわ」

「そ、そうですか……」

「あなたも、あの茶色の髪の子も、少し心配しすぎよ」

看護婦にそう言われ、カインは少し恥かしそうに顔を俯けた。そんなカインに、看護婦は優しく言葉をかける。

「フフツ。あなた、この娘の事が好きなんですよ？」

「そ、そそそそんなことは！」

看護婦の不意の言葉に、カインは慌てる。その慌てぶりを見るなり、看護婦は悪戯っぽく笑う。慌てて何を言っていたのか分からなくなったカインは、遂に頭の中がショートした。頭の中は真っ白になり、思考回路が完全に停止状態になり、顔が真っ赤に染まった。口を押さえ「フフフツ……」と笑う看護婦は、「正直ね」と小さな声で言った。その瞬間、カインの思考回路が復活した。

「ち、ちちち違いますよ！　じよ、冗談はよ、よしてください！」

隠し切れない動揺。本人は隠しているつもりだが、誰が見ても動揺しているのは一目瞭然だ。あまりにも、カインが自信満々と言った感じだったため、看護婦はクスクスと静かに笑って、「それじゃあ、後はお願いね」とカインにつげ病室を出て行った。

看護婦が病室から出るとすぐ、フォンとウインスと鉢合わせた。看護婦と目が合ったフォンは、すぐさまウインスの後ろに隠れ身を縮こませる。ムスツとした表情を見せる看護婦に、ウインスは軽く引き彎った笑みを見せ、後ろに隠れるフォンに小さな声で訊く。

「な、何隠れてんだ」

「オイラ、この看護婦苦手なんだよ」

「何でだよ」

「凄く怖いんだよ」

確かに小さな声でそう言ったフォンだったが、その声が聞こえていたのか看護婦が、怒りの籠った笑顔をこちらに向けながら、声を震わせながら言う。

「あら？ 何か言ったかしら？」

「い、いえ……。何も……」

ウインスは激しく首を左右に振りながらそう答えると、看護婦が穏やかな表情を見せながら言う。

「そう。それじゃあ、大人しくするのよ」

「は、はい……」

ウインスは小さく首を縦に振りそう答えた。一見穏やかな表情に見えるが、その笑顔の奥から漂うその力強い威圧感に、流星のウインスも少しビビった。遠ざかる看護婦の背中を見据えるフォンとウインスは、ホッと胸を撫で下ろし病室へと入っていった。

「あの看護婦。すげえ〜な。あの威圧感は俺もマジでビビった」

「オイラの時はあんなもんじゃなかったぞ」

「本当に看護婦か？」

「さあ？ オイラに聞かれても」

二人がそんな話を話しながら部屋に入ってくると、カインは慌た

だしく声をあげる。

「あ、えっ、な、ぼ」

「ンツ？ カインどうしたんだ？」

声に気付き、フォンがカインに話しかけるが、カインは上手く口が回らず「あわ、あわ！」と言っただけだった。軽く首を傾げるフォンは、すぐ隣のウインスと顔を見合わせた。もちろん、ウインスも不思議そうな表情で首をかしげ、二人はまたカインの方に目をやった。

それから暫くして、カインも落ち着きを取り戻し、三人は病室で話をする。フォンが窓際の壁にもたれ、カインがルナの傍のイスに座り、ウインスが入り口横の壁にもたれて。

「そう言えば、フォン達はどうやってここに着いたんだ？ しかも、俺等より早く」

「まあ、色々あってね。テイルが近道だって森の中を突っ切ってたから、道に迷い、そこでルナが倒れて、必死で森の中を走り回ってここに着いたみたいだね」

「ん〜っ。あんまり想像したくない状態だな。でも、この村に着いてよかったな」

「そうだな。オイラもビックリだ。アハハハッ！」

小さな声で笑うフォンだが、その声は部屋中に響いた。カインとウインスはほぼ同時に「シート」と、言いフォンは自分の口を両手で塞いだ。幸い、ルナは全く起きる気配もなく、フォンはゆっくり口から手を放した。少し怒ったような表情を見せるカインとウインスに、フォンは笑顔で頭を下げ両手を合わせ「ごめん」と、小さな声で言った。

## 第4回 平和な村（後書き）

第三回キャラクター紹介！ と、言うか随分と更新が遅れてすいませんでした。

それでは、今回はミーファの紹介をしたいと思います！

名前：ミーファ・クロスト

種族：時見族

年齢：17歳

身長：157cm

体重：45kg

性格：明るくて慌て者、結構お金に厳しい所あり

好きなモノ：トマト・シヨッピング・旅行

嫌いなモノ：イカ・荷物持ち・ウジウジといじける奴

作者コメント：

フォンとテイルを結び合わせた張本人。既に途絶えたと伝えられた時見族の姫との事。なぜ、途絶えたと伝えられたのかは、物語内で明らかにしたいと。

未来が見えるという事で、彼女も彼女なりに苦しんでいるんです。

以上！ 第三回キャラクター紹介でした！ 次はミーファの親友『ルナ』の紹介でも。実はヒロインの座を狙っていたりするんです。

## 第5回 霧の中の旅立ち

朝日が昇る頃、村は薄い霧で覆われていた。

まだ皆が寝静まっているため、静かな村だが霧の奥から足音が二つ聞こえる。一つは少し重々しい感じの足音で、もう一つはゆつたりとした感じの足音。二つの足音が混ざり合い入り口付近で消えた。消えたのではない。止まったのだ。

風が吹き木々の葉が擦れ合う。ソワソワソワと、木々の葉の擦れる音が村中に微かに響き、それがピタリと止む。霧が微かに薄れていき、村の入り口付近に立つ二つの影を映し出す。まだ、はつきりとはしない。だが、その内の一人は背中に荷物を背負っていた。まるで、今からこの村を出る様なそんな感じだ。

そして、もう一人の影も薄らと浮んできた。軽い身なりに、腰に剣をぶら下げている。こちらはどちらかと言えば見送りに来たと言った感じだろう。

「フォンに言わなくて良かったのか？ 俺よりも奴の方がお前より長い付き合いだろ？」

軽い身なりをした男がそう言うと、荷物を背負った少年は微かに笑みを見せ首を左右に振る。綺麗な漆黒の髪がその度に滑らかに揺れ、幾度と無く空を切る。真っ直ぐ目の前にいる男を見据え、穏やかに落ち着いた口調で言う。

「付き合いが長いとか、短いとか、関係ないさ。あの中で一番頼れるのはお前しかいないと俺は思ってる。だからこそ、お前に話したんだ」

「少し買被りすぎじゃないのか？ 俺は自分の為に剣を振るうだけだ」

軽い身なりをした男がそう言い、薄ら笑みを浮かべる。すると、少年はゆっくり男に背を向ける。そろそろ誰かが起きて来る頃だと踏んだのだ。落ち着いた様子で腕組みをする軽い身なりの男は、そんな少年の背中を見据えながらゆっくり俯く。

暫し沈黙が辺りを包み、穏やかな風が流れた。男に背を向けた少年は微かに口元に笑みを浮かべると、ゆっくりと言葉を並べる。

「じゃあ。俺はそろそろ行く。フォンには『ミーファの事は任せる』と伝えておいてくれ。任せるぞ」

「ああ。伝えておこう」

男の言葉と同時に少年は歩き出した。足音が徐々に遠ざかり、少年の姿は霧の中へと消えてゆく。男は完全に少年の姿が見えなくなると、ゆっくりと村の中へと歩いていった。霧の中へと二つの足音は消え、混ざり合う事は無い。

まだ静かな病室でルナが一人目を覚ます。ひんやりと部屋は少し冷え、その原因が何なのか探るため、ルナは部屋を見回す。イスに座りベッドに倒れこむ様にして寝るカイン。入り口付近で壁にもたれたまま座り込んで寝ているウインス。そして、窓際で窓を開けっ放しで器用に淵に座り寝ているフォン。多分、いや。確実に原因は窓を開けっぱなしのフォンだ。

そう思い、ルナはベッドからスツと足を下ろす。冷たい床に静かに足を着くと、細い足に床の冷たさがヒシヒシと伝わり、一瞬ルナが「キャッ」と小さな悲鳴を上げた。だが、その悲鳴で起きる者はいない。きつと、遅くまで起きていたのだろう。そう思うと、何だか嬉しかった。今までこんな風に心配してくれた人が何人いただろうか。

ルナはもう一度床に足を着けると、ゆっくりとベッドから腰を上げた。だが、その瞬間、急に体にガクンと衝撃が走り、全身の力が抜け床に向って崩れ落ちてゆく。ドサツと、静かな病室にルナの倒れた音が響くと同時に、カイン・ウインス・フォンの順に目を覚ました。

「ンツ？ 何、今の音」

まだ少し眠いのか、目を細めたまま顔を上げるカインが声を出す。まだ意識がはつきりしていないため、ルナが居ない事に全く気付いては居ないが、何と無く寝る前とベッドの様子が違う事にカインは気付いていた。

「あれ？ 何だか違和感があるんだけど……」

「ンツ。今、何時だよ」

眠そうな声を上げるウインスは大きな口を開け欠伸をすると、首の骨を二度ばかり鳴らす。変な体勢で寝たため少し首を痛めたのだろう。

一方、窓の淵に腰を下ろして寝ていたフォンは、目を覚ますと同時にバランスを崩し、窓の外に落ちていた。頭から地面に落ち、はつきりと目が冴えたフォンは、頭を擦りながら立ち上がる。

「うっつ。いつてっつ。朝からびっくりだぞ。それに、ちょっと寒いぞ」

少し身を震わせるフォンは目を細め、辺りを見回す。そこで初めて、自分が外にいる事に気付く。なぜ、外にいるのかは全く分からず、軽く首を傾げるフォンは「うっん」と、唸り声を上げていた。

その時、窓からカインとウインスの驚いた声が響いた。



「ルナ！」

その声に病室の方に顔を向けるフォンは、ルナが床に倒れているのに気付く。ベッドを飛び越えてルナの元に駆けつけるカインは、倒れるルナの体を抱き抱える。すぐにウインスも駆けつけルナをベツドへと戻す。

その光景を見てフォンはニコニコと笑みを浮かべながら窓を越え病室内へと戻ってきた。そして、ルナの顔を見て言う。

「ルナって、意外と寝相が悪いんだな」

「違います！ 私は」

「誤魔化さなくて良いつて。別に寝相が悪い事は恥かしい事じゃないんだから」

「なっ！ 何言ってるんですか！ 私は、寒かったので窓を閉め様と思っただけで……」

赤面しながら少しムキになるルナ。そんなルナを見ながら悪戯っぽく笑みを浮かべるフォンは、全くルナの言葉を訊いていない様だ。何でムキになっっているんだろうと、思いながらルナは少し恥かしそうに顔を俯けた。

その時、急に病室の扉が開かれる。一瞬、フォンの脳裏にあの看護婦の顔を過ぎり、フォンは素早く窓を飛び越え身を隠した。その行動に首を傾げるカイン・ウインス・ルナの三人は扉の方に顔を向けた。

「ンツ？ お前達、起きてたのか」

落ち着いた声でそう言うワノールは、左目で睨みを聞かせながら部屋にいる者を見回す。カイン、ウインス、ルナの順で顔を見てい

き、ふとフォンの姿が無いのに気付く。暫しキョロキョロとするワノールに、カインが怪訝そうに問う。

「どうかしたんですか？ ワノールさん」

「いや。フォンはどうした？」

厳しい目付きで病室を見回すワノールに、カインが何やら不思議そうな表情を浮かべる。ワノールがフォンの事を気にするなんて今までに無かった事だ。その為、少しだけ嬉しかった。そんなカインに対し、少し呆れた表情のウィンスが半笑いを浮かべながら答える。

「フォンなら外に逃げた」

「逃げた？ なぜ？」

「さあ？」

両肩を軽く上げ首を傾げるウィンスに、ワノールは更に厳しい目付きになる。

壁に凭れていたフォンは、何と無く聞き覚えのある声に恐る恐る室内を覗く。その視界に、長めの黒髪に右目に眼帯をした男の姿を目撃する。すぐにワノールと気付き、少しホッとしたフォンだったが、窓を越え様としたその瞬間、背後で声が響く。

「こら！ 窓を越えて病室に入るうだなんて！ あなた何を考えてるんですか！」

その声に戻り返ったフォンの視界にあの看護婦の姿が映った。コメカミをピクつかせる看護婦は、かなりお怒りの様でフォンは何とかその場を逃げ出そうと考えたが、もう逃げる事は不可能だった。看護婦は大きな声でガミガミとフォンに向かって怒りをぶつけていたのだ。

看護婦に叱られるフォンを、病室から見据えるワノールは、額を右手で押さえながら大きなため息を吐いた。

## 第5回 霧の中の旅立ち（後書き）

第四回 キャラクター紹介！ いつまでやんねん！ とか、思っ  
ちやったりして。

それでは、今回は『ルナ』の紹介を！

名前：ルナクライアン

種族：癒天族

年齢：16歳

身長：156cm

体重：43kg

性格：落ち着きがあり、とても大人しい。表情を表には出  
さない

好きなモノ：静かにしてる事・読書・珍しいモノの観察  
嫌いなモノ：自分の事を聞かれる事・読書の邪魔をされる事

作者コメント：

ミーファとは対象的で、表情を表に出さない。その理由は、自  
分の背負う使命を果たすため。その為、表情は殺している。

そうまでして、果たさなければならぬ使命って？ 時見族と同  
じく、すでに途絶えたと思えられてきた種族。

色々と彼女にも謎が多いです。

うーん。第四回か……。あと、どれ位あるかな？ とりあえず、  
次回は『カイン』の紹介をしたいと思います。それでは、また今度  
。

## 第6回 フォンと看護婦

「何だつてええええつ！」

病院内にフォンの声が響き渡った。すぐにカインとウインスがフォンの口を遮ったが、その声はすでに廊下を通りあの看護婦の耳に届いている。廊下の奥の方からパタパタと、スリッパが床を叩く音が響きフォンの表情が引き攣る。呆れた様子のワノールは、目を閉じ眉間にシワをよせ、怒りのオーラが体から滲み出ていた。

病室のドアが勢いよく開かれる。仁王立ちする看護婦は、鬼の様な形相で病室を見回す。ベッドには無表情のルナが座っていて、そのすぐ脇にカインがイスに座っている。入り口横の壁にもたれていくウインスは看護婦と目が合い一歩後退り「アハハハハッ」と小さく笑い声を上げる。カインのすぐ後ろでは眉間にシワを寄せ、怒りを滲ませているワノールの姿。何度も病室を見回すが、一人だけ見当たらない。

「先程の声の主が見当たりませんが、何処に言っただんですか？」

「フォンなら逃げた。その窓を越えてな」

「ま、また、窓を越えたんですか！ もう、許しません！」

そう言うと、看護婦は窓の淵に右足をかけ、そのまま窓を越えて走って行ってしまった。さっきの言葉はなんだったんだと思う四人だった。

ともあれ、ようやく静かになり、ワノールは話の続きを話そうとした。ドドドドツと、足音が窓の向うから聞こえ、茶色の髪を揺らしながらフォンが窓を越え進入してきた。息を切らしながら壁に隠れるフォンは、四人の方を見て小さな声で言う。

「今すぐ、ここを出るぞ！ このままだと、オイラの命に関る！」

「ですが、私の医療費が……」

「まさか、踏み倒す気か？」

「ワノールさん！ なんて事言うんですか！ 踏み倒すだなんて、ちゃんと後でお金は払いますって書置きして出てくだけじゃないですか！」

「そう言うのを踏み倒すって言うんじゃないのかな？ 世間じゃ」

軽いツツコミを入れるウインスだが、カイン本人は物凄く本気だったらしく、何だかツツコミを入れられ落ち込んでいた。話をしようとしていたワノールも、この状況では話も進まんと、病室を抜け出す準備をする。警戒するように窓の外を仕切りに気にするフォンは、荷物を背負い息を呑む。

「皆、準備良いか？ オイラの合図で飛び出すぞ」

壁に背を合わせ窓から外を窺うフォン。まだ、微かに足音が聞こえる。きつと、あの看護婦が探し回っているのだ。薄らと額から汗を流すフォンは、ふと視線を病室内に戻す。その時、フォンの目に映ったのは、病室を当然の様に正面から出て行くワノール達の姿だった。少し残念そうな表情のカインは、名残惜しそうにベッドに座るルナを見据えていた。

正面から出て行くワノール達三人に、驚きを隠せない様子のフォンは当然、大声で叫ぶ。

「ちょ、ちょっと待て！ ど、何処に行くつもりだ！」

「何処つて、決まってるだろ？ 病院を出て村を出て行く」

「病院出るつて、正面から出て行ったら捕まるに決まってるだろ！」

「いや。ルナはお前が連れて出てくんだ。何の問題も無いだろ？」

当然の様に言い放つワノールは、「後は頼んだぞ」と、告げて病室を出て行った。急に静まり返る病室内。残されたフォンとルナはただ沈黙を守っている。表情の引き攣るフォンは、暫し動く事が出来なかった。

落ち着いた様子のルナは固まったまんまのフォンを見据え、小さくため息を吐く。もちろん、フォンに聞えないほど小さなため息を。そんな事も知らず、我に返ったフォンは頭を抱えて蹲る。

「うっっ！ どうすりゃいいんだ……。ここから、どうやってルナを……」

ブツブツとそんな事を何度も言うフォンは、頭の中で何度も何度もシユミレーションするが、全て上手く行く気がしなかった。と、言うかそれよりもあの看護婦が何者なのか気になる。

色々悩んだ。その末、フォンが考え出した策は。

「行くぞオオオオッ！」

「ちょ、ちよつと！ フォンさん！」

フォンに抱き抱えられ、ルナは恥かしそうにそう叫ぶ。そんな言葉など聞いていないフォンは、窓枠に右足を掛けると外をキョロキョロと見回す。あの看護婦の姿は見当たらない。これは好機と言わんばかりに、フォンは窓枠を蹴り外へ飛び出す。二・三歩足を進めた所で、フォンは背後に殺気を感じ取った。

「……この殺気は……」

ぎこちない動きで、恐る恐るフォンは体を捻り、後ろを振り返る。丁度、病室の扉を開けたばかりのあの看護婦が、夥しい程の殺気を漂わせながら立ち尽くしている。表情は俯いているため、分からない

いがこの殺気でおおよそ予測はつく。ゆっくりと鬼の様な形相の顔を上げた看護婦は、怒りで震えた声で言い放つ。

「大声出したと思ったら、今度は患者さんを何処へ連れてくつもりですか？」

「い、いや。ちょっと、散歩させようかと……」

「散歩ですか？ それじゃあ、その背中に背負った荷物は何ですか？」

背中に背負った荷物を指差し、鬼の様な形相が少し笑顔に変わる。だが、その目は笑っていない。引き攣った笑顔を看護婦に向けるフオンは、看護婦に聞えない程度の小さな声でボソツと呟く。

「グウツ……。やっぱり、散歩は無理があつたか……」

「まあ、この荷物で散歩と言うのは流石に……」

「だよね」

呆れた様なルナの言葉にフオンも苦笑いを浮かべそう答えた。流石に無理だと思っていたが、一応何か言っておかなければならないと思ったのだ。そんなフオンに笑みを見せる看護婦は、額に青筋を立てて今にも血管が切れそうだ。

「まさか、医療費を踏み倒そうとか考えてませんか？」

「そ、そそんなわけあるはず無いでしょ。ただ、お金が無いんで少しの間待ってもらえたらなあ……」。無理ですよね」

「そうですね。無理ですね。お金を払いに来ると言う保証もありませんから」

「ですよね。それじゃあ、この辺で！」

身を翻しすぐさまフオンは走り出す。と、同時に背後から足音が



聞えてくる。看護婦が追ってきているのだ。重たい荷物を背負い、ルナを抱えるフォンは上手く走る事が出来ない。その為、看護婦に少しずつ差を詰められていた。

「フォンさん。もう追い付かれますよ」

「んな事言われても、コツチは色々とハンデを背負ってるんだぞ」

「事情話せば分かってくれるんじゃないですか？」

「そう思う？ あの顔見て」

フォンに言われルナは後ろから追いかけて来る看護婦の顔をみる。目はつり上がり、怒りが体中から滲み出していた。そんな看護婦の姿を見たルナは、フォンの言った事を理解した。

ひたすら逃げ続けたフォンは、ようやく看護婦を撒いた。撒いたと言つより走りながら交渉したと言つ方が正しいのかも知れない。逃げながらもルナに言われた通りフォンは事情を看護婦に説明した。初めは疑っている様だったが、何故かルナが詳しく説明すると納得し、そのまま逃がしてくれた。

村を出たフォンは、少し真つ直ぐ伸びた道を歩み木陰にへたり込んだ。疲労から膝がガクガクになっていて、息も大分荒かった。フォンのすぐ横に座るルナは、そんなフォンを心配そうに見つめていた。その時、村の方からワノール・カイン・ウインスの三人が歩いてきた。

「あつ！ フォン！ 逃げ切ったみたいだね！」

嬉しそうに駆け寄るカインだが、フォンが鋭い目付きで睨み付けた。一瞬怯むカインは足を止めフォンの方を見て苦笑いを浮かべる。そんな事とは知らず、笑いながらカインの方にやってきたウインスは、フォンの目を見て表情を引き攣らせた。落ち着いた様子のワノールは固まる二人に声を掛ける。

「どうした？ ぼんやりしている暇は無いぞ」

「それよりさ、あいつ相当怒ってるぞ」

ウインスのその言葉にフォンが一気に怒りを爆発させる。

「当たり前だ！ オイラとルナを置き去りにして、危うく」

「その元気があれば十分だな。さあ、行くぞ」

「オイ！ オイラの話しを無視するな！」

ワノールはフォンの声など聞かず歩き続けた。カインもウインスもそんなワノールの後続き、まるでフォンを避ける様にしてその場を立ち去った。そんな三人にフォンは「薄情者め！」と、叫んだがその声が響くだけで三人は全く反応を示さなかった。

## 第6回 フォンと看護婦（後書き）

第五回キャラクター紹介！ キャラクター紹介も本日で五回目！  
これって、やってて意味あるかな？ って不安です。それでは、  
今日は『カイン』の紹介を！

名前： カイン「シユライフ

種族： 炎血族

年齢： 16歳

身長： 160cm

体重： 43kg

性格： 優しくて喜怒哀楽がはっきりしてる。戦いは好まない。

好きなモノ： 蒼く澄んだ空・青空天（カイン愛用の剣）・トマト  
サラダ

嫌いなモノ： 戦い・魚料理・人を傷つける者

作者コメント：

体内を流れる血が灼熱の炎の様に熱く、その血を自由に燃やす事が出来る炎血族の少年。とても滑らかな金髪の髪をしているが、本気になるとその髪は真っ赤に変色。炎血族特有のものだ。

元・黒き十字架の副隊長を勤め、剣術の方はワノールに劣らないが、小柄な体格なため力で劣っている。

以上、第五回キャラクター紹介でした。次は『ワノール』の紹介をしたいと思います。何か感想などあれば聞かせてください。

## 第7回 亀裂！ フォン対ワノール

鬱蒼と生い茂った木々の間に一本の長い山道が続く。道は悪路で凹凸が激しく少しぬかるんでいる。日の光は何とか入ってくるものの、それも太陽が真上に向いている時だけの話で、夕暮れ時になれば、もう暗くて足場など見えないほどだ。

そんな閑寂な森に、複数の足音が響く。カサカサと微かに草を揺らしながら歩み進む。

木々がそんな足音に気付いたのか、微かに葉を揺らしザワメキ立つ。森の中に暮す動物達もカサカサと茂みを駆け、山道を歩く者達の監視をする様だ。そして、それらの動物に紛れ、複数の魔獣達が息を潜めていた。

「ぐうっ……。何で、こんなに歩き難いんだよ……」

幼いフォンの声が、不満そうにそう言う。相変わらず、最後尾を歩くフォンは、この悪路が気に食わず、先程からずっと文句ばかりをぼやいている。そんなフォンの文句を聞くのが、フォンの前を歩くルナだった。長く伸びた金髪の髪は腰まで届き、それを靡かせながらルナは落ち着いた様な声で答える。

「フォンさん。先程から、文句ばかり言ってますね」  
「だってさ〜」

「ルナ。奴に付き合おうと疲れるだけだ」

「何だと！ ワノール！ もっかい言ってみる！」

「五月蠅い！ 黙れ！ 暑苦しい！」

フォンに力強く克素早くそう言い放った。流石のフォンもこの言

葉に足を止め、俯いたまま拳を震わせた。それに気付いたルナは足を止め振り返り、フォンの事を見つめる。俯いているため表情が見えないが、あの拳の震え方はきつと怒っているに違いないと、思うルナが優しく声を掛け様としたその時、フォンが顔をあげた。そして、大きな声で笑い出した。

「アハハハハッ！」

「どうかしましたか？」

「これが、笑わずに居られるか！ このまま怒れば、奴の思う壺だ！」

「はあ？」

少し疑問に思いつつも微かに頷くルナは、軽く首を傾げた。「いくぞ！」と、フォンに言われルナは前に向き直りまた歩き出す。その時、近くの茂みがざわつく。皆足を止め、いつでも戦闘態勢に入る様にする。茂みの一番近くに居るカインは、緊張からか口の中が乾く。そして、ゴクリと唾を呑み込んだその刹那、茂みから大きな角を二本額から生やした大型の魔獣が飛び出してくる。素早く腰の青空天を抜こうとしたカインだが、それより早く魔獣の角がカインの脇に入った。

「グッ！」

「カイン！」

「カインは大丈夫だ！ また来るぞ！」

ワノールはウインスに一喝入れる。その声にウインスは辺りを警戒するが、それでもカインの事が心配だった。もちろん、ワノールもカインの事が心配だったが、カインなら大丈夫だと何と無くだが感じた。

木々の間を駆ける音が聞える。物凄いスピードで何度も木々に衝

突しながらも、魔獣は立ち止まらない。角と角の間に挟まれ身動きの取れないカインは、その魔獣が木にぶつかるときに、木と魔獣の頭に体を押しつぶされ、口元から血を滴らせていた。魔獣が激突した木は軋み悲鳴を上げながら地面に倒れ、土煙を舞い上げる。その度、動物達は怯え隅へ隅へと逃げてゆく。その光景を薄れゆく意識の中見たカインは、何としてもこの魔獣を止めなくてはならないと歯を食い縛る。

「ぐっつ！ ウウウッ！」

両手で角の根元を握ったカインは、受け止めようと力を入れるが、足が地に着かず踏み止まる力が出ない。必死に足を伸ばすカインだったが、その直後全身に激しい衝撃が走った。口から血が吐き出され、カインの骨が背後の木と同じ様な軋み声を上げる。全身に痛みが走り、両腕が力なくなってきた。意識は完全に無くなり、魔獣の角と角にぶらぶらとぶら下がっているだけだった。

「ガウウウウッ」

「オイオイ。ザノメ。そいつは食べるなよ。一応、色々調べなきゃいけないんだからな」

木の上から二足歩行の魔獣が一体降り立った。長く頑丈そうな尻尾を軽くしならせながら、口元から薄ら伸びた牙を煌かせる。ザノメと呼ばれた魔獣は不思議そうに彼の方を見て首を傾げ、唸り声を上げる。

「ガウウウッ？」

「ほら、そいつ置いてあっち行ってな。用がある時に呼んでやるから」

「ガウウウッ！」

ザノメはカインの体を下ろすと森の中へと足早に消えてゆく。残された魔獣は、ゆっくりとした足取りでカインに近づく。だが、その時足音と話し声が聞えた。自分の姿が見られては不味いと思った魔獣は、とっさにカインを茂みに隠し木の上へと隠れる。

「こ、この辺で、大きな音が聞えた」

「ま、まさか、魔獣じゃねえだろうか？」

「そんな怯えることあねえ。わし等にはノーリンさんがいるでえねえか」

「でも、あの人本当に信用していいのか？ 食うだけ食って、金盗んでとんずらするかもしれないんだぞ！」

「何言ってるだ！ ノーリンさんがそんな事する人なわけねえ！」

この近くに村があるのだろう。複数の村人達がカインの方に近付いてくる。オドオドと辺りを警戒する村人達。一步一步と茂みへ近付いてゆく村人達の一人が、横たわるカインの体に躓き転ぶ。

「いててつ！ 何かあつぞ。ンツ？ た、たたた大変だあ！ 皆人がたおれてつぞ！」

「本当じゃ！ 大変じゃ！ 皆、村に連れてくぞ！」

村人達はカインを囲む。そして、力を合わせてカインを抱えると来た道を引き返してゆく。村人達の姿が見えなくなると、木の上から魔獣が降り立ち小さく舌打ちをする。眉間にシワを寄せ、村人達が去っていった道を真っ直ぐ見据え、何か思いついたのか、薄らと不適に笑みを浮かべ、指笛をならした。すると、何処からとも無く足音が響き、ザノメが森の奥から現れた。

「ガウウウッ！」

「行くぞ。お前にたらふく飯を食わしてやる」  
「ガウウウウツ！」

魔獣の言葉にザノメが嬉しそうに遠吠えをあげた。その遠吠えは森中に響き渡った。

魔獣の遠吠えが遠くの方から聞えた事から、近くに魔獣が居ない事を感じ取ったフォン達は、集まり話し合いをしていた。話し合いと言うより、もめていたと言う方が正しいのかもしれない。その原因はワノールにあった。

「どう言う事だ！ カインを探さないって！」

「理由は言った筈だ」

「道が分からなくなるからって、それだけの理由でカインを見捨てるのかよ」

フォンとウインスはひたすらワノールに意見を述べるが、ワノールはそれを訊きつけようとはしなかった。かたくなに首を振るワノールに、フォンは掴みかかるが、それを簡単にあしらわれる。勢いそのままに地面に横転するフォンは、激しく肘をすりむいた。

「フォン！ 大丈夫か？」

「オイラは、大丈夫だ。くっそ！ オイラは一人でもカインを探しに行く！」

「勝手な行動はするな。すれば、俺が黒苑で切りつけて無理にでもつれてゆく」

「やれるもんならやってみろ」

フォンの言葉にワノールが黒苑の柄を握り、一瞬で刃を抜く。鞘と刃が擦れ合う音が微かに聞え、フォンは身構える。何も言わずそ



れを見据えるルナと、どうするか悩むウインス。カインなら間違いないかとめるが、今のウインスにこの二人を止める術は無い。睨み合うフォンとワノールの間に緊迫した空気が流れる。

微かに風が流れ、突起した地面がほんの少しかけ、乾いた音が僅かに響く。それと同時にフォンとワノール、両者が互いに向って地を駆けた。怒りから僅かに獣になりかけたフォンのスピードは、狭く歩き辛いはずの悪路でも衰えず、すぐにワノールとの間合いが狭まる。瞬時にワノールは右手に握る黒刃を振り抜く。黒い刃は滑る様に横一線に走るが、その刃は宙を切り、フォンの体がその刃より高い位置に見える。その瞬間、ワノールは奥歯を噛み締め、攻撃に備える。その直後、激しい衝撃が体を襲った。

「ッ！」

合わさった白い歯の間から、薄らと血が流れ出し、ワノールの体は前のめりになる。この時、すでにワノールはフォンの鉄拳を腹に喰らっていたのだ。いや、正確にはワノールが黒刃を振り抜くその前に。ガクガクと両膝が笑い出し、力が入らず体を起こす事も出来ない。口の中に広がる血が、食い縛った歯を開くと同時に、地面に一気に流れ出す。

足元がフラフラのワノールに、フォンは右足を横に真っ直ぐに伸ばしワノールの頭部目掛けて垂直に落下する。このままだと、ワノールが危ないと思い、ウインスは足の裏に風を集め地を蹴る。

「止める！ フォン！」

そう叫びながら、ワノールに向って落ちて行くフォンの体に、ウインスは体当たりした。二人の体がぶつかりあい、衝撃で体が互いに反発しあう方へと吹き飛ぶ。フォンの体が空中で何回転したのかは不確かだが、既に自分の体がどちらに向いているのか分からず、

フォンは頭部を巨木にぶつけ意識を失う。その瞬間、鈍く大きな音が森中に響き、鳥達が一斉に空に飛び立った。一方、ウインスは風を操り、体への衝撃を最小限に抑え、地面に倒れる。

「イツ……。何とか、納まったか？」

「その様ですね」

「何で、そんなに落ち着いてるんだよルナ。少しくらい止め様と思わないのか？」

「止め様とは思いますが、私にフォンさんやワノールさんを止める力などありません。それに、もし止めに行けばきつとウインスさんの足手まといになっていたとおもいます」

相変わらずの口調に、ウインスは半笑いする。その時、今まで何とか倒れるのを持ちこたえていたワノールの体が、ドサツ、と音を立てて地面に崩れ落ちた。黒苑は刃を地面に転がる石にぶつけ、澄んだ金属音を微かに響かせる。

## 第7回 亀裂！ フォン対ワノール（後書き）

どうも！ やってきました！ 第六回 キャラクター紹介！ 今日日は『ワノール』です。

名前：ワノール「アリーガ

種族：烈鬼族

年齢：27歳

身長：189cm

体重：72kg

性格：正義感が強く己の意思を貫き通す

好きなモノ：剣術を磨く事・読書・酒・タバコ・妻

嫌いなモノ：努力しない奴・甘い食べ物・獣人・魔獣

作者コメント：

元・黒き十字架の総隊長。右目に眼帯をしており、その顔には痛々しい傷痕が。扱う剣『黒苑』は漆黒の刃で、自分の気持ちはどんな時も揺らがない様にと言う意味があるとか、無いとか。

かなりの愛妻家で、妻との約束で酒もタバコも今はやめている。自分で生み出したその剣術は、誰も真似する事は出来ない。

以上！ 第六回 キャラクター紹介でした。次回はまだほんのちよっとしか出てない『ブラスト』の紹介でも。きっと、皆忘れちゃってるよね（笑）

## 第8回 用心棒 ノーリン

日が暮れた。

森の中は完全に光を遮られ、足場が見えないほどの闇に包まれている。その闇の中に何か硬い物がかち合う音が響き、微かに光が解き放たれた。だが、それは、ほんの一瞬で消える。何度も光っては消え、光っては消えと繰り返していた。暫く続いた音が止むと、先程まで光っては消えを繰り返していた光が、薄らと森を照らす。

日が落ちたせいかわ、昼間よりも更に静けさ漂う森の中。聞えてくるのは、微かに流れる風の音と、虫達の小さな鳴き声。時折、何か飛び交う音も聞えるが、何が飛んでいるのかは分からない。

闇を照らす焚き火に、枯れ枝を投げ入れるウインスは、ワノールの治療をするルナの方を見る。今、ワノールの体がどういう状態なのか、ウインスにはわからないが、治療に時間が掛かっている事から、酷い状態なのだと感じた。一方、フォンの方は目は覚まさないものの、頭を軽く打っただけなので心配する事は無いだろうが、ウインスは少し気になる事があった。

「ルナ。フォンは大丈夫かな？」

「どうしたんですか？ フォンさんなら、頭を軽く打って気を失ってるだけですよ」

「いや、そう言う事じゃなくてさ……。何て言うのかな……。うん」

「もしかして、変化……の事ですか？」

微かにだが、ルナの表情が変わる。何処か、悲しそうな顔に。焚き火を見つめるウインスは、そんな事には気付かない。そんなルナの言葉に、ウインスは何か思いつめる様な表情をしながら答える。

「そうなんだよ。最近のフォンって、初めて会った時に比べて、何処か少し変わった気がするんだ。何処が変わったのかって、訊かれると分からないけど、何と無くそんな気がするんだ」

深刻そうな表情のウィンスは、小さなため息を吐く。そんなウィンスの表情を横目で窺うルナは、誰にも聞えないほど小さなため息を吐いた。それは、ルナがウィンスと同じ事を心配していたからだ。そして、近い内に今のフォンがフォンでなくなってしまう気がしていた。

森の奥の小さな村。丸太で作った柵が、村を囲っている。入り口は一つしかなく。夜はその入り口も丸太で作られた扉でふさがれている。このため、野生の魔獣達はこの村に入る事は出来ず、この村は魔獣に襲われる心配は無い。もし、この柵を突破されても、それを防ぐ為の策も既にこの村には備え付けられている。その為、村人達は安心して夜寝る事が出来た。

全ての家が明かりを消し寝静まる頃、一軒の家の明かりが灯る。家と言うよりも、物置小屋に近い。その家の中には、部屋の半分を占める大きなベッドがあり、他にテーブルやイスなどの小物が並んでいた。天井に吊るされたランプには火が灯っており、それが部屋を隅々まで照らしている。

部屋の半分を占めるその大きなベッドには、包帯を巻かれた小柄なカインが寝かされており、ベッドが大きいせいか、カインの体が更に小さく感じる。そんなベッドの脇には大きなイスがあり、そこに体格の大きな男が座っていた。

少しゴツゴツとした顔付きの男だが、その右頬には横並びで三つの星の刺青が彫られていた。腕組みをするその腕周りは太く筋肉質で、太股も脛も強靱な筋肉でガチガチに固められている。軽く欠伸をする男だが、目が開いているのか閉じているのか分からないほ

ど細いため、眠っているように見える。そんな大柄の男は立ち上がると、頭が天井に届いてしまうのではないかというほどだった。

「あいつら、何で怪我人をワシのベッドに寝かしてやがる……」

ガラガラ声で男はそう言うと、右手で短髪の白い髪を軽く掻きまわった。ふと、視線を感じ目線を落とすと、ベッドで寝ていたはずのカインが目を覚ましていた。まだ、傷が痛むだろうが、カインは体を起き上げらせ申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません……。勝手にベッド使って……。今、退きます。どうぞ、お休みになってください」

「ああ！ 怪我人が何気いつかってんだ！」

「えっ、いや……」

「それに、ワシは夜は眠らねえ」

男は自信満々にそう言うと、軽く笑顔を見せた。啞然とするカインは、「はあ……」と、小さく言うと軽く頷いた。男の好意に甘え、ベッドにもう一度横になったカインに、男は握り飯を差し出す。男の手に乗った握り飯は一見普通の大きさに見えたが、それは男の手がゴツゴツと大きな手で持っているからで、カインからしてみれば結構な大きさだ。その握り飯を両手で受け取ったカインは、少し苦笑いを浮かべながらそれを口に運ぶ。その瞬間、男の目が輝いた。

「食ったな！ 今、一口でも食ったな！」

「エエ……。食べましたけど、何か？」

「150ギガ払ってもらおうか」

「ッ！ えーえ！ 待ってくださいよ！ 今、差し出したのは誰も、ただでやるとは言って無いし、お前に食べといった覚えも」

無い」

詐欺まがいの男の行動に、焦るカインは早口で抗議するが、何を言っているのか聞き取れない。あまりにも、カインが慌てているので、男は大きな声で笑いながら言う。

「冗談だ！ 冗談！ 怪我人には優しくしないと。それに、見た所お金は持ってなさそうだからな」

「な、何ですか！ ちょっと失礼ですよ！ えっと……」

「ああ。ワシはノーリン」バジー又だ。一応、用心棒をしている。それから、こんな顔してるが、実はまだ二十代前半だぞ」

「ノーリンさんですか。僕はカイン」シュライフです。仲間と旅をしてるんです」

ニコニコと笑みを浮かべながらそう答えたカインに、ノーリンは少し怪しむ目でカインを見る。だが、その目付きは相変わらず開いているのかも分らない程の為、カインはそのことには気付いていない。暫く沈黙が続くが、カインは笑顔を絶やさず、楽しそうに微笑んでいる。そんなカインを見てると、いい仲間と一緒に旅をしていたのだと感じた。

「それで、その仲間とやらは何処へ言ったんだ？ 置き去りか？」

「実は、魔獣に襲われまして……。僕一人はぐれちゃったんです」

「ふん。今頃探しているぞ。きっと」

「いや。多分、それは無いと思いますよ」

ニコヤカにそう言い放つカインに、少し不満げな顔を向ける。落ち着いた面持ちのカインは、不満そうな表情のノーリンに軽く腕を振りながら「違いますよ」と言うと、ノーリンは「ワシは何も言ったらんぞ」と言っ腕を組む。そんなノーリンに、カインはゆっく

りと答える。

「僕達は、今やらなきゃいけない事がありました。先を急がないと行けないんですよ。だから、僕を探している暇は無いかと」

「何だ。意外と冷たい仲間なんだな」

「ち、違うんです！ 皆、とっても優しい人達なんです。種族は皆バラバラだけど、とってもいい仲間ですよ」

必死に説明するカインに、ノーリンはため息を吐きながら言う。

「わかった、わかった。そんなに騒ぐな。傷が疼くぞ」

「だって、ノーリンさんが……」

「それで、やらなきゃいけない事って何だ？」

「さつき、種族がバラバラって話しをしたじゃないですか」

「ああ。してたな」

ノーリンが軽く相づちを打つ。

「それで、仲間が一人ある事件で行方が分からなくなりました、僕等はその人を探してるんです」

「行方の分からなくなった奴を探してるのか？ そんなに大切な奴なのかそいつって。まあ、生死も分からないのにな」

「何言ってるんですか！ 生きてるに決まってるじゃないですか！」

「まあ、落ち着け。傷が疼くぞ。それで、何でそいつを探すんだ？ 探す必要があるのか？」

少し笑みを浮かべながらそう言ったノーリンだったが、カインがそんなノーリンに睨みを効かせていた。引き攣った笑顔を見せるノーリンは、「そんなに怒るなよ」と、軽く苦笑いを浮かべながら言う。



「次、言ったら許しませんよ」

「わーってるって。そんなに怒るなって」

「話を戻しますが、その行方不明の仲間、時見族なんです」

「時見族？ カイン。お前、ワシを馬鹿にしてるのか？ 時見族は

五百年前の大戦で全滅したって。今更、いるわけ無いだろ？」

馬鹿にする様に大笑いするノーリンに、カインはムスツとした表情を見せた。その時、爆音が外から響く。それは、村を囲う丸太の柵が何者かによって破壊された音だった。すぐさま外に出るノーリンに続くように、痛みを堪えながらカインが外に出る。

「ひふ〜っ。流石、ザノメ。お前のパワーの前じゃ、こんな柵どうってことないぜ」

「ガウウウウッ！」

土煙舞い上がるその奥から、魔獣二体の声が響いた。

## 第8回 用心棒 ノーリン（後書き）

第七回キャラクター紹介！ 本日で、七回目と言う事ですが、一体何人キャラクターでとるんじゃない！ と、まあそんな事を感じながらも始めたいと思います。

名前：ブラスト・イルハン

種族：天賦族

年齢：29歳（小説内で、27と書いてありましたが、29の間違いです。すいませn）

身長：189cm

体重：74kg

性格：穏やかで何処かしら威厳がある

好きなモノ：剣術の稽古・自分の国の人々と話す事・魚類

嫌いなモノ：権力を振り回す奴・人々を苦しめる奴

作者コメント：

東の大陸をおさめるフォースト王国の若き王様。天賦族と言う事もあり、何かを作るのが趣味で、色々な発明をしている。その発明のおかげか、フォースト王国は四大陸の内最も優れた文化を持ち、一番豊だとか。

城の兵士達曰く、よく城を抜け出すため、仕事が溜りに溜っているとの事。でも、やる時はやるし頼りになる王様。

剣術も凄い腕前でテイルに一時期剣術を教えた事も。非常に国民から愛される王様だ。

本日は以上！ 次回は……『ウインズ』です！ と、言うかブラストの事、皆覚えてたかな？

## 第9回 儂き命の償い

大きな爆音に、寝静まっていた村人達も目を覚まし、家々に明かりが灯る。どの家の窓からもランプの光が外に漏れていた。その窓の向うには村人達のシルエットが浮び、窓から外を窺っているのが見て取れる。微かに流れる冷たい風が舞い上がる土煙を吹き飛ばし、魔獣達の姿をはっきりと映し出した。

四足歩行の額に二本角を生やした魔獣と二足歩行の頑丈そうな尻尾をならせた魔獣。二体はまるで品を定めるかの様に、村の中を見回し嬉しそうに微笑む。そんな中、二足歩行の魔獣は真つ直ぐ伸びる広場の奥に目をやる。向かいには、包帯を体に巻いたカインの姿。それを見るやいなや、「ビンゴ」と、小さな声で呟き不適に笑みを浮かべた。

薄暗い中、魔獣が不適な笑みを浮かべたのが見えたのが、ノーリンはカインを隠す様に体を微かに動かし、両手首を軽くまわす。そして、右足首、左足首と準備運動をする様な行動を取り、最後に静かに息を吐く。カインはノーリンの背中を見据えながら青空天の柄に手を掛ける。その時、微かに金属音が聞えた。それは、ごくごく僅かな小さな音だったが、ノーリンにははっきりと聞えた。柄を握ったカインでさえ聞えない程の小さな音を。

「カインとか、言ったな。お前は戦うんじゃないぞ。どうせ、その怪我じゃまともにや戦えないだろ」

後ろを振り返る訳でもなく、カインにしか聞えない程度の声ですう言うノーリンに、カインは真剣な眼差しで答える。

「大丈夫です。この位の怪我で幾度と無く戦ってきましたから」

「こいつ等は、お前の思っているほど弱者じゃねえ」

「分かってます。僕はあの角の生えた奴にやられたんで！」

力強く自信満々にそう答えるカインだが、急に間が空く。首を軽く傾げるカインに、背を向けたままのノーリンは、啞然とし肩をがつくしと落とした。「どうかしましたか？」と不安そうな声を上げるカインに、左手で頭を搔くノーリンは「なんでもねえ」と呟き渋々と言った感じで、カインが戦うのを許す。

四足歩行のザノメは、興奮しているのか鼻息を荒げ「ガフー……ガフー……」と、変な声を出している。目の前には飯（人）が沢山いるためだろう。もちろん、そのことに気付いている二足歩行の魔獣は、ゆっくりとザノメの頭に左手をのせ小さな声で言い聞かす。

「あの金髪は食べるな。奴はロイバーン様が調べるらしいからな」

「ガウウウツ！」

「そう怒るなつて。奴以外は全員食っていいからよ」

「ガウツ！ ガウツ！」

歯と歯をかみ合わせながらそんな声を発する魔獣は、右後足で地面を何度も搔きながら鼻から息を吐き出す。視線はノーリンの方に向けられ、今にもノーリンに突進して行きそうな雰囲気醸し出す。軽く拳を作る様にした手を構え、ゆっくりと開いているのか分からない目でザノメを睨む。そして、小さな声でカインに言葉をかける。

「ワシがああの四足歩行の奴はやる。お前の体じゃ、あいつの突進を受け切れん」

「はい。あれは、ノーリンさんに任せます。僕、あれは苦手です」

「まあ、相性ちゅうもんがあるからな」

微かに笑みを浮かべるノーリンは、激しい足音に身構える。ザノ

メがノーリンに向って走り出したのだ。地を蹴る度に地面の砕け大きな音を起てる。右足を静かに退いたノーリンは息を吸い込み、目を見開く。開眼されたノーリンの目は鋭く、奥に見える瞳が獲物を狩る獣の様な目に見えた。直後、重々しく何かがぶつかり合う音が村中に響き、その衝撃が家々の窓をカタカタと揺らす。

「ワシにや、この程度の突進は効かんぞ」

「ガウウウウツッ！」

突き出された右手の平でザノメの角と角の間を押さえ、左手でザノメの右の角を握る。角の切っ先はノーリンの腹に刺さる直前で止められている。ピクリとも動く事の出来ないザノメは、後ろ足を奮わせ力一杯地を蹴るが、地面が砕けるだけでノーリンの体を押すことさえ出来ない。

「す、凄い……」

ノーリンの力に驚きを隠す事の出来ないカインは、暫し圧倒されていた。だが、すぐに青空天を抜き振り向き様に蒼い刃が閃く。その瞬間、タンツ、タンツと、地面を蹴る音が聞こえ、魔獣が尻尾をしならせながらカインの事を見据える。青空天を振り抜いたカインは、その瞬間に体を襲った痛み表情が歪む。もちろん、魔獣はそれを見逃さない。

「体が、痛むみたいだね」

「ウウツ……。多少の痛みは耐えられます」

強がりだ。カインの体に走った痛みは、耐えられるものじゃない。それでも、カインは痛みを堪え魔獣に向って青空天を振るう。その度に、背中と胸に激痛が走り、それがカインの体を蝕む。魔獣はそ

んなカインが繰り出す刃を軽々とかわしている。

「ほらほら、全然当たって無いぞ。ちゃんと俺を見て剣を振るえ」  
「クッ！」

奥歯を噛み締め力一杯青空天を振り抜く。刃は初めて魔獣の体に触れた。が、その瞬間、刃が金属音を奏で、その刃に走る振動が柄を握るカインの手を弾く。青空天は夜空に舞い回転し弧を描きながら、地面に突き刺さる。疼く胸と背中、右手は先程の振動で痺れ拳も握れない。

「言い忘れてたけど、俺の体は硬質物で出来ている。そんな鈍らな剣では傷一つつかん」

「ハア…ハア……。クッ……」

そのカインと魔獣のやり取りに聞き耳を立てるノーリンは、未だジツと動かさずザノメの体を押さえつけている。ザノメは幾度と無く脱出を試みるが、体はピクリとも動かさずこのままの状態が続いていたのだ。元の細目が変わっているノーリンは、右目を軽く見開くとボソツと呟く。

「ここらが、潮時か」

息をゆっくりと吸い込むノーリンは、目を見開き腕に力を入れる。すると、筋肉がギシギシと音を奏でる。引き締る腕には血管が浮き出て、今にも切れそうな勢いだ。角を掴む左手は徐々に上に持ち上がっていき、ゆっくり静かにザノメの体が宙に上がる。足が地に着かず、宙を蹴り続けるザノメは、「ガウッ！ ガウッ！」と吠え、ノーリンに噛み付こうとする。だが、ノーリンは目を見開いたまま口を開く。

「残念だ。もうちょっと、力比べの出来る奴だと思っていたが……。  
実に残念だ」

静かにノーリンの足が地から離れる。巨体のノーリンの体が空へと上昇して行き、更に森の木々の頭を越える。次第に村は見えなくなり、辺りには森の木々の頭だけが広がった。周りは星空が広がり、下には森が広がる。空に掛かった薄い紺色の雲が月を半分隠す。月の光で微かに光る雲を見据えるノーリンは静かに口を開く。

「今宵の月は綺麗だが、雲が無ければなお美しかろうに……」

残念そうなその声に、ザノメが答える訳も無くノーリンが言葉を続ける。

「この様な日には、殺生は好まぬが、村に出向いたウ又達が悪い」

静かにそう言うノーリンは、右手を魔獣の額から放し、角を握った左手の力を少しずつ抜く。角はノーリンの左手から解放され、体が重力に引つ張られザノメの体は落下する。小さくなっていくザノメを見下ろすノーリンは更に言葉を続ける。

「命は短し儂いもの。ウ又達はどれ程の魂を砕いた。訊いた所で分かるまい。分からぬ程の多くの魂を砕いたウ又等の罪は重いものなり。その罪、地の底で償ってもらおう！」

急に小さくなり行くザノメに向って頭から突っ込んでいく。風を切る音が耳の奥まで響き、着ている衣服の裾が激しくはためく。その落下速度は加速しザノメの体を捕捉する。右手でザノメの首を掴み上げ、地面に勢いよく突っ込んだ。

## 第9回 傳き命の償い（後書き）

第八回 キャラクター紹介！ もうバリエーション無いぞ。このまま、キャラクター紹介行っちゃいます！

名前： ウィンス「カージエス

種族： 風牙族

年齢： 14歳

身長： 150cm

体重： 40kg

性格： いつも元気な熱血系、何に対しても全力を尽くす

好きなモノ： 風・木登り・鳥・自分の住む村・姉

嫌いなモノ： 村を襲う奴・犬

作者コメント：

風牙族の村の族長の孫。強い風を操り、代々伝わる刀（牙狼丸：まだ、小説無いでは名前を明かしてません）を扱える唯一の者。まだ、不安定ではあるが一度爆発すれば、どんな風でも呼ぶことが出来る。

身長の高さをコンプレックスに思っており、日々身長を伸ばそうと努力している。

以上、第八回 キャラクター紹介でした。次は……まだ、そんなに出てないが、『フレイスト』の紹介をしたいと思います。



## 第10回 罪深き者

轟々しく鳴り響く地響きは、地を激しく揺らし亀裂を走らせる。

衝撃波が近隣の家々の窓ガラスを砕き、家の内側にいた村人達に襲い掛かった。土煙が地面に落下してきたノーリンとザノメの体を隠し、姿は見えない。地面に走る亀裂は深くカインの踵の方まで届いていた。所々、地面が突起して鋭利な切り口を上に向けている。

息遣いの荒いカインは、体に走る激痛から振り向く事も出来ず、ノーリンの安否を確認する事も出来ない。地面に刺さっていた青空天は、突起した地面により地面に突き刺さりながら横に倒れていた。そうとも知らず、カインはどうにか青空天を取りに行こうと考えていた。

地響きが収まり静まり返る。土煙が消え衝撃で陥落し砕けた地面が露になる。だが、そこにノーリンの姿もザノメの姿も無い。あるのはただの瓦礫だけ。それを、見ると魔獣は笑い出す。

「グハハハハツ！ 馬鹿め！ 自分から死を選択したか！」

笑い声が村中に響き、その声に村人達は怯える。俯き下唇を噛み締めるカインは、目の前にいるこの魔獣をどうするか考える。だが、ノーリンの安否が心配で頭が働かない。その時、カインと魔獣の上空から声が響く。もちろん、その声はノーリンだった。

「大きな笑い声だ事。何か良い事あったんかね？」

その声に、驚き辺りを見回す魔獣は、ふと空を見上げる。すると、そこにはノーリンの姿があった。宙に浮き魔獣を見下すノーリンは、魔獣と目が合う。細目のノーリンは、魔獣と目が合うと、目を見開く。その瞬間、魔獣はその眼光に殺気を感じ一歩後退る。ノーリン

の目さえ見る事の出来ない魔獣は、視線を逸らし息を呑む。完全にノーリンの殺気に飲み込まれていた。

宙から静かに地に足を着く。フラフラなカインと目が合い言葉を交わす。

「己の命は大切にしろ。人の命は儂い。こんな戦いで命を粗末にするな。せめて、天命尽きるまで生き延びよ」

目を見開いたノーリンは、今までと雰囲気の違い、何か威圧感の様なものを感じる。

静かに魔獣の方に目をやるノーリンは、ゆったりとした足取りで魔獣に歩み寄る。近寄るノーリンに、強靱な尻尾を力強く振り抜く魔獣。だが、左手で軽々とそれを受け止めたノーリンは、背を向ける魔獣に問う。

「ウヌに問う。ウヌはどれ程の魂を砕いた？ ウヌはどれ程、未来ある者達の命を無駄に奪った？」

「お、俺は、人の命を奪った事は無いね」

すぐさまそう答える魔獣に、ノーリンが更に目付きを鋭くし一喝する。

「真実を述べぬとは！ 何という罪深き者！ 儂き命を奪っておき、なおも罪を償おうともしない愚か者！ 砕かれた魂の重みをその身に刻め！」

力強く尻尾を弾き返す。その勢いで体が反転し、ノーリンの方向に直る。大きく上半身を捻り右拳を鋭く振り抜く。空気を切り裂く様な鋭くも轟々しい音が魔獣の耳に届く。そして、気付いた時には魔獣の腹に、ノーリンの右拳が突き刺さっていた。めり込んでゆ

くノーリンの拳は、一瞬にして辺りに衝撃を走らせ、魔獣の体が地面を抉りながら吹き飛び、丸太で作られた柵を意図も簡単に打ち抜き森の奥へと地を抉りながら姿を消した。スツと拳を引くノーリンは、カインの方に体を向ける。

「大丈夫か？ だから、止めとけって言ったのに。また、怪我増やしよって」

「す…すみません」

「まあ、最後まで止めんかったワシもワシだったし。今日は、許してやる。次、こんな風に命を捨てる様な戦いしてみい、ワシはお前を許さんからな」

「は…はい。すみませんでした」

「さて、ワシは壊れた柵を修理せにやららん。お前は小屋でゆっくり休んどれ」

軽く笑みを浮かべノーリンは壊れた柵の方に向って行った。その後ろ姿を見据えるカインは、自分もあんな風になりたいと感じ、そして自分の不甲斐なさに下唇を噛み締めた。

「グフツ」

森の奥地。真つ直ぐ地面が抉られた先に血を吐いて倒れた魔獣がいる。硬い体の魔獣は、ノーリンの拳を貰った腹が砕け血が滴れていた。体に走る激痛に表情を歪める魔獣は、木に掴まりまりながら何とか立ち上がり、右手で腹部を押さえる。ドロドロの血が右手を真つ赤に染め、指と指の間から、止め処なく血が流れ出る。

よるめきながらも木から木へと移動する魔獣は、背後から聞える足音に気付き足を止めた。地面には魔獣の血が点々と続き、所々の木の根には大量の血が溜っている。木にもたれながら真つ直ぐに闇

の中を見据える魔獣に、足音は近付いてくる。

「誰だ……」

肩で息をする魔獣は弱々しく闇の中に問いただす。だが、返事は返ってこない。しかし、足音は徐々に大きくなり、闇から白衣を着て眼鏡を掛けた男ロイバーンが現れた。ズレ落ちた眼鏡を右手で直すロイバーンは、傷ついた魔獣を見据え微かに笑みを浮かべる。まるで、魔獣を馬鹿にする様な笑みを。

腹部を押さえる魔獣は、ロイバーンの姿を見ると同時に、ゆっくりと座り込み笑みを浮かべた。

「失敗した様ですね。残念ですよ。全く」

「フツ……。失敗しただと。よく言う。お前の改良が完全じゃなかったからだろ」

「何を言うかと思えば……。呆れてものも言えませんね。私の改良は完璧。あなたがその力を使えなかっただけ。全く。私の研究はこれでまた、中断をしなければなりませんね」

首を左右に振るロイバーンは、呆れた様にため息を吐く。そして、苦しむ魔獣を観察する様にジツと見据える。もう動く事も出来ないのか、魔獣は木にもたれ空を見上げながら、弱々しく息を吐く。

指先に感覚も無く、体から血が無くなって行くのが分かる。腹部から流れる血も徐々に勢いを失い、これ以上体に血は残っていないと言っている様だ。少し目も霞み魔獣は、いつ意識を失ってもおかしくない。心臓の鼓動ももう小さく、止まってしまっそうだ。

「ウツ……。最後に……聞きたい……。あの……ガキに……。一体、何が……。俺には……何も……。感じ……。な……。か……。った……。ぞ……」

そこまで言つて、魔獣は息を引き取つた。力なく頭がうな垂れる。そして、微かに流れる風で体が地面に崩れ落ちた。横たわり、息をしない魔獣を真つ直ぐ見据えるロイバーンは、ズレ落ちた眼鏡を掛けなおし、静かに答える。

「死に底無いが、妙な事を気にするか……。まあ、貴様程度の魔獣に教えた所でどうなる訳でもない」

「自分の改良した魔獣なのに、随分と冷たいな」

闇の中から声がする。ハツとするロイバーンはすぐさま振り返るがそこには誰もいない。そして、気配すらも感じない。辺りを見回すロイバーンの背後にスツと、黒いマントを身に纏つた男が姿を現した。少々穏やかな目つきだが、その瞳の置くには憎悪が眠っており、それを知られない様に黒髪が長く伸び、目を微かに覆う。スラツとした体型だが、黒いマントがそれを隠す様に広がっていた。

スツとマントの中からナイフを取り出した男は、ロイバーンの首筋に刃を当てる。ヒヤリと冷たいナイフの刃を、首筋に当てられたロイバーンは、ここで初めて気付く。

「珍しいですね。ジャガラ。あなたが私の所に来るとは」

「最近のお前の行動は、聊か気に掛かる。何を企む」

「企む？ 何を言ってるんですか？ 私は何も企んでいませんよ」

「ならば、何故ゼロの指示無く魔獣達を動かす」

ナイフの刃がロイバーンの首筋に薄ら赤い線を走らせる。表情を歪めるロイバーンは、不適に笑い、当然の様に答える。

「私達は、別にゼロの指示に従うと言う決まりは無いはずですよ。それに、私がゼロの元に居るのは、研究を最優先にしているとのルールがあり、そうしているだけで、それが無ければあんな所に何の

用もございません」

「ならば、魔獣を動かすのは研究の為だというのか？」

「そうですね。まあ、どちらかと言えば、研究の成果を見たいというだけです。何処を改良すれば良いのか調べなければなりませんから」

「お前の研究の為に我等の同士が命を絶たれるなど、堪え難い事だ」

ジャガラが更に力を加える。だが、ロイバーンは笑みを浮かべ、「残念」と小さく呟く。その瞬間、ジャガラの前からロイバーンの姿が消え、声だけが響く。

「そいつは、私の作り出したコピーですよ。まだ、未完成ですが、実験は成功したようですね」

「ロイバーン！ 逃げるか！」

「逃げる？ 心外ですね。私は無謀な挑戦はしない主義ですので」

その後、「又ハハハハッ」と、ロイバーンの笑い声が森に響き消えた。

## 第10回 罪深き者（後書き）

第九回 キャラクター紹介！ 今日日は『フレイスト』の紹介をしたいと思います。

名前： フレイストレガイア

種族： 龍臨族

年齢： 21歳（人間の歳で252歳）

身長： 183cm

体重： 72kg

性格： 真面目で勇敢。 だけど、女性が苦手

好きなモノ： 剣術の稽古・食事・空を見上げる事・果物

嫌いなモノ： 怠け者・やる気の無い奴・人を襲う魔獣・レバー

作者コメント：

まだ、一回しか登場していないキャラクターです。一応、主力のキャラクターなのでここで紹介を。

北の国 グラスタ王国の王子。幼い頃から、兵士達に混ざり剣術の稽古に励んでいたため、女性と話した経験が無く、女性の前に行くと緊張して上手く喋れなくなってしまふ。

龍臨族は12年で一つ歳を取ると言うとても長生きな種族で、これも龍の血を引く者だからと言う。

これ以上、詳しい事は今はちょっと言えません。まあ、色々と小説内で明らかにしていきましょう！ 次回は『ノーリン』の紹介をしたいと思います。

## 第11回 さよなら

朝方、呻き声が森の中に響く。静かで薄らと霧が辺りを包み込む森の隅々まで響く呻き声に、風が騒ぎ出す。すると、森の木々も慌ただしくザワメキたつ。何かの訪れを予期するかの様に慌ただしくなりだす。

その呻き声に目を覚ますルナは、その呻き声が近くから聞える事に不思議と胸騒ぎがする。それが、何なのかはつきりとは分からない。でも、胸騒ぎは一層強まる。霧で視界の悪い中、辺りを見回すルナは、ワノールとウインスの二人の姿を確認し、再度辺りを見回す。しかし、フォンの姿だけどうしても見つからない。この時、胸騒ぎがより一層強まり、胸の鼓動が早まる。

立ち上がり更に遠くまで見回すが、霧が濃く遠くまで見る事が出来ず、ルナはゆっくりと歩きながら霧の奥まで確認する。霧の中へと入っていき、ルナの視界に黒い影が映った。木の陰に蹲るような形で座り込む影が。そして、それが呻き声を発する者だった。

その人物に歩み寄るルナは、恐る恐る声を掛けた。

「フォンさん？」

呻き声を発するのがフォンなのか、ルナは分からない。だが、その声を掛けたのには訳があった。それは、その座り込む姿がフォンの様に見えたからだ。しかし、呻き声はともフォンの声とは思えないほどの濁った声だった。息を呑むルナに、その濁った声が返事を返す。

「ルナ……。オイラニ…近付クナ……」

声は違えど、その言葉遣いはまさしくフォンそのものだった。苦



しむ理由を知らないルナは、すぐさまフォンの傍に駆け寄ろうとする。だが、次第にフォンの体に変化が現れ始めた。

縮こまっていた体は、徐々に膨れ上がり、苦しそうだった呻き声が獣の様な遠吠えへと変化する。霧の中で二つの黄色の目が輝きを放ち、血を求め獣の様に剥き出しの牙から涎を滴らす。普段の何倍にも膨らむ腕周り脚周りは、メキメキと軋みをあげている。

そんなフォンの姿に、ルナは驚き一歩後退する。この姿を見るのは初めてじゃない。でも、今回のはいつもと違う。怒り？ いや、それとは違う何か殺意の様なものを感じる。それは、まるでルナをここで殺してしまいそうな雰囲気だった。体が恐怖から動く事を拒絶し、ルナはその場に立ち尽くす。霧の中の黄色の目がルナを真っ直ぐ睨み付け、徐々にルナに近づく。

この時気付く。あの時の違和感を。あの時感じた嫌な予感。全てがここで繋がった。が、もう手遅れだ。完全に、フォンの体は中に眠る獣に蝕まれ、獣の意思が外に出始めている。それでも、フォンの意思がまだ残っていたのだろう。歩みを止め動かないルナにかすれた声で言う。

「逃ゲロ……。早く……。オイラ……。モウ…駄目ダ……」

その声は今にも途切れそうで、完全にフォンの意思は遠退いている。薄れていく意識の中、フォンは必死に願う。テイルが無事にミィファを見つけて出してくれる事を。集まった仲間が無事、グラスターの首都に辿り着ける事を。そして、この世界が平和にどの種族も仲良く暮らせる様に。

「ガアアアアアッ！」

響き渡る遠吠え。苦しみから解き放たれた様な叫びは森の隅々まで聞え、ウインスもワノールも目を覚まし、あの森の奥地にある村

の人々もその遠吠えに目を覚ました。木々は騒ぎ立て、鬱蒼と生えた草達は恐怖に震え上がる。

「な、何だ！ 一体！」

「ウインス！ ルナとフォンの姿が見当たらないぞ！」

「この霧じゃあ、探し様がないよ！」

「お前の風で何とか出来ないのか！」

「さっきからやってるって！ でも、風が集まらないんだ！」

ウインスがそう叫ぶと、「役に立たないな」と、ワノールは小声でぼやく。その声はウインスには聞えず、真剣な面持ちでウインスは右手に風を集めようと必死だった。左目を凝らすワノールは、霧の中に影を見る。何か獣の様な影を。それは、黄色い瞳をワノールの方にむけ、逃げる様に背を向け霧の奥深くへと消えてゆく。一つ残った黒い影。立ち尽くしたまま動かず、ただジツとしている。小さなその影は、暫くして、ゆっくりとへたり込んだ。森は依然騒いだままだが、霧は徐々に薄れてゆく。そして、へたり込んだ影が霧から露になった。

「ルナ！」

「大丈夫か！ あの魔獣は何処へ行った！」

「違います！ あれは、魔獣なんかじゃ……！」

薄ら涙を零すルナに、ウインスもワノールもただ黙り込む。あの霧の中で何があったのか、分からない二人はただルナが泣き止むのを待つしかなかった。初めて泣いたルナは、まるで今まで我慢していた悲しみを、ぶちまけるかの様に涙を流す。声は出さず、涙だけ目から止め処なく流れ出し、ルナの悲しみがヒシヒシと伝わる。ウインスもワノールも声を掛けられず、俯きルナをソツとした。

地を駆ける音が響く。霧の濃い中をひたすら走り続ける。皆を襲わない為に、必死に走り続ける。自分の意識が獣となる前に。何度も木にぶつかると、もう痛みを感じる事はない。右手の感覚が徐々になくなり、その手がフォンの首を絞める。フォンの意識を消そうと目覚め始めた獣が、フォンに襲い掛かる。息が苦しくなり、意識が薄れる。それでも、遠くに行こうと駆けるフォンの脚は止まらない。だが、フォンの意識はなくなった。霧で視界を遮られ、前にはある事を知らず、そのまま下に転落したのだ。突き出た岩肌に激しく体を打ちつけながら。

フォンが目覚めると、体の自由が利かなかった。獣に完全に体に乗っ取られたのか、それとも体を打ちつけたのが悪かったのか、原因は不明だがフォンは崖にもたれたまま動くことは出来ない。今の所、意識はまだはつきりしている為、獣に乗っ取られたと言う事は無い様だ。だが、すぐに意識が飛びそうになる。そして、頭の中に醜い声が響く。

『俺二体ヲヨコセ!』

「ウアアアアッ!」

頭に響く声に苦しみ地に疼くまり悲痛の声をあげる。体を襲う激痛。また、変化を始める体。軋む節々が悲鳴を上げ、フォンの意識を遠退かせてゆく。そんなフォンの耳に足音が聞える。静かにこちらに近付いてくる足音が。爪は鋭く伸び、牙がむき出しになり、目も獣の様に変貌するフォンの体は、もうフォンの意識など吹き飛ばしそうだった。

「来ルナ……。誰モ…近クニ寄ルナ……」

そのフォンの言葉も虚しく、フォンの傍で足音が止まり声がする。

「黄色い瞳……君が、フォンか……」

「誰だ……。オマエ……」

濁った声でそう言うフォンは、ゆっくりと顔を上げる。そこには、黒い髪を靡かせる優しい面持ちの男が居た。歳は殆どフォンと変わらないであろう、その男はその場に屈みこみフォンの顔を真っ直ぐ見据える。

「可哀想に。こんなにも、獣に蝕まれてしまうなんて……。全くの想定外だよ。ここで獣に乗っ取られたら、俺の計画が全て駄目になってしまう。悪いけど、それだけは阻止しなきゃならないんで、ここで死んでもらうよ」

「フザケルナ！ 俺八、死ナナイ！ 俺八神ノ使イナリ！ 魔獣如キニ何が出来ル！」

「魔獣如き？ 残念だけど、俺は、魔獣じゃなくて魔獣人！ 呪いで授かったこの力を試してみるか！」

「ホザケ！ 魔獣モ魔獣人モ、所詮八神ノ手駒ニ過ギン！」

その声と同時に不気味な笑みを浮かべながらフォンが男に掴みかかる。鋭く伸びた牙で、男を噛み砕こうとしたその時、体に衝撃が走る。背中から突き出た男の右手。鋭く伸びた爪の先から真っ赤な血が滴れる。

「グツ……。貴様……」

「俺の計画の邪魔はさせない。さよなら獣人よ」

力強く右腕を抜く。貫かれた胸から血が噴出し、フォンの体が背中から地面に崩れる。弾む様に倒れこんだフォンの体は、みるみる小さくなっていきむき出しの牙は小さくなる。血がフォンの体を覆

う様に広がった。

## 第11回 さよなら（後書き）

第十回 キャラクター紹介。今日は『ノーリン』の紹介です。

名前： ノーリン＝バジーヌ

種族： 空鳥族

年齢： 22歳

身長： 200cm

体重： 92kg

性格： ケチの金好き。だが、怪我人には優しく命を誰よりも大切に考える。

好きなモノ： 金・握り飯・星・漬物

嫌いなモノ： けちな奴・麺類・女

作者コメント：

空飛ぶ種族空鳥族の男。お金さえ貰えば、どんな所の用心棒も引き受ける。細目で開いているのか不明。だが、目を開くと人格が変わる。

女は皆、金遣いが荒いと思込んでおり、全ての女性を嫌う。少し変わった性格。

以上を持ちまして、キャラクター紹介を終わります。後々、他のキヤラも紹介すると思います。それでは、また会う日まで。

## 第12回 信頼してるからこそ

森の奥地の村では、村人達が騒いでいた。既にざわめいていた木々は静まり返り、風も穏やかになりつつあるのに。村人達の騒ぎに、眠そうにノーリンが小屋から出て来る。先程ようやく眠りに就いたと言つのに、まさかこんなに朝早くから起こされると思っても見なかったノーリンは、大きな欠伸をする。そんなノーリンの横に立つカインは、騒ぎの理由を説明した。

「そんな遠吠え如きで、騒いでんのか？ 馬鹿馬鹿しい」

「結構のん気ですね」

「この村は森中にあるんだ。魔獣の遠吠えや獣の遠吠えなんて、聞えて当たり前なんだよ。ふあゝつ。そんじゃま、ワシはもう一眠りするとするかな」

欠伸をして小屋へと戻っていくノーリンは、すぐにベッドに倒れこんだ。そんなノーリンの姿を見ながらカインは大きなため息を吐いた。何か胸騒ぎがするが、それが何なのか分からず、カインは静かに小屋へと戻った。騒ぎはすぐには収まらず、霧が消える様に徐々に薄れていった。

静まり返った森の中、一本続く山道を歩むワノールとウインス。その少し後ろには俯いたままのルナが続く。何も言わずただ黙り込んだまま。ワノールとウインスもルナが言い出すまで何も言わずに居る。その後、分かった事は、あの影がフォンだったと言う事だけで、あの後フォンがどうなったのか分からない。ただ、今は前に進むだけ。

暫く黙って歩いていたが、ウインスはふと言葉を漏らす。

「俺達、このままでいいのかな？」

「どう言う事だ？」

「ティルが抜けて、カインが魔獣に連れてかれて、フォンまで消えたんだぞ。このまま、旅を続ける意味があるのかな？」

「お前は旅を止めたいのか？」

ワノールが鋭い声で問う。別にウインスだって、旅が止めたいからそんな事を言った訳じゃない。ただ、フォンやカインの事が心配だった。だから、ウインスはそう言ったのだ。ちゃんと、思ったとおりに理由を説明したウインスだが、

「そうだな。だが、俺達はやる事があるだろ？」

「そうだけどさ！　そもそも、この旅の理由って、フォンやティルがミーファを探すのが目的だろ？　フォンもティルも今この場に居ないんだぞ！　俺等だけで行ってどうするんだ！」

「俺はミーファと言う娘の顔を知っている。ルナもそいつの事を知っている。別にティルが居なかるうが、フォンが居なかるうが関係ないだろう？」

「それじゃあ、この先もこうして仲間を見捨てて行くつもりかよ！」

ウインスはワノールの襟首を掴む。だが、ワノールは態度を変えず、ウインスを睨み付けた。鋭く突き刺さる様なワノールの眼差しに、ウインスは少し引き気味になりながらも力強く睨み返す。だが、ワノールがウインスの手を払い歩き出す。そんなワノールの背中を睨みウインスは叫ぶ。

「オイ！　俺を無視するつもりか！」

「黙れ。旅を止めたきゃここで止める。元々、俺はお前の様なガキを連れて行くのには反対だったんだ。ガキはさっさと自分の村に戻



つて縮こまつてる」

「ふざけんな！ 俺だって、お前と旅がしたくてついて来た訳じゃない！ テイルやフォンそれにカイン。皆が居たから俺はついて来たんだ！ 仲間を大切にする奴だったからついて来たんだ！」

ウインスは力強くそう言う。その言葉に足を止めたワノールは、ウインスを睨み付け言い放つ。

「仲間を信じられない奴が、仲間を大切にすると？ ふざけるな。俺は奴等は大丈夫だと信じている。だから、前へ進む。ここで奴等を探して、時間を潰すより、目的地で奴等を待つ方が、合流できる可能性はある。だからこそ、前へ進むんだ」

この時、ウインスは悟った。ワノールも二人を心配していると。仲間を信頼している、そんなワノールの言葉が胸に突き刺さる。そして、何故か自分が情けなく感じた。

それから、静かに歩き続けた。相変わらず、ルナは黙り込んだまま何かを考えるように最後尾を歩き続ける。山頂に着くと、暫く休憩し、またすぐに歩き出す。つり橋を渡り山を下る。足場は登る時よりもよく、スムーズに山を下った。

森の奥地の村では、カインが旅の支度をしていた。昨日よりも傷の痛みが退いたため、そろそろフォン達を追わなくてはと急いで支度を進めているのだ。ノーリンは相変わらずいびきをたてながら寝ているため、起こさない様静かに支度を済ませた。支度を済ませ、小屋を出ようとしたカインは、ゴツゴツした手に頭を掴まれ持ち上げられる。バタバタと足をバタつかせるカインは、叫ぶ。

「な、何するんですか！ ノーリンさん！」

「お前こそ、何処いくつもりだ？ まさか、その怪我で外を出歩こうってか？」

「何ですか！ その人を馬鹿にした様な口振りには！」

「馬鹿にしてるさ。その怪我で外を出歩こうって言うんだからな」

「僕は、急いでるんです！ 放して下さい！」

カインがジタバタと暴れるが、ノーリンは笑みを浮かべたままカインを見据える。その時、カインが右手に青空天の柄を握る。そして、鞘に入ったままの青空天で、ノーリンの腕を叩く。思わず手を放したノーリンは腕を押さえたまま叫ぶ。

「いてえな！ お前、何すんだ！」

「それじゃあ、お世話になりました。僕はここで」

軽く頭を下げるカインは、ノーリンに背を向け走り出す。だが、ノーリンがそう簡単に逃がす訳も無く、カインは軽々と頭を掴みあげられた。「何するんですか！」と、叫びだすカインはもう一度青空天を柄に入れたまま振り上げる。だが、ノーリンはそれをもう一方の手で受け止めた。

「あのな……。何度も同じ手が通じるか」

「放してくださいよ！ 僕は急いでるんですから！」

「急いでるってな、その怪我じゃあまともに剣も振るえねえだろ！」

「もう、僕は大丈夫です！ いいから、放してください！」

その言葉通り、ノーリンが手を放す。「ウワツ！」と、軽い悲鳴に近い声を上げたカインは、尻餅をついた。お尻を擦るカインは、ノーリンの方に体を向けると、

「急に手を放さないでくださいよ！ 危ないじゃないですか！」

と、力一杯叫ぶ。不満そうな表情を浮かべるノーリンは、細い目でジツとカインを見つめる。まるで、「自分が放せ言うただろ」と言っている様だ。ムスツとした表情を見せるカインは、「もういいです！」と、言った後ノーリンに背を向け歩き出す。

その時、背後に迫る殺気のようなモノに気付き振り返る。巨体を大きく唸らせ右腕を振り上げたノーリンがカインに迫っていたのだ。瞬時にそれに気付いたカインは、激しく振り下ろされたノーリンの拳をジャンプしてかわす。大きな拳は地を貫かんばかりの勢いで、地面に突き刺さり、地が割れる音が村に響く。軽くクレータの様に陥没する地面。地面を貫いたノーリンの右拳は、手首まで地面に埋まりその周りに鋭い岩が突起する。

ノーリンから少し離れた所に着地したカインは、金髪の髪を揺らしその合間から煌く瞳で睨み付ける。そして、右手は青空天の柄を掴みいつでも抜ける状態にする。俯いたままのノーリンは、地面に突き刺さる右手を引き抜く。乾いた土が崩れ微かに音をたてる。村人達はそんな二人の姿を震えながら家の中で見据える。

「いきなり、何をするんですか！」

「言った筈。命を捨てる様な事をすれば許さんと」

「僕は、命を捨てる様な事をしたつもりはありません」

「何を申す。愚か者！ 癒し切らんその傷で、ろくに剣も振るえん者が、戯けた事を！」

顔を上げたノーリンの目は開き、鋭い眼光がカインを見据える。見開かれた眼光を真っ直ぐに見るカインは、ノーリンの今までに無い威圧感に圧倒され、一步後退る。一步ずつ近付いてくるノーリンは、右腕を引く。その瞬間、カインは右拳が振り下ろされるのが分かった。すぐ、地を蹴り後方へと避けるが、ノーリンの右拳はカインに吸い付かれる様に襲い掛かる。鈍い音が響き同時にカインの意

識  
は  
と  
ん  
だ  
。

### 第13回 賭け試合

北の国グラスターの東部に栄える港町フィンブル。

商人達が集まり作られたフィンブルでは、今もなお商業が盛んで沢山の大型貨物船がこの港に集まる。街路では様々な商人達が店を構え、向かい同士で客の奪い合いを開始する。そんな商人の町であるフィンブルには住宅地は無く、宿などが多く並ぶ。その為、客は皆泊まり込みでここに買物に訪れる。もちろん、商人達が多いため、様々な争いも勃発する。だが、一日経てば皆そんな事を忘れ、商売を楽しんでいる。それが、このフィンブルの良い所だ。

そんなフィンブルの街路を歩む一人の少年。背中には荷物を担ぎ、茶色のコートをはためかす。黒光りする髪を風で靡かせるその少年は鋭く切れた目で建ち並ぶ店を物色していく。何度も人とすれ違い、少年は一つの店の前に立ち止まる。堂々と他の店より何倍も大きなその店は、デカデカと看板に『キング』と書いてある。しかも、その字は汚くて読めない。だが、少年は堂々と店の扉を開く。

ドアが開かれカランカランと澄んだベルの音が店内に響く。店内の中央には鉄柵で囲われたリングがあり、その周りに客席が設けられている。客席には人相の悪い者ばかりが座り、店に入ってきた少年の顔を皆が見据える。リング上では顔中傷だらけの男が、もう動けそうに無い男をこれでもかと言うほど棒で殴りつけていた。

真っ直ぐそれを見据える少年は「フツ」と、それを鼻で笑った。もちろん、その声は客にもリングで戦っている奴にも聞え、皆少年を睨み付ける。そんな少年の下に、黒服を着た店員がやってくる。ニコニコと愛想笑いを振りまく店員は、少年の顔を見ながら言う。

「こちらは、子供が出入りする所ではございません。早々に退出していただきたい」

「俺は金を手軽に金を稼ぎたい。船が出るまで間もないんでな」

「ですので、ここはそんな手軽にお金を稼げる所ではなく」「  
「いいじゃねえか！ クソガキ、俺が相手をしてやるリングに上  
れ」

リングの中の男が少年を睨みながら言う。すると、客達も騒ぎだ  
す。店員は少年の方を見て、渋々名前を聞く。

「挑戦者、お名前は？」

「俺は、テイル」ウオースだ」

「賭け金は五倍。幾ら賭けますか？」

「五千ギガだ。今の全財産がこれだけでな。コツコツと手軽に貯め  
させてもらう」

テイルはそう言いお金を手渡すと、荷物を降ろしリングの中へと  
入ってゆく。客達からは「殺せ！」と、コールが鳴り出しそのコー  
ルにテイルは呆れたような笑いを見せ、腰にぶら下げた天翔姫を棍  
へと変えた。両端に龍と虎の彫刻が施されたその棍を、テイルは『  
龍虎』と名付けた。名前をつけた理由は、武器の形が変わるのに、  
名前が変わらないのは変だと感じたから。『龍虎』と名付けたのは、  
両端に龍と虎の彫刻が施されているから。結構安易な考えのテイル  
だった。

「このリングに上がった事を後悔させてやるぜ」

棒を持った男の軽い挑発。そんな挑発にテイルも挑発で返す。

「口ばかり達者だな。口よりも体を動かせ」

軽く龍虎と名付けた棍を構えるテイルは、男を馬鹿にする様に笑  
みを浮かべえる。最終的にその笑みが男の怒りに触れた。地を蹴り

棒を振り上げ男がテイルに襲い掛かる。

「ガキが、調子に乗るなよ！」

「甘く見てると怪我するぞ」

振り下ろされた棒を右にかわしたテイルは、そのまま男にそう眩き背中を龍虎で叩いた。男の体は勢いそのままに鉄柵にぶつかり額から血を流し気を失う。龍虎を軽く回し構え直したテイルは、客席を見渡す。静まり返った客達に、次は誰が相手をすると言った視線を送るテイルは、店員の方を見据える。

「次は誰が相手をする？ 何なら、一気に相手をしてもいいぞ。その方が倍率が上がる。そうだろ？」

店員にそう投げかける。すると、戸惑った様な表情を見せ、店員が答える。

「は、はい。ここに居る皆さん相手でしたら、五十倍です」

「なら、それに俺のさっきの賭け金二万五千ギガを全て賭ける」

「ふ、ふざけるなよ！ ガキ一人が俺達全員相手に勝てると思うな！」

「何なら、やってみせよう。この店に居る客全てを相手に勝つ。そうすれば、俺の賭け金の二万五千ギガは五十倍の百二十五万ギガに膨れ上がる訳だ」

客を挑発するテイルを見据える一人の男。片手に持ったお酒の入ったグラスを口に運び、一気に酒を飲み干す。そして、首からぶら下げるゴーグルを額に掛け、白い歯を見せ笑みを浮かべる。大人しそうで大人びた顔付きが、子供の様な無邪気な笑みに変わり、灰色の瞳がテイルの背中を真っ直ぐ見つめる。蒼く深みのある色艶をし

た髪を揺らせ、激しく立ち上がった男は、大きな声で笑う。

「ハハハハッ！ お前、面白いな！ いや〜っ。酒飲みに来ただけだったのに、まさか、こんな面白い賭けに出くわすとは、思っても見なかったな。よーし。力及ばずながら、俺も参加させてもらおうかな」

背後から聞えた男の声に、テイルが振り向く。男の灰色の瞳とぶつかり合うテイルの黒い瞳。ニコニコと笑みを絶やさないその男を、テイルは鋭く睨み付ける。すると、男は焦ったように手を振り答える。

「ちよ、ちよっとちよっと。何？ 俺は、あんたとやりあうって言ったんじゃないよ。ここの客全員とやりあうって事よ。その方が勝った時の賭け金が跳ね上がるんだろ？ 俺も二万ギガ賭けさせてもらうよ」

「お前も、ここの客だ。俺はここの客全員って言ったんだ」

「そんな、けち臭い事言わないでさ。いいじゃない。一人減ったくらいじゃ変わらないって。そうだろ客の皆さん！」

男の言葉に、店の客達は怒りの声を上げる。これで、この男もテイルと同じ状況へと変わった。雪崩れ込む様にリング上に上がってくる客達は、一斉にテイルに襲い掛かる。龍虎を振るうテイルは、素早く攻撃をかわし反撃へと移行する。一方、男の方は大勢の客に追われ逃げ惑っていた。

「ぬわ〜っ！ 何々！ 俺の方数多くないか！ 元々、向うの賭けだろ、何で俺の方にとって、前からも！」

男は完全に挟み撃ちにされ逃げ場を失う。リング上で戦うテイル



は、その男の状況を目の当たりにし、呆れたようにため息を吐く。繰り出された拳を右に避け、龍虎で腹を突き一人ずつ確実に仕留めて行くテイルは、男の方に向かって叫ぶ。

「お前、勝手に参戦しておいて、何やられそうになつてんだ！」  
「だって、まさかこんなに大勢襲ってくるなんて、思つても見なかつたしさ。それに、皆お前の相手をすると思つてたからさ！」

力強く男はそう言い、壁に立てかけられたモップを手に取り客を突き飛ばす。軽い身のこなしで客を相手にしていく男は、テーブルを蹴り客を一気になぎ払う。戦いなれしたその男の身のこなしは、切れがあり回し蹴りなど様々な技を見せつけ相手を倒してゆく。

三十分後。店内に立っていたのは、一人の店員とテイルと男の三人だけだった。他の客は気を失うか、痛みに苦しんでいるかどちらかだ。何発か相手の拳を貰ったテイルに対し、男の方は全く傷も無くニコニコと嬉しそうに微笑む。店員は愕然とし、店にある金を全てテイルと男に渡した。お金を受け取りすぐに店を出るテイルの後に、あの男がついて来る。同じ道を行くのだらうと、初めはテイルも気にしていなかったが、ずっと男がついて来るためテイルは振り返り男に言う。

「何故、ついて来る」

「いや〜っ。お前と居ると楽しい事があるからさ。それに、こんなに儲かったし、そのお礼にパーツとお酒でも飲もうと思つてさ」

「悪いが、俺は未成年だ」

「何言つてんだよ。俺だって未成年さ。そんな事気にしないで飲みに行こうぜ！ 祝杯を挙げようぜ！ なあ、なあ」

「祝杯なら、一人で挙げる。俺は忙しい。それから、もう付き纏うな」

テイルはそう言い放ち歩き出す。男は少し首をかしげ、テイルの後に続くように歩き出す。そして、テイルに言い聞かせるように話します。

「俺はカシオ＝ラナス。この地じゃ珍しい水呼族だ。んで、何でこの地に居るかって言うと、実は海を探索しながら泳いでたらさ、いつの間にかグラスト王国に。笑っちゃうだろ？俺もさ、最初は面白すぎて腹がよじれるほど笑っちゃったよ。しかも、俺フォースト王国と思ってたからさ、自分の家が無いって驚いてさ。って、言うか俺一ヶ月も海に潜ってたんだって、時が経つのも怖いよな。しかし、水中で呼吸できるって言うのも問題だよな。ほら、ずっと海に潜ってたなら、時間がわかんなくなっちゃうだろ？って、水呼族以外には分からないか」

一人で喋り通すカシオ。流石のテイルも苛立つ。後ろから聞えるその声に、テイルは足を止め振り返る。急に振り返ったテイルに、カシオも驚いた様に立ち止まり首をかしげた。引き攣った様な笑みを浮かべるテイルは、「ついて来るな」と、一喝し再び歩き出す。だが、カシオはテイルに続くように歩き出し笑みを浮かべながら、また話します。

「それでさ、グラストって、初めてで何も知らないんだよね。こっつて、グラストのどこら辺？結構栄えてるよな。って、言ってもフォーストよりはまだまだかな。フォーストの港町なんてすげえーぞ。初めて行った時は俺も迷った。意外と方向音痴なんだよな。こればかりは治らなくてさ、村の皆も困りもん。まあ、それもあって、俺一人だけフォーストからグラストに辿り着いたんだけどね。けど、よく飲まず食わずでここまで辿り着いたと思うでしょ？別に飲まず食わずじゃないんだよね。水呼族は、海の水を飲んでるも平気なんだよね。それに、生の魚も食べても平気だし。だから、

海の中でも普通に生活できるんだよね。羨ましいでしょ？」

その時、三度テイルが足を止める。そして、拳を震わせ無理に笑みを見せた。だが、目は笑っておらず、怒りが滲んでていた。流石のカシオもこれには、苦笑し「お、落ち着いて」と小さな声で言い両手を前にだす。テイルは怒りで震えた声でカシオに言い放つ。

「いい加減にしろ！ 俺は急いでるんだ！ ついてくんな！」

怒鳴られ思わず目を閉じたカシオ。暫くして目を開けるとそこにテイルの姿は無く、遠くの方に駆けて行くテイルの後ろ姿が見えた。

「あつ！ ちょ、ちょっと！ 待ってよ！」

そう叫び、カシオはテイルの後を追いかけていった。

## 第14回 牢屋の中の二人

船の汽笛が鳴り響く。大型客船が港を出港する合図だ。その音は町中に響き、皆の注目を集める。人々は港から出発するそんな大型客船を一目見ようと港に集まる。碇が上げられ、汽笛を二・三度鳴らし更に人々を引き寄せる。

徐々に、岸壁から離れてゆく大型客船に向って、集まった群衆の合間を、素早く掻き分け駆け抜けるティルの姿があった。カシオから逃げる為走り回っていた為、船に乗り遅れたのだ。もちろん、そのティルの背後にはカシオが迫っていた。だが、それを気にせず全速力で走るティルは、群衆の合間を抜け岸壁を蹴り既に出港する状態になった大型客船の船尾の手摺に飛びついた。集まった群衆の誰もが目を疑い騒ぎ始める。と、次の瞬間カシオが群衆から飛び出し岸壁を蹴る。既に、岸壁からかなり距離も離れている大型客船。手摺に掴まったままのティルは、届く訳無いとカシオの方を見ていた。もちろん、カシオはティルの読み通りあと少しの所で海に転落した。海面から顔を出すカシオと目が合ったティルは、軽く手摺を越えて船に乗り込むと大きな声で言い放つ。

「追いかけてここまでだ。これ以上、お前も俺を追ってこられんぞ」

海面から顔を出したままのカシオは、白波を立てながら去り行く大型客船を真つ直ぐに見据えた。そして、口まで海面までつけると、ブクブクと水中で息を吐き出す。

大型客船に乗り込んだティルは、当然、船員達に囲まれた。無断乗船だからだ。もちろん、ティルも抵抗するつもりは無い。元々悪いのは時間に遅れた自分自身なのだから。船員達に連れられ、歩き出そうとしたその刹那、海面を何か叩く音が響き、水飛沫がティ

ルとテイルを囲う船員達を襲った。そして、船尾にビショビショに濡れたカシオが着地した。服は体に張り付き、裾からは水が滴れる。蒼く深い色艶の髪は水に濡れ、更に深みを増す。目に掛けていたゴーグルを額の方に持って行き、前髪を掻き揚げるカシオは、白い歯を見せながら笑みを浮かべると、テイルに向って言い放つ。

「残念！ 俺は水呼族だぜ。海の中なら陸地よりも素早く動き回れるんだぜ！ フハハハハハッ！ 追いかけてこは俺の勝ちだ！」

大笑いするカシオに、呆れた様な表情を見せるテイルは、「お前……馬鹿だろ」と、小さく呟く。耳に水が入ったのか、カシオにその声は聞き取れず、「何？ 何か言った？」と、聞き返してくる。だが、テイルは首を左右に振っただけで何も言わず背を向けた。もちろん、カシオもテイルと同じく無断乗船により、船員達に捕まり牢屋に入れられた。

薄暗く、掃除を怠っているのか、少し黴臭い。電灯もチカチカと点滅し、もういつ消えても可笑しくない。牢屋の壁には、小さな窓がついて居るが、海の中が見えるだけで光は入ってこない。天井からは、足音と床の軋む音だけが響いてくる。

「やっぱり、お前と居ると面白い事ばかり起こるな。まさか捕まるとは。ハハハハハッ！」

「ふざけるな……。お前のせいでコッチは牢屋の中だ。本来なら、船に乗り遅れる事も無かった」

「まあまあ、そうカリカリするなよ。それより、お前、名前なんだっけ？ 訊いてないよな？ 俺は自己紹介したけど、覚えてるか？ もしかして、お前聞いてなかったんじゃないか？ そうだよな。黙々と歩いてたもんな。あれじゃあ、俺の独り言みたいだったし

「

一人だけ延々と喋るカシオ。少し五月蠅いが、相手をするより一人で喋らせていた方が得策と考えたティルは、硬く冷たいベッドに横になり壁の方を見て、小さく欠伸をして目を閉じた。目を閉じても聞えてくるカシオの声と、天井から響く足音。必死に眠りに就こうと努力するが、目を閉じると何故か音が大きく聞えイライラが募る。

暫く続いていたカシオの声が聞えなくなる。寝たのか？ そう思いなながらティルが寝返りをうつ。すると、目の前にカシオの顔があらわれ、驚きに声を上げる。

「な、なな何だお前！ 何してる！」

「だってさ〜っ。暇で暇で」

「暇なのと俺に近寄るのと関係ないだろ！」

「いや〜っ。寝てるのか確認しようと思って」

笑みを浮かべながらカシオがそう言う。呆れた様子のティルは、ため息を漏らしカシオの肩を小突いた。ヨロヨロとカシオは後退し向いの壁際にあるベッドに腰を下ろす。カシオと向い合うティルは、もう一度ため息を吐くと言う。

「俺は、ティル。ウォースだ。お前は、確かカシオだったな。これで自己紹介は終わった。もう、俺に話しかけるな。俺は寝る」

「冷たいな。お前、友達いないだろ。そんな性格じゃなあ……」

「お前、殺されたいか」

腰にぶら下げていた天翔姫を一瞬にして、細身の刃の剣へと変化させカシオの首筋に向けるティルは、鋭い目付きで睨んでいた。軽く手を上げ、お手上げのポーズをとるカシオは「冗談、冗談だよ」と、笑顔で言う。そして、ティルが目を放した一瞬の隙を突き、背中に手を伸ばし長さ三十センチほどの以外に太い棒を取り出す。そ

の棒には幾つかボタンがあり、カシオは取り出すと同時にそのボタンを押す。それに気付いたテイルはスツと、もう一度カシオの首元に刃を向けるが、テイルの首筋にも鮮やかに光る刃が映る。

笑みを浮かべるカシオの右手には、槍が握られており、先程の棒が変化したと見られる。長い柄の先端に蒼く煌く大きな刃。二ツコリ笑みを浮かべるカシオに対し、冷静に睨みを効かせるテイル。

「どう言うつもりだ」

「いや〜っ。テイルのその武器がコイツに似てると思ってさ。これ、渦浪尖かろっせんつて、言うんだけどさ。この筒ん中に納まっててさ、ボタンを押すと出てくんだよ。持ち運びに便利でさ。その剣もさっきまで箱だったろ？ やっぱり、ボタン押して変化するの？ でも、凄  
い白い刃だな。それに、軽そうだ」

渦浪尖を下ろし、マジマジと天翔姫を観察するカシオに、苛立つテイルは柄の先端にあるボタンを押し剣をボックスに戻す。その瞬間、カシオが「うわっ！」と驚きの声を上げ、目を丸くして天翔姫を見つめる。カシオの目から隠す様に、テイルはボックスを腰に掛け茶色のコートで見えなくする。天翔姫が見えなくなり、複雑そうな表情を浮かべるカシオは、渦浪尖を戻し背中に背負うとジツとテイルを見つめる。そんなカシオと目が合うテイルは、冷たい口調で言い放つ。

「いつまで見てるつもりだ？」

「もう少し見せてくれてもいいだろ？ 俺の渦浪尖もみせてあげるからさ」

「興味ない」

カシオの言葉を一刀両断し、テイルは硬いベッドに横になり目を閉じた。カシオも急に黙り込み、ベッドに横になり黒ずんだ天井を

見上げる。天井から聞える床の軋む音が、静かな牢屋の中に響き渡った。



## 第15回 凸凹コンビの旅路

深い森の中に足音が響く。草を踏みしめる重々しい足音が。静けさ漂う森の中に。

木々の隙間から射し込む日の光が、茂みを歩く人物の顔を照らす。右頬に薄ら煌く三ツ星の刺青。体格は大きく、鬱蒼と生い茂る草が、膝ほどまでしかない。普通の人ならば歩くのも難なこの草の中を、悠々と歩めるのはこの男の体が大きいからだと思われる。名をノーリンと言う男は、右肩に小柄な少年を担いでいる。わけ合って森の奥地の村から追い出されたのだ。

荷物と金髪の少年カインを担ぎ、悠々とした様子で歩くノーリンには、未だ疲れの様なモノは見えず、ただ眠気だけが漂っていた。遅くまで起きていたため寝不足なのだ。大きな欠伸をしながら前へ進むノーリンは、時折止まっては軽く深呼吸を繰り返す。肩に担いだカインは未だ意識を失ったままで、少し頬が赤く腫れている。頬が腫れているのにも色々と言があるのだ。

「くっそお！ こんな事なら、殴って気絶なんてさせんじゃなかった」

独り言をぼやくノーリンは、眠そうに大きな欠伸をする。怪我をしているカインが一人旅に行こうとするのを、止めるため一発殴って気絶させたのだ。ついでに、カインの頬が腫れているのは、ノーリンが思いっきり殴ったから。だが、気絶したカインを小屋に連れ込もうとしたその時、村人達に囲まれ、「もう、お前など必要ない！ 村を出てけ」と、告げられた。人の事を利用するだけ利用して、危険だと思つたらすぐに切り捨てる。全く気に食わん。そう思いながらノーリンは歩き続ける。

暫く叢ウチウチを歩いた後、ようやく道へと出た。茶色く真っ直ぐ伸びた

一本の坂道。少々露出した岩肌が所々鋭くなっており、足場も悪そうだった。足元には都合よく焚き火の跡が残っており、誰かがここで休んだ形跡がある。

「焚き火の跡か……。カインの仲間がここで休んだのか？」

「んんっ？ ツ！」

目を覚ましたカインは、腫れ上がった頬の痛み表情を歪めた。そして、自分がノーリンの肩に担がれているのに気付き、慌てて地に下りる。深々頭を下げ、「すみません！」と、謝るカインはふと思い出す。意識を失う直前の事を。

「アアーツ！ イツ……」

「大声出すと、頬の腫れが痛むぞ」

「これって、ノーリンさんが……」

「ワシかて、やりたくてやったわけじゃねえ。お前があんまり言う事聞かんから、悪いんじゃない！」

「だからって、殴る事無いじゃないですか！ こんなに腫れて……」

頬を擦りながらそう言うカインは涙目になりながら、ノーリンを見つめる。カインを見下ろすノーリンは、呆れた様のため息を吐き、靴から水の入った筒を取り出す。そして、カインの腫れた頬に零す。冷たい水が腫れた頬に触れ、ズキツと痛む。表情を引き攣らせ、奥歯を噛み締めるカインは、暫し痛みを耐えた。それから、暫く腫れが取れるまで休憩を取る。濡れたタオルで頬を押さえるカインは、珍しく怒っている様で、ノーリンの事を睨んでいた。

「そろそろ機嫌直せて。そう怒る事でもないんじゃないからよ」

「……」

「オイ、聞いてんのか？」

「……」

子供の様にすねるカインは一言も話さず、ジツとノーリンを睨み続ける。流石に、ノーリンもこれにはお手上げといった感じで、ため息を漏らす。険悪なムード漂う中、ノーリンは懐ふところから葉に包まれた握り飯を二つ取り出し、一つをカインに渡す。

「ほれ、腹減ってるんだろ？ まあ、これはただでくれてやる」

「要りません……。こんなに、頬が腫れてたんじゃ食べられませんから」

「お前な……」

ガツクリとうな垂れるノーリンは、静かに握り飯を食らう。静かに時は過ぎ、道の真ん中で昼寝をするノーリンのいびきだけがこだまする。迷惑そうな表情を浮かべるカインは、耳を塞ぎながらノーリンを見据える。相当熟睡している様で、カインが小石を当てても目を覚まさなかった。

「こんな所で、熟睡できるなんて……」

軽く首を傾げ感心するカインは、一つ残された握り飯に目をやる。先程からずつとお腹が音を起てており、腹ペコのカインはゆっくりと手を伸ばす。だが、握り飯を握る手前で手をとめる。また、150ギガ払えと言われるんじゃないかと、ノーリンの方に目をやるが、起きては無い様だ。

それを確認し、安心して握り飯を取りかぶりつく。意外と美味しい握り飯を素早く食べ終え、何事も無かった様に休憩するカインは、頬の腫れを聊か気にしつつ木々の葉の合間から薄らと見える空を見上げる。

『今、フォン達はどこら辺を歩いてるんだらう？ 早く合流した

いな』と、思っていたカインは、ふと眠っているノーリンに目をやる。そして、『あれ？ 何で僕ノーリンさんを待ってるんだろ？』と、疑問に思う。腕を組み首を傾げて、考え込むカイン。

「ふあ〜っ。よう寝た……。んっ？ どうかしたんかあ？」

寝起きのノーリンが、考え込むカインに問う。すると、カインは驚いた様に「ウワツ！」と、声を上げ危うく坂道を転げ落ちそうになる。訝しげにカインを見据えるノーリンは、立ち上がり大きく伸びをすると、「行くか」と、言い荷物を持ち歩き出す。ノーリンが何処へ向うかなど、カインには分からないが取り合えず、自分の荷物を持ちノーリンの後に続いた。

「それで、お前のお仲間は、一体何処へ向ってるんだ？」

突然、ノーリンがカインに問いかける。足元を見ながら歩み進むカインは、静かに質問に答えた。

「僕達は、グラストー王国の大都市レイストビルに向ってるんです。この国王に何か情報が無いか教えてもらおうと思ひまして」

「ふ〜ん。レイストビルか……。久し振りじゃねえか」

「ノーリンさんも一緒に来るんですか？」

少し不満そうにそう言うカインは、前を歩くノーリンの背中を真っ直ぐ見据える。大笑いするノーリンは、軽い口調で「当たり前だろ」と、言い、カインは少し迷惑そうな口調で「そうですか……」と、元気なく答える。何と無くだが、カインはノーリンが苦手だった。雰囲気と言うか、今まで関ってきた事の無い感じの性格だから。そんなカインの事など気にせずノーリンは足を進める。黙り込むカインを気にしてか、ノーリンが場を盛り上げようと、質問をする。

「そういえば、お前の仲間は確か、皆種族がちげえーんだろ？ 一体どういう間柄なんだ？」

「うーん。そうですね。烈鬼族のワノールさんって方がいるんですが、僕は幼い頃にその人に拾われたそうです」

「そうですね、曖昧だがお前おぼえてねえのか？」

「はい。幼い頃の記憶が無くて、取り合えず、気付いた時には黒き十字架と言う軍に所属してました。その上司がワノールさんだったって事もあるんですけど」

笑顔でそう言うカインに対し、複雑そうな表情をするノーリン。カインにノーリンの表情は分からず、「凄く責任感の強い人なんです」と、明るく言うと、ノーリンは怒った様に言う。

「若い子供を軍なんか所属させる様な奴に責任感などあるか！人の命を何だと思ってるんだ！」

「違うんですよ。ワノールさんは軍に入団するのは反対だったんです。僕も当時8歳でしたし、そんな幼い子供に魔獣と戦えなんてワノールさんは言いませんよ。ただ、黒き十字架と言う軍は、元々アルバー王国、国王を守るための軍だったらしく、国王の命令で仕方なくといった感じらしいんです」

笑顔を見せるカインだが、何処か寂しそうな瞳をしていた。黒き十字架のメンバーは今元気だろうか、思うカインに、ノーリンが思い出した様に言う。

「お前達はあの事件の生き残りか？」

「あの事件？ もしかして、都市崩壊の事ですか？」

「都市崩壊だあ？ 何だ、知らないのか？ 国王殺害及び都市壊滅の事」

「国王殺害！ そんな、それじゃあ、お城を守る皆は……」

「生き残った奴など居なかったと俺は訊く。何でも城の壁には鋭い刃物で切った様な後が沢山残ってたらしい」

その言葉にカインは俯く。嘗ての仲間は何者かに殺された。そんな事信じたくなかった。急に黙り込んだカインに、ノーリンも少し暗い声で言う。

「全く、許せねえ話だ。人の命を何だと思ってやがるんだ」

「僕も……許せません。沢山の人の命を奪うなんて……」

カインは静かにそう言い、怒りを瞳の奥に飲み込むかの様に目を閉じた。

## 第16回 血塗れの少年

闇夜の中、深く暗い森を、一人の男が歩む。その男は、右手で血を流し動かない小柄な少年の足を掴み、引き摺るように歩んでいる。通る道に真つ赤な血の線を残してゆく。まるで、死体を運ぶ様に歩む男は、ふと足を止め振り返る。奥は暗くて道すら見え、自分が一体何処から歩んできたのかすら忘れてしまっただ。静かに流れる風だけが、男と会話するように吹き抜ける。微かに笑みを浮かべた男は、闇夜の中でも黒光りする髪を靡かせ、静かに口を開く。

「奴の思い通りにはさせない」

その言葉は、闇の中に静かに消えてゆき、男はまた歩みだす。少年を引き摺る音だけが、暗い闇夜の森に響き渡り、男は闇の中へと姿を消す。

夜も随分と深まり、皆が寝静まった小さな町リオース。密集するかの様に建てられた多くの住居は、中央にそびえる数多くの店を挟む様に作られた町。元々、店を構える者達が、物々交換などをしながら耐え凌いでいたこの町に、他の種族の者達が移住して来た為、この様に店を挟む形で住居が建てられたのだ。

そんな静かなリオースの西に位置する住宅地。細く続く街路を一人の小柄な少年が駆け抜ける。明かりも無く暗い街路を迷う事無く駆ける少年は、鮮やかな黒髪を風にはためかす。リズムよく響く足音は暫く住宅地に響いた。

「フツツ。やっぱり、思いっきり走るのって気持ちいいね」

街路を走っていた少年は、そう言いながら一軒の家の扉を開く。室内の光が、暗い街路を明るく照らし、扉が閉まるとまた暗くなつた。少年は、毎夜皆が寝静まった後、この様に静かな街路を全速力で駆け巡る。それが、運動になり体力がつく為、続けているのだ。

「お疲れ様です」

汗を流す少年を出迎えたのは、腰まで届くほどの美しい茶色の髪をした少女だった。少年よりも少し小柄な少女は、タオルを少年に手渡す。食事の準備をしていたのか、奥から良い香りが漂ってくる。少年は鼻をヒクヒクと動かし、ニコツと無邪気な笑みを浮かべた。

「この匂いは、シチューだね」

「はい。お口に合いますか、分かりませんが……」

「何言ってるんだよ。リリアの作るモノ全部美味しいよ」

少年は、そう言って汗を拭いイスに腰掛ける。恥かしそうに顔を俯けるリリアは、「そんな事……」と、小さな声で呟きキッチンの方向に向つた。笑みを浮かべる少年は、ふと外からの物音に気付く。何かを引き摺る音と、床を蹴る足音。二つの音は丁度家の前で止まる。そして、扉をノックする音が響く。キッチンに居たリリアが茶色の髪を靡かせながらやって来ると、目付きを変えた少年が、リリアを制止し静かに扉に近づく。

すると、大きな物音を起て扉が少年に向つて倒れ掛かる。蹴破られたのだ。更に目を鋭くする少年は、すぐさま後ろに飛び退き拳を構える。戸が大きな音を起て床に倒れ、砂塵が戸の倒れた拍子に起きた風に舞い上がる。破壊された扉の向こう側には、右足の裏をこちらに向ける男の姿が映る。少し怯えた目をするリリアは、胸の前で手を組み心配そうに少年を見据える。

拳を構える少年は、砂塵舞う中目を凝らし、男の姿を確認して驚



いた様に声を上げる。

「ゼ、ゼロ！」

「出るのが遅い。フォルト、何してた？」

「何って、ゼロこそ何してるのさ！ 大体、何でこんな時間に人家訪問してるの！」

「野暮用だ。取り合えず、休ませてくれ」

「上がるって、ちよっと！」

返事を待たず家の中に踏み込んでいくゼロは、倒れた戸を踏みつける。戸は軋み悲鳴を上げ、薄らと亀裂が走る。その戸の前に屈み込みフォルトは、啞然とし動けないでいる。そんなフォルトに、ゼロはイスに座ってから言う。

「ここに来たのは、あれを連れて来てな。暫くココで看病してくれないか？」

「あれって？」

落ち込むフォルトが、ゼロの方を見ると、ゼロは眠そうに欠伸びしながら玄関の外を指差す。何と無く、嫌な予感はしていたフォルトは、恐る恐るドアの外に目を向ける。そこには、横たわる血だらけの少年の姿が。うつ伏せに倒されている為、顔は確認できないが、その光景に驚き声を失うフォルトは、外に出てある事を確認する。フォルトの予測通り、真っ直ぐ街路の奥の闇の中までずっと続く一つの線。それは、暗いため黒く見えているが、本来は真っ赤に赤い血である事は間違いない。その証拠に、血の臭いが倒れる少年の体から漂ってくる。

鼻を軽く摘むフォルトは、家の中に戻りイスに座るゼロの方に向う。イスに座り眠そうな表情を浮かべるゼロは、リアの方に軽く笑みを見せ「今日はシチューだね」と、軽い口調で言い、それに対

しりリアは「もし宜しければ、ゼロ様もお召し上がりになりますか？」と、訪ねた。その目は少しオドオドしていて、何処か落ち着きがない。「うん。俺も頂くよ」と、笑みを浮かべてそう言うゼロに、フォルトが頬を膨らしながら怒鳴る。

「ちよつと、ゼロ！ あれは何だよ。それに、何でココまで引き摺ってきちゃうのさ！」

「あんまり、喜んでないみたいだね。結構、喜ぶと思ったのに」

「喜ぶ訳ないでしょ！ 大体、家の前まで真つ赤な血の線が続いてたら、確実に可笑しいでしょ！」

「確かに、少し可笑しいかな……。うん。美味しいよりリア。君の作る料理はいつ食べても素晴らしい」

目の前に置かれたシチューを一口口に運び、そう言うゼロにリアが軽く笑みを見せる。話を逸らされたフォルトは、「話を逸らさないですよ！」と、ゼロに文句を言うが、ゼロは聞く耳を全く持たなかった。

子供の様に頬を膨らし怒るフォルトは、リアの方に目をやる。その視線に気付いたリアがフォルトの方に顔を向ける。少し唇を尖らすフォルトは、子供の様な幼い声で言う。

「シチューは僕の方まで残しておいてよ。それから、ゼロは彼の事ちゃんと家に運んでよ。あと、ドアも直してよ」

「待て。第一席の俺にそんな事をさせるのか？」

「関係ないだろそんなの。それに、ここ壊したのゼロなんだし、彼をつれてきたのもゼロだろ？ 血を落すのって大変なんだよ。臭いは中々落ちないんだから。取り合えず、ドアと彼の事はちゃんとやってよ」

「わかった。やるよ。一眠りしたら」

「それじゃあ、遅いよ。それに、ゼロは一度寝たら、次いつ起きる

「かわかないもん」

眠そうに欠伸をするゼロは、不貞腐れた様にイスから立ち上がりフォルトの肩を叩く。そして、首を縦に二回振りそのまま外に出る。横たわる少年の体を抱え家の中へと戻ってきたゼロ。その腕に抱えられた少年の顔を見て、フォルトは驚きの声を上げる。

「ちょっと！ ゼロ、彼は！」

「だから、言つたる？ お前が喜ぶつて」

「喜ぶじゃなくて、驚くだよ！ リリア！」

「はい」

床に横に寝かせた少年の下に駆け寄るリリアは、右手を少年の胸の前に翳す。薄らと光を放ち始めるリリアの右手。その光が、少年の血に染まった幼い顔を微かに映し出す。まだ、子供の様に幼く可愛らしい顔は、血がこびり付き所々変色し暗紅色に変わりつつある。服は胸の位置で何かに貫かれた様に穴が開き、血が未だに流れ出る。サラサラな茶色の髪も、所々血が付き臙脂に染まる。心配そうな表情のフォルトとリリアに対し、平然とした様子のゼロは、壊れた戸を手に取り「よいしょっ」と、小さく咳き玄関へと戻す。扉を戻しゼロは、心配そうに少年を見据えるフォルトとリリアに言う。

「そんなに、心配する事はない。なんたつて、彼は」

そう言い掛けたゼロは、フォルトの顔を見て言うのを止める。フォルトは立ち上がりゼロの前に来ると、怒ったような目で真っ直ぐゼロを睨む。ムスツとした表情を見せるゼロは、フォルトの目を真っ直ぐ見据え言う。

「言っておく。仮にも俺は、十二魔獣の第一席だ。幼馴染とて歯向

かえば、容赦なくねじ伏せる」

「クツ！ 分かってるよ！ でも、何でこんな事すんだよ！」

フォルトはそう叫び扉を力強く開けて外に飛び出す。勢いよく開かれた扉は、その力に耐えられず金具の折れる音を響かせ、軋みながら床に倒れた。それを見て、呆れた様にため息を吐くゼロは真剣な眼差しで呟く。

「辛いかも知れないけど、これも運命を変える為……。奴を引き摺りだす為の」

ゼロはそう言い、静かに戸をまた直した。

## 第17回 レイストビル 南方入口での再会

一ヶ月が過ぎ、ワノール・ウインス・ルナの三人は、グラスター王国首都レイストビル前まで辿り着いていた。中心に大きなお城が見え、その周りに沢山の小さなビルや大きなお店、タワーやら様々な建物が建ち並ぶ。道も広く人々の活気が溢れる。そんな中心部を囲う様に、南方と北方には広い畑が連なり、兵士達が農家の人々と一緒に汗を流している。西方には大きな堀に川から水を引き作った池があり、そこでは人口の魚介類を飼育している。東方では牧場をやっけていて、牛・馬・豚・鳥など様々な動物が飼育されていた。そして、それらを囲う様に少し低めの鉄の柵が作られ、東西南北各方向の入り口に守備隊の砦がそびえていた。

丁度、ワノール達は南方の入り口におり、何故か守備兵に止められているのだ。アルバーで黒き十字架に所属していたワノールは、冷静に守備兵達と話をしており、ウインスとルナは少し離れた位置で様子を窺う。

欠伸をするウインスは、潤んだ目でチラッと町の方に目をやる。畑がずつと連なり、遠くの方で小さく見える様々な建物。遠くから見ただけではよく分からないが、中央にそびえるお城だけはよく分かった。デイバスターと違い、高層ビルが無いからだろう、城の頭が他の建物の遙か上へ突き出ているのだ。

「何か、町が小さく感じる」

「そりゃ、そうさ。ここから、何十キロ先だと思ってるんだ？」

「ンツ？」

突然の答えに、首を傾げたウインスは、ふと振り返る。そこには、身軽な服装の兵士が立っており、笑顔でウインスの方を見る。歳は20代前半程に見える顔つきに、鍛え上げられた肉体。流石にこの

首都を守る兵士だけあると、ウインスは思う。

一方、兵士もウインスの服装に少し不思議そうな表情を浮かべる。まるで、風牙族の民族衣装を初めて見たといった感じで、物珍しそうにしている。その視線に困惑するウインスは、嫌そうな顔をしながら呟く。

「何だよ。そんなに珍しいかよ」

「そうだね。こんな変な衣服を着てる人は初めてだ」

この言葉に、ウインスはカチンと来る。額に青筋を立て米神をピクピクさせるウインスは、拳を微かに奮わせ奥歯を噛み締めた。正直、村の事が馬鹿にされた様で腹が立つウインスだが、ここで騒ぎを起こす訳にもと、考え怒りを必死で堪えた。だが、そのウインスに追い討ちを掛ける様に兵士は言う。

「しかし、そんな服装でよくここまでこれたな」

怒りを堪えていたウインスも、流石にこの言葉にぶち切れ兵士に掴みかかる。だが、兵士は軽い身のこなしで、ウインスから遠退き大声で笑う。

「ふざけんな！ これは、村に伝わる衣装なんだよ！ 馬鹿にするなよ！」

怒りをぶちまける様にそう叫ぶウインス。その声に気付くワノールは振り返りウインスの方に目を向ける。話をしていた兵士達もすぐさまウインスの方に目をやり、大声で叫ぶ。

「貴様！ 何をしている！」

「ここで、暴れれば町への入る事は許さんぞ！」

「ウインス！」

怒った様に声を鋭く発するワノールに、ウインスは下唇を噛み締め俯く。一部始終を見ていたルナは、静かにウインスのもとに歩み寄り何かをボソツと伝える。軽く頷くウインスは、深呼吸を三回行い目を閉じ風を感じる。微かにだが流れる風が、ウインスの頬に優しく触れて滑らかに過ぎてゆく。落ち着きを取り戻したウインスを見て、ワノールは兵士達に言う。

「すまなかつた。もう大丈夫だ。それより」

兵士二人はワノールとの話し合いに戻る。一方、もう一人の兵士は、ウインスを馬鹿にして目で見据え、口元に薄らと笑みを浮かべる。相変わらず、無表情のルナは静かに空を見上げ、すぐに地に視線を落す。小さく微かにため息を漏らし、肩を落すルナに気付く者はいない。

風を感じるウインスは急に風の乱れを察知する。何か、風の流れを断っているのだ。それが、何か分からないが、ウインスは目を見開き腰の刀の柄に右手を添える。いつでも抜けるよう、左手が鞘の上の方を握り、親指は鐔に軽く触れる。そして、身を屈めて更に神経を集中した。

このウインスの行動に、気付いた兵士達は大声で叫び忠告する。

「何をしている！ さっき、言った言葉が分からなかったのか！」  
「柄から手を放せ！」

そんな言葉耳に入らぬ程集中しているウインスは、空から何か落ちてくるのが分かり素早く左手の親指で鐔を弾き、右手で刀を鞘から抜きそのまま上に切り上げる。

「ば、僕だよ！ ウィンス君！」

突如、空から響く声。その声はまさしくカインの声で、少し驚いた様子の声だった。そのカインの声で、ピタリと動きを止めたウィンスは、顔を上げ空を見上げる。もちろん、兵士達も空から突如聞えた声に驚いた様子で空を見上げる。その瞬間、轟音が鳴り響き、地面が大きく揺らぐ。その揺れでルナがバランスを崩し倒れ、ウィンスも右膝を地に着いた。その空から降ってきたモノは、大きく地面を砕き円形に陥没する。土埃がそれを覆い、黒い影だけが皆の視界に入る。真っ直ぐ左目で黒い影を見据えるワノールは、黒苑の柄に手を掛けた。その時、土埃の中から「ゲホゲホ」と、むせ返りながら金髪の髪を土まみれにしたカインが、フラフラと現れた。

「うゝつ。何て、乱暴な……」

「カイン！ 心配したぞ！ 無事でよかった」

涙目になるウィンスは、刀を持ったままカインに抱きつこうとする。そんなウィンスの体を右手で制止するカインは、笑顔でルナとワノールの方を見る。微かにだが、ワノールも安心した様に笑みを浮かべ、「遅かったな」と、静かに呟く。それに対し、カインは笑顔で「色々ありましたから」と、答えた。

カイン達が、感動の再会を果たす中、土煙の中から巨体を揺らしながらノーリンが姿を現す。そのノーリンの姿を見上げるウィンスは、驚きを隠せない様でガチガチを歯を震わせながら叫ぶ。

「ば、ば、ばけものオオオオツ！」

その声は真っ直ぐ中心部へと伸びる道突き進み、城の中を突き抜けて、そのまま北方の入り口を出て行った。その声に耳を塞ぐルナ・カイン・ワノールの三人に対し、兵士達は耳を塞いでいなかった。



たため、頭の奥でその声がこだましていた。刀を構え真っ直ぐノーリンを見据えるウインズに、呆れた様な声でノーリンはぼやく。

「誰が化物じゃ。人ん事化物言いよって、それに、人に切っ先を向けんな」

ウインズの刀の刃の上の方を掴み力強く引くと、ウインズの体が前方に傾き、思わず柄から手を放す。地面に手を着くウインズは、ノーリンの顔を見上げる。すると、ノーリンがマジマジと刀を観察しているのが分かった。

「こら！ 俺の刀を返せ！」

「うん。刃の艶も良い。それに、刃毀れ一つない」

そう言いながら、軽く刃の平を拳で小突く。清らかな音がこだまするかの様に、反響し美しく音色を奏でる。その音は、微かでノーリンにしか聞えないが、とても安らかな音だった。

「ふむ。この、耳に残る清らかな音色。こんな刀は初めてだな…」

「だから、返せって！ 俺のだって言ってるだろ！」

ノーリンの右足のスネをウインズは思いつきり足蹴にする。「イテッ！」と、叫ぶノーリンは屈み込み刀を地面に置いて両手でスネを押さえた。刀を取り返したウインズは、それを素早く鞘にしまい、ムスツとした表情でノーリンを睨む。少し呆れた様に笑みを浮かべるカインは、ふと辺りを見回しフォンの居ない事を疑問に思う。

「ねえ、フォンは？ そこらへん散歩でもしてるの？」

その言葉に、ルナが微かに哀感な表情を浮かべ、ワノールが眉間にシワを寄せる。訝しげに首を傾げるカインに、ウインスが答えようとしたその時、門の方から一人の男の声が響く。

「君達が、ミーファさんをお探しの方々ですね？」

「！」

その言葉にハツとするワノール、カインは腰の剣の柄に手をかけ門の方に体を向けた。

## 第18回 己の剣は何のために

レイストビル南方入り口。

門の方に体を向けるカインとワノールは、腰の剣をいつでも抜ける様にする。門の傍には、オレンジブラウンの髪を微かに揺らす男が立っていた。他の兵士とは違い、威厳のある感じの雰囲気を感じさせ、今まで話していた兵士達も何故か整列している。男と向い合うカインとワノールは、息を呑み男のグリーンの瞳を真っ直ぐに見据える。少々気品のある面持ちで、目付きなどとても力強い。

カインとワノールの二人が剣の柄に手を添えている事に気付いた兵士達は、槍を二人の方に向けて怒声を響かせる。

「貴様等！ 柄から手を放せ！」

「さもなくては！」

「おい。止めろ！ 彼等は客人だ」

男の一声で兵士達は槍を退く。ワノールは少し顔を顰め、男を観察する様に見据える。そんなワノールに、男が軽く笑みを見せ、静かに言葉を継げる。

「私はレイストレガイア。あなた方の事はミーファさんから聞いております」

「レガイア……。お前、王族か」

「エエ。一応、王族です。それが、どうかいたしましたか？ ワノール殿」

笑みを見せながらそう言うレイストに、ワノールは何処かイラツと来る。それは、アルバー王国の王族を思い出すからだ。力も無いのに、人を馬鹿にした様に命令し、自分を守れない奴ばかりだっ

たから。この時、フレリストも所詮口だけの奴だと、ワノールは感じ微かに笑みを浮かべて左目で鋭く睨む。

殺気を帯びたワノールの視線に、フレリストが気付かない訳も無くニコヤカに笑みを浮かべる。だが、その笑みの裏では闘志を燃やしており、奥歯を噛み締めているのか、少しコメカミが震えていた。この二人の睨み合いを止め様と、カインが笑顔で間に入り、

「ワノールさん。ミーファさんはフレリストさん達の所にいるようですし、早速会いに行きましょうよ！」

と、明るく言う。だが、ワノールはカインの言葉を訊かず、棘のある声でフレリストに言い放った。

「王族のお前と是非手合わせ願いたい」

その言葉に反応したのは回りに居た兵士達だった。すぐさま、フレリストの周りに集まり、「ダメです！」だの、「ここでの争いはいけません」など、様々な言葉が飛び交う。もちろん、そんな事分かってるフレリストは、「分かってるよ」と、笑顔で言っただけで兵士達を安心させ下からせると、目付きを替えて鋭い声で「軽く手合わせするだけだから」と、言う。愕然とする兵士達は、急に顔色を変え避難勧告を発令させた。何と無く危険な感じを察知したノーリンは、カインに向かって叫ぶ。

「カイン！ そっから離れとけ！ 巻き込まれんぞ！」

「わ、わかりました。ルナも、コッチへ！」

「あつ、はい……」

ルナはカインに手を引かれノーリンとウインスの居る方へと移動した。睨み合う二人の緊迫した中、吹き抜ける風が砂塵を舞い上げ

る。舞い上げられた砂塵は、都合よく二人の間を流れた。舞い上がる砂塵が消えたその時、ワノールは腰の黒苑を抜き走り出し、フレイストは背中に背負った大剣を片手で抜き走り出す。漆黒の刃を一閃させながら真横に振りぬくワノール。それに合わせる様に、フレイストは鋭く輝く鱗模様の刃を振りぬく。刃と刃が重々しくも澄んだ音を奏で、火花を散らせながら互いの刃を弾き返す。

土煙を舞い上がらせながら、足は地面を滑り、二人の距離が離れあう。黒苑を低く構えるワノールに対し、刃を高めに構えるフレイスト。足元から微かに漂う土煙は、すぐに消えた。

「何か、凄く緊迫してますね」

カインが心配そうにワノールの事を見ながらそう言う。つまらなそうに二人を見据えるノーリンは、欠伸をした。緊張感のないノーリンを、軽く睨んだウインスはすぐにワノールとフレイストの方に目をやる。何故か、胸が高まるウインスは、二人の剣の構え方を食い入るように見据える。そんなウインスをチラッとみたノーリンは静かに口を開く。

「止めんでいいんか？」

「俺等にはどうせ止められない。それよりも、あの太刀の受け合いを見ていたい。俺、もっと強くなりたい」

「ふん。それで、お前歳は何ぼじゃ？」

「五月蠅いな。十四だよ。少し黙ってるよ」

「そうか……」

静かにそう言うと、急に立ち上がる。それに気付くカインは、ノーリンの顔を見上げた。静かに上空へと上がっていくノーリンの体を真っ直ぐ見ながら、カインは何か嫌な予感がしていた。

睨み合い続くノーリンとフレイストは勢いよく同時に地を蹴り、

互いに真つ直ぐ突つ込む。そして、二人が刃を振り抜こうとしたその刹那、空から何かか二人の間に勢いよく落下した。轟音が響き爆風が吹き荒れる。至近距離でその爆風を受けたワノールとフレイストは、踏み止まる事が出来ず後方に吹き飛ばされた。舞い上がる土埃と円形に砕けた地面。そして、中心に浮ぶ黒い影は、大きくすぐにノーリンだとわかった。

「どういっつもりだ！ 邪魔をするな！」

睨みを利かせながらそう叫ぶワノール。だが、そんなワノールに問い詰める様にノーリンが言い放つ。

「この争いに何の意味があるうか。ウ又等は、何故に、十四と幼き者の前で剣を交える。その剣は人を殺めるモノなのか？ 否、それは、人を守るモノ也。今のウ又等は、魔獣と同類。己の愚かさを感じ、考える。その剣の正しき意味を」

ノーリンの言葉にワノールとフレイストは剣をおさめた。眉間にシワを寄せるワノールは、暫しノーリンを睨んでいたが、背を向けカイン達の方へ歩んでゆく。フレイストは俯き歯を食い縛る。自分が一番心得ている事を忘れてしまふなんてと、自分自身に怒りを覚えた。

カイン達のもとに戻ったワノールは、「すまん」と、小さな声で謝った。カインにもウインスにもそれは微かにしか聞えず、少々首を傾げる。大人しくしていたルナは、立ち上がりフレイストの前に歩み出る。

「ミーファさんは無事ですか？」

「エエ……ぶ……じ……！」

ゆつくり顔を上げ、その問いに答え様としたフレイストは、ルナの顔を見た瞬間、顔を真っ赤にし、背を向けた。表情を変えぬままのルナは、真っ直ぐフレイストの方を見たまま少し首を傾げる。慌て戸惑うフレイストは、オドオドした口調で言う。

「い、いい今は、ししし城の方で、あな、あなたがたの、事をお待ちに」

急にオドオドした口調に変わったフレイストを見据えるカイン・ウインスの二人は、顔を見合わせ首を傾げる。鋭い目付きのままのワノールは、腕組みをし眉間にシワを寄せ鋭い目付きでノーリンを見据える。いつもの細目が変わっているノーリンは、明るく笑みを浮かべながら言う。

「さあて、ワシの案内はここまでじゃ。それじゃあ、ワシは一足先に入国させて貰おうかねえ」

「えっ、ノーリンさん、一緒に着てくれるんじゃない!」

門をくぐろうとするノーリンに驚いた様に声を掛けるカイン。それに対し、ノーリンは呆れた様なため息を吐き振り返り言い放つ。

「ワシは、怪我をしとるお前を仲間の所に届ける。それだけの間柄じゃ。仲間に合えたんじゃない。ワシは、ワシの本業に戻るんじゃない」

「本業って、用心棒ですか?」

「当たり前じゃろ! それ以外にワシが何か仕事しとったか?」

「いえ……。それは……」

「んじゃないま、ワシは暫くレイストビルに居つくとすつかな」

大笑いしながらノーリンは手を振り門をくぐって行った。暫し立ち尽くすカインの右肩にぽんと手を乗せるウインスは、目を閉じ頷

きながら言う。

「落ち込むなって」

「別に落ち込んでなんかないよ！」

ウインスの手を払い、そう言うカインは頬を膨らす。少しムスツとした表情を見せるウインスは、「何だよ。元気付けようと思ったのに」と、小さな声でぼやいた。カインだって、そんな事は分かっていた。でも、何故が強がってしまったのだ。なんだか、弱さを見せるのがいやだった。



## 第19回 予測

のどかな畑が連なる一本道を真つ直ぐに進む一行。まだ遠くの方に見える建物を目指し進んでいく。所々で、畑で働く農家の人々に声を掛けられ、収穫した作物をフレイストに見せながら楽しげに微笑む。フレイストも、作物の出来を見ながら笑顔で受け答えをしており、そんなやり取りにこの国の豊かさを感じる。

そんなのどかな畑道を過ぎ、ようやく一行は都会らしい建物の並ぶ街道へと入る。盛んに人々の声が飛び交い、多くの人々が足を止める。子供達も楽しげに笑いあい、主婦のおば様方も楽しげに世間話に華を咲かせる。そんな町並みをキョロキョロと見回すウインスは、何処か落ち着きが無く目を輝かせている。やはり、自分の住む村に無い建物ばかりで珍しいのだろう。

「すげえー。ここ、本当にさっきまでの道かよ」

興奮しながらそう言うウインスは、無数に建ち並ぶ店を見ながら皆より少し後ろを歩む。そんなウインスに落ち着いた様子の声で「迷子になるなよ」と、ワノールが言う。その言葉に、不愉快な表情を浮かべるウインスは、「子供扱いするな」と、言って腕組みをして皆に追い付く。だが、すぐに目の色を変え、色んな店へと目を移す。あつちへフラフラ、こつちへフラフラと、歩くウインスにワノールは振り返り呆れながらため息を吐く。

確かに少し珍しい露店が並ぶため、目を奪われるのも分からないでもない。『福福』と書かれた看板や、『魚魚』と書かれた看板。看板だけでは分からないモノばかりだ。『福福』は衣服店らしく、『魚魚』とは料理店らしい。殆ど、店の中に入らないと分からないものばかりだった。

先頭を歩くフレイストの後ろを歩むカインは、ルナと並んで歩い

ていた。久し振りにルナに会え、嬉しくてカインは、何故か自然と笑みがこぼれる。一方のルナはいつもと変わらず、無表情で少し俯きながら歩いている。物静かなルナの横顔をチラチラと窺うカインは、ふと思い出す。

「そう言えば、さっき聞けなかったけど、フォンはどこに？ 一緒にじゃなかったの？」

「フォンさんは」

「その話に関して、ミーファさんから多少ながら耳にいたしました。宜しければ、私の方からお話しますが？」

「いえ。私の方から、話します」

「そ、そうですか……」

少し緊張気味のフレイストは、後ろを気にしながらそう言う。いつもよりも覇気の無いルナの声に、何と無くカインは嫌な予感を感じていた。そして、あの時感じた嫌な感じは、多分フォンに何か関係しているんじゃないかと。不安そうな表情を浮かべるカインに、静かにルナは口を開く。

「カインさんが、魔獣に連れて行かれた日。フォンさんはカインさんを探すと、ワノールさんと争いになりました。何処か、いつもと違う雰囲気を漂わすフォンさんは、ワノールさんを圧倒し止めを刺そうとした所をウインスさんに止められ気を失ったんです。この時から、既にフォンさんの体には異変が起きてたのかも知れませんが」

「その時までには、フォンは居たんだ。それじゃあ、その後フォンに何かあったの？」

「はい。次の日の朝、あの森に濃い霧が出てました」

「濃い霧？ ま、まさか、あの時間えた遠吠えって！」

思い出した。ノーリンと出会ったあの村の朝、濃い霧が出ていた

事を。そして、聞いた背筋も凍るかのあの遠吠えを。驚き戸惑うカインがルナを見ると、少々首を縦に振り頷く。信じられたといった表情を浮かべるカインは、「それじゃあ」と小さく呟き、それに對し、首を横に振るルナ。それが、何を意味するのか分かったカインは、俯き黙り込んだ。二人の話しを窺うフレイストは、急に話が聞えなくなり不思議そうに首を傾げる。

「それから、先の話しはしないのですか？」

「それから先何てない。私達がフォンさんの姿を最後に見たのはあの霧の中の黒い影でしたから」

暗く塞ぎこんだ声のルナに、聊か不思議そうな表情を見せるフレイストは、ミーファの話を思い出し言葉を続ける。

「でも、私がミーファさんからお聞きした話しには続きがありませんたよ」

「　　！　　そうか！　　ミーファさんは時見族だ！　　きっと、未来を見たんですよ！」

突如、ミーファの思い出したカインが叫び、隣に居るルナの両手を握る。突然の事に少し驚くルナに對し、物凄く嬉しそうに笑顔を見せるカインは、カ一杯手を上下に振った。そんなカインの姿を目にしたワノールは、眼帯から薄らと見える深い傷痕を右手の人差し指でなぞり、目付きを鋭くする。

「あまり期待はしない方が良い。全てが全て良い方に行くとは限らんからな」

「な、なんて事言つんですか！　ワノールさん！　僕だって怒りますよ」

素早く振り返ったカインがワノールを真つ直ぐ見据える。そのカインの目を真つ直ぐに睨むワノールは、少々棘のある声を飛ばす。

「カイン。お前は考え方が少し甘い。常に悪い状況へと考えておいて、最善の答えを見出せ。いつか、その考え方が命取りになるぞ」  
「ワノールさんは、マイナス思考過ぎます！ 常に悪い状況に考えて、楽しいですか？ 少し位明るく考えましょうよ！」

妙にワノールに食って掛かるカイン。多分、これほどまでにカインがワノールに言い返したのは初めてだ。そのせいか、少しワノールは圧倒された。だが、少し嬉しかった。今までは、自分に歯向かおうともしなかったカインが、このように反抗してきた事が。

不貞腐れたような表情を浮かべるカインは、ルナの手を放し、腕組みをしてブツブツと何かを小さな声でぼやいていた。そんな二人の会話を聞いていたフレイストは「ハハハハッ」と笑い声を上げる。

「仲が宜しい様で。流石は、元・黒き十字架の隊長と副隊長ですね」  
「フツ。思い出したくも無い記憶だな」

「向うの国王に色々と顎で使われていた様ですね」  
「黙れ。俺は、王族は嫌いだ。あまり話しかけるな」  
「そうですか。でも、全ての王が皆アルバー王国と同じだと思わないでください。正直、腹が立ちます。父や東のフォースト王国の王も素晴らしいお方です」

その言葉をワノールは鼻で笑い黙り込む。複雑そうな表情を浮かべるフレイストは、小さくため息を零す。暫し間が空き、露店を開く人々の声が響く。時折、フレイストに声を掛ける民なんかも居るが、それをフレイストは優しく断り城へと向ってゆく。長い間続く沈黙。その沈黙をルナが破った。

「先程の話しの続きを聞かせて欲しいのですが？」

「ああ、フォン殿の事ですか。いいですよ。私がミーファさんからお聞きした全てを話しましょう」

歩みながらそう言うフレイストは、後ろを歩くカインとルナを気にしつつ話し始めた。食い入る様にその話に耳を傾けるカイン。それに対し、全く興味の無さそうな表情を浮かべるワノール。相変わらずキョロキョロするウインスは問題外として、ルナは複雑そうな表情だった。もしかすると、最悪な未来を見たかもしれない、不安が過ぎる。

「フォン殿は、三人の前から姿を消した後、崖から落ちたそうです。ここからは、ミーファさんも少々曖昧らしいのですが、崖の下で何者かに出会い話をした様です。そして、二人で森の中で消えた様です」

「二人で森に消えた？ それじゃあ、フォンはその何者かに自分から着いて行ったんですか？」

「今の話を訊く限りでは、そう考えるのが妥当だろ？」

「えっ、でも、でも、その何者かって？」

「そこまでは私も……。ただ、ミーファさんの言う事では、『私はあくまで未来を予知しただけ』との事です」

複雑そうに腕を組むワノールは、ミーファが言ったと言う『あくまで未来を予知しただけ』と、言う所に何か違和感を感じる。まるで、この予測は正しくないと、言っている様に聞えた。考え込むワノールに対し、安心したような表情を浮かべるカインは、ルナの方を見て明るく言い放つ。

「よかった。フォンは無事みたいだね。なんだか安心した」

「でも、何処にいるのか……」

「大丈夫！ きつとフォンはここに来るよ。僕達がここに居るって分かってるんだから」

「そうだと、いいがな」

相変わらずの口振りで、ワノールがそう言うと、カインが鋭く睨み付ける。だが、ワノールはそれを無視した。ムツとするカインだが、ワノールの言う事も少し分かった。あくまで、ミーファが予測した未来。本当に、未来がこの様に進んでいるのかなど、誰にも分からない。そう考えると、心配になった。今、フォンが何処にいて、ちゃんと無事なんだろうか。

## 第19回 予測（後書き）

更新が遅れ、申し訳ありません。暫し頭が働かず、考えも纏まらなかつたので、ゆっくり休んでたんですが、ようやくポチポチ頭が働き始めた所です。

いつもと変わらぬ表現といつもと変わらぬ文章力ですが、もっといい作品になるよう努力したいです。

## 第20回 フレイストの年齢

街道をずっと真つ直ぐ歩き続け、ようやく城の前まで辿り着いた。大きくそびえるお城は、町全てを見渡す事が出来るほど高い。幅の広い階段を上がり、軽く入口前の兵士に頭を下げ城へ入ってゆく。大きく煌く天井、端に分かれた階段は大きく弧を描き中央で交わり一本の幅の広い階段へとなり二階へ続く。その端の階段のすぐ手前には奥に続く廊下が伸び、扉が幾つも見える。エプロンに身を包む女性達が、そんな廊下を足音を立てず忙しそうに歩き回り、次々と部屋の掃除をしてゆく。

時折兵士達も見掛けるが、掃除の邪魔にならぬ様に足早に廊下を通り過ぎてゆく。アルバー王国とはまるで違う、この光景にワノールは暫し呆気にとられる。そんなワノールに目をやるフレイストは微かに笑みを浮かべ言う。

「どうです？ アルバー王国とは違うでしょ？」

「確かにな。アルバーとは違う様だな」

「それでは、二階へ行きましょうか。ミーファさんもお部屋で待ちくたびれてるでしょうし」

「そうですね。私も、ミーファには訊きたいことがありますので、できれば早くしていただきたいです」

「す、すいません。そうともしらず、長話を」

「いえ。お気になさらず」

冷静にそう言うルナに、フレイストは焦りながら階段を上がっていく。それに、ルナ、カイン、ワノールと続き、最後尾はやはりウインスになった。こんなに広々としていてキレイな室内など見た事の無いウインスにとっては、凄く珍しく目をギラギラに輝かす。時折、階段に躓き転びそうになるが、そんなウインスをもつ誰も相手



にはしていなかった。相手にするだけ無駄だと分かっているから。二階に上がると、中央が筒抜けになり、一階の広場を見渡す事出来る。そこから、更に奥に進み三階へと進んだ。少し広々とした廊下右側に二つ程部屋があり、左側は一つ部屋がある。廊下はまだ続き、テラスへと出る事が出来る。

「こちらです」

フレイストは、素晴らしい右側の奥の部屋の扉を開く。すると、鋭いミーファの声が響く。

「おっそーい！ 何してたのよ！ 今まで！」

元気一杯のミーファの声に、暫し啞然とする一行。そんな中で、最初に口を開いたのはルナだった。先に部屋に入り、ミーファを真っ直ぐ見据えて落ち着いた様子で。

「あなたを探してたのです」

ルナにそう言われ、「ウツ！」と、小さな声をあげたミーファは、長く伸ばした空色の髪を大きく揺らしながらルナへ背を向ける。何故か、顔を合わせ辛かった。何故かはミーファ自身よく分からないが、少し複雑な心境だったのだ。初めて、ミーファを見たウィンスは、小さな声でカインに聞く。

「あれが、フォンとティルが探してた人？」

「うん。そうだよ」

「それで、あの人はどっちが好きなんだ？」

「エッ？ 急にどうしたの？」

「だって、わざわざ探すって事は、フォンとティルのどちらかが、

あの人の事が好きなんだろう？」

「いや。もしかすると、フォンとティル。二人ともミーファが好きだったのかも知れんぞ」

「ちよ、ちよっと、ワノールさんまで何いつてるんですか！ そんな事……」

少し考えるカイン。確かにミーファが時見族で、探すのは分かるが、どうして二人はあんなに一生懸命だったのだろうか。もしかすると、ウインスやワノールの言ってる事が正しいのではないかと、脳裏を過ぎったカインだったが、すぐ頭を振りそんな考えを振り払い言い返す。

「そ、そんな事あるわけ無いじゃないですか！ 純粹に仲間を助けたいって！」

「いゝや。所詮、男と女だ。何が間にあるかわかんないぞ」

「確かに。それに、俺やカインと会う前からの間柄だ。その間に何かあったのかもしれない」

「何言ってるんですか！ そんな筈無いですよ！」

「まあ、子供のカインにはわからないよ」

「ウインス君に言われたくないよ！」

顔を真っ赤にしながらカインは必死に二人にそう反論する。まるで、カインをおちよくるのを楽しんでいる様に、ワノールとウインスは言葉を発していった。ワイワイと部屋の入口で騒ぐカイン達三人に対し、少し深刻そうな雰囲気をかもちだすルナとミーファ。空色の髪の間から、ルナの顔を覗くミーファは、静かに口を開く。

「怒ってる？」

「どうして、そう思うんです」

「なんだか、色々迷惑掛けちゃったみたいだし……」

「確かに、少々迷惑でした。でも、安心しました。ミーファさんが無事で」

薄らルナが涙を滲ませた。そんなルナの表情を見たのは、随分と昔だったため、ミーファは少し懐かしく感じた。軽く肩を抱くミーファは、「ごめん」とルナにしか聞えない声で呟く。暫しミーファの胸に顔を埋め、涙を流すルナを見たフレイストは、静かに部屋の扉を閉めた。部屋の中には、ルナのすすり泣きだけが聞える。肩を抱くミーファは、優しく頭を撫でながらルナのことを暖かく抱きしめた。

フレイストは、廊下に残ったカイン、ワノール、ウインスの三人を王様の所へと連れてゆく。二階に下り何度か廊下の角を曲がり、また階段を上がり大きな広場へと出る。赤絨毯が真っ直ぐ伸び、少し階段が上がった所に玉座があつた。大きく開かれた窓から入る風が、部屋中に流れ込み、静かに出てゆく。複数の兵士達が並び、壁には肖像が数枚飾られており、その下には『十人の英雄』と書かれている。あと、鎧や盾、剣、槍と様々な武器や防具も飾られており、何かを祭っている様だつた。それらを、不思議そうな顔付きで見据えるワノールは、前を歩くフレイストの方に顔を向ける。

「おい。あの十人の英雄とは誰の事だ？ 様々な歴史書を読んだ事があるが、十人の英雄など聞いた事もないぞ」

「あれは、私の父。国王が若き頃、共に力を合わせて戦った者だそうです」

「お前の父が？ それじゃあ、十何年前の話しか？」

「父はもう六十二歳ですから……」

考え込むフレイストに、少々訝しげな表情を浮かべたワノールは、腕組みをして当然の様に答える。

「と、言う事は、四十年位前の話しになるんだな？」

「うん。確か、私と同じ歳位の頃だったと思うんで、約五百年前ですね」

「じ、じご五百年！ 嘘、フレイストさんのお父さんって、五百年も生きてるんですか？ えっ、えっ、でも、さっき、六十二歳って……」

フレイストの言葉に戸惑い慌てるカインは、何がなんだか分からなくなっていた。ワノールも多少驚いた様だったが、すぐにその意味を理解し「なるほど」と、小さく呟き頷いた。もちろん、ウインズがこの話を聞いている訳も無く反応は無い。やたらにアチコチに歩き回るカインに、呆れた表情を見せるワノールはため息を吐きフレイストに目をやる。ワノールの視線に気付いたフレイストが、ワノールの方に顔を向ける。すると、ワノールが、

「カインに、お前ら種族の事を教えてやれ」

と、疲れ切った声で言う。

軽く頷いたフレイストは、歩き回るカインの右肩を掴み微笑みながら声を掛ける。

「驚くのも、無理は無いよね。私達龍臨族は十二年に一つしか歳を取らないんです。ですので、人間の歳で言うと、私は二五二歳で、父は七四四歳ですね。龍臨族の寿命は、七十歳位なんで、人間の歳では八四〇年は生きる事になりますね」

「は、は、ハッヒャクヨンシュウネン……」

驚きのあまり呂律も回らないカインは、目を回しフラフラと床に倒れこむ。あまりに情けないカインの姿に、右手を額に当て啞然としながらワノールはため息を吐く。一方、フレイストは急に倒れた

カインに驚き、大慌てで周りの兵士を呼び集める。どうすればいいのか、分からずあたふたするフレイストの姿に、ワノールは落ち着いた様に腕組みをして言う。

「慌てなくてもすぐ目を覚ます。コイツはいつもリアクションが大きすぎる」

「確かに少し驚きすぎだったかもしれませんが、心配じゃないんですか？」

「いや。心配するだけ疲れるだけだ。取り合えず、見てろ。三分くらいで目を覚ます」

「はあー……」

少し疑うような目でワノールを見つめるフレイストだったが、ワノールの言った通り三分後にカインは目を覚まし、驚きの声を上げた。それに対し、「何ですか？」と、軽い口調でカインが訊くと、「なんでもない」と、ワノールが少し棘のある声で答えた。

## 第21回 国王 カーブン

玉座の前に佇む老人。顔付きは少々シワが目立ち。目は優しく暖かい。頭は既に白髪だらけで、顎から伸びる髭も既に白くなっている。体はまだ丈夫そうで堂々と立ち尽くし階段の下に控えるフレイスト達を見下ろす。顔を伏せる四人の姿を見据える老人は、優しい声で笑うと大らかな笑みを浮かべ、玉座に座る。何故か嬉しそうな表情を見せる老人の顔を、顔を伏せながらチラリと窺うワノール、カイン、ウインスの三人は、微かに首を傾げる。そんな三人の行動に気付いた老人は優しく言う。

「顔を上げてもよいぞ。ワシはただの古い耄れじゃ。そう畏まらんでもよいわ」

そう言う老人に、フレイストが顔を上げ立ち上がり力強い言葉遣いで言う。

「何を仰るのですか！ カーブン様！」

「フレイスト。今は、国王としてここに居る訳じゃない。ワシは一人の古い耄れとしてここに居るのじゃ。まあ、皆も硬くならんて良い」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおう」

「そうですね。僕もあんまり緊迫したのっていやなんで」

ワノールとカインは顔を上げてそう言う。のんびりと伸びをするカインは、頭を伏せたままのウインスを見て、不思議に思う。いつもなら、一番先に顔を上げそうだったからだ。暫くたっても全く動こうとしない、ウインスの事を見据えていたワノールはあることに築き、啞然とした表情を浮かべる。そして、ウインスの体を軽く蹴

飛ばすと、力なくウインスの体が横転する。

「のわーっ！ うい、うい、ウインス君！ だ、ただ」

「あんまり緊張して気を失ったんだろ。暫くしたら意識を取り戻す  
な」

「ど、どどど、どうしよう、どうしよう！」

まるつきしワノールの言葉を訊かず、大慌てで駆けずりまわるカイン。ガツクリとうな垂れるワノールは、『国王の前で何をしてるんだ』と、思いながらため息を吐いた。フレイストも、そんな光景に呆れ言葉を失う。こんな無礼な連中、すぐに追い出したいと思っただが、そこは堪えた。国王であるカーブンは、のん気に笑い何か楽しそうだ。ワノールもフレイストもそんなカーブンの様子に気付く訳も無くただ呆れるだけだった。

それから、暫くしてウインスが目を覚まし体がズキズキと痛むのに気付く。「イツ」と、小さく呟き表情を引き攣らせるウインスにカインが飛びつき「よかった」と、言う。そんなカインに丁度痛む所を強くつかまれ、痛み歯を食い縛るが、更に強く握られ痛み耐えられず、思わず声を出す。

「はぐっ！」

「良かったよ。本当。怪我したかと思ったよ」

「い、いた、いた」

「ンツ？ 板がどうかした？」

「いったーい！ ちょ、ちょ、ちょ、手を放せ！ 痛いだろ！」

素早くカインの手を払い除けたウインスは、カインから間合いを取り息を荒げる。よっぽど痛かったのか、少し表情が怖い。そんなウインスの表情を見て、少し悲しげな表情を浮かべるカインは、「ごめん」と、呟き顔を俯ける。シヨックだったのだらう。心配した

だけなのに、あんな風に手を払い除けられたから。そんなカインの気持ちを感じたのか、ウインスが言う。

「ごめん。何か、体が痛くて……」

「それは、俺が蹴ったからだ」

「なっ！ てめえ！ ふざけんなよ！」

「そうだ！ 元はと言えば、ワノールさんが悪いんですよ！」

「フツ、あんな所で気を失うお前が悪いんだろ」

「何だと！ 緊張したんだよ！ しょうがないだろ！」

何故かもめ始めるワノールとウインスとカインに、更に呆れるフレイスト。何で、こんな奴等をここに連れて来てしまったんだろうと、後悔してしまうが、一方のカーブンは楽しげにその光景を見つめていた。まるで、昔の仲間を見ているようだったのだ。カーブンの方に歩み寄るフレイストは、楽しそうに微笑むカーブンに問う。

「カーブン様。私にはわかりません。どうして、彼等を？」

「お前は、まるで昔のワシのようじゃ」

「まあ、親子ですから」

「そうかもしれないな」

穏やかに笑みを浮かべるカーブンは、長く伸ばした白髭を撫でながらフレイストを見据えた。若き頃の自分の様なフレイストの顔をグリーンは瞳でワノール達を見るフレイストは、不満そうな顔をしてまたため息を零す。小柄なウインスの体は、ワノールに頭をつかまれ、動く事が出来ず、その場で、拳を振るい空を切るだけ。動きを制御するワノールに、ウインスと一緒に文句を言うカインだが、完全にワノールは無視していた。大騒ぎするカインとウインスを見据える周りの兵士達も、暫し呆れて呆然と立ち尽くしていた。それから、暫く揉め事が続いた。その間カーブンは笑みを絶やさ



ず、そんな父の姿にフレリストも笑みを零す。嬉しかったのだろう。父であるカーブンが、こうして笑みを絶やさずに居る事が。母が亡くなってから、こんな風にカーブンが笑ったのは初めてだろう。元々、フレリストの母は、龍臨族ではなかった。その為、そんなにフレリストに母との記憶は無い。ただ、覚えているのは、母の温もりと優しい香りだけだった。

あの後、結局話をする事は出来なかった。ついでに、あの揉めあいは、結果ワノールがカインとウインスに止めを刺す形で終了した。そんな三人に、カーブンは「暫くこの城で休めばよい」と、優しく言い幾つかの部屋を用意させる。もちろん、暫くこの町に止まる事にしていたワノール達は、カーブンの申し出を断る理由も無く快く厄介になる事する。多少、フレリストは不服そうだったが、国王の言う事に歯向かう事は出来ず、三人をそれぞれの部屋へと案内した。長く続く廊下を歩む、フレリストの後にワノール、カイン、ウインスの順で続く。床を靴の踵が叩き、その音が廊下に響く。暫し顔の傷を触るワノールは、

「一人一部屋とは、気前が良いな」

と、何か探るかの様に言葉を投げかける。それに対し、フレリストは愛想無く答える。

「客人をもてなすのは国の仕来り。当然のことです」

「俺には何か裏がある様な気がするがな」

棘のある口調のワノールに、フレリストは先程と変わらぬ口調で答える。

「少々、考え過ぎなのではないでしょうか？」

「そうか？ 大体、見知らぬ俺等をどうして城に泊め様などと思う」

「ミーファさんのお知り合いだからじゃないですか？」

冷静にそう答えるフレイストに、鼻から息を吐きながらワノールは腕組みをする。全くワノールが何を考えているか分からないため、フレイストは少々表情を顰めた。険悪な雰囲気を漂わせるワノールとフレイストに対し、のん気に明るく雰囲気を漂わせるウインズとカインは、何故かはしゃいでいた。

「こんな所に泊まれるなんて、嬉しいな」

「そうですね。大きな湯船とかあるかな？ 久し振りにのんびり湯船に浸かりたいな」

その言葉にウインズが敏感に反応する。

「何言ってるんだよ。こんなに大きな城なんだ。温泉くらいあるに決まってるだろ！」

「お、温泉！ そっか。温泉か。楽しみだな」

勝手な想像を膨らませる二人の声に、流石のワノールとフレイストも、戦意喪失した。その後は、何事も無い様に歩み進み、フレイストは三人を部屋まで届けた。一人一人広々とした部屋が用意されていて、一人で寝るには勿体無いほど大きなベッド。テーブルには様々な果物が盛り付けられた皿が置かれ、何処も彼処も埃一つ無く輝いて見えた。

## 第22回 豪勢な料理

小さな町のリオースに、珍しく騒ぎが起きる。

町に飛び交う号外の新聞は、すぐに人々の手に渡り、騒ぎはより一層大きくなる。そもそも、その騒ぎの原因は、町の西に位置する住宅地の隅の家に訪れた一人の男だ。

真夜中に現れたその男は、町の路地に真っ赤な線を引き堂々とその家に訪れた。真夜中で、人が見ていないと思われていたが、実際はそれを見ていた者がおり、今朝になり路地に引かれた赤い線は消えていたが、町の出入口の外には赤い線が続いていたことから、この町に化物が侵入したのではないかと騒ぎになっているのだ。

もちろん、張本人のゼロは眠りに就いているため、そんな騒ぎになっっているなど知る由も無い。

少々睡眠不足のフォルトは、目のしたにクマをつくり、黒髪の先から汗が滴れる。明け方まで路地に引かれた真っ赤な血の線を消して回っていたからだ。一生懸命にブラシで磨き水で流しを繰り返して何とか家の前から出入口まで続いていた血の線を消したが、疲労困憊でもう動くのもいやだった。その為、イスに座りテーブルにうつ伏せに倒れたまま動かない。

そんなフォルトに、今まで治療をしていたリリアが部屋から降りてきた。眠そうに口を押さえながら欠伸をするが、フォルトに気付きそれを無理やり押さえ足早に階段を降りる。微かに顔を上げたフォルトは、顔だけを階段の方に向けた。

「おはよう。リリア。君も徹夜？」

「はい。少々、傷の開きが酷かったもので……」

「そっか。全く、ゼロは何を考えているんだか」

顔を伏せたフォルトの声は籠った。その為、少し聞き取りにくか

ったが、リリアは何とか聞き取り返事を返す。

「でも、ゼロ様にはゼロ様の考えがあるかと思うんですが……」  
「確かに、そうかもしれないけどさ……」

不服そうな表情を浮かべるフォルトだが、顔を伏せている為、その表情はリリアには分からない。少々、傷んだ床がリリアが歩くと  
びに軋みをたてている。静かにキッチンにやってきたリリアは、一  
瞬目眩を起こす。少し疲れているのだろう。だけど、それを表に出  
さず、なべのシチューを温めなおす。部屋に広がるシチューの香り  
に、フォルトは伏せていた顔を勢いよく上げた。そして、鼻をヒク  
ヒクと動かし、香りを嗅ぎ笑みを浮かべる。

「そっか。シチューが残ってたんだよね」

嬉しそうな表情のフォルトは、背筋を伸ばしリリアのシチューを  
待ち侘びている。と、その時、二階で部屋の戸が開く音が聞えた。  
その音に過剰に反応を見せるフォルトは、イスから立ち上がり階段  
の下へと移動し、一段目に足を置く。廊下を軋ませ、こちらに向っ  
てくる足音に耳を澄ませていると、床の軋む音が止まる。立ち止ま  
ったのだろう。目を細めるフォルトは、静かに階段を一段一段上が  
る。すると、体に包帯を巻いた少年が手摺に弱々しくもたれかかっ  
ていた。フォルトより少し身長が高いが小柄な少年は、長く伸びた  
茶色の髪で顔を覆い隠しながら弱々しい声で言う。

「は、腹……減った……」

「ウワツ！　だ、大丈夫？　す、すぐご飯の準備するから！　リリ

ア！」

「は、はい」

驚いた様子のフォルトは少年の腕を首に回すと、体を支えながら階段を下りた。長く伸びた前髪が、少年の表情を隠し顔はよく見えないが、多分今、少年は目を回しているだろう。慎重に階段を下りると、少年をイスに座らせ急ぎ足でキッチンに向った。

キッチンでは、リリアが食事の準備をしていた。カゴには幾つかのパンが盛られ、深皿にリリアはシチューを注ぐ。それから、何故かフライパンで肉を焼いていた。何故か、肉があった方がいいのではないかと、思ったのだ。それらを、皿に盛りテーブルへと運ぶ。もちろん、フォルトもそれを手伝う。

テーブルに並んだ料理を目にして、少年は目の色を変え一心不乱に料理を口に運ぶ。そんな少年の姿を向いに座り見据えるフォルトは、二人の間に座るリリアの方に顔を向ける。

「ねえ。僕ん時は、こんなに豪勢じゃないよね？」

「そ、そんな事ないです」

「ほんと〜？ 絶対、豪勢だって」

疑いの眼差しを向けるフォルトに、少しオドオドした様に黒い瞳をやたらにキョロキョロさせるリリア。元々、リリアはこういう性格な為、実際どうなのかフォルトには分からない。でも、フォルトはそんなリリアと一緒に居るのが好きだった。だから、すぐ笑みを浮かべ優しく言う。

「別に、いいんだけどね。リリアの料理が食べられれば、豪勢とかそうじゃないとか関係ないし」

そう言って、肉の切れ端に手を伸ばしたフォルトだったが、それよりも早く少年の右手に持ったフォークが肉の切れ端を奪っていく。「あっ！」と、声を上げるフォルトは肉を口に運ぶ少年の方に顔を向け口をあめぐりと開ける。最後の肉の切れ端が 少年の胃へと

移行された。

「はふ〜っ。食った〜ッ」

お腹を擦る少年は、背凭れに凭れて、顔を隠すほど伸びた茶色の髪を掻き揚げる。その下から現れた幼い顔。大きく開かれた目の中心には黄色の瞳が煌く。少々口元に残る食べかすをチリ紙で拭き取り、ニコヤカな笑みを見せながら頭を下げる。

「いや〜っ。ありがとうございます。助かりました」

「助かりましたじゃないよ！ フォン！ 僕もお肉食べたかったのに〜」

涙を流し肉の乗っていた皿を見つめガツクリとうな垂れるフォルト。そのフォルトを見て、フォンが嬉しそうに笑みを浮かべイスから立ち上がる。久し振りの再会に、少し胸が高まるフォンは、落ち込むフォルトの肩を叩き明るく言い放つ。

「ひっさしぶりだな。まさか、フォルト達もグラスターに来てるなんて思っても見なかったな」

その時、ふとフォンの脳裏に疑問が浮ぶ。何故自分がここにいて、何故包帯を巻かれているのか。そして、何故フォルトが落ち込んでいるのかと。首をかしげて考え込むフォンだが、長く伸びた前髪が顔の前に覆い被さり中々集中できない。

「又ガーツ！ 鬱陶しい髪だ！ っうか、いつこんな髪が伸びたんじゃ〜！」

突然、自分の髪に向って怒りを爆発させるフォン。その大声で、

ビクツと反応を示すリリアは、体を少し震わせながらフォルトの方へと身を寄せる。当然、その大声にフォルトも目を丸くしていた。驚いたと、言うよりは唾然としたといった感じだろう。ため息を零し、リリアの方を見たフォルトは、右手の肘をテーブルにつき右手で額を押さえながら言う。

「リリア。髪、切ってあげて」

「はい」

「おっ、リリア。髪切れるのか？」

笑みを浮かべるフォンは、リリアの方に顔を向ける。だが、髪が邪魔でよく表情は見えない。そんなフォンを見つめるリリアは、ハサミをキッチンに取りに行く。右手で前髪を掻き揚げるフォンは、目の前にいるフォルトをジッと見る。そして、外から聞える人の声に軽く首を傾げる。

「フォルト達は、ここに暮らしてんのか？」

「まあ、そうだね。獣人と違って、見た目は殆ど普通の人間と変わらないからね」

「ふ〜ん。でも、何でリリアと？」

不意にそんな質問をするフォンに、フォルトは「へっ？」と、ビククリした様に顔を上げる。と、そこに、キッチンからハサミを持って、リリアが戻ってくると、フォルトが話を逸らすように言葉を発言する。

「か、かか体の調子はどどう？」

「体？ う〜ん。まあまあかな。それより、さっきの」

「そ、そう言えば、フォンに渡したいモノがあるんだ！」

そう言い席を立つフォルトは足早に階段を上がってゆく。完全にフォンの先程の質問に答えるつもりは無いらしい。複雑そうな表情を浮かべるフォンは、自分の髪をザクザクと音を立てて切ってゆくリリアに、フォルトに訊いた質問を試してみる。

「なあ、何でリリアはフォルトと一緒に暮らしてるんだ？」

「へッ！ あ、あの、その……」

顔を真っ赤にして口ごもるリリアは俯き手を止める。リリアがどんな表情をしているのか、フォンには分からない。二人の間に何があるのだらうと、思う所もあったフォンだったが、これ以上訊いても教えてくれないだらうし、何よりも人の秘密をむやみやたらに訊くのはよくないと思い、笑い声を響かせ言う。

「アハハハッ。まあ、それだけ仲がいいって事なんだよな。それにしても、フォルトがオイラに渡したいモノって何だらう」

嬉しそうに微笑むフォンだが、二階ではフォルトとゼロが睨み合っていた。



### 第23回 ぶつかる思い 親友が捨て駒

薄暗い寝室で睨み合うフォルトとゼロ。右手に包みを持つフォルトは、それを隠す様に後ろに回し、ジツとゼロを見据える。物音もたてず、聞えてくるフォンの笑い声。その声に、ゼロはフォンが目を覚ました事に気付く。そして、暗いなかで、ゼロの鋭い眼光が動く。久し振りに見せるその目は、殺気を漂わせその部屋の中を圧迫する。

フォルトでさえ、その殺気に息を荒げ、意識を失いそうになり、床に右膝を着く。その瞬間、ガタツと音が立つがそれは小さく一階に居るフォンとリリアには聞えていない。額から流れる汗が、頬を伝い顎からテンテンと滴れて、床にぶつかり弾き飛ぶ。苦しそうに左手で胸を押さえるフォルトは、視線だけはゼロの方に向けジツとその姿を見据える。

「何をしていた」

「ゼロには……関係ない……」

「まさか、アレを奴に渡す気じゃないだろうな？」

ゼロのその言葉に一瞬フォルトの顔が青ざめる。全て見通されている。そう思うフォルトに、音を立てず歩み寄るゼロは、フォルトの前で足を止めて、ゆっくりと右手を差し出す。歯を食い縛るフォルトは、ゼロの差し出された右手が何を意味するのか、すぐ理解し右手に持った包みをゆっくりとその手の上に置く。

俯き歯を食い縛ったままのフォルトは、目を伏せて体を震わせた。そんなフォルトを見下ろすゼロは、背を向け二・三步歩いて静かに口を開く。

「これを彼に渡すのは、全てが終わった時俺が渡す。今の彼が使えば、

彼の身を滅ぼす事になる。分かってくれ……」

そのゼロの声に、今にも泣きそうな掠れた声でフォルトは答える。

「分からないよ……。ゼロが…何を考えてるのか……。僕等は、親友だろ……。少し位、僕に頼ってもいいだろ……」

胸を締め付けられる様なフォルトの思いに、ゼロは静かに振り返り「ごめん」と、小さな声で言う。その言葉を訊いたフォルトは、意を決した様に俯いたまま静かに立ち上がると、鋭い視線でゼロを見据える。その目を真っ直ぐに見つめ返すゼロは、その目からフォルトの意思を感じ取り、目を伏せるとゆっくり背を向ける。その背中を見据えるフォルトは、力強く言い放つ。

「親友だと、思っていたのは、僕だけだったみたいだね。君にとって、僕は、ただの捨て駒に過ぎないんだろ！ リリアだって、君にとっては役に立つ道具にしか見てなかったんだろ！」

その言葉に静かに笑うゼロ。その不適な笑い声に、表情を引き攣らせるフォルトは、静かに拳を構える。窓の方に歩み寄るゼロは、日差しを遮るカーテンを開く。外の日差しが薄暗かった部屋に入り込み、フォルトの視界は一瞬にして眩い光に包まれる。窓から射し込む日差しの向うに見えるゼロの黒い影。それは、窓の淵に右足を掛けていた。

「ゼロ！ 逃げるのか！」

「フッフッフ。長い間ご苦労様。フォルト。君はとても役に立ったよ。最後に君に取って置きの情報教えてあげる。一週間後、グラスタ―首都 レイストビルを複数の魔獣達が襲撃する。その中には十二魔獣の連中も何人かも一緒だ。彼にもこの事を教えておいた方

が良い。今、彼の仲間はいすトビルに居るんだからね」

そこまで言つて、ゼロは窓から飛び降りた。ようやく、目が慣れ  
てきたフォルトは、すぐにゼロを追いかけ様と、窓際に近付くが、  
既にゼロの姿は無い。今までのゼロのと思ひ出などが蘇ってくるフ  
ォルトは、それが全部芝居だったと思つと悔しくて、涙が止まらな  
かった。噛み締める唇からは、血が出て涙と混ざつて床に落ちた。

一階でフォルトの事を待つフォンとリリア。その間、リリアはフ  
ォンの髪をハサミで整えており、艶のある茶色の髪が床に散らばつ  
ている。こうやって、髪を切られていると、幼い頃を思ひ出すフォ  
ンは、自然と笑みを零す。

実は、幼い頃フォンは髪を切られるのが、嫌いだった。その元凶  
となつたのが、フォンの親父だ。親父は、不器用なくせに細かい事  
をやりたがる。その為、フォンの髪を母親が切っていると、体がウ  
ズズしたのだらう、何故か途中で母親からハサミを取り髪を滅茶  
苦茶にするのだ。それが、あつた為幼い頃は髪を切られたくなくて、  
随分髪を長く伸ばし逃げ回っていたのを覚えていた。

そんな思い出に浸っていると、後ろで「終わりました」と、小さな  
声が聞えた。あんまり自信の無い様なその声に、多少不安になるフ  
ォンだが、鏡を見てその出来に驚きの声を上げる。

「うおっ！ 凄く良い感じだぞ。オイラのボサボサだった髪が、な  
んだか自然に見えるぞ」

「気に入っていただけで、よかったです……」

やはり、何処か自信が無いその声に、フォンは少々首を傾げ、鏡  
越しにリリアの顔を見据える。鏡に映るリリアは、顔を俯けてなに

やら恥かしそうにしており、そんな顔を隠すかの様な長い前髪がチラつく。微かにしか見えないリリアの表情に、「ムムムツ」と、唸り声を上げるフォンは、リリアの方に顔を向けた。すると、リリアは少し怯えた様に後退し、フォンの顔を前髪に隠れた目で見据える。

「な、なんですか？」

「うん。邪魔じゃない？ その前髪」

「そ、そ、そんな事ないです。邪魔なんかじゃ  
」  
「本当か？」

疑う様な声で聞き返すフォンは、ジツとリリアの目を見据える。フォンの視線に怯える様にキョロキョロとし始めるリリアは、顔を真っ赤にするが、俯いていてなおかつな前髪が邪魔してフォンには分からない。その為、フォンはずっとリリアの顔を見据える。

頭の中が朦朧とし始めるリリアは、次第に視界が揺らぎ平衡感覚を失いそのまま、倒れてしまった。当然、フォンは驚く。そりゃ、突然人が倒れれば誰だって驚くだろう。飛び上がり、すぐにリリアに駆け寄るフォンは、目を回すリリアの顔を見て声を掛ける。

「おい。大丈夫か？ リリアッツ！」

「うるるるっ」

と、変な声で返事をするリリア。これは、重症だとフォンは右手で頭を掻きながら思う。何が原因でこうなったのか知らないフォンは、非常に困った表情をしたまま腕組みをして考え込む。これからどうするか。どうしたら良いのかと。悩みに悩むフォンだが、そこに激しく床を軋ませながらフォルトが階段を下りてきた。その顔はあのトーナメントの時に見た怖い表情をしており、何かあったのだとフォンはすぐに気付くが、フォンは話を聞く前にフォルトに言う。

「リリアが大変なんだ」

「リリアが？　　ッ！　リリア！　だ、ただ大丈夫か！」

驚いた様子ですぐにリリアを抱え起こすフォルトに、苦笑いを浮かべるフォンは、頭を掻きながら答える。

「何か、急に倒れちゃってさ……」

「急につて　！　そうだ、それより、大変だよ！　一週間後、レイストビルに魔獣達が！」

「レイストビル？」

暫し考えるフォン。そして、パツと頭の中に浮ぶカインやルナの顔。その瞬間、フォンは右手で拳を作り左手をポンと叩き笑顔で言う。

「そうだ。レイストビルつて、オイラ達の目指してた所だ。ンツ？

あれ？　今、レイストビルに魔獣達がって？」

「そうだよ！　レイストビルを滅ぼすために魔獣達が動いているんだって！」

「なに！　それつて、大変だ！　えっと、えっと、どうすれば……」

慌てふためくフォンは頭を抱え込む。もし、ルナやミーファ、ワノール、カイン、ウインスがレイストビルにいたら、大変な事になると、考えるだけで頭の中は更にパニックになり、考えが纏まらな。その為、オドオドとその場を走り回り心を落ち着けようとする。それでも、落ち着かないフォンは、「どうしよう、どうしよう」と走り回り大慌てで旅の支度をする。そんなフォンを見据えるフォルトは、ため息を漏らし声を掛ける。

「フォンが慌ててもしょうがないよ。ほら、深呼吸して」

「し、深呼吸か、スー……ハアー……スー……ハアー……」

深呼吸を繰り返すフォンは、次第に落ち着きを取り戻し、頭の中もすつきりとする。そして、今の頭なら考えも纏まる。別に焦る事はない。あそこに、ワノールもウインスもカインも居る。焦らなくても、あの三人が何とかしてくれる。そんな思いが、フォンの心を和ませ落ち着かせた。そんなフォンに、フォルトは少し怖い顔をしながらい放つ。

「フォンは、すぐにレイストビルに向って。急がないと、フォンの仲間は――」

「大丈夫。確かに心配だけど、あいつ等は強い。きつと、オイラが行くまでに全て終らせてくれる」

ニコツと笑みを浮かべたフォンは、真っ直ぐな瞳でフォルトを見つめる。その瞳を見ていると、何故かフォルトは大丈夫だと思えた。それだけ、フォンの目には力が籠っていたのだ。背を向け、玄関の方に向うフォンを、フォルトは呼び止めた。振り返ったフォンは、何か黒い物が飛んで来たので、とっさに右手でそれをキャッチする。それは、黒いフード付きの厚手のコートだった。

「前に僕が暴走した時、リリアを助けてくれたる。そのお礼に、リリアが作ったんだ。大事にしてくれよ」

「ああ。ありがとう。大事にするよ」

もう一度ニコツと微笑むと、背を向けてそのまま戸を開き外へと出て行った。そんなフォンの後ろ姿を見据えたままのフォルトは、小声で呟く「ゼロのウソツキ」と。

### 第23回 ぶつかる思い 親友が捨て駒（後書き）

暫くぶりです。更新が遅れて申し訳ないです。

チット、パソコンに触れる機会が無くて、まあ、それで、更新できなかつたってわけなんです。

まあ、更新できなかつたって言うても、二・三日なんで、別に大した事じゃないですよね（笑）

また、今日から頑張ります。

## 第24回 牙狼丸

レイストビルを中心に位置するグラスタ―城の最上階にある庭園。レイストビル全体を見渡す事が出来、聊か風も強いその場所に、綺麗に咲き誇る花々が大きく揺れながら、良い香りを漂わす。そんな花々の植えられた花壇に挟まれた道を、フレイストは一人で歩く。ここに居ると、母の事を思い出すのだ。

ここに咲き誇る花は、『白龍香』はくりゆうこうと言う名称の花で、もうこのグラスタ―城の最上階でしか見る事の出来ない花だ。元々は、グラスタ―王国に沢山咲き誇っており、このグラスタ―のシンボルにするつもりだった。だが、その当時の大戦で白龍香は全て失われた。それが、何故この最上階にあるのか。それは、大戦が終わり数週間が過ぎた時に起きた。現国王が屋上に出ると、その当時は花壇も無くただの石段だったこの最上階に、この白龍香の花が一輪だけ咲き誇っていたという。力強く強風に吹かれながらも。その瞬間、現国王はここに花壇を作ったという。

そんな、白龍香の咲き誇るこの庭園を母も好きで、フレイストは赤子の時に何度もここへつれて来られていた。その為、この白龍香の香りはまるで母の香りの様だったのだ。そして、ここは……。

「フレイスト様！ 国王がお呼びです！」

階段を上がってきた兵士が、フレイストの方に体をむけそう叫ぶ。思い出に浸り白龍香の前に屈みこんでいたフレイストは、吹き荒れる風に美しいオレンジブラウンの髪を揺らしながら、振り返り答える。

「ああ。わかった。すぐに行く」



その声に、兵士は一礼して足早に階段を下りてゆく。その足音だけが風の音に混ざり聞えてきて、フレイストは微かに笑みを浮かべる。そして、揺れる白龍香の白い花びら達に、

「母さん。また、来るよ」

と、告げて階段の方に向って足を進めた。

王座に腰を据える国王カーブン。小さな階段があり、その前に跪くワノール・カイン・ウインス・ミーファ・ルナの五人。話があると五人は集められたのだ。その為、その部屋には兵士達はおらず、静まり返っている。窓から吹き流れ込む風が、微かに音をたてるが、それが大きく聞えるほど静かだった。

何の話をするのか分からず、複雑そうな表情を見せる五人は、顔を伏せたままジツと動かない。と、そこに、扉が開かれ一人の兵士が入ってきて、「フレイスト様を呼んでまいりました」と、一声。そして、一礼して部屋をでる。それと、入れ替わりフレイストが部屋に入ってきて、扉を綺麗に閉めて一礼してから、歩を進める。

「これで、全員かろう？」

皆の事を見下ろしながらカーブンがそう言う。まだ、歩むフレイストは、跪く五人を不可解に思いながらも、前列に跪く。すると、カーブンが「その体勢はつらいであろう」と、言い皆を立たせる。暫し不満そうなフレイストは立ち上がり、カーブンの顔を見据える。いつに無く、真剣な面持ちのカーブンの顔に、フレイストは目の色を変えた。前列に並ぶ、フレイスト、ワノール、カイン、ウインスの四人。そして、後列にルナとミーファ。そんな六人の顔を一通り見回したカーブンは話を始める。

「フム。烈鬼族と炎血族と風牙族。それから、癒天族に、時見族……。やはり、運命は繰り返されるか……」

何の事を言っているのか分からない六人は、何も言わずに立ち尽くす。こんな事を話すために、わざわざ集めたのかと、言いたそうな目をするワノールは、ふと壁に飾られた肖像画に目が移る。そこには、名前の他に種族が書かれていた。見た感じ、皆種族が違う。まるで、今の自分達の様に。そして、その中の肖像画に見た事のある様な顔付き少年が居た。それを、見た瞬間、ワノールは我が目を疑う。そんなワノールに、カーブンは言う。

「どうかしたかね？　ワノール殿」

「い、いや」

カーブンの方に顔を向けそう言うワノールは、もう一度チラリと肖像画を見る。その視線の先に映る肖像画は、まさしくフォンそのもので、髪の色が少し黒くなっただけだ。それ以外は全くの瓜二つだった。頭の中が混乱するワノールだが、すぐに冷静さを取り戻す。アレは、きつとフォンの先祖か何かだと考える。そう考える方が普通だからだ。

ようやく落ち着いていたワノールは、カーブンの話しに耳を傾ける。なにやら昔の話をしている。

「五百年前の大戦の事は知っておるな。東西南北の四大陸に国家が誕生したあの大战を」

「確か、爺ちゃんにそんな話を聞いた気がするな。でも、あん時は眠かったから詳しく覚えてないな」

「全ての種族が対立する様になった大战……。全ては、あの大战が始まり」

静かに暗い声のルナの言葉。カインとウインスは振り返りルナの方を見る。突然の声に少しビックリしたのだ。金髪の長い髪を微妙に揺らすルナと目が合う二人は、苦笑いを浮かべて前に向き直る。少々首を傾げるルナは、ミーファの方を見るが、ミーファも苦笑いを浮かべていた。

「それで、話はなんだ？ まさか、昔話をするわけじゃあるまい？」

鋭く厳しい意見を口にするワノールは、腕組みをしたまま左目でカーブンを軽く睨み付ける。そのワノールに力強く意見したのは、やはりフレリストだった。

「オイ！ お前、国王に向かって何て口の利き方を！」

「いいんじゃない。気にするなフレリスト。堅苦しい口の利き方など、聞き飽きてしまってるからな」

「しかし！」

そう言うフレリストだが、その声を遮ってワノールは問う。

「それで、本題を聞かせてもらおう。五百年前の大戦の話をした理由を」

「フム……。やはり、鋭いのう。流石、烈鬼族と、言った所かのう」

「無駄話はいい。早く本題に入ってくれ！」

「ちょ、ワノールさん！」

「貴様！」

流石にワノールの言葉に怒りを滲ませるフレリスト。そのフレリストをカインは必死に宥めた。右手は背中に背負った大剣の柄を握っていたフレリストは、カインに宥められ必死に怒りを堪えて手を震わせながら下ろす。その間、グリーンは瞳が激しくワノールを睨

み付けていた。だが、ワノールは、全くフレイストを相手にしておらず、ジツとカーブンを睨んでいる。落ち着いた様子のカーブンは、白い髭を右手で撫でながら答えた。

「そうじゃな。早速本題に入ろう。ウインスとか、言ったかのう。その刀を見せてくれんか？」

「俺の刀？ 別にいいけど、本題に入るんじゃないのか？」

怪訝そうにそう呟き、ウインスはカーブンの下まで足を進め、腰の刀を鞘に収めたまま手渡す。ウインスにとっては、意外と重かった刀だがカーブンはそれを軽々と持ち上げ、柄を握り刀を抜く。美しい刃が薄らと光を放つその刀を真っ直ぐに見据えるカーブンは、呟く。

「懐かしいのう。牙狼丸」

「ヘッ！ ま、待ってくれよ！ その刀は、牙狼丸なんかじゃないぞ！ それは、家に代々伝わる」

焦るウインスの顔をチラリと見るカーブンは、微かに笑みを浮かべて呟く。

「そうか。おぬしは知らなかったのか。じゃが、これは、真正正銘、牙狼丸じゃ。まあ、無理も無い。これは危険な代物じゃからのう。お主も気をつけるんじゃぞ。これは、持ち主の命をも平気で喰らう呪いの刀じゃ。無理に力を引き出そうなどとするんじゃないぞ」

その言葉にウインスは驚く。以前、その言葉を族長から聞かされたからだ。この事は、ウインスの家の者しか知らない。他言してはいけないといわれているから。それに、ウインスも一度経験があった。この刀の恐ろしさを。それを思い出し胸が苦しくなる。

「ハア…ハア……。ガッ……」  
「ど、どうしたの？ なんだか、苦しそうだよ！」

ミーファが後列からそう叫ぶと、カインが足早に階段を上がりウ  
ィンスに駆け寄る。服の胸の位置を右手で握り締め、息を荒げるウ  
ィンスは、膝を着き今にも吐きそうな表情をみせた。そのウィンス  
の顔色を見たカーブンは、ウィンスが牙狼丸の力を無理に引き出そ  
うとした事を悟った。

## 第25回 敵襲の最中の仲間割れ

カーブンの横で胸を押さえ、苦しむウイン스에カインが優しく声を掛けている。ウイン스에聞えているのか、不明だが息遣いは更に荒くなり、呼吸が困難なのが見て取れた。暫し焦るカインは、振り返りルナの顔をジッと見つめる。落ち着いた様子のルナは、ゆっくりとウインスの方へと足を進める。仰向けに寝かされたウインスの胸に右手を翳すルナは、目を閉じ力を集中する。呼吸を荒げるウインスだったが、徐々に楽になりつつあった。心配そうにしていたミーファは、ホツとしたのか、静かに息を吐き笑みを浮かべる。

一体、ウインスの身に何があったのだらうと、不可解に思うワノールは一度目を伏せ、静かに見開くとカーブンを睨み付ける。鋭い眼光のワノールと目を合わせるカーブンは、少々真剣な目でワノールを見返し、言い放つ。

「そんなに恐い顔をしてどうしたんじゃ？　もしや、ワシがウインス殿に何かやったと思っておるのか？」

「まあ、そう言う所だ」

「なっ、貴様！　それ以上、国王を侮辱すると」

「よい。止めんか、フレリスト」

カーブンの一喝にフレリストは身を引き、静かに歯を食い縛った。怒りから、微かに奮えるフレリストの右腕。自分の尊敬する父が侮辱されるのが、辛かった。だから、目を伏せ一度気持ち落ち着かせる。

ずっと互いの目を見つめ合うワノールとカーブン。そんな二人の横で、ウインスがようやく目を覚ます。息も通常通りに戻っており、なんだか落ち着いた感じに見えた。心配そうに顔を見るカインに、ウインスは少々笑みを浮かべ、「何？」と、小さく訊く。すると、

カインは軽く首を振り、「なんでもないよ」と、少し涙目で答えた。ウインスが目を覚ましたのに気付いたカーブンは、牙狼丸を鞘に収め静かに笑みを浮かべて、横になるウインスの方に差し出した。すると、すぐにウインスは体を起こし、何度か深呼吸をして、牙狼丸を両手でしっかりと受け取った。

「くれぐれも、無理はしない事じゃ」

「ウツ……はい……」

少し苦しそうな表情を見せたウインスだが、誰もそれを見た者は居なかった。

静かに立ち上がったカインは、ウインスに肩を貸し階段の下まで降りると、ワノールの横に並ぶ。ルナは後列のミーファの横へと足早に移動し、相変わらず無表情のままカーブンの方を静かに見据える。急に静まる部屋の中で、何故か険悪な雰囲気が漂う。そんな時、急に部屋の扉が乱暴に開かれ、一人の兵士が入ってくる。

目の色を変えるカーブンは、扉の方にその鋭い眼光を向ける。険悪だった雰囲気は一瞬にして、緊迫した空気へと変わり、皆の視線も扉の前に立つ兵士の方へと向けられた。少々、息遣いの荒い兵士は、背筋を伸ばしカーブンへ一礼する。その直後、響くカーブンの力強く堂々とした声。

「何事じゃ！ 何を騒いでおるのじゃ！」

「北方、南方、西方、東方。全ての守備隊が魔獣達と交戦中！ 至急救援を！」

「どう言う事だ！ 何故、魔獣達が近付いている事に気付かなかった！」

聊か怒りの声を上げるフレイストに、兵士が臆し一歩後退する。確かに魔獣が近付いて来ていれば、普通に気が付くはずなのだ。そ

して、事前に国王へ連絡が行くはず。だが、今回は違う。既に守備隊が魔獣達と交戦しているのだから。

怒りを見せるフレイストに対し、聊か不自然さを感じるワノール以前、都市デイバスターが魔獣の襲撃を受けた時も、この様に突然だった。デイバスターはレイストビルと違い、それほど守備は厳重じゃなかった為、突然魔獣に襲われても不思議じゃなかったが、この厳重な守備を誇るレイストビルが、何故こつても簡単に魔獣達の接近を許したのか。そこが、ワノールは気になった。

色々、考えを張り巡らせるが、どうも答えが出ない。姿を消していたとしたら、何故、守備隊の前で姿を現す必要があったのか。そして、何故、四方向から攻め入るのか。確かに相手の戦力を分断するには、いい考えかも知れないが、それでは、魔獣達の戦力も分断されてしまうのではないかと、言う疑問が浮ぶ。第一、ここは鉄壁の防衛を誇るレイストビル。鍛え抜かれた兵士達が多く存在する。そう考えると、戦力を分断された魔獣達の方が明らかに不利だ。腕組みをしたまま難しい顔をするワノールは、顔の傷痕を少し歪ませる。そんなワノールにカインが言う。

「ワノールさん！ 僕等も行きましょう！ 四方向なら、手分けした方がいいですよ！」

「確かに、そうだ。カインの言う通りだな！」

カインの意見に賛同するウインスだが、ワノールは聊か複雑そうな表情を見せる。何故か、嫌な予感がする。それは、何を見落としている様な気がしたからだ。返事を返さないワノールに、少々苛立つカインは力強く言う。

「どうしたんですか！ そんなに悩む事無いでしょ！ 一緒に戦いましょうよ！」

「少し落ち着けカイン。何か不自然だと感じないのか？」



冷静な口調でそう言うワノールだが、それに対しカインが更に力強く答えた。

「何言ってるんですか！ 魔獣達は待つてくれないんですよ！ こんな所で考えていたら、被害は増える一方ですよ！」

「確かに、お前の言う事も分かるがな……」

「んだよ！ 結局、あんたはここがどうなるうが、知ったこっちゃ無いって事かよ！」

ワノールにそう言い放ったのはウインスだった。鋭い目付きでワノールを睨み付け、今にも掴みかかりそうな表情を見せるウインスは、歯を食い縛り拳を震わせる。その視線にワノールは、小さく息を吐き目を伏せると静かに言う。

「俺は、そんな事は言っていない。ただ」

「ただ、なんだよ！」

すぐにそう言うウインスに、ワノールが遂に怒りを露にした。右拳がしなやかに弧を描くようにウインスの左頬を思いつきり殴りつける。小柄で軽いウインスの体は、ワノールに頬を殴られ吹き飛び階段の方まで飛ばされた。左頬を押さえるウインスは、鋭い目付きでワノールを睨み付け言い放つ。

「何すんだ！ 自分の意見が通らなきゃ、暴力か！」

「……」

ワノールは何も言わない。俯いたまま。その光景を見据えていたミーファとルナは顔を見合わせる。相変わらず、ルナは表情一つ変えていなかったが、ミーファは心配そうだった。このまま、皆がバ

ラバラになってしまうと。何とかしたいと思っても、何の力も持たないミーファは、自分が何も出来ない事を悔やみ唇を噛み締める。そんな時、立ち上がったウィンスがカインに向って叫んだ。

「もういい！ 俺達だけでも行こう！」

「うん。フレイストさん！ お願いします」

「ああ。それじゃあ、一緒に地下の方へ」

そう言っつてフレイストは駆け出す。それに続く様にカイン、ウィンスと部屋を出て行く。扉の前に立ち尽くしていた兵士は、その場の空気に耐え切れず、そのまま部屋を逃げる様に出てゆく。残されたワノールは、俯いたままジツと動かない。そんなワノールにミーファが言う。

「いいの？ あのままで」

「……」

「ミーファさん。私達はここに居ても何も出来ません。部屋に戻って、皆さんの無事を祈りましょう」

ルナにそう言われ、不本意ながらミーファは頷く。そして、ワノールの事を気にしつつも部屋を後にした。部屋に残されたワノールにカーブンが静かに口を開く。

「仲間が大切なのは分かるが、そう心配する事もなかるう。彼等とて、幼いと言えど選ばれた者達じゃ。もう少し頼ってみてはどうじゃ？」

「俺は、別にあいつ等を信じていない訳じゃない。ただ、何か胸騒ぎがする。これが、何かをするための揺動の様に思えてしまう……」

複雑そうな表情でそう言うワノールに、カーブンは不適に笑い出

す。突如笑い出したカーブンの方に顔を向けるワノールだが、カーブンは笑い続ける。何がおかしい、と思うワノールは、鋭い眼光でカーブンを睨んだ。

## 第25回 敵襲の最中の仲間割れ（後書き）

更新が遅れました。読者の皆様、どうも吸いません。

只今、ある小説大賞に応募しようと思ひまして、どんな作品を書くか模索中です。その為、多少更新が遅れています。それでもですが、クロスワールドも、更新日を決めておきたいと思ひます。その方が、読者の方には良いと思うので。

それで、ですが、月曜日と金曜日の週二日の更新にしたいと思ひます。本当、すいません。

## 第26回 東西南北 それぞれの敵

グラスタール城の地下室。そこには、四つの不思議な方陣が描かれている。東西南北と、中央には漢字が書かれており、それが何なのかカインとウインスには分からなかった。大勢の兵士達が、この地下室には集まっており、傷ついている者も大勢居る。そんな中、何人かの兵士が方陣の中へと入る。すると、兵士達の姿が一瞬にして消えた。初めての光景に驚きを隠せぬカインとウインスは、慌てた様子でフレイストの方に目を向ける。

その視線に、ふと気付くフレイストは、軽くあの方陣について説明する事にした。いや。説明しないいけない気がした。

「あれは、転移方陣と言って、同じマークのある方陣へと移動する事が出来るんです。アレは、元々、東のフォースト王国の発明品で、随分前にブラスト王直々に頂いた代物なんです。全て、東西南北の守備砦に繋がってます。お二方にもお手伝いを」

「わかりました。それじゃあ、僕は西に！」

「俺は、東に行く」

何と無く理解したカインとウインスの二人はそう返事を返し、各自方陣の前に立つ。北と書かれた方陣の前へと足を進めたフレイストは、一度気持ちを落ち着けるため深呼吸を繰り返す。各々が気持ちを集中させ、方陣へと足を踏み入れ、一瞬にして姿を消す。

### 北方守備砦

方陣から姿を現すフレイスト。その目の前に転がす無残に切り裂かれた兵士の体。半分以上が崩れ落ちたその砦は、瓦礫と既に息絶えた兵士達の体だけが散らばっていた。崩れた屋根から射し込む日差し。砕かれた壁から流れ込む風。目の前に映るその光景を、フレ

イストは信じたくは無かった。

「な、何で、こんな事に……」

驚きを隠せない様子の声を出すフレイスト。方陣から出て、暫し足を進めるが、それはすぐ止まる。それは、砕かれた壁の向こう側に、一人の男の姿が見えたからだ。黒マントに身を隠す一人の男が、黒く長い髪で顔は確認出来ないが、そいつが仲間を殺したのだと悟る。背中に背負う大剣の柄を握るフレイストは、瓦礫を踏みしめながら男の方に向って歩みだす。踏みしめた瓦礫が時折音を立て崩れ、その音に黒マントに身を包んだ男の方もフレイストに気付く。

崩れた壁から外に出てきたフレイストは、静かに黒マントの男をグリーンノの瞳で睨み付けたまま足をとめた。向い合う二人の間に吹き荒れる風は、微かに砂塵を舞い上げた。

#### 西方守備砦

兵士達の声がこだまする中、方陣からカインが姿を現す。傷ついた兵士達が、方陣の周りで手当てを受けており、部屋の中を兵士達が駆けずりまわる。引き締まった表情を見せるカインは、外の様子を知ろうと、一人の兵士を捕まえ状況を問う。

「魔獣の数は、どの位です？」

「そりゃ、数えられない位だ！ あんたも、手伝ってくれ！」

「はい！」

そう返事を返すカインは、兵士の後に続き砦の外へと飛び出す。その直後、前に行く兵士の体が右に吹き飛び、カインの視界から消える。そして、何かが地を滑る音が聞える。何が起こったのか、分からず右方向に目をやると、脇腹を抉られ血を流し倒れる兵士の姿

がある。微かに息をしているが、血を口から吐くとそのまま息を引き取った。

怒りに歯を噛み締めるカインは、右手で青空天の柄を握ると力を込め、刃を抜く。鞘と刃が激しく擦れ合い、嫌な音をたてながら抜かれた蒼い刃の青空天は、日の光を浴び輝く。そんなカインの背後に、鋭い爪を振りかざす魔獣がいる。その魔獣は、音も無く右腕をカインに向って振り下ろす。だが、振り下ろされた腕は、肘の辺りから真つ二つに切られ、真つ赤な血だけが宙に飛び散る。そして、魔獣の背後で何かが落ちた音がする。それが、魔獣の真つ二つに切られた肘から先だった。

「ガアアアッ！」

苦しみの声を上げる魔獣は、左手で傷口を塞ごうとするが、すでに真つ二つに切られたその傷口は塞ぎようが無かった。舞い散る細かな魔獣の血が、カインの顔に真つ赤な斑点を幾つも作る。そして振り向き様に素早く青空天を振りぬく。蒼い刃は、苦しむ魔獣の腹に食い込み、そのまま骨を諸共せず上半身と下半身を真つ二つに裂く。舞い散る血飛沫は、カインの体に無数に付着した。

#### 東方守備砦。

勢いよく飛び出したウインスは、いきなり壁にぶつかった。丁度、壁際を向いていたらしく、勢い余って激突してしまったのだ。鼻の頭をぶつけた為、少し赤くなった鼻を両手で押さえるウインスは、ふと辺りの静けさに不思議に思う。外から魔獣の声も兵士達の声も無く、無音。それに、兵士達の姿が部屋の何処にも見当たらない。

「もしかして、既に終わっちゃったんじゃないか？ それって、無駄足じゃねえ？」

と、ぼやくウインスは、頭を右手でかきながら部屋を出て廊下に出る。やはり、誰か居る気配は無い。暫し辺りを見回し、廊下を歩く。ウインスの足音だけが廊下に響く。廊下を暫く行った所で、引き返そうとウインスが体を反転させた直後、外から大きな爆音が轟いた。

「な、何だ！」

驚きの声を上げながら、ウインスはまた体を反転させ、外に向って廊下を駆ける。廊下を出ると、ウインスの横を兵士の体が横切り壁に背中から直撃し、壁を破壊する。瓦礫と一緒に崩れ落ちる兵士の体は、もう息はしてなく冷たかった。ウインスはその兵士を一度見据えてから、その兵士を飛んできた先に視線を送る。そこに立ち尽くす巨体の男。髪の毛は無く不気味な面持ちに三つの目。体付きのガッチリしたその男はゆっくりとウインスの方に目を向けた。

#### 南方守備砦。

兵士達は無数いた魔獣を倒し、ようやく一息吐こうしていた。だが、そこに一人の女が降り立った。背中に大きな漆黒の翼を生やした女が。長い黒髪をしなやかに揺らすその女は、不適に笑みを浮かべると、背中に生えた大きな漆黒の翼を一度羽ばたかせる。すると、漆黒の羽根が無数に飛び散り兵士達目掛けて飛ぶ。漆黒の羽根は兵士達の体を切りつけ、真っ赤な血を宙に撒き散らした。

「グアアアッ！」

「な、何だ！ アレは！」

兵士達の叫び声がこだまする中、それを見据える女は不適な声で



笑い出す。

「フフフフツ。久し振りの快感。良い声で叫びなさい」

小さくそう呟く漆黒の翼を生やした女は、苦しむ兵士達に歩み寄り、次々と兵士の体を右手から伸びる鋭い爪で貫いてゆく。その度に爪に付着した血を舐め、嬉しそうに笑みを浮かべる。

そんな時、地面に一つの影が浮び、空から声が響く。

「ウヌは、人の命を何だと思う！」

その声に手を止める女は、自分の楽しみを邪魔され怒りに身を震わせる。そして、声のした方に顔を向け怒りの声を上げる。

「私の邪魔をするな！」

「ウヌの邪魔をしたつもりは無い」

そう言い、空から降り立ったのは、巨体で頬に三つの星の刺青を彫ったノーリンだった。鋭く開かれた目は、漆黒の翼を生やした女を見据える。傷ついた兵士達は、逃げるように皆へと引き返して行き、辺りは静まり返る。怒りを隠しきれない女は、翼を広げると空高く舞い、叫ぶ。

「貴様！ 貴様だけは、罅り殺しにしてやる！」

「ウヌには、何を言っても分からぬ様だ」

そんな事を呟き静かに息を吐くノーリンは、地を蹴るとゆっくりと空へを浮かび上がる。空に舞う二人は、鋭く睨み合う。風は下に居たときよりも幾分強く、激しく二人の体を仰ぐ。だが、その風を受けながらも二人は全く体勢を崩す事は無かった。

## 第27回 狙われた国王 蒼髪の男との激突

東西南北の出入口でそれぞれが戦っている中、グロスター城の玉座に座るカーブンの笑い声が響く室内。ワノールの目が鋭くカーブンを睨む。何がおかしいと、言いたそうな目で。だが、笑いを止めないカーブンは、既に分かっていた。自分の命が僅かであると。そして、これもまた、運命であると言う事を。

笑い続けるカーブンが急に笑うのをやめ真剣な顔付きに変わる。そして、目を閉じゆつくりと、呼吸を繰り返す。そんなカーブンの顔を不思議そうに見据えるワノールは、殺気を感じ素早く黒苑を抜く。鞘と刃の擦れ合う金属音が辺りに響き姿を現す、漆黒の刃。艶やかに黒く輝く黒苑を構えるワノールに、カーブンは落ち着いた声で言う。

「来たようじゃな。ワシの命を狩りに……」

「どう言う事だ！ 命を狩りに来たって」

ワノールがそう叫んだその時、鋭く突き刺さるような冷たい視線を背中から感じた。その瞬間、とっさに身を翻しすぐに体を視線の方に向けた。そこには、蒼く尖った髪をした男が壁に凭れ、腕組みをしたままこちらを見ていた。鋭く切れた目は、とても冷ややかで、幾人もの人を殺してきた目をしている。背中には鐔の無い大きな剣を包帯に巻いたまま背負い、腕周りの筋肉は凄まじい。その鋭い目を見据えるワノールは、右足を一步引き黒苑を低く構える。

それを見ても、表情一つ変えない蒼髪の男は、薄ら笑みを浮かべると静かに首を振りながら拍手を送る。それが、誰に向けられたものかは分からない。ただ、いえるのはこの男が強いと言う事だ。気配も無くしかも、この鉄壁とも言えるグロスター城に一人で忍び込んだのだ。よつぼどの力の持ち主なのだろう。

黒苑の柄を握るワノールの手は汗が滲み出て、喉も渇く。緊張、いや。完全に相手の殺気に飲み込まれているのだ。壁から背中を放し、ゆっくりと足を進める。そして、ワノールの目を真っ直ぐ見据えて言う。

「まさか、一人残るとは思わなかったぜ！」

「！」

突如振りぬかれた大きな刃。まだ、包帯が刃には巻かれているが、気にせずワノールに襲い来る。咄嗟に、低く構えた黒苑を振り上げる。

「ッ！」

互いの刃がぶつかり合い、激しく交錯する。澄んだ金属音が一瞬響き、衝撃が刃を弾く。もちろん、重さ的にも不利な黒苑は、軽々と弾かれ、衝撃が柄を握るワノールの手にも伝わる。重々しく、それでいて鋭いその襲撃にワノールは、表情を歪めるが、必死にその場に踏み止まった。だが、すぐに幅の太い刃がワノールに襲い来る。

「クッ！」

もう一度相手の剣を受け止めようと、黒苑を刃とぶつけ合ったその時、黒苑の漆黒の刃が、甲高い音を響かせ、中間部から真っ二つに折れる。そして、突如ワノールの体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。その衝撃に耐え切れず、吹き飛ぶワノールは壁に背中を打ちつけ、円形に壁がくぼむ。亀裂の走った壁が、ワノールが落ちると同時に細かな瓦礫を落とし音をたてる。折れた黒苑の切っ先は高い天井に突き刺さり、漆黒の刃を少し覗かせていた。

「ケツ！ 軟な刀を使ってやがる。たった二回受け止めただけで折れちまうとはな。折角楽しめると思ったのに」  
「グツ……」

口元から血を薄らと流すワノールは、苦しそくに体を起こし男を真っ直ぐに睨み付ける。右手に持った黒苑は、もう使い物にならないと悟ったワノールは、柄を捨てると壁に立て掛けられていた三日月形の刃の剣を手に取る。それを、見据える男は、不適に笑みを浮かべ言い放つ。

「オイオイ、ふざけてんのか？ そんな装飾用の剣でこの俺様を切り裂こうってか？」

「目的は、国王の命か！」

「それ以外にここに来る理由があると思うか？」

大剣を持ったまま右手首を軽く回す男は、不服そうな表情を浮かべる。そんな男の気を引くワノールだが、カーブンはその場を動くともせず、ジツと男の顔を見据える。逃げる気が無い。そんな感じが窺える。全く、カーブンの考えている事が分からないワノールは、頭の中で様々な考えをあげていくが、答えなど見つからなかった。歯を食い縛るワノールの表情が歪んだ、その時、男が静かに口を開く。

「そうそう。一つ良い事を教えてやろう。この俺の他にも、十二魔獣が四人東西南北の守備砦を襲撃している。内、一人は、この俺よりも遥かに強い。まあ、お前は俺に殺されるんだ。関係ないか」  
「クツ。やっぱり、畏か……」

そう呟くワノールに、男は大きな声で言い放つ。

「オイオイ。人聞きの悪い事を言うなよ。これは、戦力を分断する戦略って言うんだよ。まあ、このリオルド様がいりや戦略なんて関係ないがな」

「やはり、五百年前と、同じか……」

静かに口を開くカーブン。「アアツ？」と、不機嫌そうな声を上げるリオルドは、鋭い視線をカーブンの方に向ける。堂々たる鋭き瞳をリオルドに向けるカーブンは、イスから立ち上がり力強い口調で問う。

「リオルド。我が命はくれてやろう。じゃが、若き次世代を背負う者達の命は助けたやつてくれ！」

その言葉に薄ら笑みを浮かべるリオルドは、大剣の切っ先をカーブンの方へと向け力強く床を蹴る。その瞬間、ワノールも勢いよく床を蹴りカーブンに迫るリオルドに向って一直線に駆ける。階段を駆け上るリオルドに背後から追いつくワノールは、右手に持った三日月形の剣を振りぬく。だが、リオルドは上半身を捻り、大剣を振り抜く。キンと少々短めの澄んだ音が聞え、ワノールの柄を握る手に衝撃が走る。三日月形の剣の刃が切られたのだ。あまりの衝撃に足が階段から離れた。宙に投げ出されたワノールの体。そして、微かに舞う黒髪。これは、ワノールの前髪だった。微かにリオルドの刃が掠ったのだろう。

階段から吹き飛び、激しく床に背中から叩きつけられるワノールは、少量の血を口から吐いた。一瞬息が止まり目の前が真っ白になる。剣の切っ先は、ワノールの足元の床に突き刺さり微かに震えていた。表情を引き攣らせながら体を起こすワノールは、霞む左目でリオルドを睨み付けた。

レイストビルから少し離れた森の中、太い木の枝に佇む一人の男。草木が揺れる度に黒髪を揺らすその男は、眠そうに欠伸をすると右手に持った包みを見据え、目を閉じる。その男の背後に音も無く背中に槍を二本担いだ男が現れた。サラサラの黒髪を靡かせた槍を担ぐ男は、目の前の男に静かに言う。

「ゼロ。作戦は巧く行った。北方ではジャガラがあの子と激突している」

その言葉に薄ら笑みを浮かべたゼロは、「ふん」と言いながら頷く。まるで興味の無さそうな声だ。確かに、今少し他の事を考えていた。この先の事を。だから、少し上の空になっていたが、すぐに男に返事を返す。

「ヴォルガは、行かなくていいのか？」

「ああ。俺はまだ平気だ。それより、まだ報告があるが聞くか？」

「報告って、西方ではロイバーン。東方にはレイバースト。南方にはデイクシー。とか、何だろ。別に興味ないな。奴等が誰の相手をして様とも」

その言葉に、小さな声で「そうか」と、呟いたヴォルガは暫し遠くに見えるレイストビルの方を見据える。あまりに小さくて誰が何処で、どんな風に戦っているのかは見えない。だが、確実にレイストビルの東西南北の守備帯が破壊されていくのだけは見る事が出来た。

## 第27回 狙われた国王 蒼髪の男との激突（後書き）

こんばんは……。崎浜秀です。

今回、スランプもありまして、更新が遅れてましたが、ようやく更新できました。

しかし、これからも、大分更新が遅れると思います。読者の皆様にご迷惑おかけします。

更新が遅れる理由は、僕が今度、小説大賞に挑戦しているからです。

こんなに未熟なのに、小説大賞なんか挑戦だなんて、無謀だと思っんですが、今の内一度挑戦しておいた方がいいだろうと、思いまして挑戦する予定です。

色々と読者の皆様にはご迷惑を掛けると思いますが、出来る限り更新できるよう努力したいと思います。これからもよろしくお願ひいたします。

## 第28回 北方の戦い

崩れた守備砦。

睨み合うフレイストとジャガラ。

風で舞う砂塵は、二人の足元まで上がり、人知れず消え行く。

鱗の様な形の刃の平が、日光を浴び煌びやかに輝きを放つ。

揺れるオレンジブラウンの髪は、フレイストの美しいグリーン  
の瞳を隠すかの様に左右に行ったり来たりを繰り返す。

そんなフレイストと対峙するジャガラ。

黒のマントが風で激しくはためき、長く目を隠すほど伸びた黒髪  
から時折覗く蒼い瞳。穏やかなその瞳の奥底に、何か冷たく恐ろし  
い悪意の様な物が秘められていた。

「その様な大きく小回りの利かない剣で、俺の相手が務まるのか？」  
「りんりゅう鱗龍を、甘く見るな」

フレイストは、そう呟き鱗龍と呼ぶ大剣の切っ先をジャガラの方  
に向け、中段の位置に構えジツとジャガラを見据える。動かずジャ  
ガラと視線をぶつけるフレイストには、自信があった。長い間、培  
った自分の剣術に。だが、それはジャガラの前では無意味だと、す  
ぐに知る事となった。

砂塵が先程までジャガラがいた所に舞い上がる。先程まで……。  
そう。もう、そこにジャガラの姿は無い。フレイストの視界から、  
いや。その場から一瞬で姿を消した。その時、地面を蹴った衝撃で  
砂塵が舞い上がったのだ。そして、フレイストがそれに気付いた時  
には、背後から首筋に冷たく鋭いものが向けられていた。

「クッ……」

「これで、終わりだ。儂い命だったな」



ジャガラの右腕に握られたナイフ。その刃が微かにフレイストの首筋に食い込み、真つ赤な血が、ナイフの刃に流れ行く。だが、すぐにナイフの刃がフレイストの首筋から離れた。それは、ジャガラの意思ではない。フレイストが素早く体を左に傾けたのだ。

宙を舞う真つ赤な血。それが、フレイストの首筋から、ジャガラの持つナイフの刃まで繋いでいる様に一瞬見える。その瞬間、肩越しにジャガラと目が合うフレイストは、左足を軸にして体を反転させ、鱗龍を振り下ろす。しかし、刃は空を切り、刃を振り下ろした勢いで砂塵だけが舞い上がる。

「なっ！」

驚くフレイスト。無理も無い。そこに、ジャガラの姿は既に無いのだから。鱗龍を構え直し辺りを見回すフレイストは、背筋に殺気を感じ、振り返る。その直後、ナイフの刃がフレイストの右頬を切りつけた。血が飛び散り、ズキツと痛みが走る。顔を顰めながらその場を飛び退くフレイストは、地に右膝を着きながらも鱗龍を構えた。

「まだ、わからない様だな。俺は、お前よりも速い。遥かに。お前のその剣は俺を傷つける事は出来ん」

「私は退く事はない。この国を守る為。人々を守る為。私は……」  
「力の無い者に、何かを守る事は出来ん。何かを背負うと言うのは、それ相応の力を持ち合わせて言う台詞だ。残念だが、お前にはその台詞を使う資格は無い」

落ち着き払い、冷酷な眼差しでフレイストを見据える。ジャガラの言った言葉は、フレイストの胸に重く突き刺さった。それは、ジャガラが言った通りだからだ。力も無いのに、人々を守るなど、出

来るはずが無い。ましてや、国などと言う大きな重荷を背負えるはずが無いのだ。自分の無力さに湧き上がる怒り。今まで、自分は何をしてきたのかと、自分に問いかける。他の種族よりも長く生き、自分は一体何を……。

湧き上がる怒りを全て自分にぶつけるフレイストは、歯を噛み締めギシギシと軋ませる。もちろん、鱗龍の柄を握る手も力が入った。切れた右頬から流れる真っ赤な血が、右頬全体を真っ赤に染め、テンテンと鱗龍の刃の上に滴れる。

「怒りは、己の身を滅ぼすだけだ」

「これ以上。人々を傷つけさせはしない」

「まだ、そんな事を言うか。さっきも言ったはずだ。力の無い者に――」

驚くジャガラは、咄嗟に後方に体を仰け反る。そのジャガラの目の前を鱗模様の刃の平が通り過ぎた。そう、いつの間にかフレイストが間合いを詰めており、鱗龍を振りぬかれていたのだ。咄嗟にそれをかわしたジャガラだったが、前髪だけが少しだけ宙に舞う。

完全に仰け反りバランスを崩しているジャガラに対し、鱗龍を振り抜いたフレイストは、手首を捻ると鱗龍の刃を立て、そのままジャガラに振り下ろす。刹那、ジャガラの姿が視界から消える。振り下ろされた鱗龍は勢いよく地面を叩き、地面が碎ける乾いた音が響き渡る。

碎けた地面に埋もれる鱗龍の刃は、瓦礫を弾きながらゆっくりと持ち上がる。顔を上げるフレイストの視線の先には、少々目付きを変えたジャガラの姿があった。荒げる息を口から吐き出すフレイストは、重々しく鱗龍を構えると、地を駆ける。フレイストが踏み込むたびに地面が碎けその音が徐々に速くなる。

鋭い目付きのジャガラは、黒マントの下に両腕を引き、体全体を黒マントで包み込む。目を伏せジツと動かないジャガラに、迫るフ

レイストは、左足を踏み込むと同時に力強く鱗龍を振り抜く。刃は風を切り、微かに揺らぐ。それでも、真っ直ぐジャガラの黒マントを捉えた。

刃が黒マントに食い込み、二つに裂く様に横一線に刃は進む。二つに裂かれた黒マントだけが宙に舞い、ヒラリと地面に落ちる。

「多少、素早く動ける様になったが、俺のスピードにお前はついてこない」

「ッ！」

斬り付けられた。背後から。右肩から斜めに真っ直ぐにナイフを下ろされたのだろう。服が大きく裂け、真っ赤な血が服の切れ目から少し覗く。その真っ赤な血の線の他に、レイストの背中には大きな傷痕が残っていた。それは、痛々しく無残なほどの傷痕だ。その為、この程度のナイフの傷など、全く可愛げがあった。

前方にふらつくレイストは、右足に力を入れ踏み止まると、そのまま地を蹴る。右足が力強く地を蹴った瞬間に、地面が砕け碎片が飛び散る。左足を軸にして振り向き様に鱗龍を振り抜くレイストだが、鱗龍は無情にも空を切る。

「クッ！」

「大振りだ。それでは、切れるものも切れない」

「グッ！」

やはり、背後から切りつけられる。次は、左肩から斜めに。服がクロスに裂かれ、真っ赤な血がエックスを描く。古傷が痛む。斬り付けられた傷よりも強烈に。歯を食い縛り痛みに耐えるレイストは鱗龍を地面に突き刺し、それを支えにして何とか立つ。激痛が体中を駆け巡るレイストは、視界が霞んでいくのを感じる。

そんなレイストの視界に映るジャガラの姿。長い黒髪に、細い

足。体を覆うのは煌く無数のナイフ。様々な大きさのナイフを所持するジャガラは、真っ直ぐフレイストを見据えて持っていたナイフを持ち替える。刃渡りの長い物に。

「終わりの様だ。お前の運命も……」

「ウツ……。安心しろ。私が死ぬ時は、お前も道連れだ……」

「強がりはやせ。お前に、俺を道連れにする力など、残っているはずはない」

そのジャガラの言葉に、軽く笑みを浮かべるフレイストは、鱗龍の柄から手を放しフラフラながらもその間に踏み止まる。そして、目を閉じ静かに口を開く。

「我が体に宿り、眠り続ける龍よ。今、目覚め我が身から解き放たれ大空を舞え！ 降臨せよ！」

「まさか！ お前、死ぬ気か！」

その言葉に笑みを浮かべるフレイストを中心に、突風が吹き荒れる。碎片がその突風に煽られ地面を転がり、崩れかかっていた砦の壁は音を立て崩れ落ちる。ジャガラの着ていた真っ二つに裂かれた黒マントは、その風に乗り空高く舞い上がる。

目を見開くフレイスト。グリーン色の瞳が艶良く輝く。薄らと涙が浮んでいたからだ。「さよなら」と、小さな声で呟くフレイストだが、その声は誰にも届かない。そんなフレイストの体に亀裂が走る。激痛と共に。声すら上げる事の出来ない程の痛みは、胸を貫くかの如く鋭い。亀裂は徐々に大きくなり、微かにフレイストの体の奥底で龍のけたたましい声が響く。

## 第28回 北方の戦い（後書き）

ご無沙汰しております。 崎浜秀です。

ようやく『クロスワールド』も28回を迎えました。 第一幕から数えると、128回。

結構な回数やってるんですね。 ここにきて、殆ど更新されてませんが……。

読者の皆様には、本当ご迷惑をおかけしております。 これからも、『クロスワールド』をよろしく願います。

## 第29回 崩れ行く思い 蘇る記憶

多くの魔獣の亡骸が地面に転がる。

凝血した暗紅色の血。腐敗し悪臭を漂わせる魔獣達の亡骸。

その中心にカインの姿があった。真っ赤な髪からは白煙が上り、血を浴びた顔は血が凝血し始め、暗紅色に染まっている。そのカインの顔に、いつもの笑みは無い。鋭く尖った目は怒りを纏い、その表情は険しい。

辺りに横たわる兵士達の無残な亡骸を見据えたカインは、その悲しみに目を伏せ力強く青空天の柄を握り締めた。そんなカインの背後から憎たらしい声が響く。

「ブラボ〜ッ。流石ですね。私の開発した兵器共を全て一人で」

振り返ると、そこに白衣の男、ロイバーンが立っていた。ずれた眼鏡を掛け直し、白髪のボサボサの頭を掻き毟る。猫背でホッソリした体格のロイバーンは、右足で魔獣の亡骸を踏みつけ、死んでいる事を確認してから、その体を足の裏で足蹴にする。そして、ゆっくりと大手を広げるロイバーンは、カインに向かって叫ぶ。

「その剣裁き、何処で覚えたのか分かりませんが、その一太刀一太刀が、鋭かったですよ」

「あなたは、誰ですか？」

そのカインの言葉に「フム」と、声を上げ腕組みをする。そして、ズレ落ちる眼鏡を掛け直し不適に笑みを浮かべながら答える。

「忘れてしまった様ですね。全てを。残念ですね」

「忘れた？ 何の事ですか？ 僕は何も忘れてなんか……」

「忘れてるんですよ。自分の犯した罪を」  
「僕の犯した罪……」

その瞬間、頭の中に何かの流れ込んでくる。  
燃える街。逃げ惑い、嘆き叫ぶ人々。燃える炎に身を包み苦しみ悶える者。そして、横に立つのは、白衣を着込むロイバーンの姿。  
頭に流れ込むこれは、カインの昔の記憶。ワノールと出会う前の完全に忘れられていた。  
人々の苦しむ声が、頭の中に響き、その声にかインの頭は割れる様に痛む。

「グアアアアアッ！」

頭を押さえ苦痛に叫ぶ。蘇る過去の自分の犯した罪。それは、悲惨なものだった。豊かな街を焼き尽くし、罪の無い人々を手にかける。そして、幼い子供まで……。

薄らと涙を流すカインは、力なく青空天を地面に落す。澄み冴える音が微かに響くが、カインの耳にはそんな音など入って来ない。人々の苦しみの声が頭に響いているから。

蹲り苦しむカインを見据えるロイバーンは、一步一步と歩み寄りカインの前で立ち止まる。そして、更に追い討ちを掛けるかの様に言葉を告げる。

「お前は人じゃない。私の作り出した兵器だ」

「うああああっ！ 止めるおとおおっ！」

頭の中に入り込んでくる過去の記憶に、カインは叫ぶ。そのカインの脳裏に鮮明に蘇るあのティルの故郷。花々が燃え、中央にそびえる大きな木が炎を身に纏う。散り行く木の葉は火に包まれ、ユラユラと灰になり消滅する。そして、その木の傍に自分がある事を。

「ああああああっ！ ぼ、ぼくはああああああっ！」  
「更に言えば、お前は十二魔獣の第二席を手に入れる筈だった存在だ」

頭の中に響いてくる人々の叫びの中に聞えるロイバーンの声。それが、更にカインを苦しめた。そして、ワノールと出会ってからのカインと言う存在が壊れ始める。今まで自分を慕ってくれた皆の記憶。フォンやテイル、ミーファにルナ、ウインスこの旅で出会った人々との記憶。全てが薄れてゆく。そして、パズルの様に砕け一つのピースへとバラバラに散ってゆく。暗い闇の中へと。

その瞬間、カインの頭の中は真っ暗になった。そして、鮮やかな蒼の刃の青空天は刃が淀む。まるでカインの心を映し出す様に。

苦しんでいたカインは、その痛みから解き放たれ、ゆっくりと手を下ろす。右手は青空天の柄を握り締め、俯いた顔の奥から不適に笑う口元が浮ぶ。肩を微かに震わせるカインは、「フフフフツ」と、不気味な笑い声を静かに響かせる。そして、顔を上げ空を見上げたカインは、大声で笑い出す。

「フハハハハッ！ 響かせろ！ 苦痛の叫びを！ 人々の嘆きの声を！」

大手を広げ大声でそう言い放つカインを見据えるロイバーンは、微かに笑みを浮かべながら小さな声で呟く。

「どうやら。蘇った様ですね。私の作り上げた史上最強の殺人兵器の記憶が……」

背を向け歩き出すロイバーンは、「事は成した」と、呟きその場を去った。



残されたカインは、周りに転がる屍を見据えると、青空天で自分の手首を軽く切りつけ、辺りに自分の血を撒き散らす。その血は地面に溜る多くの血と混ざり合い、何処までも広がる。そして、カインを包み込む様に血が炎上し、地面に転がる亡骸を黒く焼き尽くす。

「フハハハハッ！ 懐かしき臭い。我をもつともつともてなせ！」

火の海の中で、一人叫びをあげるカイン。完全に昔の記憶が蘇っていた。村を焼き払う快感。人々の肉片が焼ける臭い。全てが体中に蘇る。懐かしいその快感に浸るカインに、優しいあの面影は無かった。

そんな火の中を複数の兵士が駆け抜け、中央にいるカインの方へと姿を現す。まだ中心は火の手は回っておらず、その複数の兵士達とカインが対峙する。

槍を構えた者。剣を構えた者。各々様々な武器を構える兵士達を見据えるカインは、不適に笑みを浮かべ、淀んだ青色の青空天を翳し叫ぶ。

「貴様等が、私の初めの生贄だ！ 光栄に思え！」

「カイン殿！ 何を仰っているのですか！ この炎を消してください！」

み、  
手前で槍を持つ兵士がそう言う。すると、鋭い目付きで兵士を睨

「我に指図をするな！」

と、カインが翳した青空天を振り下ろす。その刃は速すぎ目で追う事は出来ず、風が生暖かな空気を兵士達にぶつけた。兵士達が気付いた時には刃の切っ先が地面スレスレで止まっており、その先から

滴れるのは真っ赤な血だった。兵士達がそれに気付いた時、手前にいた兵士の体が血を吹きながら崩れ落ちる。

「隊長！」

すぐ右隣にいた兵士が叫ぶ。そして、カインを睨み持っていた槍を突き出す。槍の刃がカインの左肩を掠め、血が迸る。その瞬間にカインの口元に笑みが毀れ、その意味を兵士は理解する間も無く焼けた。肩から飛び散った血が兵士の体に付着したのだ。

「うあああつ！」

「フハハハハハッ！ 燃えろ！ 燃えろ！」

燃え行く兵士。黒く焦げた肉片と悪臭だけが残る。漂う悪臭に顔色を変える兵士達は、逃げる事も戦う事も出来ぬまま青空天に切り裂かれた。血飛沫が飛び、体は炎に焼かれ。跡形も残らなかった。

## 第29回 崩れ行く思い 蘇る記憶（後書き）

久し振りの更新です。

読者の皆様に楽しんでもらえれば嬉しいです。

中々更新できなくて本当に、申し訳ないと思っております。

こつやって、毎回後書きに書くのもなんですが、出来る限り早く更新できるよう努力したいと思っています。

気長に待ってもらえると嬉しいです。

### 第30回 体格差

瓦礫と化した壁。

その瓦礫の下に埋もれる兵士は、既に生きてえ動かない。壊れた壁から中に流れ込む風が、微かな埃を舞い上げ静かに消えた。

砦の出入口の前に立つ小柄なウインス。そして、二十メートル先に立つ大柄な男レイバースト。その背丈は優に二メートルを越え、腕も脚もウインスの何倍もの太さ。頭に髪など無く、血管が軽く浮き出していた。

「誰だ！ お前！」

「……」

返事は無く、額に開いた不気味な真つ赤な瞳がウインスを見る。牙狼丸の柄を右手で握るウインスは、右足を引き身を屈める。そして、いつでも牙狼丸が抜ける様に、左手で鞘の上を握り親指を鏝に掛ける。

ウインスは、自分の胸の鼓動が体中に響くのを感じた。それは、今までに無いほど早く脈打ち、額から流れる汗は尋常ではない。

ポタリ…ポタリ……。静かに滴れる汗は、乾いた地面に落ちすぐに消えた。緊迫した空気に、溜らずウインスが地を駆ける。だが、その手に牙狼丸は握られておらず、鞘に入ったまま腰にぶら下がっていた。

「風よ！ 集まれ！」

右手を広げ後ろに引く。その手の平に風が微かに渦巻く。

「くらえ！」

そう叫びながら、レイバーストに腹目掛けて右手を突き出す。右手に集まった風と共に、レイバーストの腹を捉える。渦巻く風はウインスの右手に押され、レイバーストの腹に食い込む。その手応えをウインスも手の平に感じていたが、レイバーストの体はピクリとも動かない。それどころか、ウインスの体が渦巻いた風に弾き返された。

「のわっ！」

地面を転げたウインスの体は、土煙を舞い上げ静かに動きを止める。右腕がヒシヒシと痛むウインスは、左手で右腕を押さえながら体を起こす。

「グツ……。今、確かに手応えを感じたのに……」

表情を引き攣らせるウインスに、目を向けるレイバーストはここで初めて口を開いた。

「風牙族。風を圧縮しそれを拳と共に敵にぶつける。だが、それは私には通じない」

「何だと！ なら、これならどうだ！」

足の裏に風を集めたウインスは、力強く地を蹴る。ウインスの姿が消え、後塵だけがレイバーストに迫った。だが、顔色一つ変えないレイバーストは、静かに息を吐き額の目だけを見開く。その真っ赤な瞳にははつきりと捕捉されていた。渦巻く風を右拳に集めるウインスの姿が。

「無駄な事を……」

誰にも聞えない程小さな声で呟くレイバーストは、両拳を脇腹の位置に構える。その行動を駆けながら見ていたウインスだが、そんな事関係ないと、右手を上半身を捻りながら後ろに引き、勢いよくレイバーストの腹に向って突き出す。鈍い音と共に衝撃が広がり、二人のたつ地面が砕け微かに陥没し、風は微量の砂塵を舞い上げさせる。

「グウツ……」

崩れ落ちるウインスは、左手で右腕を押さえた。先程よりも強い衝撃が右腕を襲ったのだ。拳からは薄らと血が滲んでおり、震えが止まらない。

腕を押さえるウインスを見下ろすレイバーストは、静かに右手でウインスの頭を掴み、軽々と体を持ち上げる。

「ウグツ……ぐああっ！」

「私の体に拳は通じない。そして、風は私の体に弾かれ、勢いそのままにお前の体を蝕む」

頭を強く握られ、割れる様な痛みを伴うウインスには、レイバーストの言葉を理解する事が出来ない。

ただ、分かるのは頭蓋骨が軋むのだけ。そんなウインスの頭を掴むレイバーストは、地面にその小さな体を投げ捨てる。

地面を転げ、小さく蹲るウインスは、右腕を押さえたまま苦痛に声を震わせる。

「うっ……うっ……」

「その腰の刀を、何故抜かない。それとも、それは飾りなのか？」

「だ……黙れ……。お前など、牙狼丸を使わなくても……」

痛みに表情を歪めながらも、力強くそう言い放つウインスは牙狼丸を、鞘から抜こうとはしない。いや、実際は抜く事が出来なかった。抜こうとすると、手が震え力が入らなくなるのだ。

それを、レイバーストに悟られぬ様に振舞うウインスは、痛む体に鞭を打ち静かに立ち上がる。だが、その足は既に限界に達しており、膝が震え力が入らない。立っているのがやっとと言う感じだった。

「拳は通じないと身を持って分かったと思ったが……。あまり、学習していないようだ」

「黙れ……。お前に……見せてやる……」

険しい表情を見せるウインスは、目を閉じ全身に風を集める。今まで微風だった風が、吸い寄せられる様にウインスの周りに集まり始めた。それは、渦状にウインスの体を取り巻き、砂塵がウインスの姿を隠す様に舞い上がる。

表情一つ変えないレイバーストは、軽く足を屈伸させると、力強く地面を蹴る。その地面を蹴る衝撃から地面に亀裂が走っており、くつきりとレイバーストの蹴った跡が残っていた。だが、それ以降地面を蹴った跡が無い。それもそのはず、レイバーストは走ったのでは無く、宙に舞ったのだ。

宙を舞う巨体。それは、放物線を描きながら確実にウインスに向っていく。

もちろん、ウインスはこの事に気付いていない。目を閉じて風を集めているのだから。ウインスがこの事に気付いたのは、体を取り巻く風がレイバーストの体に触れた時だった。

「なっ！」

「もう、遅い！」

逃げる事など出来なかった。あの巨体が重力に引つ張られ勢いよく落ちてきたのだ。そのスピードをかわすなど容易に出来るものではない。

小柄のウインスの両肩に体重を全て乗せるレイバースト。その衝撃がウインスの両肩を貫き、後方へと体が傾く。『倒れる！』と、思った時には視界が一転し、ウインスの体はレイバーストの全体重を支えたまま背中から地面に叩きつけられた。

「ガハッ！」

地面が碎ける音と同時に、激しく吐血するウインス。その血は宙を舞い、ウインスの体に降り注ぐ。

衝撃が背中から頭へと突き抜ける様に襲い掛かり、意識が吹っ飛んだ。それと同時に、ウインスの体を取り巻いていた風は、一瞬で消えた。

微かにひび割れた地面に、上半身が少々埋もれるウインス。その両肩にはレイバーストの大きな足が堂々と立ち、ウインスの顔を見下す。微かに目が開いている様だが、もう意識が無い。

「この程度とは……。全く、歯ごたえが無い」

ぼそりと呟くレイバーストは、静かにウインスの体から足を下ろす。割れた地面の破片を踏み潰すレイバーストは、そのまま数歩進んでグラスター城を見据える。

微かに意識を取り戻すウインス。頭の中はぼんやりとしていて、指先の感覚が無い。動いてはいる様だが、全く感覚を感じないため、少し妙な感じがする。それに、体に走っていた激痛が、ピタリとやんだ。感じるのは、風の感覚だけ。まるで、夢の様な感覚だった。



静かに立ち上がるウインス。体を取り巻く風は、辺りの細かな石粒を舞い上げる。砕けた地面の破片すら、その風にカタカタと揺れ、今にも風に飲み込まれそうになっていた。渦状にウインスを取り巻く風は、次第にその激しさを増し、轟々とした音を辺りに轟かす。

「懲りないようだな。風は、お前の体を蝕むのだぞ？」

ゆっくり振り返るレイバーストは、呆れた様子でウインスを見た。だが、先ほどとは明らかに違う風の勇ましさ。そして、ウインスの胸の中心で輝く黄緑色の水晶。それは、風魔の玉だった。

その玉は煌びやかに輝き、まるで風を引き寄せている様で、ウインスの体を取り巻く風は一層強まる。

額の目を見開くレイバーストに、黄緑色に輝く玉が光り声が響く。

「静かなる風は、わが身を包み。荒々しい風が、貴様を喰らう。風は刃と化し、わが身を如何なる障害からも守りつくす！」

「その玉は、まさか、風魔の玉か……」

目を細めるレイバーストに対し、ウインスは腰の牙狼丸を素早く抜き横一線に一振りした。

### 第31回 空中戦

空に浮ぶ二つの影。

漆黒の翼を羽ばたかせるデイクシーと、鋭く目を見開くノーリン。二人の間には激しく荒々しい風が吹き荒れ、服の裾はその風によりバタバタと音をたてながらはためく。だが、体だけはピクリともしない。それどころか、一定の状態をずっと保っている。

デイクシーの長い黒髪が、風で乱れ顔の上半分を覆い隠す。その為、表情は分からない。だが、その全身から放たれる殺気は、ヒシヒシと伝わった。

静かに深呼吸を繰り返すノーリンは、その殺気をもものともせず、真っ直ぐデイクシーを見据えたまま口を開く。

「ウヌの目的は何だ」

「フフフ……。目的何て無い。ただ、私が楽しめればそれで良い。人々の苦しむ声が聞ければそれで良い」

「戯言を……。その為だけに、人々を傷つけるといふのか」

「フフフ……。それが自然の通りだ。人が動物を食う様に、私達は人を喰らう。これも、食物連鎖と言つものだ」

不適な笑みを浮かべるデイクシーは、大きく翼を広げた。その瞬間、顔の上半分を覆い隠していた乱れた黒髪が逆立ち、デイクシーの鋭い目付きが露になる。更に、大きく広げた翼は、風を掻き漆黒の羽根が無数宙に舞う。

瞬時に先ほどの光景を思い出すノーリンは、身構え受身の態勢をとる。だが、ノーリンの予想とは裏腹に、宙を舞う漆黒の羽根は一直線に急降下していく。

そして、知る。デイクシーの狙いが、初めからノーリンでなく地上に居る兵士達だと。ノーリンがそれに気付いて振り返ると、兵士

達の叫び声が響いた。

「ぐがはっ!!」

「うあああああっ!!」

漆黒の羽根によつて、切り裂かれた兵士。地面に飛び散る血痕は、その残酷さを物語、まだ息のある者は、止め処なく流れる血と体に走る激痛に甲高い悲鳴の様な声を上げている。「助けてくれ! 助けてくれ」と。だが、もう助からない事は目に見えている。血を流しすぎているのだから。

上空から見ると地面に広がる兵士の血が池の様に見え、倒れる兵士は島の様に見えた。体から切り離された腕や脚が、所々に転がっており、ノーリンはこれを見ているのが辛かった。

目を伏せ拳を握り締める。儂い命が、天命尽きる前に消えていくのが、ノーリンには耐え切れなかったのだ。

そんなノーリンの耳に聞える甲高いデイクシーの笑い声。人の命を虫けら同然に奪っていくデイクシーを、ノーリンは許せなかった。臉を静かに開きデイクシーの方を鋭く睨み口を開く。

「よもや、口で言っても無駄の様だな」

「フフフ……。感じる　感じるわ。この肌に、全身に!　弱い者達の苦痛の叫びが!　胸の奥底まで!」

「その人々の苦痛を身を持って知るがいい」

右足で宙を蹴る。勢いよくデイクシーの方へと体が吹き飛ぶ。風が頬を流れ耳を塞ぐ。そして、ノーリンがデイクシーに対して右拳を振るう。右拳に重みがかかる、地面に叩きつける勢いで振り抜いた。

「ぐぐっ!!」

左頬を殴られ、急降下してゆくデイクシー。だが、すぐさま翼が大きく風を掻き、地面スレスレで勢いは止まる。砂塵が舞いデイクシーの体を円形に取り巻く。体勢を整えデイクシーを見下ろすノーリンは、もう一度宙を蹴る。

口元から血を流すデイクシーは、不適に笑みを見せると力強く翼で風を掻く。その瞬間、突風が吹き荒れ、地面が砕け窪んだ。

「私をもつと楽しませろ！」

「戯言は仕舞いだ！」

ノーリンが右拳を突き出す。拳がデイクシーの顔に向かって伸びる。その瞬間、デイクシーの口元がニヤリと緩む。

「くっ！」

「甘いよ」

体を横にし、ノーリンの拳をかわす。急降下していたため、勢いを殺す事の出来ないノーリン。そのノーリンの後頭部目掛けて、デイクシーは体を捻り蹴りを入れる。

鈍い音が響きノーリンの体が地上に突き刺さる。爆音が轟き、土煙が舞い上がる。地面は砕け亀裂が走り大きく窪んでいる。そんな窪んだ地面の中央にノーリンの体が少し埋まっていた。

「ウグツ……ああ……」

咄嗟に体を捻り背中から地面に落ちた為、大分衝撃は軽減できた。だが、後頭部を蹴られた為、意識は大分朦朧としている。視界が揺らぎ、上空に居るデイクシーがかすんで見える。だが、微かに聞えていた。デイクシーの羽根の音が近付いているのに。そして、あの

甲高い笑い声も。

「フハハハハツ！ その程度か？ 空鳥族！ 先ほどまでの威勢は何処へ行った？」

「ワシとした事が……。つい、頭に血が昇っちゃまった……」

いつもの細目のノーリンは、地面からゆっくりと体を抜き、痛みを耐えながら立ち上がる。足元が少しふらつく。それもそのはず、まだ意識がはつきりしていないのだから。二、三度首を振り、意識をはつきりさせようとする。だが、そのノーリンの顔面に向ってデイクシーの右膝が飛んだ。ハッキリしない意識の中、咄嗟に両腕を顔の前に持っていていき、直撃を防ぐ。

「ぐっつ！」

「腹が、がら空きだよ！」

両腕をあげたため、がら空きになったノーリンのボディに、デイクシーの左膝が深く入る。

「がはっ」

吐血し、真っ赤な血が飛び散る。フラフラと後退し、少し前屈みになるノーリンの顎に続け様に右足の蹴りが入る。顎を蹴られ体が大きく伸びる。地から足が離れ踏み止まれない。腹部と頭部へ同時に刺さる痛みが、徐々に薄れる。意識と共に。だが、デイクシーはそれだけでは終らなかった。

「まだまだ、寝かせないよ！」

含み笑い混じりにそう言うデイクシーは、地から離れた右足を左

手で掴むと、手前に引く。そして、引き寄せたノーリンの腹に向けて、全体重を掛け肘を落す。すると、ノーリンの体は激しく地面に叩きつけられ、地面の割れる澄んだ音と共に、ノーリンの吐血する声が混ざり合う。

「がっ！」

息が、ほんの一瞬だけ止まる。空に舞う真っ赤な血が、ノーリンの視界を遮り、青い空が真っ赤に映る。

砕けた地面に、ノーリンの体は微かに埋もれていた。意識があるのか、はつきりしないが、全く動かない。だが、まだ息はある。僅かに胸が上下しているから。

「この程度？ 私に喧嘩売っておいて」

ノーリンの横に立つデイクシーは、右脇腹を足蹴にする。しかし、巨体のノーリンはピクリとも動かない。そんなノーリンの右脇腹に、右足を乗せたままデイクシーは大声を張り上げて笑う。その声は、守備砦の中まで聞えた。

微かにノーリンの人差し指が動き、それに連鎖する様に、指全体が動き出す。甲高いデイクシーの笑い声が、ノーリンの頭の中に響く。霞んだ視界が、徐々にはつきりとして行き、デイクシーの姿を捉えた。

「こ……これで……、気は……済んだか？」

弱々しい口調。殆ど掠れて聞えない程の声に、デイクシーは気付く。

「お前を殺して初めて快感が得られるんだよ」

口元から血を流しているノーリンを見下すデイクシーは、腹部を踏みつけ不適な笑みを見せる。腹部に走る激痛に、表情を引き攣らせるノーリンは、右手でデイクシーの足首を掴む。意外なノーリンの握力に驚きを隠せないデイクシーは、すぐにその手を振り切つて場を離れようとした。だが、その手から逃れる事は出来なかった。

「くっ！ き、きさま！ 何処に、そんな力を！」

「今まで……。ワシが、本気でウヌと戦つておると思つていたか？」

「何を、ふざけた事を、先ほどまで手も足も出なかつた奴が！」

「手も足も？ ホザケ小童！」

怒声を響かせ地面に埋もれていた体を勢いよく起こす。微量の碎石がノーリンの体から落ち、乾いた音を響かせた。足をつかまれたデイクシーは翼を力強く羽ばたかせ飛び立とうとしている。その為突風がノーリンの体を襲う。砂塵が舞い上がり、細かな石粒が飛び交いノーリンの皮膚を傷つける。所々に真つ赤な線を描いていくが、ノーリンはピクリともしない。

「フハハハッ！ どうした！ やはり、手も足……！」

「人々は去つた。ウヌの獲物はワシしかおらん。これで、後ろを気にせずウヌに手を下す事が出来る」

そう言葉を述べると同時に右腕を真下に引く。空に舞おうとするデイクシーの体は、衝撃と共に垂直に引っ張られ、顔が丁度ノーリンの胸の位置にまで落ちる。その瞬間、視界に飛び込んだのは、大きなノーリンの左手の手の平だった。

第31回 空中戦(後書き)



### 第32回 死に逝く命

壁には鋭い刃物で切りつけられた痕が無数残る。

床には刃の折れた剣の柄だけが散らばり、切っ先部分は壁や天井に突き刺さって残っている。

血痕が幾つか赤絨毯の上に滴れていたが、それに気付く者は居ない。

王座の前には既にカーブンの姿は無く、殺気を漂わせるリオルドの姿だけがある。両膝に両肘を寄せ手を組み合わせ、顔を伏せるリオルド。ピクリとも動かず、ジツとしているリオルドは、静かに顔を上げると、不適に笑い出す。

既に、ワノールの姿も、カーブンの姿も無いその部屋に、不適なリオルドの笑い声だけが響く。そして、その声は廊下まで伝わっていた。

「グハハハハッ！ 逃げ惑え！ 弱者共！ 俺をもっと楽しませろ！」

廊下に響くその声に、ワノールは足を止める。そんなワノールの右肩に支えられているカーブンは、左肩から右脇腹に掛けて酷く切り裂かれ、血だけが服の切れ目から溢れ出ている。傷は深く、血は止まらない。幾らルナでも、きつとこの傷を治す事は出来ないだろう。

もちろん、ワノールもその事を悟っていた。だが、諦めることが出来ず、何とかルナの所へと連れて行こうと、リオルドから逃げ出したのだ。

「グウツ……。ワノール殿……。頼みが……。ある」

弱々しいカーブンの声に、ワノールは何も言わず耳を貸す。

「ワシは……グフツ！ もう、長くない……。頼む……。屋上の……白龍香の、グフツ！ 所へ……」

「屋上だな。わかった。もう、それ以上喋るな」

「すまん……。あそこは……ワシと……妻の……思い出の場所だな　グフツ！」

吐血するカーブンに、「喋るな！」と、ワノールは叫ぶが、カーブンは弱々しい口調で言葉を繋げる。

「妻は……白龍香に……困われ……。息を引き取った……。あの……真っ白な花びらが　グフツ！　グフツ！　妻の血で……赤く染まる　ガハッ！」

大量の血が口から吐き出される。既に、カーブンの体力と気力は限界だった。ワノールもそれを知っていた。だが、カーブンの言葉を止める事を出来ない。何故か、聞かなくてはいけない気がしたのだ。

「赤く染まった……白龍香は……、いつしか元の　グフツグフツ。白い白龍香へと……変わっていた……。じゃが、一輪だけ……たった一輪だけ……グフツ、ウツ！」

急にカーブンが胸を押さえ苦しみます。流石にこれ以上話せば、屋上まで辿り着く前に息絶えてしまうと、ワノールは悟った。その為、歩みを少し早めた。

声を出す力も無くなったのか、カーブンが急に喋らなくなった。だが、微かに呼吸をするのが聞える。その為、まだ息がある事が分かった。

「大丈夫だ。すぐに屋上に着く。それまで、死ぬな」

ワノールはそう声を掛けるが、反応は無い。それでも、ワノールは声を掛け続ける。だが、カーブンの息は徐々に弱まり、次第に体も冷たく変わる。何より、血の色が黒ずみつつあった。

一歩一歩と前進するワノールは、ようやく屋上へと続く階段の前に辿り着く。すでに虫の息で、今にも息絶えそうなカーブンの方に視線を送る。口元には吐き出した血の痕が残り、顔のアチコチに血痕が残る。どれも凝血し既に赤黒い塊になっていた。

ワノールが動きを止めたのに、気付いたのかカーブンが静かに口を開く。

「すまんのう」

弱々しいその口調に、ワノールは力強く言う。

「国王が、兵士に謝る事は無い。国王たる者、常に堂々とするものだ」

「そつかのう……」

掠れた声。その声はもうワノールの耳にも微かにしか聞えない程の声だ。そんな弱々しいカーブンの声に、ワノールは静かに笑みを浮かべて答える。

「ああ。そつだ。あんた程の国王はもつと堂々としなければな」

「ワシは……十分、堂々としておるつもりじゃがな……」

カーブンが微かに口元に笑みを浮かべる。だが、その笑みもすぐに険しい表情へと変わる。顔色も悪い。瞼も殆ど閉じかけ、体も冷

たい。だから、ワノールは急いで階段を上り始めた。慎重に一歩一歩。

螺旋状に伸びる長い階段をゆっくりと上るワノールは、右肩に担ぐカーブンを気にしつつ背後から迫る殺気にあせりを見せる。確実に奴が迫ってきていた。時折、背後から聞こえる不気味な笑い声が、徐々に大きくなっているのがその証だ。

「くっそ。あの化物……。追いかけてくるか」

「ぐふっ。ワシを置いていってくれ……」

「な、何を……」

そこまで言いかけたワノールは、カーブンの顔を見て言葉を呑む。それは、カーブンが今にも息絶えそうだったからだ。先程まで微妙に感じていた覇気は感じられず、瞼も殆ど塞ぎかかっていた。

「おい！ しっかりしろ！ 目を開ける！」

「わ……しは、長く……生き過ぎた……。ここらが……潮時じゃ……

……。例え……白龍香が……見れずとも……満足じゃ。後は、君達の時代だ……。この世界を……ウツ！」

息を引きとった。屋上へたどり着く前に。大量に血を流したためだ。どちらにせよ、あの傷では屋上に行けるとは、思えなかった。わかっていた事だったが、悔しかった。カーブンの頼みを聞く事が出来なかった自分が、非力だと感じた。

握った拳は微かに震え、その手の平からは血が滲み出て、指の間から点々と滴れる。歯を食い縛り、怒りを堪える。そして、静かにカーブンの体を持ち上げ、残りの階段を上り始めた。何も言わず、ただ黙って一段一段。

リオルドの不気味な笑い声が、後方から聞こえてくる。だが、ワノールは止まる事なく階段を上り続けた。

「東西南北の守備皆前で行われている戦闘が、そろそろ終幕を迎えそうだがどうする？」

太い木の枝にしっかりと両足で立つヴォルガは、腕を組み静かにレイストビルの方角を見据えながらつぶやく。黒髪がユラユラ揺れ、木の葉がザワメク。その音に混ざり、ゼロの含み笑いが聞こえる。

「フフフツ。最悪の終幕を迎えそうだな。俺達の軍は」

「どう言う事だ？」

「ジャガラも、デイクシーも、レイバーストも、相手を軽んじてる。あれじゃあ、勝てる相手にも勝てない。それに、奴らの力が跳ね上がっている。獣化もしないで勝てる相手じゃないな」

落ち着いた口調のゼロは、両足を宙にブラブラさせながら木の枝に座り込んでいる。全く仲間を助けに行くつもりは無さそうだ。

「今、あの三人を失うと、かなり戦力が落ちるが、良いのか？」

「それは、困るな。これ以上、戦力が落ちるのは……」

「これ以上？ と、言う事は……。他に戦力が落ちる事があったのか？」

「ああ。少しばかりもめてな」

ゼロはそう言い苦笑する。そんなゼロの表情にヴォルガは、ハツとする。嫌な予感と、言うよりも何と無く予期していた。心のどこか奥底で、いつかはこうなると。

「まさか、フォルトが抜けたのか！」

「リリアと一緒にな」

「しかし、今あの二人に抜けられるのは！」  
「しょうがないさ。あいつは俺に逆らった。それに……」

一瞬、ゼロの表情が曇る。なにやらもの寂しげな顔のゼロだが、すぐに笑みを浮かべ立ち上がった。と、同時に木の葉を揺らしていた風が収まり、静まり返る。黒髪の合間から見えるゼロの瞳は、鋭くぎらついている。

「さて、行こうか。目的は果たした。これ以上、ここで暴れる必要はない。特に、リオルドは早めに止めないと、取り返しをつかない事をしでかしそうだ」

「なら、ゼロはリオルドの所に行くといい。とりあえず、俺はジャガラの方へ行く。一番危険なのは、多分あっちだ。それに、俺が行く方が良いだろう」

「そう。それじゃあ、ガゼルはディクシーの方へ、クローゼルはレイバーストの方へ行ってくれ」

ゼロはそう言い、枝に立ったまま真下を見下ろす。そこには、真っ赤な髪のカゼルと、クネクネとした長身のクローゼルの姿があった。相変わらず、鋭い目付きのカゼルは、ゼロの方を睨み付け、「ふん」と、馬鹿にした様に笑い言い放つ。

「ふざける。俺の目的はあいつを殺す事だ。あいつ以外とは戦う気は無い」

そう言い残し、立ち去ろうと右足を踏み出したその瞬間、背後に冷たく凍りつくような殺気を感じ、それ以上足が前に進まなくなつた。その殺気に瞳孔が開き、背筋には大量の冷や汗があふれ出る。体が動かさず、息が出来ない。まるで、この空間が凍り付いてしまつたかの様に。

「うくっ……。がっ……」

「俺に逆らうな。俺の命は絶対だ。それとも、俺と遣り合って死にたいか」

「ゼロ。やめろ。これ以上、仲間を減らしてどうする」

ヴォルガのその一言で、ゼロはわれに返る。目を閉じ眉間にシワを寄せた。ようやく、その殺気から解き放たれ、ガゼルは息を大きく吸い込んだ。

### 第33回 静まる風

その場に轟く龍の呻き声。

風は更に強まり、フレイストを砂塵が包み込む。飛び交う微粒子の塵こみに、視界を遮られてゆくジャガラは、右腕で顔を隠す様子にながら呻き声の聞こえる方に目をやる。

風の音が一層強まり、ジャガラの長い黒髪が風を受けて激しく舞う。前髪に隠れていた鋭い目が、はつきりと伺う事が出来る。そんなジャガラの表情は険しく、必死に奥歯をかみ締め風に耐えていた。砂塵の渦の中心には、フレイストの姿があつた。裂けた服から覗く亀裂の走る体。亀裂からは光が溢れ出し、今にもその身が砕け様としている。声にもならないほどの激痛に、片膝を着く。右手で固く胸倉を握り締め、ゆっくりと瞼を閉じる。ピキッピキッと、体が音をたて、更に龍の勇ましい声が大きくなってゆく。もうじき自分の命が尽きると、フレイストは確信した。その瞬間、風の音を切り裂く音と、龍の声を掻き消すかの如く雄雄しい声がフレイストの耳に届く。

「ぐおおおおおっ！」

その声に瞼と開くと同時に、視界に巨大な槍を二本、手に持った男の姿が映る。暴風吹き荒れるその中を諸共しない男は、身を屈めると二本の槍を交差させ、そのままフレイストに突っ込む。交差された二本の槍は、交わる柄の間にフレイストの首を挟み、そのままの勢いで押し倒した。

柄に首を押さえつけられ、フレイストは一瞬意識の飛んだ。それと同時に、亀裂からもれる光が薄れてゆき、亀裂も徐々に消えて行く。開きかけていた背中の痛々しい傷痕から聞こえてくるけたたましい声は、苦しむかの様な声を上げ聞こえなくなった。



「ぐがっ！」

「悪いが、今お前に死なれては困る」

「だ、誰だ……」

槍の刃が地面に刺さり、その交差した柄に押さえつけられるフレイストが弱々しくつぶやく。その柄の先には、黒髪を揺らすヴォルガの姿があった。何事も無かったかの様に清々しく、落ち着き払うヴォルガは柄を握ったまま、フレイストのグリーンの瞳を見据えて言葉を告げる。

「お前の体内に居る龍には、暫く眠ってもらった」

「な……んだ……と……」

朦朧とする意識の中、何とかヴォルガに言い返す事の出来たフレイストだったが、もう限界だった。体も精神も。瞼が重く、自然と塞がり始める。意識を保とうとするが、無常にも瞼は落ちて行く。そんな中、ヴォルガの言った一言が頭に残った。

『これからは、お前がこの国を収めなければならない』

何を言っているのか、この時はわからなかった。と、言うより朦朧とする意識の中で考える事など出来なかったのだ。

フレイストが完全に意識を失った。交差したまま地面に突き刺さる槍を、引き抜いたヴォルガは静かにそれを背中に背負う。そのヴォルガに対し、ジャガラが声をかけた。

「助かった。しかし、お前が来たと言う事は、作戦は成功したと考

えていいのか？」

「成功したかは、わからん。リオルドからの連絡はまだ来ていないからな。だが、時間的にこれ以上は俺達が不利だ」

「そうか。まあ、あいつの事だ。自分勝手に暴れているのだろう」

抉れた地面をヴォルガの方に向って歩き出す。瓦礫も転がり足場は悪いが、軽快な足取りでヴォルガの隣に移動した。槍を担いだヴォルガはレイストビルの中央に見える城に目をやる。

「それで、他の奴らはどうなった？」

「皆、悪戦苦闘といった所だ」

「俺だけではないと言う事か」

「ああ。そう言う事だ」

落ち着いた口調のヴォルガは、静かにレイストの顔を見下ろし、ジャガラに問う。

「強かったか？」

「意外とな。だが、まだまだだ」

「そうか……」

そう呟き二人はその場を後にした。

振り抜かれた牙狼丸。鋭く美しく光を反射する刃の先に、薄い紅色の血が付着しており、それが点々と地面に滴れる。

ウインスの胸元に輝く風魔の玉は、更に風を集め力を強める。だが、徐々にウインスの体にも異変が起きる。集まった風に体が耐え切れず、体を風が切り裂いて行く。真っ赤な線が幾つも引かれ、血が風によって飛ばされ地面に降り注ぐ。

そのウインスから間合いをとったレイバーストは、服が胸の位置から裂け、血が微かに流れていた。

「くっ。かわしきれなかった。しかし、風魔の玉を持っていたとは、驚いた」

「かわしたか……。次は、かわさせん」

「！」

レイバーストの方に体を向けたと思ったその刹那、ウインスの姿が消える。そして、次の瞬間レイバーストの目の前に、ウインスの姿が見える。鋭ききらめく牙狼丸がすぐさま振り下ろされた。レイバーストは、素早く後方へと飛び退く。

空を斬り牙狼丸は地面を砕いた。碎石が飛び散りウインスの体を囲む風によつて、木つ端微塵に粉碎する。切っ先が地面に埋まる牙狼丸を、そのまま強引に切り上げる。更に地面が砕け、風により粉碎され、煙の様に宙に舞う。切り上げられた牙狼丸の切っ先が、レイバーストの右頬を掠める。

「チッ！」

「まだまだ行く」

そう呟くと、切り上げた牙狼丸の刃を返し、もう一度振り下ろす。

「クッ！ 何度も同じ手を！」

振り下ろされた牙狼丸を左へとかわす。その刹那、牙狼丸の刃の向きがレイバーストの方へと向き、素早く横に振り抜かれる。かわす事など出来ず、牙狼丸の刃がレイバーストの右腹を捉えた。

「くっ！ なめるな！」

レイバーストが叫んだ。すると、レイバーストの右腹に直撃した牙狼丸に重く硬い手応えを感じた。それは、体を斬ったと言うより、鉄を叩いたと言った様な手応えで、澄んだ音が辺りに響いた。

牙狼丸を引き、後方へ素早く退く。右手に軽く持った牙狼丸の刃が微かに震える。それは、持っているウインスにしか感じない程微かなもの。その振動を止める為、刃の平に左手を添えたウインスは、刃の平に左手を添えたまま牙狼丸を中段に構える。

「何をしたか知らないが、次は確実に斬る」

「残念だが、もう私に刃は効かん」

レイバーストがゆっくり顔を上げた。額の真つ赤な目を挟む様に大きな鹿の角の様なものが抜き出てきている。そして、いつの間にか、肌の色も灰色に変わり、体に魚の鱗の様なモノが沢山浮き上がっていた。これが、レイバーストの獣化した姿だった。

ただでさえ、太かった腕や脚は更に一回り太くなり、頬からは二本の鋭く長い刃の様なものが突き出ていた。

「これが、私の獣化。体を包む鱗は鉄より固く、力は今までの十倍だ」

「なら、もっと風を集めるだけだ」

牙狼丸を中段に構えたまま、更に風を集める。ただでさえ、切り裂かれているウインスの体は、風が集まるに連れて勢いよく傷口から血を噴出させる。だが、その風が急に弱まった。いや、もうウインスの体が風に耐えられず、地面に崩れ落ちたのだった。両膝を地に落とし、前方へと力なく倒れる。

完全に動かなくなる。だが、死んだわけじゃない。気を失っているだけだ。右手に握っていた牙狼丸は、静かに手の平から落ちる。

傷口から流れ出る血は、ウインスの周りを湖と化す。

そんなウインスの姿に、レイバーストは獣化を解き静かに息を整える。苦しそうに右膝を地に着くレイバーストは、口を開いた。

「はあ……はあ……そんな、所から……高みの見物か？」

「別に……。見物してたわけじゃないし」

体をくねらせる長身のクローゼルが、長い腕を組んで笑う。馬鹿にした様な喋り方のクローゼルに、レイバーストは鋭い眼差しを向ける。静かに崩れた壁から飛び降り、ゆっくりと横たわるウインスの方に歩み寄るクローゼルに、レイバーストが叫ぶ。

「寄るな！」

「何だよ。止めんなよ」

「あんまり奴に近づくと、切り裂かれる」

「はあん？ どう言う事だ？ もう、意識ないんじゃないのか？」

「風魔の玉と牙狼丸。この二つは自我を持つ。下手に近づけば食われるぞ」

真剣なレイバーストの眼差しに、クローゼルは唾を呑み静かに後退する。

### 第33回 静まる風（後書き）

あけましておめでとございます。

とりあえず、年明けと言う事で、挨拶をさせていただきます。

いまだ、更新が難航していますが、今年も『クロスワールド』と私、  
崎浜 秀をよろしくお願いいたします。

### 第34回 甘さと弱さ

岩の碎ける音が響く。ノーリンの左手はデイクシーの右頬を掠め、地面に突き刺さる。碎けた地面の破片が飛び散り、デイクシーの背中を傷付ける。表情を歪めるデイクシーは、前かがみになったノーリンの腹部に蹴りを入れる。

「ぐっ！」

デイクシーの足を掴む手が緩む。その瞬間、デイクシーは翼を羽ばたかせ空に舞う。腹を押さえ上空に浮くデイクシーを見据えるノーリンは、拳を握り地を蹴る。怒りで鼻筋辺りにシワを寄せるデイクシーは、目を充血させノーリンに言い放つ。

「貴様！ ワザとはずしたな！」

「ワシはウヌとは違う。無駄な殺生はしない」

「ふざけるな！ ここで、死ね！」

勢いよくノーリンの方へと突進してくるデイクシー。もう冷静さなど無く、怒りでノーリンしか見えていない様だった。

向ってくるデイクシーに対し、冷静なノーリンは右拳をデイクシーの左頬に当てる。突っ込んできた勢いと、拳を出した勢いがぶつかり合う。ズンと、重たい手応えを感じるノーリンは、そのまま振り下ろす。

衝撃が頬を貫き、デイクシーの体は地上に叩きつけられた。地面が砕け円形に窪み、土煙がデイクシーの姿を隠す。亀裂が走った地面が露になり、デイクシーの体が地面にめり込んでいるのが見えた。瓦礫に埋もれたデイクシーはピクリとも動かない。上空からデイクシーを見下ろすノーリンは、拳を握り締めた。その直後、デイクシ

ーの目が力強く開かれる。真っ赤に充血した目が、鋭く睨みを利かせ。

「来るか……」

ノーリンが呟くと同時に、ディクシーが雄叫びを上げる。

「ウオオオオオッ！」

大気を震わせるその雄叫びは、空中に浮くノーリンの体をも震わせた。ピリピリと伝わるその凄まじいまでの殺気。砕けた地面の欠片が、カタカタと音をたて、微かに震える。

雄叫びを轟かせるディクシーの姿は徐々に変化を見せる。黒く大きな翼が、更に大きくなり刃物の様なモノが生え出てくる。足には太く丈夫な爪が長く伸び、地面に鋭く突き刺さる。口も、鋭い嘴くちばしと化し、黒光りする。

「あれが、あやつの本性と言う訳か……。魔獣人が、これほどまでの変化をするとは……」

驚きを隠せないノーリンは、背後に殺気を感じ振り返る。その瞬間、右拳に炎をまとった赤髪の男が視界に映る。その男は白い歯を見せ不適に笑ったかと思うと、炎を纏った右拳をノーリンに向って突き出す。迫り来る炎の大きさに、かわすのが不可能と悟り、ノーリンは両手を胸の前で交差させ、その拳を防ぐ。

「ぐっ！」

「中々の反応だ。だが、俺の攻撃を防いでよかったのか？ 背後がから空きたぞ？」

「！」



気付いた時には、全てが遅かった。いつしか地を飛び立ったデイクシーが、ノーリンの背中に鋭い爪を突き立てる。防ぐ事も、かわす事も出来ず、鋭く長い爪がノーリンの背中に突き刺さる。鮮血が飛沫を上げ、デイクシーの黒い翼に飛び散った。

「ぐふっ！」

口角から血が漏れる。仰け反る形になるノーリンの背中に、爪を突き立てたまま地上へと急降下。鋭い爪がその勢いで更にノーリンの体へと食い込む。その度、鮮血が拭き溢れる。

「ぐうああああっ！」

「死ねえ！」

地面へとノーリンの体を叩きつける。地面が砕け土煙が舞う。地へと降り立つ赤髪の男は、土煙の舞う方へと体を向けて静かに呟く。

「殺すなよ。あくまで今回は挨拶程度らしいからな」

「ガゼル。何しに来た」

土煙が薄れ、大きな漆黒の翼を広げたデイクシーが、鋭い眼光をガゼルに向けていた。その足の下には爪を突き立てられたままのノーリンが横たえている。体半分が地面にめり込み、動かない。服の上に血が滲み出て赤く染める。

ガゼルは腕組みをし、赤い髪を掻き揚げつまらなそうな表情で言う。

「ゼロの命令だ。逆らうと後々問題だぞ」

「チッ……。ゼロの命なら、仕方が無い……」

ノーリンを突き刺す爪がひく。体もみるみる元通りに戻り、ゆっくりとノーリンの体から足をどけた。

暴風が吹き荒れるグラストー城の屋上。咲き乱れる白龍香は、真っ白な花卉を揺らす。

その花壇の中央には、黒髪を揺らすワノールの姿があった。その足元には血に染まり、体が冷たくなったカーブンが横たえられている。もう脈は無い。すでに息絶えている。

そんなカーブンの顔を見下ろすワノールは、目を閉じ歯を食い縛る。そこに、不適な笑いを含ませたりオールドの声が響いた。

「フハハハハッ！ ついにくたばったか老いぼれは！ 俺がここまで来る必要も無かったな」

「ふざけるな……。貴様の息の根をここで絶つてやる」

「はあ？ 何、ふざけた事言ってるんだ？ てめえ」

怒りの籠った声でそう言うリオールドは、背中に背負った大剣の柄を握り締める。武器も持たないワノールは左目で鋭くリオールドを睨んだまま何も言わない。その目には何か決意の様なモノが窺えたが、リオールドはそんな事全く気にはしない。

「てめえも、あの世に行きたいみたいだな」

「お前も道連れにしてやる」

「武器も持たない貴様に、俺を道連れにする事など出来るのか？」

「やってやるさ。武器なしでもお前を道連れに！」

拳を力強く握り締め、戦闘態勢に入るワノール。睨みをきかせるワノールとリオールドは、互いに間合いを取り、相手の出方を窺う。

背に背負った重々しい大剣を構えるリオルドは、不気味な笑みを口元に浮かべる。そして、静かに口を開く。

「この一振りで俺は貴様を真つ二つに切り裂く。何か言い残す事は無いか？」

「ここで死ぬのは俺じゃない。お前だ」

「その様子だと、言い残す事は無い様だな！」

大声でそう叫ぶリオルドは、力を込め大剣を振りぬく。青いリオルドの髪が、その勢いで微かに靡き、上半身が下半身に遅れて力強く捻られる。それから更に遅れて、右手に握った大剣が風を切り裂きワノールに向う。

迫り来る刃に、意識を集中させるワノールは、体を後方に仰け反らし、紙一重で刃を交わす。鼻先を通過する大剣の切っ先は、微かにワノールの鼻先を掠めたのか、鮮血が僅かに舞う。顔を顰めるワノールは、後ろに引いた左足で力強く地を踏みしめ、仰け反った上半身を起き上がらせる。

大剣を振り抜いたりオールドの体は、無防備になっていた。その隙をワノールは逃さず、すぐに地を蹴る。瞬時に体勢を立て直そうとするリオルドだが、重々しい大剣を持つ為、動きが遅れる。

「がら空きだ！」

「くそが！ 調子に乗るな！」

右脇腹に左拳を力いっぱい振り抜くワノールだが、その拳はリオルドには届かなかつた。

「ぐふっ！」

「甘かったな。腕は使えずとも、足は使えるんだ」

「ぐっ……」

ワノールの腹部にはリオルドの右足が突き刺さっていた。ワノールの膝は力なく地に落ちる。それから遅れて両手を地に着き、吐血する。体に自由が利かず、動く事が出来ない。

そんなワノールを見下すリオルドは、不適に笑みを浮かべると大剣を振り上げ叫ぶ。

「貴様の命もこれまでだ！」

鋭く振り下ろされた刃は、ピタリと動きを止める。その手応えにリオルドは眼差しを鋭くさせ、目の前の人物を睨む。その視線の先にはリオルドの振り下ろした剣の刃を人差し指と親指で受け止めたゼロの姿があった。

全く剣を動かす事が出来ないリオルド。それは、ゼロの力の強さを明らかとしていた。歯を食い縛り柄を握る手を震わせるリオルドに対し、ゼロはニコヤかな笑みを見せる。

「剣を引け」

「止めるな！ 今ここでこいつを殺す」

「聞いてなかったのか？ 剣を引け」

「ふざけるな！ いくら」

「引け！」

リオルドが言い切る前にゼロの怒声が響く。その威圧感にリオルドの体は硬直する。指一つ動かさず剣を握る手が緩む。ゼロはそのまま剣を奪うと、そのまま地面に突き刺す。澄んだ音が響き、突き刺さった剣が微かに震えた。

「俺達にはまだやる事がある。今日はここで退く。良いな」

「あ……ああ。わかった」

「行くぞ！」

ゼロはそう言い剣を抜きリオルドに渡す。それを受け取ったリオルドは、剣をしまいゆっくりとワノールに背を向ける。そして、静かに口を開く。

「運が良かったな。その命、次に会う時まで預けておく。せいぜい、俺に会わない様に逃げ回れ」

それだけ言い残し、リオルドはゼロと共にその場を後にした。

### 第35回 炎の中の悲しき戦い

燃え上がる炎は、全てを焼き払う。

城壁も、砦も、草も、木も。炎は風に煽られ、右へ左へと揺れる。黒煙が上がリ、人の焼ける臭いが、異臭を放ち辺りを包み込む。

その炎の中心にカインの姿があった。しかし、それはカインであつてカインではない存在。淀んだ蒼の刃。深紅に染まった髪は、燃える炎よりも赤かつた。

「フハハハッ！ 燃え盛れ！」

炎の真ん中でそう叫んだ。そんな炎の中に、一人の少年の声が響いた。

「やめろ！」

「んっ？」

高笑いをしていたカインはその声に振り返る。そこには、黒のコートに身を包んだフォンの姿があった。茶色の髪は炎と同じ様に揺れ、黄色の瞳には燃え盛る炎が映る。フォンとカインの二人の間には、炎があり互いの顔は良く見えない。だが、カインには分かっていた。そこに居るのがフォンであると。

「フッ……。誰かと思えば……。今頃になって登場か。……。フォン」

「誰だ！ 何で、オイラの名前を知ってるんだ！」

「誰だだつて？ かつての仲間に対して随分な口調だな」

その時、二人の間に燃え盛る炎が揺れ、合間から互いの顔が見える。フォンは目の前に居るカインの姿に自分の目を疑う。あれが、

本当にカインなのかと。不適に笑みを浮かべるカインは、淀んだ青空天の切っ先をフォンの方へと向ける。戸惑いがフォンの胸の内に生まれ、頭の中はパニックになり、どうしたら良いのか、分からなくなつた。

「な、何で、カインが！」

「そんなに驚くな。これが、俺の本当の姿だ」

「ふざけるな！ カインは……カインは、こんな事しねえ！」

「フツ……。貴様に、本当のカインなんてわかるのか？ 出会つて間もないお前に」

不適な笑みを浮かべる。奥歯をかみ締めるフォンは、右拳を震わせカインを睨む。二人の壁となる炎の壁は、風に揺られ火の粉を舞い上げる。そして、炎は二人の視界を遮り、完全に二人の姿を隠す。右手で顔を庇う様にするフォンは、眉間にシワを寄せ目を細めた。

その時、炎の壁を淀んだ青い刃が貫き、フォンの心臓目掛けて向つてゆく。いきなりの攻撃に、驚いたフォンだったが、咄嗟に体を右に捻り刃をかわす。切っ先は僅かにフォンの胸を掠める。服が裂け、胸の位置に真っ赤な線が走る。「クツ！」と、小さな声を上げたフォンは、表情を引き攣らせ、右足を一步引く。直後、炎の中からカインが飛び出し、フォンの顔に右膝を直撃させた。

「っ！」

後方へと吹き飛ばされたフォンは、地面を転げ瞬時に体勢を立て直す。だが、すでに勝負はついていた。顔を上げたフォンの顎下に切っ先を向けて佇むカイン。その口元には、笑みが浮かんでいた。

「終わりだな。所詮、貴様は俺の足元にも及ばん」

その言葉に対し、フォンは鋭い眼差しをカインの方に真っ直ぐ向けたままだった。その目には迷いはもう無い。その目に、カインは何か自信の様なモノを感じ、問う。

「貴様、何を期待している。また、仲間が助けに来てくれるとも思っているのか？ それとも、何か策でもあるのか？ まあ、お前の頭で考えられる策など、あるはずも無い」

「策なんてない。仲間が助けに来てくれるなんて思ってもない。でも、オイラは信じてる。カインが、お前みたいにならないって」  
「フツ……。戯言を」

馬鹿にする様に首を横に振った。その刹那、フォンは右手で青空天を払いのける。「チツ」と、小さく舌打ちをしたカインは、飛び退き青空天を構えなおす。フォンもすぐさま立ち上がり、拳を握り体勢を整えた。互いに距離をとった二人は、睨み合ったまま動かない。

「それが、お前の答えか？ フォン」

「答えも何も、オイラはお前がカインとは思ってない。だから、全力で戦う」

「そうか。だが、お前が全力を出そうとも、俺の足元にも及ばんと言う事を教えてやろう」

右手に持った青空天で、左手を切りつける。血が青空天の刃に流れ出す。

「この世界では、龍臨族が最強といわれている。だが、それは違う。本当に最強なのは、炎血族だ。それを、お前に見せてやろう」

「どの種族が、最強かなんて、オイラは興味ない。ただ、カインを返してもらっただけだ」



力強くそう述べ地を蹴った。そのフォンの姿を見据えるカインは青空天に向ってブツクサと呪文の様なモノを唱える。すると、青空の刃が真つ赤に染まり、白煙を舞い上がらせた。高度の熱を帯び、真つ赤に染まる刃をカインは振り抜く。

その振り抜かれた刃を、フォンはジャンプでかわし、「オイラを甘く見るな!」と叫び、カインに殴りかかる。だが、「フツ」と不適な笑みを浮かべるカインは向ってくるフォンの右拳を左手で受け止めた。

「掛かったな!」

笑みを浮かべるフォンは、空中で体を捻りそのまま左足を振り抜こうとした。しかし、それよりも先に右拳に、とてつもない熱を感じ呻き声をあげる。

「ぐあああああつ!」

フォンの右拳を包むカインの左手の間から煙が上がり、何かが焼ける様な音が微かに聞こえた。フォンの体は地に落ち、その激痛にのたうち回る。右拳を襲う熱はジワジワと熱くなり、カインの左手は完全に炎を纏う。

「ふふふふ……フハハハハッ! 良いか。これが、炎血族の力。獣人には超えられぬ力の差だ!」

「ぐうつ……あああああつ! うがあああつ!」

苦痛に表情を歪めるフォン。何とかこの状況を逃れようと頭を働かせるが、右拳の痛みに考えはまとまらない。フォンの右腕は徐々に黒焦げ始め、皮膚がただれ始める。

「ぐうううっ！　がああああっ！」

「もがけ！　弱者！　そして、その腕に刻め！　自分の無力さを！」  
「ぐううっ！　ちょ……うしに……のるな……よ！」

歯を食い縛り、苦痛に表情を歪めながらも立ち上がる。しかし、カインは大声で笑うと、更に左手に力を加える。ミシミシと軋むフォンの右拳は、いつ砕かれてもおかしくない。それでも、フォンは倒れる事無くカインをジッと睨む。

「うっ……。こ、これ位……で、倒れるか！」

「！」

カインの首の右側面にフォンの左のハイキックが決まる。完全に油断していたカインは、一瞬意識が吹き飛び、フォンの右拳を掴む力が緩む。フォンはすぐに左手で右腕を掴むと、その場を飛び退く。そして、すぐに左膝を地に着き、息を整える。

その場に崩れ落ちるカインは、ギリギリの所で両手を地に着く。奥歯を噛み締めるカインは、怒りに表情を変える。

「弱者が、ふざけたマネを！」

左拳を震わせ、怖い顔を見せるカインは立ち上がりフォンを睨む。右手が動かないフォンは、苦痛で立つ事が出来ず、顔を顰めながらカインを見据える。すると、周りの炎がカインの体へと集まりはじめた。全身を炎が包み込み、鋭い眼光がフォンを睨む。

殺気がフォンの体を縛りつけ、全く体の自由が利かない。カインは一步一步とフォンに歩み寄る。「やばいな」と、呟くフォンは微かに苦笑した。青空を振り上げたカインは、フォンを見下し「死ね」と、言うと同時に刃を振り下ろす。

だが、その刃はフォンには届かなかった。

「……貴様。俺の邪魔をするか」

カインの目の前には黒髪を揺らすゼロの姿があった。カインの振り下ろした青空天は、ゼロの横に立つリオルドの大剣によって防がれている。柄を握る手を震わせるカインは、静かにリオルドの方に目を向ける。

「そこらで、やめてもらおうか」

「何を言う。貴様らが誰か知らんが、俺の邪魔をすると、死ぬぞ」  
「貴様如きが、ゼロを傷付けられると思うな。ガキが」

低い声のリオルドがカインを睨む。睨み合う二人の背後には、ガゼルにデイクシー、クローゼルにレイバーストの四人が居た。いつ着たのか分からないが、四人ともすでに戦闘態勢に入っている。

「フツ。六人居なきや、何もできんか？」

「六人？ 違う。八人だ」

「！」

雄雄しい声がフォンの背後でする。そこには、槍を二本背負ったヴォルガと、引き裂かれた黒いマントを巻いたジャガラ姿があった。二人もすでに戦闘態勢で、いつでもカインを攻撃できる状態だった。

「八人……。まあ、悪くない相手だ」

「……面白いね。本気でここに居る全員を相手にする気か？ まあ、それもいいが、お前は俺一人にすら勝てん」

「ふふふ……。やってみるか？」

「いいだろっ」

ゼロが清々しい笑顔を見せ、リオルドに剣を退かせた。「チッ」と、小さく舌打ちをしたリオルドは剣を背負い数歩下がる。それと同時に、カインが青空天を振り抜いた。

### 第36回 悲観

炎は消え、黒煙が漂う。

全てが終わった。レイストビルの東西南北にある守備砦前で行われた激闘が。

町自体は何の被害も無かったものの、この鉄壁を誇るレイストビルの守備砦が崩壊したのは、民達の脳裏に不安を過らせた。

多くの兵士が血を流し、その親族は悲しみに涙を流す。その悲しみから、活気の溢れていたレイストビルは悲観する。そして、国王の死は、この国全土を悲しみに包み込ませた。英雄と呼ばれた男の死は、すぐに他の国にも知れ渡った。

グラスター城の屋上では、カーブンの亡骸の横でフレイストが泣き崩れた。偉大な父の死は、フレイストにとって耐えられぬものだった。そのフレイストを見据えるワノールは、俯き奥歯を噛み締める。

ウインス、ノーリンはグラスター城の医務室に運ばれた。二人とも傷が酷く危険な状態だった。特にウインスは体中深い切れ込みが入り、そこから大量の血が流れ出る。止め処なく溢れる様に。ルナはそんなウインスの治療に全力を注ぐ。

この戦いから数日。燃え盛る炎がようやく消え、その中から煤だらけになったフォンが発見された。僅かに息はあり、右腕が酷い火傷をおつてある以外は特に目立った外傷はない。その為、軽い手当をした後医務室に運ばれた。

「フォンの奴、ここに来てたのか」

医務室の前で壁に凭れ腕組みをするワノールは、その隣に座り込

むミーフアの方に目をやる。手を組み祈る様にするミーフアには、そんなワノールの声は聞こえていなかった様だ。その為、ワノールは何も言わずその場を立ち去った。自分がここについても何も出来ないといわかっていたから。

それから、また幾日が過ぎ。

静まり返った夜明け前のレイストビルに一人の男の影があった。まだ、どの店も開いてなく、街灯はまだ灯っていた。そんな街中を歩く男は、真っ黒な衣服に身を包み、右肩には荷物を担いでいる。長い黒髪が冷たい朝の風に揺られ、男の顔が徐々に露になってゆく。顔には酷い傷痕があり、右目には眼帯。深刻そうな表情の彼は、不意に足を止める。

「どこに行くつもりですか」

オレンジブラウンの髪を揺らし、男の前に仁王立ちする青年。男よりも幾分若く見える青年は、グリーンの瞳で男を真っ直ぐに見据える。力強い目付きの青年に対し、男は落ち着いた口調で喋りだす。

「フレイストか……。国王の事は、すまないと思っている」

「ワノール殿。私はそんな事を聞いているんじゃない。それに、父が死んだのはあなたのせいじゃない。全て、私が不甲斐無かったから……」

フレイストは俯き齒を食い縛る。何も出来なかった自分が情けなかった。目を伏せるフレイストに、ワノールは悲しげな瞳を見せる。国王を守れなかった責任を感じていた。奴に傷一つ付ける事も出来ず、その上国王まで。その事がワノールの頭の中から離れなかった。

静寂が辺りを包み、冷たい風が二人の間を吹きぬけた。それから暫くし、沈黙をワノールが破った。

「とりあえず、伝えたい事は伝えた。そこをどいてくれ」

「あなたが行く事を他の方は知っているのですか？」

「言う必要もないだろう。俺の役目は終わった。元々、カインに言われてここまで付き合っただ。これ以上俺が関わる必要もないだろ」

「ですが、今の彼らにはあなたが必要です」

力強いフレイストの言葉に、ワノールは軽く含み笑いを浮かべて答える。

「何を言う。剣をも失った俺など、居ても居なくても一緒だ」

「ならば、この剣をあなたに」

フレイストは右手に持った鞘に収まったままの剣を差し出す。だが、ワノールは目を伏せ首を振り答えた。

「悪いが、それは受け取れん」

「なぜですか！」

「俺の相棒は黒苑だけだ。あいつ以外は」

「しかし、あなたは、私の父を守る為に装飾品の剣をも振るっただやないですか！」

その言葉でワノールの脳裏に、リオルドとの戦いが蘇る。何度も剣を二つに裂かれ、全く手も足も出なかった事が。それに、大切な人から預かった黒苑を。唇を噛み締め悔しさを噛み締めるワノールは、ゆっくり足を進め静かにフレイストの横を通り過ぎる。そんなワノールを幾度となく呼び止めたが、その言葉にワノールは耳を傾けず真っ直ぐに歩き続けた。

目を覚ましたのは、あれから何日かしてだった。眩く明るい光を  
瞼の裏に感じ、ゆっくりと開く。優しい温もりを右手に感じ、静か  
に暗闇から光の中へと。

「………」

朦朧とする意識の中、そんな言葉を口にするフォン。まだぼんやり  
としか見えない視界には、誰かの顔がぼやけて映る。そんなフォ  
ンの耳に、聞き覚えのある声が聞こえる。その声にフォンは言葉を  
呟いた。だが、それは唇が動いているだけで、声は全く出ていない。  
そんなフォンの耳に更に声が聞こえる。

「フォン？ 聞こえる？ フォン」

「………」

フォンはその声に対して、返事を返しているつもりだった。そし  
て、次第にハッキリし始めた視界には空色の髪を揺らすミーファの  
姿が映る。少し心配そうな表情をしているミーファに、フォンは笑  
みを浮かべた。その笑みにミーファの表情が明るくなり、フォンに  
抱きつく。その瞬間、体に激痛が走った。

「ふぎゃあああああっ！」

そのフォンの悲鳴は城内に響き、こだました。

「………」

フォンから手を放し離れるミーファは、心配そうな表情でフォン  
を見つめる。ビクビクと痙攣するフォンは、唇を引き攣らせていた。



見た感じ、外傷の見られないフォンの体。だが、その体はすでにボロボロで、触られるだけでも激痛が走るのだ。それほどまで、体を酷使する戦いが続いているのだ。

「いつちゅつ。久しぶりの再会なのに、なんて手荒い歓迎なんですよ……」

「手荒いって……。ちょっと、抱き付いただけじゃない……」

後半は声が小さく誰にも聞き取れなかった。もちろん、フォンにも。その為、フォンはため息交じりで言葉を続けた。

「はあくつ。ミーファにそんな事言ってもしょうがないか……」

「あんたね！ 人が心配してやってるのに！」

右拳を震わせるミーファに、フォンは背筋が凍る様な殺気を感じる。苦笑するフォンは「ま、まあまあ。落ち着けミーファ」と、口にした。だが、怒りのオーラを放出するミーファはもう止まらない。そして、その後フォンの悲鳴が城内に響いたのは言うまでもないだろう。

### 第37回 運命の渦 それぞれの想い

「そうか……」

腕を組みそう呟くフォン。以外に落ち着いた様子のフォンに、ミーファは不思議そうな表情を見せる。実際、もっと焦るかと思っていた。だから、以外な反応に、ミーファは呆気にとられていた。

そんなミーファに対し、フォンは欠伸をし眠そうな表情を浮かべる。包帯を巻かれた右腕は、まだうまく動かせないのか、左手で頭を掻く。フォンの傷と、言うより火傷は酷い物だった。皮膚が大分焼け、黒くなっていた。それでも、何とか治療を施しのだ。と、言っても治療したのは、ルナで医者にはどうしようもなかった。

「それで、どうするの？ これから」

「とりあえず、少しゆっくりしよう。ルナだって、ここの所休んでないんだろ？ ゆっくり休んでやる事考えようよ」

「あんたはのん気ね……。それより、その火傷……」

その言葉にフォンは右腕を僅かに持ち上げ笑いながら言う。

「カインを助けようとしたら、炎に包まれてさ……。右手は火傷しちゃうし、カインは連れてかれるし……。本当、何やってんだか……」

悲しげな表情を浮かべる。そんなフォンを見つめるミーファは表情を暗くする。すでに全てを知っていたから。その右手の火傷の事も、カインの事も、全て。だが、その事を問う気はない。フォンが、今どんな気持ちなのか知っていた。そして、フォンを信じていた。いつか、自分から本当の事を言ってくれと。だから、暫く

はフォンのその嘘に付き合う事にした。

その後、フォンとミーファは色々と話した。ティルが何処に行っただのかとか、ここに来るまで起きた事など、いろんな話をした。その間だけは、笑顔が絶えなかった。

暗がりの部屋の中、一人の立ち尽くすフレリスト。開かれた窓から流れ込む風は、フレリストのオレンジブラウンの美しい髪を優しく撫でてゆく。毛先まで美しく流れる様に靡く髪は、風が収まると同時に動きを止める。

グリーンの瞳は暗闇に浮かぶ町を見下ろす。光など見えない。どの家もすでに寝静まっているのだろう。そんな町を見下ろしたため息を吐くフレリストは、この町、この国の大きさを改めて感じる。そして、父が死に初めて気付く。大勢の人を守ると言う重圧を。

体の震えが止まらない。見えない重圧がフレリストを押しつぶし、恐怖だけが胸に刻まれる。いつかは、王座を継ぐのだと分かっていた事だが、まさか、こんなにも早く継ぐ事になるとは、思ってたなかった。

震えを押し殺そうとするフレリストは、部屋の扉が開く音に素早く振り返る。何事も無かったかの様な表情をしながら。

「誰ですか？ 今は、一人にしてほしいと　！」

驚きのあまり言葉を呑み込んでしまった。そこに立っていたのは、ルナだった。少し疲れた様な表情だが、真剣な面持ちで口を開く。

「あなたは、一人じゃない。だから、一人で何もかもを抱え込まないで」

「わ、私は、何も……」

「体、震えてる」

ルナに言われて始めて気づく。震えを押し殺しているつもりだったが、その身の震えは全く止まってなかった。扉の前に立っていたルナは、静かにフレイストに歩み寄り言葉を続ける。

「人は一人じゃ生きていけない。誰もが皆支えあっている。あなたの父上も、皆に支えられていた。だから、あなた一人が責任を感じないで」

「ですが、この街は……いえ。この国を守る事が出来るのは、私しか……」

「いえ。あなただけじゃない。この国を守るのは、この国の人々。あなたを含め、この国に住む皆が、この国を守る事が出来ます。だから、一人で背負わないで」

悲しそうな瞳でそう言うルナに、フレイストは俯く拳を震わせる。分かっている。そんな事はフレイストも。だが、それでもフレイストは。

「あなたが、やる事は、この国の民を導く事。そして、この国に正しい道を歩ませる事。決して、国を守る事ではありません」

「なっ、何を！ この国を守る事は、私の」

「違います。先程も言いましたが、国を守るのは、この国の人々。あなたは、その人々を導くだけです。まあ、あなたがどう思おうと私には関係ありませんが、一応伝える事は伝えました。それでは、失礼します」

丁寧にお辞儀をして、ルナは部屋を後にする。一人残されたフレイストは、ルナの言った言葉の意味を考える。その内、震えは自然と無くなり、いつしか眠りに就いていた。

薬品の臭いが漂う真つ暗な部屋。様々な機械が、電源の入っていないまま置かれ、大きな水槽の様なものの中に真つ赤な液体が注がれていた。ドロドロとした液体の中には、小柄な少年の体が浮いている。口にはボンベが着けられ、少年の傷だらけの体からブクブクと泡が溢れる。

そんな部屋の扉が軋みながら開かれた。外の明かりが部屋の中に差込、二つの影が部屋に入ってくる。一人は白衣姿の男、ロイバーン。もう一人はボロボロの衣服に身を包んだゼロだった。右頬や体の至る所に傷が残るゼロは、水槽の赤い液体に入った人物を見て楽しげな笑みをお浮かべる。

「大分、傷は癒えたみたいだね。彼は十分な戦力になるよ。ただ、彼が俺の下に着くかな？」

「フハハハハッ。大丈夫ですよ。彼はあなたに勝てないと分かったんです。力でねじ伏せれば」

「そういう奴は、いずれ裏切る。いずれ、この中からも……」

水槽に入った真つ赤な液体を見据えたまま呟く。そんなゼロの背中を見据え、不適な笑みを浮かべるロイバーンは、ずれ落ちた眼鏡を右手で掛け直す。水槽にそのロイバーンの姿が微かに反射し、ゼロにもその姿は見えていた。だが、それを全く気付いていないかの様に装い、笑みを浮かべて振り返る。

「彼は、後どれくらいで完治する？ 俺としては、早い内にゆっくりと話がしたいんだが？」

「そうですねえ。じきに目覚めると思うね。私が見てますから、ゼロも自分の傷を癒した方がいいのでは？」

「ああ。そうするよ。それじゃあ、彼が目を覚ましたら呼んでくれ」「分かってますよ。それでは、ゆっくりとオヤスミください」

ロイバーンは軽く会釈する。ゼロは速やかにロイバーンに背を向け、部屋を後にする。ゼロが部屋を出て行ったのを確認したロイバーンは、不適に笑みを浮かべ、クシヤクシヤの白髪頭を掻き毟り大笑いする。その笑い声は部屋の外まで聞こえ、その部屋の扉の向こうにいたゼロとヴォルガの二人の耳にも聞こえていた。壁に凭れ腕組みをするヴォルガは、鋭く力の籠った視線をゼロに送り口を開く。

「奴も、いずれ裏切るかもしれんぞ。どうするつもりだ？」

「心配要らない。時期に全てを左右する大きな戦いが始まる。そうなれば、自ずと運命の渦へと巻き込まれてゆく」

「巻き込まれてゆくか……。それは、俺達を含め他の種族の連中もと、言う事か？」

「ああ。奴は必ずそうする。そうしなければならぬからな」

「全ては、奴の手の中と言う訳か」

腕組みをしたまま、ため息を吐き目を閉じるヴォルガに、「それも、後僅かさ」と、ゼロが呟いた。その言葉にヴォルガは口元に笑みを浮かべ、「そろそろか」と、呟き背負った槍の柄を握った。それに対し、ゼロは小さく頷き鋭い目でヴォルガを見据える。その目は遙か未来を見据えている様だった。

### 第38回 狙われた二人

森の中。落ち葉を激しく踏みつける足音が二つ。

風が葉を揺らしざわめかし、落ち葉を僅かに舞い上がらせる。

それに遅れ、風を貫くかの様に鋭い音が森に響く。それから、スツトンと木に何か突き刺さる音が聞こえる。幾多にも聞こえるその音は、確実に足音の方へと向っていた。

はためく茶色のコート。揺れるゴーグル。飛び交うのは鋭い矢。

「又ワーツ！ な、何なんだよ！ あの人！ 何で急に矢なんか！」

首に掛けたゴーグルを揺らす大人しい顔つきのカシオが、子供っぽい声で叫びまくる。隣りで迷惑そうに、耳を塞ぐテイルは揺れる黒髪を気にしながら後ろをチラツと確認する。

木の枝を器用に移動する一人の青年。背丈は高くほっそりとしている。背中に矢の入った丸筒の空穂うつぼと呼ばれる物を背負い、綺麗な姿勢で弓を射る。無表情で、左頬に二本の爪痕が残り、緑の長い髪が風に靡く。鋭い目付きの奥に見える茶の瞳が、二人の背中を見据え、弦を引き矢を放つ。放たれた矢は空を裂き、僅かに鏃やしろを揺るがし、カシオの右足を掠め、地面に突き刺さる。

「ヒエエエツッ！ な、何、何？ 痛いんですけど！ って、言うか、俺狙い？」

半泣き状態のカシオは右足から血を流しながらも必死に走る。呆れた表情を見せるテイルは、ふと今まで飛んできた矢が殆どカシオの方に向っているのに気付く。そして、不意に足を止めて振り返る。それに、気付いたカシオは足を止めずに、チラツと後ろを見て叫ぶ。

「な、何立ち止まってんだよ！ 撃ち抜かれるぞ」

だが、それとは裏腹に、青年はテイルの横を通り過ぎて行く。「嘘ッ！」と、驚いた声を上げるカシオは、自分も立ち止まれば狙われないと、思い急ブレーキを掛け立ち止まる。が、青年は空穂から矢を抜き、弦を引く。そして、カシオの額目掛けて矢を放つ。「エエエエッ！」と、納得行かないと、悲鳴を上げるカシオは、バツク転でそれをかわし大木の方に追い込まれる。

背中から三十センチの筒を取り出すカシオは、自分の目の前に降り立つ青年を見据えた。空穂にはすでに矢は無い。その為、青年はゆっくりと空穂を取り、中に手を突っ込む。それを、見てカシオはホツとした様な笑みを見せ、口を開く。

「は……ははは……。矢は無くなったか……。これで、ようやく！」

笑みを浮かべるカシオは、すぐにこわばる。それは、青年が空穂の中から二本のナイフを取り出したからだ。一本は刃の小さな小型ナイフ。もう一本は、殆ど剣と変わらないほど大きな刃のナイフ。それを、右手に小型ナイフを左手に持つ青年は、茶の瞳でカシオを睨む。

完全に戦闘態勢の青年は、ジリジリとカシオとの間合いを詰める。流石に身の危険を感じるカシオは、渋々手に持つ小さな筒ある二と書かれたボタンを押す。すると、筒は伸び先から二又の刃が飛び出す。

「渦浪尖。第二形態」

「……槍」

「うおっ！ は、話した……」



驚いた表情を見せるカシオは、二又に別れた刃の渦浪尖を構える。向かい合う二人を、遠くで見据えるティルは、渦浪尖の刃の形に何と無くその製造者の顔が頭の中に浮かんだ。もちろん、それはあくまでティルの推測だが、きつと当たっているだろう。

左足を引き、腰を落とし渦浪尖を構え、青年との距離を測る。一方、青年は急に歩みを止めた。大分二人の間には距離が開く。対峙し均衡を保つ二人。その二人の間を風が流れ、木々がざわめく。木の葉は風に舞い、天高く浮き上がる。鳥の囀り、小動物の茂みを揺らす音。全てが静まり返った森に響く。そして、それに混ざり重々しく落ち葉を踏みしめる音が僅かに聞こえる。

漂う殺気に対峙するカシオと青年は表情を変える。そして、ティルも天翔姫を白い細身の剣に変えた。近づく足音は、一つじゃない。複数の足音が、三人を取り囲む様に四方から聞こえてくる。

「囲まれたな」

ティルはカシオと青年の方へと歩み寄る。カシオは青年と睨み合っていたが、ティルが近付いてきた為、構えを止め渦浪尖を脇に立てる。それを確認して青年も構えていたナイフを下ろす。

「ここは、一時休戦で良いな」

「……ああ」

小さな声で青年は返答する。殆ど無言の青年を、怪訝そうに見据えるカシオは、青年に聞こえない程小さい声でティルに言う。

「あいつ、チョットおかしくないか？」

その言葉に「はあ？」と、不快な表情を浮かべるティルは、「お

前も同じ位オカシイだろ」と、嫌味っぽく言い放つ。ティルの言葉に傷ついたのか、カシオは「あうっつ」と変な声を出しながら地面に両膝と両手を着く。

呆れたと言わんばかりに苦笑を浮かべるティルは、青年の方に体を向け右手を差し出す。

「俺は、ティル〃ウォース。あんたは？」

「俺は……バルド……。バルド〃ロツカード」

差し出したティルの右手をとる事無く、それだけ告げるバルドは愛想無く背を向ける。差し出していた右手を下ろしたティルは、半笑いを浮かべながらカシオの方に目を向ける。が、先程までそこに居たカシオの姿が無くなっていった。不思議に思い、辺りを見回す。すると、カシオの声が聞こえてくる。

「俺、カシオ〃ラナス。水呼族なんだぜ。よろしくな」

馴れ馴れしくバルドに話しかけるカシオ。先程まで、襲われていた事など忘れていた様子だ。ニコニコと笑みを浮かべ、右手を差し出すカシオを、鋭く怖い目付きで睨むバルドは、掠れた声で言い放つ。

「気安く、話掛けるな。貴様は、俺の敵だ」

その言葉と、バルドの怖い顔に、笑みは引き攣り差し出した右手も自然と降りた。そして、背筋から冷や汗が溢れる。静かに後退するカシオは、ティルの隣に並び半泣きしながら呟く。

「俺、何か悪い事したのかな？ 何で俺ばっかり……」

「知らん。自分の胸に手を当てて考える！」

「うっつ。あんた、冷たいよ。それ以上に、あいつは怖いけど……」

ブツクサと言いつけるカシオは、座り込みいじける。そんなカシオを完全に無視して、テイルとバルドは互いに背を向け、顔を見合さず武器を構えた。先程まで聞こえていた僅かな足音は、完全に聞こえず静まり返る。風が流れる音だけが、三人の間に流れ、カシオの啜り泣きが時折聞こえる。

集中力を高めるテイルとバルドは、すでに茂みに隠れた魔獣達を射程距離に捕捉していた。鋭い目で一体一体の魔獣の場所を確認し、呼吸を整える。そして、テイルとバルドはほぼ同時に動き出す。

天翔姫を構え走るテイルは、茂みに突っ込む。一方のバルドは力強く地を蹴り、飛び上がる。そして、太い木の枝を撓らせ、魔獣のいる茂みに勢いよく突っ込む。地面を砕く大きな音が森中に響き、獣の悲鳴が轟く。

小型ナイフが魔獣の首筋に突き刺さり、大型のナイフは腹部を貫く。真っ赤な泡を口から吹き出す魔獣は、二つのナイフを抜くと同時に、血を噴出しながら地面に倒れる。その魔獣の傍にいたその他の魔獣は、突然の事に驚き慌てふためいていた。そんな魔獣を鋭い眼光で睨むバルドは、呟く。

「次は……どいつ？」

鋭い茶色の瞳が魔獣達の体を凍えさせるが、すぐに一体の魔獣がバルドに襲い掛かる。右腕を振り上げ、鋭い爪がバルドに振り下ろされた。が、それは空を裂き、逆にバルドの小型ナイフが魔獣の左太股に突き刺さる。魔獣の悲鳴がこだまし、僅かに血飛沫が舞う。

それから、遅れて魔獣の喉目掛け、大型のナイフが振り抜かれるが、その刃は魔獣の喉元でピクリともしない。

「……………」

無言のまま、視線を上げるバルドは、大型のナイフの切っ先の方に目をやる。そこには、鋭い眼光の小型の魔獣が一体立っており、右手の人差し指の爪だけで、刃を止めていた。目付きを変えるバルドは、すぐさま小型のナイフを抜き、足を負傷する魔獣を右足で蹴り飛ばす。軽々と地面を転がる魔獣に目もくれず、バルドは小型の魔獣を睨みつける。すると、「怖い目付き」と、不適に笑みを浮かべ小型の魔獣が呟く。

### 第39回 カシオとバルド

茂みに隠れていた複数の魔獣。

微かに聞こえる葉の擦れる音。小動物たちの悲鳴。魔獣の足音。

全てが耳に届き頭の中で混ざり合う。強風が吹き荒れ、落ち葉が舞う。時折、風塵を舞い上げ、それが視界を悪くする。

強風に吹かれる艶やかな黒髪。ハタメク茶色のコートの裾。切れ長の眼は鋭く、黒の瞳が激しく動く。すでに、魔獣の位置を把握していたティルは、魔獣の位置を再確認していたのだ。

右手に握る天翔姫を、静かに下段に構えると、腰を低くし呼吸を整える。足音から何処から魔獣が近付いてきて、今どの位置にいるのかを頭の中に思い描くティルは、素早く体を捻ると、天翔姫を振り抜く。

重々しい手応えがティルの右手に押し掛かり、襲い掛かる魔獣の左腕を切断する。血飛沫が舞い、多くの木の葉に血が付着する。地面や落ち葉、いろんな場所に飛び散った血痕は、辺りに生臭い臭いを漂わせた。

だが、それが合図だった。一斉に茂みから飛び出す魔獣達。剥き出しにされた牙から滴れる涎。指先から伸びる鋭い爪。そして、血に飢えた眼光。そんな魔獣達に、「チツ！」と、ティルは舌打ちをして天翔姫を振るう。白く細い刃が幾度か空を裂く。と、同時に真っ赤な雫がいたる所に降り注いだ。

「血の雨か……」

その降り注ぐ血を目を細めて見据えるティルはそう呟いた。右手に握った天翔姫の真っ白は刃には、微かに血が残り、ティルはそれを力強く振り飛ばして、乾いた布で拭き取る。そんなティルの周りには、多くの魔獣が倒れていた。茂みの中から体が半分だけ出て、

動かない魔獣。木の根元に倒れている魔獣。どの魔獣も一太刀で息絶えた為、傷は一つしか残っていない。

「あっさりし過ぎてる……。幾らなんでも、こいつらだけで行動しているとは思えんが……。まさか、バルドの方にリーダー格がいるのか？」

天翔姫をボックスに戻し、腕組みをするティルは、静かに二人の方へと引き返した。

大木の前で蹲るカシオ。いじけたままブツブツと文句を口にする。

「何だよ何だよ……。バルドの奴。俺は敵だつて……。どういう意味だよ。俺、何したんだよ……。おかしいだろ。大体、何で俺だけなんだ？ あれ？ 待てよ……。そう言えば……。あいつら似てないか？ いや。よく考えれば、よく似てる！ そうか！ だから、俺だけ仲間はずれなのか！ なるほど……。なら、俺もあいつら見たく冷たく冷酷になれば、きっと仲間はずれにされないよな」

そんな事を口にするカシオの耳に爆音が聞こえる。それは、バルドの突っ込んでいった場所からで、その音と同時に大量の土煙が茂みからあふれ出てきた。そして、その中から勢いよくバルドが投げ出され、地面を痛々しく転がる。体中無数の切り傷があり、衣服も裂け血が滲んでいた。

いじけていたカシオも、そのバルドの姿に立ち上がり歩み寄る。

「だ、大丈夫か！」

駆け寄ったカシオに、「近寄るな！」と、手痛い言葉をぶつける

バルドは、顔を上げ鋭い目付きでカシオを睨みつけている。足を止めるカシオは、戸惑った表情を見せ「で、でも……」と、呟くがバルドの鋭い眼差しに、一步後退する。

静かに立ち上がるバルドは両手に握ったナイフの柄の先を合わせ、柄は力チツと、組み合わせる音が微かに聞こえ、二つのナイフは一本の剣へと変貌する。柄の両端から伸びる短い刃と長い刃は、鋭く日の光を反射する。

「……双牙」

腰を低く構えるバルドは、茂みを真つ直ぐ睨みつける。そんな茂みの中から目付きの鋭い小型の魔獣が姿を現す。静かにゆっくりとした足取りで。右手には鋭い爪を生やし、左手は右手よりも少し大きく重々しい。両足は太く強靱で、しなやかな筋肉を見せ付けている。

呼吸が荒々しいバルドは、その魔獣を見て額から汗を流す。戸惑いながらもカシオは渦浪尖を構え魔獣を見据える。そんな二人を見据える魔獣は、右手の人差し指を立て、顔の横で軽く左右に振る。

「甘いね。弱者が、二人になっても僕の体に傷つける事は出来ないよ」

「……フッ！」

バルドは急に走り出し、双牙と呼んだ剣を振り下ろす。

「だから……」

そう呟く魔獣は、刃を鋭い爪で受け止め、左手をバルドの腹に向けて突き出す。だが、バルドもそれを読んでいた。地を蹴り飛び上がると、そのまま魔獣の頭を飛び越え、魔獣の背後に着地し双牙の

短い刃を魔獣の背中に向け突き刺す。が、それは空を切る。

「チツ！」

「残念。後一步届かないね」

バルドと魔獣の距離が遠ざかり、二人は対峙する。幾分余裕の見える魔獣は、薄気味悪く笑みを浮かべ、バルドの方はどこか疲れている様に見えた。魔獣の後ろに立つカシオは、いつでも魔獣を攻撃できた。だが、バルドの目が、『手を出すな』と、言っている様でおどおどとしている。

「フツ……。仲間に助けは求めないのかな？」

「仲間などいない……」

鋭い眼差しを向けるバルドは、もう一度地を蹴る。双牙の長い刃と短い刃が何度も空を裂き、その度に風が木の葉を落とす。幾枚の木の葉が落ちただろう。二枚の刃は鋭さを失い、刃の振るう音が鈍くなる。

「どうした？ 動きが鈍くなってきたぞ」

「……クツ」

奥歯を噛み締めるバルドは、力強く双牙を振るった。が、それを魔獣は軽々と受け止める。驚いた表情を見せるバルドに、「弱いよ」と、魔獣は囁く。そして、左拳がバルドの体に突き刺さる。衝撃が腹から背中に突抜け、バルドの体が地面を転がった。

「バルド！」

そう叫ぶカシオは、駆け寄ろうとしたが、バルドの鋭い眼差しに



足を止める。魔獣はそんな二人を見て、不適に笑みを浮かべ一歩バルドの方へ足を進める。

「こいつは見殺しか。まあ、僕はどちらでも良いさ。どうせ、あんたも殺すんだし」

「クツ！」

どうしようか考えるカシオは、額から薄ら汗を流し慌てる。そんなカシオの背後で鋭いテイルの音が響く。

「考えてる暇があるなら戦え！」

その声に遅れて白い刃が魔獣の方へと飛ぶ。魔獣は動きを止め、後方に飛び退き、カシオの後方に立つテイルを睨み付ける。切れ長の目の奥に光る黒い瞳に、魔獣は不適に笑みを見せる。

「お前はそいつとは違うみたいだな」

「生憎、俺はそいつの敵じゃないんでな」

「敵？ どう言う事だ？」

「どうでもいいだろ？ どうせ、お前は死ぬんだから」

地面に突き刺さる天翔姫を抜くテイルは、そのまま切っ先を魔獣の方に向ける。だが、それに対して魔獣は不適な笑みを浮かべ、「お前も、僕の体を傷つける事は出来ない」と、言い放つ。すると、テイルも口元に笑みを浮かべ、「試してみるか？」と、言い放つ。向かい合うテイルと魔獣は、ほぼ同時に地を蹴る。そして、細い刃の天翔姫が鋭く空を一閃する。澄んだ金属音が辺りに響く。白い刃は、魔獣の鋭い爪に受け止められ、カタカタと僅かに震える。

地面を微かに抉る二人の足。それは、二人がどれだけ両足に力を入れていいのか、よく分かる。手に押し掛かる力は両者共に凄まじ

かった。その為、二人が同時に吹き飛ばす。

「クッ！」

「チッ！」

バランスを整え、二人は地に足を置く。僅かに砂塵を舞い上げ、踏みとどまる二人の周りには、微かに塵が舞う。微かに揺れる天翔姫の刃が、ブオーンと妙な音をたてる。

「互角か……」

「互角？ 違うね。まだ、僕が手加減しているだけ。今からは、本気を出すよ。三人同時に掛かってきな」

不適に笑みを見せる魔獣は、目の色を変え呻き声を上げる。それに、反応するかの様に、草木がザワメキ、風が吹き荒れる。落ち葉が無数、天高く舞い上がり、三人を凄まじい風が襲う。

## 第40回 三人の戦い方

吹き荒れる風が激しく木の枝を撓らせ、木の葉も激しく揺れる。

木の葉も落ち葉も激しく飛び交い、撓る木の枝が風に耐え切れず音を立て真つ二つに折れる。地面が風で抉れ、土や小石が大木を傷付ける。

その風を真正面から受けるティル、カシオ、バルドの三人の衣服の裾が暴れる。髪も風でクシャクシャになり、三人は片腕で顔を覆い目を細めて魔獣を見据える。

大気を揺るがす魔獣の声。それが、周囲の木々を軋ませ亀裂が走った。そして、地面に大きな亀裂が走り、少量の塵が震え風に舞う。表情を顰めるティルは、その夥しいピリピリとした空気に奥歯を噛み締める。

徐々に強風に押されていく三人の両足が、地面を抉った。

「う……うっ。ティル……。このままじゃあ」

胸元で激しく揺れるゴーグルは、今まさに吹き飛びそうになっている。カシオの体は何とか渦浪尖の刃が地面に突き刺さり、耐えしのいでいた。ティルも天翔姫を地面に突き刺し、耐えているが、次第に手の感覚がなくなりつつあった。

目を凝らすティルは、魔獣の声が聞こえなくなったのに気付く。それと同時に風が弱まり、舞う木の葉が静かに地に降り立つ。そして、魔獣の姿がなくなっているのを確認し、素早く天翔姫を構える。

「カシオ！ バルド！ 来る……ッ！」

鈍く重々しい音が聞こえると同時に、視界が真つ暗になった。重々しい一撃が、ティルの腹を貫き、その痛みに意識が吹っ飛んだの

だ。地に崩れ落ちたティルの体は、ドサツと、鈍い音をたてた。

倒れたティルに目をやったカシオは、駆け寄ろうとした瞬間に重々しい拳を顔面に受け、弾き飛ばされた。地を転げ、大木に背中を打ち付ける。

「ぐはっ……」

血を吐き出し、力無く渦浪尖を手からこぼす。意識はあるが、視界は薄れていた。その視界の中に、微かにだが映った。先程までとは全く違う、太くガツシリした腕と脚。右手の爪は、大きく鋭い剣になり、左手は大きく重々しいハンマーに変わっていた。ティルもカシオも、その左手に殴られたのだ。

その後、バルドもその重々しいハンマーに殴られ、地を転げた。地に倒れた三人を、見下す魔獣は「フツ」と、鼻で笑うと嫌味な笑みを見せる。

「弱いな。弱過ぎる。少し本気を出したただけなのに」

「グフツ……。ふざけんな……」

「おや。お目覚めですか？」

体を起したティルにそう囁く魔獣。目の色を変えたティルは、天翔姫を力強く握り柄の先のボタンを押す。真っ白なボックスに戻る。それを掴むティルは、切れ長の目で魔獣を睨むと、天翔姫のボタンを押す。すると、細身だった刀身が、太く大柄の刀身へと変化する。それを両手で持ち上げるティルは、鋭い目付きで魔獣を睨み天翔姫を中段に構える。

「ふん。それ、随分と変わった武器だ」

「変っているのは、俺の武器だけじゃない」

「ンツ？ それは……！」

風を裂く音と共に、鋭い風の矢が無数魔獣に襲い掛かる。ガツ、ガツと鈍い音をたて、地面に突き刺さる風の矢は、シューッと落ち葉を舞い上げ静かに消えてゆく。矢をかわした魔獣は、目の色を変え矢の飛んできた方を見据える。そこには、双牙を右手に持ち、左手を弓を引く様に構えるバルドの姿があった。

「随分と舐めた真似をするねえ」

「次は頭を貫く」

「出来るか？ なら、やってみる」

堂々とする魔獣は、木の上に立つバルドを見上げ、不適に笑みを見せる。すると、バルドは引いていた左手を放す。渦巻く風の矢は、双牙から放たれ勢いを増し、魔獣の額目掛けて一直線に飛ぶ。鋭い目付きをする魔獣はその矢を一瞬で後方に跳び退きかわす。矢は鈍い音をたて、地面に突き刺さると、そのまま地面を抉る。

「ハズレだ！」

「こっちは、当りだ」

魔獣の背後でカシオの声が響く。その声に振り向く魔獣の目に、鋭い三又に別れた刃の槍を構えるカシオの姿が映る。その槍の先は鋭く煌き、それが思いつき突き出された。瞬時に身を翻す魔獣だが、その体を絡めるかの様に三又に別れた刃の端が魔獣の脇腹を掠める。

「ぐッ！」

「弾ける！ 浪刃」

「うぐッ！ がああああっ」

渦浪尖に斬り付けられた脇腹を、激痛が襲い体が波に呑み込まれたかのようにはじき跳ぶ。地を抉る魔獣の体は、勢いを止め口角から血を流す。地面には右爪の痕がくつきり残っていた。

「どうだ！ 体に傷入れてやったぞ！」

「カシオ！ 避ける！」

「へっ があっ！」

一瞬の事だ。分かっていた事はだったが、魔獣のスピードは速く。その一撃は勢いがつき、重々しい一撃だった。カシオの体は地面を抉り、土煙を巻き上げる。そんな土煙の中に、薄らと浮かぶカシオの姿は、腰を低くし槍を構えている姿だった。それを見た瞬間、魔獣はとっさに身を構える。

「波状穿孔！」

渦浪尖を何度も連続で突き出す。鋭く素早い刃が、何度も魔獣の体を襲う。風が渦浪尖の刃の周りを渦巻き、その風が突き出される度に魔獣の体を激しく傷付ける。体を引き裂かれ、血飛沫が舞う。

「グッ！ 弱者がなめるな！」

後退しながらそう叫ぶ魔獣は、突き出された渦浪尖の刃を右手の剣で上に弾く。体勢を完全に崩されたカシオだったが、口元に笑みを浮かべると、右足を力強く踏み込む。右足に全体重が乗り、弾かれた渦浪尖を勢いよく振り下ろす。

「俺をなめんなよ！」

「お前こそ、なめるな！」

勢いよく振り下ろされた渦浪尖目掛け、左手のハンマーを突き上げる。ガチインと大きな金属音が響き、その後に爆音と地面が砕け散る音が轟き土煙が二人の姿を包み込む。突風が吹き荒れ、微量の塵にティルとバルドは顔を顰める。

「死んだのか？」

木の枝から飛び降りてきたバルドが、ティルに呟く。バルドのその言葉にティルは苦笑いを浮かべながら、「それは、どっちの方だ？」と、聞く。大体予測はしていたが、バルドは静かに「両方だ」と、答えた。呆れた様に苦笑するティルは、ため息を吐き土煙の中を見据える。

土煙の中から一つの影が飛び出す。ティルとバルドはすぐに武器を構え、目付きを変えた。土煙から飛び出した影は、木の枝の上で立ち止まり、乾いた咳と同時に子供っぽい声が響く。

「ゲホツ、ゲホツ。だ、誰が死んだだ！勝手に殺すな！」

「チツ。……生きてたか」

残念そうなその声に、カシオは眉間にシワを寄せ怒鳴る。

「な！何だ！その態度は！人は生死の境を彷徨う所だったのに！」

「……うるさい」

「キーツ！うるさいだと！なめんな！こんにやる！」

大騒ぎするカシオは木の枝から飛び降りる。そんなカシオを、無視するバルドは、つまらなそうに目を細める。そんな二人のやり取りに、苦笑するティルは、漂う殺気に表情を変える。その殺気に気付いたのは、ティルだけではない。先程まで騒いでいたカシオも、

つまらなそうにしていたバルドも、その殺気に気付き真剣な面持ちで、武器を構える。

「ふふふ……。面白いよ……。君達……。さ」

背筋をゾツとさせる様な不気味な声に、三人は薄らと冷や汗を流していた。体にピリピリと感じる殺気に、微かに震える手足を、押さえ込み真っ直ぐ土煙の中を見据える。いつ魔獣が出てきても対応出来る様に武器を構え、それぞれ体勢を整える。

「今度は、殺す気でいく」

殺気が土煙の中から消える。その瞬間、ティルは「来るぞ！」と、叫ぶ。砂塵が所々で舞い、その度に地面に爪痕が残される。それが、魔獣の通った痕だと三人は分かっていた。だが、魔獣の姿を視界に捉える事は出来ない。そして、その刃は徐々にティル・カシオ・バルドの三人の体をも傷付けてゆく。ティルの左頬、カシオの右腕、バルドの左太股。それぞれに三本の赤い線が走った。



## 第40回 三人の戦い方（後書き）

お久し振りです。 崎浜秀です。

今回で、前作から合わせ140回を迎えるわけですが、物語の進み具合は皆様から見てどうでしょう？

ペースは遅いですが、一応着々と第二幕もクライマックスに向けて進んでおります。

と、言っても、まだまだ先の話ですけど。

読者の皆様には本当に感謝してます。 まだまだ、力不足で読み辛い作品だと思いますが、最後まで読んでいただけるとありがたいです。

## 第41回 轟く呻き声

地面を裂く三本の爪。大木を押し折る拳。三人の周囲に聳える木々はなぎ払われ、地には無数の爪痕が残されている。砂塵が舞い、木の葉が散る。鋭い風の音が聞こえ、それが魔獣の動く音だと分かる。そのスピードは徐々に上がり、砂塵だけが三人を包み込む。

目を凝らす三人は、その砂塵の舞う位置の先を予測する。だが、その予測とは全く別の方に次の砂塵が舞う。警戒する三人は、ジリジリと後退し、背中を預ける形になる。

「どうする。テイル。このままじゃあ、俺ら細切れにされちまうぞ」  
「知らん。俺に聞いてどうにかなるわけじゃないだろ。自分で突破口を探せ」

冷たく突き放すテイルに、不服そうに頬を膨らますカシオは、眉間にシワを寄せたまま前を見る。魔獣の走る音しか聞こえてこない。何処にいるのかも予測が出来ず、瞳だけを仕切りに動かす。

太い刀身の天翔姫は重く、テイルの両肩に疲労を重ねる。その為、カシオやバルド以上に、額から汗が流れる。しかし、それを悟られまいと、必死に平常心を保っていた。

左太股から血が滲むバルドの足元には、血が薄らと膜を張っていた。すでに大量の出血をしているが、何事も無い様な表情をして、双牙を構える。右足に力が入らず、痙攣を起していた。それに、カシオが気付いた。

「お前、右足……」

「黙れ。お前に心配される筋合いは無い」

「けど……」

心配そうな表情を見せるカシオだが、バルドの鋭い眼光に言葉を呑む。と、その時テイルが叫ぶ。

「来るぞ！」

その言葉と同時に鋭い空を裂く音が、三人の頭上から聞こえ、鋭く煌く太い爪が下ろされる。三人はすぐに散らばるが、右太股を切られたバルドは、テイルとカシオよりも数歩逃げ遅れる。

「まずは、一人目だ！」

「チツ！ なめるな」

双牙を魔獣に向って平行に構えると、右手で矢を引く様にする。すると、鋭い風の矢が螺旋を描き、鋭い鋸を作り出す。魔獣の口元に薄ら笑みを浮かべ、左手のハンマーの拳が脇を確り締める。その刹那、双牙から風の矢が放たれた。と、同時に右の爪が引かれ、その勢いをそのままに左のハンマーが円を描く様に風の矢の腹を弾く。

「！」

「終わりだ」

魔獣の呟く声。それは、バルドにしか聞こえない程小さな声。そして、捻られた上半身が、勢いよく引かれた右の爪をバルドに向けて突き出す。

「バルド！」

足を止め振り返るテイルだが、すでにバルドと魔獣との距離が開いている為、どうする事も出来ない。カシオもそれは同じで、足を止めテイルの方に体を向け叫ぶ。

「テイル！ このままじゃあ！」  
「クツ！」

奥歯を噛み締め舌打ちをするテイルは、瞬時に天翔姫の柄の先のボタンを押し、ボツクスに戻す。そして、すぐさまボタンを押し。ボツクスはリズムの良い金属音を響かせ銃へと形を変える。だが、それを構えるより先に、バルドに魔獣の爪が突き刺さりそうだった。

「間に合わん！」

「相変わらず、詰めが甘いな」

「！」

聞き覚えのある声と共に銃声が響く。轟く風の音が大気を裂き、一直線に振り上げられた魔獣の右腕を撃ち抜く。

「ぐあああああつ！」

呻き声を上げる魔獣の右腕には、三センチ程の丸い穴が開き、その穴から真っ赤な血が吹き出る。溢れる血は、雫となり地に降り注ぐ。ドボドボと、水を注ぐ様な音が辺りに響き、その音をかき消す魔獣の呻き声。そして、その呻き声の奥で微かに聞こえてくる足音。目付きを鋭くするテイルは、足音の方に目を向ける。驚いた表情を見せるカシオは、何が起こったのか分からずテイルの方に目をむけ叫ぶ。

「い、今のテイルがやったのか！」

「いや！ 俺じゃない。今のは」

そこまで言った後、テイルとカシオの視界に一人の男の姿が見え

た。灰色の短い髪に、穏やかな目。黒く艶のある銃を右肩に肩掛け、軽装の下から見える鍛え上げられた腕と足。そして、チョット老けた顔。だが、その顔にはどこか威厳があり、堂々としている。

「久し振りだな」

穏やかな笑みを浮かべる男は、左手を軽く上げる。不服そうな表情を見せるテイルは、眉間にシワを寄せたまま深々とため息を吐き返事を返す。

「いつから見ている。ブラスト！」

「あいつが、ブラストだって？ 何、言ってんだよテイル。ブラストはまだ二十九だぞ？ そいつは、どう見ても三十後半じゃないか！」

ブラストと面識がある様な言い方のカシオに対し、右手で額を押さえるテイルは説明するのがめんどくさそうにため息を吐く。呆れた様に目を細め、微かに額に青筋を立てるテイルは、カシオの方に顔を向けた。

「こいつが、真正正銘、フォースト王国の王。ブラスト＝イルハンだ」

「う、嘘だ！ こんな老けた奴が、ブラストなわけ無い！」

そう叫ぶカシオに、テイルは目を細めたままブラストの方に顔を向け呟く。

「あんな事言ってるぞ」

「ナハハハッ！ な〜に。ホンの十五年ぶりの再会だ。忘れてたって気にする事無いさ」

「……」

言葉を失うテイルは、引き攣った表情を見せカシオを睨み付ける。そのテイルの眼光に、「ギョッ」と声を上げるカシオは、半歩後退した。そんなカシオの方を見て笑うブラストは、「まあまあ」と、言いながらテイルの方へと歩み寄る。呆れた表情を見せるテイルは、「あのな……」と、呟き肩を落とす。

そんなテイルの右肩を叩くブラストは、軽く頷きながらカシオの方に足を進める。ブラストの行動に何の意味があったのか分からず、テイルは軽く首を傾げた。

「いやいや。渦浪尖をもってるって事は、お前があの時の少年だな。大きくなっただじゃないか」

「あんた、本当にあのブラストなのか！ あん時はもつと若くて、カッコよくって……」

「いやいやいや。何言ってるんだ。今でもカッコいいだろ？」

その言葉に完全にしらけた表情を見せるカシオは、ブラストの後ろにいるテイルの方に目を向ける。やる気の無さそうな顔をしているテイルは、銃をボックスに戻して右手の人差し指と中指で額を押さえ、疲れた様のため息を吐く。

「カシオ。適当に相手しないと疲れるだけだ」

「けど、幾らなんでも十五年で老けすぎだろ？ 二倍は歳くってるぞ」

「君、失礼だな。あの頃は、素直で可愛かったのに……」

がっかりした様子のブラストに、眉間にシワを寄せるカシオは目を細めムスツとした表情を見せる。

完全に魔獣の事を忘れている三人に、バルドが歩み寄る。だが、

一言も言葉を告げず鋭い目付きでブラストを睨みつけていた。そんな四人の背後で、濁った苦しそうな声が聞こえてくる。

「き……貴様等……。ゼエ…ゼエ……。皆殺しにしてやる」

怒りを滲ませる魔獣の顔に、薄らと亀裂が走っていた。その事に初めに気付いたブラストは、真剣な表情に変わる。その亀裂は、徐々に魔獣の体まで届き、殺気が漂い始める。悪寒が四人の背筋をゾクゾクとさせ、瞬時に武器を構えさせる。

目付きを鋭くするブラストは、バルドの双牙を見ると静かに口を開く。

「双牙をもってるって事は、あの時助けてやった地護族の小僧か」

「……だとしたら？」

「双牙を貸せ」

「……何故」

「黙って渡せ！ それから、天翔姫と渦浪尖もだ！」

いつに無く真剣な顔つきのブラストの声に、ボックスのままの天翔姫を投げ渡すティル。カシオも渦浪尖を三十センチの筒の棒に戻してブラストに手渡す。眉間にシワを寄せたままのバルドは、奥歯を噛み締め渋々とブラストに双牙を渡した。

「一体、何をするつもりだ？」

天翔姫・渦浪尖・双牙を素早く組み合わせしていくブラストに、ティルが心配そうに声をかける。天翔姫のボタンを素早く押ししていくと、正方形だったボックスが長方形へと変貌した。その両端に分離させた双牙の柄を合わせる。カチツと音がし、天翔姫と双牙が一つになり、巨大な弓となった。

それを右手に持ち渦浪尖のボタンを押す。三十センチの筒は伸び  
先から鋭い一本の大きな刃をむき出しにする。それを矢を放つ様に  
弓に構える。

「おい。どうするつもりだ？ ブラスト」

「黙ってみてろ」

重量のある渦浪尖を片手で簡単に引くブラストは、息を静かに吐  
き出す。ギシギシと軋みだす渦浪尖の柄を、風が鋭い音を響かせな  
がら包み込む。螺旋を描く風は、今にも渦浪尖をはじき出そうとす  
る。天翔姫が渦浪尖を包み込む風の力を更に強め、轟々しい音を響  
き渡らせた。



## 第42回 解き放たれた矢

森の中に響く呻き声と、風の轟く音。

二つが混ざり合い、大気を震わせる。

草木が大きく揺れ、衝撃に耐え切れない木々は、根を地面から抉り上げ崩れ落ちた。

吹き荒れる風に顔を顰めるティル、カシオ、バルドの三人は、天翔姫・双牙を組み合わせた弓に、矢となる渦浪尖を引くブラストを見据える。

渦浪尖の周りを螺旋状に包み込む風は、ブラストの方へと吹き抜け激しく体を襲う。それでも、渦浪尖を引いたままジツと動かないブラストは、奥歯を噛み締め魔獣を真っ直ぐに睨む。

「グウウウウッ！ ミ……ナ……殺シ……」

喉からなるガラガラの声が、僅かにブラストの方に聞こえた。それは、もう先程までの魔獣の声ではない。

悲しげな瞳を見せるブラストは、渦浪尖の切っ先を魔獣の胸の位置にあわせる。

徐々に軋みだす天翔姫と双牙。渦浪尖を取り巻く風に、耐え切れなくなっていたのだ。双牙の大きい刃に僅かに亀裂が走り、天翔姫の両端にも僅かながら亀裂が入る。そして、渦浪尖の柄もメキメキと、軋みだす。

三つの武器の耐久度が限界を迎えようとしていた。その為、ブラストは狙いを定め、口を開く。

「天を翔ける！ 天牙・渦動穿孔！」

左手が静かに渦浪尖を放す。螺旋を描く風が、解き放たれた渦浪

尖を前へ前へと突き出して行き、その風が後方に立つブラストの体を押しつける。地面に踏み止まる両足は、地面を抉り引き摺られた。一方、放たれた渦浪尖を渦巻く風は、天翔姫によって圧縮される。圧縮された風は、互いにぶつかり合い、その力を一気に開放した。その時、凄まじい爆音が轟き、爆風が森の木々をなぎ倒し、ティル・カシオ・バルドの体も弾き飛ばした。

「ぐふっ！」

「うっ！」

「クッ！」

三人は地面を転げ、爆風の届かなくなる場所まで飛ばされた。すでに辺りは爆風で舞い上がった土煙に覆われ何も見えなくなっていた。ブラストの姿も魔獣の姿も。

そして、音すら聞こえない。魔獣の呻き声も、鋭い風の音も、何もかも聞こえなくなり、聞こえてくるのは、パラパラと落ちてくる地の欠片や、木々の破片の音だけ。

体を起したティルは、隣に倒れるカシオをたたき起こす。

「起きろ！ 寝てる場合か！」

頭を叩かれ、意識を取り戻すカシオは、体を起し頭を左右に振り、「ウウウツ」と、声を出す。吹き飛ばされた時に頭を激しく打ち付けた為、まだ意識はぼんやりとしていた。

土埃を払いながら立ち上がるティルは、辺りを見回す。

「うっつ。ティル……どうなったんだ？」

頭を右手で押さえながら、立ち上がったカシオが呟く。目を凝らすティルは、そんなカシオの質問に冷たい声で答える。

「俺に聞くな。お前も知っているだろ？ 一緒に吹っ飛ばされたんだから」

「まあ、そうだけど……」

「それより、バルドは何処だ？」

一緒に飛ばされたバルドの姿が無い事に、聊か疑問を抱くティルに、後方から声がする。

「俺はここだ……」

振り返ると、土埃を叩くバルドの姿があった。出血した所に土埃が付着している為、中々土埃は落ちず悪戦苦闘していた。

「大丈夫そうだな」

「でも、一体何が起きたんだ？ 急に爆発したけど」

「さあな。あいつの考える事は、俺には全く理解できん」

呆れた様子のティルは、冷たい口調でそう言い放つ。静かに息を吐くカシオも、「全くだ」と、呟き右手で頭を掻く。バルドの方は何も言わないが、その表情は二人と同じ意見の様だった。

それから暫くし、舞い上がる土埃は薄れ、ようやく辺りの様子はつきりと分かり始めた。

無残に砕かれた木々。

抉り取られた地面。

辺りに茂みなどは無く、一体がさら地と化していた。

「な、何だこれ！ どうなってんだよ！ 確か、ここって森だったろ？」

「ここで騒いでもどうにもならんさ。まずは、プラストを探すぞ」

慌てるカシオに対し、冷静なテイル。そして、全く反応すらしないバルド。三人は大きく円形に窪んだ地面を歩き始め、その中心へと向う。そこに、きつとブラストが居るからだ。

だが、中央に近付くにつれ、濃くなっていく土埃に、三人は足止めをくらっていた。

「これ以上は、進めない」

「それにしても、随分と下ったな」

カシオが自分達を通った道筋を振り返りながら呟く。

確かに、随分と下ってきたが、未だ中心が見えてこない。それだけ、あの爆発が凄かったのだろう。

「なあ、あの魔獣は倒せたのかな？」

「知らん。大体、あんなのが当るとは思えないがな」

「ご立腹のテイルに、苦笑しながら「そうだよな」と、カシオは呟く。そして、黙ったままのバルドの方に顔を向ける。だが、声を掛ける事は出来ない。何と無く、近付くなと言うオーラを、体から発しているからだ。

それから、暫くし三人は歩き始める。土埃が薄れ、視界もよくなつたからだ。

足場は徐々に悪くなり、崩れやすくなる。慎重に足を進めるテイルとカシオに対し、慣れた足取りで歩みを進めるバルド。

そんな三人の距離は次第に遠のき、テイルとカシオはバルドとはぐれた。

「バルドの奴、随分と慣れた足並みだったな」

ティルは眩き、後ろを振り返る。そこには、恐る恐るゆっくりと慎重に足を進めるカシオの姿があった。

啞然とするティルは、ため息を吐き腕組みをしながら、カシオの方を見据える。

「おい！ 早くしないと置いてくぞ！」

「ちよ、ちよっと待てよ！ 俺、こつ言つのが　！」

カシオが右足を置いた所が、突然崩れ、カシオの体が坂を転げ落ちる。

「うわあああつ！」

「か、カシオ！」

ティルも何とか助けようとしたが、カシオの体は転がりながら土埃の中へと消えていった。呆然とするティルは、右手の人差し指と中指を額に沿え、眉間にシワを寄せながら静かにため息を吐く。

こんな事があっていいのかと、ティルは思いながらもう一度ため息を吐く。あまりの馬鹿馬鹿しさに、ドツと疲れがこみ上げた来た。

「何だか、あいつといるとフォンといる以上に疲れる……」

小さく眩き、ティルはカシオを追って土埃の中へと入っていった。埃っぽい空気に、顔を顰めるティルは、何度か「ゴホッ、ゴホッ」と、咳き込み真っ直ぐに歩みを進める。

真っ直ぐ歩き続け、ようやく平らな足場へと変る。ここが、中心部で間違いない。だが、誰の姿も見えない。まだ、濃い土煙に覆われているからだ。

目を凝らすティルは、土埃の中に一つの人影を発見する。

「ブラストか？」

その問い掛けに、人影が僅かに動く。きつと振り返ったのだろう。そして、こちらに向って近付いてくる。

軽く身構えるティルは、目を凝らし相手を真っ直ぐ見据える。

「あいつは、一緒じゃないのか？」

落ち着きのある声。それは、バルドの声で、ティルは警戒を解き静かに歩み近付く。

「カシオなら、坂を転げ落ちた。見かけなかったか？」

「そうか……」

「しかし、この土埃の中、よく俺の顔が見えたな」

感心するティルに対し、バルドは当然という表情を浮かべ口を開く。

「森の中で生きれば……自然と眼も良くなる」

「そうかい。地護族って言うのは、凄いもんだな」

笑みを浮かべるティルは辺りを見回す。辺りに人の気配は無い。

その為、困った様に頭を掻く。

そんなティルの背後に人影を見つけるバルドは、目の色を変え小さく舌打ちをする。

「どうかしたのか？」

「奴だ……」

「奴？」

テイルが振り返ると、ボロボロの姿のカシオがテイルの視界にも入った。その姿に驚くテイルは、声を上げる。

「だ、大丈夫か？」

「だ……大丈夫……そうに見えるか？」

擦れた声のカシオは、フラフラとしていた。随分と転げたのだから。痛々しい傷ばかり残っていた。

呆れて笑うしかないテイルは、半笑いを浮かべ深々とため息を吐いた。

### 第43回 無残な形

土埃立ち込める中、三つの影が映る。

一人は顔立ちの良い少年ティル。

もう一人は目付きが鋭く表情の硬いバルド。

最後の一人は大人しい顔つきでゴーグルを首に掛けたカシオ。

「ゲホツ、ゲホツ」と、乾いた咳を繰り返すのはカシオで、それをティルは呆れた表情で見据え、バルドは全く相手にしていない。

足場が悪いため、歩きたびに土の碎ける音が聞こえ、三人の足音がそれぞれのリズムを踏む。ティルの足音はテンポが良く、バルドの足音は少々速い。そして、カシオの足音は遅くテンポも最悪のものだ。その為、ティルは時折足を止めカシオの方を振り返る。

「おい。もう少し早く歩けないのか？」

「う、うるさいな！ 俺は、こつ言う足場の悪い所は苦手なんだ！」

ティルの声に、必死に足元を見ながら反論するカシオだが、全く弱々しい。両肩をガツクリと落とすティルは、深々とため息を吐き、左手で額を押さえた。

一方、着実に足を進めるバルドは、静かに足を止めた。背後にはティルとカシオの姿が微かに映り、前方には一つの影が浮かび上がった。それが、魔獣なのか、ブラストなのかはつきりしないが、バルドは目を細め確りと影を見据える。

次第にはつきりとする影は、ブラストにしては大きく、右手と左手の形の違う。その事から、バルドは瞬時にそれを魔獣と判断し、ティルとカシオに向かって叫ぶ。

「急いで、下がれ！」

「？」



「どつした！ バルド！」

軽く首を傾げるカシオを無視して、ティルがそう叫ぶ。すると、風が土埃を裂き、地面が引き裂かれる。何が起こったのかわからないカシオとティルの方に、黒い影が宙を舞って飛んできた。

そして、血飛沫が、辺りを包む土煙と混ざり合い、地面にぼたぼたと落ちる。それに遅れ、鈍い音を奏でバルドの体が地を抉る。碎けた岩肌がバルドの体を激しく傷つけ、体中血塗れになっていた。

「バルド！ 何があつた！」

「この傷口は、鋭利なモノで傷付けられたものだ！」

「うっ……うっ……。奴は生きている」

弱々しい口調のバルドの言葉に、ティルとカシオは目の色をかえる。辺りを警戒し身構え、気配を探った。声が聞こえる。苦しそうな呻き声。先程までは聞こえていなかったはずの音が。

その声の方へと体を向けるティルとカシオの視界に、影が映る。魔獣にしては小柄で、背中になにか大きなモノが見える。それが、何か分からないが、こちらに近付いてきているのははっきりわかった。

「来るぞ……」

「分かつてるって」

身構える二人に、歩み寄る影が右手を上げる。その行動に、「はあ？」と、二人が同時に声をだす。その声に対し、向ってくる影が明るい声で叫びかける。

「おう！ 皆無事だな！」

その能天気な明るい声に、青筋を立てるティルは、影に向かって叫

ぶ。

「ふざけんな！ ブラスト！」

土埃の中から姿を現したブラスト。その左手には、黒く長い柄を握り、その先が土埃の中から徐々にあらわになる。胸に風穴の開いた魔獣の腹に、鋭く黒い刃が突き立てられていた。そして、血が大量に地面に滴れている。白目をむいた大きな目は、もう開ききらないといわんばかりに開ききっていた。

「何、怒ってんだ？ テイル。短気は損気だぞ」

何事も無かったかの様に笑ってみせるブラストに、引き攣った笑みを見せるテイルは、米神を震わせたついでに、拳も震わせた。だが、笑みを浮かべるブラストは、テイルの事を無視して、胸を裂かれ血塗れで倒れるバルドに目をやった。

「なっ！ だ、誰にやられたんだ！」

驚きの声を上げるブラストに対し、軽蔑する様な目付きをする力シオが答える。

「誰につて、あなたの背後に横たわる魔獣にだよ。大体、渦浪尖はどうしたんだ？ それに、天翔姫や双牙も……」

「そういえば、見当たらないな……」

「うっ……い、いや……その……」

何やら戸惑うブラストは、何故か二人から視線を逸らす。不可解に思ったテイルは、眉間にシワを寄せ、ブラストの顔を睨みつける。額から流れる尋常じゃない汗。そして、全く目を会わせようとしな

い。これは、何かあると、思ったテイルは静かに口を開く。

「ブラスト。お前、俺らの武器に何かしたろ？」

「い、いや……。大した事じゃない。き、気にするな」

「気にするな……。だと？ それじゃあ、今すぐに見せてみるよ」

「だ、だから……。気にするなつて言っているだろ？ なあ、それより、バルドの方が心配だ。早く町に連れて行こう」

明らかに焦りを窺わせる苦笑い。これに、ますます疑いの眼差しを向けるテイル。その鋭く突き刺さる様な視線に、ブラストの笑みはダンダン引き攣っていく。

ゴクリと、生唾を呑むブラストは、静かに息を吐き心を沈める。その行動に気付いたテイルは、畳み掛ける様に声を張り上げる。

「お前！ さては！」

「！」

その言葉に驚きの表情を見せるブラストは、「す、すまん！」と、思わず謝った。何の事か分からないテイルとカシオは顔を見合わせ首を傾げ、ブラストの話の聞く事にした。

「何！ 渦浪尖が砕けただと！」

カシオの声が森にこだまし、鳥達が木々から飛び立ってゆく。

「ど、どどどどどうしてくれんだ！ 渦浪尖は俺の大切な、大切な

……」

「いや〜っ。本当に申し訳ない。まさか、ああも簡単に砕けるとは思っても見なくてな。こりゃ、もっと改善しなきゃいかな。ハハ

「ハハハハッ！」

すでに辺りに立ち込めていた土埃は消え去った。その為、この穴の深さがどれほどのものか良く分かる。

日はすでに暮れ、辺りは薄暗くなっていた。だが、月光のお陰か、少し明るく感じる。

微かに流れる夜風は、脆く崩れやすい岩肌を撫で、僅かながら削りとっていく。その音はほんの小さな音で、テイル達の耳に聞き取れるものではない。

「しかし……よくまあ、こつも無残に……」

「すまん。テイル」

「いや……。俺に謝られてもな……。大体、何で開発者のお前が、耐久度を知らない？」

「うん。そもそも、天翔姫が造られた時には、渦浪尖も双牙も、俺の手元にはなかったからな」

能天気になんと言うブラストは、大声で笑い出す。呆れて言葉も出ないと云った様子のテイルは、右手の親指で米神を押しながら、軽く首を左右に振った。

そして、その目は地面に無残な形で置かれた天翔姫へと向けられた。バラバラにされた天翔姫の破片を見据えるテイルは、静かにため息を吐く。

一方、テイルの横では、渦浪尖の無残な姿を見ながら泣き崩れるカシオの姿があった。そこまで、愛着があったのかと、思うほど大粒の涙をこぼし、仕舞いには号泣し始めた。手のつけようの無いカシオに、呆気にとられるテイルとブラストは、疲れ切ったため息を漏らした。

「カシオには、悪い事をしたな。まさか、あんなに愛着を持ってる

とは……」

泣き崩れるカシオの姿に、本当に申し訳無さそうな表情を見せるブラストが、そう呟いた。怪訝そうな表情を見せるティルは、なにやら変な目でブラストを見据え口を開く。

「お前、本当にそう思ってるのか？」

「ンツ？ 何だその目は？ オイオイ。まさか疑ってるのか？」

腕組みをし、堂々とした態度をとるブラストに、深々とため息を漏らすティルは、「いいや」と、小さな声で呟き含み笑いを浮かべる。まるで、ブラストをバカにするかの様に。

だが、ブラストは全く気にしていない様で、落ち着きのある声で問いかける。

「それで、こいつらが、お前の探していた仲間か？」

「ンツ？」

突然の問い掛けに、思わず顔を顰めるティルは、ブラストの方に顔を向け妙な表情を見せる。ブラストは嬉しそうな表情を見せ、真っ直ぐに地面を見据えていた。

鼻から静かに息を吐くティルは、視線を地面へと落とし静かに答える。

「いいや……。そいつとは、別れた」

「別れた？ どうしても、仲間とやる事があつたんじゃないのか？」

驚いた様子のブラストの声に、軽く首を左右に振ったティルは、口元に薄ら笑みを浮かべ答えた。

「俺は、あんたに用があった。それに、自分の無力さを知った。もつともつと、強くならなきゃいけない。あいつと肩を並べるには…」

深刻そうな面持ちのテイルは、握り拳を震わせ奥歯を噛み締める。その目は鋭く、いつに無く力が籠っていた。嬉しそうに笑みを浮かべるブラストは、そんなテイルに静かに言う。

「そうか……。お前の仲間とやらは、相当早いペースで走っていくんだな」

と、小さな声で。

## 第44回 豪華な食卓

「すげえ〜……。ここが、都会って言う場所か……」

驚きの声を上げるカシオ。見上げるのは、白く所々が黒ずんだ高い塀。

そして、目の前には大きな門が閉じている。

ティル達一行は、二週間掛け、フォースト王国都市ブルドライに來ていた。そして、ここはそのブルドライの正門の位置。町はこの城壁の内側にある。

殆ど北の大都市レイストビルと構造は変わらないが、城壁の高さはレイストビルに比べて高く頑丈なモノだった。

「前に來た時より、城壁が高くなっている気がするの、気のせいかな？」

「ん〜っ。そうだな。お前がここに來たのは、確か五年前か……」

まあ、あの頃に比べたら、幾分高くなったかな」

「幾分……っつて、そんなもんじゃないだろ？」

城壁を見上げたまま呆れた様に笑うティルは、静かに視線を落とし大きなため息を吐いた。大笑いするブラストは、そんなティルの様子には気付いていない様で、カシオとバルドの二人は城壁を見上げたまま言葉を失っていた。

呆然とする二人に、疲れた表情を見せるティルはため息交じりで言い放つ。

「それ以上見上げると、首が痛くなるぞ」

「なっ！ そ、それを早く言え！」

慌てた様子のカシオがすぐに視線を落とし、それとは対象的にバルドがゆっくりと視線を落とす。全く口すら聞こうとしないバルドは、腕組みをしたまま難しい表情のまま黙り込む。一方のカシオは、ブツブツと何やら独り言をぼやいていた。

頭を抱えるティルは、能気なブラストの方へと視線を向ける。相変わらず、大笑いしたままのブラストは、ティルの視線にようやく気づき、軽く喉を鳴らして口を開いた。

「ンンツ。悪い悪い。さあ、そろそろ入国するか。色々あって、腹も減っただろうからな。今日はご馳走だ！」

「ご、ご馳走！ ま、マジか！ 久し振りに上手い飯が食えるんだな！ うしししっ！ タラフク食うぞ！」

ブラストの言葉に一人テンションの上がるカシオ。久し振りに暖かいご飯が食えると言う事で、ハイテンションになっているが、ティルとバルドの二人は全く微動だにしない。表情を変える事も無く、冷たい視線だけを送っていた。

だが、結局その冷たい視線はカシオとブラストの二人には届かず、ティル達はフォースト城の食卓の前に座らされていた。見た事の無い様な豪華な料理が数々並び、カシオはその料理に目を輝かす。

「もう、食べても良いのか？」

「ああ。良いぞ。いっぱい食え！」

「うっしや！ 一杯食うぞ！」

その掛け声と同時に、カシオはチキンに喰らい付いた。それからパンを食らい、スープを啜り、サラダを食らい、焼き魚を骨まで丸ごと食らった。無心で食べ続けるカシオの姿は、獣のようで、奴の周囲にある料理に手を出せば、襲い掛かりそうな迫力があつた。

堂々と落ち着いた様子 of ブラストは、ガッツクカシオを見て、微



かに笑みを浮かべ、スプーンでスープを一口口に運んだ。

「ソツ。旨いな。どうした？ テイルもバルドも食わんのか？」

料理に手を出さないテイルとバルドの二人にそう問いかけるブラストに、鋭い眼差しを向けたバルドが答えた。

「ふざけるな！ 俺は、こんな所で仲良く食事をする為に来たわけじゃない！」

勢い良く立ち上がり、テーブルを右拳で力いっぱい殴りつける。食器が衝撃でカタカタと音を立て、スープの水面に波紋が幾つも広がった。これには、がつついていたカシオも手を止めバルドの方へと視線を向ける。が、その口には確りとパンが銜えられていた。揺れるスープの水面を、軽くスプーンで撫でるブラストは、立ち上がったバルドに穏やかな視線を送り、静かに口を開いた。

「座れ。ここは、食事を楽しむ場所だ。出された料理は黙って全て食べる」

「くっ！」

一瞬、ブラストの穏やかな眼差しが、鋭く変った。その眼差しは殺気立ち、バルドの体は自然と椅子へと落ちていた。そして、バルドは奥歯を噛み締めながら、目を閉じ眉間にシワを寄せたまま俯く。それから暫くし、バルドは渋々と目の前の料理を口へと運んでいった。

しかし、テイルは未だ料理に手をつけていなかった。何と無く、嫌な予感がしていたからだ。ブラストが何の理由も無く、こんな持て成しをするだろうか、思ったのだ。その為、未だに手をつけずブラストの顔を真っ直ぐに睨みつけていた。

その事に気付いていたブラストは、もう一度スープを口に運び口を開く。

「何だ。俺の顔に何か付いているのか？ それとも、俺に惚れたか？」

「俺が女だったとしても、お前にだけは惚れん」

「嫌われたものだな」

「それより、天翔姫はいつ直る？ それに、何か話があるんじゃないのか？」

ティルの言葉に、静かに息を吐くブラストは、スプーンを置き手を組み、肘をテーブルに付く。手を止めるバルドは、ブラストの方に目を向け、カシオは相変わらず肉にかぶり付いていた。落ち着いた様子のブラストは、目付きを鋭くし静かに口を開く。

「実は、お前らに頼みがある」

「もまめら？」

チキンを銜えたままのカシオが不思議そうな表情を見せる。何を言っているか、その場にいる誰もが分からず少々間が空いたが、何事も無かったかの様にブラストは話を進める。

「頼みと言つのは、簡単な事だ。ある山へ行つてほしい」

「自分で行け」

即答するティル。啞然とするブラストは、呆れた笑いを見せ呟く。

「俺は、こここの王様で、ここからそう簡単には出られないわけだ」

「ほぐつ。毎度城を抜け出すお前が？」

疑いの眼差しを向けるティルに、ブラストは引き攣った表情を見せる。流石にティルには色々と見透かされている様だった。その為少し焦るブラストだが、何かを閃いたのか、表情が明るく変る。

その様子に気付いたティルは、怪訝そうな眼差しでブラストを見据える。何か殺気のようなモノを背筋に感じ、眉間にシワを寄せ、口を開く。

「な、何だ……」

「行かないと、エリスに会わせないぞ」

その言葉に、ティルは目の色を変え、鋭い目付きでブラストを睨み付ける。しかし、ブラストは得意げに笑みを浮かべており、全くティルの事など気にしていない。それどころか、更にティルをおおる様に不適に笑う。

何の事だか分からないカシオとバルドの二人は、僅かに首を傾げた。

奥歯を噛み締めるティルは、卑怯なブラストのやり方に怒りを滲ませ、その眼差しから殺意の様なモノがヒシヒシとブラストに伝わっていた。その為、苦笑するブラストは、そのまま笑いながら言い聞かせる。

「冗談だ。冗談。全く、ジョークの通じない奴だ」

「黙れ。俺に冗談が通じると思うな」

目付きを変えず睨み続けるティルに、呆れた様な表情を見せつつ、「全く」と、呟くブラストは、軽くため息を漏らした。だが、顔を上げた時には表情が一変し、威厳のある真剣な表情になっていた。

「頼む。お前達にしか頼めない事なんだ」

深々と頭を下げるブラスト。それは、この国を背負う国王としての頼みだと、ティルも悟った。ブラスト自身の願いなら、容易く断るティルだが、国王としてのブラストの頼みを、ティルも断る事は出来なかった。

「……わかった。今回は、国王からの頼みだ。引き受けるしかないだろ」

「俺は……行かないぞ」

冷たい眼差しをティルとブラストの方に向けるバルドは、パンを右手で千切り口に運びそう呟いた。全く興味の無さそうなバルドに対し、複雑そうな表情を見せるブラスト。何かを言い出そうとしているが、どこか迷いがあった。何を迷っているのか分からないが、こんなに迷っている表情を初めて見たティルは、眉間にシワを寄せ問う。

「どうかしたのか？」

「いや……」

ブラストが俯くと同時に部屋の扉が開かれ、一人の兵士が慌てて部屋に入ってきた。

## 第45回 プラストの頼み

慌ただしく部屋へと入って来た一人の兵士。

その兵士の息は荒れ、表情は強張っている。何があつたか分からないが、その慌てぶりから、この国で何かが起こつたと、言う事だけはテイルやバルドにも分かった。目付きを変えるプラストは、兵士の方に目を向け静かに口を開く。

「どうした？」

「そ、それが……、ギファー山脈にて、火の手が！」

「何！」

その言葉にいち早く反応したのはバルドだった。勢い良く立ち上がり、その反動で椅子が音をたて倒れる。驚きを隠せないバルドの表情に、テイルは何を驚いているのだと、思う。そんなバルドは、怒りをむき出しにし、プラストの方へと視線を向ける。表情から怒りが滲み出ていたが、それ以前に殺気がヒシヒシと伝わっていた。

「どう言う事だ！ 何故、火を消しにいかない！ この国を守るのが、お前の仕事だろ！」

怒声を響かせるバルドに、一呼吸置くプラストは、一度目を伏せ静かに開く。その眼光は鋭くどこか力が入っていた。睨み合う二人を落ち着いた様子で確認するテイルは、腕を組んだまま黙り込んでいる。

沈黙の続き、バルドの怒りが爆発し、この沈黙を突き破る。

「何とか言え！ プラスト！」

奥歯を噛み締め拳を震わせるバルドに、ブラストは落ち着いた様子で口を開く。

「落ち着けバルド」

「うるさい！ 答える！ 何故、火を消しに」  
「黙れ！」

バルドの声を一喝するブラストの声が、部屋中に響きピリピリとした空気が流れる。ブラストを睨んだままのバルドは、そのまま背を向け扉の方に向かって歩き出す。何も言わず黙ったまま。

そんなバルドの背中を真っ直ぐ見据えるブラストは、威厳のある声で問いかける。

「何処へ行くつもりだ」

バルドはゆっくりと足を止め、軽く顔を横に向け答える。

「お前には関係ない」

「そうか。なら、言っておくが、ギファ―山脈を燃やす炎は消す事は出来ないぞ」

「うるさい！ 何もしないお前らよりはましだ！」  
「誰も、何もしないとは言っていない」

穏やかにそう答えたブラストは、ゆっくりと椅子から立ち上がりテイルとカシオの顔を見る。チキンを銜えたままのカシオは、「ふあに？」と、問い掛け、テイルは何と無くだか察しがついていた。その為、渋い表情を浮かべたまま俯いている。

真剣な眼差しを向けるブラストは、バルドの方へと足を進めた。それを目で追うカシオは相変わらず口にチキンを銜えている。だが、状況を悟り静かにチキンを皿に戻し、真剣な表情を見せブラストを

目で追う。

ブラストとバルドの距離が五メートルまで近付き、ようやくブラストが口を開く。

「炎を消す唯一の方法。それは、リバル山脈の清めの泉に存在する蒼き石が必要だ。俺はここを離れられない。だから、その石をお前達三人に採って来てもらいたい」

「ふざけるな……。お前らなど信用できるか」

「なら、お前は自分の故郷がどうなっても良いのか？」

その言葉に「クツ」と、奥歯を噛み締め呟くバルドは、怒りをかみ殺す様に拳を小刻みに震わせる。渋い表情を見せるティルは、ここでようやく口を挟む。

「話は大体分かったが、どうしてその炎が消せないと分かるんだ？」

視線をブラストの方へと向ける。振り返るブラストは、ティルの目を真っ直ぐに見据えて、残念そうな表情を見せた。その表情に、ムツとするティルは、目付きを更に鋭くし、「何だ」と、呟く。すると、バカにした様な口ぶりで答える。

「ふっつ。勘が鈍ったか？ ティル」

「何だと！」

「消せない炎といえば、炎血族の炎しかありえないだろ？ お前なら、すぐにわかると思ったんだがな」

「待て……。それは、分かっている。俺が聞いたのは、どうしてその炎が消せないと分かったかということだ」

「町の人が見かけてるんだ。赤い髪の男がギファー山脈に向っているのを」

その言葉にテイルの脳裏に一人の男の顔が浮かぶ。赤い髪に、鋭い目付き、そして、真っ赤で禍々しい炎。頭の中には不気味な笑いが聞こえてくる。その声に背筋が凍りつきそうだった。だが、テイルは目の色を変え椅子から立ち上がり、静かに息を吐き歩みを進める。

脂ぎった手と口を綺麗に拭くカシオは、慌てて立ち上がり椅子を倒してしまった。緊迫した空気が、一瞬にして崩壊した。呆れた表情を見せるテイルとブラストはため息を吐いた。

「お前な……」

「だ、だって……」

テイルはバカにする様な目付きでカシオを見据え、カシオはオドオドと慌てていた。右手で頭を掻き毟るブラストは、バルド、テイル、カシオの順で顔を見ると、兵士の方に視線を向ける。

「君、悪いが研究所に行つて、開発中の三つの武器を取ってきてくれ」

「で、ですが、あれはまだ……」

「良いから持つて来るんだ」

ブラストの迫力に負けたのか、兵士は一目散に部屋を飛び出す。何を言おうとしたのかは不明だが、テイルは何か嫌な予感がしていた。ブラストの造るものは、大抵危ないものばかりだからだ。不安を隠せないテイルは、ふとカシオとバルドの表情が目に入る。その表情はやはり不安そうだった。二人も何らかのトラウマがあるらしい。

「ンツ？ どうした？ そんな不安そうな顔して」



のん気な口ぶりのブラスト。自分の開発したものが、この三人の不安だとは、全く気付いていない様子。それが、一番恐ろしい事だ。身を軽く震わせる三人は、脳裏に過去のブラストの発明を思い描いていた。

「うっつ……。何だか、こええよ」

「お前もか、カシオ」

「お前もかと、言う事はテイルも……」

三人の考えが一つにまとまった。何故、そうなったのか分からないブラストは、不思議そうに首を傾げる。

そして、ここで兵士が戻ってくる。その手の中には、白い表面に赤の妙な模様の入ったボックス。青の表面に深い蒼色が複雑に絡み合っている筒。鋭く奇妙な彫りこみのある刃の長いナイフと刃の短いナイフ。どれも、前まで三人が持っていた物と違う印象が漂う。それが、逆に怖かった。だから、三人とも手を出すのに躊躇する。

「ンツ？ どうした？ 何で手に取らないんだ？」

相変わらずのん気な口ぶりのブラストに、怒りを滲ませる三人は、渋々と自分の武器を手取る。奇妙な模様の入ったボックスを見据えるテイルは、疑いの眼差しをブラストに向ける。それに気付いたブラストは、腕を組み不満そうな表情を浮かべた。

「何だ？ その疑いの眼差しは」

「大丈夫なんだろうな？ 今回は」

「今回はって、どう言う事だ。今までだって、ちゃんとしてただろ？」

「それじゃあ聞くが、さっきあの兵士が言おうとした事は何だ？」

ティルの鋭い尋問にブラストは瞬時に目を逸らす。その素振りがすでに怪しい。絶対に何かを隠している様だ。更に疑いが強まる所だが、これ以上問いたとしてもブラストが口を割るとも思えない。その為、不安が残りながらも、ティル達三人は部屋を後にした。

城を出ると、ブラストが用意していたのか、スカイボードを持った兵士が三人立っていた。その三人に乗り方をレクチャーしてもらい、ティル、カシオ、バルドの三人はリバール山脈へと向った。

## 第46回 リバー山脈

リバー山脈のふもと。

黒煙が薄らと青い空に上っていた。三台のスカイボードの欠片が、ふもとに散乱している。所々、火の手が上がっており、眉間にシワを寄せ複雑そうな表情をティル達がしていた。

結局、兵士達のレクチャーも虚しく、三人はスカイボードの止め方が分からず、壁に激突し爆発を起したのだ。三人とも何とか怪我をしないで済んだが、ブラストに対する怒りがこみ上げていた。

風で揺れる炎を見据える三人の間には沈黙が流れ、暫くは誰一人として口を開く事は無い。呆れと怒りが混ざりあい、話す気すらならなかった。

そして、初めに口を開いたのは、ティルだった。渋々といった感じで静かに。

「行くか……。ここにいてもしょうがないからな」  
「そうだな……」

空穂<sup>うつほ</sup>を背負うバルドは、静かにそう呟く。ゴーグルを首に掛けるカシオは、それを額へと移動させた。蒼く深い色の髪が、ゴーグルに掛かり僅かに風に揺れる。軽く首の骨を鳴らすカシオは、改良された渦浪尖を不安に思いながら懐へとしまつ。茶色のコートの下にボックスをチラつかせるティルは、黒髪を右手で掻き揚げ静かに息を口から吐いた。

落ち着いた様子のティルは、ブラストからの地図に目を通していった。眉間にシワを寄せ、難しい表情をするティル。それもそのはず、その手に持たされた地図は、ブラストの手書きで大雑把にしか描かれていないからだ。

「あのバカ！　こんな地図で分かるか！」

怒りを爆発させるティルはそのまま地図を丸めると力いっぱい地面に叩きつけた。やっぱりかと、肩を落とすバルドとカシオは、静かにため息を吐く。そして、そのまま苦笑いを浮かべるカシオは、腰を曲げ地面に転がる紙くずを拾い上げる。

「何やってんだよ。これないと、清めの泉まで行けないだろ。確りしろよな　！」

丸まった紙くずを広げたカシオは、その紙に描かれている地図の予想以上の酷さに言葉を失う。呆然とするカシオに、冷たい視線を送るティルは「お前は、これが読めるか？」と、冷やかな口調で呟いた。

そんな二人の様子に呆れた視線を送るバルドは、静かに足を進め始めた。ティルとカシオは、急に歩き出したバルドに驚き、後を追う。

「ちよ、ちよつと待て！　お前、道分かるのか？」

「そうだぞ！　急がないといけないのに、道に迷ったら大変だぞ！　それに　」

その後もカシオの口から多くの言葉が発せられる。そのうるさいカシオの声に、迷惑そうな表情を浮かべるティルは、鋭い目付きでカシオを睨んでいた。無言で足を進めるバルドは、完全にカシオの言葉は無視している様で、カシオ一人の声が響いていた。

山道を歩み進む三人。傾斜は緩やかで、足場もさほど悪いわけじゃない。だが、一名すでに息を荒げ、苦しそうに肩で息をする者がいた。それは、この静けさから分かるだろう。カシオだ。最後尾を苦しそうに汗を滴らせながら静かに歩むカシオ。先程までうるさい

位口を動かしていたのに、もう口を動かす気力すら残っていない様だった。

そんなカシオを気に掛けるティルは、足を止めカシオの方に体を向ける。その様子に気付いたバルドは、足を止めると振り返り冷やかな視線を送った。

「おい……。何をしている？」

「何って、分かるだろ？ あいつを待つてるんだ」

「ふざけるな！ あんな奴待つてたら、すぐに日が暮れてしまう！」  
「だが、置いていくわけにもいかんだろ？」

ため息交じりにそう言うティルに、怒りを窺わせるバルドは背を向け腕を組む。呆れた様のため息を漏らすティルは、額を右手で押さえ、この先の不安に首を軽く左右に振った。

ようやく、カシオがティル達に追いついた。喉はカラカラ、足はガクガク、汗はダラダラと、もう限界だと言わんばかりのカシオに、冷たく突き放した口調でバルドが言い放つ。

「足手まといだ。今すぐ俺の目の前から消えろ！」

「な……。なん……。だと……」

擦れた声で言い返そうと試みるが、声が途切れすぐに力尽きた。

仰向けに倒れこみ、口を大きく開け荒々しく呼吸を繰り返すカシオは、もう立つ事さえ出来そうに無い。その為、ティルは一つの決断を下した。

「悪い。バルドは先に行ってくれ。こいつをそのままにしておく訳にもいかんし、お前は道も知っている様だからだ。先に行つて目印でも付けておいてくれ」

「……分かった。俺が一人で行つて来る」

「悪いな。すぐに追い付く。気をつけるよ」  
「……」

返事を返さず、バルドは静かに一人山道を歩み出した。徐々に小さくなっていくバルドの背中を見据えるティルは、バルドの背中が見えなくなると同時に、近くにある大きな岩の上に腰を下ろした。岩肌がゴツゴツしていて座り辛い、ティルは気にせず座り込んだままカシオを見下す。

仰向けに倒れたままのカシオは、スースーと、小さな寝息をたてている。啞然とするティルは、頭を抱えここに残った事を後悔する。風は緩やかに流れ、ティルの鮮やかな黒髪を優しく撫でる。それと同時に近くの木々の葉がサワサワと、涼しい音を奏で始めた。気持ちは安らぐ音に耳を傾けるティルは、少しの間だが今までの戦いの事を忘れる事が出来た。

風が止み、辺りは一瞬で静まり返る。揺れていたティルの前髪も動きを止め、静かに額に触れた。静かに瞼を閉じるティル。耳を澄まし、周りの様子を探る。静かな風の音。鳥達の囀り。小動物の足音。そして、カシオの寝息。全ての音を耳に感じ、ティルはゆつくりと口から息を吐く。

「静かだ……」

ボソツと呟く。その後は黙り、腰にぶら下がった天翔姫を手にする。前のと変った所は、色だけ。果たして中身は……。考えただけで、背筋がゾツとする。何か嫌な予感が脳裏に過った。今までの経験上、こう言うシンプルなもの程危ないものなのだ。その為、ティルは躊躇っていた。剣に変えるのを。

「ふーっ。どうしたものか……」

右手の人差し指と中指を額に当てる。手でボタンに軽く触れた。だが、押す事は無い。そのままボタンに手を置いたまま俯くティルの髪を、また流れ始めた風が静かに靡かせ、もう一度木々をざわめかす。落ち着いた表情のティルは、静かに腰を上げると目付きを鋭くし、後方を真つ直ぐに見据える。

すると、一つの足音が響き、一人の男が姿を現す。黒いハットを深々と被り、サングラスを掛けた男。そして、山に登るには不釣合いな黒のタキシード。黒革の靴の踵が、荒れた斜面を軽く叩き、岩肌を崩す。

妙な気配。魔獣とはまた別の力をティルは感じた。動きを止めるタキシードの男。サングラス越しにティルの顔を見据える。ティルもその男を真つ直ぐに見据えた。武装は……していない。それに、戦闘をするにしても、あのタキシードでは動き難いはず。ティルがそう思った時、男は微かに笑みを浮かべた。まるで、ティルをバカにする様に。その笑みに眉間にシワを寄せるティルは、男を睨んだまま口を開く。

「何が可笑しい！」

「……い」

何かを口にした様だが、ティルには聞き取れなかった。その為、表情を変えぬまま聞き返す。

「何が可笑しいんだと聞いているんだ！」

「弱いよ！ 弱すぎるんだよ！」

「！」

そう叫んだ男が、地を蹴り斜面を駆け上がる。そして、ティルが身構える前に、男の右足が振り抜かれる。ズボンが風を受けバサツと音を響かせ、続いて鈍い音が辺りを静寂にさせた。

宙に舞うテイル。何が起こったのかわからなかった。ただ、左頬に衝撃を受け、意識が薄れたのは覚えていた。そして、意識が戻った時には、その体は地面に叩きつけられていた。

「ぐはっ！ うっ………がっ！」

地に横たわるテイルの腹部に、男の革靴の踵が深々と押し掛かる。踵は、腹部を押し潰す様に、徐々に徐々に腹にめり込んでいき、テイルはその苦しみに声を上げる事も出来ない。

「ぐうっ！ あっ………がっ ……」

「弱過ぎるんじゃない？ てめえら」

見下す男は、僅かにテイルを鼻で笑い、足をゆっくり下ろして言い放つ。

「まあいい。精々死なない様に努力しな！」

その言葉と同時に男の右足がテイルの頭を強打した。それにより、テイルの意識は完全に吹き飛び、それから暫く目を覚ます事はなかった。



## 第47回 清めの泉

暗い視界の中に、土の匂いが漂う。自分がどうなっているのか分からない。

考える力はあるが、意識ははっきりとはしていない様だった。そんな朦朧とする意識の中に、声が聞こえる。

「おい……じょう……か？」

大人しい感じの声。それは、間違えなくカシオの声だ。その声に、暗い視界が光の中へと解き放たれる。

歪んで見える青い空をバツクに、カシオの大人しそうな顔がぼやけて映る。心配そうな表情をしているのは分かるが、まだ口を開く力は無かった。その為、すぐに瞼が閉じそうになる。

「お、おい！ 確りしろって！」

今度ははつきりと聞こえるカシオの声に、ティルも僅かに表情を歪め反応する。苦しそうに唸り声を上げ、意識を確り保つ。頭部が疼く様に痛み、その痛みにティルもようやく正気に戻った。

「 イッ」

「大丈夫か？ 何か苦しそうだったけど」

「うっ……お前こそ、大丈夫か？ あの野郎……」

全てを思い出したティルは、右手で頭部を押さえ眉間にシワを寄せる。何があつたのか分からないカシオは、心配そうにティルを見据えていた。痛みを我慢し立ち上がるティルは、先に行ったバルドの事が心配になった。あの男の目的が何なのか、まだはっきりと分

からないからだ。

「行くぞ……カシオ」

「大丈夫かよ？ そんな体で」

「大丈夫だ。今はバルドが心配だ。急ぐぞ」

「わ、分かったよ」

少し不満そうな表情を見せるカシオだが、渋々とテイルの言う事を聞き歩き出す。フラフラの足取りのテイルに、少々不安そうなカシオは、もう一度聞く。

「本当に大丈夫か？ ふらついてるけど」

「大丈夫だ。それより、お前は黒いタキシードを着た男を見てないのか？」

一瞬複雑そうな表情を見せるカシオ。こんな所にタキシードを着て来る奴がいる分けないと、思ったのだろう。だが、すぐに首を傾げ答える。

「見てないぞ。第一、タキシードで山を登るか？」

当然の問いに、テイルは足を止め振り返る。その行動に、カシオも足を止めた。まだ体調が悪いのか、テイルは眩暈を起し倒れそうになる。それを踏み止まったテイルは、頭を押さえながら静かに息を吐き出す。

「俺も……初めはそう思ったけどな。いたんだよ実際に」

辛そうな表情を見せるテイルは、カシオに背を向け歩き出す。慌ててその後を追いかけるカシオは、「待てよ！」と叫んだが、テイ

ルが待つ事はなかった。

静かな泉の畔に立つバルド。ここが、清めの泉だ。水面に映る周りの木々の陰が、波立つ度に大きく揺れる。その水面を真つ直ぐに見据えるバルドは、透き通る水面の中に黒い影を見た。それは、素早く水中を移動し、バルドの視界から消える。

目の色を変えるバルドは、弓をしまい空穂の中からナイフを二本取り出す。奇妙な掘り込みの入った二本のナイフの柄を合わせ、双牙へと変化させる。特に前の双牙と変った様子は見当たらない。その為、バルドは安心して双牙を構えた。

「問題は……無いな」

静かに呟くバルドは、右手に構えた双牙に左手を沿え、矢を引く様に左手を引く。すると、ナイフの刃に彫られた奇妙な掘り込みが、轟音を響かせ一瞬にして風の矢が螺旋を描き現れる。それは、前の双牙とは比べ物にならない程の強力な矢だった。矢を引くバルドの左手を弾き飛ばしそんな程の勢いだ。

「クッ！」

奥歯を食い縛るバルドは、顔を顰める。無理に制御しようとしても、それに反発する様に風が勢い良く吹き抜ける。

「グガッ！」

風に耐え切れず、バルドの左手から矢が放たれた。轟音を撒き散らし、渦巻く風が木の葉を舞い上げる。そして、水飛沫を巻き上げ泉の中へと消えた。泡が泉の中に立ちこめ、波紋が幾つも水面に広

がる。バルドは勢いに押され、尻餅をつきその場に座り込んでいた。言葉を失っているバルドに、弾けた水飛沫が雨の様に降り注いだ。その雫を浴びるバルドは、静かに双牙を見据える。桁違いの威力に驚き、左手は震えていた。

「くっそ……。あの発明王め……」

ぼやくバルドは小さく舌打ちをして、腰を上げる。降り注ぐ雫に濡れたバルドの衣服は、体にベツタリと引っ付き、気持ち悪く思う。その為、嫌な顔をしながら襟首を掴んでいた。

雫はすぐに止み、辺りは静まり返る。結局、泉の中にいたモノが何だったのか分からず、バルドは近くの木の根元に空穂と弓を置く。もちろん、右手に持っていた双牙もそこに置かれていた。

バルドは着ていた服を脱ぎ、その水気を取る為に両手で確りと絞る。すると、布に含まれていた水が、あふれ出る様に地に落ちた。ため息を吐き出すバルドは、一度絞った服を叩き着直す。

「やはり、奴の発明品など、信用するものじゃない」

一人ぼやくバルドは、木の根元に腰を下ろし泉を見据える。すると、泉の水面が大きく揺れ、波紋が中央から外に向け無数に広がる。そして、先程まで静かだった風が吹き荒れ、木々が大きくしなる。空を舞い踊る木の葉が、泉の上を渦巻いた。

それを不自然に思うバルドは、立ち上がり双牙を手取る。左手がまだ微かに震えるが、それを気にしている暇は無かった。泉の中央の水面に、水中から何かの手が出てきたからだ。その手には水掻きがあり、人間ではないのははっきりと分かった。

無言で双牙に左手を重ねる。息を静かに吐き、精神を集中するバルドは、先程の様な事になら無い様に、左手に力を込め左手を引く。先程と同じ様に凄まじい風が螺旋を描き、バルドの左手を吹き飛ば

そうとする。

「クツ！ 狙いが……」

風の矢の鏃が大きく揺れ動き、狙いは定まらない。風が暴れ、双牙も真つ直ぐ構える事が出来ないのだ。顔を顰め奥歯を噛み締めるバルドは、狙いの定まらないまま、左手を風の矢に弾かれる。同時に、風の矢は放たれ、泉の中央に向って大気を貫きながら突き進む。後方によろけるバルドは、倒れそうになるのを踏み止まり、風の矢の軌道を見据えた。泉の水面を弾き進む風の矢は、徐々に勢いを失い水面に出ている手に当る前に消滅する。

「なっ！ 威力も不安定か……」

驚くバルド。それもそのはず、風の矢の威力が先程の半分程度まで落ちているからだ。一体、何がそうさせたのか、バルドには全く分からなかった。

「クツクツクツ……。貴様、この泉に何しに来た」

水面から顔が現れる。魚の様な顔が。そして、先程の醜い声は、この魚の様な顔の化物の声だった。睨み付けるバルドは、身構え警戒する。

すると、また不適に笑い出す化物。まるでバルドをバカにする様だ。

「何が可笑しい！」

「クツクツクツ。弱いな。地護族の青年」

「俺が……弱いだと？ 笑わせる。ならば、今ここで貴様に風穴を開けてくれよう」

静かにそう言うが、その言葉は殺気を帯びていた。不適な笑みを浮かべる化物は、呆れた様に首を左右に振り答える。

「自分の弱さを知らぬ様だな。ならば、その身に刻んでやろう。お前の力の無さを」

不適な笑みを浮かべる魚の化物は、静かに水面の上へと両足で立つ。体は鱗に覆われ、色鮮やかに光を放っている。そして、その手には巨大な三又の刃の槍を持っていた。その槍は、何処か不思議なオーラを漂わせていた。

## 第48回 射程距離

波紋を広げる泉の水面。その中央には、魚の化物が立つ。両足の裏は完全に水面に張り付き、沈む事さえない。

波はぶつかり合い飛沫を上げ消滅する。その水飛沫が、風に乗るバルドの方へと飛んでくる。だが、バルドはそんなものを気にせず、真っ直ぐに魚の化物を見据えた。ヒラヒラと数枚の木の葉が二人の間を舞い落ちる。ゆっくりと落ち逝く木の葉が、水面に触れ波紋が広がると同時に、バルドと魚の化物が動き出す。

右手に持つ双牙を分離し、刃の長いナイフを右手に、刃の短いナイフを左手に持つ。風の矢が安定しないと分かった為、接近戦で蹴りをつけ様と考えたのだ。

一方、魚の化物は、水面を蹴りバルドの方へと一直線に向っていく。そして、右手を引き一気に槍を突き出す。三又に分かれた刃がバルドに向って伸びる。が、バルドと魚の化物の距離は、その槍のリーチよりも長く明らかに届くはずが無かった。

「自分の武器の射程距離も分からないのか……」

首を振り呆れ果てるバルドの姿に、魚の化物の口元に笑みが浮かぶ。その刹那、魚の化物の槍の柄がバルドに向って伸びる。それには、バルドも驚き反応が遅れ、三又に分かれた刃の右端がバルドの右腕を掠めた。

「クッ！」

僅かに飛び散る鮮血。赤い雫が宙を舞い、表情を歪めるバルドは後方に飛び退く。雫が地に落ち王冠の様に弾ける。飛び退いたバルドは、その場に左膝をつき魚の化物を睨む。伸びた槍の柄が、一瞬

で縮み元の長さへと戻った。

「クツクツクツ。他人の武器の射程距離を知っているつもりでいるからそうなるんだ。この世の常識など、ある様で無いものなんだよ」

不適に笑う魚の化物の正論に、バルドは自分自身の失態に奥歯を噛み締める。右腕の傷は衣服の下に隠れているが、血はドクドクと確実に流れ出ていた。その証拠に傷口付近は真っ赤に滲んでいる。

「我が槍は、伸縮自在。この泉から出ずとも、貴様を簡単に始末出来る」

「本当は……怖いんだろ？」

「何だと？」

バルドの言葉に怒りを滲ませる魚の化物は、僅かに声が震えている。微かに笑みを浮かべるバルドは、静かに立ち上がり二本のナイフを構える。引き攣った笑みを見せる魚の化物は、ゆっくりと水面を歩み、波紋を広げながら地へと足を踏み入れた。芝を踏みしめる音が静かに聞こえる。

これで対等に戦えると、思ったバルドだがその考えは甘かったとすぐに気付かされた。

「我を侮辱した罰は、死のみ。貴様の命、捧げて貰う」

「……フツ。戯れごとッ！」

ザクツと、短音が痛みと同時に耳に届く。声にならない程の痛み、表情が引き攣るバルド。何が起こったのか、未だわかっていなかった。ただ、自分の体から力が抜け、自然と両膝が地に落ちたのは分かった。



「う……う……」

ナイフを握る力が弱まり、手からナイフが落ち、バルドはその手で腹部を触る。その手が冷たく細長い金属製のモノに触れた。そして、それが左横腹に突き刺さっているのを理解した。その途端、バルドは吐血する。苦しそうな咳と一緒に。

「クツクツクツ……」

血を吐くバルドの姿を見て不適に笑う魚の化物は、バルドの左脇腹に刺さった槍を引く。ブシュと、音をたててバルドの左脇腹から刃が抜けた。縮む槍の刃に付着したバルドの血が、宙に散る。刃を抜かれたバルドの左脇腹は、血が栓を抜かれた様に溢れ、衣服を赤く染めていた。

「弱いね。あゝあ……弱い。悲しい事だね」

「う……ブツ……」

もう一度バルドの口から血が吐き出された。そして、左脇腹を押さえたまま前かがみに倒れる。血が流れ出るのを、体に感じるバルドは、もう動く事も出来なかった。きつと、ここで死ぬのだと脳裏に一瞬浮かび上がり、意識は遠のいた。

横たわり血を流すバルドの方へと、足を進める魚の化物は、槍を振り上げる。その槍はバルドの頭に刃を向けており、振り下ろせばその頭蓋骨を貫くだろう。だが、それをする前に足音が聞こえ、そこに視線を向けた。

「おい！ テイル。もっとゆっくり歩けよ。お前、まだ本調子じゃないんだからさ！」

「黙れ！ 俺はもう大丈夫だ」

「嘘付けよ！ 足元フラフラだって！」

そんな声と同時にテイルとカシオの二人が茂みから姿を現す。そして、テイルと魚の化物の視線がぶつかった。目付きが鋭く変るテイルは、腰にぶら下がる天翔姫に手を掛ける。すると、魚の化物が不適に笑いながら言い放つ。

「クツクツクツ……。貴様等、この弱き者の仲間か。クツクツクツ」

その言葉にテイルの視線は魚の化物の足元に横たわるバルドに向けられた。

「バルド！」

叫ぶと同時にテイルの視界が揺らいだ。まだ、先程のダメージが残っているのだ。右膝を地に落としたテイルは、左手で頭を押さえ、軽く首を振る。そんなテイルの様子に不適に笑い始める魚の化物は、バカにした様に言う。

「クツクツクツ……。その体で何が出来るんだ？」

「クツ……。ふざけ」

テイルがそこまで言った時、横をカシオが通り過ぎた。何も言わず黙って。膝をついたままのテイルは、カシオに問う。「どうする気だ」と。すると、カシオは真顔で渦浪尖を取り出し答える。

「バルドが心配だ。さっさと終わらせる」

「待て……。奴の力量も分からないんだ。二人で」

「大丈夫！ 俺一人で何とかする。大体、その状態で戦われると、正直足手まといになるだけだから」

渦浪尖のボタンを押す。筒は伸び、三又の刃が姿を見せる。それを軽く回したカシオは、そのまま腰を低くし、渦浪尖の刃を魚の化物の方に向け構えた。

嬉しそうに笑みを浮かべる魚の化物は、一步カシオに近付くと不適に言い放つ。

「クツクツクツ。貴様、良い物を持っている。我のコレクションにしてやるう」

「偶然。俺もお前をコレクションに加えてやるよ。魚拓のな！」

そう叫び地を蹴る。不適に笑う魚の化物は、槍を構えるとカシオに向って突き出す。柄が勢い良く伸び、刃がカシオに迫り来る。だが、その刃はカシオの僅か横を通過し、そのまま伸び続ける。

驚く魚の化物。それもそのはず、初めて伸びる槍を初見でかわされたのだから。伸び続ける柄の横を駆け抜けるカシオは、射程圏に入ると右足を踏み込み渦浪尖を突き出す。しかし、その刃は魚の化物には届かなかった。いや、届いてはいたのだ。だが、刃を魚の化物の鱗が弾き返したのだ。その瞬間、二人の視線がぶつかり合い、魚の化物が不適に笑みを浮かべた。

「残念」

その言葉と共に、魚の化物の体が柄に引かれ、右足の膝がカシオの顔を捉えた。顔面を強打したカシオは、背中から地面に叩きつけられる。

「グフツ！」

「カシオ！」

元の長さに戻った槍の刃を木から抜く魚の化物は、体を反転させ倒れているカシオを見て笑う。

「クツクツクツ。我が体は硬き鱗で覆われている。貴様の槍の刃は届かん。しかし、何故私の伸縮自在の槍をかわせた」

「……ざけんなよ」

微かにそんな声が聞こえる。跪いたままのテイルは、いつもと違うカシオの声に目を細めた。怒りなのか、憎しみなのか分からないが、何か夥しい殺意をカシオから感じた。

静かに体を起すカシオは、奥歯を軋ませ勢い良く立ち上がる。そして、すぐに魚の化物の方に体を向け、渦浪尖の切っ先を突き出した。

「その槍は親父の槍だ。返してもらおうぞ！」

## 第49回 親父の仇

渦浪尖の切っ先を向けられた魚の化物は、一瞬驚いた様子の表情を見せたが、すぐに笑い出す。その笑い声は辺りに響き渡り、カシオはその声に奥歯を噛み締め、額に青筋を浮かべる。鼻筋にシワを寄せるカシオは、魚の化物に対し怒声を浴びせた。

「何が可笑しい！」

あんなに怒りをあらわにするカシオを初めてみたティルは、言葉を掛ける事が出来なかった。

笑うのをやめる魚の化物は、槍の柄のお尻を地面に突き立てる。そして、口元に不適な笑みを浮かべ、静かに呟く。

「貴様の親父はこの槍を使う資格の無い弱い奴だった」

その言葉に更に大きな声でカシオは叫ぶ。

「ざけるな！ その槍を……親父の形見を返せ！」

その怒声に森がザワメキ、鳥達が一斉に空に羽ばたく。怒りを滲ませ魚の化物に突っ込んでいく。後塵が舞い上がり、渦浪尖の柄の石突を地面にぶつけ、地面を抉りながら真っ直ぐ突き進む。石突が地面を抉る音が響き、砂埃だけがカシオの後ろに残された。

魚の化物が腰を低くし槍を構え、刃が不気味に光を放つ。地面を抉る渦浪尖の石突が浮き上がり、渦浪尖が平行になった。

「波状穿孔！」

右足を踏み込み素早く鋭い突きを無数に繰り出す。三又に分かれた刃が、魚の化物の体を襲う。だが、硬い鱗が刃を防ぎ、金属音を何度も奏でる。力強いカシオの突きの衝撃が、一撃一撃鱗に吸収され、魚の化物は顔色を変える事無くえみを浮かべていた。その余裕の表情が、カシオには耐え切れない。その為、更に力が入る。

「ウアアアアッ！」

刃が鱗にぶつかり火花が散る。そして、澄んだ金属音が、徐々に鈍い音へと変り始めた。そして、渦浪尖を突き出す度に、風を掻く音が鋭くなっていく。ダメージは無いものの、魚の化物は徐々に後ろへと引き摺られていた。

「クツクツクツ……。我に刃は通らん」

「だ…ま……れ！」

渦浪尖を突き出す動きが止まり、上半身が勢い良く回転する。そして、渦浪尖が横に力いっぱい振り抜かれた。刃が脇腹を強打し、魚の化物の骨が軋みを上げる。撓る渦浪尖の柄がその衝撃をカシオの両手に伝え、魚の化物の体を弾き飛ばす。

「ぐっつっ！」

吹き飛んだ魚の化物は、地を転げる。

「ハア…ハア……」

俯き息を荒げるカシオ。薄らと流れる汗が、頬を伝い顎先から滴れる。それが、渦浪尖を持つカシオの右手の甲の上に落ち弾けた。

カシオの後姿を見据えるティルは、カシオが疲労していると察知

し、ゆつくりと立ち上がる。体調はさつきよりは良い。体もふらついていないし、力も入る。やれる。そう思いテイルはコートの下の方天翔姫に手を伸ばす。

「クツクツクツ……」

地面に横たわる魚の化物が不適な笑い声を響かせる。呼吸する度に肩を上下に揺らすカシオは、その魚の化物の方に視線を向けた。

「やるじゃないか……。まさか、打撃攻撃とは……驚いた」

体を起しカシオの方を睨み、槍を地に突き立て立ち上がる。全くの無傷。外傷など何処にもない。それほどまでに硬い鱗なのだ。

口から息をするカシオは、口の中の乾きを唾で潤す。だが、それもすぐに乾き、唇はパサパサになる。

「ハア……ううっ……ハア……」

苦しそうに息をするカシオは、渦浪尖を低く構えると、右足を踏み込み走り出す。だが、その刹那、目の前の魚の化物の槍の刃が見えた。咄嗟に渦浪尖を縦にしそれを防いだ。両足は地から離れ、後方へと体が飛ぶ。

「グッ！」

横転するカシオは何とか体勢を整えたが、地に着いた膝は上がらなかつた。右膝はガクガクと震え動かす事すらままならない。立つ事の出来ないカシオの前に、魚の化物がゆつくりと足を進める。奥歯を噛み締め睨み付けるカシオは、渦浪尖を地面に突き立て静かに立ち上がった。

だが、力が入らない。踏ん張りが利かず、渦浪尖も突き出す事も出来ない。表情を歪めるカシオの震える膝を見る魚の化物は不適に笑い言い放つ。

「クツクツクツ。右膝は限界か。さっきまでの勢いは何処へいった？」

「ぎけ　ぐあっ！」

カシオが言い終える前に、魚の化物が槍の石突でカシオを殴り飛ばした。背中から地面に落ち、地面を抉る。口の中に広がる血の味。完全に口の中が切れていた。その血が口角から流れ出る。

「ゲフツ……」

悔しさに奥歯を噛み締める。親父を殺した奴が目の前にいるのに、自分はそいつに手も足も出ない。それが、悔しくて悔しくて、目には涙が滲んでいた。涙越しに見える青い空は、キラキラと輝き、次第に周りの方からぼやけていく。

そんな時、カシオの視界が影に覆われた。頭の上に誰かがたつたのだ。そして、影がカシオに覆いかぶさった。ぼやける視界に移るその姿は、テイルの姿だった。右手は腰のボックスを握り、人差し指はボタンを軽く押す。

すると、ボックスは瞬時に細身の刃の剣へと形を変えた。前回の真っ白だった刃は、ひび割れた様に赤い亀裂模様が描かれている。見た目的に変ったのはそれだけで、実際は随分と軽量化されていた。その為、テイルは少し驚きを隠せなかった。

「な、なんだこの軽さは……」

あまりの軽さに不安が脳裏を過る。こんなに軽量化されて、衝撃



への耐久度は大丈夫なのかと、心配になった。だが、そんな心配をしている程、ティルに余裕など無かった。

空気を裂く音が聞こえ、視界に魚の化物の伸縮自在の槍の刃が映った。その瞬間、咄嗟に天翔姫を胸の前に構え、刃を受け止めた。

澄んだ刃音が響き渡る。それは、水面に出来た波紋の様に森中に響き、木々を微かにざわめかす。衝撃でティルの体は後方へと仰け反り、魚の化物の槍の刃は、元に戻ってゆく。

「ぐっつ！」

右足を摺り足で退き体勢を整えたティルは、刃こぼれ一つしていない天翔姫の刃を見据えて確信する。耐久度は心配する事はないと。

そして、横たわるカシオに対し小さな声で言う。

「暫く休んでろ。お前にはまだ戦ってもらってから」

「俺には無理だ……。あいつに傷一つ付ける事も出来なかった……」

カシオの弱気な発言に、眉間にシワを寄せるティルは、呆れた様な口調で呟く。

「お前は、やられっ放しでいいのか？ 親父の仇なんだろう？」

「けど、俺は奴に手も足も出ないんだぞ……」

「手も足も出ない？ それは、地上での話した」

「地上での話し？」

不思議そうに聞き返すカシオに、軽く笑みを見せるティル。

「地上では手も足も出ないが、お前本来のフィールド内で戦えばどうだ？」

「俺……本来のフィールド……！　そうか！　水の中か！」

「そうだ。だが、今のその足ではまともに戦えないだろ？　体力が回復するまで、俺が時間を稼ぎつつ、奴を泉の中へと追い込む」

「でも、どうやって？」

心配そうに問いかける。その問い掛けに、テイルは僅かに表情を引き攣らせた。

「大丈夫だ。心配するな。そこは、俺が何とかする。お前は、体力の回復に専念しろ」

「わ、分かったけど……」

何か言おうとしたが、その前にテイルが「例え俺が倒れても、体力が回復するまでは動くな」と、真剣な表情で言った為、カシオは吐き出そうとしていた言葉を呑み込んだ。

二人のやり取りは魚の化物に全く聞こえてはいなかった。その為、退屈そうに欠伸をしテイルとカシオを眺めていた。

「お喋りは済んだか？　そろそろ、お前らを串刺しにしたいんだけど」

「ああ。そろそろ始めよう。鮮度が落ちる前に刺身にしてやるよ」

余裕の表情を見せるテイルだが、その裏では余裕と言う文字は一切なかった。

## 第50回 策は幾つも

静かに睨み合うテイルと魚の化物。

摺り足でジリジリと間合いを詰めるテイルは、天翔姫を軽く握りなおす。静かに呼吸を整え、右足を前に出し距離を測りながらキツチリ魚の化物の右手を見据える。いつでも反応できる様に、常に膝は曲げられていた。

距離約十数メートル。ここから、射程距離に一気に飛び込んで斬りかかっても、きつと刃は鱗に弾かれる。いや、その前に射程距離に飛び込んだ瞬間に、あの槍が飛んで来るだろう。そうなれば、一撃与える前に射程外に弾き飛ばされるか、傷を負う事になる。どちらにしても、射程圏に飛び込む前に、あの槍をどうにかしないとけない。

汗がスーツと額から流れ、鼻筋を通り過ぎる。喉がゴクリと動き、コートの裾が僅かに靡く。動こうとしない魚の化物は、テイルの方を見据えてまま不適に笑う。

「クツクツクツ。間合いでも測っているのか？ 残念ながら、それは無駄に終わる！」

魚の化物の右手が引かれ、槍の刃が魚の化物の腰の隣りに並ぶ。上半身が軽く捻られ、左腕を引くと同時に、円を描く様に両肩が回る。そして、引かれた右手が槍を勢い良く突き出す。鋭く風を裂く音と共に、柄が伸び刃がテイルへと向う。

柄の伸びるスピードが、先程よりも早く、テイルは驚き咄嗟に天翔姫でそれを防ぐ。刃音が響き、テイルの体は仰け反る。一方、伸びた槍の柄はすぐに元に戻り、続け様に二撃目が突き出された。

「くっ！」

体勢の整わないティルは、そのまま地に手を着き後方に飛び退く。それを二回繰り返し、体勢を整えたティルは、天翔姫を構えなおす。その三十センチ前方では、槍の刃が地面を抉り、破片が辺りに散らばっていた。

「良くかわせたな」

地面から槍の刃が抜け、柄が元の長さに戻る。呼吸を整えるティルは天翔姫の柄の先にあるボタンを押し、ボツクスに戻した。不適に笑みを浮かべる魚の化物は、「死ぬ事を選んだか」と、呟き右手を引く。槍の切っ先が真っ直ぐにティルの体に狙いを定め、勢い良く突き出した。

その刹那、ティルはボツクスのボタンを押す。ボツクスは金属音を奏で、ライフルの形へと変る。その瞬間、魚の化物の目の色が変わった。

口元に笑みを浮かべるティルは、向ってきた槍の刃を右にかわして、銃口を魚の化物に向けたまま引き金を引いた。

轟く銃声。辺り一体が一瞬静けさに包まれた。

血が点々と緑の草の上に落ちる。

「残念だったな」

その声と同時に、更に血がボタボタと傷口から滴れる。その傷口には鋭利な刃物が未だに突き刺さり、その切っ先から真っ赤な血が毀れる。

「グフツ……。な…何故だ……」

ティルの右脇腹に刺さった槍の刃が抜け、スーッと魚の化物の左

手に戻る。地面へと崩れ落ちるティルの体のその横で、伸びきった魚の化物のもう一本の槍が右手へと戻っていく。

「クツクツクツ。不足の事態に備えて、幾つモノ手の内を潜めておく。それが、戦いの基本だ」

魚の化物は両手に伸縮自在の槍を持ち、不適に笑みを浮かべながら地に伏せるティルを見据える。ティルの放った弾丸は、魚の化物の脇腹を数センチ横に逸れ、その後ろに聳える大木に大きな銃創を残していた。

苦痛に表情を歪めるティルは、右手で傷口を押さえる。ドクドクと血が流れ出るのが手に伝わる。呼吸を整えるティルは、表情を歪め真つ直ぐに魚の化物の方を見据え、左手にはライフルへと変った天翔姫が握られていた。

「うっ……くっ……」

「動くと、苦しくなるだけだよ」

体を起そうとしたティルにそう忠告する。だが、その忠告にティルは耳を貸さず、傷口を押さえたままゆっくりと立ち上がった。傷口は結構深い。これでは、剣を振るう事も出来ないし、あの槍をかわす事も出来ないだろう。ズキズキと疼く傷口に、ティルは顔を顰めよるめく。

不適に笑みを浮かべる魚の化物は、よるめくティルの方へとゆっくり足を進める。完全に油断し、槍すら構えずにいる。そんな魚の化物を目にしたティルは、顔を伏せたまま僅かに笑みを浮かべ、地面に倒れこんだ。

「クツクツクツ。力尽きたか？　すぐに楽にしてやるっ」

横たわるティルの頭の上に立つ魚の化物は、右手に持った槍を振り上げた。

「死ね！」

振り上げた槍が振り下ろされた。鈍い音が響き、鮮血が飛び散る。だが、それはティルの血ではない。魚の化物の血だった。ティルの左手に握られた天翔姫の銃口が、魚の化物に向けられ、振り下ろしたはずの右腕が魚の化物の後方に、槍と一緒に地に落ちる。

「グツ……。き、貴様！」

鼻筋にシワを寄せ怖い顔をする魚の化物に、僅かに顔を上げるティルは、弱々しく笑みを浮かべると、「策は……幾つも張り巡らせる……もの……だ」と、述べて地に倒れた。怒り狂う魚の化物は、左手に持った槍を振り上げ、勢い良くティルの頭に突き立てる。だが、甲高い金属音が響き、槍の刃はティルの頭を貫く前に止められた。

「くっ！ 死に底無いが！」

魚の化物の視線の先には、渦浪尖を突き出すカシオの姿があった。右膝の震えは止まり、痛みも無い。それどころか、さっきよりも体が軽い位だった。その為、軽く笑みを浮かべ、魚の化物の槍を弾き、ティルの前から遠ざかせると、渦浪尖の切っ先を向け言い放つ。

「完全復活！ ここからは、全力でお前を殺しに掛かる！ 油断してつと、気付いた時には、あの世に言ってるぜ！」

笑みを零すカシオに、怒りの表情を見せる魚の化物は、鋭く左手

を突き出す。風を裂く音と共に、槍がカシオに向って伸びてくる。その槍の刃に合わせる様に、カシオは渦浪尖を突き出す。三又に分かれた刃同士が、激しくぶつかりあい、刃音と共に火花を散らした。弾かれた魚の化物の槍は、すぐに元の長さへと戻り、カシオもすぐに渦浪尖を引き二撃目に備える。

カシオを睨み、奥歯を噛み締める魚の化物は、体を反転させると、そのまま湖へと逃げる様に飛び込んだ。その理由は分からないが、カシオは『しめた!』と思い、ゴーグルを掛け魚の化物を追って湖へと飛び込む。

澄んだ泉の中は、地の底まで見える程綺麗で、滑らかだった。その為、とても泳ぎやすく、カシオは物凄いスピードで魚の化物の背後に迫る。すると、魚の化物がクルツと反転し、カシオの方に体を向けた。カシオはスピードを落とす事無く魚の化物に向っていくが、カシオは急に方向転換し、魚の化物から距離を取る。

「クツクツクツ。気付いた様だな。あと少しで、串刺しだったのに」  
「俺はそんなにバカじゃないし、そんな簡単に串刺しにされる気も無いね」

軽やかに渦浪尖を回すカシオは、真っ直ぐに魚の化物を見据える。その背後には無数の槍が切っ先を向けて壁に突き刺さっていた。あのまま突っ込んでいれば、カシオは間違いなく、あの無数の槍に突き刺さっていただろう。

ブクブクと泡だけが水面に向って上がっていく。カシオも魚の化物も動く気配は無い。様子を見ているのか、それともなんらかの策なのか、二人は対峙したままだった。

## 第51回 水中戦

水中のカシオと魚の化物。

魚の化物の背後には、地面から刃が幾つも突き出ていた。その刃の切っ先が不気味に輝きを放ち、カシオはそれを真っ直ぐに見据える。左手に構える槍が微かに動く。それと同時に、カシオは目付きを変える。

瞬時に察知したのだ。槍が突き出されると。

その読み通り、魚の化物は左手を突き出す。水中を突き進む槍は地上にいた時とは違い、ゆっくりとカシオの方へと迫る。その刃を悠々とかわすカシオは、渦浪尖を引く。だが、その刹那、伸びだ魚の化物の槍の柄が、カシオの身体を横に叩く。バランスを崩したカシオは、壁の方へと流されていくが、切っ先直前で勢いをとめる。

「くっ！」

「我は水の中では無敵だ」

「無敵？ それは、聞き捨てならないねえ」

目の色を変えるカシオが右手を引き、渦浪尖を勢い良く突き出す。渦浪尖の刃の切っ先からは、突き出されると同時に、螺旋を描く渦が出来る。それは、鋭い刃となり魚の化物の方へと飛ぶ。渦浪尖から飛び出した渦の刃は、波を起し泉が流れ出す。

その波に流されぬ様に体勢を整えるカシオは、この時初めて知った。渦浪尖がパワーアップしていると。

迫り来る渦の刃に、魚の化物は左手を引き一気に槍を突き出す。水を切り裂く様に伸びていく槍だが、それは渦の刃にぶつかると、その渦動に巻き込まれ柄が勢い良く回転する。

「なっ！」



柄を握る魚の化物の手を弾き、槍は回転したままカシオの方へと飛び出す。物凄いスピードで槍が飛んでくるのに気付いたカシオは、水を蹴り上昇する。

一方、魚の化物も勢い良く水を蹴り上昇し、渦の刃をかわす。渦の刃は壁にぶつかると、そのまま暫く壁を抉り消滅する。粉々になった破片が水底に落ちていく。その破壊力に息を呑む魚の化物は、ゆっくりとカシオの方に目を向ける。その時、カシオと魚の化物の目がぶつかる。

ゴーグル越しに見えるカシオの灰色の瞳が、魚の化物を呑み込むかの様に威嚇する。急に息が苦しくなった魚の化物は、水面へと急ぐ。だが、それより先に、カシオの姿が魚の化物の視界へと入った。

「どこに行くつもりだ？」

「グウツ……。貴様！」

「言っておくけど、逃がさないよ」

上半身を大きく捻り、勢い良く右足を振り抜く。水を掻き気泡が大量に水中に広がり、鋭い蹴りが魚の化物の腹部を捕らえる。

「ぐはっ！」

蹴りが入ると同時に、魚の化物の口が大きく開かれる。それと同時に大量の気泡が広がった。魚の化物の体は後方へと吹き飛び、壁にぶつかる手前で失速する。

意識が無いのか、魚の化物の体は動かないまま水面へと向って浮かんでいく。妙な手応えの無さに、カシオは不安を感じる。その為すぐに魚の化物に追い討ちを掛ける為、水を蹴った。凄まじい勢いで魚の化物へと迫るカシオだったが、それより先に魚の化物の方がカシオとの間合いを詰めた。

突然の事に慌てたカシオはスピードを落とし、仰け反る。その刹那、魚の化物の左拳がカシオの腹部を捉えた。奥歯を噛み締め、その痛みに耐えるカシオは、僅かに前かがみになる。それと同時に、魚の化物の左膝がカシオの顔面を強打した。

「うぐっ！」

額から血が吹き出て、僅かに水中を赤く彩る。カシオはその一撃で、一瞬意識が吹き飛んだ。もちろん、一瞬だった為、すぐに体勢を立て直したが、既に魚の化物の姿は見失っていた。

渦浪尖を構え、あたりを見回す。だが、どこにも魚の化物の姿はない。警戒し、気配を探る様に体をゆっくりと動かす。

波は穏やかで、静かに流れる。まるで魚の化物など水中にはいないかの様に静かだった。

「くっそ……。どこに行った」

灰色の瞳が激しく動く。逆立つ蒼い髪がユラユラと波に揺さぶられ、切れた額から溢れる血が、僅かに水に溶け込んでゆく。ズキズキと疼くその痛みに、カシオの表情が一瞬歪む。その刹那、泡を吹かしながら槍の刃がカシオの背後から迫る。

そして、カシオの体に当る直前でその刃は止まる。いや、正確には止められたと言う方が正しい。背を向けたまま右手に持った渦浪尖で、槍の刃を止めていた。水中を槍が走る音と振動で、気付いていたのだ。

「不意打ちなんて、みつともないな」

「クツクツクツ。これなら、どうだ？」

「？」

魚の化物の声に首を傾げる。すると、壁や水底に刺さった刃が一気にカシオ目掛けて飛んでくる。どんな原理になっているのかは、分からないが、それは的確にカシオの心臓を目掛けて飛んできていた。

「くっ！　なんだ一体！」

渦浪尖で刃を数本弾いたが、無数に飛び出してくる刃を防ぎ切る事は出来ず、カシオは素早い動きでかわすのがやっとだった。それでも、完全にかわせている訳ではなく、体を切り付けられ、いたる所から血が出ている。

「クツクツクツ。どうした？　手も足も出ないか？」

「どこにいる！　姿を見せる！」

「自分で探せ。探せるのならな。クツクツクツ」

不適な笑い声だけが水中に響いた。怒りを滲ますカシオだが、飛び交う刃をかわすのが精一杯で、魚の化物を探す暇など無かった。徐々に足が重くなって行く。まるで水が足に絡んでいるかの様に。

「ぐっっ！」

「クツクツクツ。動きが鈍くなってるぞ！」

小さく舌打ちするカシオは、背後から飛んできた刃を体を右に捻りかわした。だが、その正面から鋭く刃が飛んできて、カシオのゴーグルの端を砕く。ゴーグルの破片が水中を流れ、カシオの右目の傍から血が吹き出る。刃が掠ったのだ。

表情を曇めるカシオは、右目を堅く閉じる。ゴーグルの砕けた所から水が入り込み、カシオは左目も閉じた。視界は真っ暗になり、身動きが取れなくなった。ただ、刃はもう飛んでこない。その為、

カシオは意識を集中する。

「クツクツクツ。やっと、ゴーグルが破壊できた。これで、身動きは取れまい」

「最初っから、ゴーグルが目的か……」

「お前の動きさえ止めれば、後は我の手で始末できる」

「本当に、卑怯な奴だな」

「なんとでも言え。お前は死ぬんだからな」

水を蹴る振動が肌を感じた。だが、どこから来るのかは分からない。その為、完全に無防備になってしまう。

一撃目 左拳が右頬を捉え、カシオの体が左へと揺らぐ。

「ぐっ！」

奥歯を噛み締め痛みを耐える。

直後。二撃目の右足の蹴りが左横腹に食い込む。

「ぐはっ」

血が口から吐き出され、水と同化する。

そして、前屈みになるカシオの後頭部に三撃目 踵落としが決まる。

水底へと勢い良く落下する。既に突き出していた刃は無く、カシオの体が岩を砕く。水底にたまった泥が舞い上がり、辺りを包み込む。

「ウウツ……。何も見えねえ……」

水底に叩き付けられたカシオは、体を起したが両目を閉じている為、平衡感覚が掴めず今自分がどんな状態なのか分からずに居た。

頼りになるのは、右手に握った渦浪尖のみ。

「クツクツクツ。ゴーグルが無ければ、水呼族も大した事無い様な」

その言葉に、カシオの右瞼が微かに動く。

「あんた、勘違いしてるよ。水呼族が水中で目を開けないのは……」

静かにカシオが瞼を開く。その奥から現れたのは、先程とは違う銀色の瞳。ぎらつき、輝くその瞳は一瞬にして水中の全てのものを凍りつかせる。水中の中だけ時間が止まった様に動きが無くなる。だが、それはカシオの目に見える風景。他の者には何も変わらない。ただ、一つを除き……。

## 第52回 小さな村の少女

水中を漂う魚の化物。

水底には大量の泥が舞い上がり、カシオの姿など見えはしない。だが、魚の化物は余裕だった。ゴーグルを失ったカシオは、水の中で身動きが取れないと思っていたからだ。

余裕からか、自然と笑みが毀れる魚の化物。左手に持った槍を軽く構え、水底を見据えた。視界が徐々に良くなっていく。そして、薄らと窪んだ水底が見え始める。しかし、そこにカシオの姿は無かった。

「ど、どこへ行った！」

驚きの声を上げる魚の化物は、辺りを見回す。ゴーグルの無いカシオは、動けないはず。そう思った刹那、背後から水を何かが移動する音が聞こえた。瞬時に振り返るが、何事も無く向こう側の壁だけが目に映る。

息を呑む魚の化物は、自然と槍を強く握った。恐怖に近い感情が脳裏に芽生えたのだ。姿も無い。音も無い。そんな状況が魚の化物を徐々に追い込んでいく。

「くう！ 何処にいる！」

水中に魚の化物の音が響く。その声に水面は波立ち、波紋が幾多にも広がる。

荒れ狂う水面とは裏腹に、静まり返った水中。中央に浮かんだ魚の化物はキョロキョロと辺りを見回す。

「何処だ……」

そう呟いた瞬間、背後に殺気を感じ振り返る。すると、その視線の先にカシオの姿が浮かぶ。その姿を視界に捉えた魚の化物は、瞬時に左手を振り抜いた。高速で槍の柄が伸びる。泡を吹かせ伸びる槍だが、その泡が視界を遮りカシオの姿を隠す。

伸び行く柄が動きを止める。僅かにだが魚の化物の左手にも手応えがあった。深く刃が突き刺さる手応えが。

「クツクツクツ！ 最後は意外と」

「何か面白い事でもあったかな？」

「なっ！」

背後からのカシオの声に驚く。確かに手応えはあったはず。戸惑い槍を戻す事すら忘れていた。いや、正確には左手を引く事さえ出来なかった。知らぬ間に腹部に渦浪尖が一突きされていたのだ。

傷口から血が水中に吹き出る。そして、口からも血が泡と一緒に水中に溢れた。魚の化物の目が白目を向く。その時には腹部に刺さっていた渦浪尖が抜かれ、カシオの姿は魚の化物の前から消えていた。

そして、カシオの姿は既に陸へと移行されていた。ぐったりと地面にうつ伏せになるカシオは、静かに深呼吸を繰り返す。体の節々が悲鳴を上げる様に軋み、痛みが全身を襲う。

「うぎっ……。いってっ……。やっぱり、ゴーグルは必需品だ……。体がもたないって……」

苦しそうにそう呟くカシオの眼は、いつもの灰色に戻っていた。

濡れた衣服は随分と重く、カシオはその場から動く事が出来なかった。水中での魚の化物との戦いで見せた、高速移動が体に思わぬ副作用をもたらしていたのだ。今、この瞬間に魔獣に襲われたら、

きつと抵抗する事無く、命を狩られるだろう。ティル・バルド共に負傷し動けず、カシオにいたっては体力の限界で意識も遠のき始めているのだから。

「あゝつ。やべえ〜……。意識が……」

カシオは最後の力を振り絞り仰向けになった。青い空が徐々に霞み、瞼が塞がっていく。そして、瞼が閉まりきる直前、視界に人影を見た。髪の毛の長い人影を。

数日が過ぎた。

清めの泉の更に奥の森に小さな小さな村があった。小さな村だが、平和で穏やかな雰囲気だ漂っている。畑で仕事をする一人の娘。歳は二十歳位だろう。長い黒髪を頭の後ろで束ね結っている。澄んだ灰色の瞳。それは、彼女が水呼族である証だった。

「セラ。今日も頑張ってるな」

鍬を持った若い男が笑顔で畑にいるセラに呼びかける。野菜を収穫していたセラは、腰を上げると男の方に向かって笑みを見せた。

「はい。怪我人が三人で食事の準備が大変で」

「おおつ、そうだったな。セラも大変だな。変な拾い物して」

「賑やかで楽しいですよ」

「そうかい。まあ、頑張れよ」

「はい」

セラが軽く会釈すると、男も会釈し歩き出した。籠一杯に野菜を収穫したセラは、首に掛けていたタオルで汗を拭い、畑から出る。



畑から出ると、村の真ん中を流れる小川で手を洗う。この小川が、この村の全ての水を補っている。その為、この小川は村にとても大切にされている。

それから、セラは家に向って歩き出した。歩く事五分。こじんまりとした色あせた家へと、セラは入っていった。ここが、セラの家だ。

「あつ、もう起きてて大丈夫なんですか？」

家に入るなり、セラはそう言う。その視線の先には、バルドの姿があった。腹部には包帯が巻かれている。セラが手当てしてくれたのだらう。椅子に腰掛け、二本のナイフを手入れしているバルドは、返事をする気は無い様で、無言で手を休める事無く手入れを続ける。笑みを浮かべたままのセラは、バルドの方に小さくお辞儀すると、キッチンへと立つ。籠に詰め込まれた野菜は、まな板の上へと移行され、セラはエプロンを身に纏う。

「今、夕飯の支度しますね」

「……」

やはり、返事はない。それでも、セラは笑顔を絶やさず、野菜を切り始める。沈黙する二人の間に、野菜を切る音だけが響いた。

それから暫くし、バルドは静かに椅子から立ち上がり、それに気付いたセラが振り返り笑顔を向ける。

「何処かに行かれるんですか？」

「……」

バルドからの返事は無く、二本のナイフを空穂にしまい、バルドは家の外へと出て行った。流石にセラも困った表情を浮かべる。実

の所、セラはバルドと一度も言葉を交わした事が無かった。それだけではない。バルドは一度もセラの作った料理を食べてくれず、セラは自分に何か非があるんじゃないかと、思い始めていた。

落ち込み両肩を落とすセラは、小さくため息を漏らし、夕飯の準備を再開した。

暫くして、食事の準備が終わる。食事を皿に盛り、お盆の上へと乗せていく。ある程度料理を乗せると、そのお盆を持ち部屋を移動する。

「失礼します」

一声掛け戸を開く。部屋にはベッドが三つ並び、奥の二つのベッドに男二人が寝かされていた。一番奥のベッドに寝ているカシオは、まだ目を覚まさず、上半身を起しているテイルがセラの方に顔を向ける。

「傷の方は、大丈夫ですか？」

「ああ。セラの手当てのお陰で、もう大分良くなった。ありがとう」

軽く頭を下げる。少し恥ずかしそうに笑みを浮かべるセラは、料理をベッドの横にある机の上に置く。野菜のたっぷり入ったスープと、数枚の自家製ハムが皿に盛り立てていた。バルドの寝かされていたベッドへと腰を下ろすセラは、「どうぞ、食べてください」と、笑顔でテイルに言う。

見ず知らずの自分達にこんなに親切にしてくれるセラに、申し訳なく思うテイルは、ゆっくりと頭を下げる。

「ど、どうしたんですか？ 急に」

いきなりの事で驚くセラは、慌てて両手を振る。

「見ず知らずの俺等を手当てしてくれただけじゃなく、ここまでもしてもらって」

「いいんですよ。困った時は助け合いですよ」  
「だが……」

何かを言おうとしたティルの口にセラが手を当てる。

「それ以上言わないで下さい。私は好きでやってるんですよ。そんな事言わないで下さい」

セラは優しく微笑む。その優しさがとても嬉しかった。だから、それ以上ティルは何も言わなかった。

### 第53回 刺客

セラの家に居候となり、既に一月あまりが経過しようとしていた。結局、ギフアー山脈の火災は、ただの山火事だったと、ブラストの使いが来て教えてくれた。炎血族などギフアー山脈には存在していなかったのだ。

流石にティルも呆れるしかなく、バルドにいたっては怒りを全身から滲み出していた。カシオの方は、まだ体が本調子では無い為、文句を言う元気すらなかった様だ。

ティルとバルドの二人は既に傷が完治し、いつでもこの村を出て行けるが、カシオは一月経ってもまだ動く事すらままなら無い状況だった。その為、ティルとバルドの二人もこの村にとどまっているのだ。

「セラ。俺とバルドで狩りに出掛けてくるが、何か森で採ってくるものとかあるか？」

セラの家の玄関先で、ティルが叫ぶ。狩りに行くのは、居候させてもらっているからだ。バルドは双牙の調整の為に、狩りを手伝っているらしく、ティルとしても結構頼りにしていた。

二階から降りてくるセラは、エプロンを脱ぎティルの方に笑みを見せる。

「いつも、ありがとう。でも、無理はしないでね」

一月も一緒にいたため、セラも大分口調が和らいでいた。その方が、ティルとしても対応し易い。

「ああ。大丈夫だ。無理はしないさ」

「本当に？ 心配ですよ」

「そんなに心配する事無いさ。それより、カシオの事よろしくな」  
「はい。任せてください」

ニコツと微笑むセラに、軽く頭を下げたテイルは家を出た。家の前の大木の枝に座るバルドが、静かに地に降り立つ。そして、静かにテイルの前を歩く。何も言わないバルドに苦笑し、ため息を漏らし静かに後を追った。

基本獲物を探すのはバルドの仕事で、しとめるのはテイルの仕事だ。しとめると言っても、止めを刺すのが仕事であって、結局追い込むのは二人でやるのだ。

「今日は、どうするんだ？」

「……獲物は捕らえてある」

「はあ？」

バルドの言葉の意味を理解できず、怪訝そうな表情を見せるテイルに、背を向けたまま口を開く。

「昨日、罾を仕掛けた。上手く行ったら、数匹は罾に掛かっている……はずだ」

「はずだろ？ そんな上手く行くとは思えんがな」

腕を組みながらそう呟くテイルは、失笑し首を左右に振る。前方を歩くバルドは、そのテイルの行動を見る事は出来ないが、眉間にシワを寄せ不機嫌そうな表情を浮かべていた。移動する間、沈黙が続く険悪なムードが漂う。

足音だけが森の中に聞こえる。テンポよくテイルとバルドの足音が混ざり合い、その合間に妙な足音が聞こえた。小動物の足音か、魔獣の足音か、全く分からない。だが、殺気が無い為テイルもバル

ドも気にはしていなかった。

そして、足音が消えると同時に、ティルとバルドも足を止める。静かに体をティルの方に向けたバルドは、眉間にシワを寄せ渋い表情をしていた。それは、ティルも同じだった。

「どうする？ 殺気はなかったが……」

真剣な表情のティルに、バルドは小さく頷く。それは、ティルの意見に同意したと言う意味だ。

「戻るぞ」

「ああ……」

ティルとバルドは静かに地を駆けた。村に向って。

セラの家の二階。寝室のベッドに横になるカシオは、上半身を起し、ベッドから足を下ろす。両足の裏に床の冷たさが伝わる。まだ足に力が入らないカシオは、表情を僅かに引き攣らせた。徐々に調子は良くなっているが、体はまだまだ調子は戻っていない。それ程までに体を酷使してしまったのだ。

立ち上がろうと両足に力を入れ、腰を静かに上げる。だが、膝から力が抜け、床へと倒れこむ。激しく体を打ちつけ、「うぐっ」と、短音で苦しそうな声が吐き出された。

その音に階段を駆け上る足音が聞こえ、戸の向こうにセラの姿が現れる。

「な、何やってるんですか！」

その声に、カシオが引き攣った笑みを浮かべながら答える。

「いや……。立てるかなって……」

「駄目ですよ！ まだ、動ける体じゃないんですから！」

「そ、そういわれても……」

「ほら、ベッドに戻ってください」

カシオの方まで歩いてきたセラは、カシオの体を重そうに起すとベッドへと移動させた。ベッドに戻されたカシオは、不服そうな表情を浮かべ、それから落ち込んだ様のため息を漏らす。

そんな落ち込むカシオを見かねたセラは、部屋を出る。そして、松葉杖を持って部屋へと戻ってくる。

「これ、使ってください。散歩に行きましょう」

「散歩って……。今から？」

「はい。歩きたいんですよね？」

笑顔のセラにそう言われ、カシオも「そうだよ」と、答えるしかなかった。そして、カシオはセラと家の外を散歩していた。松葉杖をつき、ゆっくりと足を進めるカシオは、横に付き添うセラに、困った表情を浮かべる。

「あの……。何で着いて来るんだ？」

「テイルさんから、カシオさんの事を任されたので、それに、怪我人一人で散歩させるのは心配じゃないですか」

「大丈夫だよ。散歩位一人で出来るよ」

「駄目です！ さあ、行きますよ」

複雑な心境のカシオは、立ち止まり右手で米神を搔く。あまりセラを危険な目に逢わせたくなかった。そして、カシオ自身不安で胸が張り裂けそうだった。

「セラ。……頼む。俺から離れてくれ……」  
「えっ？」

驚いた様に声を上げるセラは、カシオの方に眼を向ける。額から汗を滲ませるカシオの瞳孔が異常なほど開いていた。呼吸も荒々しく、苦しそうだ。その為、セラはカシオの体に寄り添い、背中を摩る。

「だ、大丈夫ですか？」

「だ…大丈夫……。だから……離れてくれ……」

セラをカシオは左手で押し退ける。押されたセラは地面に激しく倒れ込み、右腕をすりむく。そんなセラが、悲鳴を上げる前にカシオの悲鳴が轟いた。

「ぐあああああっ！」

カシオの体が後方へと弾き飛ぶ。松葉杖が宙に舞い、地面へと突き刺さる。吹き飛んだカシオの体は、地面を抉った。抉れた地面には所々に鋭利な岩肌があり、その先には血が付着している。

仰向けに倒れるカシオは、口角から血を流し痛みに表情を歪めていた。体中に突き抜ける様な痛みがズキズキと走り、指先一つ動かすのも辛かった。

「うっ……ぐうっ」

「見つけた……。見つけたぞ！ カシオ！！ラナス！」

「グライブ……」

顎を引き、目の前に立ちただかる男を見据える。右手に少々変つ



たライフルを持っており、そのライフルの大きな銃口からは煙が上  
がっていた。大筒で、ライフルと言うよりも大砲に近い形をしてい  
るが、ちゃんと片手でもって撃つ事が出来る。

そして、そのライフルの弾丸は直径十五センチ程あり、男の背中  
に背負っている鞆には幾つもの弾丸が詰め込まれていた。その内、  
黄色の弾丸を手に取り、右手に持っていたライフルに弾を詰める。  
身動きの取れないカシオは、奥歯を噛み締め苦しそうな声を出す。

「遂に……遂にこの日が……」

弾丸を詰めたグライブは、銃口を静かにカシオの方へと向ける。  
お互い眼を背ける事なく、真っ直ぐに睨み合う。グライブの右手の  
人差し指が、静かに引き金に掛かり、静寂が辺りを包み込む。グ  
ライブの口元が僅かに緩み、「じゃあな」と口だけが動き、引き金が  
引かれた。

## 第54回 砕かれた心

轟く銃声。

飛び散る血。

音が一瞬消え、瞬時に鳥達の羽音が聞こえる。

カシオの目の前には、大手を広げたセラの姿。咄嗟にかばってくられたのだろう。

だが、至近距離であの弾丸をくらったセラの体は、吹き飛びカシオの頭の上を越え、地面を激しく転げる。体には傷が多く出来、血が止め処なく流れていた。ピクリとも動かず、うつ伏せに倒れたまま、血だけが地面に広がる。

「邪魔が入ったが、次は当てる」

弾を詰め直し、もう一度銃口をカシオの方に向けた。セラの方へと顔を向けているカシオは、肩を僅かに震わせる。

怒り、自分の不甲斐無さに唇を噛み締める。歯が食い込み血が薄らと流れ、顎から地面へと雫となり落ちた。

「グライブ！」

怒りの籠った声を響かせるカシオは、グライブの方へと顔を向けた。すると、カシオの額に銃口が当たる。

見上げるカシオと見下ろすグライブ。二人の視線がぶつかり合い、火花を散らす。

「今度こそ、さよならだ。カシオ!! ラナス」

引き金にゆっくりと人差し指が掛かる。

銃声が静けさを破り響き渡った。地面にグライブの持っていた銃が落ち、ゴトンと音が鳴る。

「グッ……」

「チツ！ 遅かったか」

「誰だお前！」

声のした方に顔を向けるグライブ。そこには、右手に銃を持ったティルの姿があった。

右手から血を流すグライブは、左手で右手を押さえる。血が雫となり地に点々と落ちた。

その時、辺りに悲鳴が響いた。

「キヤアアアツ！ せ、セラアアアアツ！」

その悲鳴で、ティルとカシオが視線をセラの方へと向ける。そこに、一人の女性の姿があった。血を流すセラの姿を見て悲鳴を上げたのだらう。その上、明らかにティルの方を指差し、体を震わせる。そんな女性と目が合う。そして、さらに悲鳴を上げる。

「キヤアアアツ！」

悲鳴を聞きつけ、人が集まる。その時には、グライブの姿は無かった。完全に濡れ衣を着せられたのだ。集まった人々に囲まれ、身動きが取れなくなる。大人しく、ティルは天翔姫をボックスに戻し、カシオに肩を貸す。

「この村から出て行け！」

一人の若者が、二人に向けて小石を投げる。

「ぐっ！」

鈍い音と共に、ティルの奥歯を噛み締めたそんな声が微かに聞こえた。鋭く尖った小石が額に直撃したのだ。額は微かに切れ、血が静かに流れ出す。左手で額に触れたティルは、その手に付いた血を見て、若者を睨み付けた。

その眼にたじろぐ若者は、二・三步後退り、人混みの中へと姿を消す。それだけ、ティルの眼が怖かったのだ。だが、その若者に続けと言わんばかりに、周囲に集まった人々は、小石を拾いティルとカシオに向って投げつける。

「グッ！」

「ウクツ……」

手で顔を庇う二人だが、小石は確実に二人に命中していた。肩・膝・肘・頭・背中……。全ての箇所直撃し、血が薄らと衣服の下から染み出していた。天翔姫で防ごうと思えば、防ぐ事も出来る。だが、それをカシオが拒んだ。『村の人達の気が晴れるなら』と。だから、ティルは天翔姫を使わず、村人の投げる石を体に受けた。

「村から出て行け！」

「助けてもらった恩を仇で返しやがって！」

村の人達の声が二人の耳に届く。その度、胸が痛んだ。全身の痛みよりも何十倍も。

やがて、人が減っていく。一人……また一人……と。

最終的に血を流すティルとカシオだけが残され、セラの家に置いてあった荷物が無残な形で投げ出されていた。

「だい……じょうぶか？」

所々に血塊が見えるティルの顔。全身傷だらけで、茶色のコートは何処もかしこも、血の色に染まっていた。服もズボンも微かに破け、傷口がそこから薄ら見える。腕・足など各所が地腫れし、立つのも一苦労だった。

「うっ……うっ……。ごめん……」

右腕を顔の上に置き、両目を隠す。微かにだが目尻から涙が流れ血と混ざり合う。その涙にカシオの気持ち悟るティルは、静かに息を吐き出し、暫く何も言わずにその場を離れた。離れたと、言っても五メートル程。そこにある木の根に腰を下ろす。

風が二人の間を流れ、数枚の落ち葉が地面を転がる。地面には血痕がいくつか残り、落ち葉がその血痕に付着し塊を成す。だが、それも強く冷たい風に吹き飛ばされ、また一枚一枚に散った逝く。

冷たい風は外傷に響き、全身に激しい痛みを与える。激痛に言葉を発する事も出来ず、唸り声だけが辺りにこだまする。そんな二人の前に姿を現すバルドは、散乱している荷物をまとめだす。

「どうだった？」

傷の痛み能耐えながら、ティルがそう聞く。すると、バルドは首を横に振り答える。

「見失った」

「そうか……」

歯を食い縛り息を吸い込み、静かに腰を上げる。そして、仰向けになつたままのカシオに声を掛ける。

「そろそろ行くぞ」

何も聞かず、そう言い右手を差し出す。右腕で顔を隠したままのカシオは、全く動こうとしない。相当ショックだったのだろう。動かないカシオに、バルドはゆっくり歩み寄った。そして、ナイフを首筋に伸ばす。

「今すぐ立て！」

「止める！ バルド」

「お前は黙ってる！」

止め様としたテイルに怒鳴り散らし、ナイフを持つ手に力を込める。痛み表情を歪めるテイルは、バルドの手を弾き力強く言い放つ。

「止める！ 今は……」

手を弾かれたバルドは、ナイフを空穂にしまい、静かに立ち上がる。背を向けるバルドは、空穂を背負い、歩き出した。

「何処へ行く？」

バルドの背中にそう呼びかける。すると、背を向けたままバルドは答える。

「こんな所でジツとしている程暇じゃない」

それだけ言い、バルドは足を進める。バルドの背中を見据えるテイルは、右手で地面を殴った。激痛が全身に伝わり、テイルは地面

に額を付け痛みを耐える。

朝が来て……また、夜が来る。カシオはその間動く事は無かった。ティルは、大分傷が塞がり、かさぶた瘡蓋が体のあちこちに出ていた。額の瘡蓋をティルは一日に何度も触っている。痕が残らないか心配だったのだ。

あれから、ここに人が来る事は無い。その為、ティル達は、石をぶつけられずに済んでいた。立ち上がったティルは、カシオの方へと顔を向け、静かに声を掛ける。

「おい。そろそろ、行くぞ」

「……」

何も答えない。流石に、ティルも声を張り上げる。

「いい加減にしろ！　いつまでも落ち込んでる場合じゃないだろ！」  
「……」

それでも、返答は無い。ため息を漏らすティルは、カシオの襟首を掴み無理矢理立たせる。すると、カシオがそのティルの手を払い除け怒声を響かす。

「やめろ！　もう、俺に構うな！」

手を払い除けられ、後方へと後退る。そして、静かに二人が対峙する。僅かに膝の震えるカシオ。まだ体は調子が良くなっていない様だった。それでも、力強く仁王立ちし、ティルの眼を真っ直ぐに睨む。灰色の瞳が涙に潤んでいる。

その眼を真っ直ぐに見据えるティルは、静かに眼を伏せカシオに背を向けた。カシオにここから動く意志が無いと悟ったのだ。

自分の荷物だけをまとめ、鞆を背負う。そして、静かに「お前の

意思がその程度だったとはな」と、カシオに聞こえる程の声で言い、歩きだした。



## 第55回 素手と剣

北の大陸グラスターの都市レイストビル中央に聳えるグラスター城。

今日もグラスター城の稽古部屋から活気溢れる声が聞こえる。

「うりゃああああっ！」

フォンが叫びながら竹刀を振り翳し床を駆ける。フォンの視線の先には、低く竹刀を構えるフレイストの姿がある。身軽な服装のフレイストは、オレンジブラウンの髪を揺らし、防具を着けるフォンを真っ直ぐに見据え、竹刀の柄を軽く握り締めた。

二人の距離が縮まる。フォンはフレイストより先に、振り上げた竹刀を振り下ろす。

「甘い！」

オレンジブラウンの髪が揺れ、フレイストが竹刀を力強く振り上げた。フレイストの竹刀が、振り下ろされたフォンの竹刀を横に弾く。

「へッ？」

竹刀を弾かれ、体が右方向へ傾く。完全にバランスを崩された。だが、強引に腰を捻り竹刀を振る。しかし、苦し紛れの一発はフレイストに届かず、空振りする。そして、そのまま腰から床へと倒れた。

「いつてえー！」

腰をぶつけたフォンがそう叫んだ時、目の前にはフレイストの竹刀の先が向けられていた。

「これで、私の勝ちです」

「ムギヤーツ！ 剣なんてオイラにゃ無理だ！」

防具を脱ぎ捨て、竹刀を放り投げたフォンは、そのまま床に寝そべる。茶色の髪が汗で額に引っ付き、ベタベタする。そんなフォンに、フレイストは聊か呆れた表情を見せ、フォンの放り投げた竹刀を右手で拾う。寝そべりながらフレイストを見据えるフォンは、つまらなそうな表情を浮かべ、不思議そうに聞く。

「なあ。何でオイラに剣術なんて教えようとしてんだ？ オイラ、剣には興味ないんだけど」

体を起しそう言うフォンは、フレイストの方へと顔を向けた。竹刀を片付けるフレイストは、フォンに背を向けたままその質問に答える。

「素手で戦うのには限界があります。それに、武器を持ってばかりが長くなり、攻撃のバリエーションも増えます」

「うん。別にオイラは素手で困る事は無いけど？」

全く興味のなさそうなフォンに、フレイストは振り返り強気な口調で言い放つ。

「ならば、勝負いたしましょう。素手と剣の違いをあなたの体に刻みましよう」

「勝負つて、そこまでしなくても良いよ。お互い怪我したくないか

らね」

笑顔を見せるフォンに、フレリストが急に走りだし、竹刀を振り抜く。それにすぐさま気付いたフォンは、後方にジャンプしてそれをかわした。フレリストの振り抜いた竹刀は、刃風を吹かせ、フォンの茶色の髪を僅かに靡かせる。刃音も鋭く、フレリストが今まで以上に本気だと、フォンも気付き真剣な表情をする。

「いきなり、何すんだ！ 危ないだろ」

怒鳴るフォンは、自然と戦闘態勢に入っていた。そして、フレリストも振り抜いた竹刀を構え直し、フォンの眼を真っ直ぐに見据える。視線を送るだけで、フレリストからの返答はない。だが、言葉が無くともフォンには伝わった。フレリストの意思が。

その為、フォンは両拳をゆっくりと握り直し、呼吸を整える。二人の間に漂う緊迫した空気。腰を落とし低い姿勢をとるフォンに対し、フレリストは中段の位置に竹刀を構える。これは、咄嗟の攻撃に対応する為に取った構えだった。

警戒するフォンとフレリストの二人は、一定の距離を保ったまま、静かに動き始める。初めはゆっくりと動く二人だったが、次第にその足は駆け足へと変る。そして、遂に二人が距離を縮めた。

「はっ！」

気迫の声と共に竹刀が鋭い刃音を響かせ、右から左へと横一線に振り抜かれる。突っ込むフォンは、身を屈め竹刀をかわすと、一気にフレリストの懐へと入り込んだ。

「もらっ」

「！」

その時、視界にフレイストの右膝が見えた。直後、鈍い短音と共にフォンの体が宙に舞う。空中に投げ出されたフォンは、両腕が大きく頭上に伸びていた。そのままの体勢で、空中で一回転したフォンは、床に背中から叩き付けられ、二・三度床を転げた。フォンの落ちた衝撃で、床に振動が広がり微かに床を揺らす。

手応えを感じなかったフレイストは、竹刀を構え直し横たわるフォンを見据える。口から血を流すフォンは、体を起し左手で血を拭う。

「いつて〜っ。上手く行っただと思っただのに……」

「私の方こそ、上手く誘い込んだと思っただんですが……。見事な動体視力と反射神経です」

表情を変えぬままフレイストはそう言う。

フレイストが膝蹴りをした瞬間、フォンは両手でフレイストの膝を受け止めていたのだ。だが、衝撃にフォンは吹き飛ばされてしまったのだ。その為、大したダメージは無い。

「さて、オイラもチヨイと本気を出すぞ！」

「本気を？ それじゃあ、今までは手を抜いていたんですか？」

立ち上がり拳を握り直すフォンは、右拳を力強く握り静かにゆっくりと息を吐き出す。全くフレイストの言葉を聞いていない。そんなフォンに、聊か呆れた表情を見せるフレイストは、右足を引き、竹刀の切っ先を後方に向け低い位置に構える。

二人が対峙し、沈黙が辺りを包み込んだ。フォンは左拳を軽く突き出し、右拳を腰の位置に構える。右足は引かれ、左足のつま先に力を集中させる。

「この一撃で勝負は決まる！」

「そうか。それじゃあ、私も言おう。私もこの一撃で勝負を決めよう」

フレリストが真剣な表情を見せる。

左足のつま先へ全体重を移行するフォンは、体が少しだけ前屈みになる。そして、左足のつま先で、力いっぱい床を蹴った。その瞬間、フレリストはフォンの姿を見失う。だが、次の瞬間、フォンの姿が目の前に現れる。

予想外のフォンの瞬発力に驚くフレリストは、咄嗟に踏み込んだ左足に力を込め、下から上へと竹刀を振り上げる。だが、振り上げた竹刀はフォンの顔の僅か数センチ横を通り過ぎた。刃音がフォンの耳元で聞こえ、刃風が頬を軽く撫で、髪がフワリと浮き上がる。

「くっ！」

「決める！」

右脇に固めていた右拳をフォンは突き出そうとした。だが、一瞬フレリストの右足が床から離れたのに気付き、拳を開く。そして、勢い良く突き出す。衝撃が二人の間に起き、風が吹き荒れる。轟音が大气を揺るがし、フォンとフレリストの体に、ビリビリと波動が襲い掛かった。

フォンの右手は、真っ直ぐにフレリストの右膝とぶつかり合っていた。フォンの右手には、今だに衝撃が残り、痺れが残る。

「ぐっっ……」

フォンの表情が微かに歪む。

一方のフレリストも、右膝に違和感を感じた。

「ッ！」

右足を動かそうとしたが、激痛が走る。奥歯を噛み締め、その痛みに耐えるフレイストは、素早くその場を飛び退く。だが、着地した際に、右膝に強烈な激痛が走り、その場に膝をつく。

まだ火傷の痛みが残る右腕を震わせるフォンは、流石にこれ以上続けるのは無理だと肩の力を抜き、フレイストの方に歩み寄る。フレイストも、竹刀を床に置きゆっくりと腰を下ろす。

「いや」。参ったよ。本当に、君の動体視力と反射神経、それに瞬発力は群を抜いているよ」

フレイストは右手をフォンの方に伸ばす。笑みを浮かべるフォンは、右手をフレイストの方に差し出そうとしたが、先程の衝撃と火傷が疼き上手く動かす事が出来なかった。その為、左手でフレイストの右手首を握りしめる。

「悪い。右腕動かないっばいから、左手でいいかな？」

「ああ。大丈夫だよ。私の方も右膝を動かないから、肩を貸して欲しい所だから」

その言葉に、フォンは軽く笑みを浮かべフレイストの右腕を引き、立ち上がらせる。右膝を曲げたまま左足だけで立つフレイストは、フォンの肩に腕を回し、二人で医務室へと歩き出した。

## 第56回 ミーファとルナとフォン

「全く……何を考えているんですか……」

医務室でフォンとフレイストの治療をしたルナが、呆れた様な困った様な声で呟く。だが、表情は無表情のままだ。金髪の長い髪を揺らすルナは、額から溢れる汗をタオルで拭う。

右手に包帯を巻いたままのフォンは、手の平を閉じたり開いたりしていた。痺れは無く、痛みも無い。火傷は少し疼くが、これはルナでもどうしようも無いらしい。

「いつも、悪いね」

「いえ……。もう慣れましたから」

フォンの言葉に、相変わらずの無表情のままルナは答えた。無邪気な微笑みを見せるフォンは、右手で頭を軽く搔く。

一方、フレイストはベッドの脇に座り、ルナに背を向けていた。相変わらず、女性は苦手の様だ。そんなフレイストに、数人の兵士が集まる。そして、心配そうな表情を見せ、話を掛けてきた。

「大丈夫ですか？ フレイスト様」

「お怪我の方は？」

「無茶はなさらないで下さい」

様々な言葉を掛ける兵士達に、フレイストは自分が王になったのだと実感した。その為、フレイストは、心配掛けまいと軽く笑みを浮かべて対応する。

「大丈夫だ。心配は要らない。怪我は大した事ない」

「そうですか……。しかし、あまり無理をなさらない方が……」  
「分かっている。もう、無理はしない」

フレイストはそう言うと、兵士を下がらせた。今までと兵士達の対応が違う。少し距離を置かれた印象があった。その為、フレイストは少し悲しかった。だが、それを表に出す事はない。兵士達を不安にしないためだ。

兵士達は医務室を後にし、フレイストはベッドから立ち上がる。ルナと向かい合うフォンは、そんなフレイストの方に目を向け、不思議そうな表情を見せた。

「どうかしたのか？ フレイスト」

「いえ。何でもありません。それでは、私は失礼します」

「もう、行くのか？」

驚いた様子で問いかけるフォンに、フレイストは背を向けたまま答える。

「ええ。今日は稽古に付き合って貰って、ありがとございました」  
「いって。オイラでよければ、いつでも相手になるからさ」

笑顔で答えるフォンに、背を向けたまま一礼し、医務室を去っていった。不思議そうな顔をするフォンは、首を軽く捻り息を漏らす。そして、ルナの方に目をやる。フォンとフレイストの治療をしたルナの顔には、少し疲れが見えていた。

最近だが、治療をする度にルナの疲れが酷くなっている様に見える。これまで、色々ルナに頼り切っていたフォンは、これからはルナに頼らない様気をつけようと思った。

そんな時、医務室の部屋が開かれ、ミーファが入ってくる。



「怪我は大丈夫？」

明るく笑みを見せるミーファに、ルナは目を向け静かに答える。

「心配するほどのものじゃないですよ」

「そう。ルナが言うなら、そうね。でも、あんまりルナに無理させないですよ！」

ルナの前に座るフォンに歩み寄り、フォンの顔を指差しそう怒鳴る。苦笑いを浮かべるフォンは、体を後ろに引く。鋭い目付きで睨むミーファの空色の瞳に、フォンの引き攣った顔が映る。

表情を変えないルナは、フォンを責めるミーファに向かって、相変わらずの落ち着いた口調で答えた。

「私は大丈夫ですよ。ミーファさんが心配する程無理はしてませんから」

「駄目よ！ ルナはいつもそう言って、結局自分にはっかかり負担掛けちゃうんだから！」

「そんな事」

「そんな事あるのよ！ 大体、ルナは……クドクド……クドクド……」

クドクドと言葉を並べるミーファは、いつしかフォンではなくルナの方に説教を始める。その隙をフォンは見逃さず、忍び足でベッドから移動し、医務室の扉を開き外に出る。その際、「オイラはこの辺で……」と、小さな声で言っただけ扉を閉めた。

フォンが逃げるのを見ていたルナは、「ミーファ」と呟く。すると、ミーファは説教を止め「何？」と、眉間にシワを寄せる。そんなミーファに、扉の方を指差し言う。

「フォンさん。出て行きましたよ。話があったのでは？」

「はっ！ そうだ！ そうだったのよ！」

「さあ、私の事は良いから、フォンさんの所へ」

ルナにそう言われ、ミーファは心配そうな表情を見せる。その表情に、ルナはいつもと変わらない声で言う。

「私は心配ありませんよ。行って来てください」

優しいルナの声に、ミーファは小さく頷き、医務室を出て行った。ミーファが出て行ったと同時に、ルナの視界はグラつく。そして、そのまま床に倒れこんだ。体に力が入らず、ルナの意識は遠退いていった。

医務室を出たミーファは、フォンの後を追った。廊下の先の窓辺にフォンの姿がある。手摺に凭れ掛かり、外を見据えるフォンの後ろ姿は、どこか不思議な印象だった。その為、ミーファは、少し離れた所からフォンの後姿を見つめる。

「何してるんだらう？」

不思議そうな表情を浮かべる。恐る恐る忍び足でフォンの方へと近づくミーファは、キョロキョロと辺りを見回し、誰も来ない事を確認してからフォンに声を掛けた。

「フォン」

「！」

驚いた様に体をピクツとさせるフォンは、素早く振り返る。

「み、ミーファ!」

「何よ。その驚きは?」

「な、何でも無いよ」

ミーファの疑いの眼差しに、フォンは焦りながらそう答えた。そんなフォンにミーファはため息を漏らす。引き攣った笑みを浮かべるフォンは、医務室から抜け出した事をクドクドと言われると思い、その場をどう凌ぐか考えていた。そんなフォンの予想とは裏腹に、優しい口調でミーファが聞く。

「何見てたの?」

「へッ?」

意外な口調のミーファに呆気にとられるフォン。あまりの出来事に頭の中が混乱する。そんなフォンの表情に気付いたミーファは、目を細めてフォンを睨む。

「何よ。その表情は?」

「い、いや……。オイラはてっきり、怒られるんだと……」

「怒られる? 何よ。怒られる事でもやったわけ?」

腕組みをしたままのミーファが、ムスツとした表情でフォンを睨む。微かに怯えるフォンは、ミーファと距離をとる。そんなフォンに一步步寄ったミーファは、力強い口調で言い放つ。

「何で距離とるわけ?」

「だ、だって、殴るつもりだろ?」

「私はそんな事しません!」

「本当か?」

疑いの眼差しを向けるフォンの額に、ミーファの右拳がぶち込まれる。勢い良く廊下に倒れこむフォンは、額を押さえ悶絶していた。苦しむフォンの前に座り込むミーファは、「大丈夫？」と小さな声で聞く。もちろん、言うまでも無くフォンの返答は「大丈夫じゃない」だった。

それから、何度かミーファは謝った。ミーファが思っていた以上に強烈なパンチだったらしい。赤く痕が残り、少しだけ腫れていたのだ。ムスツとするフォンは、額を右手で摩っていた。

「ごめんってば。まさか、こんなになるなんて、思ってたかったんだって」

両手を合わせて謝るミーファ。これで、十回目になる。だが、フォンはムスツとした表情を変え様とはせず、ソップを向いてしまう。流石のミーファもそれには、カチンときて、大声で文句を言う。

「何よ！ 人がこんなに謝ってるのに、許してくれないわけ！」

その言葉に、フォンもついに口を開いた。

「その態度が、人に謝る態度なのか！」

それから、フォンとミーファは互いに揉めあう。初めてかもしれない。フォンとミーファがこんなにも揉めたのは。そんな二人の揉め合いが終わったのは、一人の兵士が着てからだった。息を切らせるその兵士が言った一言で、二人は顔色を変え走り出した。その一言とは。『ルナさんが倒れました』だ。

## 第57回 沈黙

医務室のベッドにルナが寝かされていた。

その脇には、心配そうな表情をするフォンとミーファの姿があった。両手を組むミーファは、目を閉じ祈る様にする。フォンは落ち着かない様子で、右足を揺すつてた。それに気付いたミーファは、目を開き迷惑そうな表情を浮かべる。

「チョット、それ止めて」

「へっ？」

ミーファに言われて、フォンは右足を止めた。自分では意識していなかったが、相当揺れていたらしい。申し訳なさそうな表情をするフォンは、軽く頭を下げる。そして、静かに立ち上がった。ここにいると、落ち着かないと思ったのだ。

「何処行くの？」

立ち上がり出て行こうとするフォンに、声を掛けるミーファ。それに不安そうな表情を浮かべるフォンは、微かに笑みを浮かべて答える。

「ここにいと、落ち着かないからさ、少し汗を流してくるよ」

「それじゃあ、私も一緒に行く。色々と話したい事があるから」

「話したい事？」

不思議そうな顔をするフォンに、微かに頷いたミーファは立ち上がりフォンの方へと足を進めた。二人は静かに医務室を後にし、バルコニーに出ていた。バルコニーから見える景色は絶景で、遠くに

見える山の色合いが美しい。街並みもその奥に見える畑や牧場も全てが、とても綺麗に映る。

そんなバルコニーには、フォンのミーファの二人の姿があった。他に誰かの姿は無く、完全に二人つきりだ。少々風が強い。その為、ミーファはスカートが捲れない様に、両手で押さえていた。冷たい風に身を縮こませるフォンは、猫背になっていた。

「うっっ……。寒い……」

茶色の髪が風に煽られ、激しく乱れる。もちろん、ミーファの長い空色の髪も、風に乱されていた。この状況では、話も出来ない。結局二人はミーファの部屋へと移動する事に。

ミーファの部屋は、広々としていて、色々な家具が並んでいた。フォンの部屋とはまるで扱いが違う。まあ、ミーファは姫なのだから、これ位の扱いは普通なのだ。そんなミーファの部屋に、いつもなら大はしやぎするはずのフォンだが、今日は妙に黙っていた。それだけ、ルナの事が心配なのだろう。

赤いソファーに腰掛けたミーファは、立ち尽くすフォンを見据え、落ち着いた口調で問う。

「ルナの事、どれ位知ってる？」

その質問に、フォンは戸惑う。実際、フォンはルナの事を何も知らない。知っている事は、名前と年齢……位のものだ。ただ、何か人には言えない秘密があるらしいが、それが何かは、分からない。その為、腕組みをして唸り声を上げる。こうして考えてみると、フォンはルナの事を何も分かっていないと感じた。フォンの顔を見て、ミーファは大体の事を把握し、静かに口を開く。

「結局、ルナの事は何にも分かんないわけね……」

その言葉に困った様な表情を見せるフォンは、少々俯き加減になる。こうなる事は予測していたミーファは、軽くため息を吐き、右手で額を押さえ首を左右に振った。ミーファの行動を目にしたフォンは、更に落ち込む。そんなフォンに焦り笑みを見せるミーファは、両手を振りながら言う。

「べ、別に、フォンを責めてるわけじゃないよ。ただ、何処までルナがフォン達に自分の事を話したのか、気になったただだから」

「オイラも、色々聞いたけどさ、教えてくれないんだよ」

「そうだと思った。大体、ルナは自分の事を隠しすぎるのよ」

呆れた様子のミーファに、腕組みをするフォンが軽く頷く。小さく息を吐くミーファは、とりあえず何処から話すかを考える。その間に、フォンはミーファの向かいのソファに腰を下ろす。そんなフォンにミーファが静かに聞く。

「私の事は何か話してた？」

「いや……。特に聞いてないけど」

「それじゃあ、私が時見族って事は？」

「それは、聞いている。ティルからだけど」

「ティルから？ それじゃあ、ルナは何も言っていないの？」

ミーファの言葉に長考し、軽く頷き答える。

「うん。何も言っていないぞ」

「じゃあ、ルナが癒天族の巫女だって事は……知らないよね」

ため息混じりにそう呟いたミーファの言葉は、フォンの耳には届かなかった。その為、「へっ？ なに」と、フォンは聞き返すが、

ミーファは「気にしないで」と右手をフォンの方に向けた。複雑そうな表情を見せるフォンは、右手で頭を掻く。そんなフォンに、眉間にシワを寄せながら口を開く。

「私と違って、ルナには重大な使命があるの」

「重大な使命？」

「うん。その使命は、この世界の今後を左右する大きな使命。そして、変える事の出来ない運命……」

「……？」

不思議そうな表情をするフォンは、軽く首を傾げる。そして、以前ルナの言っていた言葉を思い出し、静かに呟く。

「運命は変えられない……」

「へっ？」

小さなフォンの声が、ミーファの耳に届いた。驚いた表情を見せるミーファは、フォンに向かって聞き返す。

「今、何て？」

眉間にシワを寄せ、渋い表情を見せるフォンは、何度か首を傾げる。曖昧な記憶を手繰り、フォンはゆっくりと口を開く。

「いや……。以前、ルナが言ってたんだ……。運命は既に決まっている。どう足掻いてもそれを変える事は出来ないって」

「嘘……。ルナがそんな事を口にしたの？」

「うん……。確か、そうだったと思う。最近、色々あったから少し曖昧だけど、多分そう言った」



軽く微笑むフォンに、ミーファは「そう」と、小さな声で呟き、視線を足元に向けた。組んだ両手の上に額を寄せ、ミーファは黙り込む。ソファアの背凭れに凭れるフォンは、天井を見上げたまま、ルナの言っていた事の意味を考える。

部屋には沈黙が漂う。時計の針が時を刻む音。それだけが、部屋に響く。

静かに息を吐き出したフォンは、結局ルナの言っていた事の意味を理解する事を諦め、体を起し真っ直ぐにミーファの方を見据える。黙り込んだまま一言も話さないミーファに、フォンは申し訳なさらうな表情をしながら声を掛ける。

「なあ、ミーファ？」

「ンツ？」

フォンの声に気付いたミーファは、視線を上げフォンの目を真っ直ぐに見据える。そんなミーファの空色の瞳を真っ直ぐに見据えるフォンは、言い難そうに口を開く。

「結局、話はどうなったんだ？」

一瞬間が空き、「あっ！忘れてた」と、ミーファが思い出した様に言った。呆れるフォンは、右肩を落とし失笑する。「ごめん、ごめん」と謝るミーファは、照れ笑いを浮かべた。背中を丸めるフォンは、「いいよ。気にしてないから」と、言いつつも目を細めて疲れた様な顔でミーファを見据える。

## 第58回 黒刀・烏

アルバー大陸にあるのどかで小さな名の無い村。そこに、ワノールの姿があった。長かった黒髪はバツサリと切り落とされ、顔の傷と右目の眼帯が目立つ。知っている者が見れば、髪形が変わってもすぐにワノールだとわかるだろう。

そんなワノールは、家の横で小さな畑を耕していた。始めたばかりなので、まだ土も荒々しい。鍬で力強く地を耕すワノールは、額から汗を薄らと滲ませる。彼は、二・三時間は耕していた。その為、ワノールは汗をタオルで拭い木陰に腰を下ろす。

「畑仕事と言うのは、腰に来るな……」

畑仕事をして初めて気付く。農民達の仕事の辛さを。今までは騎士として、魔獣と戦う事ばかりだったが、こうして畑を耕すと色々と気付く事があった。そして、自分の使っていた王がどれほどまでに国民を苦しめていたのかを、改めて理解したのだ。

汗をタオルで拭い木陰で休むワノールに、長く伸ばした黒髪の女性が微笑みながら歩み寄ってくる。その女性にワノールは軽く右手を上げ、微かに笑みを浮かべ声を掛ける。

「ウール。どうしたんだ？」

「あなたが、疲れているんじゃないかと思って」

ウールと呼ばれた女性は、右手に持った籠を胸の位置まで上げる。ワノールの隣りに座ったウールは、その籠の中から弁当箱を取り出した。二つある弁当箱の一つをワノールに手渡し、もう一つを膝の上に乗せる。色鮮やかに盛り付けされた弁当を食べるワノールは、笑みを見せた。ウールもそんなワノールの顔を見て微笑み、楽しそ

うに話をしていた。

楽しい会話をしているなか、ウールが何かを思い出した様に口を開く。

「そういえば、昨日あなたに小包が届いてましたよ？」

「小包？ 誰からだ？」

「さあ？ どちら様でしょうか？」

首を傾げ、すぐに笑みを浮かべながら答えた。不思議そうな表情をするワノールは、眉間にシワを寄せ、いつもの様に難しい表情をする。この村に帰ってきて、ワノールがこんな表情をするのは、初めてだった。

「どうかしましたか？ 眉間にシワ寄せて」

「いや……。俺に小包なんて、誰だろうと思ってな」

笑みを見せるワノールに、ウールも微かに微笑んだ。だが、この時ウールは分かっていた。ワノールが、また戦いに行かなければならないと。その為、少し悲しい目をしてワノールを見据えていた。弁当をおいしそうに食べるワノールに、また暫く会えなくなるのだと。ワノールはそんな事とは知らず、ウールに何度も笑みを見せた。

夕暮れ。畑を耕していたワノールは、一通りやる事を終えタオルで汗を拭きながら畑を見回す。まだまだ、畑には程遠いと、ワノールは小さくため息を漏らした。少々腰が痛むが、気にせずワノールは家へと足を進める。家に着くまでに、服に付いた土を払い除けていた。そして、疲れを見せない様に、家に入る。

「ただいま」

「お帰りなさい。あなた」

明るい笑顔を見せるウールは、夕食の準備をしていた。農具を玄関に立てて置くと、ワノールはそのまま椅子に腰を下ろす。そして、昼間にウールの言っていた事思い出し口を開く。

「ウール。俺に来ていた小包はどこだ？」

その問いに手を止めるウールは、振り返り手を拭くと「チョット待っててください」と、笑顔で言う。そして、そのまま部屋に入っ  
ていき、縦長の細い箱を持って出てくる。その長さは丁度ウールの  
つま先から胸の位置までであった。ワノールの脳裏に妙な光景が蘇る。  
レイストビルでフレイストと別れた時の事が。

なぜ、そんな記憶が蘇ったのかは、分からない。だが、その瞬間、  
その箱の中身がなんなのか、大体の予測が付いていた。

「ウール。やっぱり、後にしよう」

「えっ？ でも……」

「俺は、風呂に入ってくる……。すまん」

「……いいえ。それじゃあ、これは、ここに置いておきますね」

ウールは微笑み箱をテーブルの上に置く。それに見向きもせず、  
ワノールは風呂場へと向った。ワノールの背中を寂しそうな瞳で見  
据えるウールは、何も言わずに夕食の準備を再開する。

暫くして、ワノールが風呂から上がって来た。すでにテーブルに  
は沢山の料理が並んでいる。いつも以上に豪華な料理の数々に、ワ  
ノールは怪訝そうな表情をしながら椅子に腰を下ろす。そして、黙  
々と夕飯を準備するウールの顔を見据え口を開く。

「今日は、どうかしたのか？」

ワノールの言葉に手を止めるウールは、振り返り笑みを浮かべ、「どうもしませんよ」と答える。その不自然な笑みに首を傾げるワノールは、ふとテーブルの脇に置かれた包みに目をやった。すると開かれた形跡があり、それを見た瞬間に、ワノールは怖い顔をして怒鳴る。

「お前！ これを見たのか！」

「ごめんなさい……。でも、あなた、こうでもしないと、中身を見ようとしないでしょ？」

「な、何を言ってるんだ！ 俺は」

「あなたは、逃げてるだけよ」

ワノールの言葉を遮りウールがそう言い放った。言葉を失うワノールに、ウールは続けて言う。

「まだ、やる事が残っているんでしょ？ あなたが、やらなきゃいけない事が……」

その言葉に拳を握るワノールは、目を伏せ静かに口を開く。

「俺に……やれる事はない……」

「いえ、あなたにしか、出来ない事があります。あの方達も、あなたを待っているはずですよ」

優しい口調で微笑むウールは、ワノールの右手を優しく握る。ウールの目を見つめるワノールは、眉間にシワを寄せ、複雑な表情を浮かべていた。そんなワノールにウールは優しく言う。

「あなたも、すでに分かっているのでしょ？」

「それは……」

「それに、黒苑の事は気にしなくてもいいんですよ」

「だが、あれは、お前の親父さんに……」

申し訳なさそうな表情を見せるワノールに、ウールは優しく首を左右に振る。

「父が黒苑をあなたに託したのは、正義を貫いて欲しいからです。

砕けたのは、仕方ない事なんです。だから……気にしないで下さい」

「そうは行かない……。俺は、お前の親父さんと約束した。黒苑でお前を一生守ると……」

「なら、この先、あなたはどうかやって、私を守ってくれるのですか？ 黒苑はすでに無いのに……」

「そ、それは……」

口籠るワノールに、微笑むウールは箱を開く。箱には細長く布に包まれた何かがあった。ワノールの鼓動が高まる。こんなに胸が昂るのは、黒苑を受け継いだ時以来だった。

そして、ウールがその布を静かに捲る。布の下から出てきたのは、黒い柄に黒い鍔に黒い鞘。石突きと鯉口は金色の金具に包まれ、目立っていた。柄頭には銀色の装飾がされている。艶やかで美しい剣をワノールは握った。その瞬間に、体中に衝撃が駆け巡り、鼓動が更に早まる。

「これは……」

「黒刀・烏と、言うそうですよ」

「黒刀……烏……」

「はい。私も、見るのは初めてですが、父は烏を真似て黒苑を造ったと、以前に話してました」

「それじゃあ……」

「はい。これが、黒苑の元となった剣です。父が認めた剣です。きつと素晴らしい剣ですよ」

ウールが微笑む。息を呑むワールは、ゆっくりと右手で柄を握る。鞘を握る左手をそのままに、右手をゆつくりとスライドさせた。金属の擦れる音が僅かに聞こえ、鞘から静かに黒い刃が姿を現す。全てが黒く艶やかに煌き、刃こぼれ一つ無い。とても、人が造ったとは思えぬ程美しく、心を惹きつけるものだった。

## 第59回 村を襲う来訪者

美しい黒の刃。柄も鞘も引けを取らない。

見た目は黒苑を遙かに凌ぐ程。それほどまで、ワノールは鳥に見入っていた。

剣の事など知らないウールでさえ、この鳥の魅力に惹きつけられている。

そして、柄を握るワノールの手は、微かに震えた。これは所謂武者震いと言う奴だ。これ程まで美しい剣に出会ったのだ、当然といえば当然だ。

そんなワノールを見つめるウールは、暖かく微笑みながら静かに食事の準備を再開した。それに、ワノールは気付かない。それほどまで、鳥に見入っているのだ。

「キヤーツ！」

急に外から人々の悲鳴が聞こえ、轟音が響く。鳥に見入っていたワノールは、我に返り鳥を鞘にしまつ。それから、鳥をテーブルに置き外へと飛び出した。

「何があった！」

逃げようとする男の一人を捕まえ、ワノールはそう問う。すると、男は声を震わせ答えた。

「あ、あんたも早く逃げろ！ ま、魔獣だ！」

「魔獣だと！」

「そ、そうだ。死にたくなきゃ、逃げるんだな！」



そう言うと、男はワノールの腕を振り切り走り出す。真剣な表情をするワノールは、男とは逆の方へと走り出した。逃げ惑う人々とは明らかに逆方向へと走るワノールは、怒りに奥歯を噛み締める。

村の出入口には、複数の魔獣が立っていた。トカゲの様な姿形の魔獣が。鋭い爪と牙を持ち、長く太い尻尾を振り回す。その内、リーダー格の魔獣には、刺々しい背鱗せびねと二本の長い牙が突き出ていた。

魔獣達は村を見回し、涎を滴らせる。逃げ惑う人々を見据えるその眼は、明らかに獲物を見据える眼だった。

「グへへへッ……。獲物共が逃げ惑いやがって……」

リーダー格の魔獣は喋れる様で、涎を拭きながら不気味な声を出す。そんな言葉に、他の魔獣は喉だけを鳴らせる。他の魔獣は言葉を喋る事は出来ない様だ。その魔獣達に、リーダー格の魔獣が指示を出す。

「貴様等は、村の裏に回れ。他の連中は俺と中央から行く。いいな？」  
「がっつ！」

魔獣達が同時に声を張り上げる。だが、そこで一つの足音が止まった。その足音に、リーダー格の魔獣が、鋭い眼差しで目の前の男を睨み付けた。短髪の黒髪に、右目に黒い眼帯。顔に傷痕。この瞬間に、その魔獣はそいつが誰かを理解した。

「貴様……ワノール！アリーガ！」

驚いた様子の魔獣は、一步後退し表情を引き攣らせる。その様子に周りの魔獣達も困惑し、互いに顔を見合わせ始めた。

息を整えるワノールは、聊か不思議に思う。何故、魔獣が自分の名前を知っているのかと。だが、それを問う前に、魔獣の方が大声で笑い出す。

「グハハハハッ……。そうだ……。そうだった……。今や、奴の黒き牙は砕かれた！ 恐れる事は無い！ 行け！」

「ガウウウツ！」

背鰭のある魔獣の周りに居た魔獣が、一斉にワノールに襲い掛かる。魔獣達の背後に後塵が舞う。そんな魔獣を睨むワノールは、右手を腰にもって行く。だが、そこで気付く。今自分が丸腰だという事に。

「くっ！」

表情を歪めるワノールは、背を向け走りだす。突如背を向けるワノールを見て、大笑いする背鰭のある魔獣は、更に魔獣達に指示を出す。

「奴を殺せ！ 八つ裂きにしろ！」

その指示に対し、魔獣達は声をそろえ、「ガウウツ！」と答えた。逃げるワノールは、足では魔獣に勝てないと悟っていた。その為、暫くして足を止める。だが、諦めたわけではない。ワノールは振り向き、跳びかかってくる魔獣の一体に蹴りを入れる。顔の左側面にワノールの右足が綺麗に決まった。そして、魔獣の体は吹き飛び、一軒の家の壁に激突する。轟音が響き、壁が崩壊し、土煙が舞い上がった。

この一撃で、魔獣達の動きが止まる。その瞬間、ワノールは背を向け走りだす。魔獣達は、先程の事があり反応が遅れた。全てワノ

ールの思惑通りだった。だが、そのワノールの思惑に気付いていたかの様に背鱗のある魔獣がワノールの前に現れた。

「くっ！」

眉間にシワを寄せるワノールは、足を止める。そんなワノールの背後に、魔獣達が追いつき足を止めた。完全に逃げ場を失ったワノールは、魔獣達を交互に見て息を整える。そんなワノールを見据える背鱗のある魔獣が、不適に笑みを見せた。

「追いかけてこはお仕舞いだな」

魔獣の言葉に、微かに笑みを浮かべるワノールは、顔の傷に右手で触れる。僅かに傷が疼く。そんなワノールの耳に、聞きなれた声が聞こえた。

「あなた！」

「ウール！」

驚き顔を上げる。すると、背鱗のある魔獣の後方に、両手で烏をを持ったウールの姿があった。

「お、お前！ 何してるんだ！」

叫ぶワノールに、背鱗のある魔獣が振り返る。そして、ウールの姿を見ると、舌なめずりをし、不気味に微笑む。

「何だよ……。美味そうな奴がいるんじゃないか……」

「貴様！ まさか！」

「まずは、あの女を喰らってやろうっ！」

「なっ！ に、逃げる！ ウール！」

ワノールが叫ぶ。だが、既に背鰭のある魔獣がウールに迫る。ワノールも全力で後を追うが、間に合わない。ウールに向って、背鰭のある魔獣の右腕が振り上げられる。

「キャッ！」

ウールは堅く眼を閉じる。その時、轟音が轟き、地面が砕けた。飛び散る碎石。吹き荒れる砂塵。その中に一つの影が映る。大柄の影に、ワノールは眼を凝らす。薄れる砂塵から、微かに白い短髪の頭が見えた。そして、右頬の三つの星の刺青がワノールの眼にとまる。

「お前！」

「久し振りだな。確か、ワノールとか言うたか？」

砂塵の中から現れたのは、ノーリンだった。ゴツゴツとした顔つき、ノーリンは、開いているのか分からない程の細い眼でワノールを見据える。その足の下には、背鰭のある魔獣の姿があった。砕けた地面に顔だけを減り込ませ、全く動かない。

「お、お前、一体ここで何をしている！」

驚いた様子のワノールの声に、ノーリンは静かに背鰭のある魔獣の上から足を下ろし答える。

「ある人に雇われてな。ちよいとお前さんにお届けもんをしとつた」  
「お届け物？ ま、まさか！」

更に驚くワノール。そんな時、ウールがノーリンに気付く。

「あら、あなたは、昨日の……」

苦笑するノーリンに、ウールが不思議そうな顔をする。そして、間が空く事無くワノールの声が響く。

「フレイストに雇われたのか!」

「悪いんだが、それは言えんな。守秘義務があるんでな」

「何が守秘義務だ! ふざけるな!」

「別にふざけとるつもりはないがのう?」

笑みを浮かべるノーリンに対し、米神に青筋を浮き上がらせるワノール。向い合う二人の間には、険悪な空気が流れる。だが、その空気をウールが断ち切った。

「何をしてるんですか?」

その言葉と共に、ウールがいつの間にかワノールの傍に来ていたのだ。驚いたワノールは仰け反り眼を丸くする。

「な、何だ? ウール。いつの間そこに?」

「先程です。それより、これを」

ウールは両手に持った烏を、ワノールに差し出す。唾を呑み込むワノールは、静かに烏を受け取る。すると、烏を持つ手に、烏の鼓動が伝わり、ワノールはゆっくりと烏を抜く。黒く艶のある刃が、鞘から抜かれ日差しを浴びて不気味に輝いた。

## 第60回 村 崩壊

地面に埋まっていた背鰭のある魔獣が、体を起す。背を向けるノリーン。鳥に見入るワノール。そんな二人の様子を伺い、不適に笑みを浮かべる。

そして、ウールが気付く。背鰭のある魔獣がノリーンに向かって駆けて行くのが。

「危ない！」

ウールの声にノリーンとワノールが、視線を向ける。そして、背鰭のある魔獣が向って来るのに気付く。ノリーンの細い糸目が静かに開かれ、大きな手をスツと伸ばす。その大きな手は威圧感があり、一瞬だが背鰭のある魔獣の動きが止まった。その瞬間、ノリーンの後ろからワノールが飛び出す。

「残念だったな。俺を殺すチャンスを失って」

「なっ！」

腰の位置で抜かれた黒刀・烏。黒く不気味に輝く刃は、静かな刃音を響かせ横一線に閃光が走る。

「黒鷲」

振り抜かれた烏。そして、腰を落としたままのワノール。目の前に迫る背鰭のある魔獣の体は、それから暫くして弾き飛んだ。上半身と下半身が二つに分かれて。血が宙に舞い、大地に降り注ぐ。眼を細めるノリーンは、聊か不満そうな表情を浮かべる。

「お前、もう少し周りの事を考えたらどうだ？」  
「ふん……。これでも、最善を尽くしたんだが」  
「そうは見えんがな……」

ノーリンはそう呟き、上半身と下半身の離れた背鰭のある魔獣へと眼をやった。もう動く事もなく、血だけが溢れている。これで、最善なのかと、呆れた様のため息を吐くノーリンは、首を左右に振りワノールの方へと眼をやった。

落ち着いた様子のワノールは、烏を鞘へと収め静かに息を吐く。鞘に収めた烏を腰へと掛けるワノールは、ノーリンの方に体を向ける。そして、その後ろにいる魔獣達を左目で睨む。

「これ以上、この村で無駄に血は流させたくない。今すぐ立ち去れば、命だけは助けてやる」

ワノールがそう言ったが、魔獣達にはその言葉は通じていなかった。魔獣達は一斉に地を蹴り、ワノールとノーリンに向かって来る。呆れた表情のノーリンは、目を見開く。そして、地を蹴ると空に舞う。だが、そんな事にせず魔獣達は二人へと迫る。腰の烏に手を掛けるワノールは、左目で鋭く向い来る魔獣を睨む。

「お主！　ここワシが一撃で済ませる！」  
「フツ……、本当に一撃で済むか、分かんのだな」  
「ならば、巻き込まれても文句は言うな」  
「文句は言わん。お前も、俺に斬られて文句は言うな」  
「……いいだろう。ワシは加減を知らぬ。上手くかわせ」

そう言うと、ノーリンは地上に向かって急速に降下して行く。余裕の表情を見せていたワノールも、その瞬間表情を引き攣らせ背を向け走る。身の危険を感じたのだ。途中、ウールを抱え込み、ひたす

ら走った。不思議そうな表情をするウールは、ワノールに問いかける。

「どうしたんですか？」

その言葉にワノールもすぐに答えた。

「ここにいと、俺達まで巻き込まれる。今すぐ立ち去る！」

ワノールは全力で地を駆けた。ノーリンが降下してくるのが、音で分かった。魔獣達もその事に気付き足を止める。その時、既に魔獣達はノーリンの真下に来ていた。ノーリンもそれを目で確認し、両拳を前に突き出す。

「地の波紋を受けてみるがいい！」

その叫び声とほぼ同時にノーリンが地上へと突っ込んだ。爆音に違い轟音が大地を揺るがし、水に広がる波紋の様に、地面が鋭く突起していく。地面が乾いた音を奏でながら、中心から外へと徐々に波紋を広げる。近くにあった建物は全てその衝撃と、広がる地の波紋により倒壊し、その中心付近に居た魔獣達は、鋭い突起により体を突き抜かれていた。

「ハア……ハア……」

「大丈夫？ あなた」

「ああ……何とか……」

何とかあの波紋から逃げ切ったワノールは、村の外に居た。あの波紋は小さな村を一瞬にして崩壊させてしまったのだ。ワノールもあと少し遅ければ、あの波紋の餌食となっていただろう。



苦しそつに呼吸をするワノールは、右手で汗を拭い、左目で村の方を見据える。広がる土煙と倒壊した家々の跡が無残に残っていた。啞然とするワノールは、深々とため息を吐き、額を押さえながら嘆く。

「奴は……何を考えているんだ……」

眉間にシワを寄せ、眉をピクピクとさせるワノールからは、僅かに怒りが滲み出ていた。ウールはそんなワノールに笑みを見せながら、「まあ、いいじゃないですか」と言った。半笑いを浮かべるワノールは、「また、家を買わなきゃいけない……」と、小さなため息を漏らした。

村の中央には、ノーリンの姿があった。僅かに地上から体を浮かし、酷い有様の村を見て、「うむ……これは酷い……」と、一言。ここまで酷いとは、ノーリンも思っていなかった。

村の外のワノールは、地面から突き出た突起を蹴りで崩して、ノーリンの方を目指していた。一言文句を言ってやろうと、思ったのだ。しかし、幾度破壊しても、前に進めずイライラとする。

「くっそ！ あのやろう！ どう言つつもりだ……」

「まあまあ、そう怒らなくても」

のん気に微笑むウールに、含み笑いを浮かべ頭を抱える。そこに、ノーリンがゆっくりと降り立った。

「おう。どうだ？ ワシの技の威力は」

その言葉を聞くなり、ワノールは額に青筋を立て、引き攣った笑みを浮かべる。拳が僅かに震え、今すぐにキレても可笑しくない。だが、そこは怒りをかみ殺す。後ろにウールがいたからだ。

「てめえ……。ふざけんなよ……」

「ソツ？ 何がだ？」

「何、村を崩壊させてんだ」

「おおつ、その事が。それは、本当にすまんかった。何せ、力加減が」

「加減の問題か！」

怒声を響かせるワノールは、腰の烏の柄を握る。その行動に、苦笑するノーリンは、両手を胸の前に広げていた。

「落ち着かんかい。また、新しく村を興せばいいだろうが」

「簡単に言うな。そもそも、村を破壊する意味は無いだろう」

「仕方ないだろうが！ それに、先に加減が出来んと言った」

「まあまあ、争っていても仕方ありませんよ。それに、命が助かったならいいじゃないですか。村はまた建て直せばいいんですから」

ニコニコと笑みを浮かべるウールが二人の間に割ってはいる。流石のワノールもウールが間に入ってしまった為、怒りを静めるしかなかった。ホツと胸を撫で下ろすノーリンは、静かに地に足を下ろす。改めて辺りを見回す。本当に酷い有様だ。我ながら加減の知らなさにあきれ返ってしまう程だった。

呆れ返るノーリンをしかめっ面でワノールは睨んでいた。そんなワノールに苦笑いを見せるノーリンは、右手で頭を掻き、

「さて……どうしたものか……」

と、ぼやいた。

冷やかな視線を送るワノールは、「知らん」と冷たく言い放ち、腕を組んだままソツポを向いた。そんな二人の様子を見て、ウール

だけがクスクスと笑っていたのだった。

## 第61回 セフィーの想い 族長の悩み

砂漠を抜けたその先にある森の更に奥に存在する小さな村。

それは、風牙族がヒツソリと住まう隠れ里となっている。そして、ここにウインスの姿があった。村の中央にある巨大な岩の上に横になり、青い空を真っ直ぐに見据える。以前は草木に覆われ、空すら見えなかったこの村に、光が戻ったのはフォンのお陰だった。

右手をスツと空に伸ばすウインスは、静かに息を吐き目を伏せる。すると、レイストビルでの事が脳裏に蘇り、すぐに場面が変わり二つの影が映る。そして、牙狼丸を持った自分がそれを振り下ろす。悲鳴がこだまし、血飛沫が舞い散った。

呼吸を荒げるウインスは、体を起し胸を押さえる。蘇った古い過去。既に心の奥にしまいこんでいたその過去が、ウインスを苦しめていた。

「ウインス？ そこに居るの？」

岩の下の方からセフィーの声が聞こえてきた。我に戻るウインスは、首を左右に振り笑顔で返答する。

「ああ。ここにいますよ。何か用？」

「お爺様が呼んでますよ」

「族長が？」

腕を組むウインスは、首を傾げ「何の用だろう？」と、ボソッと呟く。

「早い内に会いに行つた方がいいわよ」

「うん。分か ぶがつ！」

ウインスが身を乗り出したその刹那だった。額に石が命中したのは。額を両手で押さえ、のた打ち回るウインスに、下からセフィーの声が聞こえる。

「返事をする時は、はいでしょ？」

「うがあああつ……。いつてえ〜」

「それじゃあ、すぐに行くのよ」

セフィーはそう言いその場を後にする。額を押さえ岩の上でのた打ち回っていたウインスは、そのままバランスを崩し地上へと真つ逆さまに落下した。地面に追い討ちを掛ける様に頭部をぶつけ、ウインスは悶絶する。声を出す事すら出来なかったのだ。

「うつつ……セフィーの奴……」

痛みに耐えながらそう呟いたウインスは、静かに立ち上がり右手を震わせた。

頭部の痛みも大分ひいた頃、ウインスは族長の部屋の前にいた。深呼吸を二度繰り返して、姿勢を整え部屋に向かい声を掛ける。

「族長。何の用でしょうか？」

「おおつ、ウインス。まあ、入るがいい。ちと話したい事がある」

「話したい……事ですか？」

「うつむ」

眉間にシワを寄せるウインスは、渋々と言う感じで襖を開ける。すると、奥に貫禄のある雰囲気である族長の姿があった。見慣れた族長の姿だが、珍しく威圧感が溢れている。その威圧感にウインスは圧倒され、静かに族長の前に腰を下ろす。

部屋は薄暗い。電気などはこの里には無く、蠟燭ろうそくの火が微かに風で揺れる。部屋の隅の方までは、火の光は届かず、その為薄暗く感じるのだ。緊張感の漂う部屋に、ウインスも自然と表情が強張る。

「それで……お話とは？」

「話と言つのはじゃな。お前の事じゃ」

「お、俺の事……ですか？」

驚きの声をあげるウインスは、複雑そうな表情を見せていた。まさか、自分の事だとは思っていなかったのだ。族長は長く伸ばした白髭を撫で下ろしながら、ウインスを真っ直ぐに見据える。

「ウインスよ。何故、里に戻った？」

その言葉にウインスの表情が更に強張る。

「どうしたんじゃ？ ウインス」

「いえ……なんでも無いです」

少々顔色の悪いウインスに、族長は気付いていた。だが、それに気付かぬ様に族長は口を開く。

「それで、何故戻ってきたんだ？ 忘れ物か？」

「いえ……。俺は……」

「逃げてきたのよね」

襖の向こうからセフィーの声が聞こえた。その声にハツとするウインスは、驚いた様に振り返る。襖の向こうにセフィーの影があり、ウインスが叫ぶ。

「おい！ 盗み聞きなんてしてんじゃねえぞ！」

その言葉に、襖が勢い良く開き、セフィーがウインスに跳び蹴りを見舞う。瞬時に体が反応し、ウインスはそれを右にかわす。昔のウインスなら、確実に直撃していただろう。

少々驚いた表情を見せるセフィーは、右足が床に着くと同時に左足をウインスの顔に向って振り抜く。

「くっ！」

ウインスは右腕でセフィーの蹴りを受け止めた。微かに仰け反ったウインスは、セフィーを睨み付け言い放つ。

「何のマネだ！ いきなり」

「ふん！」

完全に蹴りを受け止めていたウインスだったが、セフィーの力によつて床にねじ伏せられた。

「くっ」

後頭部を床に打ち付け、ウインスは悶えのた打ち回る。見下ろすセフィーは何も言わず、部屋を後にした。結局、ウインスはセフィーが何を言いたかったのか、分からなかった。頭部を押さえムスツとした表情をするウインスは、「なんだったんだ」と不満の声を漏らす。族長は何も言わず腕を組んでいた。

暫く沈黙が続いた。そんな時、ウインスが腰の牙狼丸を目の前に置き、静かに族長の方へ移動させる。

「借りていた牙狼丸をお返しします。それから、これも」

ウインスは懐から黄緑色に光る風魔の玉を牙狼丸の横に置く。その行動に聊か驚いた表情を見せる族長は、ウインスの決意を悟った。その為何も言わず、それを受け取る。頭を下げるウインスは、静かに立ち上がり部屋を出た。

髭を撫でる族長は静かに息を吐き唸り声を上げる。そして、これからどうするかを考えていた。

部屋を出たウインスはそのまま村の中央の岩の上へと移動していた。岩の上で横になり、背筋を伸ばすウインスは、空を見上げたまま大きな欠伸をする。今までの疲れからか、次第にウトウトとし、静かに眠りに就く。

#### 族長の部屋。

床に寝かされる牙狼丸と風魔の玉。二つが触れ合い、風魔の玉が輝きを放つ。それを見据える族長は難しい表情を見せる。そっと牙狼丸に触れ、目を閉じる。族長の手の平に牙狼丸の鼓動が伝わってきた。その鼓動は、ウインスを求め、族長の手を弾く。

「フム……。やはり、お前はあの子を選んだと言っのか……」

そう呟いた時、何処からとも無く声がする。

「みーつけた」

「何奴！」

突然の声に立ち上がる族長だが、襖が勢いよく開かれ、族長の体が吹き飛ぶ。老いた体にその衝撃は凄まじく、骨が砕けてしまったかと思うほどだった。全身に激痛の走る族長に、動ける程の力は残っておらず、顔を上げるのがやっとの状況だ。



その族長の目の前には逆光を浴びる一人の男の姿があった。白衣にボサボサの白髪。眼鏡の淵が光を浴び僅かに光る。

「ようやく見つけましたよ。風魔の玉。私はこれを手に入れる為に、何度ここを訪れたか……」

「貴様……一体……」

「うるさいですね。取り合えず、邪魔です。死んでください」

白衣の男は細長の注射針を取り出すと、族長に向って投げた。注射針は族長の首筋に突き刺さる。言葉を発する事も出来ぬまま、族長の首に刺さった注射針の先から血が噴水の様に吹き出て、族長はその場に倒れた。

血が広がる床を見下ろす白衣の男は、静かに足を進めると、牙狼丸の横に寄り添う風魔の玉を静かに手に取り、不適に笑った。

## 第62回 怒りと憎しみ

岩の上で空を見上げるウインスの耳に聞きなれたセフィーの声が聞こえた。

「ウインス！ お、お爺様が！」

ウインスはセフィーに告げられた。族長が何者かに襲われた事、そして風魔の玉が盗まれた事。その話を聞くなり、ウインスは走り出した。族長の屋敷へ。セフィーの脳裏に不安が過る。また、ウインスが何かしてかしてしまうのではないかと。そんな考えを過らせながら、ウインスの後を追った。

族長の部屋の前には多くの人が集まっていた。既に村中の人々に族長が襲われた事は伝わっていたのだ。ウインスより少し遅れてそこに辿り着いたセフィーは、人混みを掻き分け前へと進む。その時、ウインスの怒声が響いた。

「おい！ い、医者なら、族長を何とかしろよ！」

時々震える声。それは、今にも泣き出してしまうような声だった。人混みの中から姿を見せるセフィーは、医者に掴みかかるウインスを見て涙を目に溜める。既にウインスの目からは涙がこぼれ、医者をつかむ手は震えていた。

「た…頼むよ……。い、医者なら……族長の 爺ちゃんの命を救ってくれよ！」

ウインス本人も知っているはずだった。もう族長は助からないと。それでも、追い続ける様に医者に言葉を投げかける。両親と早

くに他界し、そして祖父である族長とも、早すぎる別れ。それは十四のウインスにとっては酷だった。

涙を流し、医者白衣から手がするりと落ちる。その場に泣き崩れるウインスは、身を微かに震わす。

「……ウインス」

小さく呟くセフィーは、ウインスの方に二歩、三歩足を進める。だが、その瞬間ウインスが静かに顔を上げ、怒りの表情を微かにうかがわせた。そして、セフィーには聞こえた。ウインスが微かに言った言葉、「殺してやる」の一言が。

一瞬、その声にゾツとしたセフィーは、体が動かずウインスに言葉を掛ける事も出来なかった。気付いた時にはウインスが右手に牙狼丸を握り、セフィーの横を素通りする。その時、一瞬だけ見えた表情は怖く、足がすくんでしまう程だった。

その為、誰も出て行くウインスを止める事は無く、自然と道を開けていた。誰もが恐れていたのだ。ウインスの事を。

家の外へと出てきたウインスは、静かに座り込み左手を地面に付ける。呼吸を整え、ゆっくりと瞼を閉じ、肌に風を感じ葉音に耳を澄ませる。神経を研ぎ澄ませるウインスは、風の乱れを感じ取った。そして、それが風魔の玉のある場所であり、族長を殺した奴のいる所だ。

怒りに奥歯を噛み締めるウインスは、力一杯地を蹴り、風の乱れを追った。

足の裏に集めた風が、地に触れ爆発する。その度、小さな爆音が轟き、地面が砕けた。風がウインスの顔を伝う。短髪の黒髪は逆立ち風で微かに揺らぐ。

「……やる。……してやる。殺してやる！」

そんな言葉を口走るウインスの顔は恐ろしく、怒りで完全に我を忘れていた。眉間に寄ったシワに、目付きは鋭く、息遣いは荒い。噛み締めた歯の間から漏れる吐息に、荒々しい声が混ざる。

その時、ウインスの視界に見覚えのある一人の男の姿が入った。それは、忘れようにも忘れられない男の姿だった。薄汚い白衣とボサボサの白髪。ずれ落ちそうな眼鏡に、気色悪い顔つきの男だ。

そいつの目の前へと着地するウインスは、男の右手に持った風魔の玉を見据え静かに呟いた。

「お前が……殺した……。お前が……族長を！」

おぞましい表情をし、ウインスはそう叫ぶ。そのウインスの表情を目の当たりにする白衣の男は、気色悪く笑みを浮かべると、靴の踵を軽くカツカツと二度鳴らし、ずれ落ちそうな眼鏡をゆっくりと掛け直す。

「誰かと思えば、あなたですか？ 風牙族の」  
「殺してやる！ 殺してやる！ 殺してやる！」

怒りを吐き出す様にそう言い退けるウインスは、勢いよく地を蹴る。左手に持った牙狼丸を、腰の位置に構えるウインスは、左手親指で鐳を弾き、鉄の擦れる音を僅かに響かせながら右手で牙狼丸を抜く。牙狼丸が鞘から抜ける瞬間、微かに火花が散りウインスの顔の前ではじけた。

「オヤオヤ。随分と頭に血が昇ってますね」  
「黙れ！ 黙れ黙れ！」

不気味な笑みを浮かべる白衣の男に鋭く牙狼丸を振り抜く。鮮やかな閃光を横一線に引く。白衣の男はそれを軽快にかわした。牙狼丸の切っ先だけが、白衣の男の白髪を掠めただけだ。ハラハラと宙を舞う白毛を挟み、睨み合う。

不適に笑う白衣の男は、左手を白衣の下へと潜らせると、注射針を指に挟み取り出す。先端が一瞬煌き、白衣の男が左腕を振る。白衣の男の左手から放たれた注射針を、ウインスは牙狼丸で弾く。

「これで……これで、族長を！」

怒りに拳を震わせる。

「怒ってしまいましたか？」

「ウアアアアッ！」

もう言葉にならない奇声を発するウインスは、目尻から薄らと涙を零しながら牙狼丸を振り抜く。怒りに任せ無我夢中で牙狼丸を振り回すが、刃は一度たりとも白衣の男を捉える事は無かった。

何度も空を斬る牙狼丸は、虚しく風音だけを微かに鳴らす。緩やかな風だけが、白衣の男の体にぶつかり、薄汚い白衣の裾が微かに揺れる。

次第に苛立つウインスは、更に力を込め、牙狼丸を振り抜く。だが、白衣の男に刃は届かない。届きそうでも届かぬ距離。それは、頭に血の昇ったウインスにとってとても長い距離の様な錯覚を与えていた。

「フー……フー……」

奥歯を噛み締め肩で息をするウインス。既に体中ボロボロで、いたる所から血が滲み、体力を削っていく。ジワジワと削られる体力

は、目には見えないが、確実にウインスの体を蝕んでいた。

「ウガアアアッ！」

しかし、怒りで我を見失っているウインスは、その事に気付くはずは無く、右足を踏み込み力一杯牙狼丸を振り抜く。これが、白衣の男に届かぬとも知らず。

「！」

ウインスは驚愕する。踏み込んだ右足に力が入らず、体を支える事が出来ず地に崩れ落ちたのだ。それに連鎖する様に、右肩から激しく地面に倒れ、右頬を地に打ち付けた。

「うぐっ！」

もう体を支える力は無かった。頭では分かっていた。倒れると。

だが、腕が言う事を効かず、肩から地面に倒れてしまった。

全身に力が入らない。体が重く、両足が僅かに痙攣している。それでも、ウインスは顔を上げ、白衣の男を睨んだ。

「ふぐーっ……ふぐーっ……」

「そんな怖い顔をして……。良いですよ。その怒りに満ち溢れた眼は。ですが、私も遊んでいる程暇じゃないのね。そろそろ御暇おいとまさせていただきますよ」

不適に笑う白衣の男は、ウインスを相手にせず背を向け歩き出す。奥歯を噛み締めるウインスは、立ち上がるかと試みるが、手も足も全く動かなかった。

「くっ！ 待て！ 俺と 俺と戦え！」

そんなウインスの叫び声だけが、森の中にこだました。

第63回 二カ月後に…

その日、ウインスは里に戻ってこなかった。

一人、族長の隣りに座るセフィーは、祈る様に手を合わせる。ウインスの無事を祈っていたのだ。両親が亡くなり、結婚を約束した人が亡くなり、族長である祖父が亡くなった。これで、もしウインスが死んでしまったら……。そう考えると、涙が溢れた。

族長の横で声を殺し泣くセフィー。声を出して泣いてしまうと、全てが崩れてしまう様な気がした。ウインスが無事だと言う希望が消えてしまいそうな。そんな気がした。だから、必死に声だけは噛み殺し、大粒の涙だけを流した。

翌朝。

身支度を済ませたセフィーはヒツソリと里を出た。朝まで帰らなかったウインスが心配だったのだ。その為、ある程度の医療道具と携帯食を持ち、森を走り回っていた。

朝早いと言う事もあり、森を静寂が支配している。その静寂を破る様に、セフィーの荒々しい足音が響く。不安定ながらも足の裏に風を集め、地を蹴る度に土を舞い上がらせる。長い黒髪が逆風で大きく靡く。額から薄ら汗を滲ませるセフィーは、暫くして走って足を止める。

「ウインス！」

大声を張り上げる。セフィーの目の前には、ボロボロの姿のウインスが立ち尽くしていた。周囲一帯の木と言う木が無残に切り刻まれ、切り株と丸太、それと木の屑が散乱している。ウインスの足元からは、荒々しい風が吹き上がり、切り刻まれた木の葉が激しくウインスの周りを渦巻く。



「ハア…ハア……」  
「ウインス？」

息を荒げるウインスに、歩み寄ろうと右足を一步踏み出したセフィーだが、すぐに足を止め不思議そうな表情をする。そんなセフィーの方に、ゆっくりとウインスが体を向けた。その刹那、セフィーの脈は早まり、呼吸が苦しくなる。辺りを飲み込んでしまう様な殺気が、セフィーの全身に押し掛かったのだ。

「う……ウイン……ス……」  
「……俺は……」

ウインスが静かに口を開いた。だが、セフィーにその言葉を聞き取る程の時間は無く、意識は薄れ地に崩れ落ちた。

そして、セフィーが目を覚ました時には、ウインスの姿はそこには無く、無残な木々の残骸だけが残されていた。涙を浮かべるセフィーだが、すぐに涙を拭き立ち上がる。こうなる事は予測していたのだ。それに、ここで泣いている暇は無い。何としてもウインスを止めなくてはいけないのだから。

静かに心を沈めるセフィーは、目を閉じ右手を胸に当てる。ゆっくり息を吸い、静かに吐き出す。そして、悲しみを押し殺し、セフィーは走り出した。

闇夜の中、アルバー大陸の旧都市デイバスター。既に廃墟と化し、人の気配が無い。そんなデイバスターの中央に聳えるアルバー城。その屋上にゼロの姿があった。廃墟と化した町を見回し、静かに微笑む。月光も無い暗がりの廃墟の中に人影を見たのだ。それが誰かはハッキリと見えなかったが、ゼロには大抵の予想はついていた。

「さて……彼は果たしてどちらに着くのかな？」  
「何の話だ？」

丁度屋上に上がってきたヴォルガが不思議そうな顔をして問う。  
笑みを浮かべるゼロは、黒髪を夜風に靡かせ、ゆつくりとヴォルガの方へと顔を向ける。目を細めるヴォルガは、静かにゼロの方へと足を進め、もう一度問う。

「それで、何の話をしているんだ？」

「フフフツ……。今後の事についてだよ」

「今後の事？」

「まあ、時期に解るさ」

そう一言延べゼロがもう一度不適に笑う。ヴォルガは眉間にシワを寄せたまま首を傾げていた。

その頃、アルバー城の一室にリオルドとエリオースとガゼルの三人が集まっていた。リオルドは自分の剣を壁に立てかけ、腕を組んだまま椅子に座っている。エリオースはつまらなそうに、天井にぶら下がり、ガゼルはリオルドの向かいに座っていた。沈黙漂うその中で、初めに口を開いたのはエリオースだった。

「リオルド。私達を呼んどいて話さないの？」

「……」

「リオルド？」

怪訝そうな目付きをリオルドの方に向ける。腕を組んだまま一言も喋ろうとしないリオルドは、鋭い目付きでエリオースを睨むと、「黙ってる」と一言。その言葉に押し黙るエリオースは、チラリとガゼルの方に目を向ける。イライラとするガゼルは、右足を揺すり

ジツと怒りを堪えている様だった。

その時、部屋の扉が開かれゼロとヴォルガ以外の十二魔獣が勢ぞろいした。ジャガラ、デイクシー、レイバースト、ロイバーン、クローゼルの五人。合計八人が部屋の中に集められた。そして、ようやくリオルドが重い腰を上げ、静かに口を開く。

「ようやく、集まったな」

「どう言う事？ リオルド」

不思議そうに問うエリオースの言葉を無視し、リオルドは更に言葉が続ける。

「これから話す事は、全て俺の考えた事だ。俺の考えに乗る気の無い奴は聞かなくてもいい」

「……お前の事だ。ゼロに内緒で何処かを攻め落とすつもりだろうか？」

ジャガラが黒マントを揺らしそう呟く。その言葉に、リオルドは不満そうな顔をする。

「それで、何処を攻め落とすんだ？ 事と次第によっちゃ抜けさせてもらうが」

ガゼルがそう言う。レイバーストとデイクシーはリオルドが何を考えているのか分からず、怪訝そうな目を向けていた。その視線に気付いていたリオルドは、不適に笑みを浮かべ口を開く。

「攻め落とすのは、残り三大陸の城だ」

「フツ……。何をバカな話を。俺達はレイストビルすら攻め落とす事が出来なかつたんだぞ？」

「あの時は、邪魔が入った。だが、今回は違う」

ジャガラという言葉にそう答える。不思議そうな表情を見せるジャガラに、ロイバーンは不適に笑いながら口を開く。

「そうですね。今回は邪魔が入りましたからね。しかし、今回は邪魔が入らないとは限りませんよ?」

「その心配は無い。今回、ゼロとヴォルガの二人にはこの作戦は伝えていない。あの二人が居なければ邪魔される心配も無い」

「確かにそうだな。だが、前回の様に奴らが邪魔に入ったらどうなる?」

デイクシーが口を挟んだ。一瞬、奴らとは誰だと言う空気になるが、ジャガラがすぐに口を開く。

「奴らとは、俺等が戦った連中の事か?」

「そうだ。連中が、また邪魔に入ったらどうするつもりだ?」

「フツ……。あんな連中は計画の支障にはならん」

リオルドがデイクシーに対しそっぴい退けると、クローゼルが不思議そうに口を開く。

「それで、それは、いつ実行するんだ?」

「実行日は、二カ月後だ」

「二カ月後? どうして一ヶ月も時間を置くんのだ?」

レイバーストが口を開く。そんなレイバーストに、ジャガラが答える。

「準備期間だろ? それぞれ、移動しなきゃならんし、下準備も色

々あるからな」

「ジャガラが言った通り、二ヶ月は準備期間だ。俺の作戦に乗るものは準備を開始しろ」

リオルドの作戦に反対するものは居なかった。皆、ゼロのやり方には少なからず不満があったのだろう。それぞれが、二カ月後に向け準備を開始し始めた。

## 第64回 夜空の星

東の大陸フォーストに聳えるリバール山脈にある小さな村。

その近くの茂みにカシオはいた。

ボロボロの服装。

変色した凝血が無数、体に付着していた。

異臭を漂わせるその体は、既に死んでいるのではないかと思わせる程だ。だが、微かに息があり、胸が小さく上下に動く。首からは、割れたゴーグルを掛けている。

弱々しく瞼を開く。薄らと視界へと差し込む日差しは眩しく輝いて見える。あれから一週間。飲まず食わずで何とか生きながらえていた。傷が痛む。体中アチコチ痛む。だが、一番痛むのは胸の奥だった。

そして、考える事はセラの事だ。セラは無事だろうかと思い、セラの顔を思い出す。あの笑顔が、二度と見られなくなるんじゃないとか、思うと悲しくなった。自分の傷の痛みよりも、セラを失う事の方が辛く苦しい事だと、カシオは思う。だが、すぐに瞼が重くなり、ゆっくりと視界が暗くなった。

「あいつは……まだ、動かないのか？」

あの村から少し遠ざかった所にある清めの泉ので、焚き火を見据えるバルドが静かにそう問う。訝しげな表情を見せるティルは、焚き火の前に腰を下ろすため息混じりに答える。

「ああ。全く動く気配が無い」

「これから……どうするつもりだ？」

薪を焚き火の中へと放り込みながら、バルドは尋ねる。揺れる焚き火を見据えるティルは、鼻から静かに息を出すと、遠くを見据える様な目をして答える。

「さあな……。どうするかな……」

ボンヤリとした声のティルに、バルドは眉間にシワを寄せる。しかし、すぐに表情を変えると、焚き火へと目を落とす。静寂が辺りを包み、鳥たちの囀りだけが響き渡る。揺れる焚き火は、時折火の粉を舞い上げた。その火の粉は、風に吹かれてすぐに消えるが、何度も何度も舞い上がる。

それから、日は沈み夜となる。多くの星が夜空に煌く。冷たい夜風が吹く中、ティルが静かに立ち上がる。昼間とつて来た小動物の肉を焼くバルドは、立ち上がったティルの顔を見た。

「どうか……。したのか？」

「カシオの様子を見てくる。あと、セラの方も覗いてくる」

「セラ……。あの娘か？ 何故、見に行く必要がある？」

「もとを辿れば、俺達がセラを怪我させた様なものだ。責任は取らねばならんだろ？」

困った様な申し訳無さそうな表情を見せるティルの言葉に、「そうか……」と答えたバルドは、静かに視線を落とした。バルドも自分なりに責任を感じているのだろう。その後、口を開く事は無かった。

静かな森の中を進むティルは、カシオの姿が見える所で足を止める。昼間と同じ所で、同じ様な形のまま横たわり動いた形跡は無い。呆れた様なため息を漏らすティルは、遠回りをして、セラの家の裏へと移動した。

部屋には薄らと明かりが点いている。セラは起きている様だが、

とても静かだ。辺りを警戒するティルは、こっそりと窓から中を覗く。人の気配は無い。セラは二階の自室に居る様だ。その為、ティルは窓を静かに開けると、中へと不法侵入する。そして、足音もたえず階段を上がった。

二階まで上がったティルは、ふと足を止め思う。『これは、犯罪じゃないか?』と。しかし、ここまで来て引き返すのもなんだつた為、足をゆっくりと進める。そして、手前の部屋の前で足を止め、そっと戸をあけた。そこには、セラがいた。着替え中の一。セラと目が合い、変な間が空く。

「……………」  
「……………」

手で胸を隠すセラは、徐々に顔が真っ赤になる。今の状況を悟ったのだろう。だが、悲鳴は上げない。近所の人が集まらない様にセラが気を使ったのだろう。

一方のティルも、ようやく事の重大さに気付き、「す、すまん!」と、赤面しながら戸を閉めた。女性の裸を見たのは、幼い頃以来だろう。女性と言っても、妹エリスの裸だ。なんとも思っはらずも無い。だが、今回は心拍数が上がり、ドクドクと鼓動が早まる。耳まで真っ赤にするティルは、戸の前に座り込み恥ずかしさに俯く。

「あの……………ティルさん。まだ居ますか?」

戸の向こうからセラの声がする。その声に俯いたままのティルが、少しだけ震えた声で返事を返す。

「ま、まだ居るが……………その……………すまなかった」

「いえ……………。気にしないで下さい。見られて……………減る物じゃないですから……………」



「そ、そう言う……問題ではないのだが……」

未だ頬の赤いティルは、困った表情をし、鼻の頭を掻く。そんなティルに、セラの声が戸のすぐ傍から聞こえる。

「カシオさんは……無事ですか？」

「アイツは……無事だ。だが……」

ティルはセラに全てを話した。あの日以来、カシオが飲まず食わずでいる事。その場から動かない事。村の人達に石をぶつけられた事。何もかもを話した。戸の向こうは静かで、セラは沈黙を守ったまま話を聞いている。だが、話が終わる頃、ティルは気付いた。セラが啜り泣きしている事に。

「どうかしたのか？」

「……いえ……。私のせい……」

「セラのせいじゃない。俺達の方こそ、君を巻き込んでしまった。本当にすまない」

奥歯を噛み締め謝るティルは、悔しそうに拳を床に押し付ける。少しだけ間が空く。静寂に、耳を澄ませば聞こえてくる。虫の声。静かで清らかなその声をバックに、セラが静かに口を開く。

「……ティルさん。謝らないで下さい。ティルさんに謝られると、私はどうしたら良いんですか？ 私がした事は間違っていたんですか？」

少しだけ震えた声。目を伏せるティルは、目を開き立ち上がると、ドアノブを握る。そして、一呼吸置き、戸の向こうのセラに言う。

「間違っていたとは言わない……。だが、俺達は君に迷惑しか  
「私は一度だって迷惑だなんて思った事はありませんよ」

ティルの言葉を遮る様にセラの声が聞こえた。押し黙るティルは、これ以上迷惑は掛けられないと、思ったが、最後にセラに頼む。カシオの事を。

「奴をお願いしてもいいか？」

「行ってしまうのですか？」

「俺はやらねばならぬ事がある。北にいる友を、これ以上待たせる訳にはいかないんだ」

「わかりました。私で良ければいつまででも面倒見てあげます」

「すまない……」

最後にティルは小さな声で謝った。その声に、セラは少し悲しげな表情を見せた後、ニコリと笑みを浮かべて、戸の向こうのティルに言う。

「頑張ってください」

と。

ドアノブから手を放し、戸に背を向けるティルは、その言葉を背に受け静かに部屋の前を後にした。床の軋む音が遠ざかっていくのに、セラはティルが部屋の前からいなくなったのを悟る。そして、窓から外を眺め、静かに夜空を見上げた。

## 第64回 夜空の星（後書き）

大分更新が遅れてしまい、申し訳ありません。  
時間は掛かると思いますが、きっちりと更新していきたいと思  
います。

これからも、よろしくお願いします。

## 第65回 立ち去る者と待つ者

テイルが茂みへと入っていた後、バルドは一人焚き火を見据えていた。静かに揺れる炎が、火の粉を舞い上げ、タキギがバチツと弾け炎の中で崩れ落ちる。何も言わず静かにタキギを投げ入れるバルドは、おもむろに立ち上がると、ゆっくりと茂みの前まで足を進めた。茂みの前で足を止めるバルドは、暫し間を空け茂みの中へと入っていった。

暫く茂みの中を進むバルドが足を止めたのは、カシオの目の前だった。既に意識のハッキリとしているカシオは、バルドの姿を見ると、怪訝そうな表情を一瞬見せ静かに問う。

「何だよ……。俺の命でも……奪いに来たのか？」

弱々しく掠れた声。飲まず食わずだったせいだろう。目も虚ろで、灰色の瞳が少し濁っている様に見えた。そんなカシオを見下すバルドは、「フン」と鼻で笑うと静かに口を開く。

「今の貴様の命は、奪う価値など無い」

「ヘッ……そうかい……。なら、何しに来たんだ……」

「忠告だ」

「忠告……だと？」

カシオが聊か不思議そう表情を見せると、バルドはカシオに背を向け答える。

「お前……また、あの娘を傷付けるつもりか？」

「うるせえ……。お前には……関係ないだろ……。俺がどうしよう  
と……」

「お前が、ここで死のうと俺には関係ない。だが……少なからず、悲しむ者もいる」

鋭い眼差しをバルドの方に向けるカシオは、「何が言いたい」と少しだけ強い口調で言う。だが、バルドは何も言わず歩き出し、静かにその場を後にした。実際、カシオ自身気付いていた。バルドの言いたかった事に。その為、カシオは唇を噛み締めると、目を伏せ悔しそうに拳を握った。

清めの泉の前へと戻ったバルドに、一足先に戻ってきていたティルが不思議そうな顔で声を掛けた。

「何処に行つてたんだ？」

焚き火の前のティルに目を向けるバルドは、何も言わずに足を進める。ため息を漏らすティルは、焚き火の前に腰を下ろすバルドを見据え、呆れた声で言う。

「散歩に行くなら、俺が戻ってからにしる。あと少しで焚き火消えてたぞ」

「それなら、また火を熾せばいい」

「あのな……簡単に言つなよ」

「……」

だんまりとするバルドは、ティルを無視する様にその場に横になった。呆れるティルは、深々とため息を吐くと、「俺も寝るか」と小さく呟き、そのまま横になり、目を閉じた。

カシオの横たわる茂みの中。

そこに、セラの姿があった。寝巻きの為、少しだけ薄着のセラは、夜風に身を震わせる。カシオを庇い、背中に弾丸を受けた為、まだ少しだけ背中が痛む。それでも、セラはゆっくりと足を進めていた。

吐く息が白く凍りつく。体が冷え、手の指先の感覚が少しだけなくなっていた。体の震えを押し殺す様にして、カシオの前までやって来たセラは、口を開く。

「カ、カシオさん……」

少しだけ震えた声。それに、カシオは少しだけ目を開き、静かに答える。

「何……してんの？」

「わ……私は……」

「悪い……俺……行くよ」

「えっ？」

カシオの突然の声に驚くセラ。頭が少しだけ混乱した。そして、セラが「何処に？」と、聞くより早く、カシオが静かに答えた。

「ここに居られちゃ……迷惑だよ……」

「えっ……あの……そんな」

「分かってるって……。セラの怪我は……俺のせいだから……医療費は置いていくよ……」

セラの言葉を聞かない様に、カシオは言葉を繋げて行く。そして、ゆっくりとカシオは体を起した。全身の傷が疼き、動くのがキツイが、カシオはそれを堪え立ち上がる。立ち眩みを起し、一瞬カシオ

の体が傾く。セラは駆け寄ろうとしたが、カシオは右足を踏み込み何とか倒れるのを堪えた。

呼吸の荒いカシオは、セラに背を向け左手を大木に付く。こうしていないと、体が倒れてしまいそうだった。そんなカシオの後姿を見据えるセラは、切なそうな瞳を向ける。

「それじゃあ……。俺は」

歩き出そうとしたカシオだが、セラがそのカシオの背中に抱き付いた。傷が僅かに疼く。奥歯を噛み締め、それを堪えるカシオは、そつとセラの手に触れる。

「ごめん……」

「私……待ってますから……」

その言葉に、カシオの返事はない。腕をそつと解いたカシオは、セラの顔を見る事無く真っ直ぐに歩く。フラフラと足を引き摺り歩むカシオの背中を、セラはジツと見詰めていた。

傷の痛みに耐え、茂みの中を進むカシオは左手で脇腹を押さえ、口角から血を流す。治りかけだった体の傷が悪化していたのだろう。全身に走る激痛に、その場に蹲るカシオは、右膝を地に着き口を大きく開け呼吸をする。

「ウツ……クツ……ハア…ハア……」

苦しそうな呼吸を繰り返すカシオの口から、血が零れ落ちた。視界が次第に薄らとして来る。それでも、カシオは奥歯を噛み締め、ゆっくりと足を進めた。

清めの泉の傍で焚き火を囲むティルとバルド。

二人とも黙り込み焚き火を見据える。風で時折揺れる炎を見詰める二人は、茂みの方から聞こえた妙な葉音に、目の色を変え武器を手に取った。

ティルは天翔姫を細い刃の剣へと変え、バルドは刃の大きいナイフを右手に逆手で持つ。二人とも、いつでも斬り掛かれる様な体勢をとり、真っ直ぐに茂みの方を睨む。

二人の間に流れる沈黙。吹き抜ける風だけが、葉を揺らしサワサワと音を奏でた。静かに呼吸を繰り返すティルとバルドは、摺り足で距離を縮めていく。ある程度距離が縮まり、二人が足を止める。それと、ほぼ同時だった。茂みからカシオが倒れてきたのは。

「カシオ！」

ティルは天翔姫を地面に刺し、カシオの体を素早く受け止める。少しだけ驚いた表情を見せるバルドだが、すぐにナイフをしまい焚き火の方へと歩き出す。カシオの体を支えるティルは、天翔姫を片手で元に戻すと、焚き火の方へとカシオを連れて行く。

「お前、何でここに」

「何でって……俺が居なきゃ、お前等寂しいだろ？」

少しだけ笑みを見せるカシオに、ムスツとした表情を見せるバルドは、何処からか木の実を取り出し、カシオの方へと投げつけた。それが、丁度傷口に当り、カシオは「ぐおっ」と苦しそうな声を発し、その場で動けなくなる。

「お、お前、何してるんだ。こいつ、怪我人だぞ」

「関係ない……」

「あのな……」



呆れた様な表情をするティルだが、バルドはそれを見ず、二人の方に背を向けた。

蹲るカシオは、右手でバルドの投げた木の実を取り、小さな声で「ありがとう」と言った。その声はティルにしか聞こえておらず、ティルは不思議そうに首を傾げる。苦しそうな表情を見せるカシオは、手に取った木の実を口に運び、一口食べ「傷にしみる」と、小さく震えた声で言った。さすがにその声はティルにも聞き取れなかった。

少しでも栄養を摂取したカシオは、その後すぐに眠りに就いた。そんなカシオを見据えるティルは、聊か不思議そうな表情をし、バルドの方に声を掛ける。

「お前、さっきこいつに会いに行ってただろ？」

「何の事だ？」

「何を言ったか知らないが、よかったよ。こいつが動いてくれてよ」

「……俺は知らんぞ」

ボソッとバルドはそう言い放った。

## 第66回 白龍香の記憶

グラスタール城の屋上。

咲き乱れる真つ白な花、白龍香の中心に立つフレイスト。風がオレンジブラウンの髪を美しく揺らす。

もうすぐ冬だと言うのに、花弁を枯らす事無く咲き誇る白龍香。時折吹く強風に幾枚の花弁を舞い上がらせ、雪の様に美しく静かに町へと降りそそぐ。

この時期になると、毎年このような現象が起き、レイストビルに暮す人々はこれを、『冬の始まり』と呼んでいる。当然、その言葉通り、この白い花弁が止んだ時、レイストビルに冬が訪れるのだ。だが、白龍香の花弁は全て散らず、冬の間も綺麗に花を咲かせている。年中花を咲かせる白龍香は、まるでこの国を見守っている様にも見えた。

空に舞う白い花弁に目を奪われるフレイストは、ふと自分が涙を流している事に気付いた。無意識の内に流した涙を、右手で拭うフレイストは父カーブンの事を思い出す。父もよく屋上に白龍香を觀賞しに来ていた。父を思い出したのは、きっとそのせいだろう。

自分も少し父に似てきたと思い、薄らと笑みを浮かべた。そんなフレイストに聞き覚えのある穏やかな声が聞こえる。

「フレ……………フレイス……………フレイスト」

自分を呼ぶ声に不意に振り返ったフレイストは、目の前に居た人物に驚愕する。そこに居たのは、死んだはずの父カーブンだったのだ。

「カ、カーブン様！」

驚きの声を上げるフレイストの頭の中は混乱する。死んだはずのカーブンが何故、この様な場所にと。戸惑うフレイストに、カーブンは暖かく優しい笑みを見せると、静かに口を開いた。

「驚かせてしまったようじゃな」

「な、何で」

「まあ、そう驚くでない。今から説明する」

落ち着いた様子 of カーブンに対し、困惑気味のフレイストは眉間にシワを寄せ、怪訝そうな表情を見せる。

「そう怖い顔するでない。これは、白龍香が見せる記憶の様なモノじゃ。実際に、ワシは死んでおる」

「どづいつ……事ですか？」

相変わらず怪訝そうな表情を崩さないフレイストに、カーブンも少しだけ困った表情を見せた。

「頭の硬い奴じゃのう」

「カーブン様に言われたくありません」

「相変わらずじゃな。それより、実の父を、何故名前で呼ぶのじゃ？」

「あなたは、国王じゃないですか……」

「今は、ただの白龍香の記憶だ」

少しだけ寂しそうな顔をするカーブンだが、すぐに笑みを浮かべる。フレイストはいかんせん信じられないといわんばかりの目で、カーブンを見据え、ため息を吐く。そのため息を聞くなり、カーブンは複雑そうな表情をする。

「フレイスト……。まさか、兵士達の前ではため息を吐いてないだらうな？」

「私とて、今は一国の王です。兵士達の前でため息など吐きませんよ」

「なら、いいんじゃないが……」

不安そうなカーブンに、フレイストは少しだけ笑みを零す。何と無く嬉しかった。久し振りに父の顔が見れて。少し浮かれ気味のフレイストに、カーブンも少しだけ嬉しそうな表情を窺わせた。

「それで、何故カーブン様が？」

「おおっ……。そうじゃったな。実は、ワシがここに居るのはな。

白龍香のお陰なんじゃよ」

「白龍香の？ どういうことですか？」

眉間にシワを寄せるフレイストに、少しだけ自慢げな表情を見せるカーブンは、得意げに笑みを浮かべ答える。

「お前や、他の者は知らんと思うが、白龍香には別の呼び名があるんじゃないよ」

「白龍香に……。別の呼び名が？」

「そうじゃ。その名も、“記憶花”じゃ。その名の通り、死んだ者の魂を記憶する花じゃ」

「死者の魂を記憶する花ですか？ でも、それじゃあ、何故今まで僕はその死者に会えなかったんですか？」

「死者の魂がこうして現れるのは、この白龍香の花弁が舞う時期だけじゃ」

のん気にそう述べるカーブンに対し、少々焦った様子のフレイストが慌てた声で言う。

「えっ、それじゃあ、カーブン様はすぐに  
「もちろん、すぐに消えてしまう。だから、これだけは伝えておこ  
うと思ってるな」

「これって、白龍香の事ですか？」

「うむ」

「もっと他に話す事があるでしょ？ 普通は……」

啞然とするフレイストに、大声で笑うカーブンは、「まあ、一年  
後にまた会えるんじゃない。気にする事はない」と、明るく言う。その  
言葉に、フレイストはあんぐりと口を開け、目を細めてカーブンを  
見据える。

「ど、どう言う事ですか！ すぐ消えるんじゃない」

「そうじゃよ。すぐに消えてしまう。だが、またこの時期が来れば、  
白龍香の記憶から解き放たれて現れることが出来るんじゃない」

「そ、そそ、それじゃあ……」

「来年になれば会えるというわけじゃ。ついでに、ワシは毎年リュ  
ーナに会っておったぞ」

その言葉に目を丸くするフレイストは、少しだけ唇を震わせ、徐  
々に目尻を吊り上げ怒声を響かせる。

「ど、どど、どという事ですか！ 何で、カーブン様だけ母さんに  
！」

先程、カーブンが言ったりユーナとは、フレイストの母の事だっ  
たのだ。

そんな怒りを滲み出すフレイストに対し、カーブンは「フオッフ  
オッフオッフ」と、上機嫌な笑い声を吐く。その態度に、更にフレイ

ストは声を張り上げる。

「笑ってないで、私を母さんに会わせて下さいよ!」

「それは 無理じゃ」

「ど、どう言う事ですか!」

「実はのう、去年枯れてしもたんじゃよ。リユーナの魂を記憶した白龍香が」

その言葉に愕然とするフレイストは、両肩を落とす小刻みに肩を震わせる。泣いているのだと思ったカーブンは、少しだけ悪い事をしたと思い、落ち着いた様子の声で謝った。

「すまんのう。リユーナがどうしてもお前には秘密にしておいてくれって言うもんじゃからな」

少しだけ、フレイストは悲しかった。母が、会うのを拒んだことが。そのフレイストの気持ち伝わったのか、カーブンが優しく声を掛ける。

「リユーナはな。お前と会えば、別れが辛くなるからと言ってな…」

…」

「それでも、私は母さんと話したかったです……」

「まあ、そう言うでない。リユーナだって、考えに考え抜いた末の結論だ。辛かったと思うぞ」

それでも、一目位は母と会いたかった。もう母の顔すら薄らとしか覚えていないが、それでも。

奥歯を噛み締めるフレイストは、静かに肩から力を抜くと、ゆっくりと口から息を吐き、顔を上げた。カーブンの方へと向けられたフレイストの顔は、笑みを浮かべていたが、その目は少し寂しそう

だ。無理に笑みを作っているのだろう。

「分かってます。母さんは」

少しだけ間を空け、フレイストは自分に言い聞かす様に言う。

「母さんは優しい人です。きっと、私に迷惑を掛けたくなかったの  
でしょう。母さんらしいです」

「お前……」

「さあ。そろそろ行くよ。父さん」

フレイストは少しだけ強張った笑みを見せ、カーブンに背を向けた。その背中を見据えるカーブンは、何の言葉も掛ける事が出来なかった。屋上から立ち去るフレイストの背中を見据えるカーブンの背後から、女性の声が聞こえてくる。

「随分とフレイストには厳しいんですね」

「リユーナ……」

白龍香の花弁舞うその奥に薄らと見える影。やや低めの身長に、滑らかなウエーブの掛かったグリーンの髪。それは、美しい顔立ちの女性だった。寂しげな黒い瞳が、僅かに潤む。

## 第67回 ブラストの考え

東の大陸フォースト王国首都ブルドライに、ティル達三人は戻ってきていた。

カシオもようやく歩ける程度まで回復したが、ブルドライに戻ってくるまで五日も掛かってしまった。そんなボロボロの三人を出迎えたのは、数人の兵士達で、すぐにお城へと案内された。

疲れの取れぬまま玉座の前へと連れてこられた三人は、不満そうなオーラを漂わせ玉座の前のブラストを睨んでいる。特にバルドは鋭い目付きでブラストを睨み、今にも斬りかかって行きそうだ。

そんな三人の視線に、穏やかな笑みを見せるブラストは、三人の方へと歩み寄り口を開く。

「まあ、そう怖い顔をするな。全員無事で何よりだ」

随分とのん気な態度のブラストに、ティルは額に青筋を立てる。

「何が無事で何よりだ……。そもそも、お前が」

「そうカリカリするな。老けるぞ」

「老け顔のあんたには言われたく無いよ」

ブラストの言葉に、随分と大人しめのカシオが皮肉たつぷりにそう言った。だが、ブラストは気にしていない様で、「そりゃそうだ」と言い大笑いする。呆れるカシオは、ブラストに皮肉を言っても無駄だと悟った。

穏やかに笑ってみせるブラストは、軽くティルの右肩を叩く。啞然とする三人の冷たい視線を浴びるブラストも、流石に空気を読んだ。



「悪い悪い。それより、大切な話がある」

やけに真剣な顔付きのブラストに、三人は息を呑み真剣な眼差しを向ける。だが、この緊迫のムードをブラストが一瞬にしてぶち壊す。

「腹減ったし、飯にするか」

真剣だった顔付きはニヤケ顔に戻り、三人は突然の事にその場はずっこけた。

「大切な話があるんじゃないのか！」

キリツと引き締まった表情でテイルがそう怒鳴るが、ブラストは気にせずに部屋を移動する。呆気にとられるテイルの左肩に、カシオは右手を乗せて静かに呟く。

「諦める。あいつには何を言っても無駄だ。そもそも、あいつは」

ようやくカシオらしく、舌が回り始めた。早口で大量の言葉を発する。しかし、テイルもバルドも全く相手にはしなかった。

「どう思う。ブラストの奴」

「さあな……。得体が知れないのは、いつもの事だ」

カシオを無視して、テイルとバルドは話を進める。黒髪を掻き揚げるテイルは、額を押さえたまま眉間にシワを寄せた。何かトンデモナイ事を、ブラストが考えている様な気がした。もちろん、そう思ったのはテイルだけではない様だ。

「何かさ。俺、とてつもなく嫌な予感がするんだけど……。俺だけかな？ テイルはどう思うよ」

先程まで長々と一人で喋っていたカシオが、突如テイルへと話を振る。ボンヤリとしていたテイルは、軽く「ああ」と相槌を打つ。その気の無い返事に、カシオはムスツとした表情を見せる。

「なあ、適当に返事してないか？」

「そうだな」

腕組みをして考えるテイルは、自然とそんな言葉を口走った。不貞腐れるカシオは黙り込み、両頬を膨らしテイルを睨む。カシオに背を向けるテイルは、そんな事とは知らず、バルドの方に目をやった。

「バルドの言う通り、ブラストは何を考えているか分からんからな……」

「気になるなら、アイツに直接聞け」

「そうだな。直接聞くか……」

ため息混じりに呟くテイルは、静かに部屋を後にした。それに続く様に、バルドとカシオも部屋を後にし、ブラストの後を追った。

ブラストの後に続き暫く廊下を進む。幾度も部屋の前を通り過ぎた。いつもなら、普通の部屋に通すはずだが、今日はやけに歩かされてる。それが、テイルには不自然で、何か裏がある様に思えた。

「ブラスト。何処まで行くんだ？ 飯ならいつもの部屋でいいんじゃないか？」

「まあまあ、今日は特別な場所で食べようじゃないか」

「何だよ特別な場所って。俺は腹ペコだぞ。飯なんて何処で食っても同じだろ？」

不満そうなカシオに対し、穏やかに笑うブラストは「もうすぐそこだ」とだけ答えた。不服そうだが、大人しくなるカシオは大きなため息を吐き、目を細める。

黙って最後尾を歩くバルドは、何やら周囲に目をやり鋭い目付きを変え様としない。それどころか、一層目付きが鋭くなっていた。

不安が募る三人だが、ようやくブラストは部屋の前に足を止める。ティル達も静かに足を止め、扉の前へと立つ。異様な空気が漂うその扉に、ティルとバルドは眉間にシワを寄せる。これまでの経験からか、ティルとバルドには何と無く危険な匂いを感知していたのだ。

「おい……ブラスト」

「何だ？」

「この部屋の奥には何があるんだ？」

ティルの言葉に、呆れた様な表情をするブラストは、少しだけティルを馬鹿にした口調で言う。

「当然、部屋の奥には料理があるさ。それが、どうかしたか？」

「どうでもいいんだけど、早く入ろうぜ。俺は」

「分かった分かった。腹が減ってるんだろ」

カシオを軽くあしらうブラストは、静かに扉を開いた。扉の向こうには、大きな窓があり、豪勢な料理の並んだテーブルが中央に聳える。恐る恐る部屋へと、三人は足を踏み入れた。部屋に入った瞬間、ティルは妙な違和感を感じる。だが、気にせずに用意された椅子に座った。

皆が椅子に座ると、突如床が微かに揺れる。それを象徴する様に

テーブルの上の食器がカタカタと音をたてていた。

「お、おい！ ブラスト」

「落ち着け。少し揺れるだけだ」

ティルに落ち着いた口調でそう返す。だが、ティルとバルドとカシオの三人は、ブラストの様に落ち着けるはずが無かった。これから、何が起こるか知らされて無いのだから。

「な、ななな、何がおきるんだ！ まさか、じ、じじじ、地震か？」

慌てるカシオは、背を丸め両手で頭を隠す様にしていた。その様子を黙って見据えるバルドだが、その目は少し泳いでいる。やはり、不安なのだろう。奥歯を噛み締めるティルは、ブラストの方に目を向けたまま言い放つ。

「どう言う事だ！ 説明しろ！」

「そう怒鳴るなって。物事には手順ってモノがあるだろ？」

「その手順を乱してるのは、お前だろ」

怒りに顔を引き攣らせるティルは、微かに拳を震わせていた。

揺れが大分治まり、ようやく室内に落ち着きが戻る。静寂に包まれる室内では、食事の準備が始まっていた。顔色の悪いカシオは、完全に揺れに酔ってしまったのだろう。ティルとバルドの二人は、黙ったまま目の前の料理を睨んでいた。

「んっ？ どうした？ 食べないのか？」

のん気なブラストは、サラダを食べながら三人を見据える。微かに右の眉をピクピクと動かすティルは、眉間にシワを寄せブラスト

の顔を睨む。

「どういう事が説明しろ。何で俺達は」

一呼吸置き、テーブルを両手で殴った後に、怒鳴る。

「飛行艇の中に居るんだ！」

睨み付けるテイルを相手にしていないのか、ブラストはサラダにドレッシングをかけていた。そして、ブラストがテイルに言った一言は、「んっ？何か言ったか？」だ。明らかにテイルの言葉など聞いていなかった。呆れたテイルは、額を押さえ苦しそうに息を吐き、「なんでもない」と、刺々しい口調で言う。

その後も、ブラストはテイル達に何をするつもりなのか、話す事は無かった。

## 第68回 予言書

フォースト城から飛び立った真つ赤な飛行艇は、現在海の上を飛行していた。

何処までも広がる蒼い海。波は穏やかで、ゆったりと見える。空も青く澄み渡り、所々に雲が浮かぶ。静かで穏やかな風を、飛行艇の二つの長い翼が勢い良く裂き、轟音を響かせる。だが、その騒音は飛行艇の内部には響かなかった。その為、未だテイル達の居る部屋は静まり返っていた。

食事も終え、四人は椅子に座ったまま沈黙を守る。テイルは腰にぶら下げていた天翔姫をテーブルに置き、白い表面に描かれた赤い妙な模様を目でなぞっていた。バルドは持っていた壊れた弓の修理を行っている。カシオは飛行艇に乗ってから元気が無い。見た所軽く酔ってしまった様だ。そして、ブラストは三人の行動を、腕組みをしながら見据えていた。

「そろそろ、話したらどうだ？」

長く続いた沈黙を破ったテイルは、天翔姫の上に右手を置いたままブラストを横目で睨んだ。落ち着いた態度のブラストは、テーブルに肘をついたまま、顔の前で手を組む。それから、テイル・バルド・カシオの順に顔を見ると、一度目を伏せゆっくりとした口調で言う。

「全員揃ってから話そうと思ったが、そうも言ってもらえん状況みたいだな……」

「全員？」

不思議そうな表情をするテイル。他の二人も同じだった。ここに

居るメンバーの他にも誰かを呼んでいるとでも言うのだろうか。そんな感じの表情で三人はブラストの顔を見た。眉間にシワを寄せるバルドは、直感で何かを察知したのか、静かに椅子から立ち上がり、ティル達二人に背を向ける。

「悪いが……俺には関係ない話だ。これ以上、貴様に命令される気は無い」

静かに冷たい口調のバルドは、ゆつくりと部屋の扉の方へと足を進める。落ち着いた様子のブラストは、組んだ手の親指に下唇を乗せると、目を閉じ眉間にシワを寄せ口を開く。

「別に強制はしない。話だけでも聞いていけ」

「強制はしないのだな……。なら、話を聞くまでも無い」

ドアノブを回し、バルドは部屋の外へと出て行った。後を追う気配も無ければ、引き止める気配も無いブラストに、聊か違和感を感じるティルは、難しい表情をしたままブラストを睨んでいた。

鋭いティルの眼差しに、ブラストは穏やかな視線を送る。だが、その瞳の奥からは、ティルを威圧する様なオーラを放っていた。その為、ティルの手の平は薄らと汗ばんだ。

「バルドが抜けたが、お前達も話を聞いて抜けたくなったら、抜けても構わない」

「わかった。一応、話だけは聞こう」

額から薄らと汗を流すティルは、強気な姿勢を崩さなかった。カシオも返事はしないものの、首を激しく上下に振っている。一応、ブラストの話を理解したようだ。酔っている為、話半分で聞いている様だが、良く理解できたと、ブラストも感心する様に軽く頷いた。

「まずは、これから向う場所について話す」

ブラストが真剣な眼差しを二人の方に向け、いつもより引き締まった口調で言い放った。

「俺達は、現在北の大陸グラスターへ向っている。そこで、グラスターの現国王、フレイストとレガイアと合流する」  
「合流？ 何の為にだ？」

当然のテイルの質問に、ブラストは軽く頷き、静かに口を開く。

「近々、大きな戦いがある。このクロスワールドの命運を懸けた大きな戦いが。その戦いで多くの血が流れる可能性もある。だからこそ、それを阻止すべく為、グラスター王国のフレイスト国王の力を借りたいのだ」

あまりにも真剣なブラストの顔に、テイルもその話が本当などだと悟った。そして、ブラストの口振りから、その戦いを未然に阻止する事が出来ると、言う事も分かった。

「話はオオヨソ分かったが、何故大きな戦いがあると言い切れる？」  
「お前も知っているだろうが、現在のフォースト城のある場所と首都ブルドライは、古代文明の跡地に作られたモノだ。そして、その古代文明は五百年前のあの戦いで全て滅んだ事」

「まあ、それは以前にも聞いたが、それとこれとは、話が別だろ？」

怪訝そうな目を向けるテイルに、ブラストは軽く首を左右に振り答えた。



「そうでも無いんだ。その古代文明を作ったのは、当時の天賦族。しかも、フォースト王国の初代国王だ。君臨する国王の中で唯一天賦の純血にして、技術開発の天才と呼ばれた頭脳派の国王だ」

「……お前に何処と無く似てるな。技術開発の天才と言う所は……」  
「馬鹿を言え。あの方が開発したものに比べれば、俺の開発したものは玩具に過ぎん」

首を左右に振りながら笑みを零すブラスト。それほど、五百年前の文明が凄かったのだ。確かに、今ティル達の乗っている飛行艇も、元は古代文明の跡地から発見された設計図を参考に開発されたもので、それに内蔵される機器の殆どが、古代文明跡地から発見されたものなのだ。他にもワープ装置の部品や設計図も見つかり、現在広まっているものの殆どが古代文明の残り物の様なモノばかりだった。少しだけ落ち込んでいる様に見えるブラストだったが、それからすぐに真剣な表情に戻り、ティルの方を見る。

「まあ、そんな事はどうでも良い。実は、先月城の地下で発見されたモノに、この五百年後の事が書かれた書物があつてな。どうも、その書物に書かれている事は全て、当時の時見族が見た未来らしいんだ」

「時見族か……。しかし、本当にその書物に書かれている事通りに進むと思っっているのか？」

「さあな」

「さあなつて……。大丈夫なのか？ そんなのを簡単に信用しても」

不満そうなティルに、ブラストは僅かに笑みを浮かべ、静かに答える。

「書物通りなら、もうすぐ俺達の飛行艇は魔獣達に襲われる。これ

なら、信用しても大丈夫だろ？」

落ち着いているブラストに、半笑いを浮かべるティルは、呆れていた。しかし、この飛行艇が魔獣に襲われれば、その書物の予言は当たった事になる。だが、ティルには分かっていた。きっとその書物の予言は当たると。時見族のミーファと、短い間とは言え一緒に旅をしたのだ、時見族の力の凄さは知っていた。その為、天翔姫を腰にぶら下げ、静かに椅子から立ち上がる。

「ま……まさか……お前も抜けるのか？」

気持ち悪そうにしているカシオが、立ち上がったティルの顔を見上げる。ブラストの方も気になるのか、ティルの方へと顔を向けていた。

「安心しろ。俺はその予言を信じている。もうすぐ魔獣が来るなら、俺はそれを迎え撃つ」

「そうか……。安心したよ。お前まで抜けては、話にならんからな」「何だ？ ブラスト。やけに弱気だな。まさか、その書物に書かれている事を全て信じているのか？」

薄らと口元に笑みを浮かべるティルは、ブラストを馬鹿にする様な視線を送る。両肩を軽くあげたブラストは、「さあな」と小さな声で呟き、口元に薄らと笑みを見せた。そんな二人のやり取りを、俯きながら聞いていたカシオは、籠った声で呟く。

「仲が……良いんだな」

だが、その声はティルとブラストには聞こえておらず、ティルはそのまま部屋を後にした。部屋に残ったブラストは、静かに吐息を

吐くと、いつに無く真剣な表情で窓の外を見る。いつもと変わらない、  
静かな空を。

## 第69回 飛行艇での戦い

空を悠々と飛行する飛行艇。

真つ赤なボディーは、青い空では目立っている。

風を切る二枚の翼は、激しい風を浴びながらも、機体を平行に保っていた。

その飛行艇の上層部にある甲板に、バルドの姿が窺えた。長い緑の髪が、激しい風に大きく流され、細身の体はその風に吹き飛ばされてしまいそうだ。鋭い目付きの奥に輝く茶色の瞳は、飛行艇の行く先を真つ直ぐに見据え、奥歯をガリツと噛み締めた。

静かに背負っていた弓を取り出すと、空穂<sup>うっほ</sup>から矢を数本左手で取る。吹き荒れる風に顔を顰めるバルドは、一度弓を構えたが上手く構えることが出来なかった。その為、弓と矢をしまつと、静かに奇妙な彫り込みの入った長い刃のナイフを右手に持つ。

「厄介な事に……巻き込まれたもんだ……」

静かにそう呟いたバルドは、青い空の一点を見据えた。その先には、微かにだが、黒い影が複数見えた。それが、魔獣である事にバルドは気付いていた。いや。目の良いバルドだからこそ、気がついたのだ。意識を集中するバルドはその黒い影の動きを追う。

「右に 十二。左に 十四。下に 二十。上に 十。大層な数だ……」

面倒臭そうなバルドは、チラリと後方に視線を送った。その視線の先には、少しだけ嬉しそうな笑みを浮かべるティルが、壁にもたれて立っているのが映る。

「何か……言いたそうだな」  
「いや……別に」

軽く首を左右に振ったテイルは、右手の人差し指で天翔姫のポタ  
ンを押す。すると、キューブ型だった天翔姫が、瞬時に赤い亀裂の  
入った白い細身の刃の剣へと変った。軽々と剣を回すテイルは、バ  
ルドの横へと並んだ。

目を細めるバルドは、迷惑そうな表情を見せるが、テイルはそれ  
を気にする素振りすら見せず、真っ直ぐに青い空を見据える。バル  
ドには影が見えるが、それはバルドが人並み外れた視力の持ち主だ  
からで、テイルには全く見えていなかった。

「……？ 俺にはさっぱり見えんが……」

「お前の視力では、見えんだろうな。だが、確実に近付いているぞ」

「そうか。なら、さっさと持ち場に着かないとな」

「持ち場？」

怪訝そうなバルドは、眉間にシワを寄せたままテイルを睨む。半  
笑いを浮かべるテイルは、「睨むなよ」と、軽い口調で言うと、出  
入口の方へと顔を向けた。そこには、気分の悪そうなカシオと、相  
変わらず穏やかな笑みを浮かべるブラストが立っていた。少しだけ  
嫌そうな表情を向けるバルドに、ブラストは楽しそうに微笑みなが  
ら言っつ。

「そう怖い顔するなって。一緒に戦うんだから」

「お前と一緒に戦わん」

「何だよ。そう冷たい事言っつなよ」

「そうだぞ……。皆で ウブッ！」

両手で口を押さえるカシオは、両頬を膨らし、今にも吐き出しそ

うな勢이었다。そんなカシオに冷たい視線を送るティルとバルドは、ため息を一つ吐く。

「足手まといだ」

「今すぐ消える。出なきゃ、今すぐ射抜く」

「うぐっ……。酷い……酷すぎる……。俺、体調悪いのに」

酷い罵声に泣き崩れるカシオ。その後姿を見据えるブラストは、呆れた様な笑みを浮かべていた。しかし、そんなカシオにトドメを刺す様に、バルドとティルは冷たい言葉を吐き出す。

「居るだけ邪魔。目の前から消えてくれ」

「体調が悪いなら出てくるな」

「うぐっ……。少しくらい、優しい言葉を」

「うるさい！ とつとと部屋に戻れ！」

「あうっ……。ティルなんて……。ティルなんて　うぐっ」

叫ぼうとしたカシオだが、吐き気に襲われ両手で口を押さえてその場に屈みこんだ。両肩を落とすティルは、左手で額を押さえると、軽く左右に首を振った。呆れてモノも言えないと、言った所だろう。そんなティルに、弱々しく顔を上げたカシオは、両手で口を覆ったまま、涙ぐんだ目でティルを見つめる。その目がうつとうしく、苛立つティルは額に青筋を浮かせ、眉間にシワを寄せ怒りを堪えながら、静かに口を開く。

「いいから、黙って部屋に行け……」

「うぐっ……。ティルなんて、大ツキライダー！」

カシオは最後にそう叫び部屋へと走り去っていった。その言葉に怒りで拳を震わせるティルは、静かに息を吐き心を静める。だが、

ブラストはテイルを馬鹿にする様に、右肩を二度叩くと、「大ッ嫌いだってさ」と楽しそうに笑いながら言う。ムスツとした表情のテイルは、ブラストを睨んだ。

ようやく、テイルとブラストの視界にも、黒い影が見える距離まで迫った。先程まで緊張感など無かったその場が、一瞬にして緊迫した空気へと変り、テイル・ブラスト・バルドの三人は真剣で鋭い眼差しを見せる。テイルは右翼、ブラストが左翼、そして中央はバルドと言う配置になった。

右翼に立つテイルは、顔にぶつかる風を、左腕で凌ぎながら真っ直ぐに、向って来る影を睨む。この風とこの足場では、自分達が不利だと分かっているテイルは、顔を曇めると、軽く舌打ちをした。だが、風の音でその舌打ちは誰にも聞こえはしなかった。

「来るぞ！」

バルドの叫び声に、テイルとバルドは素早く武器を構える。そして、遅れる事十秒。数体の翼の生えた魔獣達がそれぞれに一齐に襲い掛かる。多少前屈みになるテイルは、素早く天翔姫を振るい、魔獣達の翼を切り裂く。一方、甲板で戦うバルドは、彫り込みの入った長い刃のナイフで、魔獣達の心臓を一突きする。返り血なんて気にする様すも無かった。

落ち着いた様子の子のブラストは、飛び交う魔獣の攻撃を紙一重でかわしながら、二人の様子を窺っている。しかも、戦う気が無いのか、一向にボックスを武器に変換する素振りすら見せない。顔の横数ミリの所を、魔獣の爪が通り過ぎる。正確には、ブラストが顔を僅かに右に逸らし、攻撃を避けたのだ。その後も、ブラストはその場から僅かに動く程度の動きだけで魔獣の攻撃を次々とかわすが、自ら攻撃を仕掛ける事は無かった。

戦いながらもその様子を目にしていたテイルとバルドは、少しばかりブラストを気に掛けるが、次々と魔獣が襲い掛かってくる為、

考えている暇は無かった。



## 第69回 飛行艇での戦い（後書き）

約四ヶ月ぶりの更新でしょうか？

長らくお待たせしてすいませんでした。

これからも頑張つて、クロスワールドを完結できるようにしていきたいと思います。

## 第70回 限界？

真つ赤な飛行艇を囲む無数の翼の生えた魔獣。

バルドの見た数よりも、何十倍もの数の魔獣に囲まれ、苦戦を強いられるティルとバルド。それに加え、足場は最悪、向かい風は強い。これでは、ティルもバルドも、思う様に戦う事が出来なかった。鋭い爪を持った魔獣や、鋭い牙を持った魔獣。それぞれ、違う特徴を持つ魔獣達の波状攻撃に、ティルとバルドは遂に防戦一方となった。しかし、奥歯を食い縛り、激しい攻撃を凌ぐ二人に対し、余裕の窺えるブラストは小さな動きだけで、攻撃をかわしている。

そんなブラストの動きに、ティルは少なからず疑問を感じていた。何故、攻撃しないのかと。武器を持ってないわけでもないし、どこかを怪我しているわけでも無い。それが、不思議で戦いに集中する事が出来なかった。

(くっ！ 一体何を企んでいる……)

頭の中で色々と考えるティルは、後方から迫る鋭い爪を持つ魔獣に気付いては居なかった。もちろん、他の魔獣達もそれを悟られまいと、何度も正面からティルに攻撃を仕掛けている。そして、ティルが正面からの二発目の攻撃を、天翔姫で受け止め右に体をそらした瞬間だった。

背後に迫っていた魔獣が、鋭い爪を背中へと突き立てる。茶色のコートを貫いた鋭い爪は、ティルの背中へと食い込み、すぐさま真下へと引き裂かれた。茶色のコートに鋭利な爪の痕が残り、鮮血が舞い上がる。

「ぐあっ！」

背中に走る激痛に、テイルは完全にバランスを崩した。右膝が赤い飛行艇の右翼に落ち、テイルの体は逆風に耐え切れず、翼を転げる。

「ぐっ！」

翼のギリギリで体勢を立て直したテイルは、天翔姫を翼に突き刺し体を支えた。苦しそうな表情のテイルの背中からは、大量の血が溢れている。そんなテイルを、魔獣達は更に数を増やして追い込んでいく。

「チツ！ ……足を引つ張りやがって」

バルドは素早く短い刃のナイフも取り出す。そして、右から飛んできた鋭い爪を受け止めると、長い刃のナイフを魔獣の胸に突き立てた。背中から突き出た鋭いナイフの切っ先から、点々と血が滴れる。

「邪魔だ」

ボソツと呟いたバルドは、突き立てたナイフを抜く。すると、魔獣の体は風に飛ばされ、海へと落下していった。左手に持った短い刃のナイフで、次々と魔獣の攻撃を防ぐバルドは、右手に持った長い刃のナイフの方で、魔獣の胸を貫いてゆく。

しかし、数が多くバルドはその場から移動する事も出来ずにいた。そんな状況に、苛立つバルドは、二本のナイフの柄を合わせ双牙へと変換する。短い刃が下を向き、長い刃が上を向く。腰を低くし、小さくゆっくり息を吐くバルドは、右腕を前方に真っ直ぐ伸ばし、双牙を寝かして構える。

「がっつっつ！」

空を舞う魔獣の一体が、背後からバルドに爪を突き立てる。だが、バルドは瞬時に半回転すると、短い刃で魔獣の爪を弾き、親指で長い刃を押し、前に突き出すと、魔獣の首を刎ねた。頭を失った魔獣の体は、血飛沫を舞い上がらせ風で吹き飛んだ。

返り血を浴び、バルドの顔に幾つか血痕が付着した。鋭い目の奥の茶色の瞳が、殺気を放ち周りを囲む魔獣をけん制する。凄まじい威圧感に、圧倒される魔獣達の動きが止まった。それを、狙っていたバルドは、瞬時に右手に左手を近づけると、矢を構える様に、ゆっくりと左手を引く。

「……消える」

誰にも聞こえぬ小さな声で呟いたバルドが左手を放す。すると、双牙から風の矢が何発も放たれ、空に舞う魔獣の額を的確に射止めていく。もちろん、額を射抜かれた魔獣は、大量の血を撒き散らし、海へと沈んでいった。

その後も、バルドは風の矢で数体の魔獣を同時に海へと沈めて行く。だが、この数ではバルドの体力が先に底を尽きそうだった。

「クツ……。数が多過ぎる……」

額から汗を流すバルドは、静かに呼吸を繰り返し、右手に持った双牙を魔獣達に向ける。魔獣に狙いを定め、左手を右手に添えてから、ゆっくりと引いた。その時。突如バルドの視界に、鋭い爪が三本右方向から現れた。突然の事で、一瞬動き出しが遅れが、地を蹴り後ろへと飛び退く。だが、振り抜かれた魔獣の真ん中の爪の先が、僅かにバルドの右脇腹を掠めた。

「うぐっ……」

後方に飛び退いたバルドは、地に着地すると、足がもつれ右膝を落とした。右脇腹から滲み出る血色。大した傷では無いはずだが、バルドの表情は厳しかった。

「大丈夫か？ バルド」

のん気な口調でブラストが尋ねる。この状況で、のん気にしてられるブラストを、横目で睨むバルドは、奥歯を噛み締め言い返す。

「この程度。問題は無い」

もちろん、これは強がりだ。先程切られた脇腹から、血が結構流れていた。それに、少しだけ体が痺れ始めている。魔獣の爪に何らかの毒が仕込まれていたのだろう。

視界がボヤケ、次第に平衡感覚が失われ、今の状態を保つので精一杯だった。

「ハア… ハア… …クッ……」

荒い息遣い。苦痛の色を隠せないバルドに、ブラストも聊か焦る。今の状態では、テイルもバルドも持ち堪える事が出来ないと、ブラストは判断し、遂に腰にぶら下げていた黒のボックスを手を取った。天翔姫の試作品だったこのボックスを、手で組み替えるブラストは、飛び交う魔獣の鋭い爪を相変わらず紙一重でかわす。澄んだ金属音を響かせるボックスは、ブラストの手によって漆黒の鋭い刃をあらわにする。

「あと五分程粘れると思ったが、限界らしいな」

ブラストがテイルとバルドに対し、そんな言葉を投げかけ、向ってきた魔獣を切り捨てる。一瞬の出来事で、魔獣も自分の体に何が起こったのか、気付いていなかった。だが、すぐに白目を向くと、体が真つ赤な飛沫を上げ、真つ二つに裂かれ海へと消えていった。

その場を動かず、向って来る魔獣の攻撃を紙一重でかわし、こちららは致命的な一撃を一瞬にして与える。そんなブラストの動きに、テイルもバルドも言葉を失う。これが、ブラストの実力。そして、テイルとバルドの二人との格の違いだった。だが、それが逆に二人の闘志に火をつける事となる。

「チツ……」

「ふざけんな……」

バルドの舌打ちとテイルの言葉が重なり、二人はゆっくりと立ち上がった。完全にブラストの先程の言葉と今の動きが、二人を奮い立たせたのだ。天翔姫を構えなおすテイルは、背中の痛みなど忘れてしまったのか、軽く天翔姫を回しながら魔獣を見回す。バルドの方も、左手で右脇腹を押さえながら、双牙を構え静かに息を吐く。微かに痛みがあるが、この程度なら十分戦えると、バルドは判断した。

「何だ？ 二人とも、無理する事は無いぞ」

「大丈夫だ。この位なら」

「消し去る」

テイルとバルドは鋭い眼差しを魔獣に向けながらブラストに返事を返す。

「ガウウウッ！」

不気味な鳴声を発し、魔獣がテイルに襲い掛かる。その瞬間、テイルは天翔姫をボックスに戻し、素早く武器を変換した。テイルの手に握られるグリップ。そして、長めの銃身が現れ、大きめの銃口が向って来る魔獣の眉間に向けられる。手の甲を上にし、銃を構えるテイルは、静かに息を吐き、右腕を振り上げる魔獣を睨む。

「悪いが、手段は選んでいられないんでな」

言い終えると同時に引き金を引く。衝撃と共に銃声が響き、正面に居た魔獣の頭が吹き飛び、体が翼の上を転げ海へと落下する。白に赤の亀裂の走るその銃を横に構え、テイルは周りの魔獣をけん制した。

## 第71回 遅れてきた助っ人

甲板で戦うバルド。

右手に持った双牙で、何とか致命傷を免れるバルドだが、右脇腹の傷がズキズキと疼き、動きが鈍くなっていた。それでも、魔獣達に悟られぬ様に強気な姿勢を崩さない。

(右！)

鋭く振り抜かれた双牙の長い刃が、右から襲ってきた魔獣の右腕を肘から切り落とす。吹き出る血に、顔を顰めるバルドは、双牙の短い刃を後ろに突き出す。ドスツと鈍い短音が聞こえ、後ろから襲い掛かるうとしていた魔獣の体が動きを止める。短い刃は的確に魔獣の心臓を捉えていた。

「ハア…ハア……」

呼吸をする度に痛む右脇腹の傷。それに堪えるバルドは、静かに息を吐くと、目を閉じ意識を集中する。風の音に、魔獣の羽の羽ばたき。それが、バルドに魔獣の居場所を教える。右手に持った双牙に、左手を添えた。

(背後から二体。前方から更に二体。右から三。左から二)

全ての位置を把握したバルドは、目を開くと、力を込めて左手を引く。そして、回転しながら矢を放った。的確に魔獣の胸と頭を射抜く。そして、バルドの確認した魔獣を全て射抜き、動きを止めたと同時に、バルドは左膝を甲板に落とした。



「クツ…ハア…ハア……」

呼吸の荒いバルド。先程の攻撃でもう体も限界だったのだろう。完全に膝が言う事をきかない。そんなバルドのミスが一つだけあった。それは、魔獣が周りだけではなく、頭上にもいたと言う事だ。

「ガウウウツ！」

「なっ！ くっ……」

双牙を振り上げようとしたバルドだが、力が入らなかった。振り上げられた魔獣の右腕が、バルドに向って降りる。だが、魔獣の爪がバルドに届く前に、魔獣の悲鳴の様な声が響いた。

「ギヤアアアツ！」

「な、何だ」

魔獣の体は、血を吹き風に飛ばされてゆく。そして、バルドのの前には、一人の青年が立っていた。オレンジブラウンの髪が風に揺れ、綺麗な緑色の瞳がバルドを真っ直ぐに見据える。そして、振り下ろした大きく鱗模様に入った剣を持ち上げ、優しく微笑みかけた。

「大丈夫ですか？ 間一髪でしたよ」

「だ、誰だお前！」

突然の事に驚くバルド。この飛行艇には、テイル、カシオ、バルド、プラスチックと飛行艇を操縦する人しか乗っていないはずだった。それじゃあ、この青年は何処から。バルドがそう思った時、別の子供っぽい声が何処からか聞こえた。

「うおおおっ！ すごい！ 飛んでる 飛んでるぞ！」  
「フォン！ 何興奮してんのよ！ もっと周りを良く見て！」  
「うっっ……。雰囲気ぶち壊したよ」。ミーファ」

茶色の髪を揺らす子供っぽい顔付きのフォンが、頬を膨らし不満そうな顔を見せる。そんなフォンに掴みかかるミーファは、激しくフォンの頭を前後に揺さぶり怒鳴った。

「もーっ！ 何のん気な事言ってるのよ！」

「うっっ……。ゆるゆるっな」

「うるさい！ 分かったらさっさと戦え！」

ミーファは勢い良くフォンの体を後ろへと突き飛ばした。フラフラとした足取りのフォンは、尻餅を着き「あうっっ」と、妙な声を上げる。そんなフォンに続いて怒鳴り声を響かせたのはティルだった。

「フォン！ な、何でお前がここに！」

グラスター大陸にいるはずのフォンが、ここにいる事に驚く。そんなティルに対し、ニコヤカな笑みを見せるフォンは、包帯が巻かれた右腕を上げる。

「おおっ！ 久し振りだな！ ティル。こんな所にいたのか」

「ああ。久し振りだな じゃなくてだな。お前、グラスター大陸にいるはずだろ。どうやってここに！」

「ノリツツコミを覚えたのか。うんうん。嬉しいぞ。オイラとしても」

腕組みをして軽く頷くフォンは、嬉しそうに微笑む。呆れて目を

細めるティルは、銃口をフォンの方に向けた。もちろん、これは冗談なんかではない。ティルの目を見れば、本気だと言う事が一目で分かった。

そんなティルに、苦笑するフォンは、両手を胸の前で広げ、「まあまあ」と小さな声で言う。声が小さすぎて、ティルには聞こえていなかったが、その行動で何と無く言っている事を理解したティルは、引き金に人差し指を掛ける。

「久し振りだからって、調子に乗っていると、ぶち抜くぞ」

両手を上げるフォンは、小刻みに何度も頷く。が、無情にもティルの人差し指が引き金を引いた。銃声が響き、フォンの頬を何かが掠め、耳元で鋭い風の音が聞こえる。驚きに目を丸くするフォンの背後では、ティルの放った弾丸を胸に受け倒れる魔獣の姿があった。

「おおつ。流石ティル」

感心するミーファは、二・三度拍手をすると、ティルの方に目をやった。少しだけ冷たい視線を向けるティルは、そのまま体を横に向けると、右腕を伸ばし自分の背後に居た魔獣の頭を打ち抜く。

頬から薄らと血を流すフォンは、拳を震わせると、大声でティルに怒鳴りかかった。

「くうおらーっ！ お前、オイラを殺す気か！」

「助けてやったんだ。ありがたく思え」

冷静な口調のティルは、冷やかな視線をフォンに送り、小さく鼻で笑った。「ムキーツ！」と奇声を発するフォンは、目を吊り上げると、拳を振り上げ更に怒鳴る。

「助けてやったとは何だ！ 一歩間違えば、オイラの頭が吹っ飛んでたぞ！」

「ほつ。それは実に残念だな。あと一歩間違えばよかったのか」

「何だそりゃ！ お前、オイラを殺したいのか！」

「まあ、あわよくば」

ボソツと呟いたその言葉が、フォンにも聞こえた。その為、フォンは更に激怒し、叫ぶ。

「あわよくばつて、どう言う事だ！」

「うるさい。いい加減口じゃなく手を動かせ」

「何だよ！ その言い草は！ 折角助けに来たのにさ！」

「誰も、お前に助けを求めた覚えは無い」

「又ガアアアアアッ！ 何だよ！ 何だよ！ 久し振りだったのに、冷た過ぎるだろうが！」

全力で怒鳴るフォンに、テイルは疲れた様な小さなため息を漏らす。そして、もう一度銃口をフォンの方に向け、静かに口を開く。

「良いか。今は、お前との久し振りの再開に浸ってる場合じゃない。もう一度言う。口じゃなく、手を動かせ。仕舞いには本気で撃ち抜くぞ」

流石のテイルも額に青筋を立て、今にも引き金を引いてしまいそうな気迫を見せる。しかし、フォンもそれに退けを取らない程の闘志を滲み出しており、二人の睨み合いが続く。そんな二人のやり取りを見据えるブラストは、初めてテイルのあんな一面を見た気がして、少しだけ嬉しかった。

嬉しそうに微笑むブラストは、剣を振るい次々と魔獣を落としていく。そのブラストに、オレンジブラウンの髪を揺らす青年が声を

掛ける。

「ブラスト様。お久し振りです」

「おう。久しいな。しかし、お前が国王になったとはな」

「私としても、なりたくてなったわけじゃないですから」

「まあ、そう言っつな。これからは、お互い苦労すると思うが、頑張るんじゃないか」

「ええ。色々とお世話になると思いますが、よろしく願いします」

丁寧な返事をするフレイストに、ブラストは楽しげに笑う。互いの立場を理解しているブラストとフレイストは、それ以上言葉を交わす事は無かった。

## 第72回 未来

飛行艇での戦いは激化していた。

突如現れたフォンとフレイストの二人の参戦により、魔獣との戦いは有利に進む。傷を負うティルとバルドの二人は、フォンとフレイストに負けじと、数多くの魔獣を倒していた。

「ハア…ハア……。ようやく、片付いたな」

肩で息をするティル。

そんなティルに、笑顔でフォンが返答する。

「いや〜。案外、苦戦したな〜」

無邪気なフォンの笑顔に、ティルは無性に腹が立った。だが、フォンに文句を言う程、ティルに余裕は無く、その場で意識を失ってしまった。

その後、フォンとフレイストの手で、ティルとバルドの二人を、飛行艇内にある医務室へと運び、軽い治療を施した。幸い傷は浅く、治療には時間が掛からなかった。フォンとフレイストはすぐにブラストと話し合いをするために、医務室を後にし、ミーファだけが、医務室に残されている。

静かに時だけが過ぎる。ウトウトとするミーファは、浅い眠りに就いた。

暫く闇が続き、ゆっくりとミーファの視界が明るくなる。夢へと落ちた。しかも、時見族の見る未来の世界へと。

暗い暗い闇。

そこにミーファは居た。

これは夢だ。未来を見せる夢見族特有の夢。

ミーファはそれを知っていた。だから、落ち着いていられた。この暗い闇の中でも。

次第に闇が薄れていき、何処からか聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「やめて！ これ以上」

女性の声。涙声で、それ以上聞き取れない。

風の音。激しい全ての音を掻き消す様な暴風。

視界が広がり、ようやくミーファの目にもその状況が映し出される。

荒々しい風が砂埃を舞い上げ、その中心に二人の男が立つ。

ボロボロの茶色のコートが大きく揺れる。傷だらけの体からは、血が流れ両肩が大きく上下する。

疲労の窺えるその男と対峙する男。背丈は低く、茶色の髪が逆立つ。右腕には包帯が巻かれ、その腕が激しく波打つ。まるで生きているかの様に。

「ハア…ハア……」

「ハア…ハア……」

両者とも肩で息をする。

風が静まり、砂埃が消えた。そこで、ミーファは初めて気付く。その二人が、フォンとティルである事に。そして、泣き崩れる自身の姿にも。

動揺の隠せないミーファは、何がどうなっているのかを考える。だが、そんなミーファを他所に、対峙する二人が動き出す。

細身の白の刃に赤の亀裂が入った天翔姫を、下段に構え走り出す

テイル。一方、フォンは右手を握り締め、テイルへ向って一直線に走り出す。スピードで上回るフォンが、一気にテイルの間合いに入る。

「クッ！」

「ウラアアアッ！」

叫び声と同時に、右拳が振り抜かれた。うねる様に突き出された右拳に、テイルは瞬間的に体を右にそらし、そのまま天翔姫を振り抜いた。

金属音が響く。

ぶつかり合う白い刃と、包帯の下から見えた鋭い爪。緩くなった包帯の合間から、フォンの腕が見えた。おぞましい程ただれた皮膚の下から、フォンじゃない何か別の化物の様な腕が見えている。それが、なんなのか、ミーファに知るよしも無く、二人の戦いが白熱する。

右腕が天翔姫を弾く。同時にテイルの体が後方に弾き飛ぶ。両足を地に確りと踏み留めたテイルは、仰け反りながらもフォンから目を放さなかった。

『どうなっているの……』

未来を見ているミーファの声は、ここに居る誰にも届かない。

『何で、フォンとテイルが……。どうして……。こんな事に……』

戸惑い。頭が困惑する。こんな未来になるなんて、思っていなかった。

いや、実際、こんな未来になるはずじゃなかったはずだ。何処かで未来が変わった。しかも、最悪の形に。



自分じゃ何も考えられなくて、ミーファは蹲る。そして、目の前の未来を拒絶し、それが嘘だと自分自身に言い聞かせた。

『嘘よ……嘘！　こんな事……ありえ』  
『全て現実のなる』

突然の声。それは、明らかにミーファ自身に掛けられた言葉。初めての事に脈が早まる。自分の中で何かが変わっている。

『だ……誰……』

恐る恐る振り返る。そこには、幼い少女が立っていた。栗色の長い髪が、暗い闇を背に輝いて見える。背丈はミーファよりも小さく、明らかに年下に見える少女は、落ち着きのある愛くるしい声で言う。

「私は　。あなたと同じ時見族」

名前だけが途切れる。

『エツ……。今、何て』

「私は、あなたと違う。時を破滅させる者」

『それって……』

「時を導くあなたとは、敵同士」

その言葉で、ミーファは理解した。未来が変わったのは、こいつのせいだと。一体、何者なのか詳しく分からないが、この少女がミーファの大切なモノを奪う、と言う事だけは分かる。フォンやテイルの少しずつ繋がった絆すらも、引きちぎろうとしているんだと言う事も。

それが、許せなかった。一つ一つが結ばれ、ようやく実ろうとし

た二人の絆を、大切な仲間の絆を簡単に壊してしまう彼女の事が。

『何で……なんで、こんな事を!』

「何で? 分かるでしょ? あなたも、時見族なら」

その言葉に、ミーファは言葉を呑む。彼女が何を言いたかったのか、分かったからだ。

何の反論も出来ず、悔しさだけが残る。目頭が自然と熱くなり、視界が涙で霞む。自分の無力さを改めて知った。

俯くミーファに、少女は静かに口を開く。

「見届けないの? もうすぐ決着」

『うるさい! 私は、こんな未来信じない! 絶対に、変えてみせる!』

「それが無理だと分かっているも?」

その言葉に下唇を噛み締め、拳を握る。

『無理じゃない……。未来は……変えられる! フォンもティルも私が』

「無理よ」

ミーファが言い終える前に、耳元で少女の声が聞こえる。

「あなたは無力。何も出来ない」

『私は』

「あなたは、見届ける事しか出来ない。彼ら二人の戦いの行方を」

逆の耳元で少女が囁く。

その時、悲鳴が聞こえる。

「いやあああああつ！」

それは、未来のミーファの悲鳴。  
視線をそこへ向ける。

貫く白い刃。その切っ先からは血が滴れる。

「グフツ……」

血が大量に口から吐き出された。

「フォン……」

「うっ……うっっ」

天翔姫の突き刺さったフォンの体が、静かに崩れ落ちる。半分、獣になっていたフォンの体は、元の姿に戻り動かない。だが、僅かに息は残っていた。それも弱々しく、今にも息絶えてしまいそうな程の呼吸。きつとルナの力を持ってしても、治療するのは不可能だろう。

泣き崩れる自分自身の姿に、ミーファも薄ら涙を流す。フォンが死んでしまうと、思うともう止める事が出来なかった。そんなミーファに後ろから少女が言う。

「近い未来、現実となる。あなたは、この未来を受け止めなければならぬ」

『うるさい！ 私は、こんな未来……』

「信じない……とでも？ あなた自身分かっているはず。時見の見た未来は確実に現実になると言う事を」

『そんな事無い！ フォンは、確かに生きて帰ってきた！』

「生きて帰ってきた？ 何の話かは分かりませんが、あなたの見た

未来は確実に現実となる。それだけはかえられません」

少女の声が聞こえなくなる。それと同時に、ミーファの視界が闇へと包まれた。夢が終わる。現実へと引き戻されていく。そして、闇の置くに眩い光が一筋見え、ミーファを呼ぶ声が聞こえた。

### 第73回 出来る事

闇に光が満ちる。

自分を呼ぶ声。温かくもあり、冷たくもあるその声に、ゆっくりと瞼を開く。

すると、声がハッキリと聞こえてきた。

「おい！ 起きろミーファ！」

「ん……んんっ？」

まだ朦朧とする意識の中で、ティルの顔が視界に入る。心配している様な、呆れている様なそんな表情のティルに、微かに微笑んだ。呆れた様に目を細めるティルは、小さくため息を吐くと、静かに口を開く。

「あのな。何で、お前の方が魔されてんだ。まったく、眠れもしないだろ」

「う、ごめん……」

「まあいいさ。それより、何を見た」

急に真剣な顔付きになるティルは、すでに気付いていた様だ。ミーファが未来を見たと言っ事を。

鋭い眼差しを向けるティルに対し、その場を流す様に笑みを見せたミーファは、少しだけ震えた声で答えた。

「ううん……。何も見て無い……。少しだけ、怖い夢を見たただけだから……」

「……そうか」

それ以上、テイルは何も聞かなかった。ミーファの辛さを知っているからだ。変えられぬ運命に、一人抗い続ける彼女の辛さを。

誰かに話してしまえば、きつと楽になるだろうし、未来だって変ってしまいかもしれない。だが、それにより新たな運命が生まれ、それがもつと残酷な結果を生むかも知れない。そう考えると、誰にも話す事が出来ず、自分の力でどうにかするしかないのだ。

全ては幼い頃の教訓だった。この力があつたばかりに、多くの民を犠牲にする事になった。その事を今も鮮明に覚えており、自分の力を呪った。こんな力さえなければと。

「ごめんね。寝てるの起こしちゃったみたいで」

「いや……。気にするな。悪かったな妙な事聞いて」

「ううん。大丈夫。ゴメン、私」

ミーファはこれ以上話す事が出来ず、その場を逃げる様に後にした。そのミーファの目に涙が浮かんでいるのを、一瞬だけ見たテイルは、小さな吐息を吐く。

「つつたく……」

「大丈夫なのか？」

突如隣りのベッドから声がする。カーテンが敷居となり顔が見えないが、棘のある声にすぐにバルドだとわかった。その為、テイルは眉を顰め、鼻から息を吐く。それが聞こえたのか、バルドが小さく舌打ちをした。

「オイオイ……。舌打ちは無いだろ」

「黙れ……。これは癖だ」

「変な癖だな」

含み笑いをするティルに対し、渋い表情をするバルドは、刺々しい口調で言う。

「お前にとやかく言われたくない」

「ハッ……言ってくるな」

「それより、アイツは大丈夫なのか？」

唐突に話を戻すバルドに、呆れつつもティルは静かに答える。

「分からん。ただ、俺に出来る事は彼女を信じる事だけだ」

「フッ……。案外、消極的な答えだな……」

「消極的……か。そうかも知れないな。まあ、アイツとは見ている世界が違うんだ。仕方ないさ」

ため息混じりのティルは、首を左右に振った。

アルバー大陸の西。

静寂漂う森の中に、ワノール達がいた。真っ黒な衣服を身に纏うワノールは、後ろを歩くウールを気にしながらも足を進める。その更に後ろには巨体のノーリンと、独特の民族衣装に身を包んだセフィーが続く。長かった黒髪は、肩口まで短くなっており、乱暴に切ったのか毛先はバラバラに乱れていた。

ワノール達が、セフィーと一緒にいるのには訳があった。

遡る事三日程前になる。ノーリンが破壊した町の修復作業を行っていたワノール達のもとに、ポロポロのセフィーが辿り着いた。飲まず食わずだったのだろう、やつれてフラフラとしていた。

そんなセフィーをウールは気に掛けていたが、セフィーは休むより先に、ウィンスの事、里に起きた事をワノールに告げた。

初めワノールはどうでもいいと、断るはずだった。だが、話を聞

いたウールに丸め込まれ、結局はセフィー事を助ける事になったと言ふ事だ。

その後、セフィーに案内され、この森まで辿り着いたが、ウールは不安でしようがなかった。

「本当にここで間違いないのか？」

足を止め振り返ったワノールの問い掛けに、セフィーが微かに頷く。何を根拠に頷いたのか分からず、ワノールは怪訝そうな目を向ける。そんなワノールの目に気付いたのが、セフィーは右手を開くと、手の平に風を集めた。球体を描く風が、僅かに乱れる。

「この近くにいる……」

「なぜ、そう断言できる？」

「ワシもそれは気になるのう。風牙族の能力か何かかのう」

「風の乱れがある……。きっとウインスのせい」

静かな口調のセフィーは、風を握りつぶしワノールの目を真っ直ぐに見据える。訝しげな視線を向けていたワノールも、渋々前を向き足を進めた。その後が続く様にウール・セフィー・ノーリンと歩みを進める。

ふら付くセフィーを心配するウールは、何度も後ろを確認してから、ワノールの隣りにならんだ。

「あなた……少し休みませんか？」

「疲れたのか？ ウール」

「いえ……。私ではなく……」

ウールは後ろを歩くセフィーの方に目を向ける。流石にワノールもウールの言いたい事が分かった。



「そうだな……。少し休むか……」

ワノールが足を止めるのとほぼ同時だった。爆音が轟き、暴風が吹き荒れたのは。

「な、なんじゃ！ 一体」

「クッ！ ウール」

「私は大丈夫です。でも、セフィーさんが」

ウールが指差す先に、セフィーが走り去っていくのが見えた。だが、すぐに立ち込める砂煙によって、その姿は見えなくなる。ワノールとノーリンの脳裏に何やら嫌な予感が過った。

「ノーリン！」

「わかつとる。ワシに任せておけ」

「俺も、後から行く」

ワノールの言葉を聞きノーリンは一度だけ頷き、空へと飛び上がった。その姿を見据えるワノールは、ウールの手を左手で握り締める。右手には黒刀・烏の柄を確りと握り、いざと言うときに備えていた。

風が静まり、砂埃だけが舞い上がる。目を凝らすワノールは、ウールが左手を握り返してくるのを確認して声を掛けた。

「ウール。平気か？」

「はい……。大丈夫です。それより、セフィーさんは無事でしょうか？」

心配そうな声で問いかける。この状況でも、自分よりも人の心配

をするウールに、ワノールは少しだけ呆れた。と、同時にウールの胆のでかさをヒシヒシと感じた。

安心するワノールは、ウールの手を引きゆつくりと歩き出す。何があるか分からない為、辺りにはいつも以上に気を張っていた。

「何があつたんでしょうか？」

「良く分からないが、セフィーの言う事が確かなら、ウインスが原因だろう」

「ウインスさんですか……」

「ああ。奴は稀に強大な力を発揮するからな」

呆れた様な笑いを見せるワノールは、深いため息を零した。何か面倒な事が起る気がしてならなかった。それに、何か胸騒ぎがする。胸騒ぎの原因は分からないが、戦わなければならない奴がいる気がした。

## 第74回 風と炎

「な、何じゃこれは……」

辺りに黒煙が立ち込め、森の一部がさら地となっていた。

燃えカスや木々の残骸が散乱し、ここで何があったのか全く検討が付かない。

驚くノーリンは、辺りを見回す。何があったのか、手がかりになりそうなモノを探したのだ。だが、セフィーはそんなノーリンの横を通り過ぎ、さら地の真ん中で叫ぶ。

「ウインス！ 居るんでしょ！ 出てきなさい！」

力強いセフィーの言葉に、返答は無い。

ノーリンも近くに人の気配を感じず、糸目を凝らし辺りを見渡す。やはり誰かいる気配は無い。糸目を堅く閉じ、周囲に耳を澄ませる。

静かな風の音。

木々のザワメキ。

この中に、動物の声や虫の声などは聞こえない。

「おかしいのう」

ボソツと呟く。これほどの事があったのなら、どこかで動物達の逃げる足音が聞こえてもいいはずだった。だが、それが一切無く、異様な空気が漂っている。

その時、ノーリンはウインスを呼ぶ声が聞こえない事に気付き、セフィーの方へと顔を向けた。そこに、ウインスがいた。ボロボロの民族衣装の所々には血が染み、目は血走っている。一瞬、ウインスだと気付かない程だった。

「ウインス……」

セフィーが呟きウインスに歩み寄る。しかし、ウインスの目はセフィーを見ておらず、牙狼丸を握り締めると、無言で走り出す。セフィーの横を通り過ぎ、ウインスは直進する。

ノーリンは瞬時に気付く。ウインスが誰かと戦っているのだと。しかし、その相手が見えず、何処にいるのかをさぐる。

「待つて！ ウインス」

セフィーはウインスを追う。だが、ウインスは徐々に加速し、セフィーを引き離していく。そして、暴風が吹き荒れセフィーの体を弾き飛ばす。

「うぐっ……」

地を転げセフィーは木の根に頭をぶつけた。頭部からヌルツと血が流れ、セフィーの意識は遠退く。その視界の中には、確りとウインスの後ろ姿が映っていた。

血を流し倒れるセフィーのもとにノーリンは駆け寄る。血は出ているものの呼吸は安定していた。安堵の表情を見せるノーリンは、ゆっくりとウインスの走って行った方へ目を向ける。

「あやつ。正気を失っておるな」

静かに呟いたノーリンは、妙な音を耳にする。何かを燃やす様な激しい音。木々が怯える様にザワメキ立つ。

「なんじゃ？ この音は……」

音が聞こえてくるのは、ウインスが走っていった方角。何か嫌な予感が脳裏を掠め、ノーリンは咄嗟にセフィーを抱え空へと舞う。直後、巨大な炎の塊が森を焼き払うかの様にノーリンの下を通過した。その間ものの数秒。一歩間違えば、ノーリン達まで黒焦げになるところだった。

燃え上がる木々は、悲鳴を上げるかの様に倒れていき、次々と他の木々を巻き込み炎は大きくなっていく。だが、こればかりはどうする事も出来ない。火を消そうにも、規模が大きすぎる。空から燃え盛る木々を見据え、ノーリンは感傷する。

そんなノーリンの視界に、二つの影が見えた。一つはウインス。そして、もう一つは。

「フハハハハツ。燃えろ！ 燃え上がれ！」

燃える様な深紅の髪を揺らし、甲高い笑いを響かせる少年。間違はなく、その姿はカインだった。すでにあの頃の面影など無い。

そんなカインと対峙するのは、ウインスだった。呼吸が荒いウインスは、牙狼丸を地から抜くと、ゆっくりとカインに目を向ける。

「ハア…ハア……」

「チツ……。まだ、動けるのか。しぶとい奴だ」

「俺の……邪魔を……するな！」

怒りに任せ牙狼丸を振り下ろす。風が渦を巻いたかと思うと、鋭い刃と化し地面を裂きながらカインに向う。

「学習能力の無い奴だ」

右手を前に突き出すと、その風の刃を受け止めた。刃はカインの

手を切りつけ、血飛沫が舞う。だが、次の瞬間血飛沫が発火し、風の刃を焼き尽くした。風の刃が消滅し、カインの手の平に炎だけが球体状に螺旋を描く。

「うおおおおっ！」

叫び声を上げ、ウインスはカインに向って行く。下段に構えられた牙狼丸の切っ先が、地面を切り、更に風を纏う。

「叫べば強くなれるとでも、思っているのか？」

冷静な口調でそう述べたカインは、腰の青空天を抜くと軽く一振りする。淀んだ蒼の刃が牙狼丸を弾くと同時に、青空天を掴むカインの右手から血が二・三滴飛ぶ。それが空中で発火し、ウインスを襲う。

「クッ！」

地を蹴り後方に飛び退いたウインスは体勢を整え、牙狼丸を振り上げる。切っ先が地を削り、風と共に砂埃が舞い上がった。その砂塵が一瞬だけカインの視野を覆う。

「チッ！ なめたマネを！」

「風は全てを裂く！」

砂塵が二つに裂け、風の刃がカインを襲う。

「ぐう！」

咄嗟に青空天で風の刃を防いだカインだが、その体は弾き飛ぶ。

空中で体勢を整えたカインは、青空天を持ち替え右手から流れる血を淀んだ蒼い刃に滴らせた。一滴目で蒼い刃が赤く変わり、二滴目で高熱を帯びる。白煙が上がり刃を覆う。微かに聞こえる蒸気の上がる音に、呼吸の荒いウインスは身構え牙狼丸に風を集めた。

二人の睨み合いが続く。辺りには風一つ吹かず、静けさに包み込まれる。両者の右足がジリツと地を踏み鳴らし、間合いを計る様にゆっくりと動きだす。

視線を外す事無く一点に集中するカインは、口元に不適な笑みを浮かべると同時に、間合いを一瞬で詰めた。

「クツ！」

刃が閃き、風が吹き荒れる。

牙狼丸が空を切り、カインの体が空中を華麗に舞った。

距離を取りカインがもう一度不適に笑う。

「一発目」

カインの小さな呟き。それは、ウインスにも微かに聞こえていたが、その言葉の意味を理解できず、ゆっくりと牙狼丸を構え直す。

「次は……逃がさん」

「逃げる気など無い」

カインは笑みを浮かべたままそう述べると、腰を落とし低い姿勢で青空天を構える。

一方、ウインスは牙狼丸を頭上に構え、右足を踏み込むと同時に勢い良く刃を振り下ろす。纏っていた風が一斉に放出され、地を抉り一直線にカインに向う。

「我が血は意のままに発火し、全てを焼き喰らう！」

低い姿勢のまま青空天で向って来る風を切り上げる。すると、青空天の刃が発火し、風を炎が呑み込んだ。風が炎上し、巨大な火柱が昇る。そして、火の粉が森に降り注いだ。

森が焼け、黒煙が昇る。木々の焼き焦げる臭いが周囲に漂い、森は一瞬にして火の海へと変わった。木々は音を立て崩れ落ちる。

「分かっただろ？ お前の風じゃあ、俺の炎を吹き消す所か、更に火力を強めるだけだ」

「黙れ……。俺は……。負けん」

「頭の悪い奴だ」

カインがそう言い首を振る。奥歯を噛み締めるウインスは力一杯に地を蹴ると、一瞬でカインとの間合いを詰め牙狼丸を右へと振り抜く。

刃の動きを確りと目で捉えるカインは、切っ先を紙一重でかわしてみせると、もう一度距離を取る。

「芸の無い攻撃だな」

カインがそう呟くと、突如右頬から血が流れた。牙狼丸を取り巻く風が、カインの頬を掠めたのだ。

「フフフツ……。フハハハハツ……。そっか、分かったよ。殺す……。殺すよ。お前は、俺の手で」

怒りをあらわにするカインは、先ほどまでとは明らかに目付きが変わっており、右手に持った青空天を静かに構えた。



## 第75回 それぞれの想い

火の粉が舞い、森を炎が覆いつくす。

外へと広がりがりつつある炎は、更に火力を増していく。

その炎に包まれた森の中に、ワノールとウールの姿もあった。

ワノールは燃え上がる木々を黒刀・烏で切り倒し、火の手がウールの方まで届かぬ様に最善を尽くす。

「クツ！ 一体どうなっているんだ……」

「あなた。もうここはいいから」

「ダメだ！ これでは、お前が」

ワノールの言葉が遮られる。ウールの唇によって。

突然の事に困惑するワノールは、動く事が出来なかった。

唇が離れ、ウールがニコツと笑みを浮かべる。そこでワノールはようやく自我を取り戻す。

「な、何をしてるんだ！ お前は」

顔を真っ赤にし怒鳴るワノールに対し、ウールはいつもの様に答える。

「少しは落ち着きましたか？」

「ば、馬鹿を言うな！」

「ダメですか？」

「ダメじゃないが……。場所と状況を考える」

平然とした態度を保つワノールだが、心臓はバクバクと脈を打っていた。そんなワノールの気持ちを知ってか知らずか、笑みを浮か

べるウールは優しい口調で聞く。

「こうでもしなきゃ、私の言い分は聞いてもらえないでしょ？」

「当たり前だ！」

当然だと言う様に怒鳴るワノールに対し、小さなため息を漏らすウールも、当然だと言わんばかりに答える。

「当たり前じゃないですよ。少しは私の言い分も聞いてください！ それとも、私の話は聞けませんか？」

「そ、そんな事はない！ ただ、今の状況を」

「今の状況じゃなきゃダメなんです。大体、貴方はいつもそう」

クドクドとウールが日頃の不満をぶちまける。流石のワノールもそれには言い返す言葉も無かった。それは、ウールを十数年も一人にしていた事から生まれた不満だった。

はいはい、と小さく頷くワノールは、完全に尻に敷かれて居る様だった。

そんなワノールを助けるかのように、上空から声が聞こえる。

「うおおおい！ 何をしとるんじゃ！ そんな所で」

ノーリンの声だ。その声の方へと顔を向けるワノールは、先程までとは打って変わって力強い口調で返答する。

「それより、この炎はどういう事だ？」

「カインじゃ」

「な！ か、カインだと！」

「それじゃあ、本当に……」

ウールが悲しそうな目をする。ウールはカインの事を息子の様に思っていた。あの日、ワノールがカインを連れてきた時から。だから、カインがあんな風になってしまった事を、ワノールの口から聞かされた時、信じる事が出来なかった。

胸の前で手を組むウールに目をやるワノールは、ノーリンの方に目を向け静かに言う。

「悪い。ウールを頼む」

「うむ……。分かった」

「すまん」

「気にするな。それより、どうするつもりじゃ？」

深刻そうなワノールは、その問いに静かに背を向ける。瞬時にその行動の意味を悟るノーリンは、小さく頷く。

「そうか。ワシもすぐに後を追う。無理はするな」

「分かっている。ウールを頼むぞ」

「あなた！」

潤んだ瞳を向けるウールは、ワノールを後ろから抱き締め呟く。

「気をつけてください。それから」

「大丈夫だ。俺に任せろ」

ワノールの手がウールの手に触れる。

「あいつは、必ず取り返す」

「あなた……」

「熱いのは周りだけにしちやくれねえか？」

呆れた口調でノーリンが言う。  
その言葉に二人は赤面し背を向け合った。  
半笑いを浮かべるノーリンは、小さく息を吐き頭を左右に振る。

「もういいのかわう？」

「あ、ああ。も、もういい」

「そ、それでは、よろしくお願いします」

テレを隠す様に早口の二人をノーリンはじと目で見た。今更テレを隠してどうすると、言いたげな眼差しのノーリンは、短く息を吐きウールを抱える。

ワノールとノーリンの視線が一瞬だけ交わるが、すぐに背を向け合った。

一方は火の海に向って。

一方は空へ向って。

言葉を交わす事無く走り出した。

宙を舞うノーリン。その背後には炎上する森。灼熱地獄。熱風が吹き、火の子が弾ける。その音にセフィーが意識を取り戻した。

「うつ……うつ、ここは？」

まだボンヤリとしているのか、セフィーの眼は虚ろだ。しかし、状況を把握したのか、鋭い眼差しをノーリンの方に向け叫ぶ。

「は、放して！ この手を放せ！」

「な、なんじゃ！ 暴れるでない！」

「セフィーさん！ 落ち着いてください！」

「うるさい！ 放せ！ 私は……私は……」

暴れていたセフィーが大人しくなり、声を殺し涙を流す。

自分の無力さを改めて知った。自分ではウインスを救うことは出来ない。それ所か自分の身すら守る事が出来ない。

どうしていいか分からず、涙だけが流れた。

その思いがノーリンにも痛いほど伝わる。ノーリン自身も自分の無力さをよく知っていたからだ。それでも、今の自分に出来る事をやり遂げようと足を速める。

そして、森を抜けノーリンは小高い丘へと二人を下ろした。

「ここなら安心じゃろ。ワシはちいと戻る。やらねばならん事があるんでな」

「ありがとうございます」

「なに。礼には及ばん。ワノールとの約束じゃ」

「あの人をよろしくお願いします」

「わかつちよる。心配せんでまっちよれ」

「はい……」

小さく頷く。

ノーリンは恐持ての顔で微笑み、ゆつくりと背を向ける。

その大きな背を向けたままのノーリンの野太い声が、僅かにセフィーの耳に届いた。

「まっちよれ。あやつ目を覚まさせてやるからのう」

その言葉に、セフィーは更に涙を流す。

「ありがとうございます」

「泣くな。女子おなこは笑って待ってるだけでいいんじゃ」

ノーリンはそれだけ告げ空へと翔ける。そして、燃え盛る森の中へと消えていった。

静まり返ったその場に、火の粉の弾ける音だけが聞こえた。  
ある者は願う。

(あなた……あの子を )

ある者は決意する。

「この命に代えても取り戻す」

ある者は無力さに涙を流し、祈りを捧げる。

(お願い……ウインスを )

そして、ある者は

「怒り、悲しみ、苦しみ。全てを解き放つ。我の拳で」

目覚める。己の力に。

そして、誓う。己の拳に。

## 第76回 激突

木々が揺れる。炎を纏って。

風が吹く。火力を更に強める様に。

火の粉が舞い、木々が弾ける音を起てて崩れる。倒れた大木を挟んで対峙する二つの影。

燃え盛る深紅の髪が炎と同化する様に静かに揺れ、漆黒の瞳を炎が赤く照らす。唇が僅かに開き、息が静かにゆっくりと吐き出され、全てを吐き出すと口の端を緩め不適に笑う。その視線の先には大木の向こうに佇む、怒りに狂う少年の姿がハッキリと映っていた。

握り締めた柄。震える拳。怒りに身を任せた結果がこれだ。体の節々が痛み、立っているのがやっとの状況。それでもウインスは炎の向こうに映るカインを睨みつけていた。

独特の民族衣装は周囲の炎によって所々が黒焦げ、肌も煤で黒く染まっている。両手で握る牙狼丸の切っ先がウインスの呼吸する度に地面に触れる。

眼光の鋭さは変わらないが、明らかに呼吸は乱れていた。喉が乾き意識が朦朧とする。酸素が頭まで回っていないのだ。周りの酸素は全て炎に食われ、ウインスには全くと言う程酸素が与えられていなかった。

呼吸一つ乱さないカインの目がふてぶてしくウインスを見据え、ゆっくりと歩みを進める。足元に散ばった灰や炭はカインの体重で音も無く碎け散った。右手に持った高熱を帯びた青空天の刃が振り翳される。

「邪魔だ」

赤の閃光が真っ直ぐに落ちる。風を裂く鋭い音が、木々の燃える音の合間に僅かに聞こえた。二人の間に倒れていた大木が、火の粉

を噴き切断され左右に舞い上がり、火の中へと消えていった。

距離が縮まる。その距離、約十メートル。一瞬でも気を抜けば互いに致命傷を与える事の出来る距離。

生唾をゴクリと呑む。幼さ残る顔には汗が滲み、頬を伝って大粒の雫を顎先から落とす。だが、その雫は地に落ちる前に消滅する。周囲の熱が水分を奪ったのだ。

「我、全ての風を操る者なり。今解き放つ。風よ全てを」

「今更遅いつて」

「クッ！」

間合いを詰めたカインが青空天を振るう。それにウインスは牙狼丸をぶつけた。互いの刃がぶつかり合い、火花が散る。互いの力で刃が離れ、もう一度違う角度から刃を振るう。下段から切り上げられた牙狼丸。中段から横一閃に伸びる青空天。二つの刃がもう一度交差し激しく火花が迸る。

「ウゲッ」

「甘いよ。燃え上がれ」

一瞬視界が眩んだウインスに向って、青空天が突如炎上する。それは牙狼丸を呑み込み、ウインスへと襲い掛かった。

「黒鷲！」

ワノールの声が響いたのは、炎がウインスに直撃する寸前だった。小さな舌打ちと同時にその場を飛び退いたカインの目の前を黒の刃が通過する。その瞬間にカインの視線がワノールの方へと向けられた。

鋭い眼差しに右目の眼帯、顔の傷。全てを見据えた時、カインの



胸の奥で何かが鼓動を打った。

「ウグッ……。な、何だ……」

突然の事に膝を落としたカインは、青空天で何とか体を支える。  
黒刀・烏を構えなおすワノールは、一旦ウインスの方に視線を向けた。

「悪いが、そいつは俺の相手だ」

「ふざ……けるな！」

地を蹴り、牙狼丸を振り翳す。

「お前の相手をしている余裕は無いんだ。悪いが少し退いてくれ」

「なっ！」

ウインスが驚くのも無理が無い。ワノールは黒刀・烏を鞘にしまい、無防備な姿で立っていたのだ。

「なめるな！」

「なめては無い。ただ、お前の相手は俺じゃない」

「ざけ　グッ」

牙狼丸の刃が振り下ろされるより先に、頭上から降りて来た巨体によって地面に押さえつけられた。

「グッ！　邪魔をするな！」

「悪いのう。ウヌの相手はワシがしてやるっ」

背中に座り頭を地面に押し付けるノーリンは、ワノールの方向に目を向けた。ワノールもその視線に僅かに頷き、歩を進める。そして、二人の体が交わるその瞬間、僅かに唇が動く。

「すまん。知り合って日の浅いお前にこんな事をさせて」

「気にするな。ワシも約束を果たさねばならん。男は女子の想いをかなえてやらねばならぬ生物だからのう」

「フツ……。変わった奴だな。お前も」  
「それはお互い様じゃがな」

互いに皮肉を言い合い、微かに笑みを浮かべた。

ワノールはそのままノーリンの横を通り過ぎ、腰の黒刀・烏の柄に右手を添え、カインの顔を真つ直ぐに見据える。その視線に臆したのか、一瞬表情を強張らしたカインはその場を飛び退き、青空天を構えなおす。

一方、ウインスを押さえつけるノーリンは、ワノールとカイン両者の戦いを邪魔しない為に、ウインスの動きを拘束しつつ空へと舞う。この場を離れる事で、ワノールも本気でカインとやりあえると踏んだのだ。

「さて、ワシらはどうするかのう」

「うぐっ！ 放せ！」

「うるさい奴じゃな」

糸目を歪めノーリンがウインスから手を放す。地上までの距離百米ートル程。その高さから落下するウインスは、バランスを整えようと宙に浮くノーリンを睨む。

火の海へと呑み込まれていく最中、突如炎が渦を巻く。ウインスの足の裏に向つてとぐるを巻き吸い込まれていく。風が炎を呑み込み紅蓮の螺旋の玉を作り出す。

遠ざかるウインスの姿を見下ろすノーリンは拳を握り締めると、空を蹴り急速落下する。糸目を見開き両拳を脇に抱え込む形で、頭から突っ込むノーリンはその視界に牙狼丸を構えるウインスの姿を捕捉した。

「クツ！ 止まれん……」

「裂け！ 牙狼丸！」

足の裏に集められた螺旋の玉が破裂音を轟かせウインスの体を押し上げる。ノーリンとウインスの距離が縮まり、振り上げられた牙狼丸の刃が空を裂きノーリンの頭に向って振り下ろされる。表情を歪めるノーリンは無理矢理体を捻ると、勢いそのままに僅かに軌道を修正した。

刃が空を切り、ウインスの横をノーリンの体を通り過ぎる。スピードを落とす事の出来ないノーリンは地上に激しく激突し、ウインスも風を上手く集める事が出来ず地上に落ちた。

「ウツ……クツ」

体を起したウインスは辺りを見回す。カインと大分離れた所に落とされたと気付いたのか、小さく舌打ちをして地に触れる。周囲の炎など全く気にしておらず、自らの体を風に包み込む。風は周囲の炎を更に強め、高々と火の粉を飛ばした。

「ワシなど眼中に無い……と、言うわけか？」

足音と共に聞こえた野太く低い声がウインスの動きを止めた。顔を上げその人物を睨む。地上に頭から突っ込んだはずのその人物は、傷一つ無い姿でウインスの目の前に居た。

「驚いている様じゃな」

「……クッ！」

険しい表情を浮かべたウインスは地を蹴ると、牙狼丸の切っ先で地面を抉りながらノーリンへと向っていく。土埃が舞い、刃が揺れる。地面にひかれた線は歪んでいるが、刃はノーリンに向かって切り上げられた。

少量の砂と土埃を舞い上がらせ切り上げられた牙狼丸の切っ先が、ノーリンに触れるその瞬間、ピタリと動きを止める。

「ッ！」

眉間にシワを寄せたウインスは柄を握る手に更に力を込めた。だが、牙狼丸は動く事も無くノーリンの拳がウインスの顔に飛んできた。

「うぐっ」

拳が頬を直撃し、ウインスの手が柄から離れた。体はそのまま地を転がり、ウインスはうつ伏せに倒れる。

「今のウヌに武器など不要」

「黙れ黙れ黙れ！ 牙狼丸を返せ！」

「返して欲しければ、力付くで取り返して見せる」

ノーリンは右手に持っていた牙狼丸の刃をそのまま地面に突き立てた。

## 第77回 ワノールの想い カインの決断

足音が二つ。

燃える森の中で聞こえた。合わせて、澄んだ金属音が響き、青白い火花が美しく散る。

淀んだ蒼の刃と輝く漆黒の刃。何度も交差しぶつかり合う刃同士が共鳴する様に刀身を震わす。

「少し腕が鈍ったか？」

漆黒の上着の脱ぎ捨てたワノールが、ゆっくりと視線をカインに向ける。呼吸が僅かながら乱れていた。流石にカインの動きを片目で追い続ければ、息も上がってしまう程体力を消耗してしまう。その為、持久戦に持ち込まればワノールに勝ち目はない。

額から溢れる汗を拭う事すらせず、ただ目の前のカインを見据える。カインの体が右へ傾き、ワノールの左目もそれを追う様に左へ流れた。

その瞬間、ワノールは気付く。この動きがフェイントで、既に次の動き出しの予備動作をカインが終えている事も。

「チッ！」

右手に持った烏を瞬時に逆手に持ち替えたその刹那、カインが視界から消え、耳元で鈍い金属音が広がる。振り抜かれた青空天を、逆手に持った烏で受け止めるが、既にカインの二発目がワノールを襲っていた。

「ぐふっ！」

強烈な膝蹴りがワノールの腹部を捕捉し、体ごと宙に蹴り上げる様に一気に振り抜かれた。両足が地から離れる感触と同時に、口から鮮血を噴出す。背中を激しく地面に打ち付けても勢いは止まらず、そのまま二・三度地面を転げた。

ワノールは仰向けに倒れ、口元に残る真っ赤な液を左手の甲で拭う。左手の甲と口元で擦れた赤い液は、薄らと線を残す様に頬の方まで広がった。

「いつまで手を抜くつもりだ？ 俺はあんたの本気を知っている」

静かな足音と内に秘めた殺気をワノールは感じ取り、ゆつくりと上半身を起こす。膝蹴りをまともに受けた為、まだ腹部に痛みは残っており、体は重かった。

それでも、何食わぬ顔で、堂々とした表情で立ち上がり、カインの目を真っ直ぐに見据える。

「クッ！」

苛立ちがカインを襲う。ワノールの堂々とした表情に、胸がザワメキ何かが入り込んでくる。感じるはずの無い恐怖を感じ、自分と言う存在が薄れていくのが分かった。

そして、悟る。砕かれた存在　もう一人の自分とは正反対のカインが　闇の中でそれがあがない僅かな光りを放つ。それは、本当に小さな消えてしまいそうな灯火だったが、とても温かく自分と言う存在を包み込む。

心に生まれたちっぽけな存在に、カインは戸惑い動きが止まる。青空天がゆつくりと下ろされ、地面に切っ先を向け宙ぶらりになった。

様子がオカシイ事は、ワノールもすぐに気付いた。だが、迂闊に手を出す事が出来ず、その様子を窺う事しか出来なかった。

「うぐああああっ！ この体は俺の物だ！ 俺は消えん！ 俺にはなすべき事がある！ 誰にも俺の邪魔はさせん！」

カインが吼え、青空天を高らかと振り上げる。それだけで熱風が吹き、ワノールの体を襲う。

「うっ……」

右手で顔を庇いながらその場に踏み止まるが、足場が圧力に耐え切れず砕け、ワノールは吹き飛んだ。体が空中で一回転し、大木に腰から激しく激突する。

「ぐあっ！」

短音の声を上げワノールの体が地面に転がった。

「ハア…ハア……」

荒々しい呼吸で、ワノールを見据えるカインの表情は、焦りから僅かに強張っていた。

振り上げた青空天は炎を纏い、空へ昇って行ってしまいそうな程高らかと舞い上がる火の粉が、蒼い空へと消えていく。

うつ伏せに横たえるワノールは、乾いた咳を二・三すると、弱々しく顔を上げた。右の口角が切れ、大袈裟に唇の先から血が滴れ、それが地面を赤く染めた。

「うああああああっ！」

咆哮が轟き、大気が震え、地面が砕け上がる。宙を舞う破片は音

も無く粉と化し空へと消えた。

禍々しい炎がカインの体を包み、紅蓮の髪が逆立つ。全ての炎が青空天へと集まる。森を焼き払う炎すらも吸収し、青空天が高熱を帯び鮮やかな赤い光りを放つ。炎が消失し黒煙が上がり、焦げ臭さが周囲を包んだ。

体を起したワノールは、<sup>カラス</sup>鳥を構えると、ゆっくりと静かに息を吐く。体の痛みが引いて行く、そんな感覚を覚え、不思議と体が軽くなった。単なる錯覚なのだが、今のワノールにはその痛みを忘れる程の想いがあり、全神経を研ぎ澄まし、カインの全てを見据える。振り上げた青空天から足のつま先までの僅かな動きすらもその眼で確実に確認する。

「カイン。この一撃で全てを終わらせる。お前の悪夢も、お前を縛る鎖も、全て断ち切る」

「うおおおおっ！」

「斬撃一閃！ 飛翔・黒鳥！」

右足を踏み込むと同時に、黒刀が素早く右方向へと地面と平行線を描きながらスライドされた。斬撃が飛ぶ。翼を広げた鳥の様に、宙を滑走し、カインへと向う。

だが、その斬撃にカインも振り上げた刃を振り下ろす。斬撃と刃が触れた瞬間、青空天の刃に亀裂が走り、紅蓮の炎が一拳に弾けた。

爆音が周囲を呑み込み、深紅の火炎が衝撃と高熱を波紋状に外へと広げた。黒焦げた木々が衝撃を受け砕け、高熱を浴びて消滅する。鳥を地面に突き刺し衝撃に耐えるワノールは、その目で衝撃の中心に居るカインを見据えるが、炎がそれを遮った。

「クッ……カイン！」



呻くような声は、衝撃音で掻き消され、その姿も炎の中へと呑みこまれた。

吸う息が熱く、喉が焼ける様な刺激を受ける。意識を何とか保っていたワノールも、遂に崩れ落ちる様に地面へと倒れこんだ。

『ワノールさん……』

微かに聞こえた声。

(誰だ?)

『僕は』

聞き覚えのある懐かしい声。

(この声……)

『自ら』

金髪の髪に幼い笑顔が浮かぶ。いつも自分の横を歩いてきた幼い少年。自分とは正反対の優しく笑顔の絶えない少年。記憶の中で走馬灯の様に思い出が繰り返し流れていき、あの笑顔を最後にプツンと全てが途切れた。

『ありがとうございます』

(カイン!)

声と同時に視野が広がる。意識が戻り、瞬時に炎の中心に居るカインの姿を捉えたが、火力が強くて詳しい状況は見えない。だが、次の瞬間、火力が急激に弱まり、弾ける様に全ての炎が消滅した。

「……………」

無言で立ち尽くす影。それは、紛れも無いカインの姿だった。乱れた金髪の髪が、美しく風に揺れる。終わったのだ。あの悪夢が。

「カイン！」

立ち上がるが、体が思うように動かずバランスを崩して地面を転げた。体中に激痛が駆け巡り、足が鉛の様に重く感じ、すでに立つ事も出来なくなっていた。相当、足に来ていたのだろう。ここまで動けたのが奇跡の様なモノだ。

動くのが無理だと判断したワノールは、顔だけを上げてカインの方に眼を向ける。

右手が腹部の前で拳を作り、親指側を腹に押し当てていた。無傷で立ち尽くすカインがフラフラとよるめき、口の端からツーツと血を流す。一滴の血が零れ落ちた。だが、それは口から流れた血ではなく、右手の中から零れた血液だった。

突然の事に驚くワノールだが、立ち上がる事も出来ず、ただひたすら叫んだ。

「カイン！ ど、どうした！」

「……………」

返答は無くカインの体がゆっくりと膝から崩れた。そこで初めてワノールは真実に気付き、腹に押し当てていた右拳の意味を知った。

## 第78回 馬鹿馬鹿しい

いつしか炎は消えていた。

焼け焦げた木々から黒煙が昇り、焦げ臭さが辺りを包んだ。

対峙する二人。巨体のノーリンと小柄なウインス。地面に突き刺さった牙狼丸を挟み向い合う二人の間に一陣の風が吹き抜ける。それが、開戦の合図だったかの様に二人が同時に地を蹴った。

後塵が舞い、二人の距離が縮まる。両者の視線がぶつかり、互いに拳を突き出す。だが、身長差からウインスの拳が届く直前にノーリンの拳が頬に減り込んだ。

「ぐふっ」

血を吐き軽々と吹き飛ぶ。小柄な体は地面を乱暴に転がり、数十メートルの所で動きを止めた。口角が切れ血が滴れる。一滴、また一滴と零れた血液が、地面に落ちると乾いた土に滲み込んだ。

体を起したウインスを睨む。右手にまだ殴った感触が残り、拳に僅かに血が付着していた。その血を左手で拭い、鋭い眼差しを向けたまま口を開く。

「目は覚めたか？」

「ふざけるな……。俺の邪魔をするな！」

立ち上がり地を駆ける。小さくため息を漏らすノーリンは、首を左右に振ると、

「まだ、目は覚めんか。ならば、目が覚めるまで何度でも殴ってやるっ」

硬く拳を握り締めると向って来るウインスに向って真っ直ぐに突き出す。だが、ウインスは素早く上半身を左へと反らし拳を避けると、そのままノーリンの右側面へと回り込み、右拳に風を集める。

「甘い！」

野太い声がこだまし、ノーリンの上半身が沈む。そして、腕よりも太い脚が僅かに視界に入った。直後、踵が首の側面を捉え、上半身ごと力で弾き飛ばした。

体が地面を抉り土煙が舞い上がる。何が起こったのかと考えるが、すぐに答えは出ず、暫く放心していた。

「うぐっ……。てめえ……」

「まだ、動けるか……」

「全てをぶつける！ 全ての風を！」

口から流れた血を拭い、左手で右手首を握り、静かに息を吐く。

突如風が吹き抜け、右手に風が圧縮される。

吹き抜ける風に、顔を顰めるノーリンは、小さく息を吐くと緩やかに地を蹴る。すると、体がゆっくりと宙へと上がり、一步踏み出す度に階段を上がる様に、空に上っていく。

空は静かだった。風も無くただ蒼く澄み渡る空。今、地上で起きている事などに全く興味が無いと、言わんばかりの美しさ。その美しさにノーリンは不自然さを感じていた。誰かが今も空から地上を見据えている様な、不思議な感覚だ。

「汝は何を想う。汝は何を願う。汝は何を……」

声を濁し俯く。その視線の先にはウインスの姿が映る。先程とは違い、真っ直ぐな目がノーリンに向っていた。二人の視線が混ざり

合い、呼吸を合わせたかの様に同時に動き出す。地を蹴るウインス。空を蹴るノーリン。

風を足の裏に集め、勢い良く空に舞うウインスは、真っ直ぐにノーリンに向う。ノーリンも腕を脇の下に構えると、ウインスに向けて急降下する。

「くらえエエエエ！」

風を纏った拳を突き出すと同時に、大きな手がその拳を包み込んだ。衝撃が肩を襲い、体に重々しい重圧が一拳に押し掛かり、ウインスの体は地上に一瞬にして叩き付けられた。地面が砕けウインスの体が瓦礫に埋もれていた。

「ぐっつ……」

「まだやるつもりか？」

少し離れた場所に立つノーリンが、ウインスを見下ろす。左手からは赤い雫が数滴零れ、指先が軽く痙攣を起こしていた。

瓦礫から起き上がったウインスは、服に付いた細かな土を払い大きく息を吸い込むと、ノーリンの顔を真っ直ぐに見据え、拳を握り締めすぐに力を緩めた。

「ふっつ……。馬鹿馬鹿しいな……」

ボソリと呟き、空を見上げたウインスは、静かに笑う。ちっぼけな自分が可笑しくて、自分のしてきた事が馬鹿馬鹿しくて、涙が零れ落ちた。姉を傷つけてしまった事を後悔し、牙狼丸の力に呑み込まれた己の未熟さに怒りが沸々と込み上げる。

目を閉じ涙を堪え、もう一度硬く拳を握った。爪が突き刺さり拳から血が零れる。

「クツ！ 俺は……また……」

「正気に戻った様じゃな。全く、世話の焼ける奴じゃ」

首の骨を鳴らし、ノーリンは小さくため息を吐いた。その目は穏やかな糸目へと戻っており、もう戦意は感じられない。二人の視線がぶつかるが、ウインスはすぐに視線をそらした。

「悪かった……色々。あんたには迷惑を掛けた」

「な〜に気にするな。ワシも好きで首を突っ込んでいるんじゃ。それに、約束じゃからな。ウヌの姉方との」

「そうか……。それで、姉さんは無事なのか？」

視線を合わせそうとはせず、俯いたまま問う。その問いにノーリンは答えず、ただ真っ直ぐにウインスを見据えた。

沈黙が続き、静寂が支配する。穏やかな風が黒煙を揺らした。

「……どうなんだよ」

沈黙に耐え切れずウインスが急かす様に言葉を紡ぐ。

「おい。聞いているのか？」

「ああ。聞いたとるぞ」

「じゃあ、答えろ」

「断る。それは、自分の目で確かめる事だな」

笑みを浮かべるノーリンに、「クツ」と小さく呻いた。鋭い眼差しが真っ直ぐにノーリンに向けられ、ノーリンもその目を真っ直ぐに見据える。

また沈黙が続き、二人の睨み合いが続いた。だが、それを裂く様

に上空から騒音が響き、巨大な影が二人を包んだ。

「な、何だ！」

「ようやく到着かのう……………」

「到着つて……………」

「うわあああああつ！」

叫び声と同時に地上に一人の青年が落下した。上空に浮かぶ真っ赤な飛行艇から落ちて来たモノと見て間違いないだろう。

土埃と瓦礫を巻き上げたその人物は、「イタタタツ」と声を上げながら立ち上がった。細身でウインスよりも一回り大きく、ノーリンよりも一回り小さく見えるその肉体は、意外な程引き締まった筋肉で包まれていた。土にまみれた深く色鮮やかな蒼色の髪を揺らし、灰色の瞳がノーリンとウインスを交互に見据え、

「……………誰？ あんたら？」

首を傾げて問いかけた。

右の眉を僅かに吊り上げたノーリンは、右手で頬を掻き、小さなため息を吐くと、穏やかな口調で聞く。

「お前こそ誰なんじゃ？」

「……………」

質問に答えず、青年は真っ直ぐにノーリンの顔を見据える。その眼差しは真剣で、何故かノーリンの方が堪えきれず言葉を発した。

「な、なんじゃ。ワシの顔に何か付いとるのか？」

「巨体……………起きているのか分からない程の糸目……………右頬に三ツ星……………」

……………白髪……………つて事は、あんたがノーリンだな。それから、チビ、お……………」

前がウインスだろ？」

「ち、チビって、他にもつとあるだろ！」

「いや……。ティルがチビとだけしか……。あとは、ガキだとも言うてたかな？ うん。すぐ分かった。説明が上手いな」

無邪気に笑う青年を見据えるウインスは、僅かに拳を震わせノーリンに尋ねた。

「俺は、アイツを殴っていいの？」

「まあ、良いんじゃないか？ 一応、許可は取つといた方が良くもしれんがな」

「へっ？ 何々？ 何の話？ 俺も混ぜてくれよ。おおっと、忘れる所だった。俺はカシオⅡラナスってんだ。よろしくな。ちなみに、水呼族だぜ！ 歳はこう見えて十九歳！ もうすぐ二十歳になるけど、お酒は飲まないから誘うなよ。酔って溺れて死にたくないからな。って、水中で息できるから溺れないか！ アハハハハッ」

早口で話の内容の半分も聞き取れなかったウインスとノーリンだが、取り敢えず一つだけ分かった事があった。彼は“馬鹿”なのだ。



## 第79回 何故

「いや〜。マジごめん。喋りすぎた」

頭に大きなコブが一つ。それでも尚笑い続けるカシオは、一人でペチャクチャと話を続けていた。

そんなカシオを無視して、ティルがノーリンとウインスの方に眼を向け、不思議そうに首を傾げる。

「なんじゃ？ さっきの踵落としに不満があるのか？」

「いや……。アレは忘れてくれ……」

「何だよ。カツコ良かったぞ。踵落とし」

恥ずかしそうに視線をそらしたティルは、右手で顔を隠す様に額を押さえた。

あのカシオのコブは、ティルの踵落としによって出来たモノだ。

しかし、それは事故で故意があった訳ではない。飛び降りた時に強風が吹き、バランスを崩して、長々話しをするカシオの頭部に踵が落ちた、と言うだけの事故だったのだ。

だが、傍から見れば、『うぜえんだ！』と、言う様な形の綺麗な踵落としだった。その為、ウインスもノーリンも誤解をしている訳だ。

「それより……ワノールはどうした？ 確か、ワノールとカインもいると聞いていたが？」

「あつ……。忘れとった」

「忘れんなよ」

ウインスが鋭くツツコミ、ノーリンが大らかに笑う。呆れた様に

眼を細めるティルは、

「それで、何処にいるんだ？」

「知らん」

「ああ。分かんねえ。色々あつたからさ」

質問に対し、即答したウインズとノーリンが、息もピッタリに笑った。一瞬イラツとしたが、ティルもそこまで短気ではなく、落ち着いた口調でもう一度問う。

「じゃあ、お前達はどの方角からきたんだ？」

「さあ？ 何処じゃツたかな？」

「空の上だつたからな……」

次は同時に首を傾げ、また顔を上げ同時に笑う。今度は何故かカシオも一緒に。流星にそれにはティルも切れた。

「はうーっ……。痛いよ、ティル」

「何でワシまで……」

「つてか、俺、ティルよりも歳上なんだけど？」

各々が不満をブチマケながらティルの後に続く。焼け野原となつた森を探索する四人。目的はワノールとカインを見つけ出し、飛行艇へと連れて行く事。それが、ティルに与えられた任務であったが、何故かオマケにカシオがついて来ていた。

飛行艇に居た時と違い、生き生きとした表情を浮かべるカシオは足取り軽く、踊る様に最後尾を歩いている。それが、ティルには目障りだった。

「おい……カシオ……」

「何だ？ もしかして、一緒に来てくれてありがとうでも言うのか？ そんな事でお礼なんて言うなよ。俺とお前の仲じゃないか」  
「目障りだ。消えろ」

「嫌だよ。飛行艇に居ると気持ち悪いし」

ブーブーと文句を言うカシオに腹が立ったが、これ以上何を言ってもコイツに効果が無いと、テイルは沈黙した。

それと同時に、ノーリンが足を止め右方向へと顔を向け、

「コツチじゃ」

と、呟き走り出した。その後を無言で追うテイルとウィンス。一方のカシオは、少々不満そうに足取り重く二人の後を追った。

「本当にここでいいのか？」

「さあ？ 俺に聞くなよ」

「あうっ……飛行艇に戻りたくネエ」

「うるさいぞ。お前」

愚痴るカシオを怒鳴ったテイルは、ノーリンの背中を真っ直ぐに見つめた。

暫く走り、ノーリンが足を止めた。その視線の先にはワノールがいた。足元には漆黒の刃が煌き、その先で蒼い刃の切っ先が天を指していた。カインの腹部を貫いて

「おい……これって……」

絶句する一同。ここで、何が起ったのか、咄嗟にそんな事を考えるが、

「ルナは何処だ！」

この一喝ですぐに現実に戻る。

「ウインスには飛行艇まで行ってもらおう。この中じゃ、お前が一番素早いからな」

「分かった。でも、飛んでいるのに、どうやって俺が？」

「まあ、それはワシがどうにかしよう」

「どうにかって」

ウインスが言い終える前に、ノーリンが襟首を掴み地を蹴り上空へと飛び上がる。体に押し掛かる重力に一瞬意識を奪われそうになったウインスだが、それを堪えて力一杯怒鳴った。

「い、いきなりなにすんだ！」

「ここから投げる。お前は風を足の裏に集めておれ」

「お、おい！ 話を ……ぐあああああっ！」

ノーリンの太い腕からウインスが放たれた。弾丸の如く宙を貫き、ウインスは空へと消えていった。

「一体、何が起こったんだ」

テイルの問い掛けに、ワノールは答えなかった。ワノール自身、何が起こったのか知るよしもなかったからだ。沈黙が長く続き、重々しい空気が漂った。

結局、飛行艇が来るまでこの沈黙は続き、カインは青空天を体に刺したまま医務室へと連れて行かれた。

「ルナ……カインを頼む」

「分かっています……」

医務室へと入ろうとしたルナの腕を、フォンが掴んだ。その場に居た皆がその行動に疑問を抱く。

「やっぱ……ダメだ……」

「お前！ 何を言ってるんだ！」

「放してください。フォンさん」

「いや……ルナに力は使わせない！」

その言葉で、その場の空気が一変し、ワノールがフォンの胸倉を掴み上げた。

「どっぴうつつもりだ！」

怒声を響かせフォンを睨み付ける。だが、フォンはワノールの顔すら見ようとせず、黙り込んだ。誰もワノールを止め様とせず、二人のやり取りを見据える。

その一方で、空色の少女だけが、彼を庇う様に言葉を発した。

「や、止め様よ！ こんな時に」

「こんな時だから、ルナの力が必要なんだから！」

「で、でも……」

「……話したのですね」

空色の髪を揺らすミーファを、真っ直ぐな瞳が見据える。何かを訴える様な強い視線に、ミーファはゆっくりと頷いた。

「ごめん。でも、私は」

「もういいです」

僅かにルナの声が籠り、目元に涙を見た。それを見たのは、ミーファだけだが、その場にいた皆が異変を感じたのは確かだった。

腕を掴むフォンの手を振り切り、静かな足取りでその場を去っていくルナの後ろ姿に、不安を感じるフォンだったが、これでいいのだ、と言い聞かせ俯いた。胸倉を掴んでいたワノールも、その手を放し奥歯を噛み締める。

「貴様の顔など見たくない！　ここから消えろ！」

「…………ごめん」

「うるさい！　早く俺の視界から消えろ！」

「…………」

フォンの発言など許さない、と言わんばかりの怒声に、フォンもその場を去っていった。残ったのは沈黙だけで、誰も口を開こうとしなかった。そして、一人、また一人とその場を離れ、そこにワノール、ミーファ、ティルの三人が残された。

オドオドするミーファに対し、ティルの鋭い視線が向けられる。全ての原因をティルは把握しており、ゆっくりとミーファの前に足を進めた。

「どついう事が説明してもらおうぞ」

「エッ…………うん…………」

戸惑いながらも、頷いたミーファはワノールの方に眼を向けた。医務室の扉に頂垂れる様に両拳をぶつけ動かない。今、話をしてもきつと分かってもらえない、とミーファはティルを連れ、その場を離れた。

## 第80回 魔獣人の日常

暗黒の闇の中にそれはいた。

金色の眼がギョロリと動き、闇の中を嘗め回すように見据え、不気味な音が鳴り響く。獣が喉を鳴らす様なそんな不気味な音。時折聞こえる鉄を引き摺る音もまた、不気味さを際立たせていた。

そんな闇の中で、靴の踵がカツカツと音を起てる。音に反応する様に金色の眼が静かに動き、数本の牙をむき出しにして口が開かれた。

「ウウウウウウツ……」

獣の様に押し殺した声が、闇を震わせる。

「又ハハハハッ！ 私の最狂の僕しもへ。ようやくキミの初舞台が決まりましたよ！」

「ウウウウウウツ！」

不気味でいやらしい声に、獣の押し殺した声が更に大きくなった。そして、闇の中に銀縁のメガネが浮かび上がり、ボサボサの白髪と薄気味悪い白衣を着た男が姿を見せる。気色悪く笑みを浮かべる白衣の男は、ズレ落ちるメガネを右手で直し、ゆっくりと足を進め左手に持った黄緑色の玉を獣の方へと向けた。

「これが、何だか分かりますか？」

「風魔の玉か……珍しいモノを持っているな」

「だ、誰です！」

突然の声に驚きの声を張り上げた男に、羽音を響かせながら上空

から一人の女性が降り立った。闇に溶け込む漆黒の大きな翼が風をかき、突風が闇の中で吹き荒れ、時折ガラスの割れる音が響き渡る。白髪の男は、ズレ落ちるメガネを掛け直すと、焦りと不満の入り混じった眼で空から降り立った女性を見据える。

「どう言つつもりなんですか？ 私の研究室には勝手に入るなと

」

「勝手に？ 私はちゃんとノックした」

「ノック？ いつの事ですか？」

「お前の来る一時間ほど前だ」

当然と言わんばかりの黒髪の女性に、呆れた様な表情を向ける白衣の男は、ボサボサの白髪を乱暴に掻きながら答える。

「私の居ない時に入る事を、勝手に入るっていうんですよ。分かります？」

「……まあ、そんな事どうでもいい」

「良くありませんよ」

ズレ落ちるメガネを掛け直しながら、濁った瞳で女性を睨み、左手に持った風魔の玉と呼ばれた玉を白衣のポケットに乱暴にしまう。艶やかな黒髪を靡かせる女性は、背中から生えた大きな翼を折りたたみ、静かな口調で訊く。

「私の頼んでたモノは出来てるか？」

「……あれですよ」

暗闇で不気味に輝く鋭利な刃物。それを指差す白衣の男は、ボサボサの白髪をもう一度掻きながら面倒臭そうに説明する。



「どうです。私の傑作ですよ。名を逆鱗。鱗模様の柄は手にシツクリ来ると思えますよ」

「うーん……。手触りが悪いが……。まあいい」

「それでは、出て行ってください。私はまだやる事が」  
「分かっている。どうせくだらない生物兵器を改良するんだろ」

そう述べ背を向けた女性は、静かに歩みを進め部屋を出た。静まり返った研究室に、また獣の押し殺した声だけがこだまする。一息吐いた白衣の男は、ズレ落ちたメガネを掛けなおし、白衣のポケットからもう一度風魔の玉を取り出し大声で笑う。

「又ハハハハツ！ それじゃあ、早速キミの改良を」

「悪いな。俺の武器を改良してくれるのか」

「又ツ……。なんです今度は……」

振り返った白衣の男の鼻筋に鋭く尖ったモノが僅かに掠り、男は鼻を押さえて叫び声をあげた。

「ぬわっ、ぬわにをするんですか！ と、言うかいきなり表れないでくれませんか！」

「何だ？ さつきから居たぞ」

「さつきから？」

「ああ。デイクシーが来る前から」

黒のマントに長い黒髪の男。これでは闇に溶け込んで姿が見えなかったのはしょうがないとして、なぜ今まで身を隠していたのか不思議に思う。顔の右半分を長い髪で隠す男は、差し出していたナイフをマントの中にしまい、ゆっくりとした口調で尋ねる。

「俺の武器を改良してくれ」

「今は忙しいんです。後にしてくれないか」

「規則上、お前の研究よりも、俺達の武器の強化・改良の方が優先されるはずじゃないのか？」

淡々とした感情の読み取れない口調でそう述べる男に、白衣の男はボサボサの髪を掻き耨り、小さくため息を吐いた後、風魔の玉を白衣のポケットにしまい静かに右手を差し出す。

「分かった。改良してやる。どの武器を改良するんだ？」

半ばヤケクソ気味の白衣の男の言葉に、マントを翻すと、何処からとも無く何十本と言う程のナイフを床に落とした。その数のナイフを前に、啞然とする白衣の男は床に落ちたナイフと男の顔を交互に見据え、ズレ落ちたメガネを直してから軽く眉間に人差し指を当てる。

「まさかと思うが、これ全部改良するのか？」

「……………ダメか？」

「と、言うが無理です。時間的に」

「そうか……………」

少し声のトーンが下がった。と、言ってもほんの僅かな違いの為、白衣の男には全く伝わらず、相変わらずの気色悪い声で尋ねる。

「一番使用する回数の多いのを改良するのでしょうか。私としても早く自分の実験を完成させたいので」

「……………分かった。なら、これを改良してくれ」

男は床に寝かされた一番刃の長いナイフを手にとった。綺麗な曲線を描く様な形の刃は、宝石の様に輝きを放っている。改良する必

要があるのかと、疑いたくなるほどの完成度を誇るそのナイフに、白衣の男は曇ったレンズの奥の目を僅かに輝かせた。

その表情の変化を男は見逃さなかった。瞬時にそのナイフの切っ先を白衣の男の方へと向け、鋭い目付きで睨んだ。

「妙な事は考えるな。コイツを改良・強化してくればいい。無駄な事はするな」

「わ、分かっていますよ。私とて、発明家の端くれです。武器に無駄なものなど必要ないのです。必要な美しさと殺傷力だけですよ。又ハハハハッ！」

「……………」

男は白衣の男が言った言葉を理解したのか、ナイフを下ろし柄の方を向け手渡す。その持ち心地にうっとりしてしまふ白衣の男だが、漂う殺気に緩めた表情を強張らせズレ落ちたメガネを掛けなおしながら口を開く。

「私に任せておけば大丈夫。確実にパワーアップしてみせますよ」  
「……………」

沈黙する黒髪の男は、鋭い目付きで白衣の男を睨み付けマントをもう一度翻す。すると、どういう事か、床にばら撒かれたナイフが一瞬にして消え去った。不思議な現象だったが、差して驚く事も無く白衣の男は預かったナイフを机の上に置く。

闇の中で薄気味悪く光ったナイフの刃がどうも興味をそそる。だが、男が出て行くまでは下手に改良できず、出て行くのをひたすら待つ。

沈黙だけが続き、二人の視線が僅かに交わり、長い黒髪の男の方が先に口を開く。

「メガネは直せ」

「わ、分かりましたから、早く出て行ってください！ 研究が出来ません！」

「……………研究もいいが、早急に改良してくれ」

「分かってます。早くて三日ほどで出来上がる。仕上がり次第届けますよ」

「……………」

もう一度沈黙する。そして、そのまま何も言わずに部屋を後にした。ようやく静けさを取り戻す研究室で、何やら挙動不審な動きをする。一通り不審な動きを見せた白髪の男は、ズレ落ちたメガネを掛け直し、安堵の息を吐き白衣のポケットから風魔の玉を取り出す。

「又ハハハハッ！ それでは早速」

「うるさいぞ！ ロイバーン！」

研究室の扉が開かれ赤髪の男が怒鳴り込んだ。その声にロイバーンと呼ばれた白衣の男は小さくため息を吐き「今度は何ですか！」と、半ば怒り気味に叫んだ。

## 第81回 右腕

深夜。

飛行艇に備え付けられたトレーニングルームに人影があった。幼さの残る顔に茶色の髪を揺らし、額から溢れる汗が頬を伝い顎から落ちる。呼吸は荒くただひたすら拳を振るっていた。

立てかけていた幾枚の鉄板には幾つもの拳の痕が残され、無残な姿で床に転がっている。包帯を巻かれた右拳には僅かに血が滲み、腕に力が入らないのか右肩が項垂れていた。

「ハア……ハア……。も……ングツ、もう一度だ……」  
「少し休んだらどうだ？」

幼く穏やかな声色に対し、少々冷たい声色が聞こえた。振り返ると、そこにテイルが居た。相変わらずの切れ長で鋭い眼に、腰に揺れる白に赤い模様の入った天翔姫。流石にコートは着ておらず、薄着のテイルは天翔姫のボタンを押し棍へと変える。白に赤い亀裂模様の入った棍の両端には龍と虎の顔が彫刻されており、それが金色に輝いていた。

「お互い相手がいる方が修行になるだろ？」  
「悪いけど、オイラは一人でやりたいんだ」

テイルにそう述べ、鉄板の方へと体を向ける。その刹那、風を切る音に合わせ棍が振り抜かれた。だが、それをフォンは軽く受け止める。

「何すんだ」

「……………」

無言でティルは棍を振るった。それをあしらい距離を取るフォンは、拳を握るとティルの顔を睨んだ。張り詰めた空気が室内を包み、ティルとフォンの二人が間合いを計る様にゆっくりと横に動く。一定の距離を保ち、互いにけん制しあう二人は、遂に動きを止める。

静寂に包まれ二人が静けさを裂く様に駆け出した。閃光が走り棍がしなり襲い掛かるが、拳でそれを弾き蹴りを見舞う。体を捻りそれをかわすティルは、体勢の崩れたフォンに向って鋭い棍を突き出す。体勢が崩れながらもそれを左腕で払い、フォンは距離をとる様にその場から飛び退いた。

呼吸を整えるフォンに対し、落ち着いた一定の呼吸法を保つティル。対峙する二人の睨み合い。黄色の瞳が血に飢えた獣の様に変化し、薄らと口元に牙が二本煌いていた。獣化なのだろうか、と不審に思うティルは棍を握る手を強めた。

「フウウウウツ……フウウウウツ……」

押し殺した呼吸法に、ティルは更に距離を取り棍を構えた。一瞬でも油断すれば首元を搔つ切られそうな程の殺気が眼に宿っていた。

「こりゃ、俺も本気でやんなきゃな」

額から冷や汗が流れ、引き攣った笑いを見せる。

息を吐くフォンが、身を屈めた。来る、と思った瞬間には、残像だけが残されその場から姿が消え、刹那に衝撃がティルを襲う。

「うぐっ！」

右の膝蹴りを間一髪で棍で押さえたが、体が僅かに後方に仰け反る。棍で押さえたと言え、衝撃だけは防ぎきれなかったのだろう。

腕が痺れ肩まで痛みが走る。

体勢を何とか保つテイルに、続け様にフォンの踵が振り下ろされた。

「チツ！」

小さな舌打ちをすると、棍を上げフォンの踵を受け止める。両腕に押し掛かる衝撃がテイルの体を押し潰そうとする。奥歯を噛み締め堪え、フォンをなぎ払う。空中で数回回転して着地するフォンは、獣の様に手を床に着きテイルを真っ直ぐに睨み付けていた。

呼吸を整えるテイルは、流石に焦りを感じていた。半獣化状態のフォンを相手に、無傷で済むはずは無い。それ所か、本気で殺されるんじゃないかと、思うほどだった。

冷や汗が流れ、この先どうするかと考えるテイルは不意にある事に気付く。包帯を巻かれた右腕が、明らかにオカシイ。通常の二倍程に膨れ上がり、異様な動きをしている。

「お前、その腕……」

「ウグツ……かはっ……」

突如苦しみだすフォンは右拳を鉄板に向って突き出す。自分の拳を砕かんばかりの勢いに、鉄板が衝撃を受け鈍い音を起てた。包帯の合間から血が吹き出、鉄板に血の色を残している。拳形に窪んだ鉄板は真っ二つに折れ床に落ちた。

濁った鉄音が室内に広がり、静けさが漂う。右肩を落とす深い呼吸を繰り返すフォンは、顔を僅かにテイルの方に向けた。

「分かったら……。今、オイラに近付くな……」

「どういう事だ？ それに、その腕……」

フォンの右腕。それは、もう人の腕ではなかった。獣 いや、獣と言うには大き過ぎ、怪物と言う方が正しい右腕だった。真っ赤な鋭い爪が、一滴の雫を零す。鮮やかな真っ赤な血の雫を。

「もういいだろ？ 早くここから出て行ってくれ……」

「だが、その腕は……獣化じゃ」

「頼むから出てってくれ！ オイラは……誰も殺したくないんだ」

俯くフォンの眼に僅かに涙が浮かんだ。天翔姫をボックスに戻したティルは、背を向け歩き出す。フォンの想いを悟ったのだ。歩き出したティルの背後から、苦しそうにフォンが口を開く。

「頼みが……ある」

「何だ？」

振り返ること無くティルは尋ねる。その声に、フォンの唇が僅かに動き、ティルもその言葉に頷いた。

「わかった」

静かにそう呟きティルは下唇を噛み締め足を進めた。二人の距離が遠ざかる。ティルが出て行くのを見届けたフォンは、変わり果てた右手でもう一度鉄板を殴りつけた。拳が裂ける様な音が響き、血飛沫が闇に舞った。

部屋の前に無言で立ち尽くすティル。中から聞こえる呻き声と鉄板を殴る音に、静かに天井を見上げた。

「あんな頼みを聞いてよかったのか？」

突然、そんな言葉が廊下の奥から聞こえた。低く渋い声に、天井



を見上げたままのテイルは、ボソツと呟く。

「お前、知ってたのか？」

「ああ。アイツが初めてここに来た時にな。それで、俺がここに案内したんだ」

「それじゃあ、あの時から……」

「随分前かららしいぞ」

「何！」

驚きの声を上げるテイルに、穏やかな視線が向けられた。闇に浮かぶ灰色の短髪の髪と、黒い瞳を真っ直ぐに見据える。二人の視線が交わる。ブラストと言う男の凄さが、ヒシヒシと伝わった。そして、何も気付かなかった己の未熟さに、拳を固く握り締めた。

「自分を責めるな。誰だって気付くわけ無いんだ。俺だってあんな事が無ければ気づかなかったさ」

「あんな事？」

「襲われたんだよ。あの右腕に」

ブラストはそう言い上着を脱ぎ背中を見せる。右肩から左脇腹にかけて深々と爪痕が残されていた。あのブラストが不意を突かれたと言え、ここまで酷い手傷を負うなどと、テイルは想っても見なかった。それ程まで、アイツの右腕は危険な存在なのだ。

上着を着直すブラストは、真剣な眼差しでテイルを見据える。沈黙するテイルに、ブラストは言い放つ。

「ちゃんと、奴の頼みを聞いてやれよ。まあ、死なない程度にな」

「ちよ、チヨット待て！ お前」

「んじゃ、俺は寝る」

背を向け歩き出す。右手を軽く振りながら。そんなブラストの背中を見据え、テイルは静かに息を吐いた。そして、ゆっくりとその場を去った。

## 第82回 最悪の未来

綺麗な夜空の見える飛行艇の甲板に一人の少年が立ち尽くす。  
冷たい風は冬の到来を感じさせる。

小さくため息を吐くと、切れ長の目を閉じた。風が頬に触れ髪を撫でる。黒髪が揺れ、静かに目が開かれた。

「どうかしたのか？ ミーファ」

振り返る事も無く言葉を発する。背後に立つミーファは空色の髪を揺らし、真っ直ぐな瞳を向けた。空色の綺麗な瞳。全てを見透かす様な澄んだ瞳が、僅かに潤んだ。その瞳を見て、ある程度の事を理解した。

「知ってたんだな」

「うん。ある程度は……でもね、ティル」

「心配するな。フォンは大丈夫だ」

「ううん。違うの。この先の事だけ……」

「この先の事？」

不思議そうに首を傾げるティルに、ミーファは深刻そうな表情で告げる。

「未来を見たの。とっても悪い未来」

「悪い未来？」

「うん。私達にとっては最悪の未来かも知れない」

「最悪……か。なら、訊かない方がいいだろうな」

「いいの？ 訊いていた方が」

ミーファの言葉を遮る様にティルが目を閉じ、自分の胸に手を当てる。

「俺は自分を信じる。己の力を、己の道を。だから、何も言わないでくれ。それが、もし絶望だとしても、俺は全てを変えてみせる。ここに集まった仲間とともに……」

「大変だ！ か、カインが！」

突然、甲高い声と共に二人の間にカシオが割って入った。蒼い髪に灰色の瞳、胸の位置でひび割れたゴーグルが揺れ動く。慌てた様子のカシオに、ティルとミーファは目を向ける。そんな二人に慌てていたカシオが、冷静な瞳を向け一度頷き口を開く。

「あつ……ああ……。悪い。二人の邪魔はしないから」

「お、おい！ 何が大変何だ？」

機内に戻ろうとするカシオを呼び止めるが、申し訳無さそうに笑みを見せ、

「いやいや。幾ら俺でも空気は読めるさ。二人の邪魔はしないってだから、ごゆっくりな」

それだけ言いティルの肩をポンと叩くと同時に、カシオの視界が一転した。いつの間にか夜空を見上げる形になっていた。組み伏せられたのだ。叩き付けられた為、腰には痛みが残り呼吸が苦しかった。

潤んだ瞳でティルを見上げるカシオは、弱々しく尋ねる。

「何すんだよ。俺は、空気を読んでだな」

「だから、それが違うつてんだよ！」

「何が違うのさ。俺にはいい雰囲気にか  
「お前の目は相当悪いらしいな」

怒りの滲んだ目が真っ直ぐにカシオを見つめ、怒気の籠った声が体を硬直させた。苦笑するカシオは取り敢えず体を起し、ミーファの方に目を向け、頭を掻く。

「いや。てつきり、二人が付き合ってるのかと」

「……ば、馬鹿言わないでよ！ な、何でわ、わわ、私が」

「そもそも、今はそんなことをしている状況じゃない」

「ふん。ならいいけど、それより、カインが目を覚ましたそうぞぞ」

嬉しそうな口振りのカシオに、小さくため息を漏らすティルは、ミーファの方に目を向ける。

「話の続きはまた今度な。いくぞ、カシオ」

「ウオツ、お、おい！ 引っ張るな！ 首がしま」

襟首を引っ張られ、苦しそうなカシオは、ティルと一緒に機内へと消えていった。その姿を笑顔で見送ったミーファは、二人の姿が機内に消えると、大きくため息を吐いた。これから起るであろう戦いの過酷さと、その先に待ち受ける最悪の結果を知っているから。胸が苦しく、自然と涙が零れた。必死で押さえていた涙が、知らぬ知らぬうちにポロポロと零れ落ちた。

医務室の前に皆が集まっていた。その中心にカインが立っていた。腹部には包帯が巻かれ、松葉杖を両脇に何とか立っているという状態だ。

「ご心配お掛けました」

カインがニコツと微笑むと、皆も笑顔を零した。安心したのだから。

一時はどうなるかと騒ぎになったが、ブラストの開発した治療力プセルが役にたったようだ。開発されたのが最近の事らしく、テストすらしていなかった為、きちんと動くか分からなかったらしいが、カインの姿を見る限り成功した様だ。

散々ブラストの発明品に酷い目に遭わされているティルにとっては、その成功が不思議でなかった。だが、それを口にはしない。流石にこの場の空気に水を注すほど、馬鹿ではなかった。

「傷はもう平気なのか？」

「ええ。傷の方は大分……でも、青空天が……」

申し訳無さそうにワノールの方に目を向ける。元々、青空天はワノールからプレゼントされた物で、特別な硬質物で出来た物だった。その為、カインの扱う高温の炎を受けても原形をとどめる事が出来ていた。

そんな物を剣へと作り変えた人も凄いが、今となってはその硬質物も手に入らないだろう。

「すみません……」

「気にするな。剣はいつかは折れる」

「それに、剣ならまた創って貰えばいいから」

長い黒髪を揺らし、ウールがそう言うのとカインの頭を撫でた。金髪綺麗な髪がウールの指を絡まる事なく行き交う。温かく優しく撫でられたカインは、少しだけ恥ずかしそうに頬を赤らめ、皆の顔

を見回す。幾つか見覚えのない顔もあるが、安心させようと明るく笑みを浮かべ、軽く頭を下げる。

「色々ご迷惑お掛けしました。僕のせいで」

「誰も迷惑なんて思つたらんよ」

ノーリンが大らかに微笑む。

「それにさ、迷惑掛けたのは、カインだけじゃないんだし、気にしない気にしない」

「つつうか、あんたは迷惑掛けすぎ!」

セフィーの踵落としがウインスの脳天に落ちた。

「いつてえだろ! いきなり何しやがる!」

「もう一発くらいいたい?」

「い、いえ……」

「兄弟仲が良くて羨ましい限りだ。全く微笑ましいねえ」

腕を組み頷くカシオを、訝しげに見据えるカインは、ワノールの方へと顔を向け静かに尋ねる。

「あの〜。誰ですか? あの人は?」

「んっ? 誰だ? 俺は知らんが、この飛行艇のクルーじゃないか?」

「ちょ、チヨット! 酷くない? 俺って、そんな扱いなの? 俺、みんなの名前覚えたのに。って、何。その皆の痛い視線。空気読めって言うわけか? 俺にはとっととここから消えて欲しいってか?」

ペラペラとマシンガンの様に言葉を打ち出すカシオの切ない言い分に、右手で頭を押さえティルはため息を吐いた。そんなティルの気持ちを察してか、ウールが苦笑しながらワノールとカインに説明する。

「彼はカシオさんです。フォースト王国で、ティルさんと出会ったそうです」

「ティルの知り合いか……」

「凄い喋ってますね」

呆れ顔のカインとワノール。不意にフォンの事を思い出してしまふ。そうさせたのは、きつと何処となくカシオがフォンに似ていたからだろう。辺りを見回す。だが、何処にもフォンの姿はない。そして、ルナとミーファの姿も。

「あの、フォンは何処ですか？」

その言葉にその場が静まり返る。皆、フォンのあの発言を聞いていたからだ。だが、それを知らないカインは不思議そうな表情で、皆の顔を見回す。その沈黙を破ったのは、ブラストだった。

「彼は自室で待機中だ。どうも体の調子が悪いらしい」

実際とは多少異なるが、体調が悪いと言うのは本当の事の為、ティルは何も言わない。今、ここに居る皆にフォンの事を話す必要などないと判断したからだ。ブラストもきつと同じ事を考えていたのだろう。その後は何も言わずただ皆の会話に頷いていた。



### 第83回 青天曉

時は過ぎ。

飛行艇はアルバー国旧都市デイバスターへと進路を向けていた。速度から推定して到着まで僅か一日。各々、その時に備えるべき事を行っていた。

「あの……本当に大丈夫なんですか？」

「あつ？ そんなに心配か？」

「ええ……」

不安だと表情に溢れ出るカインが、ワノールの顔を真つ直ぐに見据える。二人の視線が交錯し、カインが小さくため息を漏らす。金髪が鮮やかに揺れ、澄んだ瞳が一人の女性を捉えた。

長い髪を頭の後ろで束ねたウールが、腕まくりをして笑顔をかインに向ける。その手には大きなハンマーが握られていた。今から青天を打ち直そうとしているのだ。明らかに不慣れな手付きのウールに、実に不安を隠せないカイン。そんなカインに苦笑するワノールは小さな声で耳打ちする。

「安心しろ。こう見えても、鍛冶屋の娘だ。剣の一本や二本」

「明らかに、不慣れですけど……」

「久し振りだからだよ。大丈夫だ。親父さんは超一流の職人だからな」

「いや……。それは親父さんであって、ウールさんは関係ないので？」

「さあ！ 頑張りますよ！」

ウールの覇気の溢れる声が二人の声を遮断した。そして、カイン

の不安を他所に、澄んだ鉄音が響き渡る。が、それも長くは続かず、奇妙な声が聞こえてきた。

「あれ？」

「何でえ？」

「うーん」

続け様に聞こえてくるウールの声に、カインの不安は一層大きくなつた。

「あのー……。本当に大丈夫ですか？」

「な〜に、心配ないさ。まあ、見てろ」

ワノールにそう言われ、不安ながらもその様子を見守る。すると、急に立ち上がったウールが部屋を出て行き、何かを持って戻ってきた。

「え〜え。この作業を一週間行つたモノが、これです」

「……………」

呆然とするカインが、ワノールの方へと冷やかな目を向ける。この事を知っていたのだろう、ワノールは笑いを堪える様に顔を背けていた。

そんな二人の様子に首を傾げるウールは、純粋な笑みを浮かべると、優しい声色を響かせる。

「どうかなさいましたか？」

「いえ……何でも無いんです。気にせず続けてください……………」

半分怒りの様なモノが窺えるが、ウールがそれに気づくわけも無

く、「そうですね」と、嬉しそうに微笑むと説明を続ける。

「そもそも、鉄と言うのは一日で打てるモノではありません。もちろん、剣を作るなどと言うのは、無謀と言うモノです。と、言うわけで、ここからは少し飛び飛びでいきますよ！」

明るく微笑むウールがもう一度部屋を出て行く。と、同時にカインがワノールを問いただす。

「ちよ、ちよつと！ ワノールさん！」

「いや〜。悪い悪い。でも、本気でウールが打ったんだよ。あの鉄板。と、言っても十年くらい前の話だけだな」

「それって……」

何かにカインが気付き、申し訳無さそうに目を背ける。そんなカインに、穏やかに微笑み、カインの頭に右手が乗った。そして、乱暴な手付きで頭を撫で、優しく言う。

「勘違いするなよ。アレは、元々お前の為に打ってたんだよ。それに、お前への武器は本来、ウールが造る予定だったんだ。まあ、結局親父さんの方が先に仕上がって、それをお前に渡した形になったかな」

「そうですねですか。青空天って、ウールさんのお父さんが作ったんですか」

「何だ？ 知らなかったのか？」

「ええ。聞かされませんでしたから」

不貞腐れ小さく息を吐く。苦笑いを浮かべるワノールが、右手で頭を掻いていると、ウールが戻ってきた。その手には布に包まれた何かを持っており、とても嬉しそうな笑みをカインに向ける。

「お待ちせしました。これが、完成品です！」

布を剥ぎ取ると、鱗模様の澄んだ青の鞘が姿を見せた。鍔や柄に特徴は無いモノの、その鞘の美しさは目を見張るモノがあった。

「フフフツ。どうですか？ 私の自信作なんですよ」

「じ、自信作って、まさか、本当にあの短時間で作ったんですか！  
違う違う。アレは、元々完成してたんだよ。十年前に」

ワノールが含み笑いを交えながら、カインにそう言うと、ウールが満面の笑みで答える。

「そうなの。十年前、まだ鍛冶屋として現役だった時に打った最初で最後の一太刀よ。あの時は、父に先を越されてあなたに渡せなかつたけどね」

「まあ、十年前前の代物だからな。少し傷みとかあったみたいだが、そこはブラストが修復してくれたから安心だ」

恐る恐るウールの手から剣を受け取ったカインは、無言のまま剣をジツと見つめる。それほどまでに目を見張るモノがあった。

二人の声が聞こえていないのか、カインは静かに柄を握り締め鍔を親指で弾き刃を抜く。宝石の様な輝きを放つ蒼い刃に、言葉を失う。まるで青空天をコピーした様な錯覚を覚えた。だが、形状はまるで違い、その刃はノコギリの刃の様に細かい刃が無数残っている。

「気に入っていただけましたか？ 父の作った青空天とは形状は異なりますが、耐熱素材で作られていますので、高温の炎にも耐えられます」

「凄いです……」

興奮気味のカインが軽く剣を振るう。蒼い閃光が空を裂き、澄んだ風音が鳴る。驚き目を丸くするカインに、嬉しそうに満面の笑みを浮かべるウールは優しく聞く。

「どうかしら？ 青空天の代わりは勤まるかしら？」

「青空天とは比べられませんよ。とても、ウールさんが打ったとは思えないです」

「あら？ それは褒められているのかしら？」

笑みのウラに殺気が漂い、カインがすぐに弁解する。

「いや、別に他意はありませんよ。ただ、ウールさんの様な細かい体でこんな剣が打てるなんて……。ビックリです」

「ウフフツ。これも父譲りの才能ですかね」

嬉しそうな含み笑いに、カインも目を輝かせ微笑んだ。そんな二人を尻目に、ワノールは渋い表情で腕を組んでいた。それに気付いたカインは、何か不満でもあるのだろうか、と思い恐る恐る声を掛ける。

「どうかしたんですか？」

「いやな、その剣の名前は どうするんだろうと、思ってたな。まさか、そのまま青空天と言うわけにもいかんたる？」

「どうしてですか？ そのまま青空天で問題があるんですか？」

「青空天はこの世で一つ。同じ名は二つとあってはならない」

真剣な目のワノールに、カインも悟った。もう青空天は存在しないのだと。そして、自分が青空天を壊してしまったのだと言う事を。カインの心境を知ったのだろう、ワノールとウールは顔を見合わ

せる。ワノールもカインの想いを知らないわけじゃない。黒苑を失った時の悲しみ、胸の痛み。もう二度と剣を持つつもりは無かった。黒刀・鳥カラスと出会うまでは。

きつと、カインも同じ気持ちなのだろう。青空天以外など本当は。

「決まりました！」

「ムッ！」

ワノールの気持ちなど理解せず、カインが満面の笑みで声を上げた。今までの心配はなんだったのだろうと、ワノールはため息を吐き、右手で頭を抱えた。だが、それがカインの良い所でもある。

「ワノールさん！ この剣は青天暁せいてんぎょうです！」

「青天暁か……。まあ、お前の決めた名前だ。文句は言わんさ」

「よろしくな。青天暁」

もうワノールの言葉など聞いていなかった。青天暁を見つめ、嬉しそうに微笑むカインの姿に、ワノールもウールも顔を見合わせ笑った。

## 第84回 足りないモノ

飛行艇の一室で精神統一をするウインスの姿があった。

自らの精神の弱さを知り、それを克服する為だ。

あぐらを掻き、背筋を伸ばし目を閉じ、ただ静かに呼吸を繰り返す。何も考えず、無心を貫く中、あらゆる音が耳へと入る。翼が風を切る音、廊下から聞こえる足音、部屋を流れる風の音。全てがウインスに囁きかける。

静かに瞼を開くと、スツと立ち上がり戸の方へと目を向けた。すると、戸が静かに開かれ長い黒髪を揺らしセフィーが入ってきた。吊りあがった鋭い目がウインスを見つ直ぐに見据え、ウインスも真顔でその目を睨み返す。

「今日は何しに来たんだ？」

「あら。随分な口の利き方ね」

「うるせえ。今、俺は忙しいんだ。とっとと出て行け」

怒鳴るウインスに対し、意味深な笑みを見せるセフィー。両者の視線が火花を散らし、静かに室内の風がうごめき始め、二人が同時に床を蹴った。

中央で二人が組み合う。力はセフィーの方が上なのか、ウインスの体が僅かによるめく。

「クッ……」

「まだ力であんたには負けないわ」

「だったら、これならどうだ！」

足の裏に風を集め、同時にセフィーの体を押し返す。が、すぐに視界が一変し、床に背中を打ち付ける。

「あうっ……」

「力が全てじゃないわよ」

「っつ、お前が言うかよ」

「お前？」

セフィーの笑顔が僅かに引き攣り、ウインスもその変化に気付いた。だが、既に時は遅く、セフィーの突きがウインスの頬を掠め、地面へと突き刺さっていた。うごめいていた風が、一瞬にして消滅する。

頬が切れ血が流れ、ウインスが恐怖で歪んだ笑みをセフィーに向けた。

「殺す気かよ」

「あら？ 感じなかった？ 私の殺気」

笑みのウラに隠れた禍々しい殺意を僅かながらに感じ取り、ウインスは死の狭間を見た気がした。

床に減り込んだ拳をゆつくりと抜くと、小さな舌打ちをして、指の骨を鳴らす。今度こそ確実に殺されると、錯覚するウインスは僅かながら目尻に涙を溜めていた。その顔を目を輝かせながら見下ろすセフィーは、拳を振り上げ息を静かに吐き出す。目が完全に殺意に満ちている。確実に殺られる、と目を閉じた瞬間、戸が開く音と同時にノーリンの声が聞こえた。

「何だ？ 兄弟喧嘩か？」

「違いますよ。ノーリンさん」

声色が変わり、優しい笑顔を向けるセフィー。その隙を見逃さず、ウインスはその場からすぐに立ち上がり間合いを取る。だが、セフ



イーは全くウインスを見ておらず、笑顔でノーリンへと歩み寄っていく。

「今日は、どうなさったんですか？」

「いやなあ……。ウインスに話があつてのお」

その言葉に微かにセフィーの表情が沈んだ。眉間にシワを寄せるウインスは、首を傾げる。

「俺に話？ 何の話だ？ 恋沙汰はゴメンだぞ」

「お主に恋沙汰の話などするわけなかるう。話と言うのは牙狼丸についてじゃ」

「牙狼丸について？ 何で、お前にそんな事」

刹那、弾丸の如く拳が飛んだ。表情を引き攣らせるウインスの目の前には、セフィーの姿があつた。いつの間に関合いを詰められたのか分からないが、拳が顔の横を通過する瞬間に聞こえた風音からして、本気だと言う事は分かった。

不思議そうな表情のノーリンは、ウインスとセフィーの二人を見据え、楽しみに微笑む。ウインスもセフィーも大分元気になった様だ。特にセフィーは明るくなった。ウインスがいる事でそうなっているのだろう。そんな光景が、微笑ましく見えた。

だが、いつまでもその光景を見ている訳にも行かず、渋々と言葉を掛ける。

「悪いんじゃが、少しの間ウインスと二人にしてくれんか？」

「こいつとですか？ ……分かりました。ノーリンさんが言うなら……」

「へへーン。とつとと出てけー！」

「くっ……」

セフィーの拳が完璧にウィンスの腹を抉った。声を出す事も出来ずその場で悶えていると、セフィーがノーリンにお辞儀をして部屋を出て行くのが見えた。何を言ったのかは聞き取れなかったが、良い事じゃないのは確かだ。

部屋に静寂が戻り、暫くしてウィンスが立ち上がった。腹部に残る激痛に膝が震える。あの怪力の拳を受けたのだ、それだけで済んだのが奇跡的だ。

「ウウツ……。それで、話って何だ」

「牙狼丸の事だが、アレは抜くな」

「う、うるせえ！ お前にとやかく言われたくねえ！」

「まあ、そう言うな。ワシとて、お前が憎くてそう言っているわけじゃない。アレは、危険な代物じゃ。お主が本当に守りたいと想う人が出来た時だけ抜け」

「何でだよ」

じと目でノーリンを見据え、不満そうに腕を組む。渋い表情のノーリンは右手で頬を掻きながら静かに口を開く。

「お前にはまだ覚悟が足りない。誰かの為に命を掛けると言う覚悟が」

「……？ 何で、人の為に命を掛けるんだ？」

「ハア……。まあ、それが分からん様じゃ、また牙狼丸に吞まれるだけじゃ。抜くだけ無駄じゃ」

「うるせえな。だから、精神統一してんだろ？」

「ウム……。精神統一なあ……」

馬鹿にした口調に、ウィンスが青筋を浮かべ、右拳を硬く握り締めると力一杯に振り抜く。が、ノーリンはそれを軽く受け止め、呆

れた様に首を振り言う。

「じゃから、まだまだ子供じゃと言われるんじゃ」

「誰もそんな事言つてネエよ！」

「いや、内心思つとるはず」

「ハズつてなんだ！」

蹴りを入れようと右足を上げると同時に、ノーリンの右足がウインスの左足を叩いた。瞬間、ウインスの体は床へと倒れた。

「止めんか。お主じゃ勝てんよ」

「ば、馬鹿にすんな！」

すぐに立ち上がったウインスはノーリンの顔を鋭い目付きで睨んだ。相変わらずの糸目の為、何を考えているか分からないが、ノーリンは小さくため息を吐き、頬に刻まれた三ツ星の刺青をボリボリと搔いた。

呆れていると言うより、困り果てている様だ。睨みを利かせるウインスは、右腕に風を集める。その刹那、ノーリンが素早く回し蹴りを放った。一瞬にしてウインスの体が吹き飛ぶ。防御をしよう行動すら与えない速さの蹴りに、ウインスは壁に腰を打ちつけ悶絶する。

「はうっつ……。てめえ……」

「すまぬ。思わず加減するのを忘れてしまった」

「ウグツ……。動けネエ……」

あまりの痛みに動く事が出来ない。セフィーとは比べ物にならない力だ。

蹲るウイン스에歩み寄るノーリンは暫し心配そうな目を向け、恐

る恐る声を掛ける。

「大丈夫かのう？」

「ウグツ……俺は、強くなれるか？」

「どうじゃろうな。後半日で強くなだれんだろ？」

「じゃあ、俺は」

「まあ、強さとは人それぞれだ。ワシの言う強さと、お主の言う強さはまるつきし違うものかもしれん。そう深く考えるな」

ノーリンの言葉に首を傾げる。言っている意味が良く分からなかった。強さが違う？ 何を言っているんだ？ と、訝しげな表情を見せるウインスに、渋い表情を見せるノーリン。言っている事が分かっていないのだと、すぐにわかった。

深く息を吐くノーリンは、渋々と言った様に右手を差し出す。

「まあ、やるだけやれ。お前はお前の思う強さを極める」

「何言ってるか分かんねえ」

「そう言っつな。時期に分かる時が来る」

笑みを向けると、不貞腐れた様に頬を膨らした。

## 第85回 墜落

時は朝方、事件は起きた。

「又ツ……なんじゃ？」

突然の爆発音に、ノーリンが部屋から顔を出す。まだ眠いのか、細い目を更に細めて、大きな欠伸を一つ。

そんなノーリンの所に眠そうに目を擦るカインがやって来た。

「ぬあにくわあつたんれすか？」

明らかに呂律の回っていないカインに、ノーリンは首を傾げた。

爆発音が聞こえたのがノーリンの部屋の近くだった為、カインはコツチに来たのだろう。

ボンヤリするカインは、あっちにフラフラ、コツチにフラフラと危なっかしく立ち尽くしており、ノーリンも心配そうにそれを眺めていた。

「大丈夫かのう？ そんな状態で」

「ぬあにがですか？」

「いや……何でも無い……」

ノーリンがそう言うと、更に奥からワノールとティルの二人が歩いてきた。二人は特に眠いと言った様子も見せず、平然とした態度でノーリンに問う。

「何かあったのか？」

「ふわっ、ワノールさん……おはおつございばす……」

ワノールの声に深々とお辞儀をするカイン。だが、カインのお辞儀する先はただの壁だった。

「カインの奴、寝惚けてるのか？」

「らしいな。まあ、心配ない。時々ああなるだけだ。話を進めよう」「心配ないって、大丈夫か？ 何かふら付いてるけど……」

右目を眼帯の上から掻くワノールは、呆れた様な目でフラフラと徘徊するカインを見据え、小さくため息を吐いた。

「大丈夫だ。心配するだけ無駄だ。とつと話を進めよう」

「まあ、長い付き合いのお前がそう言うなら、話を進め　！」

突然、大きな爆発音が響き、廊下を突風が吹き抜ける。船体が大きく傾き、三人はバランスを崩し、その場に倒れる。一方、フラフラだったはずのカインが、何故かこの状況でもその場に立ち尽くしていた。

「オイオイ……。アイツ、本当に寝てるのか？」

「時々あるんだ。アイツの場合、寝ている時に感覚が研ぎ澄まされる時が」

「それが、寝惚けてる時と、言うわけかのう」

「まあ、そう言う事になるだろうな」

納得いかないと言わんばかりの目でカインを見据えるワノールは、もう一度小さくため息を漏らした。

機内に警報が鳴り響いていた。

トレーニングルームに居たフォンは、警報の音でようやく事態を把握し、廊下へと足を進めた。船体が傾いている為、壁に背中を預けゆっくりと足を進める。

「何があつたんだ？ 敵かな……」

ボソボソと一人呟くフォンは、風の一層強く吹き抜ける場所に出た。壁に穴が開き、そこから突風が吹き荒れていた。呆然と立ち尽くすフォンはその先に何かが居るのを確認し、大声で叫ぶ。

「誰だ！ お前は」

風の音で声が掻き消される。だが、ソイツには言葉が届いたのか、静かにフォンの方を振り返った。暗くて良く見えないが、口元がぁりえない位裂け、不気味にケタケタ笑いフォンを指差す。

「……………」

ソイツが何かを言ったが、風の音に混じり声は聞こえない。しかし、その尋常じゃない殺気は物語っていた。貴様を殺すと。

背中に寒気が漂い、全身の毛が逆立ち冷や汗が額から溢れる。コイツに関わってはいけない。そんな気がした。

フォンを見据える影は、もう一度ケタケタ笑うと、そのまま壁に開いた穴から外へと飛び出し、姿を消した。恐怖と静寂だけを残し。その場に座り込むフォンは、呼吸を荒げ身を震わせた。瞳孔は開いたままで、鼓動が早まっていた。気持ちを落ち着かせる為、瞼を閉じたその時だ。

船体を揺るがす大きな爆発が起き、機体が急降下する。船体に圧力が掛かり節々が軋む。何が起つたのか分からないが、奴が何かした事は明らかだ。

右翼から黒煙を上げる赤い飛行艇は森の中へと墜落した。旧都市  
デイバスターまで、あと十数キロ。廃墟と化したその町は既に目視  
できる距離だが、寛大な城がとても小さく見える程だった。

凄まじい衝撃が船体を襲い、機体に複数の亀裂が走っていた。

操縦室に居たブラストは、額から血を流しながら現状を調べてい  
た。操縦桿で額を切ったのだろう。血を拭わずひたすらモニターに  
何かを打ち込むブラストは、今までに無い程強張った表情を見せて  
いた。何が起ったのかブラストも分からなかったのだ。

「くっ……。一体、何があったんだ……」

次々と移り変わるモニターを見据え、遂にブラストは一つの影を  
見つける。それは、フォンの出会ったあの不気味な生物の姿だった。  
船内に備え付けていた防犯用のカメラに映るその姿は、一層不気味  
に見える。

「コイツが……。でも、一体何処から？」

不思議そうに呟くブラストは、モニターの時間を進める。刹那、  
モニターに映っていた生物が一瞬にして消え去り、モニターがプツ  
ンと消えた。

「破壊されたのか……」

ボソツと呟くと同時に、扉が開かれティル達が雪崩れ込んできた。

「おい！ 何があった」

「やられたよ……」



「やられたって……」  
「コイツだ」

モニターの映像を巻き戻し、先ほどの生物の姿を皆に見せつけた。その不気味な風格に皆の表情が強張る。

「何だ、コイツは……」  
「本当に生物なのか？」  
「どうだろうな。俺には分かん」

ブラストがしかめっ面でそう述べると、皆が黙り込んでしまった。

「何でしょうね。この背筋をゾツとさせる様な存在感は……」

寝惚けていたカインが突如そんな事を言った為か、ブラスト以外の皆が驚いた目をカインの方へ向ける。まるで今まで存在しなかったモノを見る様な視線に、カインが不貞腐れた様に頬を膨らせる。

「なんですか！ 人をそんな目で見て、何か不服なんですか？」  
「いや、起きてたのか、と思ってな」  
「ワノールさん。僕はさっきから起きてますよ。何言ってるんですか全く」

「……………。あれは、起きていたに入るのか？」  
「さあおう。ワシには寝ていたとしか思えんが……………」

不思議そうな表情のテイルとノーリンに対し、ワノールが小さくため息を吐き、二人の方に視線を向けた。

「だから、言っただけ心配するだけ無駄だって」  
「ああ……………」

「らしいのう」

呆れた様な笑みを浮かべる三人に対し、ムスーッとした表情を向けるカイン。不思議そうに首を傾げるブラストは、カインと他の三人の顔を見比べ、もう一度首を傾げた。

そんな妙な空気を変えたのは、突如開かれた扉から入ってきたウインズとカシオの二人だった。

「どう言う事だコラー！」

「ってか、俺を殺す気か！ あと数センチずれてたら、お陀仏。完全に俺はエンマ様の前でざんげしてる所だぞ！」

水浸しのウインズと、額から血を流し血の付着した装飾用の剣を手持ったカシオが乱入するが、その場にいた誰もが啞然としていた。水浸しと血塗れ、この二人に一体何があったと言うのだろうか。楽しそうに笑みを浮かべるカインは、そんな二人に明るく声を掛ける。

「何の冗談ですか？ 面白すぎますよ……あれ？」

カインも異変に気付く。血走った二人の目が、殺気だった視線が、カインに重い重圧を掛ける。笑みが見る見る引き攣るカインは、更に言葉を続けた。

「どうしたんですか？ そんなに殺気だつて……」

「どうしたもこうしたもあるか！」

「寝てたら突然船体が大きく揺れて、起き上がったと同時に、これだよこれ！ これが、俺の顔に向かって一直線さ。一步間違えば脳天串刺しだよ！ どう言う事さ、これは！」

「……。まあ、カシオの言い分は分かった。それで、ウインズはど

うしたんだ」

ティルが半ば呆れながら聞くと、ウィンスは拳を握り力強く答えた。

「寝てたら、大きな揺れが起きて、花瓶が直撃したんだよ！ 怪我はしなかったからいいもの……」

「いいなら、何で怒ってるんだ？」

「いや……。何と無く」

呆れるティルは小さくため息を吐いた。それに釣られる様にワノール、ノーリン、カインの三人も静かにため息を吐いた。

## 第86回 偵察班

飛行艇墜落から数日が過ぎた。

話し合いの結果、徒歩でデイバスターを目指す班と、飛行艇に残る班の二手に分かれる事となった。飛行艇に残るのはミーファ・ルナ・ウール・セフィーの女性四人、ブラスト・ワノール・ウィンス・カシオ・フレイストの男性五人、計九人が残った。

そして、フォン・ティル・カイン・ノーリン・バルドの五人が、徒歩でデイバスターを目指す事となった。

「ふあゝっ……。なあ、デイバスターまであとどれ位なんだ？」

「うゝん。オオヨソ、五、六キロって所かな？」

「そっか……」

「久し振りだな。デイバスター」

のん気なカインに対し、ティルが厳しい視線を向ける。きっとデイバスターに着けば、戦いになるだろう。今ここに居るメンバーで大丈夫だろうか、不安が脳裏を過る。

「バルド、見えるか？」

「何がだ？」

「お前の目なら見えるだろ？ デイバスター付近の様子を」

「お前は馬鹿か。あんな遠くまで見えるわけないだろ。俺はあくまで他の奴より少しばかり目が良いと言っただけだ」

「そっか……。悪いな」

残念そうに呟いたティルは、渋い表情を見せた。このメンバーを選んだのは、他でもないティルだった。フォンの事や先の事を考えた結果が、このメンバーと言うわけだ。ボンヤリと道の先を見据え

るティルは、もう一度渋い表情を見せた。

ノーリンもまた考えていた。この先の事を。死闘は免れないだろう。仲間の誰かが死ぬかも知れない。もしかすると、それは自分かも知れない。何故、こんな危険な事に身を投じているのか不思議だった。

「ふーっ……」

「どうかしたのか？」

ため息を吐いたノーリンにティルが尋ねた。その声に苦笑するノーリンは、頬の三ツ星の刺青を掻き答える。

「何でもない。ただ、何でここにワシは居るのかと、思っただけ」

「ははは……まあ、そうだな。俺も、何でここに居るのか不思議だよ」

ワザとらしく笑うティルは、右手に眼を落とす。この手に世界の命運が掛かっている、そう思うと本当に笑えてしまう。プラスチックから話を聞かされた時、ティルは信じる事が出来なかった。ここに集まった者が、この世界の命運を握っており、負ける事は世界の終わり。勝つ事が唯一の望みだと話した。全ては予言書に書かれた全て。こんな話を信じる、と言う方がおかしい。それに、自分が何故選ばれたのか、そう考えると全く笑い話だ。ただ、妹を探していただけ、妹と幸せに暮らしたかっただけ。それだけの為に旅をしていたのに……。フォンに出会い、ミーファに導かれ、幾多の魔獣に襲われ、幾多の仲間と出会う。そして今、世界を背負って戦う。

「ハハハ……。全く、ふざけた話だよ」

もう一度ワザとらしく笑ったティルが、開いた右手を閉じ静かに

空を見上げた。

「俺はさ、ただ妹を探してただけの旅人に過ぎないはずなのにな……」

「ワシもじゃよ。しがない何でも屋。金さえ貰えればどんな汚い仕事だってやつとる。そんな人生を過ごしてたはずなんじゃがな」

「お互い、世界を背負ってるって言う感じじゃないな」

「そうじゃな。じゃが、皆そうなんじゃろうな」

少しだけぎこちなく大らかに笑って見せた。誰もが不安なのだ。突然背負わされた“世界”と言う重圧が。

「しっかし……あの二人は平然としてるけどな」

「まあ、あやつらが居るから、まだ冷静で居られるんじゃがな」

「そうだな……」

「見えたぞ」

二人の会話にバルドが突如言葉を挟む。刹那、テイルは腰の天翔姫に手を掛ける。既にデイバスターは目視できる距離にあるが、テイルには魔獣が居る様には見えなかった。ノーリンも同じだろう。眉間にシワを寄せ、首を捻っている。

一方、前を進んでいたフォンとカインは足を止めていた。止めたのはフォンの方だろう。こちらに視線だを向け静かに口を開く。

「血の臭いがする。しかも、強烈な程の……」

「血の臭い……。どこら辺からだ？」

「デイバスターの近くから漂ってる」

テイルの問いに答えたフォンは、ゆっくりと後退る。それに見てカインも状況を判断したのか、フォンと同じ様にゆっくりと後退す

る。二人の様子にテイルも状況を把握した。よっぽと危険らしい。

「で、どうなんだバルド」

「俺の目には十体は見える。ただ、木の陰になっっている所は知らん」  
「そうか……十体以上は居ると見ていいだろうな」

腕を組むテイルに、カインが冷静に口を開く。

「ねえ、こんな道端で話すより、茂みに隠れて話した方がいいんじゃないか？」

「そうだな……。ここじゃ目立つからな」

五人は茂みに身を隠し、円になり座り込んだ。

魔獣が居る事は想定していた為、焦りなどはない。ただ、ここからは慎重に行かなければならない。それに、戦力は限られており、魔獣人クラスが出て来れば戦力は大幅に削られる。それに、奴らの力は未だ未知数だ。そんな連中を相手に無事で済むはずがない。一歩間違えれば全滅だ。

腕組みをして考えるテイルを尻目に、フォンが静かに立ち上がり森の方へと足を進める。

「おい。何処に行くつもりだ」

バルドに呼び止められ、フォンは笑みを見せ答える。

「一応、枯れ枝を拾っておく。寒いのはイヤだし」

「相変わらず、厚着だしね。僕も手伝うよ」

「おう。ありがとうな」

フォンはそう言ってカインと一緒に森へと入っていった。残され

た三人は、のん気な二人の様子に暫し呆れていた。暫くして、ノーリンが不思議そうに口を開く。

「しかしのう、あやつは何故、あんな事を言ったんじゃろうな」

その言葉に、ティルの表情が曇る。事情は知っていた。ミーファから全て聞かされたからだ。だが、それを今説明するべきか迷い、

「さあ、ただアイツにも事情があっただろう」

と、その場は誤魔化した。何故、誤魔化してしまったのか、本人にも分からない。口が勝手にそう言ってしまったのだ。そんな二人に、渋い表情を見せるバルドは、静かに口を開く。

「知らないのか？ 癒天族の力の事」

「なんじゃそれは？ 癒天族の力は癒しじゃろうて、それ以外に何かあるのか？」

「お前は、知っていたようだな……」

ティルの表情にバルドがそう呟く。ノーリンは眉間にシワを寄せ、ティルの方に顔を向ける。

「知らないんじゃないののかのう？」

「……。今は言うべきじゃない。そう思っただけだ」

「しかしのう。知ってたのなら、あの場所で弁解も」

「俺が知ったのはあの後だ。それに、これはルナの口から聞くべき事なのかも知れん……」

「俺もそう思う。本人が話さない事を、俺達でとやかく言う事じゃない」

「そうかのう……。まあ、そう言う事なら、ワシもそれ以上訊かぬ



事にしよう」

ノーリンが大らかに笑い、ティルも困りながら苦笑した。バルドは相変わらず表情を変えない。そんな中で小さくため息を吐いた。ティルは、「これからの事、考えよう」と呟いた。

第86回 偵察班（後書き）

ようやく、更新した所ですが、暫く休載します。  
本当に申し訳ありません。

## 第87回 森の中の戦い

森の中を探索するフォンとカインは道に迷っていた。

「ここは何処だー！」

「ダメだよ。フォン。そんな叫んでたら魔獣にバレルって」

苦笑するカインが辺りを見回す。何処を見ても森、森、森。同じ木ばかり。これでは何処から来たのかサツパリだ。

ため息を吐くカインは、空を見上げ困った様に頭を掻く。戻ったらきつと怒られるんだろうと、思いながらも一度ため息を吐いた。そんなカインを尻目に両肩を抱えて震えるフォンは、ぎこちなくカインの方に顔を向ける。

「あううううっ……。寒い……」

「そうだね。もう世間では冬だから……。んっ？　そう言えば、フォンは鼻が良いんだよね？」

「普通の人に比べたらな」

「じゃあ、臭いで戻れない？」

笑顔のカインに、フォンは静かに鼻を動かす。僅かに漂う臭いはフォンの嗅覚を狂わす様な血の臭い。これでは臭いで戻るなど不可能だった。両肩を落とす、表情を歪めるフォンは、申し訳無さそうに、

「すまねえ。血の臭いしかしらないんだよ」

「そっか。でも、困ったね」

「全く困った……。こんな時に……」

「どうかした？」

「いんや。なんでもないよ」

作った様な笑みを見せたフォンは、すぐに眉間にシワを寄せる。右腕が疼く。もうすぐ夜が来るからだろう。体の中の獣がうごめき始めているのだ。必死に抑え込むフォンは、ゆっくりと深呼吸をしてから、静かに立ち上がる。そろそろ限界だと悟ったのだ。

「カイン。悪いけど、暫くオイラから離れて欲しい」

「どうしたの？ 急に。トイレかな？」

「いや……。もう……。抑え」

刹那、腕に巻かれた包帯が裂かれ、化物の様な鋭い爪が地面を抉る。別の生物の様に膨れ上がっていく右腕に、聊か驚いた表情を見せたカインだが、すぐに真剣な面持ちをする。こうなった原因を、カインは覚えていた。全ては自分の責任だと言う事も。だから、何も言わずフォンの背中を見据えた。

唸り声が森に響き、腕が自らの意思で動いているかの様に地面へと振り下ろされる。鋭い爪先が地面を抉り、土の塊を握りつぶす。右腕が完全に化物化し、それが首筋から顔の方へと上がっていく。

「ぐっつ……うっつ……ウガアアアアッ！」

咆哮が響き、衝撃波が広がる。森の木々が衝撃を受け横倒しになっていく中、カインは衝撃に耐えながら真っ直ぐにフォンの姿を監視していた。

ゆっくりと振り返ったフォンの視線がカインとぶつかる。右目が獣の様に鋭く血に飢えた目をしているが、左目はまだフォンの目をしていた。だが、何処か切なく寂しそうな目だった。

「わりい……。もう、限界っばい。早く逃げろ」

「僕は逃げ」  
「退け！」

カインの声を遮り、闇の中に少年が現れる。姿は見えないが、細々とした肉体に黄色の眼光がカインを見据える。体が硬直し、脈が早まる。殺気だろうか、それともプレッシャーだろうか、体が痺れる感覚があった。

息をする事さえ忘れてしまう様な緊張感の中、カインはようやく息を吸い込んだ。普段汗など掻くはずの無い炎血族のカインが、何故か手の平に汗を滲ませていた。右足を退き、腰の青天暁の柄に手を掛けたカインは、ゆっくりと呼吸を整える。

「誰だキミは……」

「もう一度言う。退け。死にたくないのならな」

「キミに指図される覚えは無い」

「そうか……。なら、自分の身は自分で守れよ」

彼はそう言うと同時に地を駆ける。標的は確実にフォンだろう。青天暁を素早く抜刀したカインは、少年に向かい足音も立てずに駆け出す。だが、闇で風を切る音が聞こえると、金髪の髪を揺らしカインの体が吹き飛んだ。

「ぐふっ」

何が起こったのか全く見えなかった。何か強い衝撃を腹部に受け、気付いた時には地面に叩きつけられていた。口の端からツーツと血が零れ、左腕でそれを拭い真っ直ぐに目を向ける。弾けんばかりに膨れ上がったフォンの右腕が、唸りを揚げもう一度地面に拳を叩き込む。大地が揺れ亀裂が走る。衝撃に地面を転げるカインは、体勢を整え苦しそうに前方を見据えた。

もう自分が手を出せる状況ではない、と悟った。青天曉を静かに鞘へと戻ったカインは、悔しさに奥歯を噛み締めながら静かに二つの影を見据え、拳を握り締める。

距離を取る少年は、カインが動きを停止した事を確認して、右拳を握り締める。その手首に煌く銀色のリング。鮮やかな色の翡翠が細かくリングを彩り、薄気味悪く光る。

「キミにはまだやって貰わなきゃ行けない事が沢山ある。ここで、喰われる何て許さないよ」

「グググググ……」

獣のような黄色い瞳が暗闇に浮かぶ少年の顔を見据え、強靱な右腕を一閃する。風を斬り突風が吹き抜け、木々が根をむき出しにし横転する中、平然と立ち尽くす少年は飛んできた大木を片手で受け止めた。

「分かっているはずだろ？ キミの今の力じゃ俺に届かないって」

「ググググ……グウウウウッ」

「分かっているみたいだね。キミの中の獣は」

「ガウアアアッ！」

地面が砕け、破片が宙を舞う。低い姿勢のまま地を駆けるフォンは、右手で地面を抉り真っ直ぐに少年を見据える。次々と舞い上がる破片の数々が、雫の様に地面に降り注ぎ弾けた。

目前に迫るフォンの姿に、表情を変える事の無い少年は、スッと左手を伸ばし、左肩をフォンの方に向け右腕を引く。一呼吸置き、少年が右足を踏み込むと同時に右拳を突き出す。突き出した拳に衝撃が走り、衝撃波が前方に広がる。木々が弾かれ根元の方からバキッと音を起て真っ二つに折れる。直進していたフォンの体も、その衝撃に弾かれた。

「グガアアッ！」

咆哮と同時に体勢を立て直したフォンが、地面に着地する。両者の視線がぶつかり、ほぼ同時に二人が地を蹴った。

距離が縮まり、フォンの右腕がしなり空を切る。少年は左手で軽く拳を受け止め、右膝を突き出すが、頭を後ろに引かれ空を切る。それと同時に、フォンの右腕が引かれた。少年はすぐに何かが来ると判断し、右腕の動きを視界の端に置きながら、折りたたんでいた膝から先を振り出す。足先が僅かにフォンの顎を掠めた。

「ガウツ！」

掠めただけだが、フォンの体がよるめく。刹那、少年の右側頭部に衝撃が走った。右腕は警戒していた。それじゃあ、何がと、倒れながら視線を向けると、そこには不気味にうごめくモノがあった。尻尾だろう。だが、一体いつ。

倒れるのを堪えた少年は、真っ直ぐにフォンを見据えた。いつの間にか侵食が体の方まで進んでいたのだろう。お尻の辺りから尻尾が出ている。

額から流れる血を拭い、少年は不適に笑った。

「フフフツ……。そうか……。加減は必要ないみたいだね。俺も本気を出すよ」

少年はそう告げると、右手首に煌くりングを外した。

ゾワツと広がる禍々しい殺気。足元から湧き上がる憎悪。獣と化したフォンですら一瞬怯んでしまう。だが、一瞬だけだ。

すぐに少年へと襲い掛かる。右腕がしなりもう一度少年に迫る。

しかし、少年はそれを左手の人差し指だけで受け止めた。二人の顔

が至近距離まで近付き、少年が言葉を囁く。

そして、フォンの右手首を右手で掴むと体を反転させて地面に叩き付けた。



## 第88回 圧倒

静寂が森を包み込む。

闇に浮かぶ少年の姿が僅かに揺れ、足元に獣と化したフォンが横たわる。両者の動きが止まり、数分。ただ無駄に時間が過ぎる。

遠くでそれを見据えるカインは、悔しげに奥歯を噛み締め青天暁の柄に手を添えた。

次第に風が強まり、地上に散ばった木々の葉を舞い上がらせる。

周囲の倒された木々の枝が風に僅かに揺れるが、弱々しく音は小さく風の音の方が大きく聞こえた。もうあの二人の周囲は森と言う面影は無く、木片や木の残骸が散ばっているだけだ。

苦痛からようやく目を見開いたフォンは、飛び起き静かに息を吐く。ゆっくりと、腹の奥から息を吐き出し、鋭い眼光を少年の方へと向ける。尻尾がフォンの後ろで左右に動き、右手の爪を地面に減り込ませる。

全ての動きを見据えるだけの少年は、小さく息を吐くと、荒んだ瞳でフォンの顔を見た。濁りのある淡い黄色の瞳に、フォンの尻尾が動きを止める。

「ガアアアッ！」

咆哮。だが、少年は動じない。フォンが迫り、右腕が空を裂く。

拳が顔面に迫る。広い視野の端に見える拳。それを、左手の甲で払う。拳が顔の横を通過する瞬間、少年は体を横にずらす。勢いを抑えきれず、フォンは少年の横を通過する。

すれ違う瞬間、二人の視線がぶつかった。怒りを滲ますフォンの眼と、感情など消え失せた様な少年の眼。両者の視線が火花を散らせ、交錯する。

体を反転させ相手の方に体を向けたフォンは、右手で地面を引つかき勢いを殺す。土煙が僅かに舞い、両者が睨み合う。額から一筋の雫が流れ、地上に落ちる。一定のリズムを刻み、少年を見据えたまま、口を少しだけ開いた。二本の牙から涎が滴れる。

「まだ、分からない様だね。力の差を」

「ガウウウツ」

「威嚇のつもりかい？ でも、威嚇ってのは強い者にしても効果は薄いんだよ」

身構える事も無く、無防備に立つ。だが、隙が無い。周囲三六〇度全てを見えている様で、何処から攻撃しても当るとは思えなかった。フォンとて、その事を理解しているのだろう。尻尾を左右に動かすだけで、少年の事を真っ直ぐに睨みつけて動かない。

その場が沈黙してから数分。先に行動を起こしたのはやはりフォンだった。

右手で地面を掻き揚げ、石つぶてを飛ばす。しかし、大小様々な石つぶが、少年の右手によって軌道をずらされる。まるで少年を避けている様だ。

「小細工は通用しない。もう少し本気でやったらどうだ？」

「ぐつ……グオオオオツ！」

咆哮と同時に、フォンが右手でもう一度石つぶを飛ばす。その行動を見据える少年は、誰にも聞こえない小さなため息を漏らす。

「同じ事を繰り返しても、同じ結果しか生まれない」

飛んで来る石つぶを次々と弾く。刹那、巨大な石つぶが少年の視界を遮った。目付きが変わり、左手で拳を握る。これは弾けない、

と瞬時に判断したのだ。

左足を踏み込み、拳に力を込める。足の指に力を加え、地面を蹴る様に体を前へと押し出す。上半身が擦れ、背骨が軋む。そして、回転させる様に右腕を引くと、枷を外した様に左拳が勢い良く突き出された。

轟音が周囲を包み、衝撃波が広がる。少年の目の前に迫っていた巨大な石つぶが、跡形も無く消滅した。

塵が舞い、風が吹き抜ける。その場を静寂が包み、少年が静かに顔を上げた。視界には闇だけが映り、フォンの姿は無い。逃げた？とは、考え難い。ならば。

素早く右足が風を切り、上空から振り下ろされたフォンの右拳とぶつかる。骨が軋み、一瞬少年の表情が歪む。一方で、フォンの口元が僅かに微笑む。同時に死角から尻尾が現れ、少年の顔に向って飛ぶ。しかし、それは少年に届かなかった。拳半個分の所でピタリと止まる。

「甘い。実に甘い。あの一撃は俺の油断。もう、あんな事二度と無い」

「グウウウウッ」

右手が尻尾を掴んでいた。強靱な尻尾が動きを封じられ、フォンの体が地面に落ちる。尻尾を掴んだまま地面に這い蹲るフォンを見据える。無様なその姿に哀れむ様な眼差しを向けた。冷やかな笑みを浮かべ、「期待はずれだよ」と、述べると少年は手を放す。

倒れるフォンは、喉の奥から声を発しながら真っ直ぐに少年を睨む。だが、少年は何も言わず背を向ける。音も無く立ち上がったフォンは、その背中を見据え不適に微笑み、鋭い爪を少年の背中に突き立てた。

爪先が少年の背中に触れ、異変に気付く。だが、気付くのが遅すぎた。少年の姿が消え、フォンの腕が大きく空を切る。

「不意打ち？ 姑息だね。まあ、勝負だから卑怯とは言わないけど、プライドとか無いんだね」

少年の声が頭上から聞こえる。右手をフォンの頭に着き、逆立ちする少年。足先まで綺麗に直立し、微動だにしない。

「それじゃあ、終わりにしようか。俺も急がしいんでね」

呟き声と同時に膝を折ると、体を前に倒す。右手を軸にして大きな円を描く様に、少年の体が倒れる。そして、重力に引かれた膝が、勢いそのままにフォンの背中に突き刺さった。背骨が軋み、口から血が飛び散る。意識が薄れ、フォンの体が崩れ落ちた。

地面にうつ伏せに倒れ、体が元に戻る。尻尾が消え、侵食が引いていき、右腕も傷痕だけを残り元通りに戻っていた。意識を失い、体の制御を失ったのだらう。そんなフォンの背中に足を置く少年は、体を屈めてフォンの耳元で囁く。

「俺は待っている。お前との約束を果たす為に」

意識を失っているフォンに伝わったか分からないが、それを告げるとフォンの右手首にあの銀色のリングをつける。翡翠の宝石が不気味に輝く。

背中から足を退けると、カインの方へ体を向ける。瞬時に身構える。だが、少年は穏やかに笑みを見せ、視界から消えた。

「安心しな。キミに危害は加えない」

耳元で囁かれた。背後に感じる気配に、息を呑む。緊迫した空気に動悸が激しくなる。思考が色々な事を思い出させる。まるで走馬

灯の様だった。コイツには勝てない。殺される。そんな言葉が脳裏に過つたと同時に、脳内にプツンと音が響き思考が途切れた。

美しい金髪が赤く変色する。白煙が上がり、鉄の擦れる音が微妙に聞こえた。

刹那、反転し青の閃光が飛ぶ。バックステップでその場を退き、変わらぬ笑顔でカインを見据える。

思考の完全に停止したカインの眼差しは、不気味だった。穏やかだった表情も、何処か殺気だつて見せる。青天暁の刃がその心に共鳴する様に、鮮やかな朱色に変化していた。危険な二オイに少年も気付く。

「俺は疲れている。キミの相手までするつもりは無い」  
「……………」

何も言わず切っ先を向ける。両者の視線が重なり、風が吹き抜けた。

## 第89回 もう一つの人格

静かに流れる風。

両者の足元を転がる木の葉は、二人を避ける様に脇に流れていく。赤毛の髪が揺れ、朱色の刃が木の葉を燃やす。それを見ただけで刃に高温の熱を帯びている事が分かる。

腕を組む少年は、困った様に右頬を搔く。なるべく戦いを避けたい、と言うのが少年の考えだろう。しかし、カインの方は退く気は無く、冷たい視線が真っ直ぐに向けられる。

「退いてはくれない様だね」

「当然だ。仲間を傷付けられて、退けるか」

口調と声質が違う。別の人格になってしまった、そんな印象だった。危険な雰囲気だが、平然とする少年は、思い出した様に口を開く。

「もしかして、キミはあれかな？ 彼のもう一つの人格って奴」

「だとしたら？」

「随分と変わってるね。キミは」

「それはお互い様だ。バケモノ」

黒い瞳が僅かに赤みを帯びる。口元が緩み、不適な笑みを向けた。怪訝そうな表情の少年は、渋々と拳を構える。

両者の視線が交わり、それぞれが相手の動きに合わせる様に足を動かす。一定の距離を保ち、視線はジッと相手を見据える。切っ先が地面を抉り、土を焦がす。嬉しそうに微笑むカインは、つま先に体重を掛け、前傾姿勢をとる。同時に少年も僅かに前傾の姿勢に入る。

そして、同時に地を蹴った。地を抉る切っ先が火花を散らし、少年が間合いに入ると下から上へ閃光が走る。

「おっと」

右足を踏み込みスピードを殺した少年は、それを予測していたのか、バックステップで刃から逃れた。だが、続け様に切り上げた青天暁が振り下ろされる。

一瞬、驚いた表情を見せるが、それも容易く体を捻りかわした。

「今のは驚いたよ」

「驚くのはこれからだ」

不適に微笑み振り下ろした青天暁を持ち直し、素早く突き上げる。その高速の突きをかわせないと判断した少年は、足元に在った木の棒を蹴り上げ右手に取ると、それで青天暁の側面を叩く。刹那、木の棒が燃え上がる。

「チツ！」

大きく舌打ちをする。刃は僅かに少年の顔の横に逸れていた。僅かに軌道をずらされていたのだ。

「残念だったね。三連撃も」

「安心しろ。俺のは四連だ」

白い歯を見せ笑うと、青天暁を引く。ノコギリ状の刃が少年の服に引っかかり、少年は逃れる術を失う。全てはこの為の布石。そう思うと、今まで大振りだった太刀の意味が良く分かった。

カインと少年の視線が一瞬出会う。そして……肉を裂く短い

音が響いた。

闇を彩る鮮やかな赤い飛沫。

花弁の様に散り、雨の様に地上に落ちた。

静寂が辺りを支配し、風が優しく吹き抜ける。

指先からシトシトと滴れる赤い液。それと同じ様に、切っ先からも赤い液が落ちる。

緊迫した空気が両者の張り詰めた心境を物語った。

ジリツと右足を前に出すカイン。青天暁は下段に構える。

「驚きだな。まさか、腕であの牙から逃れるとは」

静寂の中でカインが述べる。微かに口元を綻ばす少年は、深く傷付いた右腕を見て静かに答えた。

「フフフツ。致命傷を避けるのを最優先に考えた結果、こんな形になってしまったんだよ。まあ、この程度の傷なら治癒できる」

「その傷だけで済むと思ってるのか？」

鋭い眼差しに、少年は穏やかな視線を向ける。

「もちろん。そのつもりだよ。これ以上、戦う意味が無いからね」

「俺が簡単に逃がすと思ってるのか！」

地を駆け刃が風を切る。鋭い刃音。太刀風が吹き、木の葉が舞う。上半身を退け反らし刃をかわした少年は、そのままバク転でその場を離れる。距離を取った少年は、静かに息を吐く。

間合いを取られ渋い表情を見せるカインは、青天暁を構えず少年を見据える。赤毛が徐々に元の金髪へと戻り、青天暁も元々の蒼刃そうじん



へと戻る。時間切れ　と、言う所だろう。急激な変化に疲弊しているカインは、青天暁を地に刺し体を支えた。

「ハア…ハア……」

「あれは、体を酷使するみたいだね。長期戦には不向きだ」

「ハア…ハア……。何が…望み……だ」

「俺に望みは無い。ただ……」

彼は静かに呟く。その声は突如吹いた突風に掻き消され、誰にも聞こえなかった。

「さて、落ち着いた所で話しておく事がある。これは、キミ達にとつてとても重要な事だ」

「重要な…事？」

「そう。特にフォンとテイルの二人に関する事だ」

真剣な表情を見せる少年に、カインの顔と引き締まった。緊張が走り、少年が告げる。

「あれは、外させるな」

「あれ？」

「右腕に付けたリングの事だよ。あれを外した時、フォンはフォンで無くなる。言ってる意味は分かるよね」

「……………」

何も言わず少年の目を真っ直ぐに見つめる。何故だか何が言いたいのか分かった。あの右腕は危険だ。そして、あのリングはその力を抑えている。外せばフォンはあの腕に呑み込まれる。そう言う意味だろう。

賢いカインならすぐに色々と理解が出来た。だが、それが一体何

処まで本当なのか、その事が脳裏に過る。

鋭い視線に少年も鋭い視線を向ける。両者の視線が交錯し、カインは剣を抜き切っ先を向けた。

「クウ……。もし……。もしも……。それが嘘だった時は……」

青天暁を持ち直し、鋭い眼光で少年を睨む。

「キミをこの手で殺す」

「ああ。もしもの時は、この命をキミに差し出そう」

軽い口調で了承する少年は、胸に手を当て穏やかに微笑む。何処までが本気なのか分からない。その為、警戒するカインは、青天暁を握ったまま動かない。

少年は動かないカインに僅かに頭を下げると、そのまま闇に消えた。少年の姿が見えなくなり、緊張の糸が切れたのかカインは仰向けに倒れた。持っていた青天暁が澄んだ金属音を奏で地面に転がる。大きく息を吸い込み、腹から息を吐き出した。思い出すだけで体が小刻みに震える。自分が生きている事を確かめる様に、両手で肩を握った。

## 第90回 必要ない

陽が落ち月が昇る。

静けさ漂う闇の中で、フクロウの声だけが聞こえる。

時折吹き荒れる木枯しが、木の葉を舞い上げる。

茂みに身を隠す三人は、白い息を吐きながら寒さに耐えていた。

「さむっ……………」

「全くじゃな」

「……………」

寒さを凌ぐ様に体を小刻みに震わせるティルとノーリンに対し、微動だにしないバルドは双牙の手入れをしていた。奇妙な切れ込みの入った大小二つのナイフ。どれも手入れなど必要ない程美しく刃を輝かせる。闇の中でもそれは美しく見えた。

呆気にとられるティルとノーリンは、小さくため息を漏らし、ゆつくりと顔を見合わせた。

「どう思う」

「何がじゃ？」

「あれだよ。あれ」

ティルがバルドの方を指差すと、ノーリンも納得した様に頷く。

「そうじゃな。ワシには分からん」

「幾らなんでもやりすぎだろ」

「まあ、手入れを怠るよりましじゃろ？」

「そうだけどな……………」

もう一度ため息を吐くと、白い息が闇へと消えた。

森へと墜落した飛行艇が、月明かりに照らされ色鮮やかに光る。機内では複数の足音が慌ただしく行き交う。

「居たか？」

「いや。コッチには居ません」

「あーっ。もう、何処いったんだよ！」

「それじゃあ、私達は他の所を探してきます」

また複数の足音が慌ただしく機内を移動する。残されたのは背丈の低い民族衣装を纏ったウインスト、オレンジブラウンの髪を揺らすフレイスト。小さくため息を漏らしたウインストは切れ長の目をフレイストの方に向ける。

「なあ、どう思う」

「さあ。私にはさっぱりです」

「つたく、こんな時に何してんだか……」

ウインストがもう一度深いため息を吐くと、フレイストは穏やかな笑みを向ける。

「心配してるんですね」

「何だよ。心配するのは普通だろ？ 仲間なんだから」

「そうですね。それじゃあ、私達は外を探してみましよう」

笑みを浮かべるフレイストに、面倒臭そうに頭を掻きながらウインストはもう一度ため息を吐いた。

操縦室ではブラストが一人飛行艇のデータを修正していた。まだ、

機内で起きた事件については何も知らされていない。飛行艇の修復に集中して欲しいと言う、ワノール達の最大の配慮だった。

一方で、ワノールと行動を共にするカシオは、森の中で野垂れ死んでいた。

「あつうつつ……。も、もう限界だ……」

「それは、コツチの台詞だ。いいから、さっさと立て」

「うるせえ。お前みたいな冷酷非道な奴に、俺の気持ち何て分からないだろうよ」

「フツ。お前の様なお喋りな奴には分からんだろう。無駄話を聞かされるコツチの気持ちは」

軽く馬鹿にした様な態度のワノールに、うつ伏せに倒れていたカシオが立ち上がり怒鳴る。

「なんだとコラー！」

「それだけ元気があれば十分だろ。行くぞ」

「ガウウウツ！ 謀ったな！」

「謀った？ 何を言っている。さっき言った事は本気で思ったことだ。少しは理解しろ」

ワノールの言葉に啞然とするカシオは、顔を真っ赤にし、雄叫びを一つ上げた。夜の静かな森に、その声は何処までもこだました。

その森の奥で、二つの影があった。

一方は金髪の髪を揺らし、黒の衣服に身を包む。

一方は空色の髪を揺らし、見透かした様な空色の瞳が闇の中で煌く。

両者の距離はおよそ三メートル。二人の視線が交わり、口から白

息が漏れる。

「何処へ行くつもり」

「……………」

空色の髪をした少女の声に返答は無く、静かに時が過ぎる。沈黙の後、空色の髪をした少女がもう一度問う。

「質問に答えなさいよ！」

「……………」

沈黙。金髪の少女は一切質問に答える気は無い様だ。その態度に苛立つ空色の髪をした少女は、静かに歩み寄り肩を掴む。

「ルナ！」

その言葉に、ルナと呼ばれた金髪の少女が、乱暴に少女の手を払い除ける。その目に浮かぶ水滴に、少女は驚く。ルナは静かに雫を拭い、背を向け口を開いた。

「私の事は放っておいてください」

声色がいつもと違う。何処か感情的、そんな風に感じる。言葉を掛けようと少女が一步前に歩み寄ると、ルナが更に言葉を続ける。

「止めてください。もう、本当に…………私を…………」

最後は涙声で聞こえなかった。彼女の目から零れる涙。今まで抑えていた感情が湧き上がってきたのだろう。

戸惑う少女は暫し言葉に詰まる。どう言葉を掛ければ良いのか分

からなかった。戸惑い黙っていると、微かにルナの言葉が耳に届く。

「私は……必要ないんです……。あそこに……居る意味は……無い……」

「何言ってるの？ ルナが必要無いだなんて誰も思っていないよ」

「治療する事の出来ない私に、あそこで何が出来るって言うんですか！」

怒りの籠った言葉に少女はたじろぐ。かつて無いほどの強い眼差し、溢れる感情。それが少女にピリピリと伝わる。

一方、ルナも感じたことの無い感情に、苦しんでいた。どうしたら良いのか分からず、ぶつけようの無い気持ちを少女にぶつける。それがただの八つ当たりだと分かっていたいながら。

「私は力になりたい。彼を死なせたくないの！」

「それは、フォンだって一緒だよ。だから」

「一緒じゃない。彼はいつだってそう。何かを守る為に自らの命を削る。それなのに、私には何も出来ない。もう……彼の傷を癒す事も……」

零れた涙が地上へと落ちる。一滴、一滴が、乾いた土に弾けて消えた。それと同じ様に彼女の鳴き声も闇へと消える。一つ一つの言葉の重さを少女も感じた。そして、ルナがどれだけフォンの事を想っているのかを、知った。彼女がどれ程苦しんでいるのか理解し、少女も涙を流す。

しかし、同時に少女は怒りを覚える。フォンがこれから何をしようとしているのかを知り、フォンが何を守ろうとしているのか分かっているから。そして、フォンの想いが彼女に伝わっていない事が、尚少女に怒りをもたらす。

「バカア！ あんたは何も分かってない！ フォンがしようとして  
いる事も、フォンの事も！」

「私に、知る権利はありません。私には未来が無いから……」

「そんな事無い！ フォンは未来を変える。あなたの運命を変える。  
その為に、フォンは戦う。フォンはあんたの為に戦ってるの！」

その言葉がルナの胸に突き刺さる。胸が張り裂けそうな程痛んだ。  
感じた事の無い痛み、涙が一層溢れ出す。

涙を拭いた少女は、涙を堪えルナへと歩み寄り優しく彼女を抱き  
締めた。少女の胸に顔を埋め泣きじゃくるルナの頭を、少女は優し  
く撫でる。

「もう苦しまなくていいよ。運命は変えられる。私も頑張る。自分  
の手で未来を切り開く為に」

涙を流しながら少女は願う。自分が見た結末が変わる事を。変えら  
れる事を。



## 第91回 一人対多勢

夜空を見上げるカイン。

体の震えは大分落ち着いた。今思い出すだけでも、自分が生きている事が不思議だ。

フォンの暴走。謎の少年。自分がどれ程弱いのか思い知った。右手をそつと空へと差し出し、ギュツと拳を握り体を起した。地面に横たわる青天暁を手に取り、胸の前へと持つてくる。

「誓う。この剣に。僕はもっと強くなる。誰も傷付けさせない程」

自分に言い聞かせる様にそう告げたカインは、青天暁をそのまま鞘へと戻した。鉄の擦れる音だけがその場に響き、カインは静かに腰を上げる。瞼を閉じ、周囲に耳を傾ける。

風の音。木々のザワメキ。それに混ざり奇妙な足音が複数。ティルやノーリン、バルドの三人とは違った歩幅と重さの足音。魔獣だろうか。脳内でその音のする方角、距離を分析する。その結果、自分達が完全に囲まれている事が分かった。先程の争う音が聞こえたのだろう。

瞼を開き静かに息を吐く。冷静に考え、現状が最悪である事を理解した上で最善の策を練る。

数分後、複数の足音と共に、魔獣が姿を見せる。二足歩行から四足歩行まで様々な魔獣が牙を剥き、鋭い眼光を闇の中で輝かす。その中心に佇むカインは、暗闇でも目立つ程の金色の髪を揺らし、腰の青天暁に手を掛ける。

左の親指で鐳を弾き、右手で抜刀すると同時に髪が赤く染まり、全身から白煙が上がる。穏やかな目付きが鋭く変わり、口から漏れ

る白い吐息が闇へと溶け込む。

蒼刃が暗闇で煌き、その刃を朱色に変える。

カインの異変に気付いたのか、魔獣の中でも一際前に出ていた二足歩行の魔獣が問う。

「こんな所で何をしている人間」

「……」

返答は無い。代わりにカインの体がユラリと揺れ、姿が消える。

一瞬の事に周囲がザワメク。だが、次の瞬間悲鳴の様な声上がり、血飛沫が闇に舞う。周囲を見回すと、一体の魔獣の首から血が噴出し痙攣している。

魔獣達に一瞬にして緊張感が走り、魔獣の一体が指示を出す。

「四人一組になれ。決して一人で手柄を取ろうとするな。奴は強い！」

その指示に従う様に魔獣達が四人一組に固まり周囲を警戒する。一方で、また悲鳴が上がる。

カインの振るう朱色の刃が闇で閃光を閃かせ、また消えた。その後も次々に上がる悲鳴の数。その間隔は徐々に短くなり、時折悲鳴が重なりあう。

漂う悪臭は全て魔獣の血のニオイで、そのニオイが魔獣達の嗅覚を狂わせる。その中で木の枝に止まる一体の魔獣だけが全てを見据えていた。闇を色鮮やかに映し出すその瞳は完璧にカインの動きを立体的に捉えていた。

不気味に笑みを浮かべ、その魔獣は翼を広げ大空へ舞い上がる。その動きに、先程指示を出した魔獣が声を上げる。

「何処へ行く！」

「てめえら馬鹿とは違うんだよ。俺の指示に従ってもらうぜ」

「貴様の指示に従えだど？ 格下が舐めるな」

地面を這う四足歩行の魔獣がそう述べると、空を舞う魔獣が馬鹿にする様に笑う。

「ほーほほつ。てめえは馬鹿か？ この闇を支配しているのは俺だ。俺の言う事が聞けねえなら死ね！」

「二人とも止める。今は言い争ってる場合じゃない」

「分かつてるが、何であんな格下の」

「階級など関係ない。我等は得体の知れん奴と戦っているんだ。力を合わせる」

魔獣達の会話を闇に潜み聞いていたカインは、疑問を抱く。いつから魔獣達は協力する様になったのか。今までは好き勝手に戦っていた。それがどうして急に。魔獣達も成長しているのか、それか何か別の理由があるのか、不確かな事だが確実に知能が身に付いている。

息を潜めるカインは静かに瞼を閉じ、ゆっくりと息を吐く。ここからは慎重に行動しなければならぬ。あつちには闇の中で目の利く奴がいる。状況的は分が悪いが、既に策は準備されている為、焦りは無い。

「まずは奴からか……」

青天曉を下段に構え、空を舞う一体の魔獣を見据える。と、同時に背後に気配を感じ振り返る。闇で三本の筋が閃く。咄嗟に青天曉を振り上げると、澄んだ刃音と共に火花が散る。

「どつ言う事だ……」

驚くカインの視界に一体の魔獣。鋭い三本の爪を持ち、背中には無数の棘を備え付けている。不気味な面持ちと、薄ら笑い。

怪力が朱色の刃を押し。小柄のカインの体は次第に後退していく。

「クツ……。消える！」

「クケケケケツ！」

鋭く刃を振るうと同時に、魔獣の姿が闇に消える。朱色の閃光だけが空を切った。小さく舌打ちすると、また背後に殺気を感じ振り返る。

大きく開かれた口が牙を剥きカインに襲い掛かる。鋭い牙を青天暁で受け止めた。小柄なカインの体は軽々と押されていく。鋭く長い二本の牙がカインの目を抉ろうと迫る。両腕に力を込めそれを堪えるカインは、奥歯を噛み締めた。

「邪魔だ！」

両足で地を確りと踏みしめ、真っ向から魔獣に力をぶつける。両足で踏み込んで留まる事を知らない魔獣の勢い。激しい足音と土煙だけが闇の中に浮かぶ。

「ほーほほほつ。やっぱり、奴は力が無い。このまま力押しでいけば潰せる」

「力押し……ね。んな簡単に潰せるのか？」

「さあな。今は奴に任せる」

空を舞う魔獣が次の指示を出す。すると、カインを押し魔獣の進行方向に先程の魔獣が姿を現す。鋭い爪が三本、カインの背中に向けられた。

「クケケケケツ！ 死ね！」

「馬鹿か？ 死ぬのはお前等だ」

突如、カインの体が沈む。カインが突然消え驚く魔獣だが、それよりも先に鋭い三本の爪が顎を抉る。と、同時にその牙が目の前に居た魔獣の首元に食い込む。血飛沫が舞い地面に横たわるカインが静かに体を起こす。

「真っ向から馬鹿正直に立ち向かう奴などいない。所詮、単細胞だな」

「クツ！ 何だ！ アイツは！」

「さて、どうするんだ？ 次は誰がいく？」

四足歩行の魔獣が隣りの魔獣に尋ねる。渋い表情を見せる魔獣は、小さく息を吐き、一歩前が出る。

「仕方ない。俺がやる」

鋭い爪を見せ、静かにカインを見据える。カインもその魔獣を見据える。両者の視線がぶつかり合う。その瞬間、上空を舞う魔獣がカインに向って急降下する。

「死ねエエエエツ！」

「うぜえ」

カインは視線を向ける事無く青天睨を振るう。朱色の刃が闇を裂き、血飛沫が散った。裂かれた肉体が地上に落ち、魔獣の体が痙攣する。地面に血が広がり、次第に魔獣の体が動かなくなった。

それを見て、四足歩行の魔獣が不適に笑う。

「不意打ちする奴が、叫んでちゃわけねえだろ。これだから、格下  
って言われんだよ」

「止さんか。仮にも一緒に戦った同士だ」

「同士？ 俺は自分より弱い奴を仲間とは思わねえ」

「じゃあ、お前は強いのか？」

不気味な瞳が闇の中で魔獣を睨む。殺意を含んだ恐ろしい目付き  
だった。その場に居た魔獣の何名かは、その殺気だけで臆し呼吸が  
苦しくなる。

節々が軋み押し潰されそうなほどのプレッシャーを感じる。それ  
でも尚、カインの目を見据える魔獣は、ゆっくりと足を進めた。

## 第92回 不穏な気配

向い合う二人。

右手の朱色の刃が空気を揺らめかす。高温の熱が更に温度を上げ様と不気味な音を吹かせる。

周囲に集まった魔獣達は次々と去り行く。自分と相手の力量の差を感じ取ったのだろう。だが、去らぬ者も半数居た。

自らの力を過信する者。

力量の差を感じ取れない者。

そして、強者。

圧倒的な力の差を見せても尚、顔色一つ変えない魔獣が、カインと対峙する。間違いなく集まった魔獣の中では最も力を秘めた魔獣だろう。

闇の中でも目立つ程の黄色の瞳。それを見据えるカインに異変が起きる。大地が揺れ、視野が歪む。激しい動悸と吐き気。体内を流れる血がザワメキ、体が熱い。

(クツ……こんな時に……)

左手で胸を押さえながらも、視線と表情は変えない。これが、代償だった。体の自由が利かず、節々が軋む。血が煮えたぎり今にも噴出しそうだ。紅蓮の髪、朱色の刃、二つが元の色へと戻る。

体が限界だったのだ。膝から崩れ落ち、力なく地面に横たわる。

(ダメだ……。もう力が……)

うつ伏せに倒れるカインは、体を起そうとする。だが、指一本動かない。

倒れて動かなくなったカインに、魔獣達が目の色を変える。

「グへへへッ。何だ何だ？」

「急に倒れたな」

「今なら殺せるぜ」

「だな。やれ」

一体の魔獣の指示で、その場に居た魔獣が一齐にカインに襲い掛かる。肉の裂かれる音が森の中に響き、血飛沫が夜空を鮮やかに舞った。

時を同じくして。

茂みに身を隠すテイル達三人。言葉を発する事の無い三人は、各々作業を進める。

テイルは数分前から天翔姫の手入れをしていた。こうして触ってみると、天翔姫の機能と言うのは便利なものだ。前回は使えない機能もあったが、今回の改良版は使えない機能が無い。剣も刀身の細いのと太いの二つだけで、銃も一丁。その他にも機能があるが、テイルが使うのは殆どこの三つくらいだ。それでも、いずれ使う事になりそうな機能ばかりだった。

機能を一つ一つ確かめるテイルに対し、のんびりと空を見上げるノーリンは、小さなナイフを使い木彫りの人形を作っていた。巨体の割に器用に木を彫り上げ、ふと指を止め空を見上げる。

バルドは相変わらず双牙の手入れを続けており、時折不適に笑う。とても不気味だ。

異様な空気の中、テイルが手を止める。冷たい風が吹き、三人の間を流れた。髪が揺れ、衣服が揺れる。木の葉が舞い上がり、木々がザワメク。

「何か聞こえる」



「確かに、何か聞こえるのう」  
「雑音か？」

バルドが尋ねると、ノーリンが渋い表情で答える。

「いや……。僅かだが、悲鳴の様な声が聞こえる」

「悲鳴？ そんなの聞こえんが……」

「……」

不思議そうな表情のティルとバルドに対し、ノーリンが更に耳を澄ます。風の音に混じり、はっきりと声が聞こえる。何かの悲鳴だ。そして、刃がぶつかり合う音も時折聞こえた。誰かが戦っている。

「詳しくは分からんが、誰かが戦っておる」

「フォンとカインか？」

「分からぬ。しかし、何やら不穏な力を感じる」

「不穏な力？ と言う事だ？」

「だから、分からぬと言っておるじゃろ」

ティルの言葉にノーリンが少々乱暴な口調になる。感じた事の無い恐怖がノーリンの耳に届いていた。

その時、雑音と言うに等しい叫び声が轟く。

「グゲゲゲエエエツ！」

背筋が凍り付くほどの不気味な声は、ティルとバルドにも聞こえた。大気が震え、突風が吹きぬける。

「な、何だ……」

「分からぬ。だが、危険な感じがするのう」

「行くのか？」  
「行くしかないだろ」

ティルが即答すると、バルドが嫌そうな顔をした。それもそのはずだ。今回は偵察だけで、面倒な事は起こらない。そう聞かされていた。しかし、実際はどうだ。偵察に来たら、見張りが多くて近づけない。拳銃、フォンとカインは枯れ枝を取つてくると言つて戻つてこない。トドメがこれだ。とことん変な事に巻き込まれて行く。深々とため息を漏らしたバルドは、ティルとノーリンの二人を見据えて首を左右に振る。

「ハア……仕方ない」

「さて、バルドの了承も得たし、行くか」

「そうじゃな。フォンとカインの事も気がかりじゃしう」

軽く足を屈伸するティルは、天翔姫を刀身の細い剣へと変え、右手に握る。バルドは空穂を背負い、左手に弓を持つ。指の骨を鳴らすノーリン。

「先頭はワシがいいじゃろ」

「いや。バルドに頼む」

「何で俺が？」

「この中で一番視野が広いし、視力がいいからな」

「……それだけで、俺が先頭なのか？」

不満そうなバルドに対し、ティルが真剣な眼差しを向ける。一方で、ノーリンも暫し不服そうな表情をしていた。二人の眼差しを受け、ティルは眉間にシワを寄せる。

「じゃあ、どうしろって言うんだ？」

「とりあえず、先頭はワシじゃ」

「俺は最後尾に行く」

「じゃあ、俺は？」

「間じゃろ？」

「ハア……。まあ、仕方ない。とつとと行くぞ」

ティルはそう言い、ノーリンを先頭に走り出した。最後尾から周囲を警戒するバルド。先頭ではノーリンが耳を澄まし辺りの情報を得る。そんな二人の間に挟まれ、ティルは小さくため息を零す。

「ティル。静かにしとれ。音が聞こえぬ」

「悪い……」

小声で謝り、ティルは周囲を見回す。木と闇だけが見える。この光景もバルドの目には違って見えているのだろう。

闇の中で響く三人の足音。それに混ざり、不気味な声がこだまする。その声に徐々に近付いているのが分かる。吹き抜ける風から伝わる殺気。体を感じる重圧が、三人を押し潰しそうだった。

「そろそろじゃのう」

「何か来るぞ！」

バルドが叫ぶと同時に矢を連射する。ノーリンが足を止め、ティルも足を止める。バルドは更に矢を射ると、足を止めた。鈍い音が聞こえ、闇の中で何かが倒れる音がする。目を凝らすティルとノーリンに対し、バルドが静かに足を進める。

闇の中に転がる塊。それが何かを考えるより先に、異様な臭いが漂う。恐る恐る歩み寄る三人はその塊を見下ろす。矢の刺さった肉片。血がドロドロと溢れている。目を細めるティルは、静かにその肉片に触れる。まだ暖かい。しかも、骨ごと綺麗に切り裂かれてい

る。一体、どうやったらかんなに綺麗な切り口になるんだ。

三人の視線が肉片を見つめ、沈黙する。静まり返る三人の間に、風が吹きぬけ、咆哮が轟いた。

### 第93回 残虐

「な、何だアイツは！」

「クソツ！ 退くぞ！ 皆逃げろ！」

「グアアアアッ」

「た、助け ウオオオオッ」

悲鳴や叫び声が飛び交う。

飛び散る血飛沫が周囲を赤く染め、大小様々な肉片が辺りに散乱する。

悪臭とも言える異様な臭いが漂い、その中心でもう一度咆哮が鳴り響く。

「ウガアアアアッ！」

大気が震え、大地が揺れる。木々が振動で真つ二つに裂け、地面に亀裂が生じる。

全てを破壊する咆哮が止み、黒い影がケタケタと笑う。口が裂け白い歯が剥き出しになった。整った綺麗な歯が糸を引く。周囲を見回し、影は重々しく右足を踏み込む。すると、爆音を残し影が消える。直後、悲鳴がこだまし、血飛沫が舞う。

地面に横たわるカインは、その光景が目には焼きつく。おぞましい姿のあの生物は、間違いなく飛行艇の監視カメラに映っていた生物だった。

魔獣の頭を力で引き千切り、その肢体を捻じ切っていく。血と肉片が地面に落ちる。黒い影の手が血で赤く染まり、それを口へと運ぶ。舌が指先の血を舐め取り、黒い影がケタケタと笑い出す。

その笑いが周囲を凍り付かせる。ある者は腰を抜き、ある者は意識を失う。その場に居た誰もが恐怖に震え上がる。

「クケクケケケツ」

「なめるな！」

魔獣の一体が、意を決した様につつ込む。だが、その体が突如ずれ、血飛沫を上げ肉が地面に転がる。何が起こったのか分からないが、何か鋭い糸状の物が張り巡らされていた。いつの間にかそんなものが張り巡らされたのか分からないが、糸状の物に付着した血がシトシトと地面に滴れる。

「な、なんだ……。今、何が」

「くっ、来るぞ！」

魔獣達がザワメク。黒い影が糸状の刃の中を縦横無尽に駆け、魔獣達へと迫る。逃げようとすれば、見えない刃が牙を向き、逃げなければ得体の知れないバケモノに引き千切られる。

完全に逃げ場を失い、戦意を失くす魔獣達は、次々と悲鳴を上げ肉片と化して行く。悪臭と血の池。残骸が転がり、悪臭が漂う。そこへ、甲高い声が響き渡る。

「カイン！」

「あやつは、飛行艇に居た……。何でこんな所に？」

「そんな事どうでもいい。今はカインとフォンを」

「待て！ 動くな」

駆け出そうとしたテイルをバルドが制しさせ、その場に転がる木の枝を投げた。すると、木の枝が何かに触れ細切れになった。驚くテイルとノーリンに、バルドは更に眼を凝らし言う。

「既に囲まれてる」

「動こうものなら、ワシ等もあの木の枝の様になる、と言うわけじやな」

「こんな物！」

テイルは天翔姫を両手に握り、カ一杯に振り下ろす。澄んだ鉄音が響き、火花が闇を彩る。空中で止まる白と赤の入り混じった刃が小刻みに震える。奥歯を噛み締め、右足を踏み込むテイルだが、刃はピクリとも動かない。それ所か天翔姫の方が軋み始める。

一向にやめ様としないテイルの肩を、ノーリンが掴む。肩からスツと力が抜け、天翔姫を下ろす。

「くっそ！」

「そう熱くなるな。まだ、出来る事があるはずじゃ」

「この状況で何ができる！」

「冷静になれと言うとるに」

「俺は冷静だ！」

怒鳴るテイルに、小さくため息を漏らす。後ろの方では黙り込んだバルドが、鋭い眼光を闇に向け、ブツブツと言葉を呟く。誰にも聞こえない位の小さな声だが、ノーリンの耳にはハッキリと聞こえていた。しかし、無言でその様子を窺う。

闇の中でもテイルやノーリンよりは鮮明に見えているバルドは、次々と倒されていく魔獣達の姿に、バケモノの動きに目を奪われる。圧倒的な強さと恐ろしさ。体中の血が血流を速め、体が慄く。

「勝てない……。勝てないぞ。俺達では」

「そんな事分かってる！でも、カインとフォンをどうにかしないと」

「バカか！ 助ける前に俺達が殺される！」

「なら、見捨てろって言うのか！」

もめる二人に対し、落ち着いた様子のノーリンは、深々と息を吐く。呆れた様に首を左右に振り、二人の間に入る。

「止めるんじや。ここでおぬし等が争っても何にもならんじやろ！」

「分かつてる！ だが」

「いいか、今は自分の事だけを考える。奴からどうやったら逃げられるかを」

「ふざけるな！」

ティルが声を荒げる。

「いいか、俺は仲間を見捨てない」

「なら、自分の命を捨てるのか？」

「じゃから、止めると言うとるに！」

ノーリンが二人を制止しようとする。だが、二人はその言葉を聞かず、つかみ合い刃を向ける。白に赤い亀裂模様の入った天翔姫の細い刃がバルドの首筋に向けられ、一方で妙な切れ込みの入った刃の長いナイフがティルの喉元に向けられる。

息のかかる程顔を近づけ睨み合う二人。両者の首には僅かに赤い線が走り、刃に血が流れる。

「剣を退ける」

バルドが怒気を含んだ低い声で言うと、ティルも怒りを込めた声で言い放つ。

「ふざける。お前こそ、そのナイフを退け」



両者共譲らず、ギリギリと奥歯を噛み締める。

呆れるノーリンは怒りを堪え、二人を止め様とした時、突如咆哮が轟き、衝撃波が三人を襲う。衝撃が土煙を舞い上げ、周囲を包み込む。大小様々な石粒が飛び交い、目を開ける事も出来ない状況の中、ノーリンの耳に一つの足音が聞こえた。それは、軽快でとても軽々とした足音。それが、土煙の中を駆け、ノーリンの目の前を何かが通過する。

思わず身構えてしまったが、何事もなく足音が遠ざかっていく。訝しげに顔を顰め、ティルとバルドを確認する様に声を上げる。

「又しら、何事もないか？」

「ああ。何かあるとしたら、コイツがナイフを向けてること位だ」

「黙れ！ お前こそ、とつとと剣を退ける」

「やめぬか！ 今、ワシ等は袋の中のネズミじゃ。こんな所で揉めている場合じゃない。それに、今しがた何かワシ等の間を駆けてつたんじゃぞ！」

ノーリンの言葉に二人が動きを止める。と、同時にカインとフォオンが空から落ちてきた。ノーリンは何事も無かった様に二人の体を受け止め、見開いた鋭い眼差しを土煙の中へと向ける。

甲高い澄んだ金属音が次々と響き渡った。何が起こっているか分からず、辺りを警戒する三人。その三人に、幼さの残る綺麗な声が告げる。

「その二人を連れてここから去れ！ 今すぐだ！」

その声にティルが返答する。

「誰だ！」

「誰だっていいだろ。いいから早く去れ！ 僕が奴は引き止める」

「誰だか知らぬが、感謝する。しかし、又シが誰か分からぬ以上、その言葉を信じるわけには行かぬ」

ノーリンが渋い声で問う。暫く沈黙が続く。やはり、何かのワナなのかと、疑念を抱くノーリンは、静かに口を開く。

「何も言わぬなら、又シの言葉を信じる事は出来ぬ」

「だ」  
「何じゃ？」

僅かに聞こえた声に、ノーリンが聞き返すと、次はハッキリとした声で、

「僕は、十二魔獣第二席フォルトだ！ いいからここから消えろ！」

空を二本の閃光が閃き、小柄な体を屈めて地面に着地する。周囲を包んでいた糸状の刃が切り刻まれ地面へと降り注ぎ、テイル達の後方に退路が出来た。身を屈めるフォルトが僅かに顔を横に向け視線だけを三人に向ける。鋭い眼差しの奥にギラめく赤い瞳が、三人を睨む。

## 第94回 二人組み

「ハア…ハア……」

三つの荒い息が重なり合う。バラバラの足音が次第にゆっくりになり、一つに留まる。

どれ位走ったのだろう。三人の息は上がっていた。極度の緊張からか、体力を異常なまでに消耗していた。

両手を膝に落とし深々と息をするティルは、後方に佇むノーリンへと目を向ける。フォンとカインの体を担いでいると言うのに、この中では一番息が上がっていない。一番冷静なもの、きつとノーリンだ。

そのノーリンが複雑そうな表情を見せているのに、ティルは気付く。フォルトの事だろうか。それとも、あのバケモノの事だろうか。不思議そうな表情のティルに、ノーリンが気付き口を開く。

「どうかしたのかのう？」

「いや。お前こそ、どうしたんだ？」

「少しな。それより、バルドは大丈夫か？」

振り返ると、疲弊したバルドが辛そうに息をしていた。流石のバルドもあのバケモノの気配に圧倒されてしまったようだ。あれ以降全く口を聞いていない。暫しバルドを見据えていたティルは、一呼吸置いてからノーリンの方に目を向ける。

僅かに頷いたノーリンが担いでいたフォンとカインを地面に下ろした。二人とも目立った外傷は見当たらない。ただ、フォンの右腕は思った以上に酷い状況だった。

「これは酷い有様じゃ。一体、何と戦ったらこんな有様に……」

「それは、カインがやった奴だ」

「何？ 何故、カインが？」

「以前、聞いた。暴走したカインを止めようとしてやられたと。しかし、ここまで酷かったとは……」

焼け爛れた皮膚。この傷で今まで戦っていたと思うと、背筋がゾツとする。

息を呑むノーリンは、その傷に右手で触れた。触れると体が微かに震える。痛みを感じている様に見えるが、表情に変化は無い。感覚がおかしくなっているのだろう。

渋い表情のノーリンは、テイルの方に顔を向ける。僅かに頷いたテイルは、小さな声で言う。

「コイツの体は既にボロボロだ。普通なら、もうまともに戦う事すら出来ない」

「そこまで体を酷使用する理由はなんじゃ？」

「さあな。戦う理由は人それぞれだ。俺には分からん」

「そうか……。しかし、このままじゃいかんぞ」

「ああ。それはわかっている」

深刻な表情のテイル。状況は悪い一方だった。

深く息を吐くノーリンは、ふとフォンの右腕のリングに目を落とす。確か、別れた時はあんなものは付けていなかったはず、とリングに触れようとした時、

「それに、触れないでください」

弱々しい声でカインが言う。目が覚めたばかりで、視点があつていない。それに、随分疲弊している様だ。それでも、まだフォンよりもはマシな状態だ。

苦しそつに咳をするカインは、まだ本調子じゃない体を起き上がらせ、頭を押さえながらティルの方に目を向けた。安心した様に息を吐いたティルは、視線をカインの方に向け尋ねる。

「体の方は大丈夫か？」

「ええ。僕は単なる疲労ですから。それより、それは外さないで下さい」

「分かった」

ティルが了承すると、ノーリングが不思議そうな表情をカインに向けてる。

「それはそうとして、一体これはなんなんじゃ？」

「制御装置みたいなものらしいです」

「制御装置？」

眉間にシワを寄せ、首を傾げるノーリング。そのノーリングの表情を見据えるカインは、コクリと頷きティルの方へともう一度目を向ける。

制御装置と言うその意味を何と無く理解したティルは、腕を組むとフォンの方に目をやる。

「暴走したのか？」

「ええ。僕の所為で、あんな事に……」

「お前の意思でやったわけじゃないんだ。気にするな。それより、誰があれを？」

ティルが尋ねると、カインが複雑そうな表情を見せた。

「何かわけありかのう」

「はい。実は、僕もその人の正体を知らないんです。ただ、フォンの事を知っている様な口振りでした」

「そうか……」

「しかし、なんじゃな。偵察に来たと言うのに、騒ぎを大きくした気がするのう」

「確かにそうだな……」

右手で頭を抱え、ティルは小さくため息を吐いた。結局、偵察は出来ず騒ぎを起こしただけ。これでは何の為の偵察なのか分からない。

腕を組み考え込むティルは、右手の人差し指を眉間に当て、渋い表情でノーリンとカインを見据える。現状ではここから動く事は難しい。敵が何処に潜んでいるか分からないし、肉体的にボロボロのフォンと、精神的にボロボロのバルド。こんなにも不安要素があつては動くに動けない。

考えがまとまらないまま、もう一度深いため息を吐いたティルは、とりあえずその場に腰を下ろした。

風が空を裂く。木の葉が舞い音も無く引き裂かれた。闇に浮かぶ糸状の刃が、次々と周囲に張り巡らされる。不気味な風音と喉を鳴らす様な低音の地響き。地面が隆起し鋭い岩肌が露出する。

周りに散乱する肉片が更に細かく切り裂かれ、その中心で不気味なバケモノが仁王立ちし、体勢を低くするフォルトを見据える。両手に握られた細身の刃が薄気味悪く闇で煌く。赤い眼光が闇の中で輝く。

「お前……誰だよ」

「クケケケケッ」

「答える気は……無いって事。まあいいや。それならそれで、無理

にでも口を割らせる」

右足を静かに前に出し前傾姿勢を取る。両手の刃が地を裂くかの様に低く構えられ、足が地から離れた。地が砕け後塵が舞う。切っ先が地面に触れ更なる後塵が巻き上がり、交互に腕が振られ、無数の斬撃が飛ぶ。

向って来る斬撃を見据え、バケモノが不気味な笑みを浮かべた。直後、斬撃がバケモノを直撃し、爆風が吹き抜ける。舞い上がる土煙でバケモノの姿が隠れ、その中へとフォルトの姿も消えた。

刹那、金属音が数回響き、火花が無数散った。煙が薄れ、僅かに影が浮かぶ。重なり合う二つの影。空中で止まった二本の刃から、薄らと糸状の刃が闇へと伸びる。

「おやおや。十二魔獣の第二席ともあるう御方が、どうしてこんな所に居られるんですかねえ？」

背後から聞こえる不自然な言葉遣いの若い男の声。その声がすると同時に、バケモノがケタケタと大口を開き笑う。それはまるでフォルトをバカにしている笑い方だった。刃を動かす事が出来ず、奥歯を噛み締めるフォルトは、視線を僅かに後方に向け口を開く。

「誰だか知らないけど、僕は今イライラしてる。邪魔をしないでくれないか」

「おやおや。それなら、僕等の邪魔もしないで欲しいのだけれど？」

「僕等？ と、言う事は、お前等は仲間か……」

「仲間？ うん。まあ、そんなモノかな。それよりさあ、退いてもらえませんかねえ。僕等としても怪我はしたくない。傷付くのはイヤなんですよ」

その言葉を鼻で笑うフォルトは、低音の声でクククツと小さく笑

った。

「おやおや。僕が何か可笑しな事でも言ったかな？」

「ああ。可笑し過ぎ。自分達は散々僕等の仲間を殺しといて、自分達は傷付くのは嫌だ。それっておかしいだろ」

「それは、キミ達も一緒じゃなあい？ 人を喰らって生きてるんだからさ。殺されても文句言えないよねえ」

「お前人なのかよ。違うだろ。どちらかって言えば、お前もこのバケモノも、僕等魔獣側に近い存在だろ。人に殺されるのは理解できるけど、お前等みたいな得体の知れない連中に殺される通りがわかんねえ」

フォルトがそう述べると、背後に何か降り立ち、耳元でクスクスと小さな笑い声が聞こえた。その声が鳴り止む頃、フォルトの体は地にひれ伏した。



## 第95回 友の死

闇に映る一つの影。

廊下に響き渡る足音。リズムの悪さから、片足を引き摺っていると思われる。

点々と雫の弾ける音が足音の合間に流れ、石畳の廊下に鮮やかな赤い跡を残していく。

「ハア…ハア……」

呼吸が乱れ、足音が止まる。シトシトと落ちる赤い雫が足元で水音を響かせた。水滴が滴れる度に足元で波紋が広がる。

「ハア…ハア……。やあ、どうしたんだ？　こんな所で」

低音の声。弱々しく掠れている。それでも、その声が届いたのか、前方に移る小さな影がユラリと動く。

小さく何処かたどたどしい足音が点々と近付いて来る。闇に映る長い茶色の髪。小柄な体格に膝下まで届くスカートが揺れる。

「ゼロ様。お怪我の方を治療します」

「いやいや。大丈夫だ。この程度なら」

「ゼロ様！」

「わ、分かったって……。それより、フォルトはどうしたんだ？　リリア」

あまりの迫力に表情を引き攣らせるゼロに対し、リリアが表情を曇らせる。その瞬間、ゼロの脳裏で一つの気配が消えた。最も心を許した大切な親友の強い気配が、泡の様に簡単に。

驚き表情が一変する。憎悪が周囲に漂い、リリアを呑み込み、衝撃と爆音が廊下に轟く。壁に打ち付けられた拳。砕けた壁に穴が開き、風が廊下に吹き抜けた。

「誰だ……。誰が……」

「ゼロ様、落ちつい」

「黙れ！ 俺に触れるな！」

リリアの小さな手を振り払い、ゼロが歩き出す。肩の傷が憎悪を取り込み塞がっていく。黒髪が不気味に逆立ち、その背中に禍々しい殺気が湧き上がっていた。

怯え縮こまるリリアは、その背中を見据え涙を滲ませた。悪魔の様な形相に色あせた壁色が不気味に浮かぶ。

「破壊する。全てを、この世界の全てを破壊して見つけ出す。フォルトを殺した奴を」

「ゼロ様！ そ、それは当初の計画とは」

「……計画？ フッフッフ……。そんなモノもう関係ない。俺は、俺の目指した世界は もう手に入らない」

両目から流れる涙が、血の様に赤く染まり、口元に浮かんだ不気味な笑みを一層不気味に映し出す。ゼロのその姿を見据えたまま、リリアも人知れず泣いた。愛する者の死を胸に抱いて。

闇の中でうごめく三つの影。

二メートル程の巨体が静かに動き、闇に三つの眼光が浮かぶ。周囲を見回す様にゆっくりと眼光が動き、低音の音が響く。

「ゼロの殺気か……」

「早速呼び捨て？」

低音の声に、陰湿な女性の声が返答する。天井からぶら下がるその女性は、長い漆黒の髪を逆立て、淡い赤い瞳を地上の二人へと向けた。

「それより、私達はどこで何をすればいいのかしら？」

「クッククック……。私にとってはそんな事どうでもいいんですけどねえ」

不適な声に不気味に眼鏡が光る。汚らしい白髪と汚れた白衣が闇でも目立つその男は、ズレ落ちた眼鏡を右手で掛け直す。口元に浮かんだ薄気味悪い笑みが、その不気味さを際立てる。

その男を横目に見ながら、先程の巨体の男が太い腕を組み静かに口を開く。

「私達の役割は時間稼ぎと、ゼロとヴォルガの監視」

「ゼロとヴォルガの監視は完璧だよ。私の作った設備は完璧ですからねえ」

「後は時間稼ぎだけど、誰を足止めするわけ？」

「それは、その内分かるんじゃないかな？」

適当な口調の白髪の男に対し、逆さ吊りの女がため息を交えながら静かに地上へと降り立つ。天井へと続く細い糸が伸縮し、女性を地へ下ろすとプツンと音を立て糸が切れた。くもの巣だけが天井に残され、長い脚を動かすクモがサワサワと動き出す。

「あんたさ、その適当な態度止めてくれないかしら？ 一応、私達命を預けあってるんだから」

「オヤオヤ。エリオースは私達を仲間だと認めていると言っんです

か？」

「ロイバーン。別にあんたを仲間とは思ってないわ。ただ、これからの事を考えると、お互い助け合うのが一番じゃない？」

「クツクツクツ。彼女はそう言っているけど、レイバースト。キミはどう思う？」

気色悪く笑うロイバーンがズレ落ちた眼鏡を掛け直し、ジロツとレイバーストの方へ視線を向けた。太い腕を組むレイバーストは、額の目で静かに周囲を見回す。辺りを警戒する様なその仕草に、エリオースもロイバーンも呆れた表情を見せる。何をここまで警戒しているのか、そう言いたげな二人に対し、レイバーストは静かに口を開く。

「所詮、私達は一時的に手を組んでいるだけ。お前達を簡単に信用はしない」

「だ、そうだよ。エリオース」

「黙れ、ロイバーン。それより、私達だけで時間稼ぎになるのかしら？」

「その点は問題ないよ。私の開発した最強の魔獣がいるんですから。クツクツクツクツ」

薄気味悪く笑うロイバーンは、ズレ落ちた眼鏡を右手で掛け直す。部屋に反響するロイバーンの薄気味悪い笑いを背に、レイバーストは額の目をエリオースの方に向ける。その視線にエリオースも気付き、僅かに顔を上げた。長い髪が顔の右半分を覆い、淡い赤の瞳がレイバーストを見据える。

「あのね。その額の目、どうにかならないわけ？」

「私にはどうする事も出来ん。コイツは私の意志と別に動く」

「そんなモノを体に埋め込んで、何とも思わないの？」

「これを埋め込んで困った事は無い。どちらかと言えば役にたっている」

額の目を静かに閉じ、鼻からゆっくりと息を吐く。その額の目を気味悪がりながら、エリオースは右手から糸を飛ばし、天井へと上がる。各々が自分の好きな場所で好きな様に寛ぐ。その間も漂うぜ口の殺気は、その場を自然と静寂させた。

闇に染まつた森に漂う生臭い臭い。

張り巡らされた細い糸状の刃が次々と木を切り倒し回収されていく。刃が風を切り高音の音を奏でる中心に、一人の少年が佇む。サラリと流れる漆黒の髪を揺らし、傷一つ無い綺麗な顔で、右腕へと回収されていく糸状の刃を見届け、足元に転がる肉片を踏み締め小さなため息を吐く。

「お前さ、何でもかんでも破壊すんのやめないか？」

「ウガアアアッ！」

「って、聞いてねえな」

漆黒の姿のバケモノの遠吠えに、呆れた表情を見せる少年はもう一度ため息を漏らし、踏みつけていた肉片を蹴った。ゴロリと転がる肉片、それはフォルトの体だった。腕、脚、首をもがれ、胸に大きな穴の開いた痛々しい…………。

その肉片を見据え、少年はもう一度大きくため息を吐くと、遠目でバケモノを見ながら、

「ゲノムさーん。俺の話聞いてますか？」

「ウガアアアッ」

「一応、聞こえてるわけか…………」

半笑いを浮かべる少年は、ゲノムと呼んだ漆黒の姿のバケモノに目を向けもう一度叫ぶ。

「言っておきますけど、俺達の任務失敗ツスから。ゲノムさんが、コイツ殺しちゃったんで……。つて、言っても絶対分かってないよな。はあーっ。確実に克蘭さんに怒られるよ。つて言うか、ゲノムさん！俺達の任務分かってんスカ？」

少年の質問に、ゲノムの返答は無い。呆れた様に息を吐く少年は、右手で頭を抱えた。最初から任務の事などゲノムの頭には無かった様だ。

眉を八の字に曲げ深々と息を吐く。

「つたく、だからお前とは組みたくないんだよ。言っとくけど、克蘭さんに怒られるのは俺なんだからな。そこんどこ分かってんのかよー！」

「……………」

やはり返答は無く、少年は諦めた様に静かに息を吐き、疲れ切った表情で夜空を見上げた。

## 第96回 戦争

現在、早朝のグラスター王国都市レイストビル。

中央に聳えるグラスター城では、兵士達が戦闘の準備をしていた。戦争にでも行くかの様な武装と兵士の数。それらの兵に指示を飛ばす一人の青年。淡い赤髪を揺らす青年は、ハキハキとした口調で更に言葉を上げる。

「バカヤロー！ もっとテキパキ動け！ もう敵は目の前まで来てるんだ！ 我々は知っているはずだ！ 先の大戦で多くの兵が命を落とした事を。我等は魔獣の討伐で城を離れていたが、運が良かったなどと思うな！ その代償として多くの兵の命と偉大な国王の命が奪われた！ 我々は雪辱を果たさねばならない！ 多くの民の為に。そして、フレイスト様の為にもだ！」

青年の声に兵士達の声が湧き上がり、周囲の雰囲気が一瞬にして変わる。

兵士達の顔色を窺う中年の男。無精ひげの顎を左手で摩り、感服するかの様に大きな笑い声を上げた。

「カハハハハツ。いやいや。御見それ行つたぞ。レヴィ」

レヴィと呼んだ青年の背中を二度叩き、隣りに並んで立つ。彼はこう見えてもレヴィの上官で、グラスター王国が誇る四大守備兵団の第二部隊を率いている。

そんな彼の顔を横目で睨むレヴィは、小さく息を吐き口を開いた。

「アルドフ様。お言葉ですが、本来兵の士気を高めるのは、隊長である貴方の仕事です。何故、副官である私が」

「まあ、いいじゃねえか。俺よりもお前が言った方が、部下たちも喜ぶ」

「それは、どう言う意味でしょうか？ 返答次第では許しませんよ」

鋭い眼差しを向けるが、アルドフは寛大に笑い全くそれに気づいていなかった。諦めた様に目付きを緩めたレヴィは、一瞬気の抜けた表情を見せた。それを、アルドフは見逃さなかった。

「おい。気をつける。副官のお前が兵士達の前で、そんな疲れ切った表情を見せるな。それだけで、兵士達が不安になる」

「分かっています。大体、そうさせているのは誰ですか……」

「何か言ったか？」

「いえ。何でもありません」

膨れっ面でそう返答し、深々とため息を漏らした。

アルドフはレヴィにとって苦手な人物だ。何故、自分がこの第二部隊の副官なのか疑問を抱いていた。この大戦が終わったら、国王直々に部隊編成を見直して貰う直訴するつもりだ。

眉間にシワを寄せ、不服そうな表情のレヴィの目の前で、一人の兵士が武器を落とす。その瞬間、不満をぶつけるかの様に、レヴィが声を上げる。

「バカモノ！ 武器は己の命を守ってくれる大切なモノなのだぞ！

そんな風に扱っな！」

「は、はい。す、すいません！」

武器を素早く拾った兵士は、慌ててその場を去っていく。その後ろ姿を見据えるレヴィは鼻息を荒げる。

「そんなに兵士を虐めるな。可哀想だろ？」



「先程のは私が昔所属していた第一部隊での教えですが、何か？」

その言葉に表情をしかめるアルドフは、難しい表情を見せ大きく息を吐く。

「そうか……。お前、元々あいつの部隊だったな。あの野郎、んな事教えているのか？」

「メービル様の教えはとても為になるモノばかりでした」

「お前、それじゃあ、俺が何も教えていないみたいない口振りじゃないか。んん」

いつに無く引き攣った笑みを向けるアルドフに、目を向ける事無くレヴィが答えた。

「だから、第一部隊だった私がこの部隊の副官に指名されたのだと、私は自負していますが？」

「ほほーっ。それじゃあ、この第二部隊は第一部隊に劣ると、言いたいわけか？」

平然を装うとするアルドフだが、明らかに表情が引き攣っている。その表情に次々と兵士達の足が止まり、ヒソヒソと話し声が聞こえてきた。兵士達は隊長であるアルドフのあの様な表情をあまり目にした事が無く、不思議そうな表情をしている者が多かった。動揺している者もあり、周囲がザワメク。

アドルフはその事に気付いていないのか、何も言おうとしない。一方のレヴィも周囲の事を気にせず落ち着いた口調で返答する。

「ええ。私は第二部隊は確実に第一部隊に劣っていると実感しています」

「そうかそうか。そんなに言うなら、見せてやろうじゃないか。お

前達！ 聞こえていたな！ ウチの副官は、この部隊が第一部隊より劣ると言っている！ 俺達の底力をこの小娘に見せ付けてやれ！ 行くぞ！」

アドルフの腹に響く様な勇ましい声が、周囲に集まっていた兵士達のザワメキを払い、息のあった力強い声が大気を振るわせた。

最大限まで引き上げた士気をそのままに、アドルフ率いる第二部隊はワープ装置にてレイストビル北口へと移動を開始した。

レイストビルを囲む様に陣を組む魔獣の軍勢。

それを率いるのは魔獣人リオルド。切れ長の鋭い目が城壁を見据え、刺々しい蒼い髪が風に揺らぐ。

土煙が舞い、周囲は静寂に包まれていた。これから起きるであろう大きな戦いの前の一時的な静けさなのかも知れない。

鏢の無い大剣を地面に突き刺し、時を待つリオルドは、不適な笑みを浮かべると舌なめずりをして、静かに柄に手をかけた。その鋭い視線が静かに門の方へと向けられ、全ての魔獣達を鼓舞する様に怒声を轟かす。

「狩りの時間だ！ 血を欲せ！ 肉を欲せ！ 殺戮こそ飢えを満たす唯一の方法だ！ 八つ裂きにして肉を喰らい！ 血を啜れ！」

リオルドの声に魔獣達が次々に咆哮を轟かせ、一斉に城壁に向って駆け出す。大地が揺れ土煙が舞い上がる。重々しい軍勢の足音が周囲を呑み込み、静寂は切って破られた。

魔獣達が地を駆けつけた頃、城門が重々しい音を響かせ静かに開く。それが、合図だったのか、突如空を裂く雷鳴が轟き、地を駆ける魔獣達の方角で激しい爆音が轟く。

突風が土煙を吹き飛ばし、地面が円形に窪んでいた。その場に居

た魔獣の姿は消え去り、黒こげた肉片だけが転がっていた。次々と雷鳴は轟き、爆音が魔獣達の咆哮を消し去っていく。

爆風の中で仁王立ちするリオルドは、不適な笑みを浮かべその状況を見据えていた。そして、地面に刺さった大剣を右手で抜くと、それを空高く翳し大声を上げる。

「臆すな！ 逃げた奴は」

今まさに逃げ出してきた魔獣に向って、リオルドは大剣を振り抜く。体が二つに裂け、血飛沫が飛ぶ。静かに笑うリオルドは顔を上げると、更に声を張り上げ、

「俺の手によって処刑する！ 生き残りたきや殺せ！ 奴等を切り刻め！」

声を上げ、リオルドが地を駆ける。向って来るモノを大剣で切り裂き、次々と血飛沫を巻き上げていく。敵味方関係なく切り裂いていくリオルドは、城門へと一直線に突き進む。

刹那、雷鳴が大気を裂き、雷撃がリオルドへと飛ぶ。僅かな波動を感じ取ったりリオルドが顔を上げたその瞬間、爆音が周囲に響き、衝撃が広がった。爆風で巻き上がる土煙がリオルドの姿を隠し、亀裂の入った地面だけが僅かに見え隠れする。

## 第97回 激突

舞い上がる土煙が、風で薄れていく。

亀裂が入り陥没した地面があらわになり、大剣が地面に突き刺さっているのが見えた。ひび割れた土が崩れ、大剣が地面から抜かれる。傷一つ無い刃が朝日を浴び美しく克不気味に輝きを放った。

特殊な砲弾を受け体から僅かに煙を上げるリオルド。衣服が破け傷一つ無い強靱な肉体が露となる。両肩が小刻みに震え、腹の底から吐き出した様な声で笑う。

「クククククツ……。この俺に傷を付けた代償はテメエら全員の命で償ってもらおう！」

大剣が地面を裂き、破片が宙を舞う。

おぞましい笑い声が響く中、城門から姿を見せたアルドフは、その視線をリオルドへと向けた。魔獣人と対峙するのは初めてだが、その圧倒的な身体能力の高さをマジマジと感じていた。

「あれが、魔獣人が……」

ボソリと呟くと、やや後ろに立つレヴィが、淡い赤髪を揺らしながら静かな口調で答える。

「その様ですね。私達はハズレを引かされた、と言う事になりますね」

「ハッ。バカを言うな。ハズレじゃなくて、アタリに決まっているだろ」

「……お言葉ですが、ショックで頭がおかしくなりましたか？ それとも、元からおかしいんですか？」

上官に対し毒を吐き、冷やかな視線をその横顔に向ける。

無精ヒゲを左手で摩り、右手で腰の柄を握り締めた。鉄の擦れ合う嫌な音が聞こえ、煌びやかな刃があらわとなる。年季の入ったその剣を静かに構えたアルドフの表情から、優しさが消えた。目付きは鋭く、表情は引き締まっている。

呼吸を整える様に静かに息を吐き、ゆっくりと右足を一步前に出す。その動きにリオルドの瞳が向けられた。殺意の籠ったその視線に、アルドフの後方に居たレヴィは思わず身構えてしまう。それは本能的に取った行動で、一瞬自分の胸に刃を突き立てられた錯覚を覚えた。

「クツ！ ハア…ハア……」

呼吸が荒れ、視界が眩む。よろめくレヴィを背に、静かに呼吸を整えるアルドフは、落ち着いた口調で、

「レヴィ。お前は下がってる。それから、他の兵士にも伝える。奴には近付くな、と」

「し、しかし」

「安心しろ。アイツとは俺がやる」

「そ、そう言う問題では」

レヴィが言い終わる前に、アルドフが地を蹴りリオルドへと突っ込んで行く。そんなアルドフの行動にニヤリと笑みを浮かべるリオルドは、右手に持った大剣を力強く振り抜く。風を切る音に遅れ、凄まじい太刀風が土煙を舞い上げる。

太刀風を浴び、表情を顰めたアルドフだが、怯む事無く真っ直ぐにリオルドに向う。

土煙が薄れ両者の視線が重なり、澄んだ金属音と衝撃を周囲に広

げた。ぶつかり合う刃が擦れ合い、両者の足元に僅かに土煙が漂う。

「青髪に大剣。その血に飢えた眼差し。お前がリオルド。国王の命を奪った魔獣人か！」

刃を弾き距離を取る。大剣の重量に僅かに仰け反るリオルドだが、すぐさま体を捻り体勢を戻す。

静かに息を吐くアルドフ。怒りを沈め、自分自身を落ち着かせる。そんなアルドフを見据え、不適に笑うリオルドは、静かに口を開く。

「赤き龍。貴様の事は知っている。この国の守護者とまで謳われる貴様の力、見せてもらおう」

「随分と古い名を知っているな」

「俺は強い奴の名は覚える様になっている。貴様の起こした奇跡とやらを見せてもらおう」

「奇跡？ 何の事だか分からんね」

右足を踏み込み、刃を突き出す。鮮やか克鋭い突きを軽く首を右に傾きかわすと、お返しとばかりに刃を突き出す。瞬間的に右斜め後ろに体を捻る。大剣の平がアルドフの胸を沿うようにして通過する。

体勢を崩すアルドフを見据え、不適な笑みを浮かべるリオルドは、刃を素早く振り上げた。

全身に走る危険信号と共に、アルドフは唇を微かに動かす。小声でボソボソと言葉を続けていると、大剣を振り上げたりリオルドが何やら異変を感じその場を飛び退いた。その瞬間、突風が吹き荒れ、リオルドの目の前を何かが通過し、直後にリオルドの体を衝撃が襲う。

「ぐっ」

地面を転げるリオルドは、大剣を地面に突き刺し勢いを止めた。土煙が道を作るようにリオルドとアルドフの間に真っ直ぐに伸びる。口角から血が漏れ、リオルドの目付きが変わった。

「やってくれるじゃねえか。流石、赤き龍」

「だから、その名は当に捨てたと言っただろ」

真つ赤な鱗を纏った右腕が、白煙を上げ元の腕に戻る。握った剣を構え直し、静かに口から息を吐く。吐き出された息が僅かに白く染まる。熱気を帯びているのか、吐き出された息により、僅かにアルドフの顔が揺らいで見えた。

時刻は深夜。アルバー王国旧都市デイバスターから程よく離れた森に不時着した赤い飛行艇。夜の闇にも映えるその外壁。窓からもれる光り。そして、慌ただしく響く無数の足音が、静かな夜をざわめかす。

何も知らず、飛行艇の側まで戻ってきたミーファとルナは、その異様な騒がしさに胸騒ぎを覚える。急ぎ足で機内に戻り、その騒ぎのする方へと足を進めた。

床に倒れるブラスト。激昂するワノール。それを抑え様とカシオとフレイストが二人の間に入る。

「や、止めるよ。ワノール。ブラストだって何か考えがあつての事だと思っしよ、それにここで俺等がもめてもしょうがないじゃないか」

この状況下でも相変わらず口数の減らないカシオ。産まれもつて

のお喋り体質なのか、場を和ませようとしているのか、どちらか分らないが、必死に舌をまわす。

口の端から血を流すプラスチックは、静かに立ち上がりミーファとルナの方に目を向け、渋くいつもより低いトーンの声で、

「悪いがキミ達は部屋に戻っていてくれ」

「えっ、でも」

「ミーファさん。行きましょう」

静かにそう述べたルナはプラスチックに軽く会釈し部屋を出た。その後続く様に、ミーファも渋々と部屋を出る。部屋の扉を閉め、暫くその場に立ち尽くす。前に行くルナは、そのミーファの行動に気付き振り返った。

「ミーファさん。何をしてるんですか？」

「ルナは気にならないの？ 何の話をするつもりなのか」

「別に気にならないわけではありません。ただ、私達がその話を聞いた所で、何も出来ないのは事実。信じましょう。皆さんを」

落ち着いた口調のルナに、じと目を向けるミーファは不満そうに、

「何だか、肝が据わっちゃったね。さっきまで自分は必要無いとか言っただけなのに」

「ミーファさん。人は常に変わっていくんですよ。過去に囚われてしまっただけ」

「あーっ。わかった。分かったから。さあ、部屋に戻りましょう」

ルナの話を無視してミーファはルナを追い抜いた。

「ちょ、まだ話は終わってません！ ミーファさん！」



自分の話を無視したミーファに対し、そう叫んだルナは早足で後を追いかけた。

## 第97回 激突（後書き）

大分話がゴタゴタとしてまいりました。

もうすぐ100回目を迎えると思うと、時々急激に落ち込みます。前作から見ても、もう200回目を迎えると、言う事になるわけですから……。長い……。ですよね……。

力量も無いのに、こんなに長々と……。本当、読者の方には感謝しています。

もっと綺麗な文章で、もっと上手く纏められれば良いんですけど……。

まあ、そこは努力していく次第であります。

無事に完結までいける様、全力で頑張りたいと思います。

## 第98回 探め事

ミーファとルナが出て行き、静まり返った部屋は、重苦しい空気が流れていた。

鋭い眼差しを向けるワノール。その手はいつでも剣を抜ける様に柄を握り締めていた。

そんなワノールとは対照的に、落ち着いた物腰のブラストは、フレイスト・カシオ・ウインス・ワノールの順に視線を動かす。そして、一呼吸置いてから、意を決した様に口を開く。

「さっきも言ったが、俺達はこのままグロスター・フォースト・ニルフラントの三つの国へと移動する。移動方法は」

「まだ、そんな事を言ってるのか！ それじゃあ、偵察に行った連中は」

「お、落ち着けよ。まだ、話は終わってないって。きっと、何か事情があるんだよ」

ブラストの話を最後まで聞こうとせず、ワノールが掴みかかろうとする。それを必死になってとめるカシオは、ワノールの後方で壁にもたれて立つウインスに目で助けを求めた。だが、ウインスはそれを無視する様に視線を逸らし、鋭い目付きでブラストを見る。ワノールと同じく、ブラストの言った事に納得していない様だ。

実際、カシオだって納得はしていない。それに、フレイストも。本当はワノールの様にブラストに掴み掛かりたいはずだ。それでもこうしていられるのは、ワノールが自分達の言いたい事をブラストにぶつけているからだろう。

「ぶざけるな！ 敵の拠点への危険な偵察に行かせといて、俺達はのうのうと他の国へ行くって、納得できるか！」

「だから、最後まで話を  
」  
「カシオ！ お前は黙ってる！」

ワノールがカシオを突き飛ばした。突き飛ばされ、横転するカシオは頭部を機材に打ちつけ、その場に蹲る。それすら目に入らないワノールは、ブラストの前に立ちはだかるフレイストを退け様と手を伸ばし動きを止めた。

首筋に伸びる刃。太い刀身に鱗模様。それは、フレイストの持つ鱗龍と言う名の大剣だった。鋭く光る刃に輝く刀身の鱗模様。鋭い眼差しを向けるフレイストは、穏やかだが何処か怒気の籠った声で言葉を綴る。

「控えてください。冷静さを欠いた今の貴方に、何が正しいのか判断する事が出来ますか？」

「クツ……。何が正しいとかじゃない。他の連中が戦場の中に居るのに、俺達だけ他の国へ逃げるなんて出来るか……」

「貴方は何故、逃げると？ そもそも、我々がここに赴いたのは全ての決着を着ける為です。そして、ブラスト殿も同じ考えの下我々を集めた。それなのに、ここまで来て怖気づくわけがありません。まずは冷静になり話しを聞く事が先決だと、私は思います」

淡々と述べるフレイストは、静かに剣を下ろす。淡々と身を退くワノールは、強く拳を握った。まだ納得はしていない様だ。フレイストもそれに気付いているのか、鱗龍の刃をむき出しのままにしている。

皆に全く心配されないカシオは、澁々と言う感じで体を起す。額から流れる血を拭ったカシオは、不満げな顔を四人に向けて、全く相手にされなかった。怒りが湧き上がるが、カシオも空気を読み言葉を必死に呑み込む。

そんな事とは知らず、ブラストが重々しく口を開く。

「色々と話さなきゃならない事があるが、時間が無い為、余計な事は省いて話す。それで、お前達が納得するとは、思えないが……」  
「とりあえず、話は聞きます。私も今の状況には納得していない方に入りますから」

この中では一番落ち着いた様子のフレイストの言葉に、ブラストが僅かに笑みを浮かべた。ブラストも今の状況に困惑している様だ。腕組みをするウインスは、静かに壁から背を放すと、二・三歩足を進め静かに口を開く。

「なあ……。それって、俺は居なきゃいけないのか？」

「ああ。キミも必要だ。と、言うよりここ居る五人全員の方が必要だ」

真っ直ぐな目にウインスは静かに息を吐いた。倒したい奴がいる。その言葉を告げたかったが、あのブラストの目に言葉を呑むしかなかった。ウインスのその意を察したのか、ブラストは「申し訳ない」と一言告げ、頭を深々と下げ、更に言葉を続ける。

「キミがどうしたいのかは、分かっている。でも、憎しみだけでは  
」

「分かってる。分かってるさ。俺だってこのままじゃダメだって。だが、奴は  
」  
「大切な人を奪われる気持ちは分かります。ですが、感情に流されては見えるモノも見えなくなってしまう」

静かに述べたフレイスト。その言葉に、ウインスは下唇を噛み締める。フレイストの言葉の意味を理解しているからだ。現に怒りに任せ戦い、ロイバーンに敗れた。今またロイバーンと戦えば、ウイ

ンスは怒りに吞まれ暴走するだろう。結果、敗北。今のウィンスには、感情を抑える事など不可能だ。

悔しそうなウィンスの表情を、フレイストはただ真っ直ぐに見据えた。自分はどうなるだろう、と少なからず考えた。父を殺した相手と対峙した時、冷静で居られるだろうか。もしかすると、ウィンスの様に暴走するんじゃないだろうか、と不安になる。それでも、平然を保ち静かに息を吐く。

「話の腰を折ってしまいましたね。それでは、ブラスト殿。話を続けてください」

「ああ。それじゃあ、これを見て欲しい」

ブラストが取り出したのは一冊の本だった。真っ赤な表紙に何やら文字が刻まれている。その文字は旧式の文字なのだろう。その場に居た誰もが読む事が出来なかった。異様な雰囲気漂うその本を広げるブラストは、ゆっくりとページを捲る。ページを捲る音だけが室内を支配し、時が刻々と過ぎていく。

そして、遂にブラストの手が止まる。静まり返った室内で、ブラストの低音の声がゆっくりと言葉を告げる。

「これは、フォースト王国で発見された予言書だ」

「予言書の事は前にも聞いた。それが、なんだと言う」

冷やかな口調でワノールが述べる。まだ、怒りが収まっていないのだろう。何処か棘がある。その棘のある言葉に、ブラストは静かに返答する。

「この予言書には特に俺達の事が事細かく書かれている。次にこの世界の事が書かれている。今後に何が起きるかも」

「この飛行艇が落ちる事も書かれていたのか？」

鋭い目付きを向けるワノールの言葉に、ブラストが険しい表情を見せた。その表情で四人はすぐに悟る。この墜落が予言書には書かれていないと言う事を。

この事について、ブラストは一つの結論を出していた。

「その事だが、この予言書では飛行艇は無事にディバスターの手前まで行く事になっている」

「そ、それじゃあ、その予言書は」

「デタラメと、言う可能性もありますね」

フレイストの冷静な口調にブラストが首を左右に振った。

「そうでも無い。俺達はお前達と合流した時、予言書通り魔獣達が襲ってきた」

「それは、魔獣達の仕掛けたワナの可能性も」

「あると思う。だが、この予言書には他におかしな点がある」

「おかしな点？」

相変わらず、棘のある声質でワノールが問うと、ブラストが頷く。

「書かれていない人物の登場。そして、結末」

「結末？ お前、そこまで読んだのか？」

呆れ顔のワノール。さっきまでの怒りが飛ぶほどだった。

普通、希望を残す為、結末だけは読むのを避けるのが鉄板だが、ブラストにはそれが欠如している様だ。

小さくため息を吐くワノールを尻目に、ブラストは照れ笑いを浮かべながら、

「俺も結末は読まないつもりだったんだが、研究者としての血が騒いでな」

大らかに笑うブラストに、四人が呆れた様にため息を吐いた。



## 第99回 世界情勢

ブラストの説明が終わる事、ワノールもようやく冷静さを取り戻していた。

ウインスもフレイストも、それなりに納得はした様だった。一方で、不貞腐れた表情を見せるのはカシオだ。顔は血で真っ赤に染まるが、四人には全く触れてもらえず、話をしている間も、ずっと口を閉ざしていた。彼なりの小さな抵抗だった。もちろん、誰一人そんな抵抗を知る由も無い。

腕を組むワノールは、小さく息を吐きブラストの顔を睨む。ブラストもその視線に気付き、ワノールの目を真っ直ぐに見据える。その威風堂々たる態度は流石は一国の王と言う風貌を感じさせた。そんなブラストに臆す事無く、ワノールは静かに口を開く。

「その予言書は何処まで信用出来る？ フレイストも言っていたが、魔獣達のワナの可能性も否定できない」

「だからと言って、全てが嘘と言うわけでも無いですから……」  
「完全に信用出来ると言うわけでも無いだろ？」

ワノールがフレイストの方に目を向ける。フレイストも困った様に「そうですね」と、呟き俯く。この予言書を何処まで信用しているのか考えるワノール・ブラスト・フレイストに対し、ウインスは能天気な大きな欠伸を一つ。全く自分には関係ないと、言う様な態度で話を聞いていた。

そんなウインスの態度にワノールは気付いたが、何も言わずブラストの方に目を向け話を続ける。

「予言書通りだと、もうグラスターでは開戦してる事になるな。レイストビルは大丈夫なのか？」

僅かながら心配そうな表情を見せるワノールに、フレイストは不安を隠す様に笑みを浮かべ答える。

「この前の様にはなりませんよ。今回はちゃんと準備もしましたし、戦力も整ってますから。それよりも、フォーストはどうなんですか？」

「そうか……。あっちももうすぐ開戦か……。不安もあるが、大丈夫だろう。精鋭を集めているし、将軍も居るし」

「将軍？ それは一体……」

不思議そうな表情をするフレイストに対し、穏やかに笑ってみせるブラストは、言葉を選ぶ様にして言葉を続ける。

「まあ、何だ。そう言うあだ名で呼ばれている奴がウチにはいる、と言う事だ」

「将軍……ですか……。何とも強そうなあだ名ですね……」

「うん。まあ、少し変わり者ではあるがな……」

呆れた様に笑うブラストは、フレイストから視線を外し、小さくため息を漏らす。何故か暗い表情のブラスト。将軍と呼ばれる者は、相当の変わり者なのだろうと、フレイストは悟った。

相変わらず、厳しい表情のワノールは、鼻から息を静かに吐き、口を開く。

「ニルフロントの方は大丈夫なのか？ 確かフォークスだったな。あそこは、他の国に比べて武力は低い」

「低い、って言うか、無いに等しいんじゃない？」

欠伸混じりでそう言ったのは、ウィンスだった。それでも世界情

勢には詳しい方で、全ての国の武力情勢を把握している。風と共に生きる風牙族は、イヤでも風から世界のいろいろな情報が入り込んでしまうのだ。

小さく息を吐くと、ウインスは呆れた様な目をブラストの方へと向ける。フレイストもその事を危惧して居たのだろう、険しい表情を見せた。

「すみません。私の方ではそこまで配慮が行き渡らず……。国王亡き今、兵達を纏め上げるだけで、精一杯　言い訳に過ぎませんね……」

「しょうがないさ。本来なら色々学び、兵達の信頼を得てから王座を受け継ぐ方が良いのだが、お前の場合は特別だからな」

ブラストの言葉が、フレイストの気持ちに僅かに和らげた。

まだ、不安なのは確かだった。兵士達の信頼を得られているのか、自分が王として認められているのか、様々な不安を抱えながらも、今こうしてここにいる。それを、ブラストも分かっているのだろう。それ以上は何も言わなかった。

腕を組むワノールは、渋い表情をブラストに向ける。その視線にブラストもワノールの方に視線を向け、穏やかな笑みを見せた。

「安心しろ。俺の方でちゃんと手は打ってある」

「手……な」

ウインスは怪訝そうな目をブラストに向ける。疑っているわけじゃないが、どう言う手なのかと、言うのは気になる所だ。

ワノールも聊か不安そうな目でブラストを見据える。

「大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だ。何せ、ウチの信頼出来る部下だからな」

「部下……ねえ。イマイチ、不安が拭えないのは、何でだろうな」  
「まあ、ウインスの言う事も分かるな」

ワノールがウインスの意見に賛同する。国王として、この信頼の無さはどうかと思うが、本人は全く気にしていない様で、穏やかに笑う。その笑いが、更に不安を募らせているとは、ブラスト自身思っていないかった。

拭えない不安の中、小さなため息を漏らしたフレイストは、ふとカシオへと目を向けた。そこで初めて気付く。カシオの顔が血で真っ赤に染まっている事に。驚き慌てるフレイストは、激しく手を振り、ワノールやブラストにこの事を伝えようとするが、声が上手く出ない。

「あつ、あつ、ああ、あのっ……そ、そ、ちよっ」

「それで、ニルフラントに送った部下って言うのは」

「ちよ、ちよっと、み、み、みな」

「俺直属の兵団があつてな。その若頭ともう一人変わり者をな」

「あ、あの」

「フォーストって、変わり者が多いのか？」

「聞いて」

「失礼だな。まるで、フォーストが変人だらけみたいな言い草は！」

「ちよ」

「そもそも、国王が変人だもんな」

「あ」

「まあ、天才と呼ばれる者は大抵変人だと言うからな」

「みな」

「確かに、変わり者が多いが、変人では無い！」

完全にフレイストは、取り残されていた。どうしていいか分からず、困惑するフレイストは、とりあえずカシオの方へと顔を向け、

オズオズと言葉を掛ける。

「だ、大丈夫ですか？」

「……………」

沈黙するカシオが、ギョロリと視線をフレイストの方へと向ける。睨む訳でも無く、ただフレイストの方へと向けられた視線は、ゆっくりと足元へと落ち、カシオの体が何の前触れも無く倒れた。

「！」

言葉にならないフレイストの声に、ようやくワノールとブラストとウインスの三人が状況に気付く。

血を流すカシオに、慌てふためくフレイスト。国王になる身として、この慌てっぷりはどうなのだろう、と思う三人は、合わせた様にため息を吐いた。

その後、慌てるフレイストをブラストが落ち着かせ、横たわるカシオをワノールが罵倒し、ウインスが渋々と医務室へと救急箱を取りに部屋を出た。カシオを罵倒する声は廊下まで聞こえ、それを聞きながらウインスは笑った。戦いを前に、腹の底から。恐怖を振り払う様に。

## 第100回 開戦！

東の王国フォーストの首都ブルドライ。

高い城壁の外で多くの兵士が待機していた。既に魔獣達が攻めて来る事を知らされていたからだ。指揮を取るのは、小柄の老人だった。どれ位の年齢なのか分からないが、現役で戦線に出るには随分と老いている様に見える。しかし、そんな外見と裏腹に、老人は兵士達を鼓舞する様に、大声を張り上げた。

「　　ッ！　　ッ！」

掠れた声に、兵士達は見向きもしない。やはり彼が指揮を取ると言うのは無理があるのだろう。そんな老人に空から降り立った一人の青年が、呆れた様な面持ちで声を掛ける。

「將軍。いい加減にしてくださいよ……」

「　　？」

シワくしゃな顔で青年を見上げる老人が、何か言葉を発したが、誰にも聞き取れない。そんな老人の言葉に対し、小さくため息を漏らした青年は、両肩を落とし更に呆れた表情を見せる。

「分かってます。分かってますよ。將軍の手腕は。ですが、もう將軍の名は僕に受け継いだでしょ！　忘れたんですか！」

「……？」

惚けた様に小首を傾げる。既にボケの始まったこの老人に、更に呆れる青年は右手で頭を掻くと、近くに居た兵士に目を向けた。赤紫色の髪の間髪から覗く鋭い眼差しに、その兵士は飛び上がる様に

背筋を伸ばし体を青年の方へと向け、声を張り上げる。

「だ、第三十六代將軍様！」

「あーっ。畏まらなくていいよ。僕の方が年下だし、こんなただの肩書きだから」

「い、いえ、しかし」

「それより、このお方を城内へ。全く……。目を離すとすぐに戦場に行きたがるんだから……」

その言葉に兵士は「はい」と、ハッキリとした口調で言い、老人を連れ城壁の向こうへと消えていった。小さくも深々とため息を吐いた青年だったが、すぐに目の色を変え、兵士達を鼓舞する言葉を飛ばした。

「さあ、いよいよ決戦だ！ 万全の準備は出来た！ 策も立てた！ 後は皆の頑張り次第だ！ 守るべき者の為に全力を尽くせ！」

青年の声に兵士達の息の合った声上がる。士気は高まっている。策も万全。残すは王の帰還のみ。現時点での勝算の低さを知っているからこそ、彼は自分の出来る限りの策をこの地域一帯に仕掛けた。それは、兵達を少しでも多く生き残らせる為に打った最善の策。それがどれ程魔獣に通用するか分からないが、青年は強い眼差しを真っ直ぐに向け静かに時を待つ。

南の王国ニルフロント。大都市ウォークス。国の平和の象徴、初代時見の女王クリス像を中心に沿え、後方にはニルフロント城が聳え、更にクリス像を美しく見立てる。

その街には既に人の気配が無かった。あるのは血の臭いと悲惨な残骸だけだった。乾いた風が流れ、静まり返った繁華街に埃が舞う。

揺れる白髪。眼鏡越しに浮かぶ金色の瞳が、周囲を見回す。青年は何かを口にする訳でも無いのに、ブツブツと唇だけを動かす。そんな青年に魔獣が襲い掛かる。だが、銃声と同時に額から血飛沫が上がり、巨体が地面にひれ伏す。

「おいおい……大将の話じゃ開戦まで後一時間近くあるはずだけどねえ」

長い髪を揺らし、凛々しくも美しい顔をした女性が、素早く右手に持った短剣を振るう。血飛沫が飛び、魔獣の体が横たわる。

周囲を完全に魔獣に囲われた二人組み。彼等がブラストの派遣した者達だった。右手に短剣を持つ女性は、左手に持った銃を発砲し、空を舞う魔獣を打ち落とす。その横ではブツブツと唇を動かす青年が、背中に背負った二本の剣を抜き、静かに唇の動きを止める。と、同時に二本の剣が軽快に空を裂く。鋭い風音と共に閃光を描く刃が交差し、魔獣の体にクロスを刻んだ。

「処罰執行」

「アララ……。祈りは終わったん？」

「神のお告げ　　処罰を続行する」

青年の腕が撓り、刃が風を切る。右手の刃が斜め後ろに立つ魔獣の首筋に触れ、皮膚だけを裂く。痛みを感じない程の太刀捌きが、更に魔獣を襲う。魔獣の体にクロスの傷痕を必ず残してからトドメを刺していく青年の動きに、女性は呆れた笑いを浮かべる。彼が変人と呼ばれる由来はここから来ていた。

そんな彼に付き合わされる女性。彼女の手から短剣が飛ぶ。それは、魔獣の額を貫く。

女性の行動に渋い表情を見せる青年は、ボソリとした声で、



「先輩。短剣は」  
「分かつてるわよ。投げるものじゃないって言うんでしょ！ 大体先輩は止める。こう見えても、ピチピチの十九よ。あんたよりもたつた三つ違うだけ。カルール姉さんと呼びなさい！」

女性の言葉に無言のまま背を向ける。彼が変人と呼ばれるもう一つの要因がこれだ。

眉間にシワを寄せるカルールは、そんな青年に背を預け、腰にぶら下げた短剣を抜く。五、六本程の短剣が揺れ、鞘をぶつけ合う。

「將軍の奴め……。この変人をウチに押し付けやがって……」

小声でボソツと呟いたつもりだったが、青年には聞こえていたらしく、訝しげにカルールの方に顔を向け、

「神を冒瀆ぼうとく」

「神じゃなくて、あんたをよ。この変人が！」

「変人？ 私はケイス「リバルバー」と」

「あんたの名前は知ってるっての！ 大体、自覚が無い変人は」

「私は」

「うっせえ！ もう黙ってる！」

遂に怒声を張り上げるカルール。額に浮かぶ青筋が、その怒りを物語っていた。

右手に握った短剣を乱暴に放ち、魔獣の胸を貫くと同時に、額に弾丸を撃ち込む。鮮やかに散る血が、地上へと降り注ぐ。溜まりに溜まった不満からだろうか、表情には殺意が満ちていた。

「神の制裁を」

クロスに振り抜く刃が、空を裂き、地を砕き、魔獣を切る。派手に血飛沫が飛ぶ事は無く、魔獣達は切られた感覚も無く地面にひれ伏していく。横たわる魔獣の体からは血が止め処なく流れ、地面を赤く染める。

流れる風が突如変わった。熱風が前方から吹き抜け、魔獣達の動きが止まる。刹那、カルールは目でケイスに合図を送り、陣形を変えた。前衛でケイスが胸の前に剣をクロスに構え、後衛ではカルールが何処から取り出したのか、二丁のライフルを握っていた。

漂う異様な殺気と、ただならぬ気配に魔獣人の存在を感じ取ったのだ。周囲に居た魔獣もその殺気に圧倒され、その場を逃げる様に散った。

表情を強張らせるカルールに対し、静かに唇を動かすケイス。これは、ケイスの癖だった。戦いの前の神への祈り。カルールにとってそれはどうでも良い事だが、目の前でされると腹正しい事この上無かった。

「あんだ、こんな状況で」

「ブツブツ……ブツブツ……」

言葉など聞こえていないのか、カルールを無視して唇を動かす。分かっていた事だが、無視されるのは、イラツとする。このまま、背後から弾丸を打ち込んでやりたい、と言う願望を堪え、視線を真っ直ぐに向けた。その視界に二人組みが映る。赤い髪の男と黒いマントを巻く黒ずくめの男。

危険な臭いを漂わせる二人組みに、ゴクリと息を呑む。

「オイオイオイ。どうなってるんだ？ 街には人影すらねえし、偵察

送りや戻ってこねえし」

「その要因は彼等の様だ」

静かな口調のジャガラ。長い黒髪が揺れ、合間から不気味な細目が見え隠れする。ハッキリと分からぬ程の殺意を放つ。

一方で、紅蓮の髪を靡かせるガゼル。鋭い眼差しが二人を見据え、耳のピアスを左手で触れる。こちらはハッキリと分かる憎悪と殺気を漂わせていた。

## 第100回 開戦！（後書き）

更新が滞り、申し訳ありません。

毎度の事ですが、頑張つて更新していきたいと思っています。長い目で見てくれるとありがたいです。

## 第101回 静かなる夜

異様な程静かな街並み。

深夜だと言うのに生暖かい風が吹き、悪臭を運ぶ。

あの騒ぎを利用し、デイバスターへと侵入したテイル達五人だったが、あまりの静けさに疑問を抱き、建物の中で待機していた。フオンは目を覚まさず、カインの疲労も回復していない。バルドも大分落ち着いた様に見えるが、その表情は青ざめている。

ひび割れた窓から外を窺うテイルは、やはり魔獣の姿を発見する事が出来ず、怪訝そうな表情のままノーリンの方に顔を向けた。その表情で状況を把握し、ノーリンも渋い表情を見せる。

茶色のコートを叩き、腕を組み壁へともたれ掛かったテイルは、切れ長の目を更に鋭くし、右手の人差し指を眉間に当てた。出来る限りの思考を働かせ考える。頭の中で情報がゴチャゴチャと混じり合う。

混ざり合う情報は徐々に幾つかの答えを弾き出し、テイルは複雑そうに重々しく口を開く。

「どう思う？」

「それは、先程の奴の事か？ それとも、現状か？」

「この街の事だ」

「魔獣が少ないと言う点ですか？」

ボソツと呟いたカインが、小さく息を吐きテイルの方へと目を向ける。呼吸は落ち着いている様に見えるが、やはり何処か辛そうだ。

「まあ、そう言う事だが、大丈夫か？」

カインの体調を気に掛けると、無理に笑顔を作り、

「大丈夫ですよ。それより、話を続けましょう」

真剣な目を向けられ、渋々と話を続行する事にした。

小さくため息を吐くノーリンは、右頬の星の刺青に触れると、そのまま考え込む。カインの言った通り、魔獣の数が少ないのは変だが、その理由ならハッキリしている。あれだけ派手に爆音を響かせたのだ、ここに居た魔獣達は既にそちらに向った可能性が高いと、ノーリンは考えていた。それなら、フォルトが現れた事も納得が行く。

しかし、その考えを口にはしなかった。その場に居る皆が恐らくその考えを一番最初に導き出したであろうからだ。

深く息を吐き、刺青に触れていた手を下ろし、視線を窓の外へと向けた。本当に静かだった。このまま何も起らず、夜が明けるのでは無いか、と思わせる程だ。

「静かだな」

ノーリンの心を見透かした様に、ティルがそう呟いた。ティルも同じ事を思っていたのか、表情はやけに哀愁が満ちていた。

「このまま、何も起らなきゃいいがのう」

「……そうだな」

少し間が空いて、ティルの言葉が返って来た。不思議とそれが当たり前のように感じ、ノーリンは小さく笑う。

突然の事に慥然とするティルは、鋭い目でノーリンを睨んだ。

「悪いのう。別に、又シを笑ったわけでは無い」

「ああ。俺も、自分が笑われたとは思いたくないな」

「それじゃあ、何がおかしかったんですか？」

不思議そうな表情でカインが問う。そのカインに目を向け、落ち着き温かみのある声で、

「出会って間もないと言うのに、どうも懐かしい感じがしてのう…  
…。それが、何じゃまあ、おかしくてのう」

その言葉でテイルの目付きも緩む。確かに出会って間もないが、不思議とこの感じが懐かしく、当然の様に思えてしまう。いつの間にかこんな人と普通に接する事が出来る様になったのか、不思議に思うテイルだが、全てはフォンと出会った時。あの時既に自分の中で何かが変わっていたのかもしれないと、結論付けた。

誰もが口を閉ざし窓の外へと目を向ける。殺風景な風景に、あの頃のデイバスターの面影は無い。カインにとっては思い出の地なのだろうが、それももう見る影は無く、全てがくすんで見えた。

「荒みましたね」

「仕方ないさ。黒の十字架は隊長と副隊長を同時に失って機能しなくなってたんだからな」

「黒き十字架です……」

僅かに引き攣った笑みを浮かべる。だが、すぐにその表情も沈む。思いつめた様に深く息を吐く。

「やっぱり、僕の所為なんでしょうか……」

ボソリと呟く。その言葉に眉を僅かに動かしたテイルは、何も言わず目を伏せた。テイルも分かっていた。デイバスターがこうも荒んだ原因は、間違いなくワノールとカインの二人が黒き十字架から

抜けたからだ。そして、その引き金となったのは、フォンだろう。複雑な心境。もしあの時ワノールやカインがここに残って居ればと、思うと胸が苦しくなる。奪われた命、失ったモノの重みを責任を感じてしまう。

重苦しい空気に、ノーリンは言葉を発する事無く、二人の様子を見守る。

だが、二人が言葉を発する前に、その沈黙を一人の男が破った。それは、今まで何も言わず窓の外を真っ直ぐに見据えていたバルドだった。

「隠れる！ 何か来る」

「！」

窓ガラスが割れ、破片が飛ぶ。窓の近くに居たテイルはコートを翻し破片を防ぐ。

咄嗟に動き出したのはノーリンで、まだ意識の戻らないフォンを右腕で担ぎ、そのままカインの方へとぶん投げる。膝に力が入らず、フォンの体を全身で受けたカインは、背中から床に倒れこむ。

咄嗟の行動で、自らが逃げ遅れたノーリンの右脹脛に何かが掠った。

「ッ！」

苦痛に表情が歪み、ノーリンの体が床に崩れ落ちる。埃が舞い上がり、刹那に無数の矢が放たれた。それは、バルドが衝動的に行ったモノで、頭で考えるよりも先に体が勝手に動いていたのだ。

矢は窓枠の内側を潜り、外へと飛び出していく。何処から攻撃されたかも分からぬ内の反撃が、思わぬ反撃を呼ぶ事となる。激しい轟音が大地を揺らし、建物の屋根が激しい咆哮に遅れ吹き飛んだ。突風が吹き抜け、建物の残骸が空から降り注ぐ。



「クツ！ ノーリン！」

「ワシは平気じゃ。又シ等はひとまず」

「逃がしちゃダメですよ。オルグちゃん」

不気味で不適な声に、カインの表情が変わる。突如発火する金色の髪。白煙と共に変わり行くカインの目。いつ抜いたのかわからないが、美しい蒼い刃が朱色へと変化していた。吐き出された息が真っ白に染まり、体から放出する熱が高熱である事がハッキリと分かる程だ。

カインの豹変ぶりに驚くティル・ノーリンの両者に対し、双牙を構えるバルドが素早く矢を放つと同時に怒声を響かせる。

「ボーツとするな！」

放った矢が空へと突き刺さる。その瞬間に気付く。それが巨大な魔獣の顎だと言う事に。

「な、何じゃあれは……」

「クツ！」

「来るぞ」

振り上げられた右前足が、風を巻き込みながら五人へと振り下ろされた。爆音が響き、建物が崩壊する。砂塵が巻き上がり、周囲の建物を呑み込む。

空を舞うノーリンの右腕にはフォンが握られ、他の三人の姿は無かった。遅れて吹き付ける風がノーリンの白髪を揺らす、バランスを崩すこと無く立ち続ける。右脰から流れる血が、風に吹かれて静かに地上へと散乱する。

百メートル いや、それ以上はあるであろう巨大な化物。夜で

も美しく輝く純白の毛並みを揺らす化物は、大きく裂けた口を開き  
咆哮を吐く。咆哮は衝撃波となり、前方に佇む建物全てを全壊する。  
それを見届ける金色の瞳が、静かにゆっくりとノーリンへと向けら  
れ、おぞましい程不気味な殺気が周囲を呑み込む。

## 第102回 闇を裂く赤き閃光

静かな夜に響くけたたましい咆哮が、建ち並ぶ建物を片っ端から破壊する。

残骸が飛び交い土煙が舞い上がる。佇む巨大な化物は、純白の毛を滑らかに揺らし、重々しく動き出す。血に飢えた金色の瞳が闇の中でも輝き、ひたすら獲物を探す様に動く。狼の様なそのいでたち、足の付け根から飛び出る鋭利な刃。それが、闇に煌く。

空を舞うノーリンは、吹き荒れる強風に耐えながら、その化物を見下ろす。他の者達はどうなったのか気になる所だが、現状ではどうする事も出来ず空中で待機していた。

その頃、何とか先の一撃を逃れたティルとバルドは行動を共にしていた。所々出血している所があるが、掠り傷程度で大した傷では無かった。

天翔姫を剣へと変え、建物の影に隠れ様子を窺う。流石にあれ程の巨大な化物とは正面からぶつかれない。間違いなく死ぬ。何らかの策を立て全員で力を合わせて戦うしかないが、果たして今の戦力で何処まで戦えるか。不安に押し潰されそうになりながら、ティルは眉間にシワを寄せた。

周囲を見回すバルド。気持ちが悪く落ち着いたのか、それともただ焦っているだけなのか、何度も何かを確認する様に頭を動かす。

「少し落ち着いたらどうだ？」

見かねたのかティルが不快そうな表情を向ける。その視線に気付いたバルドは、ティルの目を睨み返し、何も述べずに立ち上がる。どうやらいつものバルドに戻った様だ。

二・三步足を進め、更に周囲を見回す。上空のノーリンとフォンの姿を確認。建物の向こう側に僅かに見える化物の頭を確認。そし

て、その向うの建物の屋上にいる白髪に白衣の男をその視界に捕らえる。

「おい。あいつの姿が見当たらない」

「あいつ？」

「カインとか言う」

「カインなら心配要らないと思うが、どうしてだ？」

不思議そうな顔をするティルに対し、真剣な表情を向けるバルドは、静かな口調で告げる。

「俺達が散り散りになった時、アイツの様子が変だった」

「変？」

「ああ。異常な殺意の様なモノを感じた」

「大丈夫だと思うぞ。あいつは喜怒哀楽がハッキリしてるが、ここ一番では冷静な判断が出来る奴だ」と、思う」

僅かに不安そうな表情を見せたティルが、引き攣った笑いを浮かべる。カインの急激な感情の変動を、ティルには理解できなかったからだ。小さくため息を漏らし頭を抱えると、何処からかカインの声が響く。

「燃え上がれ！ 紅蓮の」

木霊していた声が途切れる。聞き覚えのある声に、ティルとバルドが顔を上げ、上空を舞うノーリンがその声のする方へと目を向けた。

闇に揺らぐ紅蓮の灯火。それが、闇を彩る様に点滅する。何が行われているのか遠めではハッキリと分から無いが、点滅する炎が突如それをやめた。不気味な程静まり返り、風の音だけが轟々しく聞

こえる。だが、すぐにその静寂を破るカインの声が響く。

「穿孔」

声と共に闇を貫く真つ赤な炎。乾燥した空気の所為か、流れる風の影響か、その炎は次第に加速し、向いの建物の屋上に立つ一人の男に向つて一直線に突き進む。それを阻もうと巨大な化物の左前足が振り上げられ、鋭い爪が炎を一掃する様に振り下ろされた。

轟々しく地面を砕く化物の前足。爪が地面へと減り込み、爆風が建物の合間を抜ける。

「良くやりましたよ。オルグ。フハハハハッ！」

高笑い。閃光。静寂。それが、一瞬で起つた。何が起つたのか、分からぬ程の神速の動き。目に焼きつく闇に描かれた赤い線。それが、カインの振るつた青天暁の軌跡だと、気付くまで数十秒。遅れてひび割れた眼鏡と白髪の前髪が床へと落ちた。

赤い髪が色あせ金髪へと戻り、朱色の刃も色を元に戻す。頭を失い崩れ落ちる肢体を、真つ直ぐに見据えるその目から、殺気が徐々に薄れていく。全てを終えた。そう思っていた。だが、すぐにそれが間違いだつたと気付く。

「フフフフツ。流星は私の作った最強の兵器」

「ッ！」

振り返つたカインは驚愕する。そこに居たのは、先程首を刎ねたはずのロイバーンだつたからだ。憎しみと怒りと困惑の三つが混ざり合うが、怒りが先に爆発する。金色に戻り掛けていた髪が発火した様に紅蓮に染まり、蒼い刃が朱色に変わる。目に宿つた殺気が、もう一つのカインの人格を呼び覚ます。

「貴様アアアアツ！」

振り抜いた刃が鮮やかな紅蓮の線を描き、ロイバーンの肢体を二つに裂いた。だが、手応えが感じられず、表情が厳しくなる。二つに裂けたロイバーンの肢体から煙が上がり、その肉体が消滅する。

奥歯を噛み締めるカインは「クツ」と短音を鳴らせ、鋭い目で周囲を見回す。ロイバーンの気配を僅かに感じ、奴が近くに居る事が分かっていたからだ。しかし、ロイバーンの姿は何処にも無く、代わりに化物の咆哮がカインを襲う。

「ガアアアアツ！」

渦巻く波動が建物の屋上をカイン事吹き飛ばす。瓦礫と共に空を舞うカインは、何事も無い顔で体勢を整えると、落ち行く瓦礫を飛び移りながら先程の建物の方へと戻ってきた。そして、その手に持つ朱色の青天暁を大きく振りかぶり、紅蓮の灯火と共に斬撃を放つ。

「クハハハハツ！ 無駄だよ。無駄。幾ら私の作り上げた優秀な殺戮兵器でも、このオルグには傷一つ付けられませんよ」

突如響くロイバーンの言葉通り、化物は無傷だった。斬撃は確かに直撃したが、あの純白の毛が全てを防いだ。小さく舌打ちをしたカインは、右足を踏み込み下段に構えていた刃を切り上げる。切っ先が床を裂き火花を散らせ、疾風を巻き上げる。風が炎を纏い化物に襲い掛かった。

纏わり付く様に炎が化物の体を呑み込んでいく。だが、それは誰かが意図的にそう仕向けた様にも見えた。それでも攻撃をやめないカイン。それを止め様と、ノーリンが叫ぶ。

「止めぬか！ カイン！」

カインに向って突っ込むノーリンだが、それを阻む様に横から咆哮が飛ぶ。衝撃波が炎を纏い、一瞬にしてノーリンの体が炎へ包まれた。下から見ていたティルとバルドの二人は、その状況に危機を感じ同時に駆け出す。ティルはノーリンの真下へ、バルドは建物の屋上へ。別々の行動を取った二人の目的は一つ。ノーリンの救出だった。

屋上へと上がったバルドは双牙を構えると、出力を最大限まで引き上げた矢を生み出す。そして、狙う場所は一箇所。

「クツ……」

双牙が軋む。改良された双牙の刃に出来た妙な彫り込みが生み出した風の流れが作用していた。格段に大きく膨れ上がるその力が、バルドの手から解放され様と暴れ狂う。照準がブレ、体がジリジリと前方に引かれる。それを何とか堪えるバルドの耳元で、気味の悪い声が囁く。

「邪魔はしないで欲しいねえ」

「ッ！」

激痛が背中を襲う。引き攣る表情と共にバルドの膝が床に落ちた。それでも、双牙を握る手は緩めず、ブレる照準を修正し矢が放たれたと同時にバルドは床に手を付いた。

## 第103回 バラバラ

風を取り込みながら突き進む一本の矢。

甲高い風の音に化物は耳を僅かに動かし、咆哮を止める。激しい衝撃から解放されたノーリンの体が揺らぎ、地上へと落下する。真下にはテイルが待ち構え、巨体のノーリンを受け止められなかった。

地面に背中を打ちつけ、盛大に土煙を巻き上げる。その横でむせ返るテイルは、目を細め口を押さえながら声を掛けた。

「大丈夫か？」

「……………」

返答が無い代わりに、振りあがった化物の左前足が三人に向って振り下ろされた。爆風が吹き荒れ、土煙が街道を流れる。直撃を避けたテイルは暴風で宙に投げ出され、地面に激しく体を打ち付けた。ノーリンとフォンの姿は無い。左前足に押し潰されたか、衝撃で飛ばされたかのどちらかだ。風が静まり土煙が晴れる。

痛みに耐え立ち上がったテイルは、目を凝らし周囲を確認する。ノーリンの姿は無い代わりに、細道の方にフォンが横たわっているのが見えた。脳裏に一瞬、悪いイメージが浮かび、それを払う様に首を振りフォンの方へと足を進めた。息はある。外傷も見当たらない。とりあえず、フォンの無事だけは確認し、テイルは化物の顎下を見上げる。

「こんな化物とどう戦えって」

「騒がしいと思ってきてみれば……………」

突然背後から聞こえた声に、テイルの表情が強張る。この状況で



更に魔獣人。天翔姫を握る手に力が籠り、額から汗が零れ落ちた。重々しい足音に、鉄の擦れ合う音が聞こえる。どれ位の距離があるのか、どんな能力があるのか、刃は届くか、様々な考えが脳裏に浮かび、やがて消えていく。そんな考えが無謀だと、告げる様に。そして、首筋へと突きつけられた冷たい刃に気付いた時、テイルは現実へと意識を引き戻された。

「動かない方が身の為だ」  
「クツ……」

発した声に男が笑う。穏やかで何処か不気味な笑い声に、テイルが渋い表情を見せる。

化物へと向ったバルドの放った矢は、衝撃を広げ消滅した。化物の目を貫くその一歩前で。手を床に付いているバルドは表情を歪め、背中に刺さった注射針の様なモノを引き抜いた。乾いた音が鳴り響き、血の着いた針が床を転がる。深く息を吐き、双牙を握り閉めたバルドは、振り向き様に数発の矢を放つ。それが、何かに直撃し弾けて消えた。

「いきなり攻撃とは、何とも乱暴な挨拶だ」  
「……………」

何も言わず矢を引く。大きな体に三つの目がバルドを見据える。二人の間に流れる乾いた風。それが一瞬揺らぐと、矢が二発放たれた。風が切り裂かれ、矢が甲高い音を奏で弾かれた。

渋い表情を見せるバルドは、もう一度矢を引く。風が矢を形成し、高音を奏でる。呼吸を整える為、息をゆっくり長く吐き出す。相手の肉体はハッキリ見えている。外す様な距離ではなく、手を

放せば矢が間違いなく当る距離。しかし、バルドの手は一向に矢を放す気配は無い。得体の知れない相手に、矢を放つのを躊躇した。それが、バルドの見せた唯一の隙。その隙を相手も逃さず、目の前から姿を消す。

一瞬の事で戸惑うバルドだが、瞬時に上空へと無数の矢を放った。これは一種の賭けだった。あらゆるパターンからの攻撃を予測し、その内の一つ『上空からの体重を乗せた攻撃』に、全てを託す。

が、矢は無情にも夜空へと消え、衝撃がバルドの腹を決る。腹から背中へと抜ける衝撃に、体がくの字に曲がり、両足が地から離れた。口から血が吐き出され、床を激しく転げる。

「グツ……う、ウツ」

蹲るバルド。その手に握った双牙は、いつの間にかナイフへと分離しており、右手に握った長い刃のナイフを地面に突き立てていた。

「まだ動けるか。まあ、あの程度でくたばってもらっては困るがな」  
表情を変えず、拳を握り三つの目でバルドを見据える。

屋上で燃える様な紅蓮の髪を揺らすカインは、突如現れた殺気に振り向き様に刃を振るった。朱色の刃が大気を裂き、熱風を漂わせながら鋭い刃音を鳴らせる。

長い髪を揺らしその場を飛び退いた影が、指先から糸を吐く。無数に伸びる糸を一掃する様に刃を振るうと、炎が糸を焼き払う。

「フフフツ……。流石、ロイバーンの作品だわ」

陰湿な声にカインの鋭い目が向けられる。右手に握った青天暁の

切っ先が床を二度叩き、スツとその先を女性の方へと向けた。

「邪魔をするな。俺の標的はお前じゃない」

「フフフツ……。私にはそんな事関係ないわ」

「邪魔をするなら 斬る」

声と共に地を蹴る。疾風の如き速さで朱色の刃が振られ、熱風が業火と化し女性に襲い掛かった。だが、不適な笑みを浮かべた女性の体が宙へと舞う。糸が空へと伸び、その先が隣りのビルの屋上へと巻き付いていた。

その動きを見据えるカイン。小さく鼻で笑い、「逃げるか」と小さく述べる。それと同時に、烈火が女性の後を追う。

自分を追う炎を見据え、左手から糸を吐き壁を作った。容易く燃えてしまったが、すぐに変化が起きる。炎が弾け青白い光りを放ったのだ。

「！」

その変化に驚いたカインはすぐに炎を消し、鋭く女性の方を睨む。不適な笑みを浮かべ、右手を伸ばす。

「あなた、思ったより弱いよね」

「キサ ツ！」

言葉を言い終える前にカインが床に膝を着いた。

「クツ！ な……何でだ！ ふざけ ツ！」

頭を襲う激痛。締め付けられる心臓。動悸が激しくなり、視点が揺らぐ。腕から零れた青天暁の刃が元の蒼刃に戻り、紅蓮の髪が金

色へと戻る。吐き出された血が床へと散ばり、左手で胸を押さえる。脳が揺さぶられる錯覚を感じ、平衡感覚を失ったカインは、そのまま床に崩れた。

薄暗い中に響く気味の悪い笑い声。

巨大モニターに映された映像を見据え、ズレ落ちた眼鏡を掛け直す。

「クハハハッ。想いの他上手い事バラけさせる事が出来ましたよ。

後は」

「後は……何じゃ？」

「！」

突然の声に振り返ると、そこにノーリンが立っていた。頭に被った土を払いながら、細い目を向ける。

静かに対峙する両者。首の骨を鳴らすノーリンは、右手首を回し臨戦態勢をとる。白衣を揺らす男は、ズレ落ちた眼鏡を掛け直し懐へと右手を差し込む。澄んだ鉄音がノーリンの耳に僅かに聞こえた。それと共に右手が勢い良く振られ、注射針が無数飛ぶ。が、それはノーリンに届かなかった。

「さて、こんな狭い所で戦うよりも、外に出てみんかのう」

右手に持った板には注射針が無数刺さり、それを床へと放り投げる。乾いた音が響き、男が不適に笑う。

「勘がいいんですかねえ？ 結構不意を突くのは得意なんですけど」「ワシも少々感覚が鋭くてのう」

ノーリンの目が開かれ、鋭い眼差しが男へと向けられる。その目付きに僅かに身を引く男が、右手で壁に触れると、風の流れる音が聞こえた。それに素早く反応したノーリンに、無数の注射針が飛ぶ。棚の向うへと身を隠し、注射針がそれを追う様に棚へと突き刺さる。遅れて聞こえてくる男の笑い声に、ノーリンは右手で棚を吹き飛ばす。

飛んで来る棚を見据え、不適な笑みを見せた男が、右手を翳すと風を切る音と共に棚が真つ二つに裂けた。真つ直ぐに見据えるノーリンの視界に映るのは、一人の少年。刃と同化した右腕を地面スレスレに構え、膝から突き出た鋭利な角がノーリンの方へと向けられていた。

「残念ですが、貴方の相手は私ではなく彼ですよ」

「敵ヲ殲滅ス」

「ふむ……。やるしかないかのう」

静かに右頬に刻まれた三ツ星に触れ、ゆっくりと息を吐く。そして、その眼差しは鋭く目の前の少年へと向けられた。

## 第104回 グラスターの攻防

各地で繰り広げられる決戦。

深夜のアルバーでは、テイル、カイン、ノーリン、バルドの四人が各々魔獣人と激突。

そして、明け方のグラスターで激突する赤き龍ことアルドフと、魔獣人リオルド。

飛び交う砲撃と爆音。散乱する肉片に漂う悪臭。地面が黒こげ、黒煙が上がる。兵士達も砲撃を逃れた魔獣と武器を交えていた。その中に副官であるレヴィの姿もあった。

その中で一際鋭い太刀風を吹かせながら刃をぶつけ合う二人。刃がぶつかり合う度に吹き上がる土煙が、両者を包み込む。

大剣が土煙を巻き込みながら振り下ろされる。だが、刃が斬ったのは土煙だけで、そのまま地面を砕いた。爆風が土煙を払い、二人の姿がはっきりと見える様になった。

「グハハハハッ！ 中々楽しませてくれる。これが、赤き龍と呼ばれた男の力か！」

「その名は捨てたと言っているだろ！」

アルドフの右手に握られた刃が振り抜かれた。だが、刃はリオルドに紙一重で届かず、アルドフは体を一転させる。リオルドに背中を向ける形になるが、それと同時に何か空を裂き、衝撃がリオルドをなぎ払った。

「ぐっ！」

吹き出された血が空を舞い、リオルドの体が地面を転がる。土煙が巻き上がり、巨大な何かがつねりを上げながら地面を叩いた。轟

く地響きに周囲が静まり返り、視線が集まる。土煙の中で浮かび上がる奇妙な影。それが揺らめき、もう一度地面を叩く。地面が砕かれ、破片が散乱する。

静かに体を起したりオルドの口元には、不適な笑みが浮かび、口角から流れる血を左腕で拭う。

「くはっ……くははははっ！」

高らかと響き渡るリオルドの笑い声に、落ち着いた低音の声が返答する。

「何がおかしい」

「貴様の様な強い奴と刃を交えるのは随分久し振りだ。俺も少しは本気を出せそうだ」

「魔獣化　と、言う奴か？」

「さあな。そう呼ぶ奴もいるが、俺は力の解放と呼んでいる」

不適な笑みと共に突如衝撃が周囲に広がった。突風が土煙を巻き上げ、リオルドの髪が吹き上がる風で更に逆立つ。蒼髪がその色を漆黒へと変貌させ、顔の表面に僅かながら鱗模様が浮かび始める。

そんなリオルドの目前に、衝撃を掻い潜ったアルドフが姿を見せる。白髪混じりの黒髪が揺れ、鋭い眼差しがリオルドを睨む。右足が踏み込まれ、アルドフが間合いを詰め右手に握った剣が振り抜かれた。

「ぐっ！」

澄みよい金属音と共に吐き出されたアルドフの声。刃はリオルドの右脇に触れたまま動かず、アルドフの右手が僅かに震え表情が歪む。一方リオルドの口元に不適な笑みが浮かび、静かなる口調で言

葉を告げる。

「グハハハッ。不意打ちのつもりだったのだろうが、残念だったな」

「どう言う……事だ」

表情を歪めるアルドフは、痺れる右腕を左手で押さえその場から離れる。

変貌していくリオルドの肉体。皮膚に現れた鱗が黒光りし、両足から鋭い爪が突き出て、地面へと食い込む。右腕が二倍以上に膨れ上がり、その手が静かに大剣の柄を握る。

「再開しようじゃないか。殺し合いをな！」

勢い良く大剣が振られた。衝撃が広がり、アルドフの体が吹き飛ばす。咄嗟に剣で刃を受けたが、その衝撃はアルドフの両腕を痺れさせる程だった。距離を取り静かに息を吐くアルドフは、その痺れを払う様に手を振り剣を構えなおす。

楽しげに笑みを浮かべるリオルドは、ゆっくりと大剣の切っ先をアルドフの方へ向けると、そのまま地を蹴る。魔獣化した事により生まれた瞬発力で、一瞬でアルドフとの間合いが詰まれ、大剣の切っ先がアルドフの胸に向って突き立てられる。

「クッ！」

咄嗟に身を反らし刃をかわし、剣でそれを受け流す。火花が散り、大剣がアルドフの顔の前を通過する。

「あめえんだよ！」



リオルドの声が耳に届き、左拳がアルドフの腹部へと突き刺さった。口から吐き出された血と共にアルドフの体が地面へと減り込んだ。地面が割れ碎石が飛ぶ。舞い上がった土煙がアルドフを包み込み、リオルドの大剣が天高く振り上げられた。

「じゃあな。古き英雄。赤き龍」

口元に浮かぶ笑みと共に、土煙の中へと刃が振り下ろされた。衝撃が更なる土煙を巻き上げ、突風が周囲へと広がる。

静まり返り、土煙だけが薄れていく。地面に飛び散った血痕があらわになり、レヴィの声が木霊する。

「アルドフ隊長！」

叫び声に振り返ったリオルドは、不気味に笑みを浮かべ、

「安心しろ。テメエもすぐにアイツと同じ  
「勝手に殺すな」

リオルドの背後でアルドフの声が聞こえた。その声小さく舌打ちをしたリオルドは、静かに右手の大剣を持ち上げた。重々しくゆっくりと持ち上がった大剣の刃が、微量の碎石を一緒に持ち上げ、それが空中に漂う。

張り詰めた空気。乾いた風。漂う土の香り。異様な雰囲気と空気の中で対峙するアルドフとリオルド。

額から流れ出る血が、視界を塞ぐ。それでも落ち着いた表情を崩さないアルドフは、右足を摺り足で一步進め、つま先に力を込める。いつでも地を蹴れる状態を保ち、リオルドを見据え息を呑む。

「恐怖心」

突然発せられたリオルドの声に、アルドフが踏み込んだ右足を僅かに下げた。

「どれだけ平然を装っても無駄だ。貴様の感じている恐怖が、俺には手に取るように分かる」

「それが、どうしたという」

「フツ……分らないか？」

リオルドの言葉が途切れ、アルドフの視界から消える。僅かに生まれた動揺からアルドフの動き出しが遅れ、突如目の前に現れたりオルドが放った鋭い突きが右肩へと突き刺さった。

「ぐあっ！」

激痛がアルドフを襲い、衝撃が右肩を貫く。体が空中へと投げ出され、右肩から血が吹き出す。

目の前で起った事が信じられず、レヴィの目には全ての事がスロ―に見えた。アルドフの体が地面に落ちるその瞬間までが。叫ぶ事も出来ず、何が起ったのかも分からず、ただ目の前の光景だけがその目に焼け付き、微かにレヴィの手が震えた。

「バカヤロー！」

突然響く声。それでレヴィは我に返り、自分の立場を思い出し、その手の震えを無理矢理押さえ込んだ。

「ケツ。その状況で、他人を気にする余裕があんのか？」

大剣を肩に担いだリオルドが、ゆっくりと足を進める。その先に

居るのは仰向けに倒れたアルドフ。肩からの出血が酷く、地面に血が広がっていた。右腕に力が入らず、その手に握っていたであろう剣は既になくなっていった。何処かへ飛んでいってしまったのだろう。リオルドの太刀を防ぐ術も受け流す術も失いながらも、アルドフは静かに立ち上がった。その目には闘志を抱き、その口に薄ら笑みを浮かべ。

## 第105回 国王

砲撃や咆哮、金属音の響く中、その一角だけ静けさを漂わせていた。

大剣を突き出すリオルド。刺々しい黒髪が揺れ、膨れ上がった右腕が脈を打つ。裂けた口から覗く鋭い牙をむき出しに笑う。不気味な笑い声に重なり喉から吐き出される息が、異臭を漂わせる。

武器を失ったアルドフ。だが、その目は未だ闘志を宿していた。勝算は限りなくゼロに近い。それでも、アルドフには一つだけ策が残されていた。リオルドにどれ程通じるか分からないが、出来る限りの事をしようと、アルドフは拳を握り締めた。空気が振動し、けたたましい低音の聲が突如響く。

“ヴオオオオオッ”

大気を震わす低音の聲が、周囲に僅かな衝撃を広げ、土煙を巻き上げる。

空気が一変した事により、リオルドの表情も一瞬で変化する。笑みは消え、大剣が確りと構えられていた。右足に体重を掛け、前傾姿勢を取るリオルドは、そのまま地を蹴りアルドフへと迫る。右手に握られた大剣の切っ先が地面を抉り、土煙を激しく巻き上げていく。

「何をする気か知らねえが、んな時間与えねえよ！」

砂塵を巻き上げながら、右足を踏み込むと同時に大剣を横一線に振り抜く。震える大気を裂き、風が吹き抜ける。荒々しく鋭い音を響かせながら。

だが、刃はアルドフに触れる前にピタリと動かなくなった。

「クツ！ た、隊長！ 何してるんですか！」

リオルドの大剣を細身の刃で受け止めるレヴィが、アルドフにそう叫ぶ。太い右腕から発揮される怪力がレヴィの握る細い剣を体ごと押しに行く。手が震え、刃が擦れ合いカタカタと音が響く。そのレヴィの背中を見据えるアルドフは突如怒声を発する。

「バカ野郎！ コイツには手を出すな、と言っただろうが！」

「な、何を言ってるんですか！ 隊長を守るのも部下の」

「テメエ如きが、この俺をどうにかできるなんて、思い上がってんじゃないねえ！」

「レヴィ！」

澄んだ金属音と共に弾け飛んだ細い刃が空中を回転し、弧を描きながら地面へと突き刺さった。鮮血が地面にポトポトと滴れる。

刃に付着した血を払うリオルドは、鋭い眼差しをアルドフの方へ向け、静かに笑う。

「クツクツクツ。身を呈して部下を守るか……。流石、隊長と言った所か」

「クツ……………」

表情を引き攣らせるアルドフの右手の指先から、血の雫が滴れていた。右肩の刃傷。それは深く、血が止め処なく流れていた。右膝を落とし、深く息をするアルドフは、左脇に抱えたレヴィを下ろし、静かな口調で述べる。

「ハア…ハア……。俺の……事は、心配、するな。それよりも、ハア…ハア……………」

言葉が途切れた。呼吸が荒く、時折苦痛に表情が歪む。重々しい鎧の破片が地面に落ち、アルドフは静かに笑う。何がおかしいのかは分からないが、自然と出た笑いだったのだから。その後、すぐに表情が苦痛に歪み、口から血を吐いた。

既に意識は朦朧としているであろうアルドフの顔を見据え、レヴィは自らの失態に唇を噛み締めた。自分がアルドフを庇おうとリオルドの前に出なければ、こんな事にはならなかったはずだ。少し考えれば分かる事だった。隊長であるアルドフが敵わぬ相手に、副官のレヴィが敵うはずがないと。

俯くレヴィの肩を握り、アルドフは耳元で囁く。途切れ途切れのその言葉に、「でも！」とレヴィが声を上げた。しかし、アルドフは声色を変える事無く淡々と言葉を告げる。

「これから先は……お前が、指揮を……」

言葉が途切れ、アルドフが吐血する。地面に吐き出された血が、乾いた土に染み込んでいく。

地面に着いた左手。苦しそくに口から漏れる吐息。意識は朦朧とし視点も定まらないが、それでも両足に力を込めゆつくりと立ち上がる。

「いいか……お前は、優秀だ。だからこそ……生きる」

「私は一兵士です。戦場に立つ事が」

「馬鹿……や……ろ。お前は、若い。こんな……戦場で……無駄に……命を落とすな」

表情を歪めながらも、いつもの様に笑みを見せる。その弱々しい笑みにレヴィは眉間にシワを寄せた。アルドフの判断は正しいものだった。ここに居る者にリオルドを倒せる力は無い。それ所か、ア

ルドフが倒れば間違いないと皆殺しにされるだろう。

緊迫した空気に息を呑むレヴィ。瞬間、リオルドの右腕がゆつくりと振りあがった。“来る”そう判断したと同時に、空気が一変する。全ての音が切り取られた様に静寂が周囲を包み、張り詰めた空気の中に殺気が渦巻く。

凍える様なリオルドの視線が、二人の体を硬直させる。不適な笑みが口元に浮かび、重心を踏み込んだ右足へと移動させた。刹那に悟る。来ると。砂塵が舞いリオルドが地を駆ける。振り上げられていた大剣が、唸りを上げ二人に向って振り抜かれる。刃が風を切り、不気味な風音が 響かず奇妙な金属音だけが周囲に響き渡った。振り上げた大剣が震え、金属と金属が擦れる嫌な音が聞こえる。

「……貴様！」

リオルドの鋭い眼差しを受け、静かな落ち着いた声が微かに聞こえてくる。

「これ以上、私の治める地で暴れるのは止めて頂きたい」

美しいオレンジブラウンの髪が揺れる。綺麗な程澄んだ緑の瞳が、その顔付きを凜々しくも猛々しく彩っている様に見えた。両手に握られるのは鱗模様の大剣。名は鱗龍<sup>りんりゅう</sup>。リオルドの持つ大剣とは対照的だった。

交錯する両者の大剣が弾かれ、二人が距離を取る。それは、リオルドが咄嗟に取った行動だった。

「貴様！ 何でここに居る！」

「私がここに居ると、何か不都合でもあるんですか？」

爽やかな笑みと共に、摺り足で右足を前に出す。両手に握った鱗

龍を腰の位置に水平に構え、ゆっくりと息を吐く。

そんな彼の登場に驚くレヴィは、アルドフの方に目を向ける。

「た、た、隊長！ フレイスト様が」

「何驚いてる」

レヴィと違い落ち着いた様子のアルドフは、静かに息を吐き大らかに笑う。まるでフレイストが来ている事を知っていたかの様に。そのアルドフの表情でレヴィも全てを悟り、怒りの籠った声で怒鳴った。

「し、知ってたんですね！ フレイスト様が来ている事を！」

「知ってたも何も、あの時見えたからな」

「あ、あの時って、まさか私が」

「そうそう。お前が乱入しなければ、俺と王子 いや。国王で同時に攻撃出来たんだがな」

呆れ顔でそう述べたアルドフに、レヴィの鉄拳が飛んだ。鈍い音と短音の悲鳴が聞こえ、フレイストが困った様に笑う。

「あの〜。もう少し、緊張感を持ってくださいよ。アルドフさん」

「いや〜っ。悪いな。どうも、坊ちゃんを国王と呼ぶのは」

「そっちの事じゃないですよ！ す、すみません。フレイスト様！

私達はすぐにここから」

「大丈夫です。もう、傷付けさせません」

静かな口調に穏やかな声。鱗龍を腰の位置で水平に構え、ゆっくりと腰を落とす。

フレイストを見据え、押し殺した声で笑うリオルドが、右手に持った大剣の切っ先を地面につけた。構えなどは無く、不適に笑うだ



け。それだけでも迫力があり、斬られた様な錯覚を覚える程だった。  
冷静になる為にゆっくりと口から息を吐く。鼓動だけが早まり、  
緊張から鱗龍の柄を握る手にも自然と力が入る。

## 第106回 轟く咆哮

閃光一閃。

弾ける火花。

碎ける地面。

舞い上がる砂塵。

一瞬にして静寂が戻り、両者の距離が離れる。

静かに息を吐き出すフレイスト。緑の瞳がリオルドの真っ赤な瞳を見据える。

膨れ上がった右腕で大剣を握るリオルドは、クツ、クツ、クツ、と小さな息継ぎを繰り返し、ゆっくりと体勢を整え、口を半分開く。両肩が揺れ、ゆっくりと息が吐き出される。足の爪が地面に突き刺さり、乾いた音を響かせた。

刹那に響く風音に続き、身を屈めたりオールドがフレイストに突っ込む。大剣が風を切り、衝撃と火花を散らす。鱗龍によって防がれたからだ。

凄まじい衝撃に僅かにフレイストの表情が歪み、上半身が弾かれ仰け反る。と、同時にリオルドの右腕が引かれ、もう一度大剣が振り下ろされた。

だが、それは空を切り、切っ先が地面だけを砕く結果となる。

「クツ」

短音の声に続き、視線が横に向けられた。そこには、体勢を崩したフレイストが座り込んでいた。側転で刃をかわした結果、そうなたのだ。

立ち上がり、鱗龍を構えなおす。僅かに上半身がふら付いたのは、まだ先程の衝撃が残っていたからだろう。

それを知ってか知らずか、間髪居れずにリオルドが切っ先を地面

に減り込ませたままフレイストに迫る。地面の碎ける音が迫り、間に合いにリオルドが入った。刹那、振り抜かれた鱗龍。閃光だけが走り、何事も無かった様に振り抜かれた鱗龍が構え直される。

「紙一重……ですか」

「馬鹿言え。あんなの掠りもしねえよ」

「そうですね……。それじゃあ、後一步踏み込むとしましょう」

ボソリとそう述べたフレイストが、距離を測る様に足元に目を落とした。

右足を半歩前に出し、腰を落とす。ゆっくりと上がった視線の先で、リオルドが不適に笑う。

「お前、次があると思ってるのか？」

「無いと、思いますか？」

「当然だ。貴様と俺は雲泥の差があるからな」

「そう思っているのは、あなただけですよ」

そう言っただけでフレイストが微笑む。だが、その笑みは何処か無理をしている様に見えた。それでも、周囲に張り巡らされた警戒心は途切れる事無い。

風が静かに流れ、土煙が舞う。周囲で轟く爆音が激しさを増し、血生臭い臭いが僅かに漂い始めていた。

円を描く様に右足を動かしたりリオルドは、その足先に全体重を掛け、地を駆ける。地面を砕く切っ先が切り上げられた。瞬時に身を退き刃をかわすと、右足を踏み込みリオルドの懐へと潜り込む。が、すぐにそれが失敗だと思ひ知る。

「ガッ！」

顎を右膝がかち上げた。視界が一瞬揺らぎ、フレイストの体が真っ直ぐに伸び、動きが完全に止まる。切り上げられた刃が、その重量も共なつて勢い良くフレイストの体へと振り下ろされた。

衝撃。

激痛。

血飛沫。

静寂が周囲を包み込み、土煙が巻き上がる。緩やかに流れる風が、巻き上がる土煙を薄めていく。

シトシトと滴れる赤い液が、地面に落ち弾けた。砕かれた地の破片が鋭利に上に向き、その先に血が付着している。

「ハア…ハア……ッ！」

深い息遣い。右肩口から左脇腹に架けて浅い切り傷が走っていた。切っ先が僅かに掠ったのだろう。それでも、血だけが大量に溢れ、地面に雫を落とす。

右手に握られた鱗模様の刻まれた大剣の切っ先に、地面が触れる。カツツと小さな乾いた音が聞こえ、続けて風を切る音が微かに流れた。ただ空を斬った刃が天を指す。

「何のつもりだ？ それとも、気でも狂ったか？」

「いえ。…私は、至って冷静です。ただ」

言葉を濁し、フレイストの視線がゆっくりと地面へと落ちる。美しい緑の瞳が、もの悲しげに。それでいて、強い決意を見せていた。それが、何なのか分からないが、小さく長く息を吐き出すフレイストが、ゆっくりと瞼を閉じた。大気が震え、空気が変わる。乾いた風が足元から吹き上がり、オレンジブラウンの綺麗な髪が穏やかに揺れ、傷口から流れる血が引いていく。

奇妙な威圧感にリオルドが右足を一步退く。爪が地面を引き裂き、

裂けた口から見える牙をむき出しにし、威嚇する様に喉を鳴らす。獣としての本能が行った行動と同時に、地を駆ける。鋭い爪が地面を砕き、右手の大剣が地面を裂く。乾いた音を奏でながら、刃によって引き裂かれる地面。碎石が後塵として舞い、土煙がそれを覆う。

「ウオオオオオオツ」

喉元から吐き出される低音の声。雄叫びの様にも聞こえるが、全てを裂く様にこだまし、地面を裂く刃が、何かを断ち切る様に天を目指し空を走る。

ガキツ！

金属がぶつかり合う音が鈍く響き、突風が吹き荒れた。踏み込み大剣を振り抜いたまま動かないリオルド。右腕が僅かに震え、表情が険しく変わる。

砂塵が消え、フレイストの姿があらわとなる。背中から突き出た不気味な尻尾と共に。

「それが、貴様の龍……と、言うわけか」  
「残念ですが、そんな……クツ、生易しいモノじゃ……」

フレイストの表情が引き攣り、体に亀裂が走り光が溢れる。禍々しい殺気と共に溢れるのは、不気味な咆哮。刃を押さえ込むのは硬い鱗に守られた強靱な尾。そして、それがいとも容易くりオルドの体を弾いた。地を抉り激しく土煙を巻き上げる。

土煙の中へと消えたりオルドを探す様に目を凝らす。その間も拡大する体の亀裂。地響きの様な低音の声が更に巨大になり、ハツキリと聞こえる。

「なっ……なんなんですか……あれ」  
「知らんのか？ って、無理も無いか……。今では一部の龍臨族しか持たない力だからな」

レヴィの問いに、当然の様に答えるアルドフ。だが、その表情に僅かに焦りが見えた。フレイストの過去を知り、その力の強大さを知っているからだ。

「さあて……。お前は俺の背中に隠れてるよ」

傷口を押さえながら立ち上がったアルドフが、不意にそう呟いた。その言葉の意味を理解するまで数秒。呆けていたレヴィは、突然首を左右に振ると、立ち上がりアルドフへと駆け寄った。

「な、何言ってるんですか！ 隊長こそ、動かず私の後ろへ」  
「馬鹿野郎。龍臨族の力は、同じ龍臨族しか止められない」

厳しい口調でそう述べた後、優しく微笑んだアルドフは、「気持ちだけは受け取っとくがな」と、付け加えた。

自分の無力さに俯くレヴィは、右手に持った剣の切っ先を見据えた。

轟く龍の尾。轟く咆哮。揺れる大地。放たれる衝撃が地面を喰らうかの如く砕き、土煙だけが激しく風に舞い上がる。痛々しい程肌を突き刺す殺意と憎悪。フレイストの肢体に押し込められていた龍自身が放つ、フレイストに向けた恨み。

身の危険を感じるアルドフは、小さく息を吐き出す。肩口の傷の痛みなど忘れる程、意識を集中していた。そうしなければ、一瞬で喰われてしまいそうだったからだ。

それ以上に、フレイストは身の危険を感じていた。肉体を引き裂

く様な激痛がフレイストの背中を襲い、くぐもった咆哮が腹から響く。

## 第107回 漆黒の龍の降臨

吹き荒れる風。

舞い上がる土煙。

轟く咆哮が次第に大きく、確実に大気を震わせる。

刺々しい殺気が肌を刺す。リオルドもアルドもその殺気にたじろぐ様に一步退く。それは極々当たり前の行動だったが、リオルドにとっては屈辱でしかなかった。奥歯を噛み締め、剣を握る右手に力が籠る。拳が震え、膨れ上がった腕に血管が浮き上がる。足の爪は確りと地面を喰らい、ゆっくりと下半身に力が籠る。

血液が煮えたぎる様に熱く、リオルドの体を爆発させるかの如く活発に心臓を躍動させた。静かに息を吐き出し、下半身に溜めた力を一気に解き放つ。地が砕け、リオルドが一瞬にしてフレイストの間合いに入る。

「死ねエエエエエッ！」

咆哮と同時に右腕が唸りを上げる。切っ先が地面を裂き、砂塵を巻き上げフレイストへと迫る。が、それも束の間。その動きは一瞬にして止められた。例の尻尾によって。刃だけが震え、リオルドの表情が引き攣る。その眼に映るのは右頬まで亀裂の走ったフレイストの顔。体の中から轟く不気味な声が、リオルドの腹まで響く。それは恐ろしく、身震いすら感じる程だった。

奥歯を噛み締めるリオルドは、右手をもう一度大きく振りかぶる。しかし、それを振り下ろす事を、尻尾が許さない。鋭く尾先でリオルドに突きを見舞う。咄嗟にその場を飛び退き、尾先が地面だけを砕いた。二人の間に碎石が舞い、鋭い視線がぶつかり合う。

二人の距離が離れ、リオルドはもう一度下半身に力を溜める。が、突如足元の地面が砕け、鋭い尾先がリオルドの右肩へと突き刺さっ



た。

鮮血が迸り、リオルドの体が宙に舞う。苦痛に歪んだ表情に「クツ」と、短音の音が聞こえた。激しく地面を転げたりリオルドの体。地面には血の跡が残り、土煙が巻き上がる。

「隊長……。一つ聞いておきたいんですが、あの尻尾は……」

フレイストとリオルドの攻防を見ていたレヴィが、アルドフの後ろでそう尋ねると、表情を変えずアルドフが答える。

「あれは、龍の尾だ。強靱克しなやかで、尾先は刃の様に鋭く、鱗はどんな刃をも跳ね返す」

「でも、あれはさつき隊長が使っていたのと」

「違う。奴は別格だ」

「それじゃあ……」

息を呑むレヴィに、アルドフは小さく息を吐く。険しい表情は変わらず、淡々とした口調で更に言葉を続ける。

「現・国王の中に居るのは、歴代最強の龍と言われている」

「隊長は見た事があるんですか？ その……龍を」

僅かに頭を振り、深く息を吐く。

「俺はまだ見た事は無いが、当時その場に居た者は悪魔の様な龍だったと口々に言っていた」

「悪魔の様な龍？」

「ああ。俺が丁度別の任務の為、城を離れていた時に目覚めたらしい。原因は母親の死だ、そうだ」

少々口調が切なげに変わった。それは、アルドフも経験があった早すぎに母親との別れ。少しだけ瞼を閉じ、すぐにいつもの顔付きに戻るが、言葉を紡ぐ声色だけはやはり切なげだった。

「その結果、この町の半分を破壊した」

「そ、そんな話、聞いた事ありません。一体、いつの」

「二五〇年前の話だからな」

「……二五〇年」

驚き息を呑む。あのフレイストの体の中にそんな凶悪な龍が居る、そう考えるだけで恐ろしくなる。それはアルドフも一緒なのだろう。険しい表情に、深く息を吐く。頬に浮き出る細かな鱗模様が美しく輝き、みるみるアルドフの体を包む。

周囲の騒がしさすら静かに感じる程の咆哮が衝撃を広げる。突然の事に眼を伏せるレヴィだが、衝撃はいつまでもやっつてこず、緩い風が髪を撫でた。瞼を開くと目の前に佇む大きな背中。赤い鱗と大きな翼がレヴィを守る様にしていた。

一瞬困惑するが、聞こえてきた声ですぐに状況を理解する。

「大丈夫か？」

「え、ええ。大丈夫です」

僅かに頷く。空気が震えるのを感じ、レヴィは恐る恐る尋ねる。

「何で、今頃になってその龍が……」

その質問にアルドフの声色が変わる。

「多分、カーブン様の死が、関係している」

「カーブン様の？ どう言う事ですか？」

慌てた口調に、アルドフが静かに返答する。

「ああ。あの龍の目覚めは母親の死だ。それを考えると、今回は父親の死を受けてのモノだろう」

意外と冷静な分析に、レヴィも納得する。

それから、二人は黙った。目の前で起きる事を、その眼に記憶する為に。

激しい風がアルドフの体を襲い、土煙が視界を妨げる。見えるのは亀裂の走るフレイストと、正面に佇むリオルド。表情までは詳しく見取れないが、リオルドもその衝撃に圧倒されているのは、何と無く分かった。

奥歯を噛み締め全身を襲う激痛に耐えるフレイストは、表情を歪めながらも僅かに口元に笑みを浮かべる。

「この身は……ッ……朽ちる……。それでも……貴方を……クッ……消せるのなら……」

「フザケロ。テメエに、俺が消せるかよ！」

もう一度リオルドが地を蹴る。広がる衝撃が全身を襲い、リオルドの皮膚が裂け血が飛ぶ。膨れ上がった右腕に浮き上がった血管すらも傷付き、血飛沫が上がる。それでも前進する事を止めず、雄叫びを上げながら右腕を振り抜く。太い刃が腕の振りに遅れ、衝撃を裂き刃を震わせながらフレイストの首へと伸びる。が、その刃が触れる寸前で、腕が止まりリオルドの表情が苦痛で歪む。

動きを止めたりリオルドの体を数秒遅れで振り抜かれた、龍の尾が弾き飛ばした。地面を激しく転がり、リオルドの動きが止まる。血と荒い吐息だけが流れる。口から漏れる赤い線が地面へと落ち、リオルドの体がゆっくりと起き上がった。

「…………ぐっ…………カハッ…………ふざけ…………」

口から漏れる言葉に耳を傾けながら、フレイストは膝を地に落としました。口から漏れる息が、次第に弱々しくなり、遂には両手を地に付く。

体が裂ける様な痛み。聞こえるのは体が砕ける様な不気味な音。外に漏れる咆哮が、次第にハッキリと聞こえる様になり、背中から遂に鋭い爪が露となった。

「　　ヴウウウツ…………外気が…………久方振りの…………我を…………眠りから…………呼び戻す…………」

不気味な声が聞こえ、大気が震える。今まで広がっていた衝撃が収まり、風がその背中へと吸引されていく。小さな竜巻が生まれ、全てを吸い込む。

「グッ！　来るぞ…………、俺の後ろに隠れてろ」

そう叫ぶアルドフだが、その声がレヴィに届いたかは定かではない。だが、次の瞬間、弾けた様に吸収された風が凄まじい衝撃となり、周囲に広がった。それは、漆黒の龍の訪れと、全ての破壊を意味する。

程なくして、舞い上がっていた土煙が消える。急激に静まり返り、兵士も魔獣も手を止めその瞬間を固唾を呑んで見守る。

「ヴウウウウツ…………。我は…………どれ位寝ていたのだ…………」

静けさを破る様に一つの声が聞こえる。その不気味な声は、間違いないくフレイストの体から聞こえていた声だが、そこに居たのは龍

と言つには小さく可愛らしい生物だった。

皆がその外見に啞然とし、失笑が所々で聞こえる。

しかし、その失笑すら聞こえていないのか、周囲を見回すその生物は、小さな両翼を羽ばたかせ、空へと舞い上がった。

## 第108回 戦う理由

静寂の中に聞こえる翼の羽ばたき。

漆黒の肢体は小さく、その長く太い尻尾とは不釣り合いなものだった。

緊張の中、生まれる失笑。完全にその龍を馬鹿にした笑いだった。だが、小さな龍はそんな失笑を気にしておらず、久し振りの外界の風景を見回す。

以前外に出た時と、変わり果てた光景。その光景にどれ程の歳月が経ったのかを感じ、小さな小さなため息を漏らす。

想像していたモノと明らかに違う姿の龍に、啞然とするレヴィ。流石のアルドフもその姿に呆気に取られ、一瞬だが気を抜いてしまったが、すぐに気を引き締める。だが、どう見てもあれが二五〇年前に町を半壊させた龍だとは思えなかった。

そんな疑念を抱くアルドフに、背後からレヴィが話しかける。

「……隊長。あれが、本当に凶悪な龍なのですか？」

「見た目で判断するな」

「分かってますが、あれの姿はちょっと拍子抜けです」

レヴィがじと目を向けると、アルドフと多少引き攣った笑みを見せる。

そんなレヴィとアルドフと同じ様に、その龍の姿に拍子抜けするリオルドは、静かに笑い声を上げた。その声に続く様に魔獣達の笑い声が静寂を支配した。

そんな笑い声の中も、堂々たる態度で悠々と空を舞う龍は、赤黒い瞳でリオルドを見据える。何かを言う訳でも無く、笑うリオルドを真っ直ぐに見据える龍は、背後に座り込むフレイストの方に顔を向けた。

深く荒々しい息遣いのフレイストは、体を裂かれた様な激痛に動く事が出来ず、片目を閉じながら真つ直ぐに龍の姿を見据える。

「貴様が、あの時のガキか……」

「私はあなたの事など覚えていないのですが……」

「随分と時が流れた様だな」

昔を懐かしむ様に遠い目をする龍に対し、苦しそうな声でフレイストは聞く。

「その姿は何ですか？ 私の知っているあなたは……もっと雄雄しく猛々しかった」

フレイストの言葉を聞き、龍は目を細める。

「何だ？ 我の事を覚えているではないか」

「いいえ。私の知っているのは、もっと凶悪な龍です」

その言葉に口元に笑みを浮かべる。意味ありげな笑みが消え、すぐに悲しげな表情を見せた。何かに気付いた様に小さな声で尋ねる。

「カーブンの奴は……死んだのか？」

「ええ。目の前に居る人物の手によって殺されましたよ」

フレイストにそう告げられ、龍は視線をリオルドの方へと向けた。人と思えぬ姿のリオルドに、訝しげな表情をする龍は、「そうか」と小さく呟く。まるでそれを予期していたかの様な口振りに、フレイストは一つの疑問が生まれた。そして、それを確かめる為に口を開く。

「あなたは、何を知ってるんですか」

「さあな。ただ、あの事件の事は明確に覚えている」

「あの事件？」

あの事件と言われ困惑するフレイストに、龍は不思議そうな目を向ける。まるで何を言っているんだと言いたげなその口振りに、フレイストも不思議そうな顔を向けた。その表情で何かに気付いたのか、意味深に笑い視線を逸らす。

笑い続けるリオルドは、小さな龍を見据えると右手に大剣を握りなおし、ゆつくりと右足を前に出す。その動きにフレイストが痛みには堪え立ち上がると、龍を突き飛ばし鱗龍を振り抜いた。

金属音が響き、衝撃が広がる。突風に揺れる両者の髪。舞い上がる土煙は二人の足元を隠す。衝撃によるめくフレイストに、不適な笑みを浮かべるリオルドが更に体重を掛けた一撃を振り抜く。重々しい一撃に火花が散り、フレイストの体が沈む。地面が音を立て崩れ、衝撃で周囲の土が陥没する。

「グッ……」

衝撃で体から血が噴出す。朦朧とする意識。それでも、奥歯を噛み締めその状態で踏み止まるフレイストは、やっとの思いで刃を弾き返した。

フラリと後退するフレイストに、リオルドが舌なめずりをして、右腕を振り上げる。朝日に照らされ、切っ先が不気味に輝く。来ると分かっていても体が動かさず、フレイストはその光景を真っ直ぐに見据えていた。霞んだ視界で。

「死ね」

リオルドの言葉がボンヤリと耳に届く。もっと、何かを言ってい



た様に聞こえたが、結局最後の『死ぬ』と、言う言葉しか理解できていない。それ程まで、体は窮地に追い込まれていた。

自分が揺れているのか、相手が揺れているのか、はたまた視界が揺らんでいるだけなのか、それすらハッキリと分からない状況で、やけにゆっくりとリオルドの右手が刃を振り下ろす。死には全てがスローに映り、脳裏には走馬灯の様に思い出が蘇ると、よく言ったもので、フレイストの脳裏にも色々な思い出がフラッシュバックしていた。

微動だにしないフレイストを見据える龍は、小さく呟く。『その程度の器か』と。

その瞬間、フレイストの体が揺らぎ、刃がその横をすり抜ける。切っ先が地面を砕き、フレイストの体がヨロヨロとリオルドから離れて行く。

「チツ……。ひん死の状態で、運良くかわしたか……。だが、次は」

「フン。貴様は馬鹿か？　この世界で、戦いに置いて運などと言う不確かなモノは無い。もし存在するとすれば、それは生きたいと言う本能だ」

漆黒の龍がそう口にする。自信に満ちた目と堂々とした態度に、リオルドが小馬鹿にした様な笑みを見せた。

「この期に及んで死にたくない……か。無様な奴だ」

「無様？　貴様、死の恐怖を知らないのか？」

「死など、恐れる者はただの雑魚だ」

「死を恐れぬ者は　ただの馬鹿だ」

龍のその言葉に、リオルドの体が硬直し、肩が小刻みに揺れる。その目が怒りで鋭く変わり、体がゆっくりと龍の方へと向けられた。

右手の大剣が地面に触れ、それを引き摺りながら静かに足を進める。

「舐めるな。俺様は最強だ。貴様の様な奴に何が出来る！」

大剣が振り上げられ、その瞬間に龍が笑う。

「止めておけ。お前の力じゃ傷一つ付けられん」

「なら、試してみるか！」

その声と同時に刃が振り降りた。が、急に腕の振りが止まる。

「クツ！」

「あなたの相手は私のはずです」

振り返るとフレイストが、左手で刃を捕まえていた。動きを止められ、眉間にシワを寄せるリオルドは、漆黒の髪を揺らし、フレイストの腹に回し蹴りを見舞う。踏ん張る事の出来ないフレイストの体は、軽々と吹き飛び地面を転がる。

怒りを滲ませるリオルドは、体の向きを変え、切っ先をゆっくりとフレイストの方へ向けた。うつ伏せに倒れるフレイストは、右手に握った鱗龍を地面に突き刺し、やっとの事で立ち上がる。

顔を上げると視線がぶつかる。赤い眼と緑の眼が交わり、リオルドの口元に笑みが浮かぶ。

「貴様から死ね！」

「悪いが、お前は少し黙ってる」

背後で聞こえた声に遅れ、激しい衝撃がリオルドの右脇腹を襲った。激しく地面を横転するリオルドが、土煙を舞い上げる。漆黒の尾がゆらりと揺れ、先程までリオルドの居た所に龍が降り立つ。両

翼が土煙を巻き上げ、小さな両足の爪が地面へと突き刺さった。口元から僅かに見える牙がキラリと光り、龍がゆっくりと口を開く。

「貴様は何の為に戦う」

「……私には……守るモノがあります……。それだけです」

「無様に地べたに這い蹲つても守るべきモノなのか？」

「それが、私が父とかわした」

「なら、我が力を貸す。だが、一つ条件がある」

龍の口が僅かに動き、フレイストにしか聞こえない声で何かを告げた。その言葉にフレイストは静かに頷く。すると、龍が両翼を羽ばたかせもう一度宙に舞い、『我が名はフェレス。契約だ』と、告げその姿を変貌させる。

## 第109回 契約と刻印

巨大な二翼の翼が空を覆い、小さな体が膨れ上がる様に巨大化する。

大きく裂けた口から鋭利な牙がむき出しになり、口から吐き出される息が土煙を舞い上がらせる。太い両足が地面へと鋭い爪を突き立て、重々しい音が周囲に響き渡った。

地面が割れ、乾いた風が吹き抜ける。フェレスと名乗った龍の重みに耐え切れず、地面が軋み爆音に近い音を周囲に轟かせる。周囲を一蹴する威圧感。それが、グラストー城一帯を包み込む。

重圧が全ての兵士に伝わり、皆が地面に押し潰されそうになっていた。それは魔獣達も例外じゃない。突然の重圧に動きを押さえ込まれ、その場に立ち尽くしていた。

巨大化したフェレスは、その美しい漆黒の肢体を揺らし、ゆつくりと翼を広げた。光を遮り、影が周囲を包み込む。

「な、何ですか……あれは……」

「あれが、本当の姿……と、言う事だろう」

「それじゃあ……」

驚くレヴィとアルドフの二人に、猛々しい声が轟く。

「そこから動くな若造共。私の力は誰かを守るには不向きだからな」

不適な笑みを響かせ、体を揺する。背筋がゾツとするその声に、アルドフはゆつくりと足を引き、レヴィの横に並ぶ。

強靱でしなやかな尻尾が持ち上がり、口に空気が吸われる。

“ヴオオオオオツ！”

咆哮が大地を砕きその先の森をも呑み込む。激しい土煙が舞い上がり、半分以上の魔獣が消え失せた。螺旋状に伸びた土煙を見据え、リオルドは乾いた笑いを響かせる。

小さく小刻みに息継ぎをするフレリストは、鱗龍を両手に握ると、静かな口調で述べる。

「街は破壊しないでください」

「分かっている。それに、我が放つのはこれ一発だ。後は、貴様の仕事だ」

「どういう意味ですか？」

「これは契約だ。我と貴様の」

淡々とした口調でそう述べたフェレスは静かな含み笑いを広げた。フェレスの言う契約が、何なのか分からず難しい表情をするフレリストは、その視線を前方のリオルドの方に向け問う。

「その契約とは？」

「簡単な事だ。貴様は我に肉体を、我は貴様にこの力を。ただそれだけだ」

「その契約は」

「安心しろ。この契約はお前の親父も交わした契約だ。何の問題も無い」

やはり淡々とした口調のフェレスは、静かに息を吸うとその体を光で包んだ。何が起こるのか分からず、その場に居た誰もが息を呑む。そんな中で響くフェレスの声が、周囲に更なる威圧感を広げた。

「さあ、右手をかざせ。貴様に契約の証を刻む」

「証？」

「別に大した物じゃない。さっさと右手をかざせ」

フェレスの言葉に右手に握っていた鱗龍を地面に突き刺してから、恐る恐るその手をかざす。すると、光に包まれたフェレスの体が光の粒子となり、かざされたフレイストの右手へと吸い込まれていく。突き刺す様な痛みと、高温の熱がフレイストの右腕を襲い、表情が苦痛で歪む。

光の粒子が腕に入る事に刻まれる赤い文様が、徐々にその色を漆黒へと変えていく。そして、その光の粒子が全て消えた頃には、フレイストの右腕に漆黒の奇妙な文様だけが残されていた。

「クツ……うつ……ツ……」

激痛にその場に蹲ったフレイストは、右手を押さえながら小さく呼吸を整える。

薄らと上がる白煙。口から漏れる吐息が、徐々に安定していく。右腕の痛みは引き、既に何も感じなくなっていた。ゆっくりと左手を離し、右腕に目を落とす。腕に刻まれた文様が美しく輝き、フレイストの頭にフェレスの声が響く。

『これが、契約の証だ。貴様が死なぬ限り消えぬ刻印だ』

「刻印……」

『我の声も、もうお前の頭の中にしか響かん。後は貴様のやり方次第だ』

フェレスの声が途切れ、フレイストが静かに立ち上がる。そして、刻印の刻まれたその手で、鱗龍を地面から抜いた。刃に刻まれた鱗模様を土を巻き込み、宙へと投げ出す。

漂う風格に、異様な空気を感じ取ったりオールドは、瞬時に刃を構えなおした。

緑色の瞳が力強く輝き、凜々しい顔立ちから、ゆっくりと唇が動き出す。

「決着を着けましょう」

「テメエ、調子に乗るなよ！」

怒声を響かせ、リオルドが刃を地面に叩きつける。地面が砕け、破片が弾けた。怒りを滲ませリオルドは地を駆ける。刃が地面を抉り、土煙を巻き上げる。

その動きを見据え、静かに鱗龍を腰の位置に構えたフレイストの脳内にフェレスの声が響く。

『放て。龍の息吹を』

「放て……と、言われましても」

『息を吸い、腹に溜める。そして、力を込めて吐き出せ』

フェレスに言われ、ゆっくりと息を吸う。吸い込んだ空気を限界まで体内に蓄え、腹に力を込め一気に放つ。

“ヴオオオオオツ”

地上を揺らす程の咆哮が、螺旋状の衝撃を一直線に飛ばした。地面が抉れ、土煙が舞う。

衝撃を受けたリオルドは動きを止め、衝撃から身を守る為に大剣を地面に突き刺す。衝撃に押され、後退する。

「グッ……」

衝撃が収まる頃、リオルドの体がグラつき右膝を地面に付く。

「クツ……ざけるな……ふざけるな！ テメエらみたいにノウノウと生きてきた連中に」

拳を震わせ立ち上がる。口の端から血を流すリオルドが、勢い良く大剣を抜くと、雄叫びを上げた。大気が震え、リオルドがもう一度地を駆ける。異常なまで狂った眼まなこが、フレイストを見据え、口から漏れる赤い液が地面に落ちる。

狂ったリオルドを見据えるフレイストの目は冷やかだった。それでいて、哀れみの目でもあった。あそこまでして戦う理由は何なのか。そうまでしてリオルドを動かすものとは。

考えれば限が無いほどの疑問に、フレイストは小さく息を吐く。

『哀れだな』

頭の中に響くフェレスの声に、フレイストが静かに頷く。

「そうですね……。あそこまでする理由は」

『貴様には理解出来ない理由だろうな。所詮、貴様の種族は英雄と呼ばれる種族だからな』

「それは……やはり」

『気にするな。種族の問題はいつでも付きまとっているものだ。それにどう立ち向かうかは、そいつ自身の問題だ』

フェレスの言葉でフレイストが俯く。考えもしなかった。こんなにも種族差別が酷くなっているとは。あんなにまで狂ってしまう程、彼等は。

「変えなきゃいけない……。こんな世界……間違ってる」

『貴様に変えられるのか？ 貴様の親父すらなせなかった事を』

「それが、父がなそうとした事なら、尚更私が」



『ならば、早くソイツを眠らせてやれ』

フェレスの言葉に頷いたフレイストは、摺り足で右足を前に出し、ゆっくりと腰の位置に構えた鱗龍を振り抜く。双方の刃が衝突し火花が散る。衝撃は今までで一番弱々しく、容易くりオールドの上半身が仰け反った。

黒髪が大きく乱れ、狂った赤い瞳がフレイストを真っ直ぐに見据える。何かを言う訳でも無く、その目を見据えるフレイストは、更に右足を前に出し、振り抜いたばかりの鱗龍を胸の前まで引く。

二人の足元に砂塵が舞い上がり、奇妙な気流が生まれ、遅れて鱗龍が勢い良く突き出された。突風が吹き抜け、フレイストのオレンジブラウンの髪が乱暴に揺れる。その手には重々しい感触だけが伝わり、空中には大量の鮮血が舞う。地に沈むはリオルドの体。その後ろには一直線に鋭い傷痕が地面に残されていた。

## 第110回 將軍ツヴァル

漂う土煙の中、フレイストがゆっくりと腰を落とした。大きく両肩を揺らし、深く呼吸を繰り返して右手に握っていた鱗龍を地面に置く。

静まり返った中で、初めに聞こえたのは兵達の歓声だった。リオルドを失った事で統率を失った魔獣達が、次々逃げ帰っていくからだ。その光景にフレイストも静かに笑みを浮かべた。

小さな吐息と共に、赤紫の髪が揺れる。困った表情で頭を掻く青年は、もう一度吐息を漏らす。そして、目の前に佇む小柄の老人に目を向ける。

「ッ！ッ！」

「何なんだ！この老いぼれは！」

呻き声の様な言葉を発する老人に、そう叫んだのは背中から漆黒の翼を生やしたディクシーだった。苛立ちの見える表情に、青年がもう一度ため息を漏らす。それに遅れて、もう一つの声が妙な口調で言葉を発する。

「あのさ。ちゃちゃと、終わらせない？」

「うっせえ！テメエは黙ってる」

「何々？少し階級上だからって、命令？言っとくけど、俺、誰の指図もつけないけど」

何かとイライラとする喋り方のクローゼルに、ディクシーが手に持った剣を首筋に突き付ける。

「黙ってる。今、私が話してるだろ」

「あゝ……。すみません。今すぐ退けるんで……」

困った様に頭を掻いていた青年が発した言葉に、小柄な老人が何か言葉を発する。だが、何を言っているのか理解は出来なかった。深々と頭を下げた青年は、老人を兵士に任せ、ゆっくりとディクシーとクローゼルの方へと向ける。

アチコチで起る爆音に、ディクシーが渋い表情を見せた。一方で、大きな欠伸をするクローゼルは、耳を指でほじりながらその光景を見て笑う。

「ククククツ……。面白いねえ。あの老人、戦えるの」

「戦えないから、退けるんだろ。少し黙ってる」

「分かってるけど。黙ってるのは、俺のポリシーに」

「ウルサイ！ 黙れ」

ディクシーの右手の剣がもう一度クローゼルの首元に向けられた。その行動に押し黙るクローゼルは、ゆっくりと後退し切れ長の細い目でディクシーを見据える。ニヤニヤと笑みを浮かべるクローゼルに、不快な感情を抱くディクシーは、右手を下ろし視線を青年の方へと向けた。

老人がその場から立ち去ったのを確認した青年は、静かにディクシーの方に体を向け、穏やかな笑みを見せる。

「すみません。どうも、先代の方がボケてまして……」

「それより、奴は何処だ？」

「……奴？ それは誰の事ですか？」

少々丁寧な口調で問うと、ディクシーが眉間にシワを寄せ、視線

を逸らした。小首を傾げ、青年は頬をポリポリと人差し指で搔く。困り果てた様子の青年に対し、ふてぶてしい笑みを浮かべるクローゼルが相変わらずの口調で話しかける。

「あのさ。ちゃっちゃんと始めちゃわない？ 俺等、結構忙しいんだよねえ」

「僕の方は、もう少しゆっくりしてもらうと、助かるんですけど」「それじゃ、お前だけ、ゆっくりしてろよ！」

突如地を駆けるクローゼルが、低空姿勢から長い腕を振る。撓り風を切り、交互に左右の拳が青年の体を直撃し、軽快な打撃音が歯切れ良く聞こえ、数発殴打された青年の体が激しく地面を転げた。石畳の上を転げる青年の右手で何かが煌き、乾いた破裂音が周囲を静まり返す。しかし、乾いた破裂音だけが聞こえ、弾丸は一切見えなかった。

「あれ？ 今の破裂音は、何かな？」

ふてぶてしい笑みと同時に、クローゼルが追い討ちを掛ける為、青年に迫る。そんなクローゼルに向って、更に乾いた破裂音が数発轟く。

「ばかじゃない。そんな子供騙し ツ！」

突然、クローゼルの両肩から血飛沫が舞い、体が後方へと弾かれた。石畳の上に血痕を広げ転げるクローゼルは、仰向けに倒れたまま動かない。空を見上げるクローゼルに歩み寄るディクシーは、冷やかな視線を送り、背中の漆黒の翼を広げた。

「テメエに、奴は任せる」

「あれれ〜？ 逃げるつもり〜」

「黙れ。そして、死ね」

「死なないから〜」

スクツと立ち上がったクローゼルが、馬鹿にした態度でそう言う  
と、デイクシーがそれを無視して青年の方へ目を向ける。青年はそ  
の視線に気付くとニコツと笑みを浮かべると、軽く会釈した。

青年の態度に多少なりに苛立ちを覚えるデイクシーだが、目的の  
為に静かに怒りをかみ殺す。ゆっくりと口から息を吐き出し、心を  
落ち着かせるデイクシーは、淡々とした口調で青年に問う。

「国王はいつ戻る」

「さあ？ 僕には検討も付きませんが、王に何か用ですか？」

「デメエには関係ない」

「それでもないですよ。將軍の名を受け継いだ以上、国王に降り  
掛かる火の粉は払わせてもらいますよ」

右手に握った奇妙な形の短刀の切っ先がデイクシーの方へと向け  
られた。怪訝そうな表情をするのはクローゼル。あの短刀の何処か  
らあの乾いた破裂音がしたのか、分からなかったからだ。

涼しい表情のまま短刀を構える青年は、ゆっくりと右足を踏み込  
み、腰を低くする。その動きにデイクシーも剣を構えた。

「そんな短刀で勝てると思ってるのか？」

「これが、ただの短刀に見えますか？」

「十分、そう見えるんだけど〜」

「ここは発明大国ですよ。そんな普通の短刀なんて 使いませ  
んよ〜」

青年が短刀を振るうと、乾いた破裂音が響く。遅れて、血飛沫が

舞いデイクシーとクローゼルの体が弾かれる。地面に倒れるクローゼルと違って、その場に踏み止まるデイクシーは、口の端から血を流しながら、不適な笑みを浮かべた。

赤い瞳が静かに青年を見据え、右足を静かに前に出す。握っていた刃を下段に構え、口を開く。

「貴様の名前を聞いておこうか」

「僕は第三十六代將軍。ツヴァル」

「私は十二魔獸第六席。デイクシー」

「俺は、十一席の」

クローゼルの言葉を無視して、両者が走り出す。二人の軽快な足音が近付き、遅れて刃がぶつかり合う澄んだ音が響いた。僅かに吹き抜けた風が、両者の髪を撫でる。二人の視線が刃を挟んでぶつかり合う。

黒の瞳が右に動き、ツヴァルが身を屈め右足を踏み込む。短刀が滑る様にデイクシーの刃を受け流す。同時に短刀を逆手に持ち替え、一瞬でデイクシーの死角へと回り込んだ。

だが、刃をその体に突きつける前に、何処からともなく伸びてきた拳が、ツヴァルの顔面を殴打した。

「ッ！」

よろめき後退するツヴァルに、追い討ちを掛ける様に撓った腕が拳を何発も飛ばす。拳が何発も顔を往復し、ツヴァルが遂に膝を落とす。ゆっくりと距離を取ったクローゼルはふてぶてしく笑みを浮かべる。

## 第111回 不気味

ツヴァルは意外に冷静だった。

魔獣人を二人相手にし、最悪の状況だと言うのに、口元には笑みが浮かんでいる。右手に握る短刀を軽やかに回し、ゆっくりとした足取りで前進する。

異様な空気にディクシーは眉間にシワを寄せ、武器を構えなおす。一方で、不適な笑みを浮かべるクローゼルは、細長の体を揺らしながら、長い両腕をブラブラと左右に振る。振り子の様に動く両拳が、しなやかに空を裂く。風を裂く鋭い音が聞こえ、ツヴァルの体が弾かれる。

だが、二・三步よろめいただけで、ツヴァルの足が止まる事は無い。それが更に不気味さを増し、ディクシーが危険な臭いを感じ取った。

「クローゼル！ 離れるぞ！」

「何、言っちゃってるの。こんな雑魚に背を　ッ！」

振り抜いた左拳に激痛が走り、一瞬にして手を引く。拳が裂け血が滴れる。何が起ったか分からず、表情を顰めるクローゼルにツヴァルの静かな笑い声を上げた。

「フフフツツ……フフフフツツ……フフフフフフツツ」

「てっめえ！」

「行くよ……フフフツツ……」

突然の変貌振りに流石のクローゼルも異変を感じ取り、その場を離れる。が、ツヴァルがそれを許さず、すぐに間合いを詰める。焦りから小さく「クッ」と声を漏らすクローゼルに、ツヴァルの右手

の刃が伸びた。

切っ先が首筋に触れる刹那、下から振り上げられたデイクシーの剣が刃を弾き、更には間合いを詰めツヴァルの左肩を切っ先が貫く。だが、表情一つ変えず、ツヴァルの口元に笑みが浮かぶ。

「クツ！」

逆に表情を引き攣らせたデイクシーが、その身を一步引き、同時にツヴァルの左肩を貫いた刃を抜く。鮮血が溢れ、ツヴァルの服が真っ赤に染まる。一瞬動きが止まった様に見えたが、すぐにツヴァルの右腕が振り抜かれた。殆ど一瞬の事で、デイクシーも反応する事が出来なかった。

切っ先が漆黒の髪を裂き、デイクシーの左頬から血が流れる。刃が触れた感触すら感じさせないその一撃に、思わず翼を羽ばたかせ間合いを取った。

距離を取ったデイクシーとクローゼルの両者を見据えるツヴァルは、静かに息を吐き出す。赤紫色の髪がゆっくりと揺れ、構えられた右腕が静かに下ろされた。

「はふーっ……やめたやめた。なんで僕が痛い思いして戦わなきゃいけないんだよ」

突然の豹変っぷりに、デイクシーとクローゼルも構えを解く。驚きと困惑が混ざり合った表情を見せる二人に対し、ツヴァルは短刀をしまい、背を向けてしまった。

その行動に怒りをあらわにしたのはデイクシーだった。戦いの最中背を向けると言う行為が、自分への侮辱。そう感じたのだ。

「貴様！ 殺す！」



デイクシーが駆け出し、右手の剣を振り抜く。が、その刃が突如砕け切つ先が地面へと突き刺さった。首筋に当てられた短刀の刃に、デイクシーの額から汗が流れる。

「止めましようよ。無駄な争いは」

「無駄な争いだと？ 私には目的がある」

「僕にも目的はありますよ」

口元に浮かんだ不適な笑みが、デイクシーの体を硬直させる。だが、恐怖よりも怒りが先にデイクシーの体を支配した。

風を切る音が聞こえ、ツヴァルの体が血を吹く。いつ振り抜かれたか分からないデイクシーの剣先に付着する血が、シトシトと地面に落ちた。右脇腹から左肩かけ綺麗に切り上げられ、背中から地面に倒れたツヴァルの体が二回程バウンドする。

指一つ動かさないツヴァルの手から短刀が落ちた。血がドクドクと脈を打ちながら溢れる。

「貴様の目的など知るか……」

デイクシーがそう述べ、右手の剣を構えなおす。

ムクツと体を起したツヴァルは、静かに息を吐く。

「ツマンネエな。全く、すぐキレルんだからさ」

「き、貴様！」

驚きの声を上げるデイクシー。確かに手応えを感じたからだ。それに、ツヴァルの体の傷も相当深いはずなのに、それを感じさせない態度。ゆつたりとした動きと共に抜かれた短刀が、空を裂く。

血を流しながらも平然とするツヴァルに、引き気味のクローゼルは、引き攣った表情を浮かべる。普通の人間が、あの傷で平然とし

ていられるわけが無いからだ。自らを落ち着ける為に深呼吸を繰り返すクローゼルだが、それがより良くクローゼルの思考回路を働かせ、更なる恐怖を植えつける。

「な……なんだ……アイツ……」

恐怖で体が震え、瞳孔が開く。自然と体が後退し、その場から逃げ出しそうになった。だが、それをツヴァルは許さない。突如向けられた視線が、足を凍りつかせたからだ。これ程まで、死を間近に感じたのは初めてで、クローゼルは息をする事すら忘れる程だった。その場から逃げ出そうと、足を引いたクローゼルの耳元で、ツヴァルの囁き声が聞こえた。

「逃がさないよ……皆殺しだ」

向けられた不適な笑みに、流石のディクシーも身を退いた。漂う殺気に、膝を折ったディクシーは、剣を地面に突き立て何とか体を支える。一瞬意識が飛びそうになったが、それに耐え呼吸を整え叫ぶ。

「貴様など、私の剣で　ッ！」

言い終える前に右肩から血が吹き出る。

いつの間にか振り抜かれた右手が空を指し、その手に握られた刃の先に血が付着していた。ふらつくディクシーは、地面に突き立てていた剣を抜き、構えながら後退する。

二つの血が地面で混ざり合い凝血し、生臭い匂いを漂わせていた。鼻を刺す様な匂いに、顔を顰めたディクシーだが、すぐにその表情を真剣に変える。目の前に佇む、得体の知れないツヴァルを相手にする為に。

振り上げた右腕を静かに下ろしたツヴァルは、両肩を小刻みに揺らし小さな声で笑う。それが、一層ツヴァルを不気味に見せる。

細い刃の刃先をツヴァルに向けるディクシーは、奥歯を噛み締め背後で蹲るクローゼルに叫ぶ。

「何、蹲ってやがる！ 敵は目の前に」

「クフフツツ」

突然背後から聞こえてきた笑い声に振り返ると、そこにツヴァルの姿があった。蹲るクローゼルの首筋に短刀をあてがうツヴァルが、口元を緩め不適に微笑む。背筋がゾツとする程の殺意にディクシーは冷静さを失う。

「うおおおおっ！」

腹の底から吐き出した雄叫びで自らを鼓舞し、大地を蹴った。土が欠け、碎石が舞う。漆黒の翼が広がり、自らの体を大きく見せる事でツヴァルを威嚇する。野生的本能が行った行動だったが、それを嘲笑うかの様にツヴァルがゆっくりと立ち上がり両手を広げた。

「さあ、僕の心臓はここだよ」

「貴様アアアツ！」

叫ぶと同時に刃を突き出す。切っ先がツヴァルの胸に吸い込まれる様に突き刺さる。だが、その感触に違和感を感じた。それが何か気付く前に、顔面を何かが殴打し、ディクシーの体が大きく揺らめく。

二、三步後退したディクシー。ツヴァルを貫いていたはずの刃は簡単に抜け、綺麗な刃を輝かせた。

よるめいたディクシーは左手で顔を抑え、指の合間からその刃を

見据える。そして、気付く、刃に血が付いていない事に。

「クツ！ 貴様、一体！」

顔の前の左手を振り下ろし、ツヴァルにそう怒鳴る。鼻からは血が流れるが、それが気にならない程怒りに満ちたディクシーが、右手の剣の切っ先をもう一度ツヴァルへと向けた。そんなディクシーに不適な笑みを浮かべるツヴァルが、一歩足を踏み込みその手に持った短刀をむける。

## 第111回 不気味（後書き）

前作から数えれば211回目を迎えるわけですが、長いですね。毎度あとがきを書くとき、言ってる気がします。

そろそろ展開にも飽きてきた所でしょう。なるべく早く完結できる様努力しているしだいでありませう。

こんなにも長い作品を毎度見に来てくれる読者の皆様には、本当に感謝しています。これからも、よろしくお願ひします。

## 第112回 撤退

両者が対峙し数秒。

静寂と共に流れる時間の中で、滲み出る汗と流れる血が混ざり合う。

肩を大きく揺らすデイクシーに対し、不適な笑みを浮かべたままのツヴァル。両者共に同じ程度の傷を負っているはずなのに、対照的な状況にデイクシーの表情が曇る。

剣を握る手に力を込めるが、足が動かない。それは異様な空気を放つツヴァルの存在を、危険だと認識したからだろう。間合いを詰める訳でも遠ざける訳でも無く、一定の距離を保つ両者の間に乾いた風が緩やかに流れる。

薄ら笑いと共にツヴァルの体が左右に揺れた。その動き出しに身構えるデイクシーが、右手に持った剣を胸の前で構える。

「フフフフツ……フフフフツ……」

不適な笑い声を漏らすツヴァルが、俯き更に体を左右に揺さぶる。その動きをジツと見据えるデイクシーは、右足を引き摺る様に一歩前に出す。両者の距離が僅かに縮まるが、一向に動き出そうとはしない。そんな二人の視線が交わったままゆっくりと時が過ぎる。

刹那、歓喜の声が周囲を包む。それは、フォースト王国の兵士達の上げた歓声。何が起こったのか分からず、視線をツヴァルから外したデイクシーは、目の前に広がる光景に驚愕する。

そこに広がっていたのは、壊滅寸前の自分達の軍。何故、その様な状況に陥ったのか分からず、困惑するデイクシーに、追い討ちを掛ける様に首筋に冷たい物が当てられる。

冷や汗が吹き出て、鼓動が早まる。首筋にあてがわれた刃に、背後に感じる気配。一歩でも動けば、間違いなく首が飛ぶだろう。緊

張から息が荒くなり、更に汗が溢れる。

どれ位時が過ぎたのかも分からなくなる程、ディクシーの頭の中はゴチャゴチャしていた。魔獣達が人間風情に壊滅寸前に追い込まれ、ディクシー自身もツヴァルに追い込まれた状況。誰がこんな状況を予想していただろう。魔獣軍は間違いなく誰一人予想していなかった状況だ。

奥歯を噛み締めるディクシーは、この状況に苦肉の選択をする。

それは、

「撤退だ！ 撤退しろ！」

撤退と言う屈辱的な選択だった。叫び声は兵士達に伝わったのか、各々がくもの巣を散らす様に森へと逃げ帰っていく。それを確認した後、ディクシーは目の前に蹲るクローゼルに対し、手に持った剣を投げつける。刃が回転し、クローゼルの肩へと突き刺さった。その痛みでようやくクローゼルの意識がハッキリする。

「ぐっ……うっ……」

「確りしろ！ これからは、テメエが指揮を執れ」

「はぁ……何を……！」

ゆっくりと体を起したクローゼルが、そこでディクシーの置かれた状況に気付く。

「とつとと行け！」

ディクシーの声にクローゼルが駆け出す。考えている余裕などなく、ただその場に居るのが恐くなり必死で走った。

その背中を見据えるディクシーが、静かに息を吐き。諦めた様な遠い目をして、もう一度深く息を吐く。

短刀をあてがうツヴァルは、ディクシーの耳元で不適な笑い声を上げると、静かな口調で、

「流石……と、言っておきましょう」

と囁く。その声に顔付きを変えたディクシーは、奥歯を噛み締め問う。

「どう言う……意味だ」

「いえいえ。僕も軍を率いる身だから、分かるんですよ。引き際がどれだけ大切かって」

「何が言いたい」

「魔獣達を率いるあなたの判断は素晴らしかった。僕も見習わなくては。でもね……」

突如、ツヴァルの声が遠き、視界が揺らぐ。首筋にあてがわれていたはずの刃物の感触も消える。揺らぐ景色の中で僅かに映る人影が、ニコリと微笑み手を差し伸べる。その瞬間、パチンと何かの弾ける音が聞こえ、全ての風景が鮮明に映り、目の前で笑みを浮かべるツヴァルの顔がはつきりと見えた。

自分に何が起こったのか分からないが、ツヴァルの表情を見て状況を把握する。

「貴様！ 何をした！」

「鮮やかな撤退命令。流石です」

「何をしたと聞いてるんだ！」

両翼を広げ怒声を響かせるディクシーが、その額に青筋を浮かべる。

怒りが見て取れるディクシーに対し、落ち着いた面持ちのツヴァ



ルがニコツと微笑みかけ、先程までとは明らかに違う優しい口調で、

「ちょっとした幻覚作用ですよ。どうでしたか？」

「どう言う事だ！ 一体、いつから」

「そんな事、ワザワザ答えるわけないでしょ？ 一応、少ない手札であなた方を相手にするわけですから」

もう一度ニコツと微笑み、「下手に手札は見せられませんかよ」と、続けた。

当然の答えに、デイクシーも表情を歪める。どの様にして幻覚を見せられたのか、どれ位幻覚を見ていたのか、何処までが幻覚だったのか、色々と聞きたい事はあった。だが、どの問いにもツヴァルは答えないだろう。

渋い表情をするデイクシーは、自らを落ち着ける様に大きく息を吸い込んだ。その行動を見据えるツヴァルは、右手に持った短刀を回しながら聞く。

「撤退しないんですか？」

「ふざけるな！ 幻覚などと言う姑息な手を使って」

「姑息じゃないですよ。一応、発動条件なども色々ありますから。」

まあ、あなた方相手なら、いつでも使えますけど、流石に何度も使えるほど便利じゃないんで」

何処か余裕の見えるツヴァルに、苛立つデイクシーは口元に薄らと笑みを浮かべ、ゆっくりと空へと舞い上がる。暖かな風が吹き荒れ、土煙がツヴァルを覆う。突風に煽られるツヴァルの赤紫の髪が揺れる。顔を覆う様に左腕を上げたツヴァルは、目を細め空へと舞い上がるデイクシーの姿を見据えた。

空を見据えれば翼を羽ばたかせるツヴァルが、何処から出したのか分からないが、金色の鏢の大剣を振り上げていた。刃に刻まれた

龍の刻印が不気味な輝きを放ち、突如として風を呑み込む。異様な空気にツヴァアルも気付く。

「うわぁ……。何かやばくない」

「ああ。全く持ってヤバイな」

「ええ。正直……。ヘッ？」

突如、背後から聞こえた声に振り返ると、そこに見慣れた顔があった。老け顔に穏やかな目つき、灰色の短髪。その姿は正しくフォースト王国の国王、ブラストの姿だった。呆気に取られるツヴァアルは、少々の間を空けてから拳を震わせ、

「いつから居たんですか！」

怒声を響かせると、ブラストは明るく笑い「まあまあ」と両手を胸の前に出し、ツヴァアルを落ち着かせる。眉間にシワを寄せるツヴァアルは、小さく深呼吸を繰り返し、落ち着きを取り戻してからもう一度問う。

「いつから、居たんですか？ こ・く・お・う・様」

「ん〜っ。やけに嫌味っぽい言い方だが、何か不服なのかな？ 將軍」

「言っておきますけど、僕はあなたが来るまでの時間稼ぎに過ぎないんです。来てたなら、とっとと変わってください。僕の力は分かっているでしょ？」

やけに怒りの籠ったツヴァアルの声に、「アハハハッ。わりいな。將軍」と明るく言い放つブラストに、小さくため息を吐いた。

ツヴァアルにとってブラストは苦手な存在だった。国王のくせに適当で、いつも城を抜け出す。そんな奴が何で国王をやっているのか

と、昔から思っていた。幼い頃からずっと。自分だつたら、もつと上手く国を纏める事が出来ると、思ったこともあった。部下となり、將軍の座を受け継いだ今なら、少しプラストが国王たるゆえんが分かる。彼ならどんな状況でも、何とかしてくれる、そんな期待が持てるからだ。

「後は、任せますよ」

先程までとは明らかに違う刺々しい口調でそう述べたツヴァルは、右手を軽く振りその場を後にする様に歩き出す。そんなツヴァルに「後は任せとけ」と、告げ、漆黒のボックスを素早く細身の刃へと変えた。

### 第113回 オリジナル

漆黒の翼が風を掻く。

龍の刻印の刻まれた剣が、突風を生み出し、周囲を激しい風音が包み込む。細い漆黒の刃の剣を地面に突き立てたブラストは、上空に渦巻く風を見据え静かに息を吐く。懐から取り出した一本の筒。その筒に付いたボタンを一つ押せば、筒が一瞬で槍へと変化する。

鼻歌混じりでその槍を地面に突き立て、更に腰にぶら下げた二本のナイフを取り出す。長さの違う二本のナイフを組み合わせ、何かを調整する様に刃に左手の人差し指を沿わせる。それを終えると、刃の長い方を下に向け地面に突き刺す。全ての準備を整えたのか、ゆっくりと伸びをすると、背後に佇むツヴァールの方へと体を向け、

「よし、ツヴァールいいぞ」

「いいぞって、何だよ。僕にどうしろって、言うんだ？」

「下ろせ」

「無茶言つな」

「フツ……第三十六代將軍は腰抜けなんだな」

馬鹿にする様な口振りに、ツヴァールが引き攣った笑みを浮かべる。

「それは、どう言う意味ですかね？ 返答次第では許しませんけど」

「言葉通りの意味だ。まあ、出来ないなら、俺がやるしか」

その言葉にツヴァールが表情を引き攣らせ、額に青筋を浮かべる。だが、落ち着いた様に小さなため息を吐くと、眉間にシワを寄せ呟く。

「何と言われても、無理なモノは無理です。大体、双牙で打ち落と

せば早いでしょ」  
「はあ〜っ」

馬鹿にした様なため息を吐き、首を振るブラストが、呆れた目をツヴァルに向けた。しかし、そのブラストを呆れた目で見据えるツヴァルは、右手で頭を押さえると、渋々と足を進める。

「自分でやってください」

「全く、使えないな」

「ウルサイ！ 僕は疲れてるんです！ 少しは自分で何とかしてください！」

怒声を響かせ、ツヴァルがその場を去る。その背中を見据えるブラストが、小さく笑う。

「相変わらずか……」

ボソツと呟き、地面に突き刺した二本のナイフを組み合わせた武器を手取る。これは、バルドの持つ双牙のオリジナル。まだリミッターも付いていない破壊力を重視した不安定なモノだ。

それ故、扱える者もおらず、製造者であるブラストですら、上手く扱う事が出来ない。それでも、オリジナルを使うのは、それ程の相手だからだった。小さく息を吐き出し、心を静めるブラストは、左足を踏み込み左手に握った双牙をゆっくりとディクシーの方へと向ける。右手を双牙に沿わせ、静かに引く。大量の風を集め形成された矢の先が、暴走する様に震える。

「クツ！ 大人しく……言う事を……聞け！」

右手を離すと、風の矢が鍔を震わせながらもディクシーへと向っ

て飛ぶ。だが、それと引き換えに、ブラストの体を重々しい衝撃が貫く。吹き飛ばない様に両足に力を込めるが、ブラストの上半身は大きく仰け反る。

一方、放たれた風の矢は、大きくデイクシーから逸れ消滅した。小さな舌打ちをして、上半身を起こすブラストは、もう一度双牙に右手を添える。

「今度は、真っ直ぐ飛んでくれよ」

双牙に言い聞かせる様に呟き、右手をゆっくりと引く。風が圧縮されもう一度矢が形成される。先程よりも、大きく強靱なモノが生まれた。鎌が大きく揺らぎ、狙いが定まらない。それでも、何とか狙いを定め、矢を放つ。衝撃に上半身が仰け反る。先程とは比べ物にならない衝撃に、ブラストの表情が僅かに引き攣る。

放たれた風の矢は、更に風を取り込み甲高い音を響かせた。その音にデイクシーも気付き、視線を落とす。刹那、迫り来る風の矢が僅かに顔の横を掠めた。頬が裂け血が弾ける。と、同時にデイクシーの口に笑みが浮かぶ。

「見つけたぞ！」

「ありゃ、見つかってしまったかな」

デイクシーの言葉におどけてみせるブラストが、双牙を地面に突き刺し、漆黒の刃の天翔姫を地面から抜く。これも、テイルの持つ天翔姫のオリジナルとなったものだ。刃の強度も、切れ味も改良版を凌ぐ。オリジナルの中では唯一ブラストが扱う事の出来るものだ。華麗に天翔姫を回し、漆黒の刃の先をデイクシーへと向けたブラストは、多少引き攣った笑みを浮かべながら述べる。

「キミとは以前にもあったね」

「忘れもしない。この翼の傷を！」  
「あゝあ。本当だ。酷い傷だね」

他人事の様な口振りのブラストだが、その翼の傷はブラストが付けたモノだった。その口振りが気に食わなかったのか、持っていた剣を乱暴に振り下ろすと、疾風が駆けブラストの体を襲う。だが、その風を断ち切る様にブラストが天翔姫を横一線に振り抜く。

無音で振り抜かれた刃が、疾風を完全に断ち切り、ブラストの灰色の髪が僅かに揺れただけだった。小さく吐息を落としたブラストは、落ち着いた目でデイクシーを見据える。両者の視線が交わり、その間を静かに風が流れる。

両者共に目を睨んだまま動かない。二人の間だけ、時が止まった様に静かだった。小さく短い呼吸を繰り返すブラストは、ゆっくりと右足を前に出す。下段に構えた天翔姫を更に低く構え、静かに息を吸う。その行動にデイクシーもゆっくりと握っていた剣を上段に構える。隙だらけの構えだが、上空に居るデイクシーにとって、それはどうでも良かった。空を飛べない種族が相手なのだから。

双方の対照的な構え。先に動いたのは デイクシーだ。漆黒の翼が大きく羽ばたき、刹那に無数の羽が刃となりブラストに向かって急降下する。その羽を見据えるブラストは、上半身を僅かに逸らすだけの動きで、全ての羽をかわした。

「随分と安易な攻撃をするね」

「フフフツ……安易だと？ 違うな。今のは単なる挨拶がわりだ。次は本気で行く」

「いやいや。俺としては、もう少しウォーミングアップを」  
「黙れ！」

翼を折りたたみ、ブラスト目掛けて急降下するデイクシー。切っ先がブラストの胸に向かって伸びるが、それを天翔姫が右方向へと受

け流す。その瞬間に翼が広がり、突風を巻き上げデイクシーの体は上空へと戻る。巻き上がった土煙がブラストを包み込み、デイクシーはそこに向ってもう一度鋭い羽を飛ばす。

しかし、それが土煙に入る前に、全てを呑み込む様な大きな竜巻が起きた。土煙を呑み込み、大きく揺らぐ竜巻がデイクシーに迫る。

「チツ……小ざかしい！」

デイクシーが手に持った剣を一振りすると、竜巻が裂け土煙が散布する。そよ風がデイクシーの頬を撫でる。視線の先には薄らと見えるブラストの姿。ブラストからもデイクシーの姿は土煙の向うに薄らと見えていた。手には渦浪尖。その矛先は三つに別れ、その先に小さな風が渦巻いていた。

この渦浪尖も、カシオが持つモノのオリジナルで、やはり他のオリジナルと同じく扱いが難しいモノとなっている。その代償として、現在ブラストの右腕は血に塗れていた。

「ハア…ハア……。コイツが一番性質が悪いな」

渦浪尖の矛先を見据えながら、そうぼやいたブラストは、引き攣った笑みを浮かべる。

右腕を震わせながら、渦浪尖を地面へと突き刺したブラストは、左手で天翔姫を握りデイクシーに切っ先を向ける。その行動に、デイクシーも切っ先をブラストに向け、「決着をつけよう」と呟き、もう一度急降下する。



## 第114回 探り合い

激しい衝撃が周囲に広がる。

爆音と爆風。舞い上がる土煙と瓦礫。土煙はデイクシーの両翼により、すぐさま掻き消され、刃を交える二人の姿がすぐに映し出される。ひび割れた地面に僅かに両足を減り込ませるブラストが、デイクシーの振り下ろした剣を弾く。

弾かれたデイクシーは、もう一度空へと舞い上がり、体勢を整える。

一方のブラストも地面に減り込んだ足を抜き、小さなため息混じりに空を見上げる。両翼を大きく羽ばたかせるデイクシーは、不敵な笑みを浮かべブラストを見下ろす。両者の視線がぶつかり合う。静かに流れる風が二人の衣服を揺らす。

右手に握られた漆黒の天翔姫を下ろしたブラストは、小さくため息を吐くと、天翔姫を肩に担ぐ。

「お前、ずるくないか？」

「お前は、戦争で奇襲をされてずるいと言うのか？　それが、戦略と言っやつだろ？」

「まあ、そうだが、これは戦争じゃない。俺とお前の一騎打ちじゃないか？　同じ条件じゃなきゃ不公平だろ？」

ブラストの言い分を笑いのけるデイクシーは、静かな口調で問う。

「不公平？　戦いは常に自分が優位に立って行くモノだ」

「あらら。優位な状態に立ってないと戦えないって、臆病者の考え方じゃないかな？」

「安易な挑発だな。言っておくが、私は挑発に乗るつもりは無い」

堂々とした態度のデイクシーが、もう一度不適に笑う。困った様に頬を掻くブラストは、天翔姫をボックスへと戻し、地面に突き立てた双牙を手に取り分解する。それをボックスへと組み合わせる。鼻歌混じりのブラストはカチカチと機械音を響かせ、試行錯誤しながら一本の大剣を作り出す。

双牙が鏢となり、何やら不気味な印象を漂わせるその大剣に、デイクシーも警戒心を強める。そんなデイクシーを見上げ、ブラストが呟く。

「さて、それじゃあ、降りて来て貰おうかな」

「降ろせるのもなら、降ろしてみろ」

「ああ。そうするつもりだよ」

左手で大剣を持ち上げたブラストは、切っ先をデイクシーに向け右手を鏢に添える。そして、矢を射る様に右手を引くと、切っ先に風が渦巻く。甲高い風音が周囲に響き、突風が吹き荒れる。

狙いを定め、摺り足で右足を踏み込むと、静かに右手を広げた。

刹那、切っ先に渦巻く風が放たれ、ブラストが衝撃で吹き飛ばす。風が鋭い矢と化し、風を取り込みながら、デイクシーへと迫る。

「この程度で、私を地面に降ろすつもりか！」

振り上げた刃が風を取り込む。金色の鏢が輝き、大きな刃が振り下ろされた。両方の風がぶつかり合い、衝撃と爆風が広がる。大地が揺れ、衝撃が地面を僅かに砕いた。

爆風を直に受けたであろうデイクシーは、衝撃で地上へと叩き付けられていた。額から流れる血が、シトシトと地面に落ち、ゆっくりと立ち上がる。口から漏れる吐息が荒々しい。

公言通り、地上へとデイクシーを降ろしたブラストは、天翔姫と双牙を組み合わせた大剣を構え、

「さて、これでいいかな？ 地上へと引き摺り下ろしたぞ」  
「ふざける…… テメエが降ろしたわけじゃねえだろ」  
「まあ、どつちでも良いけど、これで公平な戦いが出来るな」  
「公平？ んなわけねえだろ。この翼がある以上、何度でも飛べるんだよ」

両翼を羽ばたかせ空へと舞い上がるデイクシーを見据え、「あーあ」と呟いたブラストは、小さくため息を吐いた。

「懲りないな」

「お前に何度もあれを撃たせると思つか？」

「やっぱり、撃たせてもらえないかな？」

ため息混じりにそう呟いたブラストに、デイクシーがその漆黒の翼を広げ、無数の羽を飛ばす。刃の様に鋭い羽が勢い良くブラストへと飛ぶ。向かい来る羽を見据えるブラストは、右手で鏢となる双牙の短い刃のナイフを抜き、逆手でそれを振るう。澄んだ金属音が聞こえ、漆黒の羽が地上へと散る。小さく息を吐いたブラストは、ナイフを戻しゆっくりとデイクシーを見上げた。

「もう止めないか？ こう言うチマチマした攻防は？」

「何だ？ 持久戦は嫌いか？」

「持久戦……か。俺が言っているのは、そう言う腹の探り合いを止めようって事なんだがね」

ブラストはそう問い、首を左右に振る。

お互い探り合う様に言葉を交わすが、どちらも隙を一切見せない。摺り足で横移動するブラストは、大剣の切っ先で地面を抉る。

僅かに舞う土煙。

静かに吹き抜ける風。

ブラストの足音に、デイクシーの翼の羽ばたき。

静かに時が過ぎる。穏やかな時が。

たった数分の時が流れ、また動きだす。激しい風を巻き上げ、碎石と土煙が空中を舞う。

デイクシーの再度行った急降下。衝撃が瞬く間に周囲に土煙を広げ、爆音がこだまする。後方に飛び退いたブラストの姿が土煙に吞まれ、直後に金属音が響く。一度ではなく何度も。土煙の中で、二人の攻防が行われているのだろう。

衝撃が幾度となく広がり、土煙の中からブラストがはじき出される。それに数秒遅れ、土煙から飛び出すデイクシーが右手に握った大剣を横一線に振り抜く。激しい金属音が響き、火花が散る。

凄まじい衝撃がブラストの両腕を襲い、足が地面から離れ後方へと吹き飛ぶ。それでも、体勢を崩す事の無いブラストは、すぐに両足を地に着き刃を構えなおす。

何度も刃を振るうが、攻めきる事が出来ず、苛立つデイクシーはその身体を徐々に変貌させていく。黒髪が刺々しく、目の色が赤く、漆黒の翼はより一層大きく膨れ上がる。

「それが、魔獣化か……。随分と様変わりして……」

「変わったのは姿だけじゃ　ない!」

デイクシーがブラストの視界から一瞬で消える。残されたのは土煙と爆風のみ。だが、ブラストはすぐに状況を判断し、大剣の鏢から刃の短いナイフを抜く。それに遅れ降り注ぐ漆黒の羽。何とかナイフでそれを捌くが、それは先程のモノよりも数段スピードアップしており、徐々にブラストの動きが鈍くなる。

「くっ!」

「これで、終わりだ!」

デイクシーの声が高らかに聞こえ、甲高い風切り音が周囲に響く。視線を上げれば見える。急降下してくるデイクシーの姿。羽を捌くだけで手一杯のブラストに、急降下してくるデイクシーをとめる術は無く。直撃を受ける。

激しい爆音。砕けた地面がその破壊力をものごとたり、飛び散る碎石は雨の雫の様に地上に降りたつた。乾いた音だけが周囲に聞こえ、土煙の中からデイクシーが飛び立つ。

「くふふふつ…どうした？いつもの様にかわさないのか？」

皮肉った言葉に、土煙の中で瓦礫の崩れる音が聞こえた。

「……イツ！派手にやつてくれるな……」

瓦礫の崩れる音に遅れ聞こえたブラストの声に、デイクシーが更に含みをきかせた笑いを響かせる。

「くふつ……くふふふつ」

「随分余裕だな」

「当然だろ。今、私を貴様は捉える事が出来ないのだからだ」

自信に満ち溢れた言葉にブラストも小さく笑い声を漏らす。その笑い声が聞こえたのか、デイクシーは眉間にシワを寄せる。土煙が徐々に晴れ、鮮血に染まる地面があらわとなった。そこに佇むブラストの手に握られるは巨大なボーガン。ボックスの両端に長さの異なる二本のナイフ。そのボックスを縦に貫く様に伸びる一本の槍。その先を集まるのは光の粒子。

その瞬間に危険を察知するデイクシーだが、それよりも先にブラストの笑みと同時に収縮された光が放たれた。

## 第114回 探り合い（後書き）

大分更新が遅れました。申し訳ありません。

次回からは早く更新できる様頑張りたいと思います。

…… 毎度同じ事を言って…… 本当に申し訳ないと思ってます。

楽しみにしている読者の皆様には、ご迷惑お掛けしてはいますが、  
今後は頑張って更新していきたいと思えます。

## 第115回 限界

眩い光が空へと撃ちあがった。

地上では凄まじい衝撃が残り、ブラストを中心に半径五メートル程、地面が陥没していた。埃の様に土煙が僅かに舞い、ブラストの手に握られた大型ボーガンから微かに煙が昇る。

小さく長く息を吐くブラストは、ゆっくりと空へと視線を向けた。そこにデイクシーの姿は無く、ぽっかりと穴の開いた雲だけが浮かんで見える。

両肩を揺らすブラストは、構えていた大型ボーガンを下ろし、ここで初めて苦しそうな表情を見せた。どれ程までの衝撃がブラストを襲ったのかは定かじやないが、相当疲労しているのは見て取れる。それだけの体力を消耗したのだろう。

そんな疲労状態のブラストだが、すぐにボーガンを構え直し、ゆっくりと笑みを浮かべる。

「上手く……かわしたみたいだな……」

言葉を向けたのは、瓦礫の下から這い出たデイクシーにだった。殆ど無傷のデイクシーだが、背中の漆黒の翼が片方消え去っていた。それは、間違いなく先程のブラストの放ったモノが、抉っていったのだろう。

片翼を失ったデイクシーにもう空を飛ぶ手段はなく、これでブラストはようやくデイクシーと互角に渡り合える。そのはずだったが、今のブラストにデイクシーと互角にやりあう力は残っていない。それ程疲れ切っていた。

ブラストの状態を知ってか知らずか、デイクシーはゆっくりと大剣を構えなおす。

「これで、私と対等だと思うな」  
「そんな事……思っちゃいないさ。コッチが……不利なのは……変わらないからな」

途切れ途切れの言葉に、デイクシーが不適に笑う。

「クフフフツ……。お前にもう、私と戦う力は無いな」

「さあ……どうかな？」

「強がるな。お前の状況は分かっている」

不適に笑みを浮かべるデイクシーは、ゆつくりと右手の大剣の切っ先をブラストの方へと向ける。その先を見据えるブラストは、ポীগンを分解し、天翔姫を刀身の細い剣へと変えて構えた。

「安心しろ……俺は、何事に置いても、手を抜く事はしない」

「私も手を抜く気は無い。全て全力で行く」

両者の視線が交錯し、静かに風が流れる。両者とも表情は変わらず、ゆつくりと足を動かす。円を描く様に右へと歩む両者は、一定の距離を保ったまま静かに睨み合う。様子を窺う様な動きの両者。その二人が同時に足を止め、刃を構えなおす。

「どうした？ 掛かって来ないのか？」

「俺はレディーファーストなんぞね」

冗談ぽく笑みを浮かべるブラストを、デイクシーは小さく鼻で笑う。

「貴様、それを本気で言ってるのか？」

「さあねえ。何処まで本気かは、キミの判断に任せるよ」



両者共、腹を探りあうが、一切隙など見せない。それだけ、集中していた。

意識を集中する二人の内、先に動き出したのはデイクシーの方だった。右手に握った大剣で地面を裂き、土煙を巻き上げ自らの姿を消す。その刹那に、ブラストも動き出す。だが、その手に握られたのは天翔姫ではなく、二本の長さの異なるナイフだった。右手に刃の長いナイフを逆手に握り、左手に刃の短いナイフを普通に握る。

低い姿勢で地を駆けるブラストが土煙の中へ入ると同時に、金属音が響き土煙の中で火花が散る。それに遅れて、ブラストとデイクシーが土煙から飛び出す。

「チッ！」

「女性が舌打ちは良くないねえ」

「貴様にとやかく言われる筋合いは無い！」

デイクシーがブラストへと迫り、鋭い一撃を横一線に見舞う。それを右手に握ったナイフで受け止めると、左手に握ったナイフを突き出す。その刃がデイクシーの右頬を掠め、鮮血が散る。二人の視線が交錯し、両者が刃を弾き合い距離をおく。

疲弊するブラストは肩を大きく揺らし、荒々しい呼吸を繰り返す。それでも、それを感じさせぬ強気な態度で口を開く。

「太刀筋が、雑じゃないか？」

「貴様こそ、大分動きが鈍いじゃないか」

「いやはや……。言ってくれるじゃないか」

引き攀った笑みを浮かべるブラストが、地を蹴りデイクシーとの距離を詰める。だが、間合いにブラストが入ると同時に、デイクシーの大剣が大気を裂き、金属音を響かせブラストの体を横へと弾い

た。

衝撃が全身を襲い、ブラストの体が地面を二・三度バウンドする。碎石と土煙が舞い、ブラストの体が地面を抉っていた。

「イツ……」

ゆっくりと体を起すブラストは、血にまみれた右腕を見据える。

「あらら……これは、痛々しい……」

「クフフフツ……。どうやら、もう踏ん張る力も無いらしいな」

「いやいや。さっきのは単なる油断だよ」

「油断？ なら、もう一度吹っ飛ばしてやるよ」

デイクシーが間合いを詰め、大剣を振り抜く。それをかわそうとしたが、足に力が入らず仕方なく右手のナイフで刃を防ぐ。腕に押し掛かる衝撃、それがブラストの体を弾き飛ばした。いつもなら踏ん張ることが出来たが、今のブラストにそんな余力は残されていない。

軽々と弾かれたブラストは、体を地面に何度も激しくぶつけ、ようやく勢いを止める。体中擦り傷だらけで、血でまみれていた。

「イツ……」

「クフフフツ。やはり、お前に私の一撃を耐える力はない」

「は、ハハハ……その様だね。けど、負ける気は無いね」

体を起しそう答えたブラストは、いつの間にか右手に天翔姫を、左手に双牙を握っていた。そして、デイクシーと視線が交わると、同時に双牙から風の矢が放たれる。一瞬の事だった。構えすら無く放たれた無数の矢が幾度と無くデイクシーの体に直撃する。血飛沫が舞い、デイクシーの体が地面を転がった。

深く呼吸をするブラストは双牙をもう一度構え直し、それに右手に持った天翔姫を添える

「悪いな……。不意打ちなんて真似は、好きじゃないんだがな」  
「くっ……」

口角から血を流すデイクシーがゆっくりと体を起す。体には殆ど傷が無いが、デイクシーの足元はふら付いていた。

「やっぱり、至近距離だと鋭さは無いみたいだね」

「くっ……貴様！」

「そんな目するな。別に手を抜いたわけじゃないさ」

ブラストが笑ってみせると、デイクシーが「黙れ」と叫んだ。苦笑するブラストに対し、鋭い眼差しを向けるデイクシー。先程の双牙での攻撃が手を抜いたものだと思ったのだろう。だが、今のブラストに手を抜いて戦うほどの余裕は無く、先程の双牙での攻撃も全力で行ったものだった。

思ったよりもダメージの薄いデイクシーは、切っ先をブラストの方に向け大剣を構える。二人の視線が交錯すると同時に、両者が動き出す。

大剣を構え駆け出すデイクシーに、双牙に添えた天翔姫の切っ先から風の矢を無数に放つブラスト。一撃一撃が鋭く徐々に勢いを増す風の矢を、デイクシーは大剣で弾きながらブラストへと迫る。

「その程度で　ッ！」

デイクシーが動きを止めバックステップでその場を離れた。漆黒の髪が僅かに宙に舞い、ブラストの右手が大きく振りぬかれていた。

「あと半歩……」

「チツ！」

「舌打ちは、良くないな」

舌打ちしたディクシーに対し、右足を踏み込み、双牙を振るう。

思わぬ連撃にディクシーのバランスが崩れ、双牙の切っ先が右肩を掠める。鮮血が飛び、ディクシーが素早くその場を退く。

二人の距離が離れ、お互い荒い息遣いを続ける。やがてその息遣いも静まり、冷たい風が吹き抜けた。

## 第116回 甘過ぎ

流れる風が土煙を巻き上げると、両者が同時に地を蹴った。

大剣を振りかぶったディクシーが風を巻き込みながら大剣を振り抜く。

「くっ！」

ギリギリで足を止め、上半身を仰け反らせ刃を交わすブラストは、そのままの体勢で双牙から素早く矢を放つ。衝撃にブラストの体が地面を転がり、放たれた風の矢はディクシーの大剣をかち上げ、大きく仰け反らせる。

「ッ！」

表情を引き攣らせるディクシー。その視界に、体勢を整えたブラストの姿が映る。

体勢を戻そうと下半身に力を込めると、振り上がった大剣を力任せに振り下ろす。地面が砕け、土煙と碎石が舞い上がる。刹那、土煙の向うから無数の風の矢が飛んでくる。その矢がディクシーの皮膚を掠め、鮮血を僅かに飛び散らせる。

「くっ！ ふざけ」

「まだまだ続くぞ」

土煙の中から飛び出したブラストがそう言い、漆黒の刃を振り抜く。その素早い太刀捌きに、遅れて反応するディクシーは、無理に体を捻り刃をかわす。刃が空を切り、ブラストはすぐさまその場を離れ、ディクシーもすぐに体勢を整える。

二人の間に舞う土煙が薄れ、穏やかな風も静まり返った。向い合う二人の肩が大きく揺れる。

苦しそうな表情すら見せないブラストだが、体は既に限界だった。膝はいつ地に落ちてもおかしくない。それでも倒れないのは、ブラストの精神的な強さからだろう。

足を止めたまま動き出さない二人。静かに時だけが過ぎる。

ゆっくりと息を吐くブラストは、右手に握った天翔姫を双牙に添え切っ先をデイクシーへと向けた。

「そろそろ……決着を、着けたい……所だけどね」

途切れ途切れの声に、デイクシーが不適に笑う。

「貴様も、もう限界と、言った所か。クフフフツ」

不適な笑い声を響かせるデイクシーだが、その言葉にブラストは確信する。デイクシーも限界なのだ。デイクシーは、自らがその事を告げた事に気付いてなく、ただ余裕たっぷり顔を見せていた。デイクシーに気付かれぬ様に笑ったブラストは、双牙に添えた天翔姫の切っ先に風を集める。

「貴様はバカの一つ覚えの様に、同じことを繰り返すな」

「さあてね……それは、どうか」

天翔姫の切っ先から、鋭い風の矢が放たれる。その矢はデイクシーではなく、デイクシーの足元の地面を直撃し、破壊した。地面が砕けバランスを崩すデイクシー。土煙が視界を覆い、更に状況は悪くなる。

「くっ！ 姑息な！」

「悪いが……俺は、余裕が無くてな」

素早く天翔姫をボックスに戻したブラストは、もう一度三つの武器を組み合わせ、大型ボーガンを作り出す。それを両手で握り、照準を確りと定める。光が槍の先に集まり、一瞬の後放たれた。衝撃がブラストの体を後方へと吹き飛ばし、光が土煙の中へと消えた。その瞬間、土煙が衝撃に散布し、デイクシーの体が弾き飛ぶ。

体を何度か地面に打ち付けたデイクシーは、勢いがとまると同時に吐血した。一瞬の出来事で、デイクシーには何が起こったのかわからなかったのだらう。蹲ったまま動き出すまで時間がかった。

一方で、衝撃に吹き飛んだブラストも蹲ったまま動かない。全身に走る痛み動く事が出来なかった。

「うつ……くつ……」

最初に起き上がったのはブラスト。額から流れる血。それを拭い、静かに息を吐きデイクシーを見据える。

血を吐くデイクシーは、僅かに上半身を起き上がらせると、剣を地面に突き立てて立ち上がった。鋭い眼差しをブラストに向けたまま。

視線が交錯し、デイクシーが地面から剣を抜き、ブラストはボーガンから渦浪尖を抜き、大剣へと形を変えた。左手に渦浪尖、右手に天翔姫と双牙を組み合わせた大剣。体力が限界のブラストにとって、両方を使って戦うという選択肢は無く、渦浪尖を地面に突き刺しゆっくりと大剣を構える。

小さく呼吸を整えるブラストは、右足を踏み込むとそのままの勢いで地を駆けた。その動き出しにデイクシーも僅かに反応を示し、大剣を振り上げる。刃に集まる風が高音の音を響かせる。

「これで……最後だ！」

振り上げた大剣を振り下ろす。刹那、ブラストも大剣を切り上げる。両者の刃が対照的な軌道を描き、ぶつかり合った。澄んだ金属音に遅れ、何かが碎ける鈍い音が聞こえる。宙を舞う金属片が回転し地面へと突き刺さった。

振り下ろされた刃と、振り上げられた刃。首筋に伸びた切っ先。真ん中から碎けた刃は地面を向き、ゆっくりとその手から零れ落ちた。静かに流れる風が、両者の髪を優しくなで、静けさが周囲を包む。

「はあ……はあ……」

「くっ……ふう……。トドメを刺せ」

首筋に向けられた刃を見据え、デイクシーがそう呟く。足元に転がるのは、真ん中から碎けた金色の鏢の剣。首筋に向けた切っ先をゆっくりと下ろすブラストは、息を整え静かに答える。

「悪いが、無駄な殺生はしない……」

「ふっ……無駄な殺生はしないだと？　なら、どうする。このまま、私を逃がすのか？」

デイクシーの言葉に耳を貸さず、背を向けたブラストは天翔姫をボツクスに戻し、双牙の二本のナイフを仕舞う。それから、地面に突き刺した渦浪尖を筒へと戻し、ゆっくりとした足取りで城へと向かった。

その際、デイクシーの方に僅かに顔を向け、

「俺の命がほしいなら、いつでも相手をしてやるからな」

と、一言残して去った。残されたデイクシーは、拳を握ったが力



が抜け、そのまま仰向けに倒れ空を見上げた。

城門を潜ったブラストは、その瞬間にその場に倒れた。体がこれ以上動かず、立つ事すら出来ない。そんなブラストの横に立つのは、赤紫の髪を揺らすツヴァル。少し呆れた様な表情を見せ、倒れるブラストを見下ろす。

「いいんですか？ 見逃しちゃって。また、襲ってきますよ」

「その時は、返り討ちにするさ……」

「その状況で言われても、説得力無いんですけど」

「ああ……わりい……。少し休む。後は、任せるぞ」

「はいはい。分かってますよ」

ため息を吐いたツヴァルは、横たわるブラストを軽く足蹴にして、兵士達に対し、

「喜ぶのは後だ！ 全員一度城に戻って、守りを固める。まだ、安心は出来ないからな」

ツヴァルの声に兵士達が大声で返事を返し、城へと引き返していく。静かにそれを見守るツヴァルは、横たわるディクシーの姿を監視し、

「甘過ぎですよ……ブラスト様は……」

小さく呟いた。そして、ふとクローゼルの事を思い出す。

「そう言えば……あいつ逃がしたっけ……大丈夫かな？ まさか、大軍率いて来ないだろうな……」

僅かな不安を抱きながら、ツヴァルはブラストに代わって指揮と  
とった。

第116回 甘過ぎ(後書き)

どうも、作者の崎浜秀です。

今年は、これが最後の更新になると思います。

中々更新できない日々が続く、読者の方には迷惑をお掛けして申し訳ありません。来年はもっと技術を磨いて頑張りたいと思いますので、来年もよろしく願います。

## 第117回 兄弟

激しい爆音が轟き、爆風と土煙が周囲に広がる。

ここはフォースト王国都市ブルドライの目と鼻の先。フォースト王国軍と魔獣達の壮絶な戦いが繰り広げられる場所とは、全く逆の場所ではあるが。

そんな戦いとは無縁の場所で飛び交う咆哮と一つの叫び声。首にぶら下げたゴーグルを激しく揺らす青年が、その咆哮から逃げ惑う。

青白い光り、紅蓮の閃光、白銀の風。三種類の激しい砲撃が青年の後方で轟き、爆風と土煙が青年の背中を押す。

「うおおおっ！」

叫び声を上げる青年の深い蒼の髪が激しく揺れ、地面を二・三度転げ、すぐに立ち上がり、

「やめ、ヤメロ！ 俺は、今、お前と」

と、叫ぶがそれを掻き消す爆音が響き、爆風がもう一度彼の体を吹き飛ばす。土煙が大量に舞い上がり、彼の体が二度、三度地面を転げ大木に額から衝突する。鈍い音が僅かに聞こえ、青年の体が地面にうつ伏せに倒れたまま動かなくなった。

衝撃で大木には亀裂が走り、青年の額からは血が溢れている。地面に真っ赤な血溜まりが出来る頃、目を開いた青年は静かに体を起す。僅かに眉間にシワを寄せ、ゆっくりと息を吐く。刹那、雷鳴が轟き、青白い閃光が青年の背中へと迫る。

「……いい加減に　しろ！」

青年が一本の筒を出す。それは薄い青と濃い蒼が混ざり合った複雑な色の筒だった。筒の表面に三つのボタンが備え付けられており、青年の指が素早くそのボタンの一つを押す。すると、筒が突如長く伸び、その先から色鮮やかな蒼い刃が現れる。

一瞬にして現れた一本の槍を構え、素早く閃光へと突きを見舞う。眩い輝きが槍の先端に集まり、激しい雷撃と衝撃波が空中に広がり、先程衝突した大木が音を立てて折れ曲がる。

静かに息を吐き、槍を下ろす。三つに分かれた刃を地面へと向け、首からぶら下げたひび割れたゴーグルを額へと掛ける。特に意味のある行動ではなかったが、青年の表情は一変し、鋭い眼差しで正面を真っ直ぐに見据える。

「言っておくけど、俺だって怒る時は怒る。今、お前の相手をしてる暇は無いつて、言ってるだろ。いい加減、邪魔ばかりするのはやめろ！ 弟だからって、加減はしないからな」

早口でそう述べる青年に、大きな銃口の奇妙なライフルを構える少年が、背中に背負ったカバンから拳ほどの大きさの赤い玉を取り出す。

「俺は、貴様を兄と思った事は一度も無い」

「んなつ！ グライブ！ お前、実の兄貴にそれは無いだろ！ 俺はお前の事を」

「黙れ！ お前は、母の仇……それだけだ！ カシオ！」

グライブと呼ばれた少年は手に持った赤い玉をライフルへと入れ、大きな銃口をカシオの方へと向け静かに引き金を引く。

紅蓮の閃光が空を裂きカシオに迫る。弾丸は然程早くは無い。どちらかと言えば、普通の弾丸に比べて遅い位だが、カシオはそれをかわす事が出来ず、正面から弾丸を受けた。

爆音が響き、土煙と共に火柱が昇る。衝撃が熱風を運び、グライブの黒みの強い蒼髪が揺れ、鋭い切れ長の目の奥に見える淡い黒の瞳は微動だにせず火柱を見据える。そして、ゆっくりと背負った力バンから黄色の玉を取り出す。

「……」

無言でライフルに玉を入れ、銃口を火柱の方へと向ける。

「貴様が、あの程度でくたばるなどとは思っていない。とつと姿を現したらどうだ？」

グライブが声を上げると、突如火柱が縦に割れ、黒煙だけを残し消滅する。その黒煙の向うに佇むカシオの手に握られた槍、渦浪尖の切っ先が地面を砕いていた。鮮やかな蒼い刃の先が、僅かに赤く染まり、その場の空気に溶け込むように、また元の蒼さへと戻る。

静けさが周囲を支配し、両者の間に流れる空気が張り詰める。流れる風に二人の髪が揺れ、草木が観衆の様にザワメキ声を上げる。

向けられた銃口を見据えるカシオ。

引き金に指をかけるグライブ。

二人の視線が交わり、時は動き出す。咆哮と共に。

放たれた弾丸。走り出すカシオ。蒼い閃光が空を裂き、瞬く間に衝撃がカシオを襲う。

「くっ！」

咄嗟に渦浪尖で体を庇ったが、凄まじい衝撃に体は弾かれた。体勢が僅かに崩れたカシオに、グライブは続け様にカバンから取り出した青い玉をライフルへと入れ、引き金を引く。乾いた発砲音に遅れ、弾丸が銃口から放たれる。だが、弾丸は目で追う事が出来ず、

音もなくカシオの両足に着弾するが、痛みは無く、血が出る事も無い。

見た目では何も起っていない様に見えるが、カシオの体には異変が起きていた。

「くっ！ ま、また……」

異変に戸惑うカシオに、ゆっくりとした足取りでグライブが近づく。手には黄色の玉が握られ、不敵な笑みをカシオに向ける。

上半身を激しく動かすカシオは、グライブを睨み付け口を開く。

「さつきも、これを使ったんだな……卑怯だぞ！ 動きを封じるなんて！ それでも、男か！」

カシオの言葉を鼻で笑ったグライブが、玉を入れたライフルの銃口を、ゆっくりとカシオの額へとむける。その距離は二メートル程。渦浪尖がギリギリ届かない距離に立ち、引き金に指をかける。全てがグライブの思惑通りだった。初手からこの状況に持っていくまで、カシオの動き、タイミング、そして、運すらグライブに味方していた。

まず、この乾いた空気が、グライブの持つライフルの二つの玉を強化していた。

グライブの使うライフルの玉は主に三種類。

一つは赤い玉、炎弾。名の如く、当たれば烈火の如く燃え上がり、たちまち空高く火柱を上げる。発射速度は三種類の中で一番遅く、正直使い勝手はあまり良くない。

二つ目が黄色い玉、閃弾。雷撃を纏う弾丸は、雷火の如く大気を裂き、雷鳴と共に全てを裂く。発射速度は三種類の中で最も早く、青白い閃光を瞬かせる事からその名が付けられた。グライブが一番多用する玉だ。

三つ目は青い玉、硬弾。発砲する熱で無色透明に変化する。故に相手に気付かれる事無く着弾する事が出来る。ただし、威力は無く特殊な液体を相手に付着させる事により、筋肉を硬直させる。これにより、現在カシオは両足の動きを封じられているのだ。

乾いた空気により火力を強化された炎弾と、発射速度の強化された閃弾。そして、この二つを確実に当てるための硬弾。どの玉をいつ撃つのか緻密に計算されたグライブの策により、拘束されたカシオ。

向けられた銃口を見据えるカシオに、不適に笑うグライブは、引き金に指をかけ、長年の悲願に口を開く。

「これで……全てが」

「ウオオオッ！」

「？」

「ッ！」

突然轟く遠吠えに、カシオは首を傾げ、グライブは危険を察知し、遠吠えのする方へと体を向ける。両足の動きを封じられるカシオの正面。そこに轟く一つの影。細く長い体つき。腕は長く、ユラユラと僅かに揺れる。漂う殺気が、肌を刺す様に刺激し、カシオとグライブの全身の毛を逆立てる。

ようやく、その殺気に気付くカシオだが、その場を動く事が出来ず、ただ正面の影を睨みつけ、右手にもつ渦浪尖を静かに構える。

一方で、グライブも、その右手のライフルの銃口をその影へと向け、様子を窺う様にゆっくりと足を動かす。

「ふうーっ！ ふぐうーっ！ うぐぐぐうー！」

言葉にならない呻き声を上げるその影に、銃口を向けるグライブは、その引き金をゆっくりと引く。響き渡る轟音に遅れ、蒼い閃光



が空を裂く。だが、閃光はその影に直撃する前に風を切る音が聞こえると突如消え、遙か上空で爆音と衝撃を広げた。

「なっ、なにを……」

驚くグライブは背中のカバンから赤い玉を取り出し、ライフルへと詰める。そして、素早く影に向け引き金を引く。乾いた破裂音と共に放たれる赤い玉。相変わらずの発射速度だが、それもまた風を切る音と共に上空へと打ち上がり、爆音と紅蓮の柱を吹き荒らし、消滅した。

## 第118回 アリア

空から降り注ぐ火の粉。

何が起こったのか分からず驚くグライブは、青い玉を取り出しライフルに詰める。

これなら、絶対に直撃できる。そう確信して 引き金を引く。

乾いた発砲音。

遅れて聞こえる風を切る音。

発射されると同時に透明に変わった玉が、どうなったのかは分からないが、グライブはすぐに赤い玉を詰め、引き金を引く。

しかし、結果は同じだった。

紅蓮の柱は空高くで吹き上がり、地上に火の粉だけを降り注いだ。

「な、何で……」

驚き肩を落とすグライブは、地面を見据え引き攣った笑みを浮かべる。だが、すぐに気持ちを切り替え、もう一度赤い玉をライフルに詰めた。その直後。

「グライブ！ 上だ！」

カシオの声が響き、グライブの顔が上がる。視線は先ほどまで化物がいた正面に向けられるが、そこに、奴の姿は 無い。そして、突如目の前に影が差し、視線を上げると同時に、グライブの頭は顔面から地面に叩きつけられた。

衝撃が広がり、地面が砕ける。碎石と土煙が僅かに舞い、激しい風がカシオの方まで届いた。

長くしなった腕。その先にある至って普通の手が、グライブの頭を掴み上げる。意識を失っているのか、動く様子の無いグライブの

体は、大きくしなりもう一度顔面から地面に叩きつけられた。

一瞬だけ見えた血塗れのグライブの顔に、カシオは目付きを鋭く変え、怒声を響かせた。

「やめる！ これ以上、ソイツに手を出すなら……俺は、テメエを許さねえ」

「ぐっ……ぐふふっ……貴様……コノ俺ヲ……十二魔獣ノ……クローゼルニ……勝テルト思ッテイルノカ？」

聞き取り難い濁った声だったが、その声はカシオに確り聞こえた。鋭い目付きで真っ直ぐにクローゼルを睨み、渦浪尖をゆつくりと構える。まだ両足は動かないが、それを悟られぬ様に強気な態度を保つ。

ゆつくりとグライブの頭から手を離れたクローゼル。その長い腕を地面に引き摺りながら、一步一步と歩みを進める。肌の上に薄らと見える鱗模様に、口から出し入れている長い舌。まるで蛇の様な動きをするクローゼルの両腕が、地をうねりながら地を這う。

その動きを見据えるカシオは、右手で渦浪尖を回すと、それを地面へと突き立てる。衝撃が広がり、爆風が吹き荒れ、地面が砕けた。土煙でカシオの姿はクローゼルの視界から消える。だが、クローゼルの目にはカシオの姿がくつきりと映し出されていた。

「ぐふふふ……ソレデ、目晦マシノツモリカ？」

地面を這う腕がゆつくりと持ち上がり、振り下ろす様に腕を振ると、土煙に向って一直線に腕が伸びる。そして、その腕がカシオの体を土煙の中から弾き飛ばす。体が地面を抉り、仰向けのまま動かなくなる。

額から血を流し、苦痛に表情を歪めるカシオ。今の一撃でようやく両足が動く様になり、ゆつくりと体を起す。だが、視点が揺らぐ。

顎を思いつきり殴られた所為だろう。

「くっ……ヤベエ……頭が……くらくらする……」

ボンヤリと正面を見据える。霞む視界に僅かにクローゼルの姿が映る。笑っているのか、両肩が大きく揺れている様に見えた。

呼吸が大きく乱れるカシオは、渦浪尖を地面に突き立て立ち上がると、ゆっくりと足の感覚を確かめる。足が動く事を確かめ、目の前のクローゼルの姿を確りと目視する為に、目を細める。霞む視界が僅かに鮮明に映り、そこに一人の少女が立ちふさがる。

「いやいやいや。探しますたよ。まさか、こんな所で戦闘してるとは思いませんでしたよ」

光沢の美しい甲冑を身に纏い、腰まで届く鮮やかな真紅の髪が揺れる。両手には鎖で繋がった二本の剣。一本は刀身は細く先端が鋭く尖った突きに特化した剣。もう一本は細い片刃の刀身で、極限まで薄く鋭く研ぎ澄まされた切る事に特化した剣。

特殊な二本の剣を構える少女は、朦朧とするカシオに笑顔を見せる。

全く面識の無いその少女を警戒するカシオは、渦浪尖を構え強気な視線を見せた。だが、そんなカシオに爽やかで透き通る様な可愛い笑顔を見せる少女は、体をカシオの方へと向け丁寧にお辞儀する。

「すみません。わたし、フォースト王国国王直属特別部隊参謀アリア・フラウリー。助太刀いたします」

僅かながら妙な喋り方のアリアは、ニコツと可愛らしく微笑み、鮮やかな真紅の髪を揺らして、クローゼルの方へと体を向けなおす。渦浪尖を構えていたカシオも、アリアがブラストの直属の部下だ

と聞き、その警戒を解き深く息を吐きながら、フラフラと二歩後退する。

「大丈夫ですか？ フラフラですが？ それに、あの化物はなんです？ もしかすと、あれが魔獣人ですか？」

「ああ……あれが、魔獣人。しかも、十二魔獣の一人だつてさ……いきなり、襲ってきたからビックリしたよ……。けど、アリアが来てくれて助かったよ。本当、やばい状況だったから……ちなみに、あつちで倒れてるのが、俺の弟で」

「結構、お喋り……なんですね？ あんまり、感心しませんよ……」

笑顔のアリアだが、全くカシオの方に顔を向けず、ただ武器を構え真っ直ぐにクローゼルを見据える。小さく息を吐いたカシオは、呼吸を整える為に何度か深呼吸を繰り返す。冷たい空気が肺に入り、腹から吐き出される生暖かな風。

ようやく膝の震えが止まり、視点が定まる。全く動く様子の無いクローゼル。先程までの笑みも失せ、真っ直ぐにアリアを見据える。一方のアリアも動く様子は無く、武器を構えたままジツとクローゼルを見据える。異様な静けさにカシオが息を呑むと、その緊張に気付いたのかアリアが静かに口を開く。

「私も出来るだけの事はしますが、ハッキリ言って勝てる確率は低いです。ですので、あなたが回復次第、二人で一気に攻め落とすます」

「それまで、君が一人で持ち堪えるのか？ 幾らなんでも無理があるだろ……君一人で、魔獣人を」

「見くびらないで欲しいです。こつ見えても、特別部隊の参謀。時間を稼ぐ戦術位幾らでも思いつきます」

「どんな戦術か言ってみるよ。返答によれば、俺も協力する」

フラフラながらも男らしくそう述べたカシオだが、アリアは顔を少しだけカシオの方に向け、冷やかな視線を送る。

「あす手まといですよ。それに、この戦術は私にすか出来ませんか」

「……あ、あのさ……さっきから気にはなってたんだけど、その喋り方おかしくないかな？ 所々で“し”を“す”って発音してるよね？」

「そうですか？ わたすは全くそう言う事を意識してませんね」

当然と言わんばかりの口調に、流石のカシオも言葉を失い、引き攣った笑みを浮かべた。

そんなカシオから視線をクローゼルへと戻したアリアは、右手に持った薄い刀身の剣をゆつくりと逆手に持ち替え、それを腰の高さに刃を逆さにして後ろ手で構える。

一方で、左手に持った鋭く尖った剣を前に突き出す様に構え、左足を踏み込み背筋を伸ばし腰を僅かに落とす。

緊迫した空気が更に張り詰め、クローゼルも静かに両腕を振り上げた。

「行きますよ……」

アリアはボソリと呟き、その場から消えた。

## 第119回 不死身

音も無く地を駆けるアリア。

逆手に握った薄く鋭い刃の先が時折地面に触れ、後塵を巻き上げる。胸の前に構えられた切っ先の尖った剣で、予備動作も無く鋭い突きを見舞う。クローゼルの胸を狙いましたが一撃だった。だが、刃は空を斬る。運が悪かった。刃が触れるその刹那に、クローゼルの足元の土が崩れたのだ。地面が崩れたことにより、クローゼルの体が大きく傾き、アリアの放った突きは脇の下をすり抜けてしまった。

しかし、一切表情を変えないアリアは、素早く突き出した手を引くと、逆手に握った剣を振り上げる。斜め下から一直線振り上げられた刃は、クローゼルの左脇腹から右肩へと抜けていった。

仰け反るクローゼル。

傷は浅いが派手に飛び散る血。

踏み込んだ右足に更に体重を乗せ、振り上げた逆手に握った剣をクローゼルの胸へと突き立てた。鈍い短音が聞こえ、血が放射線状に飛び散った。突き立てた刃が振動する。元々、斬る事に卓越した刃の為、振動に耐え切れず刃に僅かな亀裂が走った。

動きを止めたクローゼルの体から血が地面に広がる。アリアはそれを見届けると静かに息を吐き、クローゼルの胸から刃を抜いた。その衝撃は軽いものだったが、亀裂の走ったその刃はいとも簡単に折れてしまった。

「ぐう………開発部の連中め、もう少す強度を上げると言っておいたのに………」

ボソツとそう漏らすアリアは、二本の剣を回転させ華麗に鞘に収めた。

驚くカシオは口を開けたまま啞然としていた。あのクローゼルをこつも簡単に倒すとは思っていなかったからだ。

啞然とするカシオの方へと真紅の髪を揺らし体を向けたアリアは、小さく息を吐いた後ニコツと笑みを浮かべた。その笑みでようやく我に返ったカシオは、引き攣った笑みを浮かべると、持っていた渦浪尖を下ろし小さく息を吐いた。

安堵の表情を浮かべるカシオだが、それも束の間だった。突如として周囲に爆音が轟き、何処からとも無くクローゼルの声がこだましたからだ。

「グハハハッ！ 俺八死ナナイ！ 俺ハ」

「おとなしく成仏しろ！」

アリアが腰から二本の剣を抜くと、切っ先の尖った剣を逆手に握り、振り向き様にそれを投げつける。だが、そこにクローゼルの姿は無く、二本の剣を繋ぐ鎖だけが虚しく音をたてる。

怪訝そうな表情をするアリアは、鎖が伸びきった所で一旦それを引き剣を手元に戻すと、ゆっくりと周囲を見回す。

「……………いない？」

小首を傾げると、突如地が揺れる。僅かに驚いた表情を見せたアリアだが、すぐにその場を飛び退く。それと同時に地から二本の腕が飛び出す。碎石が舞い、拳がアリアの右頬を掠める。

「チッ！」

軽い舌打ちを残し、軽やかなバックステップで拳をかわす。幾度と無く舞い上がる碎石と爆音。終始圧倒されるアリアだが、折れた剣を逆手に持ち返ると前傾姿勢をとり、踏み込んだ右足のつま先に



全ての体重を乗せ、一気に直進する。拳はアリアの遙か後方に落ち地面を砕く。それを確認し、アリアは上体を落とし更に加速する。

「隠れても無駄だ！」

折れた剣で地を割き、遅れて切っ先の尖った剣をそこへと突き立てた。根元まで深く刃が刺さり地面から血が溢れる。今まで唸っていた長い腕が大きな音を立て地に落ちた。僅かに呼吸を乱すアリアは、鎖を引っ張り突き立てた剣を抜くと、周囲を警戒する様に見回す。

地面から抜かれた刃には血が付着しているが、怪訝そうな表情を浮かべるアリアは、すぐに剣を持ち直しその場を立ち去る。

その動き出しと同時に、もう一度地が揺れた。あらかた予測していたアリアはすぐさま真剣な表情を見せると、カシオに向って叫ぶ。

「立ち去れ！ 奴は何か変だ！」

多少乱暴な口調になるアリアを、地中から飛び出した腕がもう一度襲う。相変わらず縦横無尽に動き回る腕が、アリアの右足に絡まる。

「チッ！」

「アリア！ 今、助けに」

「助けなど要らない！」

力強くそう言い退け、アリアは折れた剣で右足に絡まる腕を裂いた。派手に血飛沫が飛び散り、その腕が力なく地に落ちる。だが、次々と地中から腕が飛び出しアリアへと襲い掛かった。

折れても尚切れ味の衰えぬその剣で、次々と腕を切り裂くアリアは、前進と後退を使い分け上手い具合にその腕との間合いを詰める。

がら攻防を続ける。

カシオもその手助けをしようとするが、まだ足を動かす事が出来なかった。あの時のクローゼルの一撃がかなり堪えている様だ。それでも奥歯を噛み締め渦浪尖を構えたカシオは、ゆっくりと右足を踏み込むとそれを突き出した。衝撃が螺旋を描き直進し、アリアを襲う無数の腕を弾く。威力は弱いもののアリアの逃げ道を作るには十分な破壊力だった。

決じ開けられた道を進むアリアは、向かい来る腕を折れた剣で裂きながらカシオの方へと辿り着くと、静かに口を開く。

「あれが、魔獣人の力なんですか？」

「俺に聞かれても分かるわけ無いだろ。俺だって、魔獣人と対峙するのは初めてだし……」

「役立たずですね」

「うっ……痛い所をザクザク抉るね……キミ」

「本当の事を言っただけです」

サラツとそう述べたアリアは、地中から突き出た腕を真つ直ぐに見据える。相手はクローゼル一人なのに腕は無数。この異常な状態に、小さく舌打ちをするアリアは、眉間にシワを寄せ頭をフル回転させる。

様々な事を考えていた。この現象はなんなのか、クローゼルは何処なのか、何故生きているのか。疑問が疑問を呼び、アリアは激しく首を左右に振った。全ての疑問をなぎ払うように。

そんな状況の中、地上がより一層揺らぐと、うごめく腕の中心で地面が大きくめり上がった。亀裂が大きく走り、そこから恐ろしい程の殺気が漏れる。

殺気に思わず半歩下がる二人。脳が瞬時に逃げると信号を送るが、体がそれを拒絶する様に体を震わせる。鼓動が速まり、瞳孔が開く。全ての音が遮られた様な錯覚を感じ、二人は自然と息を呑んだ。

「ぐふふふふつ……俺ノ姿ニ……恐怖シロ」

「あんな事言ってるけど……どう？　恐怖してる？」

やや強がりながらも、カシオは笑みを浮かべ横に立つアリアに目を向ける。しかし、アリアの表情は強張っていた。カシオよりも感覚が優れているからだろうか、直にクローゼルの放つ殺気を感じてしまった。人ならざるものの放つ異様な殺気に完全に支配されたアリアは、体を僅かに震わせもう半歩後退する。

先程までの様子と違うアリアにカシオの表情から笑顔が消えた。流石にヤバイと判断したのだ。静かに息を吐き出し、珍しく真剣な表情をするカシオは、首からぶら下げた割れたゴーグルを額へと掛け、ゆつくりと右足を前に出し渦浪尖を腰の位置に構えた。

三又に分かれた渦浪尖の刃が微かに揺れる。知らず知らずカシオの体が震えていたからだ。頭では殺気など気にしていないと言い聞かせても、体の方はその恐怖に自然と震えてしまう。それでも、無理に口元に笑みを浮かべたカシオは、強気な態度でクローゼルに答えた。

「恐怖するのはお前だろ。俺の強さに逃げ出すなよ」

「くふふふふつ……ソノ態度ガ、何時マデ続クカナ」

不適な笑いを浮かべながら地中からクローゼルが姿を見せる。両肩から伸びる無数の腕。触手の様なその腕が地面を抉りながら地上へと現れる。息を呑むカシオは、その姿に薄らと笑みを浮かべ、もう一度静かに息を呑んだ。

## 第120回 圧倒的な力

風が吹いた。静かな風が。

その風が頬を撫で、髪を揺らす。

うごめくクローゼルの長い腕がその動きを止める。不敵な笑みを浮かべるクローゼルが静かに身体をくねらせ、舌を何度も出し入れする。

ゆつくりと自らを落ち着ける様に深呼吸をするカシオは、足の感覚を確かめる様に右足のつま先に僅かに重心を移動させた。膝が微かに震えるが、この程度なら支障は無い。そう判断し、カシオは身を屈める。

鋭い視線が静かにクローゼルへと向けられた。うごめく腕の数は二十近いが、それに目もくれずただ一点にクローゼル本体を見据える。

不適な笑みに口から何度も出し入れされる長い舌。蛇の様に体をくねらし、カシオの方に目を向ける。

両者の視線が交わり、カシオは動き出す予備動作として右足のつま先に体重を乗せ、前傾姿勢へと入った。一方で、クローゼルも全ての腕の動きを止め、ゆつくりと上半身を前へ出す。まるで挑発するような態度に、カシオは僅かながら眉を動かしたが、すぐに意識を集中する。

乾いた風が吹き、対峙する両者の間を流れた。巻き上がった少量の土煙。

いつに無く集中力の高まるカシオは、もう一度ゆつくりと息を吐き出す。逆境に立たされたからだろう。いつも以上に高まった集中力が、カシオの五感全てを最大限まで引き上げていた。微かな風の音が聞こえ、舞う微量の塵が見え、僅かな土の香りを感じ、口に広がる少量の血の味すら鮮明に感じ取れた。

研ぎ澄まされた感覚の中で、カシオも確かに感じる。いつもとは

違う何かを。

前傾姿勢をとったままゆっくりと周囲を確認する。クローゼルの側に横たわるグライブ。後ろには戦意を失ったアリア。最悪の現状の中で、カシオは異常なまで冷静になれた。

（まずは……あの腕を……。でも、本体を叩いた方が……。いや、俺が本体を叩く前に、あの腕に叩かれる。やっぱり、あの腕から何とかしないと……）

静かに考えを纏めたカシオは、もう一段階体勢を低くすると、体重を乗せた右足のつま先で力強く地を蹴った。動き出しは最高の出来だった。低い姿勢を保ち、直進するカシオ。しかし、その体が突如大きく仰け反る。地中から飛び出したクローゼルの拳に顎を打ち抜かれて。

「ぐっ！」

完全な不意打ちのカウンターに勢いを殺がれ、大きく仰け反るカシオ。そして、無防備な体へと無数の拳が降り注ぐ。

「ぐっ！ うがっ……」

幾重にも重なる打撃でカシオは吐血する。地面の割れる音が轟き、土煙が舞い上がる。

どれ位降り注いだのか分からなくなる程長かった打撃が止む。土煙は風によりすぐに消え、砕け窪んだ地面に減り込むカシオは、薄らと瞼を開く。ぼやける視界の向うに青い空が見える。

（うっ……裏めった……下からのカウンターとか、反則じゃねえか？ くっ……一体、何本出てくりゃ気が済むんだ……）

ボンヤリとするカシオは、右手に握る渦浪尖の感触に口元に笑みを浮かべた。

「だな……弱気になっちゃいけない……。ここで負けるわけにやいかねえな……」

柄を握り締め、ゆっくりと体を起こした。額から流れる血を左手で拭い、霞む視界の中でクローゼルを見つける。膝に力が入らず立つだけで精一杯の状況でも、強気な視線は変えず乱れた呼吸を整える。息を吸う度に体に痛みが走り、唾を呑めば血の味が喉を通った。

「くつくつくつ……貴様ノ攻撃八俺二届カナイ……コノ腕ガ、才前ヲ打チ抜ク」

「だからなんだ……。言つとくけど、俺は諦めが悪いんだよ。攻撃が届くまで何度でも攻撃するまでだ……」

口元に笑みを浮かべるカシオは、渦浪尖を構え直す。

その行動に不適に笑うクローゼルは、自分を困う腕を動かし風を切る様に一発目の拳がカシオに落ちる。先ほどよりも速度に乗った一撃に、カシオもそれ相応の反撃をする為、右足を踏み込む。しかし、膝に力が入らず体勢が崩れ、遅れてクローゼルの拳がカシオの頬を打ち抜く。

「ぐうっ！」

「マダマダ行クゾ！」

続け様に二発目三発目が鋭く振り下ろされる。カシオの左右の頬をクローゼルの拳が交互に打ち抜く。血が吐き出され、口角から流れる。しかし、何発、何十発と殴られてもカシオは膝を落とす事な

く、ただクローゼルを睨み続けた。

(くっ……頭がボンヤリする……殴られすぎた……。でも、ここで引き下がるわけには……)

奥歯を噛み締め、踏み込んだ右足に力を込める。指先に力を入れると膝が僅かに震え、体を支える事が出来ない。

(うっ……まだ、ダメージが残って……でも、そんな事を言ってる状況じゃないんだよ！ 動け！ 動け！)

無理矢理右足の震えを止めたカシオは、奥歯を噛み締め向かい来る拳に向って反撃となる一撃を突き出した。切っ先が合わせた様に向ってきた拳の中心を突く。勢いに乗った拳が刃に触れ真つ二つに裂ける。鮮血が舞い、カシオの体に飛び散る。

しかし、悲鳴を上げるでもなく苦しむ表情を見せるでもなく、ただ不適に笑うクローゼル。その表情に、カシオも異変と妙な胸騒ぎを感じた。

(今の手心え……)

不意に地面に転がる裂けた腕を見据える。激しく血飛沫を上げていた腕だったが、それはまるで抜け殻の様に皮だけがそこにはあった。表情をしかめるカシオは、ゆっくりと渦浪尖を構え直し、もう一度クローゼルの顔を睨んだ。

両者の視線がぶつかり、数秒の時が過ぎる。動き出すのはやはりカシオ。膝の震えを強引に押さえ込み、地を駆ける。そのスピードは上がらないが、それでも着実にクローゼルとの距離は縮まっていた。風を斬る音が耳に届き、遅れてクローゼルの腕がカシオに迫る。タイミングを合わせた様に右足を踏み込むカシオは、振り降りる

拳を真っ直ぐに見据え、渦浪尖を突き出そうとした。だが、それを突き出す前に、カシオの顎をもう一度地面から飛び出した拳がかち上げた。

「ぐっ！」

顎をかち上げられ、上半身が大きく浮き上がる。そして、狙いすました様に無防備になった上半身に拳が襲い掛かった。鈍い音と血飛沫が散る。骨が砕ける嫌な音が周囲にこだまし、大地が激しく揺れ動いた。

何発続いたか分からないが、降り注ぐ拳が動きを止めた時、そこには血溜まりが出来ていた。鮮血に染まったクローゼルの拳がゆっくりと宙へと浮き上がる。

「くくくくっ……マズハ一人目……」

クローゼルの不気味な笑いがこだまし、遅れて鮮血に染まった拳が地に落ちた。大量の血飛沫を撒き散らせて。何が起こったのか理解できていないクローゼルの表情が一瞬固まった。だが、すぐに状況を把握したのか、もう一度不気味な笑い声を発する。

「くくくくっ……アノ状況デ、ヨク反撃出来タナ」

「うっ……ッ……。俺も、色々修羅場は潜って来てるんだよ」

静かに渦浪尖の鋭利な一本の刃が土煙から姿を見せた。斬る事に特化した鋭い一本槍を、ゆっくりと地面へと突き立てたカシオは、肩で息をしながらも、ゆっくりとクローゼルを睨む。

咄嗟の判断だった。顎をかち上げられたその瞬間、三又に分かれた刃だった渦浪尖を解除し、一瞬で一本槍へと変更。その後は向って来る拳をただひたすら斬り続けた。散乱する鮮血は全てクローゼ



ルの拳から。そして、あの骨の碎ける音は、クローゼルの振り下ろした拳から聞こえた音だった。

「ハア…ハア……これで、大分、腕を減らしたぞ……」

「くくくくつ……。ソレガ、ドウシタ？ 腕八幾ラデモ」

クローゼルがその言葉を吐くと、地中から新たな腕が無数飛び出した。土煙と大量の土を撒き散らしながら。

## 第121回 本体

うごめく無数の腕。

漂う土煙と、降り注ぐ碎石。

不適な笑みを浮かべるクローゼルに対し、苦悶に表情を歪めるカシオ。先程受けた打撃で体はボロボロだった。それでも、しっかりと渦浪尖を構え、クローゼルの顔を睨み付ける。

静寂の中に吹き抜ける乾いた風。巻き上がる土煙。摺り足で右足を前に出すカシオは、重心を前方に傾けゆつくりと前傾姿勢を取る。そんなカシオの姿を嘲笑う様に肩を揺らすクローゼルは、不適に口を開く。

「幾ラヤツテモ、才前デハ俺ニ勝テナイ」

「うるせえよ。俺は、諦めが悪いんだよ。何度でも挑んでやるからよ」

「ナラ、俺ハ次デ、才前ヲ殺ス」

「俺も、次でお前を倒す」

力強くそう言って退けたカシオは、右足に重心を傾け、一気に地を駆ける。ダメージの影響で本来のスピードを出す事の出来ないカシオだが、今出せる全力の速度でクローゼルへと迫った。降り注ぐ拳を裂きながら、遂にクローゼルを自らの間合いへと捕捉する。

「これで、最後だ！」

カシオが力強く右足を踏み込み、同時に渦浪尖を一本槍から三本槍へと変化させる。刃が一瞬で三つに分かれ切っ先がクローゼルの胸を貫いた。血が大量に飛び散り、カシオの手が鮮血に染まる。

足元に広がる血溜り。

力なく地面に落ちる無数の腕。

そして、カシオの手に伝わるしつかりとした手応えに確信する。  
勝ったと。

だが、次の瞬間、カシオの体は宙を舞っていた。視界が一転し、  
激しい衝撃と共に地面へと叩きつけられる。

「ぐっ……」

呼吸が一瞬止まり、視界が真っ暗になった。何が起こったのか理  
解出来ず、呼吸を乱しながら瞼を開くと、薄ら笑いがその耳に届く。

「くくくくっ……勝ッタト思ッタカ？ 俺八不死身ダ」

不適な笑いと共に地中から這いずり出て来るクローゼル。そして、  
渦浪尖の刃には薄い皮の様なモノだけが残されていた。

「くっ……てめえ……ようやく全貌が見えてきたぞ……」

苦しそくに表情を引き攣らせ、奥歯を噛み締め体を起したカシオ  
は、渦浪尖を地面に突き立てようやく立ち上がる。また、顎をかち  
上げられたのか、視点が揺らぎクローゼルの姿が二重にも三重にも  
重なって見えた。それでも、視線は強く真っ直ぐにクローゼルを睨  
み付ける。

一方で不適な笑みを浮かべるクローゼルは、もう一度地面から無  
数の腕を出し、ゆっくりとカシオの方へと足を進めた。

「才前二俺八倒セナイ。才前八、俺ノチカラノ前二平伏ス事シカ出  
来ナイ」

「さっき……言ったる？ お前の全貌が見えてきたって……」

「俺ノ全貌？ くくくくっ……才前如キ二分カルハズガ無い」

「なら、試してみようじゃないか……」

口元に笑みを浮かべたカシオは、震える膝に力を込め、ゆっくりと渦浪尖を構えた。もう自ら動く力など残っては居ない。それでも反撃する為に少しでも体力を回復する為に、カシオはその場でジツと仁王立ちする。

倒しても起き上がり、力の差に臆す事無く、強気な態度を見せるカシオに、クローゼルの中でジワジワと怒りが溢れ出す。そして、余裕を浮かべていたクローゼルの表情が一変し、怒りのこもった表情へと変わる。

大気が僅かに震え、足元には土煙が舞い上がる。僅かに大地が揺れ、轟々しい音が地中深くから聞こえてきた。そして、クローゼルの足元に細かな亀裂が走り、徐々に地面が突起し、徐々に得体の知れない巨大なモノが姿を見せ始める。

「それが……本体ってわけかよ……大方……よ、予想通りだな」

戸惑い気味のカシオは、ゆっくりとその物体を見上げ、表情を引き攣らせた。

カシオの目の前にそびえるのは大蛇。大きさは五十メートル程で、その体の太さは五メートル程あった。そして、その大蛇の背中からは無数の腕が伸び、頭の上に小さなクローゼルの体がかかっている。

その規格外の大きさに啞然とするカシオ。自分が予測していたモノと全く違うそのクローゼルの姿に、「ああ」と小さく声を発した。

『これが、俺の本当の姿だ』

「いやあ……でか過ぎだろ？　こんなの、どうやって……」

カシオが全てを言い終える前に、大蛇と化したクローゼルの尾がカシオを襲う。衝撃が広がり地響きが起こる。地面が砕け碎石と土煙が激しく舞い上がった。

直撃は避けたものの、その衝撃になぎ払われたカシオは、地面を転がり数十メートルも吹き飛ばされていた。

「くっそっ……これじゃあ、体力回復とか、悠長な事言ってる場合じゃねえな……早く何とかしないと……」

「む、無理ですよ……あ、あんなの、勝てるわけ無いって分かってるはず……」

突如背後からアリアがそう言葉を掛けた。まだ恐怖で震える体。手には折れた剣と尖った剣を握り締め、潤んだ黒の瞳がジツとカシオを見据えていた。彼女自身、何度もカシオの援護に回ろうとしたが、一度感じた恐怖に打ち勝てず動く事が出来ずに居た。

そして、クローゼルの本体を見て、アリアは更に絶望的な力の差を感じ、こうしてカシオに忠告しにきたのだった。それでもカシオは無理に笑顔を見せ、

「大丈夫……俺は、勝つ……。それしか、道が無いからな……」

おしゃべりなカシオが、それだけを言い口を閉じた。それ程まで体力を消耗し、追い込まれた状況だった。

喉が渇き、呼吸が苦しい。自分が今どう言う状況なのかもハッキリとしないまま、カシオはゆっくりと足を進める。引き摺る様に一歩一歩。だが、それを制止する様に目の前にアリアが立ちはだかった。

「な、何でそこまでするんですか！ あなたは、自分の身がどうなっても言いと言うのですか！」

「……俺だつて……辛いのは……嫌だ。でも……誰かが、倒さなきや行けない……だろ？」

「その誰かが自分だと、言うのですか？」

アリアの問いにクスツと笑うカシオは、静かに空を見上げた。

「違う……俺は……そんな器じゃない……ただ、俺が少しでも……奴の体力を削れば……次の奴はそれだけ楽に戦える。それに……俺には、もう奴を倒す術も、体力も無いから……少しでも……」

「くっ！ お、男は皆そうです！ 自らの身を犠牲にして次に託す！ 何を考えてるんですか！ あなたを待つてる人はどうなるんですか！」

声を荒げるアリアに、カシオはもう一度笑みを浮かべる。

「俺を待つてくれてる人……か……。そんな奴……」

「貴様を殺すのは俺だ。ここで死なれては困るんだよ」

金属音と共にカシオの頭部に銃口があてがわれた。

「な、何すてるんですか！ 彼は」

「黙れ、お前に関係ない。これは、コイツと俺の問題だ」

「今は、そんな事を言ってる状況じゃ無いんです！」

もめる二人を尻目に、ゆっくりと足を進めるカシオは、クローゼルの姿を目視し小さく息を吐いた。全体重を右足に乗せ、前傾姿勢に入る。その動きにクローゼルが気付く。

『くっくっくっ……無駄な足掻きだ……』

「無駄かどうかは……最後までやってみなきゃ分かんねえだろ！」

カシオは叫ぶと同時に地を駆ける。動き出しは遅く、その動きも今までで一番遅い。それでも、一直線に着実にクローゼルへと迫る。しかし、それを阻む様に無数の腕がカシオへと襲い掛かった。今のカシオには、これらを全て避けて行く体力は残されておらず、ただひたすら直進する。

刹那、カシオに襲い来る腕が裂け、道が開けた。

「あなたの様な一般人にここまでされては、特別部隊参謀の名が廃ります！ 私が道を切り開くので、迷わず真っ直ぐ進むといいです！」

折れた剣で次々と腕を切り裂いていくアリア。その動きにもう恐怖は無く、いつものアリアの動きに戻っていた。

## 第122回 体内へ

風を切る鋭い音に遅れ、肉片が散る。

血飛沫は派手に散るが、手応えはまるで無い。それでも、アリアはカシオの道を作る為にひたすら剣を振るった。

返り血に真紅の髪も黒ずみ、衣服も肌さえも黒く凝血した血に塗れていた。どれ位斬ったのか、後どれ位斬ればいいのか、そんな考えがアリアの頭の中に過る。剣を振るう腕も徐々に重く感じ始め、呼吸は荒々しく変わっていた。

「これ以上は無理だ……下げれ」

乾いた声でカシオがアリアにそう言うが、アリアは頑なに首を振り、刃を振るう。これも、特別部隊参謀と言う肩書きの意地なのだろう。

必死の二人を鼻で笑うクローゼルは、その巨大な体をしならせると、大きな尻尾を二人に向けて振り下ろした。影が二人を覆い、一瞬にして地響きと衝撃が周囲を包む。舞い上がる土煙に、クローゼルの半身が包み込まれ、二人の姿は完全に消えた。

『これで……終わった……』

「何が……終わったって？」

掠れた声が何処からとも無く聞こえ、クローゼルが叫ぶ。

『貴様！ 何処にいる！』

その声に対し、カシオがゆっくりと土煙の中から姿を現した。ボロボロの体に額からは激しく血が流れ出している。左腕にはアリア



を担ぎ、右手に握った渦浪尖を地面に突き立て、ようやく立っている状態を保っていた。

咄嗟の判断だった。カシオは、渦浪尖を地面に勢い良く叩きつけ、その衝撃を利用してその場を離れたのだ。その為、体はボロボロだった。

「ハア…ハア…さて、そろそろ肉体的にも限界なんで、終わらせたい所なんだが……」

口ではそう言ってみせるカシオだが、もうその場を動く程体力は無かった。渦浪尖で何とか体を支えているが、渦浪尖を握るその手の握力すら弱々しいものだった。

左腕に抱えたアリアがゆっくりと瞼を開き、クローゼルには気付かれない程の小さな声でカシオに囁く。

「チャンスは一回きりです」

「分かってる……でも、アイツが俺に協力するとは……」

「大丈夫です。あの人なら、協力してくれます。それより、体は大丈夫ですか？」

「大丈夫……って言いたい所だけど、もう限界だ。早い所楽になりたいもんだよ」

小声で話す二人に、クローゼルが喉の奥から吐き出した様な声で怒鳴る。

『虫ケラ共が！ 俺の手を煩わせるな！』

巨大な体が大きく持ち上がり、大口を開き顔からカシオに向って突っ込んで来る。その瞬間、カシオはアリアの体から手を離し、アリアも勢い良く反転しながら持っていた切っ先の尖った剣をクロー

ゼルに向って投げる。

『くふふふっ！ その程度 』

クローゼルがそう口にした刹那だった。乾いた破裂音が連続で響き、空に紅蓮の炎が柱を伸ばす。それと同時に体にムチを入れ走り出すカシオは、大きく開かれたクローゼルの口の中へとダイブする。それに遅れ、二発の弾丸が口の中へと被弾した。

『ぐう！』

突如起きた異変にクローゼルがそう声を上げる。

クローゼルの口に被弾した玉は青の硬弾だった。その為、クローゼルの大口は開いたまま閉じられなくなっていた。

『うぐっ！ な、何が……！』

自分の身に起きた事態にうろたえるクローゼルが、その巨体を大きく持ち上げる。

その隙に土煙の合間にグライブが姿を見せ、アリアを抱えその場を去る。

「あれでよかったのか？」

「ええ。ありがとうございます。後は、あの方が……」

「いいのか？ あんな奴を信じて？」

グライブが眉にシワを寄せ不満そうにそう口走る。だが、アリアは何処か自信ありげに笑むと、

「大丈夫ですよ。わたすの考えが正すければ、あの中は、彼がもっ

とも力を発揮できる環境ですから」

「あいつがもつとも力を発揮できる環境？」

不思議そうに聞き返すグライブは、一旦体を反転させ左手に握ったライフルの引き金を引く。轟音を轟かせ青白い閃光が大気を走り、大口を開き大きく仰け反るクローゼルの腹部へと突き刺さった。だが、殆ど効果は得られず、グライブはもう一度反転し、走り出す。

「音の割りに、威力が弱いんですね」

「うるせえよ。元々、あんな化物相手にする為の武器じゃねえよ」

「対人間用って事ですか？」

その言葉に、グライブが僅かに表情を引き攣らせる。人だけを殺める為の道具。そう言われた気がしたからだ。アリアの言う事は間違っではない。グライブ自身、カシオを殺す、それだけの為に、このライフルを扱っているわけだから。

反論する気もなく、黙るグライブに対し、アリアはもう一つ気になる事を問う。

「何で、あの人を殺そうとしてるんですか？」

「ッ！」

グライブの表情が更に険しく変わり、眉間にシワが寄る。その表情に、アリアも僅かに表情を曇めた。聞いてはいけない事だったのかと。だが、グライブは奥歯を噛み締めると、静かに口を開いた。

「アイツと親父に、母は殺された。それだけだ」

「お母様が？ でも、わたすの調べだと、お母様は病死じゃ……」

アリアがそう口にするると、グライブの表情が一層険しくなった。

アリアがこの事を調べたのは、つい先日になる。王であるブラストの命で、飛行艇に集めた人間の素性を調べる様に言われたのだ。その中にカシオの名前とグライブの名前も刻まれていた。その為、アリアは二人の家族関係を詳しく記憶している。だからだろう。グライブの「母は殺された」と、言う発言が気に掛かったのだ。だが、その後グライブが口を開く事は無かった。

大量の水飛沫を上げ、カシオの体は奇妙な液体の中へと落ちた。

「うわっぶっ……。な、何だこりゃ……」

立ち泳ぎで液体から顔を出したカシオは、ゆっくりと周囲を見回した。ぶよぶよの壁がグチヨグチヨと音を起て動き、液体が激しく波打つ。呼吸を整えるカシオは、頭上を見上げ表情を引き攣らせる。

「マジ……ッスか？ アリアの奴……俺を胃酸で溶かす気か！」

カシオが大声で叫ぶが、その声は響かず消えた。ぷかぷかと浮かぶカシオは小さく息を吐き、もう一度周囲を見回す。

暫く周囲を見回し、この液体が胃酸である事が分かった。そして、今も尚自分の体がジワジワと消化されようとしている事も、感覚で分かった。右手に握った渦浪尖。その柄が僅かに溶け始めていた。

「くっそっ……ただでさえ体がポロポロだって言うのに……この仕打ちは何だ。まあ、いい。とりあえず、これから」  
「これからなんだって？ 俺の体の中で何をしてる」

突如背後から聞こえた声に振り返ると、そこにクローゼルがいた。水面に波も立てずに立ち、真っ直ぐにカシオを見下ろす。息を呑み、

そのクローゼルを見据えるカシオは、渦浪尖を握り直す。刹那、無数の腕がぶよぶよの壁から生え始める。

「クククツ……。お前は、ここで死ぬ」

「死なねえよ。俺は、生還して見せるさ」

「ここから、どうやって出るつもりだ？」

「腹を切り裂いて出るに決まってるだろ？」

当然と言わんばかりにそう言うカシオを、鼻で笑うクローゼルが腕を上げると、壁から生えた無数の腕が一斉にカシオへと襲い掛かった。その動き出しにあわせる様に、カシオは僅かに息を吸うと、液体の中へと体を沈める。

刹那、カシオの目に液体が入り込み、一瞬にしてカシオの灰色の瞳が銀色へ変化し、その目に映るものが全てスローになる。水呼族特有の能力を発動し、カシオはゆっくりと渦浪尖を構えた。腕が液体に着水する度に激しい飛沫を上げ、カシオに向って直進する。だが、全てがスローに映るカシオには、それは容易くかわす事が出来、同時に容易に反撃する事も出来た。

しかし、向って来る拳はことごとくカシオの体を直撃し、血が液中に広がった。

## 第123回 次の段階へ

幾度と無く重なる打撃に、沈み行くカシオの体。

眼では追えるその動きに奥歯を噛み締めるが、畳み掛ける様に更に拳が降り注ぐ。

血が薄らと液内に広がり、気泡が漏れる。

「くくくくつ……さっきまでの勢いはどうした？」

クローゼルの声が液内にいるカシオに届いた。それでも何も出来ず、カシオはただ殴られ続けていた。殴られるたびに口から漏れる血と気泡。

それでも尚、抵抗しようと渦浪尖を握りなおしたカシオは、力任せにそれを突き出す。切っ先が真っ直ぐに伸び、無情にも気泡だけをばら撒く。苦痛に表情を歪めるカシオは、もう一度渦浪尖を引き、次は向って来る拳に向ってそれを突き出した。だが、拳はそれを避け、カシオの体を殴打する。

「ぐふつ……あぐつ……」

殴打され口から息が漏れる。朦朧としながらも静かに渦浪尖を引くと、その目を見開いた。

「いつまでも、やられてると思うな！」

奥歯を噛み締めもう一度渦浪尖を突き出すと、切っ先に渦が生じそれが前方に広がる腕を全て絡めとる。

「これで、どうだっ！」

更に渦浪尖を一本槍へと変化させ、絡んだ腕を上昇しながら切り裂いていった。そのスピードは全快時に比べて遅いものの、常人に比べたら早く数秒もせず水面へと顔を出した。絡んだ腕には薄らと切れ目が走り、血が噴出す。液内に広がる血を見据え、クローゼルが口元に笑みを浮かべる。

「いつまで、その勢いが続くかな？」

「何が言いたい？」

「その傷で、いつまでも、そのスピードをキープできると思ってるのか？」

「……大丈夫だ。すぐに終わらせてやる」

カシオはそう言うと、渦浪尖の切っ先をクローゼルの方へと向けた。だが、クローゼルは余裕の笑みを浮かべ、

「お前に俺は殺せないよ……絶対に」

そう発言した。

その発言に対し、カシオも静かに笑みを浮かべ、

「いつまで、その笑みが続くか見ものだよ」

「貴様こそ　グッ！」

突如クローゼルの表情が歪む。

不適な笑みを浮かべるカシオに、鋭い眼差しを向けるクローゼルは、突如吐血すると膝を水面へと落とした。口から零れた血が液中に落ち広がる。

「はぁ……はぁ……何を……した……」

「何を？ この玉に見覚えはないか？」

カシオは懐から青い玉を取り出し液中へと落とした。それが、液中でユラユラと揺らめきそこへと触れると、衝撃で破裂し動きを止める。

「貴様！」

「ようやく理解したか？ あの時、何で避けずに殴られ続けたか？」

不適に笑うカシオは小さく息を吐く。

あの時、カシオが避けずに殴られたのは、体が動かなかったからだけではなく、全てはこの青い玉、硬弾をクローゼルに知られる事無く体内にばら撒く為だった。その代償は大きい、今この状況はカシオにとって最大のチャンスだった。

一方、その頃、外のアリアとグライブにもその異変に気付いた。突如動きを止めた巨大な蛇を見据え、アリアが不適な笑みを浮かべる。

「作戦は次の段階へと以降します！」

「次の段階？ 何をするつもりだ？」

アリアを抱えるグライブは足を止め、アリアを降ろす。肩で息をしながらも、右手に持ったライフルに黄色の玉を詰めるグライブに、アリアは自らの剣を差し出した。その行動に眉間にシワを寄せるグライブの手に、無理矢理に剣を握らせると、

「さあ、これを撃ち込むのです！」

「……無茶言つな。どうやって撃ち込めって言つんだよ」

「もちろん、そのライフルですよ」



当然と言わんばかりに、自信満々で胸を張る。多少なりに膨らんだ胸を張るアリアに、僅かに頬を赤く染めるグライブは、視線を逸らす。今まで一人で旅をしていたグライブには、女性との接点が無かった為、アリアが無意識に行ってる行動にも、過剰に反応してしまっていた。その行動に、不満げな表情を浮かべるアリアは、唇を尖らせ、

「なんですか！ その反応は？ わたすの考えに何か不満があるんですか！」

「いや、不満は無いが……あんまり、俺には近付くな」

「なんですか？ 別に、これくらいの距離は気にする程度じゃないですよ？」

「お前が気にしなくても、俺が気にするんだよ」

背を向け表情を引き攣らせるグライブ。アリアの様なタイプの女が特に苦手だった。普通なら突き放してその場を去る所だが、現状が現状の為、大人しくアリアの方へと体を向けると、受け取った剣とライフルを差し出す。

「撃ち込むだけなら、お前でも十分使えるだろ」

「ダメです！ グライブさんは、わたすにそんな危険なモノを扱えって言うんですか！」

鼻息を荒げ怒鳴り散らすアリアに、公然と立ち尽くすグライブは、手に持った剣を見つめる。これは危険じゃないのかと、問おうとしたが、その言葉を呑み、小さく息を吐き、

「分かった……それで、どうすればいい？」

「おや？ 何だか、急に素直ですね。てっきり、これは危険じゃないのかって聞いてくるかと思ってたんですが？」

不思議そうに首を傾げるアリアに、グライブは小さくため息を吐き、言わなくて正解だったと、目を細めた。その態度に憮然とした表情を見せるアリアは、もう一度唇を尖らせ、

「なんですか！ その態度。まるで、わたすをバカにすてるみたいじゃないですか！」

「してるみたいじゃなくて、してるんだよ。で、これをどうすればいいんだ？」

「って、何サラツと話を進めようとするんですか！ わ、わたすは怒ってるんですよ！」

怒声を響かせるアリアに、面倒臭そうに対応するグライブ。それが更にアリアの怒りを買う。

「な、なんですか！ その態度は！」

「態度？ どうだっていいだろ。それより、これを」

「話を逸らさないでほすいす！ 大体、あなた歳は幾つなんですか！」

「歳？ 十七だ。それが何かあるのか？」

「うぐうっ……お、同じ歳……」

悔しそうに拳を震わせるアリアがそう呟くと、グライブが怪訝そうな目をアリアへと向けた。アリアと自分が同じ歳と、言う事に引っかかったのだ。幼さが僅かに残る可愛らしい顔の所為だろうか、グライブはアリアをずっと年下だと思っていた。体つきはそれなりだった為、それでも一つ二つ程違っただけだろうと、あんまり気にはしていなかったが、これで同じ歳だと言われれば、疑いたくもなる。疑いの眼差しを向けるグライブ。口にはしないが、その視線がアリアに疑っていますと伝えたのだらう、アリアは額に青筋を浮かべ、

「なんです？ その目は……私が同じ歳だと、問題でも？」  
「別に、そうは言ってねえだろ？」

静かにそう答えるグライブだが、相変わらず怪訝そうな視線をアリアへと向けていた。

その視線に拳を胸の前で握り締めるアリアは、引き攣った笑みをグライブへと向ける。

「あのですね……その視線が疑ってるって物語ってるんですよ！」

拳を勢いよく振り抜くと、それが見事にグライブの額を捉えた。あまりの突然の事に全く反応すら出来なかったグライブの上半身が大きく仰け反り、フラフラとよろめく。二・三步後退したグライブは、ライフルを持った手で額を押さえ、

「な、なにしゃがる！」

「いや。避けるかと思っただんですが？ 意外でしたね」

「いきなりで避けれるか！ くうっ……もういい！ 貴様と話しても疲れるだけだ！ それより、話を進めろ！」

「短気は損気ですよ？ まあ、私もそろそろカスオさんが心配になってきたので、作戦の方を進めますが……」

相変わらず、カシオの事をカスオを呼ぶアリアを無言で見据えるグライブに、アリアが歩み寄りライフルと自らが渡した剣を受け取る。

そして、鼻歌を交えながら自らの剣を分解し、刀身だけをライフルの銃口へと詰めた。怪訝そうな目を向けるグライブが、不思議そうに首を傾げると、アリアが銃口をグライブの方へと向ける。

「ぬわっ！ あ、あぶねえだろ！ 銃口をコツチに向けるな！ 間違つて発砲したらどうするんだ！」

「んーん。その場合は、残念ですが、あなたの頭が……」

「怖い事をサラツと言つな。それで、もういいのか？」

「はい。後は、引き金を引くだけです」

「そうか……」

静かにライフルを受け取ったグライブは、それをゆっくりと構え、小さく息を吐いた。

程なくして、乾いた風が吹き微量の土煙が舞う。意識を集中するグライブは、それらを考慮しながら、丁寧に照準を合わせる。

## 第124回 違い

照準を確りと合わせ、引き金に人差し指を掛けた。少しでも力を込めれば、いつでも引き金を引ける状態で、静かに息を吐く。

硬弾を受け動く事の出来ないクローゼルに、当てる事は簡単だが、グライブはいつも以上に慎重に狙いを定めていた。

乾いた風が静かに流れる。この程度の風なら普段のグライブにとっては問題ではないが、今のグライブにとってはその微量の風でも手元が僅かに狂う。ダメージを受けすぎたのだろう。腕が震える。引き金に掛かった指も震え、緊張に息を呑む。

額から雫が一つ零れ、頬を伝い顎先から落ち、ライフルのグリップを握る右手の甲に落ちた。硬弾の効き目もどの程度もつのか分からず、焦りが更にグライブの手を震わせた。

「落ち着いてください。時間はありますから」

「分かっている……んな事……」

アリアにそう言われ、一度構えを崩し呼吸を整えてから、もう一度ライフルを構えなおす。

静かに吹き抜ける風が青みがかった黒髪を揺らす。腕の震えを押しさえ、もう一度引き金に指を掛けた。そして、息を呑み、一気に引き金を引く。

轟音が周囲に広がり、グライブの両肩に激しい衝撃が襲い、同時にライフルに詰めた鋭く尖った刃が勢いよく放たれた。あまりの衝撃に後方に吹き飛んだグライブの手からライフルが飛び、空を舞い地面へと叩きつけられ壊れた。

一方、放たれた刃は雷撃を纏い、乾いた空気も作用し、速度は急激に加速。そして、鈍い音と血飛沫を派手に撒き散らせながら大蛇の腹へと突き刺さった。

「ぐおおおつ！」

刹那にクローゼルの悲鳴が轟いた。

腹の中に居たカシオにも、その声は聞こえ、目の前に居たクローゼルが腹を押さえ膝を水面へと落とす。

「ぐっ……貴様ら……」

「どうやら、このデツカイのが本体と見て間違いないみたいだな……」

「なんだと……ぐっっ」

膝を落としたクローゼルは、口元を右手で覆うとそのまま口から血を吐き出した。指の合間から鮮血が零れ、液の中へと溶け込む。奥歯を噛み締めるクローゼルは、口元から手を離し、息を荒げながらカシオを睨む。

その目を真っ直ぐに見据えるカシオは、右手に握った渦浪尖を構え直し、ゆっくりと液の中へと体を沈める。体がジリジリと痛む。体が消化され始めているのだろう。それでも、カシオは深く底まで潜ると、渦浪尖を底へと突き刺した。

「ぐっっ！ き、きさ……」

もう一度吐血するクローゼルは、奥歯を噛み締めると、周囲から生える腕を一齐に振り下ろす。一直線にカシオへと向う無数の腕。それに対し、カシオは素早く突き刺した渦浪尖を引き抜き、一本槍へと変え、向かい来る腕を切り裂く。今までとは明らかに違う軽やかな動きにクローゼルは、表情を歪め、更に無数の拳を振り下ろす。

「何度やっても同じだ！ これで、お前は終わりだ！」

迫り来る腕を素早く避け、右手に握った渦浪尖を苦しむクローゼルへと投げた。渦浪尖は渦を巻き加速すると、そのままクローゼルの胸を貫き、壁へとその体を張り付けにする。その瞬間、全ての腕の動きが止まった。肩で息をするカシオは、その様子を見て、ホツとした様に肩を撫で下ろし、水面へと顔を出した。

「はぁ……はぁ……。くっ……」

息を呑んだカシオは、突き刺さった渦浪尖の柄を右手で握り、更に奥へと差し込む。

「ぐう……ぐふっ……き、貴様……」

「これで、終わらせるから、安心しろ……」

「くっ……終わって……たまるか……」

胸を貫かれたクローゼルは、静かに右腕を上げる。それと同時に力を無くしていた周囲から生えた腕が、浮き上がりカシオへと襲い掛かった。だが、落ち着いた面持ちのカシオは、更に渦浪尖を奥へと突き刺すと、その腕が動きを止め力を失う。吐血すると同時に体から血が染み出し、渦浪尖の柄を伝いカシオの手に届く。

生暖かな血。それは、そこらへんに居る人となんら変わらない。違うのはその身体能力と体に流れる血筋だけ。それだけの違いで、今こうして殺しあう。たったそれだけの違いで……。

色んな思いがカシオの胸を締め付ける。それでも、カシオは決意を濁す事なく、もう一度渦浪尖を深く突き刺す。

「悪いな……。まだ暫く痛みが続くが、すぐに」

「くっ……ふっ、ふっ……。いいさ。この痛みが、生きていた証……

ぐふっ……」

「なら、無駄な足掻きなんてしないで、死を受け入れるよ！」

もう一度渦浪尖を力一杯押す。すると、その刃の先に何か硬い物が触れ、小さく金属が擦れ合う音が聞こえた。そこでようやく渦浪尖の柄から手を離し、呼吸を整えるとクローゼルの顔に一度目を向け、

「これで最後だ。ゆっくり眠れよ！」

と、言い残し液の底まで素早く潜る。十数秒で底まで辿り着くと、渦浪尖に突き刺さったクローゼルを静かに見据え、瞼を閉じた。

再び瞼が開かれると、その目からはいつもの穏やかさは無く、鋭い眼差しがクローゼルへと向けられた。口から息が吐き出され、気泡がプクプクと浮き上がる。刹那、カシオは足を屈め、力一杯に底を蹴った。それから、程なくして両足がもう一度液中を蹴ると、カシオの体が加速する。弾丸の様にクローゼルに迫るカシオは体を反転させると、渦浪尖の柄頭を足の裏で押し込んだ。勢いに乗ったカシオの蹴りで渦浪尖が血飛沫を巻き上げながら一気に奥まで押し込まれた。

キンツと、遠くの方で小さな音が聞こえ、クローゼルに撃ち込んだ刃が空中へと飛び出す。

そして、遅れて渦浪尖の刃が外へと飛び出し、アリアは横たわるグライブに叫ぶ。

「今です！ 先ほどの雷撃を！」

刃を撃った衝撃でまだ肩が痛むグライブは、体を起してアリアを一度睨んだ。だが、アリアの透き通る様な黒い瞳に見つめられ、小



さく息を吐きグライブは渋々とライフルに玉を詰めた。

「うくつ……言っておくが、今回は上手く狙いは定まらねえぞ」

「少し位ずれても大丈夫です！ とりあえず、さっき放った刃に何発も撃ち込んでください！」

「んじゃ、行くぞ！」

グライブは適当に狙いを定めると引き金を引く。雷鳴が轟き雷撃が飛び出す。空中を回転する刃よりも僅かに低い弾道だったが、雷撃は突然吸い寄せられる様に刃へと命中した。

聊か驚いたグライブだが、アリアが急かす様に叫ぶ。

「早く次を撃ち込んでください！」

アリアに急かされ素早く玉を詰め二発目を放つ。今度はやや高めの弾道だが、それでも刃に吸い寄せられる様に雷撃は命中する。宙を舞う刃は二発の雷撃を受け、蒼白い光を点滅する。その刃に向って、グライブは何度も雷撃を撃ち込む。光りは徐々に眩くなる。

「もういいですよ。後は……」

アリアが真剣な目をクローゼルの腹から突き出した渦浪尖へとむける。すると、渦浪尖がゆっくりと下り、腹が裂かれ胃液に塗れたカシオが外へと飛び出す。

「くつ……はぁ……はぁ……」

「カスオさん！ 渦浪尖を中へ戻してください！」

アリアの声で、カシオがすぐに渦浪尖をクローゼルの腹の中へと投げた。と、同時にアリアがグライブへと顔を向け、

「グライブさん！ もう一発だけ、今度はあの腹の穴に向かって、撃ち込んでください！」

「これが、最後だからな！」

そう怒鳴りながら、グライブは引き金を引く。轟音に遅れ飛び出す雷撃。蒼白い光りが直線を描きながら、クローゼルの腹へと進む。すると、その雷撃に吸い寄せられる様に雷撃を纏った刃が高速で動き出す。そして、一瞬で消えると、突如雷鳴が轟き雷が落ちたかのように眩い光りと激しい衝撃が周囲を襲った。

## 第125回 兄弟喧嘩

凄まじい光りが周囲を包み、遅れて鼓膜を揺らす轟音。

それはほんの一瞬だったが、カシオ達にはそれが異様に長い時間を感じた。

光がおさまってもまだ瞼の裏に眩しさが残り、音が消えた後も耳鳴りだけが残される。

激しい目まいと吐き気を伴いながらも、ようやく瞼を開いたカシオは、まだはつきりとしなない目で周囲を見回す。ぼやけた視界が徐々にはつきりとする。

そこには、真っ黒に焦げた塊だけが残っていた。地面も黒焦げ黒煙が薄らと漂う。強烈な異臭が黒煙とともに漂い、周囲に広がる。

右手の甲で鼻を押さえながら、口で呼吸するカシオは周囲をもう一度見回す。何事も無かった様に周囲は静けさに包まれる。両肩を大きく揺らし、痛む体にムチを打ちゆつくりと立ち上がる。銀色だった瞳も既に灰色に戻り、体の節々が悲鳴を上げる様に激痛が走った。

「くっ……」

痛みに表情を歪め、もう一度膝を落とすと、後方で瓦礫の崩れる音が聞こえた。振り返る事なくカシオは、小さく息を吐くと、

「ううっ……。終わりますか？」

「おい……。終わりましたかじゃなくて、少しは俺の心配したらどうだ？」

アリアの声に遅れ、掠れた声でグライブがそう呟き、軽い咳を二三繰り返す。落雷の衝撃で舞った碎石からアリアを庇った為、顔も

衣服も土埃で汚れていた。その土埃を左手で払いながら、グライブも周囲を見回す。

土煙と黒煙でよく見えないが、巨大な塊が倒れているのは分かった。黒焦げてて原形は分からないが、間違いなくクローゼルの本体だろう。

グライブもそれを目視し、ようやく安心した様に息を吐くと、その場にゆっくりと座り込んだ。

「まったく……コイツを殺しに来たはずなのに、まさか化物の相手をするとは……」

「全くだ……。魔獣人って言うのが、まさかこんなでっかくなれるとは、思ってもなかったよ」

カシオもその場に腰を下ろし、笑顔でそう答える。が、その額に素早く銃口が向けられ、笑顔が一瞬で引き曇る。

「ぐ、グライブ？ こ、これは、何の冗談かな？」

「言ったはずだろ？ 俺はお前を殺しに来たと」

「いやいや。さっきまで協力した仲じゃないか。そう言う事いっつのは」

引き曇るカシオ。引き金に掛かった指。交わる二人の視線。

張り詰めた空気の中、グライブの人差し指に力がこもる。だが、それが引かれる前に、アリアが素早くライフルを奪い取り、「とう」と言う掛け声と共にグライブの額にチョップを入れる。

「イテッ！ 何しやがんだ！ テメエ！」

「もう一発！」

その掛け声でもう一発グライブの額をチョップする。見た目は痛

そつに見えないそのチョップだが、地味に痛いらしく、「イテッ」とグライブが声を上げる。

誇らしげに笑うアリアは、その反応が面白かったのか「ていつ」と無意味にもう一度チョップした。が、流石に今回は受け止められる。

「ありゃ？」

妙な声を上げるアリアを睨むグライブだが、言葉を発する前に強引にグライブの手を振り払い、鋭いチョップが額を捕らえた。今までの数倍以上の痛みとその場で悶絶するグライブ。その姿に苦笑するカシオに静かにアリアの顔が向く。

ニコニコと笑みを浮かべるアリアと視線がぶつかる。嫌な予感がすると同時に、アリアが素早く銃口をカシオの方へ向け、引き金を引いた。

轟音が轟き、衝撃がカシオの顔の横を通り過ぎ、背後で地面が砕け碎石が飛ぶ。耳の奥でキーンと音が響き、頬が僅かに熱かった。雷撃が頬を僅かに掠ったのだろう。その場で動く事の出来ないカシオに対し、アリアは静かに微笑むと、

「もう、喧嘩すちやダメですよ？」

「いや……お、俺は元から喧嘩なんて」

「エッ？　なんですか？　文句ですか？」

更に銃口をカシオの方へ向け、満面の笑みを浮かべるアリアに、カシオは息を呑み激しく首を横に振った。その行動に「そつ」と小さく言つと、アリアはライフルを地面へと捨て、小さく息を吐く。

「全く、兄弟喧嘩で殺す合うなんて、悲すぎますよ？」

「俺は今、全く関係の無い人に殺されかけたけど……」

「はい？ 何か言いましたか？」

微笑むアリアに苦笑しながら、首を左右に振る。

そんな穏やかな光景の中、瓦礫が崩れる音が周囲に響く。全て一瞬で静寂に変え、乾いた音が波紋の様に広がる。緊迫した空気が周囲を包み込み、足を引き摺る様な足音が近付く。瓦礫が崩れる音がもう一度響き、掠れた声が三人の耳に届いた。

「オレ……死なない……オレ……不死身……」

もう戦う余力など残ってない三人は、僅かに表情を曇め振り返る。手元にあるのは折れた剣とグライブのライフルのみ。あれ程の雷撃を受けても死なない相手に、どう立ち向かえばいいのか、と三人の脳裏に過る。

が、振り返った三人の視界に映ったのは、黒焦げたクローゼルとその胸から突き出した一本の刃だった。

何が起こったのか分からないが、クローゼルは口から血が吹き出し、膝を地に落とす。顎が震え口から溢れた血が頬を伝い、地面へと落ちる。そのクローゼルの体が崩れ落ち、背後から赤紫色の髪を揺らした青年が姿を見せる。

その青年の顔を見るや否や、アリアは渋い表情を浮かべ、

「將軍様が、なんでこんな所にいるんですか」

と、やや不機嫌そうにそう呟く。

その表情に苦笑する將軍と呼ばれた青年は、手に持った大型ナイフの血を拭い、

「何だか、凄く嫌そうですね。あと、將軍じゃなくツヴァルって名前前で呼んでほしいんですが？」

「分かってるだろ？ 私が、お前の事嫌いなのか？」

「はは……そ、そうですね。僕に助けられたのはシャクですか？」

問いかける様にそう言うツヴァルに対し、更に不機嫌そうな表情を見せるアリア。

険悪な空気にも関わらず、その空気をあえて読まず、

「無言かよ！」

と、カシオが一人声を上げる。その瞬間に、蹲っていたグライブが、「空気読めよ……」と小声で呟く。アリアも空気を読まないカシオに、呆れた様のため息を吐き、

「カスオさん……少しは空気を呼んでください……」

「いや、カシオだから。お前こそ、いい加減名前覚えるよ」

じと目でアリアを見据えるカシオに対し、ツヴァルは苦笑しながら、

「諦めた方がいいですよ。その人は“し”を“す”って発音する妙な癖が」

「癖じゃねえから！ お前にんな事言われたくねえよ！」

「暴言……なんか、凄い印象変わった……」

先ほどまでとは明らかに口調の違うアリアに、カシオも呆気に取りられる。そこまで、ツヴァルの事が嫌いの様だ。

ツヴァルに背を向け腕を組むアリアに、カシオも小さく息を吐くと、アリアがツヴァルの方へと体を向ける。

「それで、あんたが何しにここに来たんだよ」

「いや、あんまり遅いんで、見に来たんですよ？」

「はあ？ 何で、あんたに心配されなきゃいけないんだよ！」

「実際、危ない所を助けてもらったわけだけどな」

カシオが二人の間に入る様にそう呟くと、アリアの鋭い眼差しがカシオの方へ向けられ、

「カスオさんは、黙ってて貰えないっすか？」

と、やけに低音の声で言われた。あまりの迫力に圧倒されるカシオはグライブの隣りに腰を下ろすと、静かにアリアとツヴァルの二人を見比べ、

「女って怖いな」

「そうだな……。と、言うかお前空気読めよ……」

呆れ顔のグライブに対し、僅かに笑うカシオは、

「いや。場を和ませようと、あえて空気を読まなかったんだが……

あはは。失敗だったな」

「そりゃ、失敗するだろ。まあ、これに懲りたらちゃんと空気を読むんだな」

「以後気をつけるさ」

小さくため息を吐きながらも、少しだけ嬉しそうにカシオは微笑んだ。



## 第126回 連携

南の大陸ニルフロント王国大都市ウオークス。

中央広場に佇む初代女王クリスの像が見守る中、その正面で爆音が響き、中央道を挟む巨大な建造物が火を噴き崩れ落ちる。それと同時に、建造物の中から二つの影が飛び出す。

「くつ！ 聞いてないって！ あんな化物相手にするなんてよ！」

長い黒髪を揺らす凜々しい顔の女性カールが、両手にもったライフルの銃口を崩れる建造物の方へと向ける。その先に見えるのは、紅蓮の髪を揺らす不適な笑みを浮かべたガゼル。片手に握った剣が炎を纏い、鋭い目がカールを真っ直ぐに見据える。

一瞬躊躇するが、すぐさまカールは引き金を引く。咆哮と共に衝撃が両肩を襲い、銃口から弾丸が発射される。それから僅かに遅れガゼルの肩が大きく後方へと弾かれた。被弾したのだ。血が霧状に舞い、暫しガゼルの動きが止まる。が、すぐに不適な笑みを浮かべガゼルが動き出す。

衝撃で後方へと転げるカールは、体勢を整えライフルを構える。遅れて、白髪の青年ケイスがカールの前へと出る。ひび割れた眼鏡越しに映る金色の瞳が真っ直ぐにガゼルを見据え、両手に持つ剣を構えた。

「フハハハハッ！ もっと俺を楽しませろよ！」

「ケイス！ タイプAだ！」

「了承した」

ケイスは静かにそう述べると、両手に握った剣を素早く逆手に持ち替えると、静かに腰を屈め前傾姿勢をとった。その後方では、カ

ルールが何処から取り出したのか、大型のランチャーを両肩に乗せ狙いを定める。

「ケイス。お前が直撃するんじゃないぞ！」

「……それは、先輩の腕次第なんじゃ？」

「うるせえ！ お前に当てるぞ！」

「……了承した。出来る限り、善戦する」

カルールに小声で返答したケイスは、向かい来るガゼルへと視線を向け、静かに唇を動かす。

「我、神に代わり裁きを下す」

「うらあああつ！」

ガゼルが叫び声と同時に右手に持った剣を振り下ろす。ケイスは振り下ろされた刃を見据え、ギリギリの所で左手に握った剣でそれを受け止める。衝撃と金属音が響き、地面が僅かに窪んだ。

「くつ！」

「吹っ飛べや！」

ケイスが僅かに漏らした声を消し去る様にカルールが叫び、肩に担いだランチャーの引き金を引いた。けたたましい破裂音と共に発射された砲弾は僅かにケイスの両肩の上を通り過ぎる。そして、ガゼルの両肩へと被弾すると、破裂音と凄まじい衝撃を広げた。

間近で衝撃を受けたケイスは後方へと吹き飛ぶが、すぐに体勢を立て直し土煙の方へと視線を向ける。一方、砲弾を撃った衝撃で仰向けに倒れるカルールは体を静かに起し、渋い表情を向けた。

「くははははっ……」

土煙の中からガゼルの笑い声が響き、カールもケイスもすぐさま臨戦態勢に入る。だが、次の瞬間、土煙の中から轟々しく炎が噴出し、カールとケイスの間を抜け、後方に佇む建造物が一瞬で炎上する。

「もつと……もつと俺を楽しませろよ！」

叫び声と同時に、土煙が吹き飛び、高温の炎に包まれたガゼルが姿を現す。両肩には大量の出血の痕があるが、何故だが傷は付いていない。怪訝に思うカールだが、すぐにケイスに向かって指示を送る。

「ケイス！ タイプC！」

「了承した！」

静かにそう述べたケイスは、両手に握った剣を回し持ち直すと、それを胸の前にクロスさせて構える。

「今度は、どんな風にして俺を楽しませてくれるんだ？」

「テメエを、楽しませるつもりなんて、毛頭ねえよ！ ケイス！」  
「……………」

無言で僅かに頷いたケイスは、胸の前で構えていた二本の剣を、突如地面に突き刺す。それと同時に、カールは担いでいたランチヤーをケイスの頭上へと放る。すると、機械音を響かせ、ランチヤーが大剣へと形を変えた。

その大剣は刃だけで二メートルもあり、柄も合わせると二メートル三十センチはあった。その刃幅も五十〜六十センチ程あり、その平には美しい十字架が刻み込まれている。

その大剣が切っ先を真下へ向け落下し、土煙と爆音を響かせた。

「……何のつもりだ？ 仲間割れか？」

「だと、思うか？ ウチ等を甘く見んなよ。化物」

カールが口元に笑みを浮かべると、土煙からケイスが飛び出す。手にはあの太剣が二本握られ、重さなど無いかの様に素早い動きでガゼルとの間合いを詰める。

「そんな剣で、俺に傷が付けられると思ってるのか？」

「傷？ 否。与えるのは神の裁き。汝の刑は死刑のみ！」

ガゼルにそう返答したケイスは、右手に持った太剣を外から内へ入れる様に振り抜く。その軌道を見据えるガゼルは、容易くかわす事が出来る一撃を、わざわざ剣で受けた。それは、ガゼルが容易に防げると判断したからだった。

だが、瞬時にそれが間違っていたと知る。

二人の刃が交錯し、衝撃が襲う。ケイスの放った一撃に、剣ごと右腕が大きく弾かれた。その勢いはそれだけに止まらず、ガゼルの上半身も大きく仰け反らせる。

「くっ！」

僅かにガゼルの表情が歪み、ケイスの更に左足を踏み込み、右手に持った剣を引く。と、同時に、既に振り被っていた左手の剣を、無防備になったガゼルの脇腹へと振り抜いた。

空を裂く音が聞こえ、突風が土煙を巻き上げる。素早く視線を上に向けたケイス。その先には間一髪で空中へと跳んだガゼルの姿があった。そのガゼルと一瞬目が合う。だが、ケイスは追撃しようと思わず、太剣を構えたままジッとガゼルを見据える。

ケイスの動きを警戒するガゼルだが、すぐに異変に気付く。

「あの女は何処だ！」

ガゼルがそう叫んだ時だった。背後から人の気配を感じ、その耳に機械音が僅かに届く。

「人間舐めてつと、足元すくわれんぞ！」

カルールは怒鳴ると同時に、両手で持った大型のガトリング砲の銃口をガゼルへと向け、引き金を引いた。

単発の乾いた発砲音が幾重にも重なって響き、火花と共に大量の葉きょうが飛び散る。撃ち出された弾丸は次々とガゼルに命中。その度に体は弾かれ、鮮血が舞う。

数分間続いた銃撃音が弾切れを伝える様に、チツ、チツ、と乾いた音を奏でた。宙を舞っていたガゼルの体もようやく地上へと落ち、僅かながら土煙を舞い上げる。

「ハア…ハア……ッ！ 腕が、ハア…ハア……」

呼吸を乱すカルールは、構えたガトリング砲を地面へと落とした。と、同時にケイスが叫ぶ。

「先輩！ 来る！」

その声と同時に、周囲を炎が包む。

そして、土煙の中から、ゆっくりとガゼルが姿を見せる。その姿は、先程までと明らかに違っていた。真っ赤な目が二人を見据え、長く伸びた赤い髪が揺れる。膨れ上がった両腕、その指先には鋭利な爪が伸び、額からは二本の角が突き出ている。

完全な魔獣化により、湧き出る威圧感に、カルールもケイスも自然と後退する。

「やべえな……。これは、ちょっと……」

カルールが苦笑し、そう呟く。それに対し、ケイスは胸の前で十字を切り祈る。

「おいおい……。こんな時も神頼みか？」

「信じる者は救われるのです」

「信じるのは、己の力のみだろ。行くぞ！ ケイス」

カルールが叫び、何処からとも無く二丁のライフルを取り出し、銃口を向ける。それに合わせる様にケイスも大剣を構え、炎の中に包まれたガゼルを見据える。

## 第127回 遅れてきた二人

揺らめく炎の中、佇むガゼル。魔獣化が完了し、周囲には圧倒的な威圧感が広がる。

距離を置いているはずなのに、その威圧感に押し潰されそうになるカールとケイス。それでも、武器を構え真っ直ぐにガゼルを見据える。

静かに三人の対峙が続く。

ライフルを握る手を僅かに震わせるカールは、自らの心を落ち着ける為に深く息を吸い静かに吐き出す。と、同時に瓦礫が崩れる音が響き、ガゼルの姿が消える。遅れて炎が揺らめき、ケイスの目の前にガゼルが現れ、

「調子に乗るなよ！」

叫び声と同時に重い一撃がケイスに見舞われた。だが、ケイスは大剣を地面に突き刺し、剣の平でガゼルの拳を受け止める。衝撃だけが後ろへと突き抜け、ケイスの白髪が激しく乱れる。激しい土煙が舞うが、ケイスは大剣の向うにいるガゼルの赤い瞳を見据える。

「ケイス！ 大丈夫か！」

「心配無用。処罰続行」

ケイスはそう口にする、静かにもう片方の大剣を素早く突き出す。ガゼルはその突きを跳躍してかわすと、手の平に炎を灯す。

ケイスは素早く地面に突き立てた大剣を抜き、ガゼルへの追い討ちの為に空へと視線を向ける。ケイスとガゼルの視線が交わり、銃声が単発で何度も響く。そして、ガゼルに弾丸が打ち込まれ、体が跳ね上がる。

「二対一だつて事忘れんじゃねえぞ」

カールルは何度も引き金を引き、空中に居るガゼルに弾丸を浴びせる。衝撃は微々たる物だが、ガゼルのバランスは完全に崩れ、地上へと落ちた。

「ぐっ……きさ」

「処罰！」

地上へと落ちたガゼルに、追い討ちを掛ける様に、ケイスが右手に持った大剣を振り下ろす。その重い一撃がガゼルの右肩に入った。

「くっ！」

魔獣化したガゼルの硬い皮膚に僅かに刃が食い込む。だが、致命傷には至らず、薄らと血が滲む程度だった。渾身の一撃だったが、この程度の傷。これ程、魔獣人との力の差があった。それでも、ケイスはもう片方の大剣で二撃目を見舞う。

「ぐっ！」

先程よりもスピードの乗った重々しい一撃が左肩に決まった。その衝撃に地面が割れ、爆風が土煙を舞い上げる。

地面に飛び散る鮮血。

深く食い込む刃。

そして、重々しくガゼルの肩に押し掛かる大剣が力なく地面へと落ちた。

よるめくケイス。その右肩には深々と一本のナイフが突き刺さっていた。



「そろそろ、俺も入れてもらおうか」

突如ケイスとガゼルの間に現れた男。長い黒髪に、色白の肌。漆黒のマントを身に纏い、薄気味悪い細い目が黒髪の合間からケイスの顔を覗き込む。その目は冷酷で、自然とケイスの足を半歩下がらせた。

男はゆっくりとマントの中に手を滑らせると、大型のナイフを取り出す。ケイスは右肩に刺さったナイフの柄を握り、苦痛に顔を歪めながら引き抜く。鮮血が栓を抜かれた様に派手に溢れる。ナイフを投げ捨て、その傷を押さえるケイスは、荒い呼吸で更に二歩後退した。

大剣を両肩に直撃させたガゼルは、薄らと肩に血を滲ませながらも、目の前に佇む男の背中を見据え、

「ジャガラ……誰が手え出していいって言ったんだ……」

と、右手でジャガラと呼んで男の肩を掴む。

そんなガゼルに、ゆっくりと振り向くジャガラは、手に持ったナイフを喉元に向け、

「悪いが、これ以上時間を無駄に過ごしたくない。俺は暇じゃないんだ」

「くっ……」

奥歯を噛み締め言葉を呑み込む。その様子にゆっくりと喉元に向けたナイフを離し、静かにケイスの方へと目を向ける。

荒い呼吸を繰り返すケイスは、血に塗れた手で大剣の柄を握り、構えなおす。と、背後からカールの声が響く。

「伏せる！ ケイス！」

その声にケイスは体勢を低くすると、カルールは両手に持ったライフルを乱射した。だが、ジャガラは乱射された弾丸をことごとくナイフで防ぐ。弾丸がナイフの刃に当たる度に火花が散る。無数に乱射された弾丸を全て防いだナイフは、刃がこぼれ使い物にならなくなってしまうた。それを投げ捨て、マントの中からすぐさま次のナイフを取り出す。

「な、なに……コイツ……」

驚き声を漏らすカルールに、静かに視線を向けるジャガラは、ナイフの先をカルールに向け、

「残念だが、俺は弱者に対しても本気で行く。それが、俺に戦いを挑んだ者へ対しての敬意だ」

「敬意……なら、私も……その敬意に全力を持ってこたえるのみ」

「お、おい！ ケイス！ 退け！ 今のお前じゃ」

カルールの制止も聞かず、ケイスがジャガラとの間合いを詰め、左手に握った大剣を外から内へと振り抜く。その軌道を見据えるジャガラは、静かに一步後退し、上半身を僅かに後方へと傾ける。ジャガラの目の前を大剣の切っ先が横切り、刃風がジャガラの前髪を揺らす。

大剣を振り抜いたケイスに、瞬時に体勢を整え間合いを詰めるジャガラ。ケイスもそれを予期していたのか、振り抜いた大剣を素早く内から外へと振り切る。だが、その刃に手応えは無く、刃風だけが吹き抜けた。

「くっ！」

「太刀筋は悪くない。だが、遅い」

屈んで大剣をかわしたジャガラは、更に間合いを詰め右手に持ったナイフを、ケイスの腹部へと突き立てた。

「グッ！」

「安心しろ。俺は奴とは違う。すぐに楽にしてやる」

腹部にナイフを突き立てられ、前屈みになるケイスにジャガラはそう告げマントの中から一本のナイフを取り出す。いや、それはナイフと言うよりも、剣に近い大きさだった。そのナイフの柄を両手で握り締め、首に向かってナイフを落とす。

「ケイス！」

カールが叫ぶと何処からともなく風が吹き抜ける。と、同時にジャガラの振り下ろしたナイフが寸止めされた。そして、ゆっくりと視線が上がり、

「来た……か」

と、呟きナイフを構える。土煙が舞うその中で、二つの影が薄らと浮かぶ。その光景に膝を付いていたガゼルがゆっくりと立ち上がり、戦闘体勢を取る。

「くっそ……。何で俺がこんな所に」

幼い男の声が聞こえ、更に、

「うるさいぞ。黙ってる」

と、凜とした男の声が聞こえた。土煙がゆつくりと晴れ、その二人の姿が見える。

一人は顔の右半分に傷を負う黒髪の男。右目には眼帯をし、腰には漆黒の鞘に納まった剣をぶら下げている。切れ長の目は真っ直ぐにガゼルとジャガラを見据え、右手は確りと柄を掴んでいた

もう一人は小柄で短髪の黒髪の少年。民族衣装の様なカラフルな衣服を身に纏い、こちらも腰に一本の刀をぶら下げる。表情はやや不満げで、眉間にシワを寄せガゼルとジャガラを見据える。

その二人を見据え、不適に笑うガゼル。何処か余裕を見せるガゼルは、両肩を大きく揺らし、

「くくくつ……。誰かと思えば……貴様等か。こんな所に何しに来たんだ」

と、静かに笑う。

ガゼルを見据える少年は一層不満そうな表情を浮かべ、

「笑われてんぞ。ワノール」

と、隣りに立つワノールと呼んだ眼帯をした男にそうなげかけた。その言葉を鼻で笑ったワノールは、隣りの少年を軽く睨み付け、

「残念だが、笑われたのはウインス。お前だろ」

静かにそう告げると、ウインスと呼ばれた少年は苦笑し、

「冗談だろ……。本気にするなよ」

「俺も冗談のつもりだが？」

「嘘付けよ。目が本気だつて言ってるぞ」

更に苦笑するウインズに、落ち着いた様子のワノールが、僅かに笑みを浮かべ、ゆっくりとガゼルの方へと視線を向けた。

やけに落ち着いた二人に、苛立ちを見せるガゼルは、奥歯を噛み締め鼻筋にシワを寄せる。

## 第128回 全力

「さて、お前はどっちと戦う」

静かにそう尋ねるワノールに対し、仏頂面のウインスは唇を尖らし、

「俺、どっちとも戦いたくねえ」

「お前……まだ、不貞腐れてるのか？ いい加減、諦める」

落ち着いた様のワノールだが、ウインスは更に息を荒げる。

「うつせえ！ 俺は、ジツちゃんと、姉貴の婚約者を殺した、あの白衣の男を！」

「止めておけ。今のお前が奴と戦っても負けるのは目に見えてるだらろ？」

「んなの、やってみねえとわかんねえだろ！」

「私怨で剣を振るえば、周りが見えなくなる。周りが見えなくなれば、相手につけ込まれるぞ」

冷静なワノールの言葉にウインスは眉間にシワを寄せ、ワノールを軽く睨む。

妙に緊張感の無いワノールとウインスに、苦笑するカール。地に膝を落とすケイスも、ジャガラとガゼルの両者の目が二人に行っている間に距離を取った。右肩の傷が痛み表情を歪めるケイスに、カールは静かに歩み寄る。

「大丈夫か？」

「大丈夫です……それより、あの人達は……」

「大将の言つてた連中だろ。とりあえず、今は休んでろ。あと、傷見せる」

「……セクハラですよ」

「お前な……」

小さくため息を吐くカルールは、額を右手で押さえワノール達の方へ視線を向けた。

未だに口論を続けるワノールとウィンス。そんな二人を見据えるジャガラは、構えていた大型のナイフをゆっくりと下ろし、ガゼルの方へと視線を移す。

「お前、奴等の知り合いの様だが、いつもあんな感じなのか？」

「んな事、俺が知るか」

「……そうか、それで、お前はどっちと戦いたい？」

ガゼルがどう答えるのか分かってはいたが、ジャガラはあえてそう問う。

すると、不適な笑みを浮かべ、

「両方共、俺の獲物だ。と、言うより、俺一人で十分だ」

「……さっきもそう言っていたが、あの有様だ。今回は分担する」

「ふざけるな……俺が、あんな連中に遅れを取ると思ってるのか？」

ジャガラを睨むガゼルだが、ジャガラは持っていた大型ナイフをガゼルの首筋へと向け、

「いいか。俺は、命を無駄にするつもりも、時間を無駄にするつもりも無い」

圧倒的な威圧感に、魔獣化しているガゼルの方が一步身を退く。

それほどまで、ジャガラは苛立っていた。それを悟り、ガゼルは押し黙る。

静かにナイフを下ろすジャガラは、その視線をゆっくりとワノールとウインスの方へと向けた。その瞬間、ワノールと視線が交わる。だが、ワノールは静かに笑みを浮かべ、

「おい。ウインス。お前には、あの化物の方を任せるぞ」

「ちょっと待て。俺はまだ戦うなんて言って無いぞ！ それに、化物って、どっちも化物じゃねえか！」

ウインスが声を荒げるが、ワノールは腰にぶら下げた剣の柄を握る。だが、ウインスは不服そうに唇を尖らせ、

「ふざけんなよ！ 俺は戦わねえ！ 俺にだって、戦いたい奴が居るんだ！」

「オイ。ガキ。それは、俺らじゃ、役不足だっていいいてえのか？」

黙っていたガゼルがウインスを睨む。だが、ウインスは相変わらず態度を変えず、

「お前等なんて眼中に入っていないんだよ！ 俺はこの手で殺さなきゃいけない奴が」

「いい加減にしる！ 目の前の相手に集中しろ！」

「集中しろも何も、俺が戦いたいのは、コイツ等じゃねえんだよ！」

ウインスが怒鳴る。この態度に、ワノールは小さく舌打ちすると、

「もういい。だったら今すぐ俺の視界から消えろ」

「くっ！ 分かったよ！ 消えてやるよ！ じゃあな！」



ウインスはそう言うのと背を向け、手を軽く振りながらその場を去っていった。

その様子にジャガラは目を細め、

「いいのか？ 俺が見た感じ、お前に俺とガゼルの二人を相手にする力があるとは思えん。と、言うより、本当にその力で俺達を倒せると…… 思ってるのか？」

「そうだと言ったら？」

「……いや。何でもない。当然だな。なら、俺はお前を全力で叩き潰す」

ジャガラの右手に握られたナイフの切っ先が、ワノールへと向けられた。その宣戦布告に、ワノールも腰の剣を抜くと、美しい漆黒の刃をジャガラの方へと向け、

「ああ。そうして貰えると助かるよ。俺も、自分の全力を試したいからな」

「そうか。だが、試している余裕があるとは思えんがな」

ジャガラが低い体勢で地を駆けると、右手に持ったナイフを逆手に握り直し、下から上へと真っ直ぐに振り抜く。その際、切っ先が僅かに地面を割き、土煙が舞い刃が一瞬視界から消える。だが、ワノールはその刃に合わせる様に剣を振り下ろす。

両者の刃がぶつかり合い、舞っていた土煙が吹き飛ぶ。衝撃は僅かに広がり、互いが同時にその場を離れる。両者の対照的な黒髪が揺れ、互いに睨み合う。

「ふむ。言うだけの事はある。力は、ほぼ互角……いや。力ではそっちに分があるか……」

「おいおい。力で向うに分が？ んなわけないだろ。コッチは魔獣

人だぞ。力じゃ圧倒的だろ」  
「お前は黙ってる」

ジャガラに一喝され黙るガゼルは、ゆっくりと視線をウインスの方へと向けた。背中を向け歩くウインスの姿に、不適に笑みを浮かべる。その一瞬をワノールは見逃さず、瞬時にウインスの方を振り返り、

「ウインス！」

ワノールが叫ぶと同時に、ガゼルが駆ける。声に気付き足を止めたウインスは、面倒臭そうにゆっくりと振り向く。が、その視界をガゼルの手が覆い、そのまま後頭部から地面へと叩きつけられた。碎石が舞い、土煙が二人の姿を覆う。

その光景に奥歯を噛み締めるワノールに、背後からジャガラが静かに語る。

「全力で戦うと言った傍から余所見とは、残念だ」

ワノールが見せた隙に、ジャガラは素早く反応し、間合いを詰められた。突如、間近で聞こえた声にワノールも素早く反応するが、それよりも早く、ジャガラの右手に握った大型のナイフが腹部へと突き立てられた。

「ぐっ！」

咄嗟に身をよじり突きを避けた。だが、ジャガラは手首を返し、切っ先が脇腹を深く切りつけた。腹部から血が滲み、切っ先から血が落ちる。

衣服が貫かれ、激しく血が飛び散る。苦痛に表情を歪めるワノール

ルは、その場を飛び退き、ジャガラとの間合いを取る。

「ハア…ハア…くっ……」

「中々の反応だな。不意打ちにあれ程の反応を見せる奴はそうはいない」

ナイフの切っ先に付着した血を拭い、長い黒髪の間から鋭い眼差しがワノールを見据える。その目は冷酷で、感情のない冷たい目をしていた。傷口を押さえながら、その目を真っ直ぐに見据えるワノールに、ジャガラはゆっくりとナイフを構えなおす。ワノールも、傷口を押さえ、剣を構える。

「まだ、戦う意思はある様だな」

「当然だ。この程度の傷で、くっ……」

「痛むだろう。このナイフは、傷口から徐々に前前の体を蝕む」

その言葉の意味をワノールはすぐに理解する。この痛みの理由が毒であると。苦痛に表情を歪めるワノールは、静かに息を吐く。

苦しそうなワノールを見据えながら、ゆっくりと間合いを測る様に足を動かすジャガラ。

息を吐ききったワノールは、傷口から手を離すと、一気にジャガラとの間合いを詰め、漆黒の刃を振り抜く。その鋭い一太刀を紙一重でかわすジャガラは、瞬時に右手に握ったナイフを突き出す。

第128回 全力（後書き）

更新、遅くなりました。

出来るだけ、早く更新できる様に頑張りたいと思います。

これからも、よろしくお願いします。

## 第129回 牙狼丸

血飛沫が舞い、ワノールの表情が歪む。

ギリギリで身を引いたが、その刃は右頬を掠めていた。飛び散った鮮血は僅かだが、その掠り傷がワノールに与えるダメージは相当の物だった。

距離を取り、体を蝕む毒に表情を歪めるワノールに、ナイフに付いた血を拭い目を向ける。その目は相変わらず冷やかで、人を殺す事に全く躊躇いすら感じない。

左手で頬の血を拭い、荒い呼吸を繰り返すワノール。激しい動きに毒が更に体内を蝕む。額から溢れる汗がいつもより多く、視界も徐々に霞み始めていた。それでも、体勢を崩す事無く剣を構え、ジヤガラを目を真っ直ぐに見据える。

そんな両者の睨み合いが続く中、ワノールの遙か後方で、舞い上がる土煙の中から、小さなウインスが飛び出す。額からは血が流れ、短髪の黒髪も分かり難いが血に染まっていた。

「くっ！ いきなり、何しやがる！」

半壊し壁が崩れた建物の二階へと着地したウインスは、土煙の方へと顔を向けそう怒鳴る。すると、不適な笑い声がこだまし、ウインスが出てきた所とは逆の位置からガゼルが飛び出し、まだ崩れていない建物の壁を破壊してそこに着地する。

土煙がガゼルを覆い、瓦礫が積まれる音が微かに聞こえる。静かに流れる風はゆっくりと土煙を吹き払い、ガゼルの姿を徐々にあらわとする。

向い合う建物の二階に佇む両者。間には幅の広い中央道。他に遮るものは無く、風だけが吹き抜ける。

「どう言うつつもりか知らねえけどな。俺は、お前なんかと戦うつもりはねえよ」

「ふっ、ふははははっ！ お前に戦う気が無くても、俺はお前を殺す。全力で！ その方が、奴を苦しめる事が出来るからな！」

ガゼルの言葉にウインスは顔を顰めた。以前、戦った時の事を思い出したからだ。あの時も、似たような事を言っていた。テイルを苦しめると。そんな事の為に殺されなきゃいけないなど、バカバカしくて呆れてしまうウインスは、ガゼルを指差すと、

「俺はお前に構ってる程暇じゃねえんだよ！」

「テメエの事情なんて関係ねえよ。ここで、テメエを殺す。俺がそう決めたんだよ」

ガゼルはそう言うと両腕に炎を灯し、不適な笑みを浮かべ、

「さあ、とつとと終わらせてやるぜ」

「つたく……面倒くせえな……」

ウインスは渋々腰にぶら下げた牙狼丸の柄を握る。だが、すぐに顔をしかめ、その手を離れた。また、暴走するんじゃないか。そう思うと、牙狼丸を抜く事が出来なかった。動悸が激しくなるのを感じ、左手で胸を押さえ胸倉を握り締める。

僅かに震える手。

恐怖している。牙狼丸を抜く事に。姉を傷付けた事が 過去に犯した罪が そうさせたのだろう。

奥歯を噛み締め息を整え、ガゼルに悟られぬ様に、堂々と挑発する様に不適に笑い、

「来いよ……。お前を相手にするのに牙狼丸は必要ない」

「何だ？ 自分が強くなつたとも思つてるのか？」

「そうだって言つたら？」

「フツ……フハハハッ！ 大層な自信だ！ だが、自惚れるな！ 貴様がどれだけ強くなろうと、俺の前では無意味だ！」

ガゼルが床を蹴ると、音を起て床が崩れる。

土煙を背に迫り来るガゼルに、ウインスは右足を一步引くと、拳に風を集めた。甲高く耳に残る様な風の音に、ガゼルは不適に笑う。その笑みの意味を理解する間も無く、両者の距離が縮まり、ほぼ同時に拳を突き出す。拳が僅かにぶつかり、両者が拳に込めた力が衝撃となり放たれる。初めに突風が吹き、遅れて風を呑み込む様に炎が眩く周囲を照らし、最後に熱風が周囲を鎮火した。

半壊状態の建物の一階から四階までが完全に抉られ、瓦礫がパラパラと宙を舞う。土煙と黒煙が入り混じり、破壊された水道管から水が流れ落ちる。瓦礫を踏み締める足音が静かに一つ響き、ゆつくりと歩みを止めた。

「これで、剣を抜く必要はなくなつたな。隠れ里の様な場所に逃げ込んで怯えて暮らす貴様等風牙族が、炎血族と魔獣の力を持つ俺に勝てるわけねえだろ」

瓦礫に埋もれ、仰向きに倒れるウインスを見下し、そう吐き捨てたガゼルは、苦痛に表情を歪め魔獣化を解いた。体は縮み、鋭い爪も引いて行く。

元の姿に戻つたガゼルは、深く息を吐き、苦しそうに咳き込んだ。口から吐き出された血の雫が、地面へと散ばる。魔獣化とはそれ程までに体を酷使用するモノだった。

「くつ……カハッ……」

何度も血を吐くガゼルの背後で、微かに瓦礫が崩れた。音は無く、誰もその事には気付かず、ゆっくりと静かに風だけが流れ出す。その奇怪な出来事に、血を吐いていたガゼルも気付き視線を上げる。すると、目の前に異様な光景が映る。

渦巻く風の中に佇む一本の剣。鞘に納まっているが、その剣が鼓動している様に、僅かな波動を広げる。冷たい風が頬を撫で、赤い髪を掻き分け抜けて行く。土煙が足元を包み隠し、散ばった瓦礫がカタカタと音を奏でる。

苦痛に表情を歪めるガゼルは、その異様な光景に一步後退る。

波動の間隔が徐々に短くなり、ゆっくりと鞘から刃が姿を見せ始めた。美しく煌くその刃に、息を呑むガゼル。魅了されていた。その美しさに。だが、突如吹き荒れた突風で、我に返り、瞬時に腰にぶら下げていた剣を抜く。遅れて衝撃と金属音が響き渡り、ガゼルの体が後方へと押される。

「クッ！」

「よく防いだな」

ぶつかり、擦れ合う二つの刃。そして、ガゼルと対峙するのは、ウインス。だが、その風貌、声質、口調が明らかにウインスと違っていた。戸惑うガゼルは、奥歯を噛み締め力一杯にウインスの体を弾き返す。

小柄なウインスの体は軽々と弾かれるが、何事も無かった様に距離を取り牙狼丸の刃を眺める。

「ふふふふつ……。我ながら、惚れ惚れする。この研ぎ澄まされた刃……」

不適に笑みを浮かべるウインスに、苦痛に表情を歪めるガゼルは切っ先の向け叫ぶ。



「大人しく寝てれば苦しむ必要も無かったのにな！」  
「何を言ってる？ 苦しそうなのは、お前の方だろ？ それとも、その苦痛の表情は芝居だと言いたいのか？」

穏やかに笑うウインスは、ガゼルを真似て切っ先を向ける。

二人の間に静かに流れる風。その穏やかな風に瞼を閉じたウインスは、ガゼルに向けていた切っ先を下ろすと、両腕を広げ、

「再開しよう……と、言いたい所だが、早くさっきの化物に変わってくれないか？ 我は血を欲してる。それも、強き者の血を」

「くっ……後悔する事になるぞ」

「後悔？ 残念ながら、我の人生は後悔の連続だった。まさか、この様な無様なモノに封印されるとはな」

静かに笑いながら、牙狼丸を見据える。

そのウインスの余裕の態度に、ガゼルは奥歯を噛み締めると、雄叫びを上げた。ビリビリと大気を震わせ、衝撃が広がる。ガゼルの体が見るみる膨れ上がり、鋭い爪が伸び、牙がぎらつく。魔獣化が進むガゼルを静かに見据えるウインスは、右手に持った牙狼丸を二度振り、それを天へとかざす。

まるでガゼルなど眼中に無い。そう言わんばかりの態度に、魔獣化が完了すると同時にガゼルは地を蹴った。初速でウインスの間合いへと入り込み、二歩目を踏み込むと同時に右腕を振り抜く。だが、その腕の動きがすぐに止まる。澄んだ金属音を奏でて。

## 第130回 望まぬ力

大量の血が瓦礫の上に散乱していた。

崩れ落ちる様に地面に這い蹲るガゼル。魔獣化したその右拳が裂かれ、血が溢れていた。

「クツ……バカな……。俺が……こんな奴に……」

呼吸を乱すガゼルに、ウインスは静かに牙狼丸の切っ先を向ける。

「残念だよ。この程度とはな……」

「テメエ……一体……」

ウインスを見上げ、そう呟いたガゼルの鼻で笑い、

「我は、永き眠りから覚めた。銀狼の意思」

「銀狼……だと？ アレは、単なる伝説……存在など……」

「下等な生物だ。目の前の現実すら信じられないとは……時代は荒んだらしいな」

頭を左右に振り、ため息を漏らすウインス。バカにしたようなその態度に、ガゼルは唇を噛み締める。

その時、ビルの壁を破り、瓦礫の山へと何かが突っ込んだ。激しい爆風と土煙が周囲を包み、ウインスとガゼルをも包み込んだ。だが、それを、ウインスは牙狼丸で一刀両断する。土煙が二つに裂け、風が土煙を吹き飛ばす。

土煙が晴れると、ウインスは目の前に居たはずのガゼルが居なくなっている事に気付いた。

「逃げた……わけは無いか……」  
「くっ……」

瓦礫が崩れ、その中から傷だらけのワノールが姿を見せた。

「はぁ……はぁ……」

「……………」

不意に二人の視線が合う。息を切らすワノールに対し、表情一つ変えないウインス。そのウインスの変化に、すぐに気付いた、だから、毒が体を蝕んでいる中で、ウインスの方へとゆっくり足を進め、

「お前……誰だ？ ウインスは……どうした？」

「ウインス？ そうか。この体の持ち主か。今は、心の奥底で寝ている」

「なら、とつとつ、その体をウインスに返せ」

ワノールははっきりとした言葉でそう告げる。

不適に笑みを浮かべるウインスは、ゆっくりと大手を広げると、

「残念だが、この体の持ち主では、奴等に勝てん。それ所か、間違  
いなく死ぬ。だから、力を貸してるにすぎん」

「お前の力なんて必要ない……。そう言ったのが分からないのか？」

静かにそう述べたワノールは、呼吸を乱しながら、ウインスの肩を掴んだ。

「いいか……アイツは強い。お前の力など借りなくても……」

「何を言うかと思えば……」

「アイツには守るモノがある。守るべき人が居る……だからこそ、

人は強くなれる」

「想い、願うだけでは強くはなれん。分かるだろ？ 力が無ければ、誰も守る事など出来ないと？ 貴様も感じて来たはずだ」

ウインスの言葉にワノールは静かに笑う。

「何がおかしい？」

「力が無ければ何も守れないかもしれない……。だから、人は強くなるうとする。ウインス。お前もそうだったはずだ？ そんなわけの分からない奴の力を借りて、本当に大切なモノを守れるのか？」

その言葉に、ウインスが表情を顰め、左手で額を押さえる。

「くっ……貴様……」

突然苦しみ出すウインスは、息を荒げ、ワノールを睨み付けた。

「ぐっ……邪魔を……する……な！」

ウインスは牙狼丸を振り上げると、それを一気に振り下ろす。が、刃はワノールに触れる前にピタリと止まった。

「はぁ……はぁ……テメエ、こそ、俺の邪魔してんじゃねえよ！」

口調が変わり、ワノールに向けていた牙狼丸を地面へと突き刺した。

ウインスの意識が戻ったのだ。その光景に苦しみながらも静かに笑ったワノールは、

「戻ったみたいだな……」

と、呟く。その言葉に笑みを浮かべるウインスは、

「当たり前だ。俺を誰だと思ってんだ。俺は、あんな力望まねえ！」  
「くくくつ……そうか……力を望まないから……後悔するぞ！ 我の力を拒んだ事を！」

地面に突き刺さった牙狼丸からそう声が流れ、突風が渦巻く。  
風に煽られ靡く髪。吹き荒れる土煙と碎石。静かにそれを見据えるウインスは、ゆっくりと牙狼丸の柄を握り締めた。

「俺は、お前の力で、大切なモノを失った。掛替えの無いモノを……だから、お前の力は必要無い！ お前の力など借りなくても、俺は大切なモノを守れるとお前に証明してやる！」

そう叫び、牙狼丸を地面から引き抜く。その瞬間、突風は止み、土煙を一瞬で掻き消す。

「くふつ……かはつ……くそっ！ ふざけるな！ 俺が、あんな奴に！」

憤怒するガゼル。裂かれた右拳を何度も地面へと打ちつけ、血飛沫が何度も舞う。

血で染まった土。自らの血で顔を赤く染め、自らの血で拳を赤く染める。

ガゼルのそんな姿を見据えるジャガラは、持っていた大型のナイフを地面へと突き立て、静かに息を吐いた。特に何かをするわけもなく、ただ息を吐きだし、柄頭に肘を置き地面を叩き怒るガゼルを見据える。

時折、ウィンスとワノールの方に目を向け様子を窺い、時折、ケイスとカールを威嚇する。ジャガラ本人は威嚇しているつもりでは無いが、ケイスとカールにはそう感じていた。それだけの威圧感があったのだ。

「くっそ……。ウチ等じゃ足手まといっつか……」

「仕方無い事です。それより、治療の方をしてもらえませんか？

体が麻痺してきました……」

「あつ。わりい。今、傷薬切らしてて、唾つけときゃ治るかな？」

「治りませんよ。と、言うか、汚いです」

不服そうにケイスは睨み、カールは苦笑する。

風が止み。辺りが急に静けさに包まれる。ガゼルもようやく地面を叩くのを止め、静かに息を吐きながら、ゆっくりと顔を上げた。

「殺す……。絶対に　あのガキを！」

目の色を真っ赤に染めたガゼルに、ジャガラは静かに地面に突き立てたナイフを抜き、

「残念だが、あのガキは俺がやる」

「はあ？ ……っざけるな！ あいつは、俺の獲物だ！ それに、お前の相手は、あの眼帯の方だろ！」

「アレはダメだ。俺の望む戦いはもう見込めない」

頭を左右に振り、長い髪を大きく振る。ジャガラの言葉に納得できないガゼルは、立ち上がるとジャガラの襟首を左手で掴み上げ、

「ふざけるな！ テメエのルールはどうした！ 自分からルールを破んのか！ ああん！ あんまり調子に乗ってんじゃねえぞ！」

襟首を掴む手を軽々と払い除けると、ガゼルの顔を睨んだ。相変わらずの気迫に圧倒されるガゼルに、襟首を整えながらジャガラは静かに言葉を告げる。

「元々、お前がああ風牙族に不意打ちをしようとしたから、奴が気を取られて毒をくらった。どうだ？ 先にルールを破ったのはどっちだ？」

最もな言い分だが、それでも、ガゼルは納得せず、血で染まった右拳が突如発火する。それに遅れ散乱していたガゼルの血が発火し、辺りを炎が包み込む。

魔獣化し、長く伸びた赤い髪が炎の様に揺らぎ、ガゼルが口元に笑みを浮かべた。

「……なら、テメエより先に、アイツを殺してやる！」

声だけを残し、ガゼルが消える。地面が砕け、碎石だけが飛び散る。僅かに風が吹き、ジャガラが小さくため息を吐き、その場から消えた。それから、数秒も経たずして、地面にガゼルの体が叩きつけられ、ジャガラがその背中へと腰を下ろす。

「手負いのお前が、俺にスピードで勝てると思ってたのか？ それとも、魔獣の力と炎血族の力の両方を持つてるから、魔獣化してれば俺に勝てる。……そう思ってたのか？」

「クッ！ きさ」

言葉を発しようとしたガゼルの目の前にナイフが突き立てられる。

「言うて置くが、俺とお前とでは能力が違う。お前が炎血族の力を

引いていたとしても、それは些細な事。現に、俺は魔獣化せずとも、お前のスピードを上回った。それに、今のお前のスピードで、あの風牙族に追い付けるわけが無い」

そう断言したジャガラはガゼルの上から退くと、ナイフを地面から抜き、ウインスの方へと目を向けた。ウインスもその視線に気が付き、ジャガラの方へと顔を向ける。

両者の視線が交わり、

「悪いが、俺の相手をしてもらうぞ」

「ワノール。お前にあのガゼルとか言う奴は譲ってやるよ。俺は指名が入ったみたいだからよ」

ジャガラの言葉に笑みを浮かべるウインスは、牙狼丸をゆっくりと構えた。



## 第131回 ルール

二つの足音。軽快で素早い。

遅れて金属音が響き、衝撃が広がる。土煙が次々と舞い上がり、衝撃で建物が崩壊する。

土煙から飛び出す、細長い影と小さな影。その二つが幾度となく刃を交える。火花が散り、二人が同時に距離を取った。

着地の瞬間に足元に土煙が舞い、落としていた腰をゆっくりと上げる。

「クツ……魔獣人つてのは、どいつもこいつも、一筋縄じゃいかないか」

背筋を伸ばし、腰を捻るウインス。腰の骨がボキボキと音を起した。

そのウインスと対峙するジャガラは、物静かにその様子を窺う。ウインスの短い黒髪を優しく風が撫でる。肌で風を感じ、静かに笑みを浮かべた。

「久しぶりな感じだぜ。こんなにも、良い風を感じるのよ」

「……風牙族か。風牙族と戦うのは、実に楽しい」

ジャガラも不適に笑みを浮かべる。

その言葉にウインスの右の眉がピクツと僅かに動いた。今の言葉で不意に姉の婚約者だった男の顔が脳裏に浮かんだ。

「……お前、風牙族と戦った事があるのか？」

「ああ。過去に二度な」

「そうか……二度……」

「一度目は十年前、二度目は二年前。どちらも引き分けで終わったが、今回は決着を着けねばならないな」

「ああ。俺が決着を着けなきゃならないみたいだな」

ウインスも悟った。ジャガラと言う風牙族との二度の戦いの相手が誰なのか。一度目はウインスの父、二度目は義兄アルート。どちらもジャガラとほぼ互角の力。ならば、ウインスは越えねばならない。それが、父と義兄を越える事に繋がるからだ。そのウインスの表情にジャガラも静かに笑う。

「さあ、お前の力があの二人と同等か、それとも、それを越えるのか、俺に見せてみる」

「ああ。お前を倒して、親父とアルートを越える」

ウインスの言葉にジャガラが不適に笑みを浮かべると、その瞬間に姿が消える。数秒後、風が土煙を舞い上げ鋭くジャガラのナイフが大気を一閃する。後方に飛び退いたウインスの目の前をナイフの切っ先が通り過ぎた。

それを完全に見送り、引いた足に力を込め一気に前傾姿勢でジャガラの懐へと潜り込む。だが、ジャガラはそれを狙っていたかの様に振り抜いたナイフを逆手に持ち替え、振り下ろす様に真横に振る。

「クッ！」

単音の声を発し、一気にバックステップで距離を取る。ナイフが空を切り、二人の間に距離が出来た。

静かに息を吐くウインスに、ジャガラはゆっくりとナイフを持ち直し、

「ふむっ……。スピードは、あの二人以上か……。その若さで……

天賦の才と言う奴か」

「本気じゃない、お前にそう言われても全然嬉しくないけどな」

「ふっ……。俺は、常に本気だ。どんな奴と戦う時も」

長い髪を左手で掻き揚げ笑みを浮かべる。魔獣化もしていないのに、本気だと言われ正直腹が立った。親父や義兄を越える為には、本気とジャガラと戦わなければ意味が無いからだ。

苛立ちがあつたが、ウインスはそれを押さえ、ギョツと牙狼丸の柄を握り締めた。怒りに捕らわれれば、あの二人を越えられないと理解していたからだ。

強い意志を宿した眼差しに、ジャガラは笑う。これこそ、自分が求めてい相手だと。

両者が間合いを取るようにジリジリと足を動かす。僅かに土煙が舞い、両者の呼吸が静かに聞こえる。周囲を流れる風がピタリと止み、ウインスが右足へと体重を乗せた。その瞬間、破裂音が響きウインスが低い体勢でジャガラとの間合いを詰める。破裂音が響く度土煙と碎石が舞う。

自らの間合いへと迫るウインスに、ジャガラは不適に笑みを浮かべると、右手に持った大型のナイフを一閃した。

「くっ！」

その一太刀で、間合いに飛び込もうとしていたウインスは、スピードを一瞬で殺した後方へと飛び退いた。

「このスピードじゃダメか……」

「ふふふっ……。さあ、どうする？ その程度のスピードなら」

突然、ウインスの視界からジャガラが消え、

「俺には届かない」

と、背後から声がする。驚き振り返ると、その首筋にナイフの切っ先が向けられた。何が起こったかを考えるよりも先に、こんなに素早い奴に父と義兄は互角に渡り合っていたと言っ事を嬉しく思った。それと同時に、その越えなければならぬ壁の大きさを再認識し、何故だが笑いが込み上げた。

「フフ……ふはははっ！ あんた、ホント、強いな。魔獣化しないで、それだけの強さだなんて」

「魔獣化？ 悪いが、魔獣化などするつもりは毛頭無い」

「なっ！ てめえ！ どんな相手にも全力を出すんじゃないのか！」

ジャガラの言葉に怒鳴ると、首筋に向けられていたナイフがゆっくりと降ろされ、

「俺はいつでも全力だ。そして、コレは俺の、俺自身へのルールだ。魔獣などと言うモノの力を使わず、自らの力のみで、相手と戦うと言う事が。化物になって、相手を圧倒した所で、何が楽しい？ 戦いとはギリギリの死闘だからこそ、楽しいものだ」

長々と静かな口調でそう述べたジャガラは、もう一度ウインスの前から姿を消すと、前方数十メートルの所まで距離をとると、大型ナイフを構え直し、

「さあ、俺の言い分が分かったなら、続きを始めよう」

長い黒髪を揺らすジャガラに、ウインスも静かに笑みを浮かべ、牙狼丸を構え、

「ああ。再開しようじゃねえか。今度は、簡単に裏を」

ウインスがそこまで言った時、視線の先にジャガラがいない事に気付く。と、同時に体を反転させ、勢いそのままに牙狼丸を横一線に振る。ガキッと、鈍い金属音が響き、後方に飛び退き距離を取った。

「くっ！」

「いい反応だ」

「話してる途中で攻撃してくるって言うのはどうなんだ？」

嫌味っぽくそう言うと、それを鼻で笑い、

「喋るのは構わない。だが、戦う相手に、喋り終わるまで攻撃しちや行けないと言うルールは無い。と、言うより、互いに命を奪い合うと言うのに、それを卑怯とは言わないだろ？俺は全力で行くと、初めから宣言しているのだから」

「よく喋るな……あんたも！」

体重を右足に乗せ、地を蹴る。破裂音が響き、土煙が舞う。小柄な体を寄り一層小さく見せるかの様に、低い体勢でジャガラへと迫り、地を抉りながら牙狼丸を真上へ振り抜く。土煙に包まれ刃は見えないはずだったが、ジャガラは体を右後ろへと傾け刃をかわした。

「くっ！」

刃をかわされると、ウインスはすぐに距離を取る。その動きを見据え、ジャガラは少々残念そうな表情を見せた。

「まさか、コレが限界か？」

「うっせえーよ。まだまだ加速するぜ！」

強気な態度でそう述べるウインスは、もう一度右足に体重を乗せ、足の裏に風を集める。

「また、それか？ 随分と単調だな」

ウインスの動きを見て、ボソリと呟く。

もちろん、ウインスの耳にもその声は届いた。だが、それを無視して、ウインスは地を蹴る。破裂音と共に碎石と土煙を巻き上げウインスが姿を消す。

先ほどよりもスピードが上がった。徐々にウインスの調子が上がってきてる。そう感じ取ったジャガラは腰を落とすと、大型ナイフを腰の位置で構え、

「さあ、来い。俺のスピードをお前が上回るか、全てを一瞬で終わらせてやるっ」

そう言うと、ジャガラは俯き長い髪が顔を覆う。異様な空気を感じながらもジャガラの周囲を駆け、加速していくウインス。地を蹴る度に破裂音が響き、碎石と土煙が舞う。それは次第に周囲を囲い、視界を狭めていく。

それでも、ジャガラは俯き腰の位置でナイフを構えたまま動こうとしない。

十分に加速をつけたウインスは、続けて意識を牙狼丸に集中する。風が刃を包み、大気を裂きながら更に加速していく。刃が大気を切り高音の耳障りな音を起こす。

「牙狼丸！ 見てろ！ コレが、俺の」

「っ！」

スピードに乗ったまま、ウインスは正面から牙狼丸を右中段に構え突っ込む。それにあわせる様にジャガラも顔を上げる。顔を覆っていた長い黒髪が宙へと舞い上がり、鋭い眼差しを向けた。互いの視線が交わったのは一瞬。

そして、衝撃と澄んだ金属音だけを周囲へ残し、二人は動きを止めた。

## 第132回 暴走

互いに背中を向け立ち尽くす二人。

振り抜いた互いの刃からシトシトと赤い雫が落ちた。

制止する二人の間に静かに風が流れ、土煙が舞い上がる。

「くっ……」

その静寂の中で、ウインズ僅かな呻き声を発し、膝を落とし吐血した。口から吐き出された血が地面に落ち、苦痛に表情が歪む。右肩から左脇腹にかけて深く切りつけられ、体中が毒で痺れ始めていた。

声を出す事が出来ない程の激痛に襲われながらも、ウインズは牙狼丸の柄を握り締めたままゆっくりと体を起き上がらせる。膝が震え、腕が震え、視界が揺らぎ、呼吸が徐々に苦しくなる。それでも牙狼丸を地面に突き立て、支えにしながら何とか立ち上がった。

背を向けていたジャガラは振り返り、右頬から流れる血を拭う。あの瞬間、身をそらしウインズの刃をかわしたつもりだったが、切っ先が僅かに頬を掠めていた。

苦痛に表情を歪ませるウインズを真っ直ぐに見据えるジャガラは、ナイフの切っ先をウインズの方へと向け、

「俺の勝ちだ」

「ま、まだ……うっ、け……」

無理矢理吐き出した言葉だが、それ以上声が出せなかった。意識が揺らぎ、牙狼丸の柄から手が離れ、体が沈み、力なく地面に倒れ込む。土煙が舞い、牙狼丸だけがその場に佇んだ。

大型ナイフを手に持ったまま、静かに歩き出す。一步、また一步



とウインスの元へと。

僅かに残る意識の中で、近付いてくる足音だけが耳に届く。どれだけ体に力を込めても、どれだけ拳を握ろうとしても、体はもちろん指一つ動かす事が出来なかった。

「俺の勝ちの様だな」

足音が止み、ジャガラの声が耳に届いた。返答する事も出来ず、ただ荒い呼吸を繰り返すウインスを見下ろす。暫しの間ウインスを見据え、ジャガラはナイフをマントの内側へと戻し、ゆっくりとカールとケイスの方へと視線を向けた。

その視線に気付き、素早くライフルを構えるカール。遅れて傷を負ったケイスが大剣を構える。だが、そんな二人に対し、ジャガラは両手を静かに上げ、

「お前達と争う気は無い」

と、静かに述べ、右手をマントの下へと戻し、一本のビンと取り出した。茶色のやや小ぶりのビン。何か液体が入っているのか、チャプチャプと小さく音がする。それがなんなのか分からず、警戒する二人に対し、ジャガラは視線をウインスの方へと向け、

「これは解毒薬だ。今、コイツに数滴与えれば、助かるかもしれない」

「ふざけんじゃねえよ。敵の言う事を、信じるわけねえだろ！」

カールが怒鳴ると、ジャガラは「そうか」と、小さく呟き、ケイスの方へと目を向けた。ひび割れた眼鏡越しに睨み合う両者だが、ケイスはゆっくりと大剣を地面へと突き立て、右手を差し出す。

「あなたの目に嘘は無い」

「ば、バカ！ 何言ってるんだ！ お前は！ アイツは敵なんだぞ！」

「確かに敵……ですが、あの目に偽りはありません。それに、あのままでも彼は死にます。ワザワザ毒を渡す必要はありませんよ」

「だ、だからって、アイツを信用するなんて」

「どちらにせよ、コイツをこのままにして置けば間違いなく死ぬ。早く判断した方がいいと思うが？」

もめる二人に対し、ジャガラはピンを振りながらそう述べた。「くっ」と、声を漏らしたカルールは、拳を握り締め、構えていたライフルを下ろし、ゆっくりとジャガラの方へ顔を向け、

「分かった。信じてやる。だが、もしもコレが毒だった場合」

「俺の命をお前達にくれてやる」

そう言うと、ジャガラはピンをカルールの方へと放った。茶色の小瓶が弧を描きながら宙を舞う。その小瓶へと三人の視線が向けられた時、鈍い短音が聞こえ、遅れて呻き声が届く。慌てて小瓶をキヤッチしたカルールは視線をすぐにそちらに向け、既に視線を声の方へと向けていたケイスは地面に突き立てた大剣を抜き、構える。

「ぐっ、ガハッ……ガ、ガゼ」

「くくくっ、油断シタナ」

掠れたジャガラの声に遅れて、濁った耳障りな声が聞こえた。胸から突き出た四本の鋭い爪が僅かに動き、血がその爪を伝う。口角から血を流すジャガラは、背後に立つガゼルの方へと視線を向けた。

「お、お前等、仲間だったんじゃないのか！」

カルールが叫ぶと、ジャガラの胸から突き出ていた爪が引き抜かれた。膝から崩れ落ちるジャガラ。地面にうつ伏せに倒れこみ、血が地面に広がる。

血の付いた爪を見据え、不適に笑い続けるガゼルが両腕を広げ、天を仰ぐ。

大気が震え、土煙が舞い上がる。地面が僅かに揺れ、ガゼルを中心に亀裂が走る。割れた地面が隆起するが、震動によりすぐに崩れた。

吹き抜ける突風に表情を顰めるカルールとケイス。その視線の先に存在するガゼル。既に体は魔獣化されているが、その肉体に亀裂が走り、更なる変貌を遂げる。

額から突き出る角。指先から鋭く伸びた爪は引っ込み、代わりに手の甲から鋭利な刃物が生える。口角からむき出しになった牙は更に鋭利で頑丈なものとなっていた。その牙から滴れる液体。ゆつくりと動く血走った目。

全ての空気を呑み込むガゼルの変貌に、カルールとケイスは自然と後退する。その二人の動きにガゼルの顔がゆっくりと動く。

「くくくくつ……逃ゲラレルト思ウナ」

「来るぞ！ ケイス！」

カルールの声に、ケイスが大剣を構える。が、刹那、ケイスの視界をガゼルの手が覆った。音も無く、一瞬の出来事。全く反応する事が出来ぬまま、ケイスは頭部から地面へと叩きつけられた。地面が砕け、鮮血と一緒に砕石が舞う。

「くはっ！」

「ケイス！ てめえ！」

ケイスを地面に叩き付けたまま動かないガゼルの頭部に銃口を向

ける。引き金に掛かった指に力を込めるが、それよりも早くガゼルの手がそれを払った。そして、喉元に突きつけられる鋭い爪。

「くくくくつ……死ネエ」

ガゼルが拳を振り被ると同時に、カルールは懐から小型のカプセルを取り出し、それをガゼルの顔面へと放る。と、同時にカルールは身を屈めた。それと同時に突如カプセルが爆発し、ガゼルの体がよくけた。

爆風でカルールとケイスの体が地面を転がる。

「くくくくつ……フザケタマネヲ……」

爆弾を直撃したガゼルだが、全くの無傷で仁王立ちし、怒りに拳を震わせる。

爆風で地面を派手に転がったカルールは全身に擦り傷を作りながらも、ジャガラから受け取った解毒剤のビンだけは何とか死守していた。だが、あまりにも激痛にその場から動く事が出来なかった。早く、ウィンスに解毒剤を届けなければいけないと、力を振り絞るが、上半身を起こすのが精一杯だった。

「くつ……」

「おい……お前……」

激痛に表情を歪めるカルールに、背後から苦しそうな声がする。視線だけを後ろに向けると、そこにはワノールが立っていた。毒を食らい時間が経ち、大粒の汗を額に滲ませるワノールは、黒刀・烏を地面に突き立て、カルールをジツと見据えていた。

そのワノールの状態に、カルールは自らの持っていた解毒薬に視線を戻す。そして、意を決した様にそのビンを転がした。カルール

の手元から転がってきたビンに、視線を向けるワノールは静かな口調で問う。

「何だ、それは？」

「解毒だよ。お前も、毒をくらってんだろ？」

その言葉にワノールは小さく息を吐いた。

「俺は大丈夫だ……俺よりもアイツの方が重症なんだ。アイツに渡せ」

つま先で転がって来たビンを蹴り返し、そのまま右足を踏み込む。ビンはゆっくりとカルールの体に当たり動きを止め、ワノールはゆっくりと右目の眼帯に触れ、地面に突き立てた黒刀・烏を引き抜き不適に笑った。

### 第133回 烈鬼族の力

吹き荒れる突風が、黒髪を激しく乱す。

眼帯に触れた手をゆっくりと下ろし、小さく息を吐く。

意識を集中し、静かに黒刀・烏の柄カラスを握り締める。

左目で見据えるのは突風の中心で高らかに笑う化物。変わり果てたその姿に、哀れみの視線を向け、右足を摺り足で前に出す。

後ろで蹲るカルールは、そんなワノールの背中を見据えながら痛みを走る体を起した。

「お前、何する……つもりだ？ お前も毒が」

カルールの言葉をワノールは遮った。何も言わず自らが放つ威圧感で。

押し黙るカルールを背に、ワノールは更に一步踏み込み、黒刀・烏を腰の高さで構え、体勢を低く落とす。

「すまん。ウール。コレは、もう使わないと約束だったが、今日、この瞬間、破らせてもらう」

静かに妻との誓いを破る事を謝罪し、瞼を閉じる。そして、ゆっくりと息を吐き出す。体中の傷が癒え、体を包む様に白煙が上がり始めた。体中に回った毒が浄化され、痺れが消える。

体内の血が 細胞が 活性化されていく。

自らの体が活性化されていくのを感じ、ワノールはゆっくりと瞼を開けた。視界に映るのは一体の化物。その化物がようやくワノールの変化に気付く。

「貴様、マダ、俺と戦う気力！」

まるで自分にはどう足掻いても勝てないと、言いたげな化物に対し、ワノールは静かに笑うと、右足を踏み込み一気に地を駆ける。

「クツ　！」

それに遅れガゼルが爆音を響かせ走り出す。だが、その瞬間、ガゼルの体は衝撃を受け後方へと弾かれた。ガゼルが動き出したその瞬間、既にワノールが懐に入り、一太刀浴びせられていたのだ。

弾かれたガゼルはビルの壁を破壊し、瓦礫が体を覆う。その体には右肩から左脇腹へ掛けて一本の赤い線が引かれ、薄らと血が滲んでいた。

傷は浅くそれ程まで出血はしていないが、ガゼルにそれは屈辱だった。もう誰も傷付ける事が出来ない程、自分は強く変化したと自負していたからだ。

体を起し不適に笑う。散乱する瓦礫を右手で握り締め粉々に砕くと、その場で雄叫びを上げる。

「貴様アアアアアツ！」

凄まじい衝撃が周囲を襲うが、ワノールは何事も無かった様にその場に立ち尽くし、ガゼルを目視する。活性化により強化された肉体が、ワノールの全ての身体能力を何倍も増幅させていた。

だが、しかし、その活性化もワノールには諸刃の剣。活性化とはいわばリミットを外したに過ぎない。自らの体の限界点を越えた力を使えば、肉体はおのずと蝕まれ壊れる。それを知っていたからこそ、ウールはこの力を使う事を禁止したのだ。

ワノール自身も自らの体が後どれ位この力に耐え切れるのか、はつきりと分からず焦っていた。だからこそ、自ら先に攻めに転じたのだ。初手の一撃は体勢が悪く傷が浅かった。もう少し早く振り切

つていればと、後悔していた。

雄叫びが止み、ガゼルが立ち上がる。踏み締めた瓦礫が音を立て粉碎され、ガゼルの鋭い目がジツをワノールを威嚇する。

「貴様。俺二傷ヲ付ケタ事ヲ後悔シロ」

「ああ。後悔してるさ。もう少し深く切り込んでいれば良かったとな」

落ち着いた物腰のワノールに、ガゼルの怒りは更に増幅され、それを爆発させる様に勢いよく地を蹴る。爆音を響かせ、衝撃を広げ、土煙を巻き上げ、地を駆けるガゼルに対し、静かに腰を落とし黒刀・烏を構えるワノール。

静と動。まるで正反対の二人の一撃が交錯し、一層大きな衝撃が周囲の全ての建物を吹き飛ばす。それは、カルールやケイス、ウインスも例外ではない。カルールは解毒剤のビンを守る様に地面を転がり、ケイスは大剣を地面に刺しギリギリの所で衝撃に耐える。だが、毒で動けないウインスの体は空を舞い、地面へと叩きつけられた。

「ぐう……カッ……」

吐血するが、毒の所為で声をあげる事も出来ず、その場でただもがいていた。

地面を転がっていたカルールも、その身を壁にぶつけ動きを止め、苦痛に表情を歪める。上半身を起き上がらせ、辺りを見回し、ウインスの姿を探す。

「くっ……何処にいやがんだ……」

壁を伝い立ち上がると、そのまま背中を預け、肩でゆっくりと息



をする。擦り傷で血塗れになりながらも、壁を伝いながら歩き出す。幾度も吹き荒れる突風が、崩れやすくなった壁を幾度も軋ませる。ワノールとガゼルの両者の攻防が激しくなっている証拠だった。

やっとの思いで角まで移動したカルールは、その視界にケイスの姿を目視し、叫ぶ。

「ケイス！ お前、動けるか！」

「先輩よりは……」

振り向かずにそう返答すると、カルールは解毒剤の入った小瓶を見せ、

「お前、あのウィンスとか言うガキにこの解毒剤を飲ませて来い！」

「……わ、分かりました」

間の空いた返答に、違和感を感じ首を傾げる。

「お前、何処か傷めてるのか？」

「いえ……大丈夫……ですよ」

「……お、お前、まさか、毒！」

カルールは、ジャガラがケイスに初手の一撃を思い出し怒鳴る。

もし、あのナイフに毒が盛られていたら、ケイスの体内には毒が回っているだろう。今、ああやって立っているだけでも不思議な位だ。

小さく「アハハ」と笑うケイスに、引き攣った表情を見せるカルールは、

「てーめえー！ 笑い事じゃないだろ！ とつとと解毒剤飲め！」

力強く解毒剤の入った小瓶を投げる。それを右手で受けようとす  
るが、その手をすり抜け、小瓶はケイスの額に直撃し地面に落ちた。  
僅かにふら付きながら、その小瓶を拾うと、フタを開け数滴液体を  
飲んだ。

効果がすぐにあらわれるわけでは無いが、何処と無く気分が楽に  
なった。小さく息を吐くと、大剣の柄から手を離し、ふら付きなが  
ら歩き出す。まだ毒は完全に抜けきってないが、今は自分の身より  
も現状を打破する為にウインスの毒を消す事が大切だと判断したの  
だ。

ふら付くケイスの姿にカールはゆっくりと腰を落とし、

「後は任せたぞ……」

と、小さく呟き息を吐いた。

幾度目かの衝突。

激しく広がる衝撃。

僅かに飛び散る鮮血が周囲に血痕を残す。

両者が距離を取り、次の一撃に備え身構える。

黒刀・烏を下段に構え、荒い呼吸を繰り返すワノール。活性化し  
てから約十分弱。体は限界だった。反応速度も力も全てが低下し始  
め、手足の感覚も徐々に失われていた。

「はあ……はあ……うぐっ」

「呼吸ガ荒イナ」

不適な笑みを浮かべるガゼル。右拳から零れ落ちる血液。幾度と  
無くワノールの太刀を受けた為だ。手の甲から突き出ていた鋭い爪  
は一度目の衝突の時に、砕かれそれ以降は拳で受けるしかなかった。

だが、これは炎血族であるガゼルの望んだ結果だった。

「クククツ……俺ノ血ハヨク燃エル！」

「！」

そこで、ワノールも気付く。周囲に散ばったガゼルの血に。しまった、と思うより先に、ガゼルの口元が緩み、爆音と共にガゼルの血が燃え上がる。燃え上がる炎が黒煙を漂わせ、二人を包み込む。左手で口と鼻を覆うワノールは、眉間にシワを寄せる。

大手を広げ高笑いするガゼル。自分が有利な状況に立てた事が、それ程嬉しかったのだ。

優越感に浸るガゼルに対し、体の限界を感じるワノールは、奥歯を噛み締めると右足を踏み込む。腰の位置に構えた黒刀・烏に、今残された力の全てを注ぐ。この状況で長く戦うのは無理だと判断したのだ。

息を吐き、踏み込んだ右足に重心を移動し、地を蹴った。

## 第134回 全力の一撃

黒刀が一閃される。

風を。

空気を。

飛び散る鮮血。

轟く呻き声が、全ての音を掻き消す。

「グオオオオツ！」

「黒刀一閃。黒鷲……」

そう呟き、振り抜いた黒刀・烏を下ろすと、ゴトリと背後に腕が落ちた。切り口から血が地面へと流れ広がる。

活性化が薄れ、ふら付くワノールは、黒刀・烏を地面に突き立てると、そのまま右膝を地面に着いた。

「がはっ……ぐふっ……」

突如吐血し、黒刀・烏の柄から手が離れる。その場に蹲り苦しそうに胸を押さえるワノール。活性化の副作用が体中を襲う。鼓動が早まり、心臓を潰されてしまっんじゃないかと思う程締め付けられる。

苦しむワノールの背後で、勢いよく炎が吹く。

「グオオオオツ！ キサマアアアアツ！」

ガゼルの雄叫び。

大気が僅かに震動し、突風が周囲の炎を揺らす。衝撃に、蹲っていたワノールはゆっくりと立ち上がり、柄を手取る。手が震え、

膝が震える。もう力は入らない。それでも、振り向き、ガゼルを睨む。

怒り狂うガゼルが、裂かれた右腕を振り回し、血を周囲に散布する。その血が発火し周囲を更に炎が包み込む。

「ハア…グフツ……」

もう一度吐血するワノールが、膝を落とした。やはり、もう限界だった。吐き出された血が、ドボドボと地面に落ちる。額から溢れる大粒の汗が、その血の上にシトシトと落ちた。

「コロス！ コロオオオオス！」

ガゼルが声を荒げると、周囲を包む炎が一層大きく膨れ上がり、中の酸素を急激に奪う。意識がもうろうとし、限界の来たワノールの耳に、一つの足音が届いた。軽く風を蹴る様な足音。その足音に、ニツと笑うと、

「お、遅い……ぞ」

と、眩き倒れこんだ。遅れて突風が吹き、爆音と同時に炎が宙を舞った。

碎石が炎を纏い地面へと降り注ぐ。その向こう側に佇むウィンス。右肩から入った傷は粗く手当てされ出血は止まっていた。右手に握った牙狼丸の刃が炎の光りを浴び、オレンジ色に輝く。

「毒が、はあ…はあ…消えるまで、はあ、時間が掛かった……」

「そう……か」

「まだくたばんなよ。あんな化けもん、俺一人の力でトドメまで刺せないからな」

「少し……休むだけだ……」

ワノールがゆっくりと瞼を閉じると、ウインスはその上を飛び越え、ガゼルの前へと歩み出る。

ウインスの姿にガゼルが静かに笑う。

「ククククツ……キサマデ、俺ノ相手ガ勤マルト思」

ガゼルの言葉が止まり、金属音が響く。左手の爪と牙狼丸が激しくぶつかり合う。

「黙ってるよ。舌噛むぞ」

ウインスがガゼルを睨み付け、バックステップでその場を離れ、牙狼丸の切っ先で地面を抉り土煙を巻き上げる。舞い上がる土煙が、ウインスが発する風により渦巻く。

鼻筋にシワを寄せ、怒りをあらわにするガゼルは、血をばら撒きながらウインスへと直進する。左手の爪が地面を抉り後塵を巻き上げ、撒き散らした血が次々と燃え上がる。

息を吐き、牙狼丸を構え直したウインスは、向かい来るガゼルを見据え、足の裏に集めた風を爆発させた。爆音と共に吹き荒れる爆風が土煙を巻き上げる。後塵を巻き上げ、一気にガゼルへと迫るウインス。両者がほぼ同時に攻撃動作に移り、ほぼ同時に互いに攻撃を仕掛けた。

スピードでは完全にガゼルを上回るウインスは、土煙を巻き上げ向って来る爪を避け、牙狼丸で脇腹を切りつけ、ガゼルの振り抜いた左腕は空を切り、風だけがウインスに届いた。

「グツ……」

脇腹を斬り付けられ、僅かに表情を歪める。一方で、ウインスは切り込みが浅かった事を悔い表情を曇めた。

すぐさま距離を置き、牙狼丸を構えなおし、ガゼルの方へ体を向ける。

「ったく、リーチが違い過ぎるか……あと、もう少し懐に入らねえと……」

足の裏へと風を集めながら、次の一撃に備える。

ゆつくりと振り返るガゼルが、静かに息を吐き出す。周囲の熱に額から汗をこぼすウインスは、そのガゼルを見据える。

「コロス……コロス！ コロオオオオオス！」

ガゼルが雄叫びを上げると、周囲の炎がより一層激しく燃え上がる。

「流石に、これだけ熱いと、体力の消耗が激しいか……」

「コロオオオオオス！」

ガゼルがウインスへと突っ込む。そのスピードは今まで以上の速度で、ウインスの反応が僅かに遅れた。

「くっ！」

重い一撃がウインスを襲う。反射的に牙狼丸で刃を受け止めたが、衝撃が牙狼丸もろともウインスの体を弾き飛ばした。ウインスの体が数メートル程地面を抉った。

衝撃の凄まじさに、蹲ったまま動かない。一撃でジャガラに受けた傷が開き血が滲む。

「ぐふっ……」

数十秒の間を空け動き出したウインスは、口から血を吐くと、口元の血を左腕で拭いゆっくりと立ち上がる。一撃で足元はふら付いていた。油断したわけじゃない。この周囲の炎の熱により、ウインスの集中力が失われていたのだ。

「くっ……あの野郎……ガハツ、ガハツ……」

何度か血を吐き、ゆっくりと牙狼丸を構える。足元がふら付く所為で、上手く足の裏に風を集める事が出来ない。膝がガクガクと震え、それを抑えようと左手を付いた。

「くっそ……ふざけんな……」

左手で何度も太股を叩く。だが、一向に震えは止まらなかった。

「あの程度で……」

「クククッ！ コレデ、終ワリダ！」

ガゼルがウインスへと突っ込む。その時、ウインスはガゼルの背後にワノールの姿を見た。黒刀・烏を構え、腰を落としたその姿を。口元に笑みを浮かべたウインスは、

「ふはっ……そう言う事か……じゃあ、これで決めるぞ」

まだ震える膝に力を込め、牙狼丸を頭上高く構える。風が牙狼丸の刃へと集まり、甲高い音を響かせる。迫り来るガゼルが拳を振り上げるのを見届け、摺り足で右足を半歩前に踏み込む。目でワノー



ルに合図を送ると、ワノールも僅かに頷き、右足を一步踏み込む。

「いくぞ！ ちゃんと決めろよ！」

「シネエエエツ！」

ガゼルが振り上げた拳を振り下ろすのとほぼ同時に、ウインスとワノールの二人が柄を握る手に力を込め、

「神風！」

「黒刀一閃！」

二人の声が重なり、

「一陣！」

「黒鷲！」

ウインスは牙狼丸を振り下ろし、ワノールは腰の位置から横一線に黒刀・烏を振り抜く。

振り下ろされた牙狼丸の刃が、ガゼルの拳とぶつかり、背中をワノールの放った漆黒の斬撃が襲う。高音の甲高い音を響かせる牙狼丸の刃が、血飛沫を上げながらガゼルの拳を裂き、漆黒の斬撃は背骨もろともガゼルの体を引き裂く。

「グオオオオオッ！」

悲鳴の様な声を上げ、大量の血を口から吐き出す。

「ぐおっ！ あのバカ！」

ガゼルの体を引き裂いた漆黒の斬撃は勢いをそのままに、牙狼丸

の刃に衝突する。凄まじい衝撃が、ウインスの両肩に乗り、均等した二人の力がぶつかり合い、凄まじい爆発を起こす。その爆発でウインスの体は軽々と宙へと投げ出された。

「ぐあっ！」

地面に叩きつけられる。ウインスの手から離れた牙狼丸は回転し地面へと突き刺さり、黒鷲を放ったワノールは、力尽きその場に倒れた。その二人の間には、ガゼルの血だけが散乱し、その姿は跡形も無く消し飛んだ様だ。

大の字に倒れ、空を見上げるウインスは、荒い呼吸を繰り返しながら、静かに笑った。その声に、ワノールは、渋い表情を浮かべる。もう立ち上がる力も残っていない。文句を言う力も無かった。

## 第135回 飛行艇に残された女達

『ザーツ……こっちは、魔獣人との戦闘は終わり、今から戻る』

アルバー王国、旧都市ディバスターより程よく離れた位置に停泊する飛行艇の操縦室にブラストからの通信が入った。

「分かりました。今、ゲートを開きます」

その通信を受けたのはミーファ。そして、機械を操作するのは、ワノールの妻ウール。ブラストに教えてもらった通りにボタンを押し、この飛行艇とブラストのいるフォースト王国首都ブルドライとの転移ゲートを開く。

「ミーファちゃん。ゲート開いたわ」

「はい。ブラストさん。ゲート開きました！」

『ザーツ……分かった。とりあえず、カシオと一緒に今から向う』

「はい。それから、フレイストさんが先ほど戻って来たんですが、また急に魔獣達の数が増え始めて……グラスターの方へと戻られました」

ミーファが報告すると、通信機の向うから『そうか』と短い返答が返って来た。

ブラストもフレイストと同じ立場に立っていたからだ。

魔獣人との戦いは終わったが、魔獣と人では圧倒的に魔獣の方に分があつた。同じ数の兵力でも、その戦力は互角とは行かず、フォースト王国の攻防も徐々に魔獣達に押され始めていた。優秀な部下達が、今は何とか抑えているが、それでも突破されるのは時間の問題だろう。

通信機からブラストの声が途絶え、数分が過ぎた。ミーファも分かっていった。ブラストが今どう言う立場にいるのかを。本来、ミーファも自分の国で、民たちを導かなければいけない立場の為、ブラストの気持ちが痛いほど分かる。

『今、そっちに』

「ブラストさんは、そちらに残って指揮を執ってください」

ミーファはブラストの言葉を遮り、そう告げた。それは、何も出来ない自分の願いでもあった。

その言葉にブラストも黙り込み、その沈黙を破ったのは、今しがた操縦室へと入ってきたセフィーだった。

「話は聞いてたわ。一国の王なら、まず自国を守る事に専念した方がいいわ」

「わ、私も、そう思います！ こっちは、大丈夫ですから！」

力強いミーファの言葉に、ブラストは『すまない』と、小さく謝罪し、

『こっちも、出来るだけ早く片付けてそっちに向う』

「そう。頑張りなさいよ。って、それより、ルナがないみたいだけど？」

「エッ！ ルナが！」

ミーファがセフィーの方へと振り返ると、まだ繋がったままの通信機の向うからブラストの声が聞こえた。

『大丈夫なのか？』

「だ、大丈夫だと……」

(もしかして……ルナ……)

ミーファの脳裏に嫌な予感が過る。そして、セフィーの方へと歩き出すと、

「す、すみません。後お願いします!」

「えっ? 後つて? あんた、何処行くつもりよ?」

「る、ルナを」

『城へ向うなら、飛行艇で向った方が早い。それに、外は危険だ』

ブラストの言葉に、ウールが首を傾げると、

「でも、操縦できる人が……」

『大丈夫だ。自動操縦で城までいける。それに、飛行艇も修理してあるから、城まで持つはずだ』

「はずじゃ、困るんだけど……」

セフィーが苦笑すると、ミーファは真剣な眼差しをモニターに向け、

「分かりました! 起動方法を教えてください!」

「おいおい。本気なの? ミーファ。また、墜落するかもしれないのよ?」

『俺は、そんなに信用されて無いのか?』

通信機の向うで苦笑するブラスト。

ウールは困った表情をミーファに向け、

「ミーファちゃん。気持ちは分かるけど、ルナちゃんがお城の方に行っただって言う根拠は無いんだから、焦らなくてもいいんじゃない

「？」

「いいえ！ ルナは、間違いなくフォンの所に」

「何で、そう言えるの？ それも、時見族の時見の力？」

訝しげにそう問うセフィーに対し、静かに首を振ると、

「違います」

「即答ね。それで、どうして、そんな事言えるのよ？」

当然のセフィーの問いに、ミーファは体をセフィーの方に向け、

「私の直感です！」

「……直感って」

「そこまで言うなら、信じましょうよ」

「分かったわよ。それじゃあ……」

『起動方法を教えるぞ？』

通信機からブラストが飛行船の起動方法を説明する。その手順に沿って、スイッチを入れた。やがて、飛行艇が轟音を広げ、揺れ始める。

『最後に、手元にあるレバーをゆっくりあげれば、浮上する。後は、自動操縦で城までいける。それじゃあ、俺もそろそろ行く。なるべく早く、そっちに行く様にする。気をつけてな』

「あつ！ は、はい。ブラストさんもお気をつけて！」

ミーファがモニター越しに頭を下げる。通信は切れ、もうブラストの声は聞こえない。揺れる飛行艇が暫くすると安定し、ゆっくりと動きだした。ホッと息を吐いたウールは、ミーファを見つめニコッと笑い。セフィーは小さくため息を吐いた。

本当に大丈夫なのか、と不安はあったが、ミーファは窓の外を見据え、

「今、行くからね！ ルナ」

「……何処に行くんですか？」

「そりゃ、ルナを」

不意に聞こえた声に、そこまで返答して言葉が止まる。

「エツ？」

「えっ！」

「えええええっ！」

ウール、セフィー、ミーファと声を上げ、その声のした方へと顔を向けると、開かれたドアの向うにルナの姿があった。丁度、今、ここに辿り着いたのだらう。状況がつかめないと叫ぶ表情で、三人の顔を見回し、「どうかしましたか？」と、首を傾げた。

声にならない言葉を発するミーファは、震えた手でルナを指差す。ウールも何が何だかわからないと言う驚いた表情を向け、セフィーですら驚き言葉を失っていた。三人の様子を訝しげに思いながらも、ルナは部屋へと足を踏み入れると、

「先ほどから、激しい揺れと騒音が聞こえますが、飛行艇が動いてるみたいですね？ 一体、何処へ向ってるんですか？」

と、問いかける。奇声の様な声を上げ、ミーファがルナの肩を掴み体を前後に揺らす。

「み、みみ、ミーファさん！ ど、ど」

大きな胸が激しく揺れ、長い髪が乱れ動く。流石のルナも両手でミーファを頬をパチンと叩き真つ直ぐに目を見つめ、

「な、なんですか？ いきなり？ しっかりしてください」

と、落ち着いた声で言った。その言葉にようやく少し落ち着いたのか、声を僅かに震わせながら、

「る、ルナが、い、いなくなっただって、聞いたから……て、てつきり、フォンの所に行ったんだと……」

「はい？ 誰ですか？ そんな事言ったのは？」

やや怒りのこもった声に、セフィーは慌てて口を開く。

「い、いや、だって、部屋を覗いた時、いなかったじゃないか？ それに、トイレも探したけど……」

セフィーの言葉に「あなたですか……」と、少々呆れた様なため息を漏らすと、

「私は、甲板で空を見てたんです。それに、色々あったので、心を静めたかったです。私が部屋にいなかったからって、何でフォンのさんの所に行ったって事になるんですか？」

「い、いや、それは、ミーファが」

セフィーとウールがジツとミーファの方へ視線を向けると、ルナも呆れ気味で視線を向ける。周囲の視線にミーファはその身を小さくさせ、「はうー」と、声をあげた。小さく吐息を漏らしたルナは、口元に僅かに笑みを浮かべ、



「あなたらしいですね。昔と変わらず、少し羨ましいですよ」

「……ルナって、笑うんだね？」

「そうですね。私も、笑った所は初めてみました」

セフィーとウールがマジマジとルナの顔を見つめる。すると、ルナはいつもの無表情の顔に表情を戻し、少しだけ頬を赤く染め、

「わ、私だって、に、人間ですから」

「あはは。アレが本来のルナだよなー。ここ数年は色々あって、感情殺してたけど……良かった。昔みたいに戻って」

「……でも、まだ私の死の運命は」

ルナが表情を曇らせると、セフィーが笑みを浮かべ、

「大丈夫大丈夫。あんたの彼氏が、守ってくれるって」

「か、彼氏って！ な、何言ってるんですか！」

顔を真っ赤にするルナがセフィーの方へと顔を向け、

「だ、第一、フォンさんとはまだ」

そこまで言っつて、ハツと口を塞ぐ。ニヤニヤと笑みを浮かべるセフィーに、クスクスとミーフアとウールの二人が笑う。

自分の失態に更に顔を真っ赤にするルナに、セフィーはゆっくりと歩み寄り、

「私は、誰も、フォンがとは言っていないわよ？ ルナって、意外と分かりやすいのね」

「せ、セフィーさん！ こ、こんな誘導尋問！」

珍しくうつろたえるルナの姿に、セフィーもウールも、ルナが何処にでもいる女の子なのだ、感じ安心した。

## 第136回 血液

「はぁ……はぁ……」

呼吸を乱し、膝をつく。

周囲に散ばった血痕。ひび割れた床に突き刺さった蒼い刃の剣。それを支えに何とか立つ金髪の少年カインは、額から流れる血を右手で拭い、顔を上げる。

その視界に映るのは、一人の女エリオース。長い黒髪が顔を覆い隠し、その合間から見える不敵な笑みが不気味に映る。クモの様に糸を張り巡らし、壁に張り付くエリオースを見据え、カインは眉間にシワを寄せ叫ぶ。

「何故、お前が！ 僕の炎を消せる！ 炎血族の血は、本人の意思意外で消す事が出来ない！」

「ふふふふつ。何を言ってるの。人の血は、固まるのよ。違う型の血液と混じると。それは、種族が変わっても同じ事よ」

当然と言わんばかりにそう述べるエリオース。その言葉に、カインも少なからず理解した。コイツがカインとは別の炎血族の血を所有している。しかもそれは、カインとは血液型の違うモノ。その所為で、炎が消えたのだと。

奥歯を噛み締め、表情を僅かに強張らせる。体はだるく、立っているのも辛い。それでも、カインはゆっくりと青天暁を地面から抜き、深く息を吐きながらジツとエリオースを睨む。

カインのその行動に不適に笑うエリオースは、糸を伝いながら床へと降り立つと、ゆっくりと二本足で立ち、長い髪を振り乱しその顔を現す。

「あんだ。分かってないわね」

「何！」

「その状態で、私に勝てると思ってるの？ ふふふつ。そう思ってるなら、あんだの頭は相当悪いわね」

バカにする様に笑うエリオースに、カインは表情を顰める。

エリオースの言っている意味を、カイン自身がよく分かっていたからだ。コッチは手の内の殆どを知られ、拳句炎を封じられ、貧血状態で立っているのもやつと。それに比べ、エリオースはまだ手の内を見せず、能力すらまだ分からない。しかも、まだ魔獣化と言う手段がある。これ程まで不利な状況で、光明など微塵も見えなかった。

自分の置かれた状況に、更に表情を険しくするカインは、青天暁の柄を力強く握り締めると、考えもなくエリオースへと突っ込む。

「ふふふつ。ただ、ガムシヤラに突っ込むだけじゃ、私には勝てないわよ」

エリオースが指先から糸を飛ばすと、その糸がカインの右足を地面に貼り付ける。

「くっ！」

足に付いた糸は粘着力があり、そのままカインの動きを封じた。右足の糸を振り払おうとするが、もがけばもがく程、糸が足に絡んでいた。

「ふふふつ。私の糸の粘着性は強力よ。果たして、今のあなたに抜け出す事が出来るかしら？」

「ふざけ　！」

金髪の髪から白煙が上がり、僅かに赤く変化するが、それも数秒の間だけで、呼吸を乱しながらカインは膝を落とす。

「かはっ……………」

「無理は良くないわ。あなた、ただでさえ血を使い過ぎて貧血状態なんだから、無理すると、死ぬわよ」

「黙れ……………」

青天暁で足につく糸を裂く。だが、糸は切れず、そのまま青天暁も糸が巻きついただけだった。

「くっ！」

「言ったでしょ？ 私の糸は強力だって」

「はあ…はあ……………」

「もう限界みたいね？ 今、トドメを刺してあげてもいいけど……………」  
「どうしようかしら？」

頬を右手で触りながら考え込むエリオースは、その場に腰を浮かせて座ると、倒れるカインを見据え不適な笑みを浮かべる。苦しそうな表情を浮かべながらも、エリオースを睨むカイン。二人の視線が交わり、エリオースが立ち上がりカインの方へと足を進めると、動けないカインの頭を踏みつける。

「良いザマね。私、炎血族って嫌いなよね。自分はどの種族よりも有能だって、思ってる所が！」

「くっ！」

頭を踏みつけ、不適に笑うエリオースは、その優越感に甲高い声を上げ笑い出す。

「ふふふっ……ふはははっ！」

「ぐっ……」

「ほら、何とか言ったらどうなの！」

何度も何度も踏みつける。額から溢れる血が、床一面に広がり、何度も踏みつけられ床にも亀裂が走っていた。次第に意識が遠退き、カインの動きが完全に止まる。

カインの反応がなくなり、つまらなそうな表情を浮かべるエリオースは、不機嫌そうな表情を浮かべると、右足を大きく振り上げ、

「チッ！ もっと、苦しそうに悲鳴をあげろよ！」

叫ぶと同時に、振り上げた右足を頭の上に落とすと、爆音が轟き床が崩れる。衝撃に耐え切れなかったのだ。

「くっ！ 脆い建物だよ！」

声をあげながら、糸を飛ばすエリオースは、瓦礫と共に落ち行くカインに一度目を向け、隣りの建物へと移動した。屋上の床に開いた穴から土煙が上がる。

その光景を見据え、つまらなそうに息を吐いたエリオースは、壁に張り付いたまま立ち上がると、ジッと穴の方へと目を向ける。風だけが吹き抜け、静けさが残された。

瓦礫に埋もれ、僅かな意識の中で、カインは自問する。何故、自分は弱いのかと。手を伸ばせば届く位置に転がる青天暁を、霞んだ視界に入れながらゆっくりと右手を伸ばす。だが、柄を掴む前にその手は地面に落ちた。全身を襲う激痛に僅かな呻き声をあげながら、カインは拳を握る。

「ああ……ぐあつ……」

瓦礫が崩れ、カインの体を押し潰す。激しく土煙が舞い上がり、血だけが床に広がった。

土煙が薄れ、カインの姿があらわとなる。青天暁に腕を伸ばしたまま完全に意識を失い動かないカインを姿がった。

意識を失ったカインの頭の中にもう一つの人格の音が響く。

(何故、立たない)

(何故、動かない)

(何故、戦わない)

と、カインに問いかける。

その問い掛けに、カインはただ一言答える。

(もう、体が動かない)

と。

カイン自身、戦いたい。そう願うが、体は言う事をきかない。このまま、冷たい床の上で寝ていたい。と、カインの瞼を重く閉ざす。体中に押し掛かる重みも、感覚が麻痺してよく分からない。

今、どんな状態なのか、何をしようとしていたのかも薄れていく。記憶の端に浮かぶ沢山の思い出。そして、自分の犯したフォンに対する非道。例え、それが自分の意思ではなかったにしろ、自分の所為で苦しむフォンの姿を思い出し、右手の指が僅かに動き、中指の先が青天暁の柄に触れた。カランと、乾いた音が響き、ギュツと柄を握り締める。

「こ、こんな所で……寝て、られない……」

瓦礫の中から、ゆっくりと立ち上がる。服が裂け、血に塗れた肌が窺えた。左肩から腕を伝い指先からシトシトと血が滴れる。膝を僅かに震わせながらも、何とか両足で立つカインは、呼吸を荒げながらぼつかり開いた穴を見上げた。

「はぁ……はぁ……」

足元がふら付くが、それでもその場に仁王立ちし、深く呼吸を繰り返す。体が重く、足が床に張り付いた様に動かない。青天暁がこんなに重く感じるのも、初めてだった。首を伝う血が時間が経ち、凝血し黒ずむ。凝血した血の感触が、気持ち悪く不快な気分だったが、そんな事よりもこれからどうするかを考えていた。

「くっ、はぁ……はぁ……」

動こうと足に力を込めると、激痛が走り苦悶の表情を浮かべる。半歩動くのがやっとのカインは、表情を歪めたまま、また深く呼吸を繰り返す。

その場で佇む事数秒。その時間、カインは瞼を閉じ、意識を集中する。

「すーっ……はぁー……」

ゆっくり息を吸い吐き出す。痛みは多少和らいだが、依然体を動かそうとすれば激痛が走る。

「もっ……少しだけ、力を……」



胸の前で、左手を握り締め、ゆっくり息を吐く。金色の髪がシューッと音をたて、白煙を上げる。白煙がカインの体を包み込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8799a/>

---

CROSS WORLD クロスワールド 第二幕

2011年10月30日04時17分発行